

一般県道青谷停車場井手線地方特定道路整備事業に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ

鳥取県気高郡青谷町

青谷上寺地遺跡4

(本文編 1)

2002

財団法人 鳥取県教育文化財団

一般県道青谷停車場井手線地方特定道路整備事業に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ

鳥取県気高郡青谷町

青谷上寺地遺跡4

(本文編 1)

2002

財団法人 鳥取県教育文化財団

序

鳥取県は、北に日本海を望み、鳥取砂丘や山陰海岸などの白砂青松、風光明媚な美しい海岸線をもち、南に大山をはじめ秀麗な山並みの中国山地がそびえる自然環境に恵まれたところです。県内いたるところで出湯が湧き、農林水産資源にも恵まれているところから、毎年多くの観光客が鳥取県を訪れています。近年、交通網の整備・充実が図られ、環日本海交流の推進が提唱されるなか、広域交流はますます促進されており、産業の発展、地域の活性化に向け更なる飛躍が期待されるところです。こうしたなか、開発事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査件数も増加しており、国指定史跡として保存されたわが国屈指の弥生時代集落遺跡である妻木晩田遺跡など、鳥取県の成り立ちを物語る貴重な遺跡が数多く発見されています。

当財団では、一般国道9号青谷羽合道路改築工事に伴い、国土交通省中国地方建設局鳥取工事事務所から、また、一般県道青谷（T）井手線道路改良事業に伴い、鳥取県からそれぞれ調査委託を受けて、平成10年度から青谷上寺地遺跡の発掘調査を実施してまいりましたが、調査が終了し、ここに成果を公表することとなりました。

調査の結果、青谷上寺地遺跡は弥生時代における日本海側の一大拠点として栄えた遺跡であることが明らかとなりました。数多くの出土品には目を見張るものがあり、弥生時代の技術の粋を今日に伝えるものとなりました。また当時の広域交流を物語る品々は、弥生時代における環日本海交流の片鱗を垣間見せるものとなりました。さらに、大量の人骨や脳組織の一部の発見などもあり、まさに「弥生の博物館」といえるでしょう。本報告書が調査研究や教育資料の一助となり、多くの方々に活用していただけるよう期待するとともに、文化財に対する理解がさらに深まるものとなれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査に際しまして多大な御協力をいただきました地元青谷町の皆様をはじめ、御指導いただきました方々、関係機関各位に対し心から感謝申し上げます。

平成14年3月

財団法人鳥取県教育文化財団

理事長 有田博充

例 言

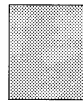
1. 本報告書は平成10年度から13年度にかけて行った「一般県道青谷停車場井手線地方特定道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査」による、埋蔵文化財発掘調査記録のうち、調査区6区から7区までの遺構および全調査区の遺物に関する報告である。
2. 本発掘調査は、鳥取県の委託を受け、財団法人鳥取県教育文化財団が実施した。
3. 本発掘調査は、下記の遺跡を対象として実施された。
青谷上寺地遺跡（鳥取県気高郡青谷町大字青谷字上寺地^{あおや かみじ ち}ほかも所在^{け たかぐんあおやちようおおあごあお やあごかみじ ち}）
4. 本報告書は、並行して行われた一般国道9号改築工事（青谷・羽合道路）に係る青谷上寺地遺跡発掘調査報告書との体裁の一致を図っている。
5. 本発掘調査の実施にあたっては、遺構・遺物に関する指導を下記の先生方をお願いした。明記して深甚の謝意を表します。（順不同・敬称略）
（財）ユネスコ・アジア文化センター文化財保護協力事務所 工楽善通、大阪府立弥生文化博物館 金関恕、放送大学 赤木三郎、鳥取大学 井上貴央、古川郁夫、愛媛大学 下條信行、村上恭通、名古屋大学 渡辺誠、独立行政法人奈良文化財研究所 光谷拓実、牛島茂、杉本和樹、深澤芳樹、村上 隆、京都国立博物館 難波洋三、岡山理科大学自然科学研究所 白石純、芦屋市教育委員会 森岡秀人、福岡市教育委員会 比佐陽一郎、大阪府教育委員会 宮崎泰史
6. 遺物写真の撮影にあたっては、独立行政法人奈良文化財研究所の牛島茂氏、杉本和樹氏をお願いした。
7. 発掘調査の実施にあたっては、自然化学分析及び木器の保存処理の一部、出土遺物の実測の一部をそれぞれ専門業者に、現地における基準点測量、遺構の写真測量を業者に委託した。
8. 本報告書の作成は調査員の討議に基づいて行い、編集は湯村が行った。第4章を除いて執筆者は各節の末尾に記した。遺物の実測、図面の浄書は、主に鳥取県埋蔵文化財センターで行った。
9. 本報告書に関わる記録類及び出土遺物は、鳥取県埋蔵文化財センターに保管されている。
10. 現地調査および報告書の作成にあたっては、上記の方々ほかに、多くの方々からのご指導、ご助言、ご支援をいただいた。明記して深謝いたします。（敬称略、順不同）

松本岩雄 田中義昭 平野芳英 松井 章 和田晴吾 橋本裕行 寺沢 薫 佐原 眞 岡村道雄 岩永省三
扇崎 由 西谷 正 西尾克己 西本豊弘 白田義彦 林日佐子 村田晃一 豆谷和之 廣瀬常雄 細川金也
重藤輝行 田中正弘 宮腰健司 野口哲也 原田 幹 楠 正勝 橋本正博 孫 明助 趙 現鐘 藤田三郎
村上年生 丹羽野裕 中川 寧 李 東注 赤澤徳明 安本宏子 辻 信広 山浦 清 永嶋正春 海藤俊行
松本充香 西迫陽子 新山 武 和佐野喜久生 山田昌久 辻誠一郎 金原正明 高安克己 石川日出志
内田律雄 竹広文明 飯塚武司 片山一道 穂積裕昌 石野博信 清水真一 福永伸哉 岡村秀典 森井貞雄
上原真人 山口英正 谷口恭子 高田浩司 吉田 広 橋口達也 高島忠平 崔 完奎 大澤正己 穴沢義功
池淵俊一 李 南珪 宋 桂鉉 成 正鏞 山本孝文

青谷町 青谷町教育委員会 青谷町立青谷中学校 青谷町立あおや郷土館 独立行政法人奈良文化財研究所
愛媛大学 京都国立博物館 鳥根県立八雲立つ風土記の丘 （財）大阪府埋蔵文化財調査研究センター
大阪府立弥生博物館 田原本町教育委員会 愛知県教育委員会 （財）愛知県埋蔵文化財センター
金沢市埋蔵文化財センター 基山町教育委員会 佐賀県教育委員会 福岡市埋蔵文化財センター
小松市教育委員会 婦中町教育委員会 銅鐸博物館 忠南大学校百済研究所 出雲市教育委員会

凡 例

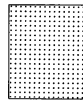
1. 本報告書における方位はすべて座標北を示し、レベルは海拔高である。X=、Y=の数値は、国土座標第V系の座標値である。
2. 発掘調査時における遺構名は、報告書作成時において大幅に変更している。新旧の対照は、第2章における遺構一覧表に明記した。
3. 本報告書において、遺構名に略称を用いたものは次のとおりである。
SK：土坑 SD：溝状遺構 SA：杭列
4. 遺構図及び遺物実測図における表示は以下のとおりである。



赤色塗彩



黒色塗彩



白色粘土



変色範囲

5. 本報告書における遺構番号は、一般県道青谷停車場井手線地方特定道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書I『青谷上寺地遺跡1』及び一般国道9号改築工事（青谷・羽合道路）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書VI『青谷上寺地遺跡2』、同VII『青谷上寺地遺跡3』からの通し番号である。
6. 遺物には原則的に遺跡名（略称KJBと表示）、グリッド名、遺構名、取上番号、取上年月日を記入した。遺構名については、旧名を記入している。
7. 遺構の時期決定に際しては、下記の土器編年に依っている。
清水真一 1992「因幡・伯耆地域」『弥生土器の様式と編年—山陽・山陰編—』。
松井 潔 1997「東の土器、南の土器」『古代吉備』第19集。

目 次

序

例言、凡例

本文編 1 目次

第 1 章 はじめに	1
第 1 節 本書刊行に至る経緯	1
第 2 節 平成 12、13 年度調査の経過	1
第 3 節 遺跡の概要	2
第 4 節 基本層序	8
第 5 節 調査体制	10
第 2 章 遺構の概要	11
第 1 節 弥生時代前期末～中期前葉の遺構	14
第 2 節 弥生時代中期中葉～後葉の遺構	23
第 3 節 弥生時代後期初頭～後葉の遺構	51
第 4 節 弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の遺構	103
第 3 章 出土遺物	111
第 1 節 土器	111
第 2 節 土製品	140
第 3 節 石器	155
第 4 節 鉄器	234
第 5 節 青銅器	255

挿 図 目 次

第1図	青谷上寺地遺跡の位置	1	第35図	S A 41	39
第2図	遺構分布図(1)	2	第36図	S A 40	39
第3図	遺構分布図(2)	3	第37図	S A 45、59	40
第4図	8区土層図(1)	4	第38図	S A 47～52、53	41
第5図	8区土層図(2)	5	第39図	S A群第2段階に伴う 板材出土状況	42
第6図	7区土層図	6	第40図	S A 62	43
第7図	6区土層図	7	第41図	S B 6、S K 353～365	44
第8図	弥生時代前期末～ 中期前葉遺構配置図	11	第42図	S K 366～383、S D 53	45
第9図	S K 313～330	12	第43図	集石9	46
第10図	S K 331～346	13	第44図	集石10～18	47
第11図	S K 347～352	14	第45図	木器溜3	48
第12図	S D 41～43	15	第46図	弥生時代後期初頭～ 後葉遺構配置図(1)	51
第13図	S D 44～49、51、52	16	第47図	弥生時代後期初頭～ 後葉遺構配置図(2)	52
第14図	S D 50	17	第48図	S D 38-1	53
第15図	貝塚出土土器(1)	18	第49図	S D 38-2	54
第16図	貝塚出土土器(2)	19	第50図	S D 38-3	55
第17図	貝塚出土土器(3)	20	第51図	S D 38遺物出土状況(1)	56
第18図	貝塚出土土器(4)	21	第52図	S D 38遺物出土状況(2)	57
第19図	集石8	21	第53図	S D 38遺物出土状況(3)	59
第20図	弥生時代中期中葉～ 後葉遺構配置図(1)	23	第54図	S D 38出土土器(1)	60
第21図	弥生時代中期中葉～ 後葉遺構配置図(2)	24	第55図	S D 38出土土器(2)	61
第22図	弥生時代中期中葉～ 後葉遺構配置図(3)	25	第56図	S D 38出土土器(3)	62
第23図	弥生時代中期中葉～ 後葉遺構配置図(4)	26	第57図	S D 38出土土器(4)	63
第24図	S D 27	28	第58図	S D 38出土土器(5)	64
第25図	S D 27立面図	29	第59図	S D 38出土土器(6)	65
第26図	S D 27出土土器(1)	30	第60図	S D 38出土土器(7)	66
第27図	S D 27出土土器(2)	31	第61図	S D 38出土土器(8)	67
第28図	S D 27出土土器(3)	32	第62図	S D 38出土土器(9)	68
第29図	S D 27出土土器(4)	33	第63図	S D 38出土土器(10)	69
第30図	S D 27出土土器(5)	34	第64図	S D 69-1	70
第31図	S D 27出土土器(6)	35	第65図	木器溜4	71
第32図	S A 25	36	第66図	S D 69-2	72
第33図	S A 26	37	第67図	S D 69出土土器	73
第34図	S A 69、70、72、80、81	38	第68図	S D 11遺物出土状況	75
			第69図	S D 11出土土器(1)	77
			第70図	S D 11出土土器(2)	78

第71図	S D 11出土土器 (3) ……79	第109図	弥生時代中期後葉の土器 (3) ……120
第72図	S D 11出土土器 (4) ……80	第110図	弥生時代中期後葉の土器 (4) ……121
第73図	S D 11出土土器 (5) ……81	第111図	弥生時代後期初頭～ 後葉の土器 (1) ……122
第74図	S D 11出土土器 (6) ……82	第112図	弥生時代後期初頭～ 後葉の土器 (2) ……123
第75図	S D 20年輪年代測定試料位置図 ……83	第113図	弥生時代後期初頭～ 後葉の土器 (3) ……124
第76図	S D 20出土土器 (1) ……84	第114図	弥生時代後期末～ 古墳時代前期初頭の土器 (1) ……125
第77図	S D 20出土土器 (2) ……85	第115図	弥生時代後期末～ 古墳時代前期初頭の土器 (2) ……126
第78図	S D 62、59 ……86	第116図	線刻絵画土器 (1) ……127
第79図	S D 62出土土器 ……87	第117図	線刻絵画土器 (2) ……128
第80図	S D 62、59出土土器 ……87	第118図	異形土器 ……129
第81図	S D 66、67 ……89	第119図	外来系土器 (1) ……130
第82図	S A 92～94 ……90	第120図	外来系土器 (2) ……132
第83図	S K 384～391 ……91	第121図	外来系土器 (3) ……133
第84図	S K 392～404 ……92	第122図	外来系土器 (4) ……134
第85図	S D 54、56～58、61 ……93	第123図	スタンプ文土器 (1) ……136
第86図	S D 60、63～65 ……94	第124図	スタンプ文土器 (2) ……137
第87図	土器溜 11 ……95	第125図	土笛 ……140
第88図	土器溜 11出土土器 (1) ……96	第126図	分銅形土製品 (1) ……141
第89図	土器溜 11出土土器 (2) ……97	第127図	分銅形土製品 (2) ……142
第90図	土器溜 11出土土器 (3) ……98	第128図	分銅形土製品 (3) ……143
第91図	土器溜 12、13 ……98	第129図	分銅形土製品 (4) ……144
第92図	木器溜 4、5 ……99	第130図	分銅形土製品 (5) ……145
第93図	弥生時代後期末～ 古墳時代前期初頭遺構配置図 ……102	第131図	土玉出土状況 ……147
第94図	S K 406～409、411～414 ……103	第132図	土玉 (1) ……148
第95図	S K 410、415～427 ……104	第133図	土玉 (2) ……149
第96図	S K 428～440、405 ……105	第134図	土玉 (3) ……150
第97図	S K 441～452、S D 68 ……106	第135図	紡錘車 (1) ……151
第98図	土器溜 14 ……107	第136図	紡錘車 (2) ……152
第99図	土器溜 14出土土器 ……108	第137図	紡錘車 (3) ……153
第100図	土器溜 15、16 ……109	第138図	その他土製品 ……154
第101図	弥生時代前期末～ 中期前葉の土器 (1) ……112	第139図	石器・伐採石斧 (1) ……156
第102図	弥生時代前期末～ 中期前葉の土器 (2) ……113	第140図	石器・伐採石斧 (2) ……157
第103図	弥生時代前期末～ 中期前葉の土器 (3) ……114	第141図	石器・伐採石斧 (3) ……158
第104図	弥生時代中期中葉の土器 (1) ……115	第142図	石器・伐採石斧 (4) ……159
第105図	弥生時代中期中葉の土器 (2) ……116	第143図	石器・伐採石斧 (5) ……160
第106図	弥生時代中期中葉の土器 (3) ……117	第144図	石器・伐採石斧 (6) ……161
第107図	弥生時代中期後葉の土器 (1) ……118	第145図	石器・伐採石斧 (7) ……162
第108図	弥生時代中期後葉の土器 (2) ……119		

第146図	石器・扁平片刃石斧 (1).....	163
第147図	石器・扁平片刃石斧 (2).....	164
第148図	石器・扁平片刃石斧 (3).....	165
第149図	石器・扁平片刃石斧 (4).....	166
第150図	石器・扁平片刃石斧 (5).....	167
第151図	石器・柱状片刃石斧 (1).....	168
第152図	石器・柱状片刃石斧 (2).....	169
第153図	石器・鑿状片刃石斧、石錐	170
第154図	石器・敲石 (1).....	171
第155図	敲石模式図	172
第156図	石器・敲石 (2).....	172
第157図	石器・敲石 (3).....	173
第158図	石器・敲石 (4).....	174
第159図	石器・敲石 (5).....	175
第160図	石器・台石	176
第161図	石器・砥石 (1).....	178
第162図	石器・砥石 (2).....	179
第163図	石器・砥石 (3).....	180
第164図	石器・砥石 (4).....	181
第165図	石器・砥石 (5).....	182
第166図	石器・石庖丁 (1).....	183
第167図	石器・石庖丁 (2).....	184
第168図	石器・石庖丁 (3).....	185
第169図	石器・大型石庖丁 (1).....	187
第170図	石器・大型石庖丁 (2).....	188
第171図	石器・大型石庖丁 (3).....	189
第172図	石器・大型石庖丁 (4).....	190
第173図	石器・大型石庖丁 (5).....	191
第174図	石器・石鎌	192
第175図	石器・石鋏	193
第176図	石器・凹石 (1).....	194
第177図	石器・凹石 (2).....	195
第178図	石器・石錘 (1).....	196
第179図	石器・石錘 (2).....	197
第180図	石器・石錘 (3).....	198
第181図	石器・打製石剣 (1).....	199
第182図	石器・打製石剣 (2).....	200
第183図	石器・磨製石剣、石鎌	201
第184図	石器・環状石斧 (1).....	202
第185図	石器・環状石斧 (2).....	203
第186図	石器・サヌカイト製石器 (1).....	204
第187図	石器・サヌカイト製石器 (2).....	205

第188図	石器・サヌカイト製石器 (3).....	206
第189図	石器・サヌカイト製石器 (4).....	207
第190図	石器・サヌカイト製石器 (5).....	208
第191図	石器・サヌカイト製石器 (6).....	209
第192図	石器・サヌカイト製石器 (7).....	210
第193図	石器・サヌカイト製石器 (8).....	211
第194図	石器・ガラス質安山岩製石器	212
第195図	石器・黒曜石製石器	213
第196図	石器・勾玉	214
第197図	石器・管玉製作資料 (1).....	215
第198図	石器・管玉製作資料 (2).....	216
第199図	石器・管玉製作資料 (3).....	217
第200図	石器・管玉製作資料 (4).....	218
第201図	石器・管玉製作資料 (5).....	219
第202図	石器・管玉製作資料 (6).....	220
第203図	石器・管玉製作資料 (7).....	221
第204図	石器・管玉製作資料 (8).....	222
第205図	石器・管玉製作資料 (9).....	223
第206図	石器・管玉製作資料 (10)	225
第207図	石器・管玉製作資料 (11)	226
第208図	石器・管玉	227
第209図	石器・石鋸	228
第210図	国道調査区の管玉製作資料	229
第211図	石器・管玉製作資料 (12)	229
第212図	石器・軽石加工品	230
第213図	石器・用途不明品 (1).....	231
第214図	石器・用途不明品 (2).....	232
第215図	鉄器・鑄造鉄器破片 及び再加工品 (1)	235
第216図	鉄器・鑄造鉄器破片 及び再加工品 (2)	236
第217図	鉄器・鑄造鉄斧	237
第218図	鉄器・袋状鉄斧 (1).....	238
第219図	鉄器・袋状鉄斧 (2).....	239
第220図	鉄器・袋状鉄斧成形模式図	239
第221図	鉄器・板状鉄斧 (1).....	241
第222図	鉄器・板状鉄斧 (2).....	242
第223図	鉄器・鉄斧、鑿、袋状鑿	243
第224図	鉄器・鑿、鈍、刀子	245
第225図	鉄器・穿孔具、鎌	246
第226図	鉄器・鋤 (鋏) 先、 ヤス状鉄器、銚、鍬	247

第227図	鉄器・矛	248
第228図	鉄器・その他	249
第229図	鉄器・鍛冶関連資料(1)	251
第230図	鉄器・鍛冶関連資料(2)	252

第231図	青銅器・銅鐸、銅鏡	256
第232図	青銅器・貨泉	257
第233図	青銅器・銅鏃	258

挿 表 目 次

表1	弥生時代前期末～ 中期後葉遺構一覧表	22
表2	弥生時代中期中葉～ 後葉遺構一覧表(1)	49
表3	弥生時代中期中葉～ 後葉遺構一覧表(2)	50
表4	弥生時代後期初頭～ 後葉遺構一覧表(1)	100
表5	弥生時代後期初頭～ 後葉遺構一覧表(2)	101

表6	弥生時代後期末～ 古墳時代前期初頭遺構一覧表(1)	109
表7	弥生時代後期末～ 古墳時代前期初頭遺構一覧表(2)	110
表8	スタンプ文土器一覧表(1)	138
表9	スタンプ文土器一覧表(2)	139

第1章 はじめに

第1節 本書刊行に至る経緯

青谷上寺地遺跡は国道改築工事と県道整備工事に伴って発掘調査が行われた。現地での調査は平成10年度より実施し、平成11年度調査地までの遺構を中心とする報告書を平成11年度に刊行した（『青谷上寺地遺跡1』、『青谷上寺地遺跡2』）。国道改築工事に伴う現地調査はこの年度で終了し、平成12年度に平成11年度調査に係る遺構と2ヶ年度分の遺物等を報告し（『青谷上寺地遺跡3』）、事業を終えた。県道整備工事に係る現地調査は平成12年度以降も継続して行われ、平成13年6月をもって終了した。その後平成12、13年度調査に係る遺構と平成10年度からの4ヶ年度分の遺物、関連諸分野の成果を報告するのが本書である。（湯村 功）

第2節 平成12、13年度調査の経過

平成12年度は県道8、7、6区の調査を行った。8区は4月初旬より現地調査を開始した。調査着手後まもなく人骨が出土し始め、かなりの数の人骨が埋もれていることが予想された。8区は弥生時代後期段階に微高地と呼んでいる地形の高い範囲の東側縁辺部に相当し、そこに掘り込まれた溝の一部に埋没していたものと判明したのであるが、散乱した状態で累々と出土する人骨の取り上げに追われる日々が続き、取り上げを終えたのは6月の終わりのことであった。この大量の弥生時代人骨の中に殺傷痕をもつものが相当数あることが判明し、また脊椎カリエスの症例も認められたことから、それぞれ記者発表を行った。さらに出土した頭蓋骨のうち3例に脳組織の一部が残っていることも判明し、慎重な検討が続けられた。人骨の出土した溝は護岸施設等の姿を変えながら長らく維持されたもので、杭で固定された板材や矢板の検出・図化・取り上げに時間を費やすこととなった。また遺存状況の良好な木器・骨角器などの遺物も大量に含んでおり、取り上げ作業に追われ、8区の調査終了は7月下旬となった。

7区は8区と一部並行する形で6月下旬より調査を行った。ここは弥生時代前期～中期にかけては微高地の東側縁辺部あるいは低湿地部であり、それが埋没した後は弥生時代後期～古墳時代前期初頭まで土坑・ピットなどが築かれ続けている。ここでは中期後葉から後期初頭にかけて長い板材を横向きに立て並べ杭で固定した遺構（本書においてSAと報告）が築かれていたが、埋没しては新たに作り直すという作業を繰り返しており、取り上げても取り上げても下からまた出てくるといった状況であった。また低湿地部であるがゆえに木器など有機質遺物の残りがきわめて良好で、多くの情報を得ることができた。7区の調査は酷暑の夏を過ぎ、冷たい雨の降る11月下旬まで行われた。

6区の調査は7区終了後に着手した。6区は弥生時代前期末～中期前葉段階に一部貝塚が形成される緩斜面となるほかは微高地上に該当する。他の調査区同様、古墳時代前期初頭に至るまで連続と遺構が築かれる。各時代において土坑やピットなどが調査地を埋め尽くすように掘り込まれており、検出・図化作業に追われた。折りしも天候の不順な時期であり、粘性の強い堆積土であるがゆえに作業は困難を極めた。弥生時代後期～古墳時代前期初頭の遺構面の調査を終了した時点で降雪に備え、



第1図 青谷上寺地遺跡の位置

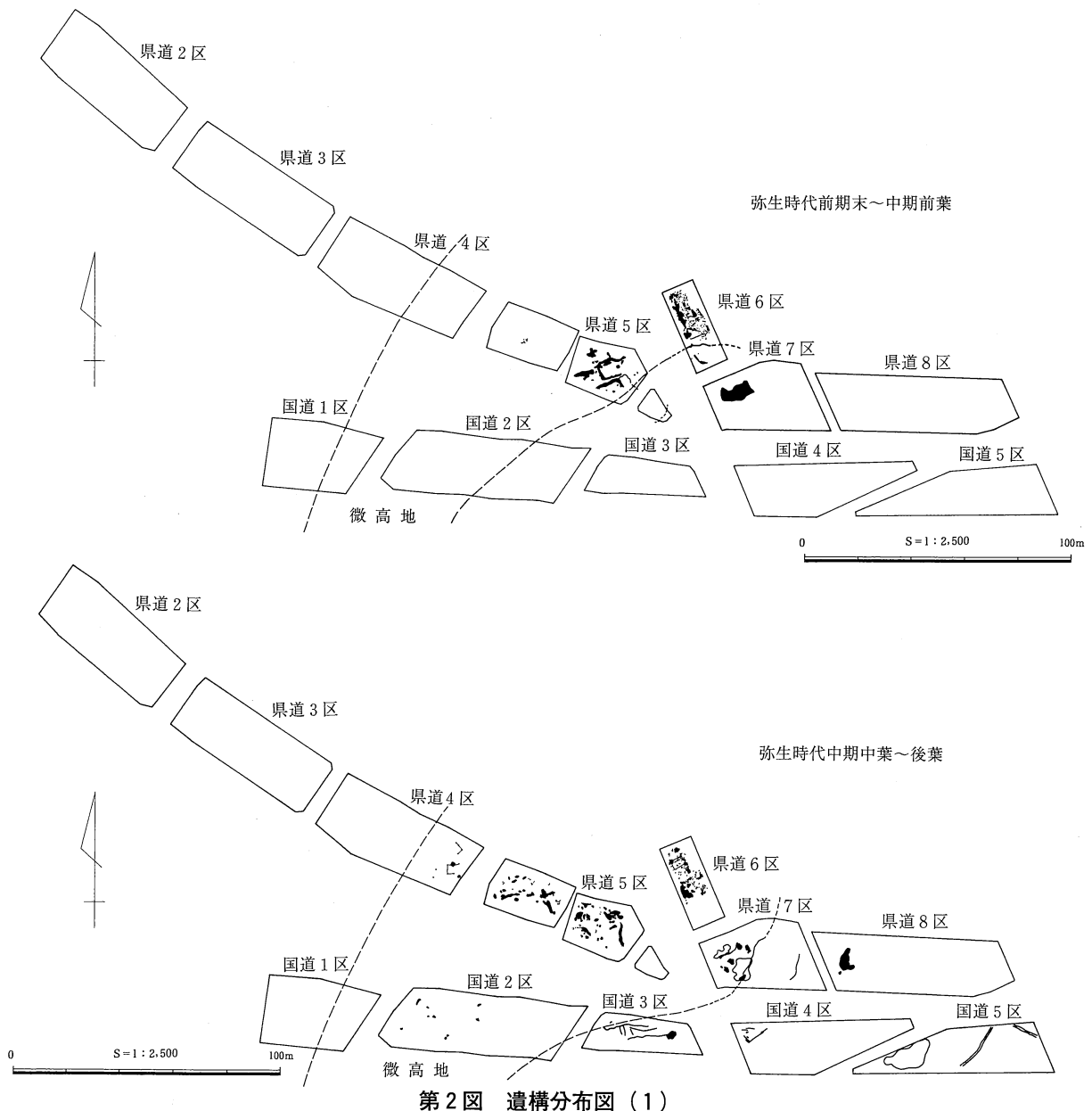
残りの調査を次年度へ繰り越すこととなり、12月下旬で一時撤収した。

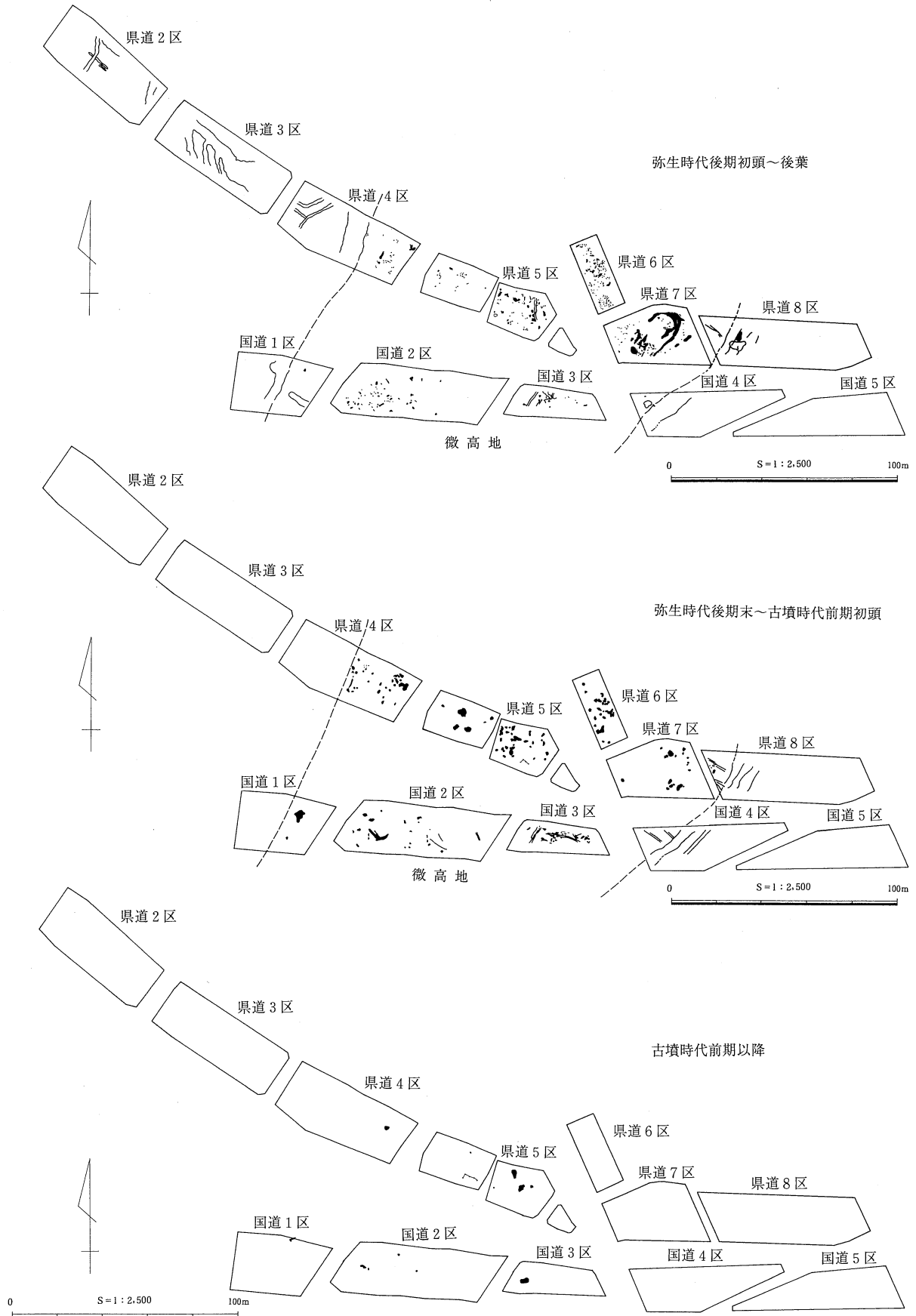
平成13年度は6区の調査を継続して行った。遺構の検出状況は上記のとおりであったが、6月末で現地調査を終えた。この間、前年度に出土した脳組織の一部に関する記者発表を行い、注目を集めることとなった。この他にも銅鏃の刺さった人骨が新たに発見され、またサメを描いた木器などについても記者発表を行った。(湯村 功)

第3節 遺跡の概要

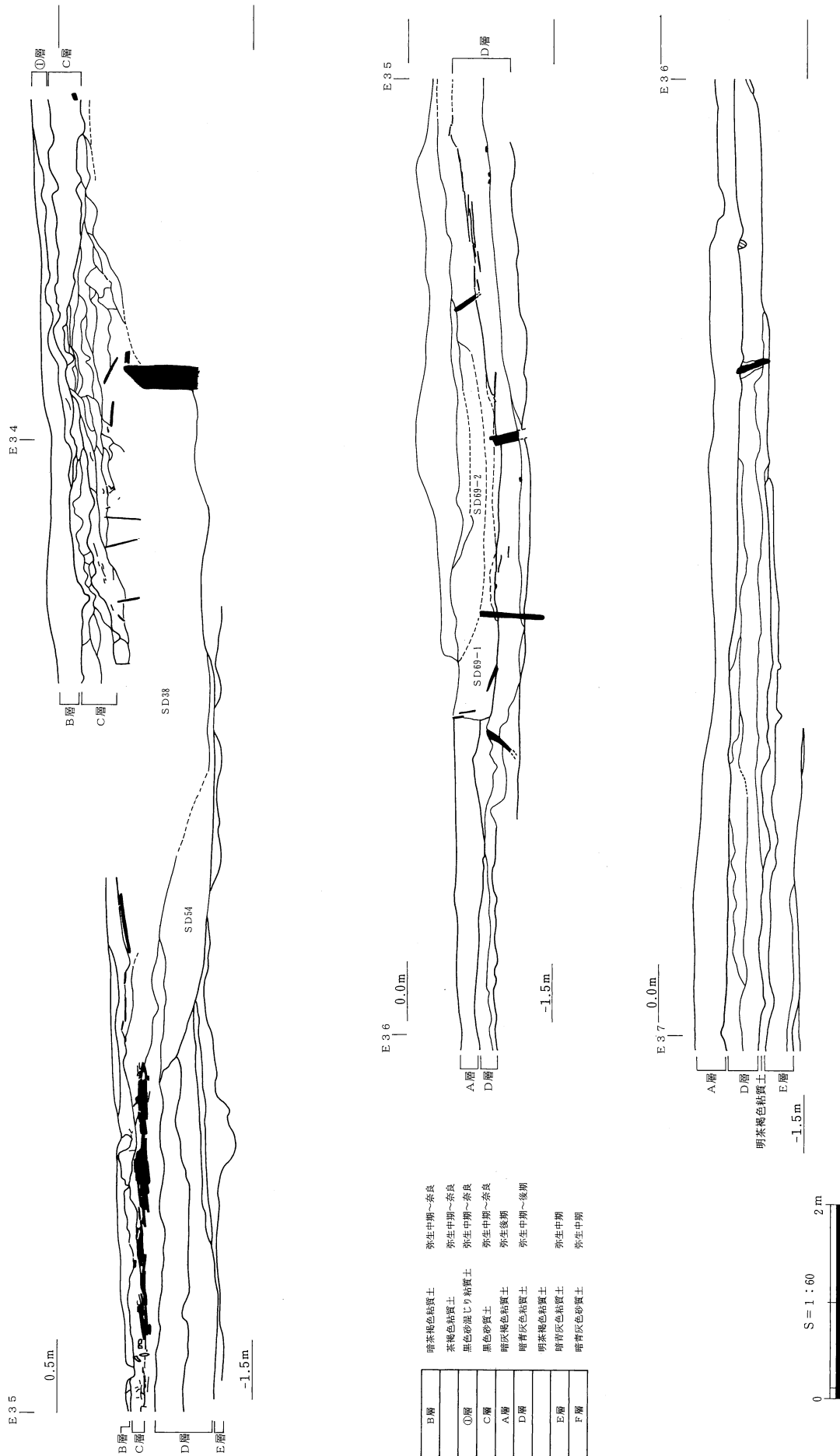
遺跡をめぐる環境や変遷については既刊の報告書において述べられている。特に遺跡の概要は昨年度刊行された『青谷上寺地遺跡3』第1章第1節にまとめられており、平成12年度における県道整備事業に伴う調査成果を加味しても、基本的に変更すべきところはない。従って、ここでは遺跡の概要等を繰り返し述べることは避け、新たな知見を述べるに留めたい。

弥生時代前期末～中期前葉には県道調査区部分を中心として貝塚が形成されている。今年度調査を行った県道6区、7区でも検出され、第2図に示したように広範囲に広がることが確認された。ただし7区における検出状

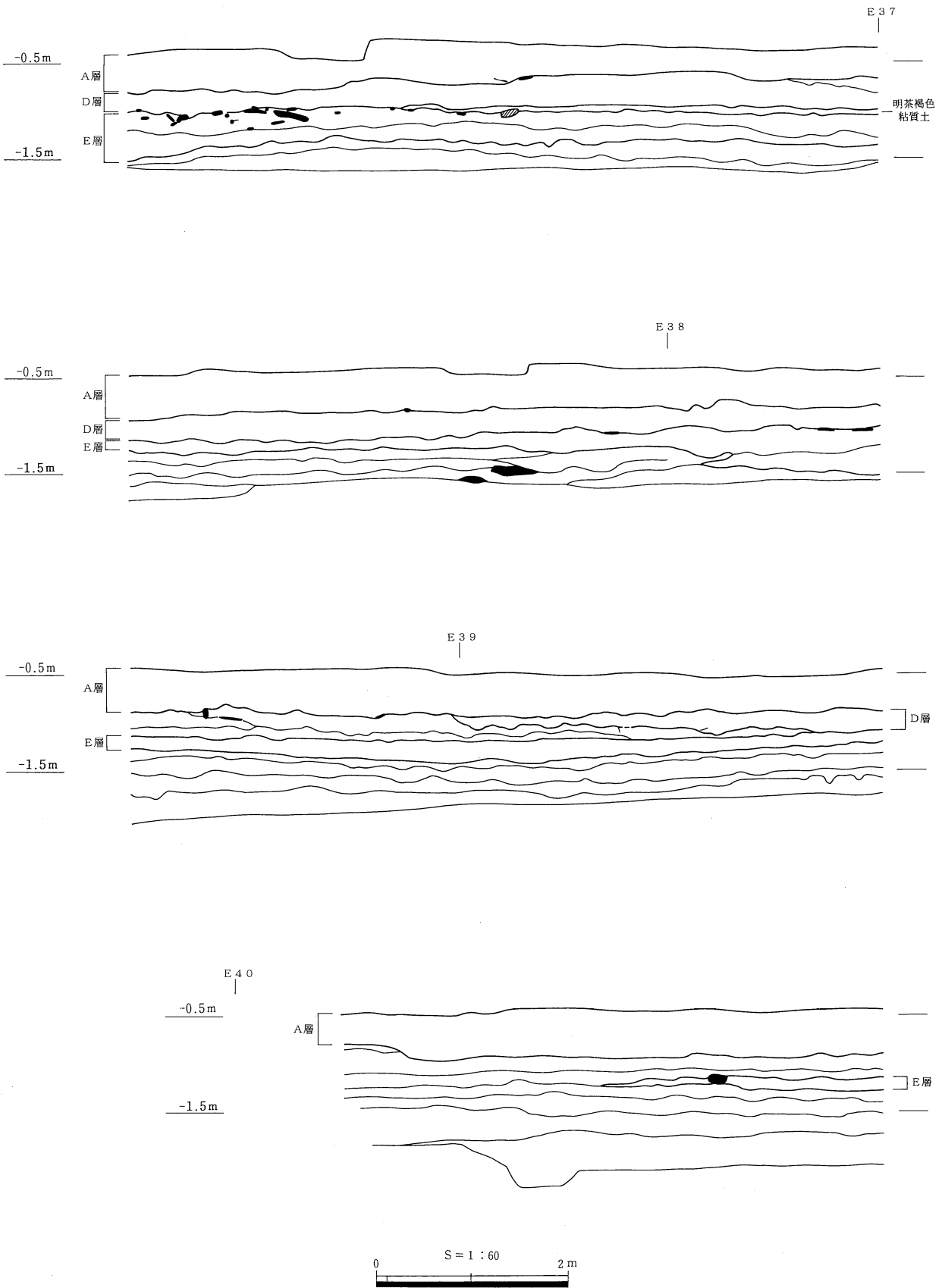




第3図 遺構分布図(2)

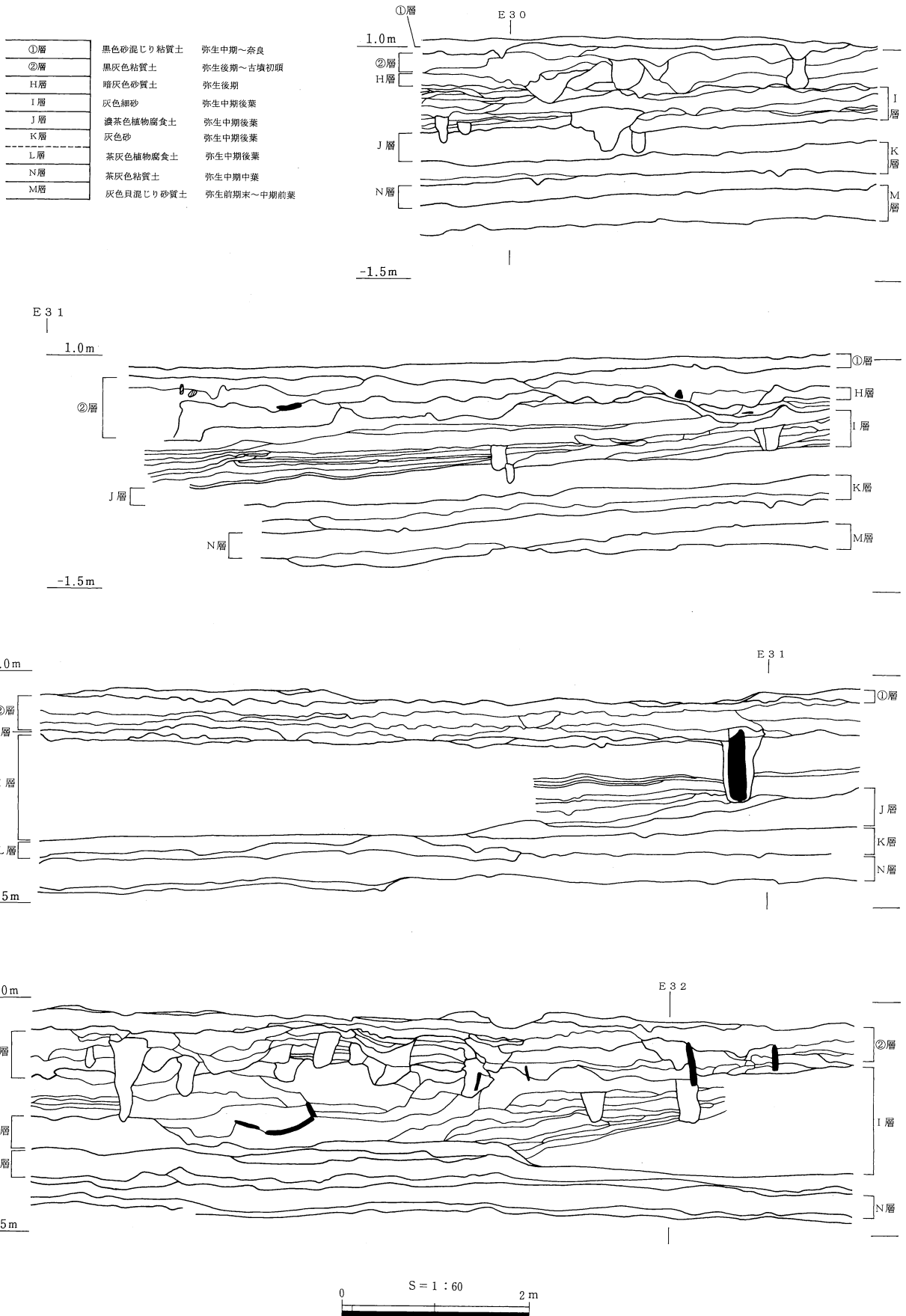


第4図 8区土層図(1)

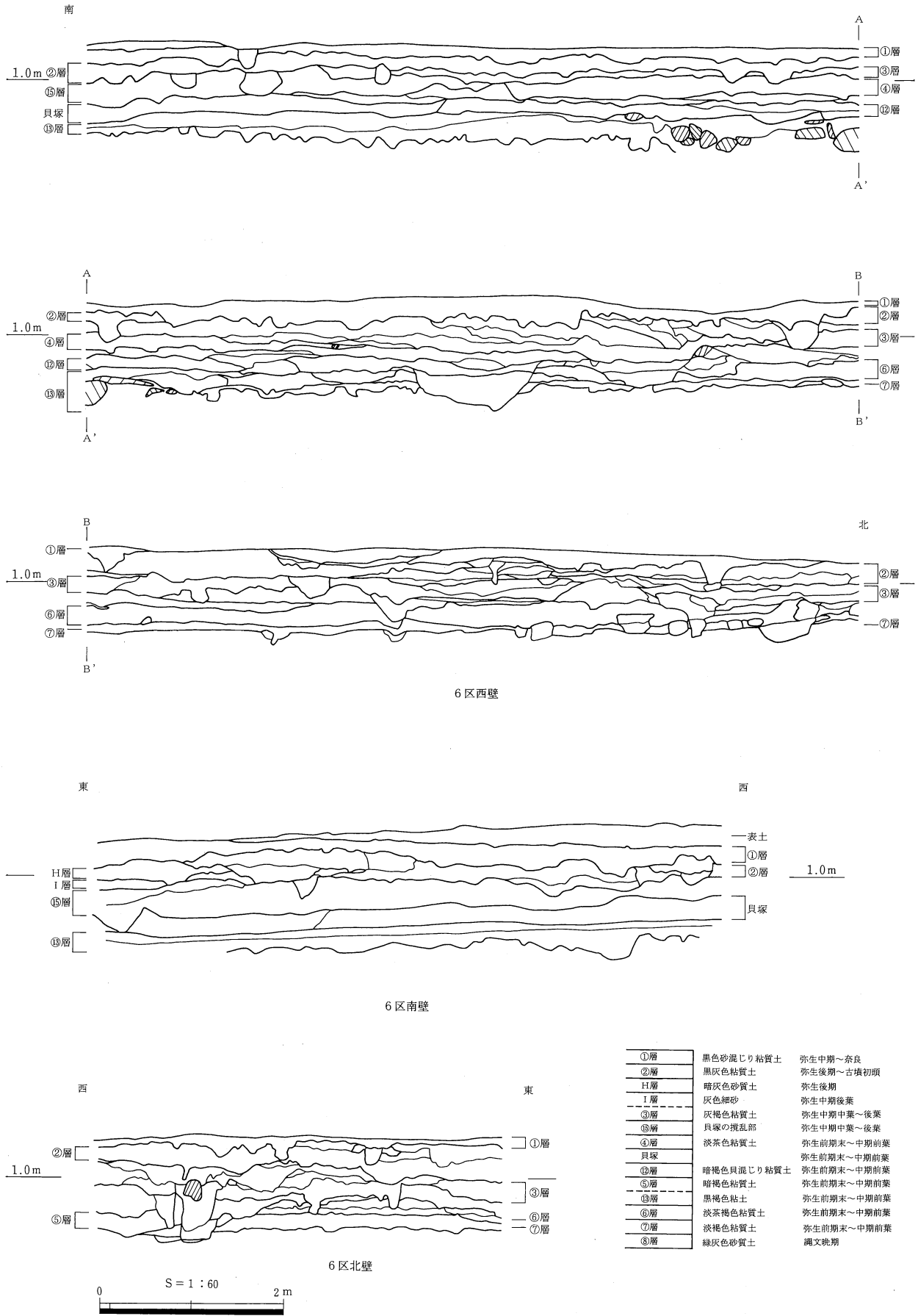


第5図 8区土層図(2)

第1章 はじめに



第6図 7区土層図



第7図 6区土層図

況は貝が濃密ではないうえに厚さが薄く、貝塚先端部分の流出であるかもしれない。

中期中葉～後葉段階では、国道3区で検出されていたSD27の続きが県道4区で確認された(第24図)。やはり大型の板材で護岸を施しており、大規模な労働力の投入が予想される。国道検出部と異なるのは溝の幅が10mと大きく、護岸の列も10列と多い。この護岸列は何度か作り変えられたものと思われるが、どれがセット関係をなし、何段階のものがあるのか現場では捉えることができなかった。おそらくごく短時間のうちに作り変えが行われたものと考えている。この点については第2章で述べる。中期後葉段階の堆積土は県道7区で大きく4枚把握しているが、粘質土・植物腐食土・砂と多様で、この時期は少なくとも東側低湿地部においては、土壌の堆積状況やそれに対する人間の対応に表されるように環境の変化が予想されるのである。

後期～古墳時代前期初頭にかけては、やはり大量の人骨が問題となるであろう。出土状況が極めて異例であることに加え、殺傷痕が認められるものが多いという点である。この2点は分けて考えるべきであるが、弥生時代に新たな問題提起をしたものといえる。第2、5章で詳しく報告するとともに、若干の考察を加えたい。人骨の出土した溝は国道4区で報告されたSD38の続き部分で、両者は直線状に延びる。これに伴って微高地と呼んでいる範囲も北東方向へさらに広がることが予想される。後期末～古墳時代前期初頭にかけてこの溝は埋没していく。微高地西側を画するSD11も同様である。土坑などの遺構は数多く検出されているが、集落の機能に変化が生じたのではないかと考えられ、弥生時代中期後葉とともに集落の変革期と捉えられよう。今回の調査では古墳時代前期初頭より新しい時期の遺物はわずかに出土しているものの、当該時期の遺構は確認されなかった。弥生時代の終わりから古墳時代の初めに大規模集落としての終焉を迎えたことは、より明確となった。(湯村 功)

第4節 基本層序

第4～7図に各調査区の土層を示した。細かく細分している部分もあるが、太線で囲った範囲が層相や包含される遺物などからひとつのまとまりと認識できる。今回の調査地は区により土層が異なるので、以下各調査区ごとに基本層序を中心に概要を記す。層名は、『青谷上寺地遺跡1』で使用したものはそのまま踏襲する。その後の調査では先にふれたように調査区ごとに異なる層相であったり、微高地上の土層でも新たな層位が確認されるなど整理が必要であるが、前回報告文のものを含めて修正する必要が生じるため混乱を避ける意味で現場で使用していた層名をそのまま用いる。この結果、略称に算用数字とアルファベットが混在するうえ、それぞれの順序が必ずしも時期の新旧関係を表さない場合がある。ご容赦願いたい。

8区の土層を第4、5図に掲げた。土層図は調査区を縦断するEラインに沿って作成している(第8図)。最下位の遺物包含層はF層(暗青灰色砂質土)である。ここからは少量の弥生前期～中期の土器が出土している。その上位のE層(暗青灰色粘質土)との違いは砂粒を多めに含んでいることだけである。8区東側の低湿地部を中心に認められた。E層も土器は少なく中期の土器を中心としながら後期のものも含む。E層の上には明茶褐色粘質土と呼んだ明るい色調の層が帯状に認められる。微高地上でも同様な土層が認められたが、直接つながらるものか分からない。この層をはさんでE層に似る土層をD層(暗青灰色粘質土)と呼んで区別した。ここでは一定量の土器の出土を見ており、中期～後期のものが混在している。その上位になるとSD69を境に異なった様相を示し、SD69より東(低湿地側)ではA層(暗灰褐色粘質土)が認められ、後期の土器を含む。西側(微高地側)には下位よりC層(黒色砂質土)、①層(黒色砂混じり粘質土)、茶褐色粘質土、暗茶褐色粘質土と複数の土層が存在するが、いずれも弥生時代中期以降、須恵器を伴う時期のものまで含んでいる。微高地縁辺部を区画する溝との関係は、SD54がD層上面より掘り込まれ、それが埋没した後木器溜4が形成され、SD38とSD69がそれを切るように築かれている。SD69がA層を切る関係も確認できる。SD38を覆うのは遺物の時期幅のあるC層などということになる。8区は低湿地部の各層位において遺物の時期幅が認められ、微高地縁辺部では多くの溝が次々と築かれたようで、複雑な様相を呈している。掘り直された溝の初期の掘り込み面は土層の観察からは

把握できない場合が多い。

7区は最下層にはM層（灰色貝混じり砂質土）が認められた。ここには貝を顕著に含み土器は弥生前期末～中期前葉のものである。おそらく微高地上に形成された貝塚の先端部分であろう。7区西側のみに存在する。この上にN層（茶灰色粘質土）とL層（茶灰色植物腐食土）がある。土としてはよく似ているのであるが、前者は中期中葉、後者は中期後葉の土器を包含する。L層は7区東側にのみ認められる。K層（灰色砂）はL層と重ならない範囲に分布し、中期後葉の土器を伴うがL層との上下関係は不明である。L層とK層を覆ってJ層（濃茶色植物腐食土）が認められる。この層はその名のとおり植物遺体が堆積したような土で、多量の木器を包含していた。土器から見た時期は中期後葉である。J層堆積後、SD27が築かれる。大規模な護岸を施した溝であるが、砂の堆積により埋没が進む。おそらく当初は掘り直して維持していたのだろうが、砂により全体が埋没するとSAと報告する施設を築くようになる。このSA群も速やかに砂に埋もれたものと思われ、掘り直すことはせずに埋もれた上に同じようなものを新たに作っていた。この埋没と作り直しを数回繰り返す。このSD27やSA群を埋める砂をI層（灰色細砂）と呼んでいる。I層中の土器はやはり中期後葉である。砂の堆積が止んだ後、黒みを帯びる土が形成される。下位の砂っぽい層をH層（暗灰色砂質土）、上位の黒味が強く粘性のある層を②層（黒灰色粘質土）と呼んだ。後期～古墳時代前期初頭の遺物包含層である。最上層には微高地全体を覆う、後の時代の整地層と考えられる①層が広がる。

6区は微高地上に位置し、県道5区と対比できる。『青谷上寺地遺跡1』第3章表12に掲げた微高地における基本土層の中で、⑨茶褐色粘質土と⑪黒茶褐色粘質土は6区には存在しない。また⑩貝塚は遺物包含層としては扱わない。弥生時代前期末～中期前葉の遺物包含層は④層（淡茶色粘質土）以下である。④層の下に貝塚が形成され、⑤層（暗褐色粘質土）、⑥層（淡茶褐色粘質土）、⑦層（淡褐色粘質土）と続くのは5区と同じである。6区ではさらに貝塚と⑤層の間に⑫層（暗褐色貝混じり粘質土）が、⑥層の上位に⑬層（黒褐色粘土）が新たに確認された。⑤層と⑬層は重ならないため上下関係が不明である。この結果この段階の遺物包含層は6枚存在することになる。中期中葉～後葉の遺物包含層はI層、③層、⑮層である。このうち⑮層は最下位にあり、I層と③層は上下関係がつかめなかった。I層は6区南側に一部認められたのみであり、⑮層は当初この時期の貝塚と認識していたが、前期末～中期前葉の土器も多く含み、前段階の貝塚を攪乱したものと判断した。この層も貝塚の分布する調査区南側に限り認められる。従って6区全体を覆う中期中葉～後葉の遺物包含層は基本的に③層のみということになる。後期～古墳時代前期初頭の遺物包含層は②層とH層である。H層は6区南側に部分的に存在したに過ぎない。最上位は①層により覆われていた。

上記のように各時期において複数の土層が見られる。同じ時期と捉えている層の中で土器の型式などに変化があるのかどうかといった点は第5章で検討する。 (湯村 功)

第5節 調査体制

調査主体 財団法人鳥取県教育文化財団

理事長	有田博充（鳥取県教育委員会教育長）
常務理事	関 敏之（鳥取県教育委員会事務局次長）
事務局長	岡山宏徳

鳥取県埋蔵文化財センター

所 長	古井喜紀（平成12年度）（鳥取県埋蔵文化財センター所長併任） 中村 登（平成13年度）（鳥取県埋蔵文化財センター所長併任）
次 長	八木谷 昇（平成12年度） 加藤隆昭（平成13年度） 小林 勉（平成13年度7月まで）
調整係長	山柘雅美（平成12年度） 加藤隆昭（平成13年度）（次長兼務）
文化財主事	高垣陽子
庶務係主任事務職員	矢部美恵
事務職員	中島いづみ（平成12年度） 嶋村八重子（平成13年度）

調査担当 東部埋蔵文化財青谷調査事務所（平成13年7月より東部埋蔵文化財調査事務所）

所 長	岡田寿晃（平成13年度6月まで） 加藤隆昭（平成13年度7月より）（次長兼務）
主任調査員	湯村 功
調 査 員	高尾浩司 野田真弓 中村康子（平成12年度）
整 理 員	山根 都

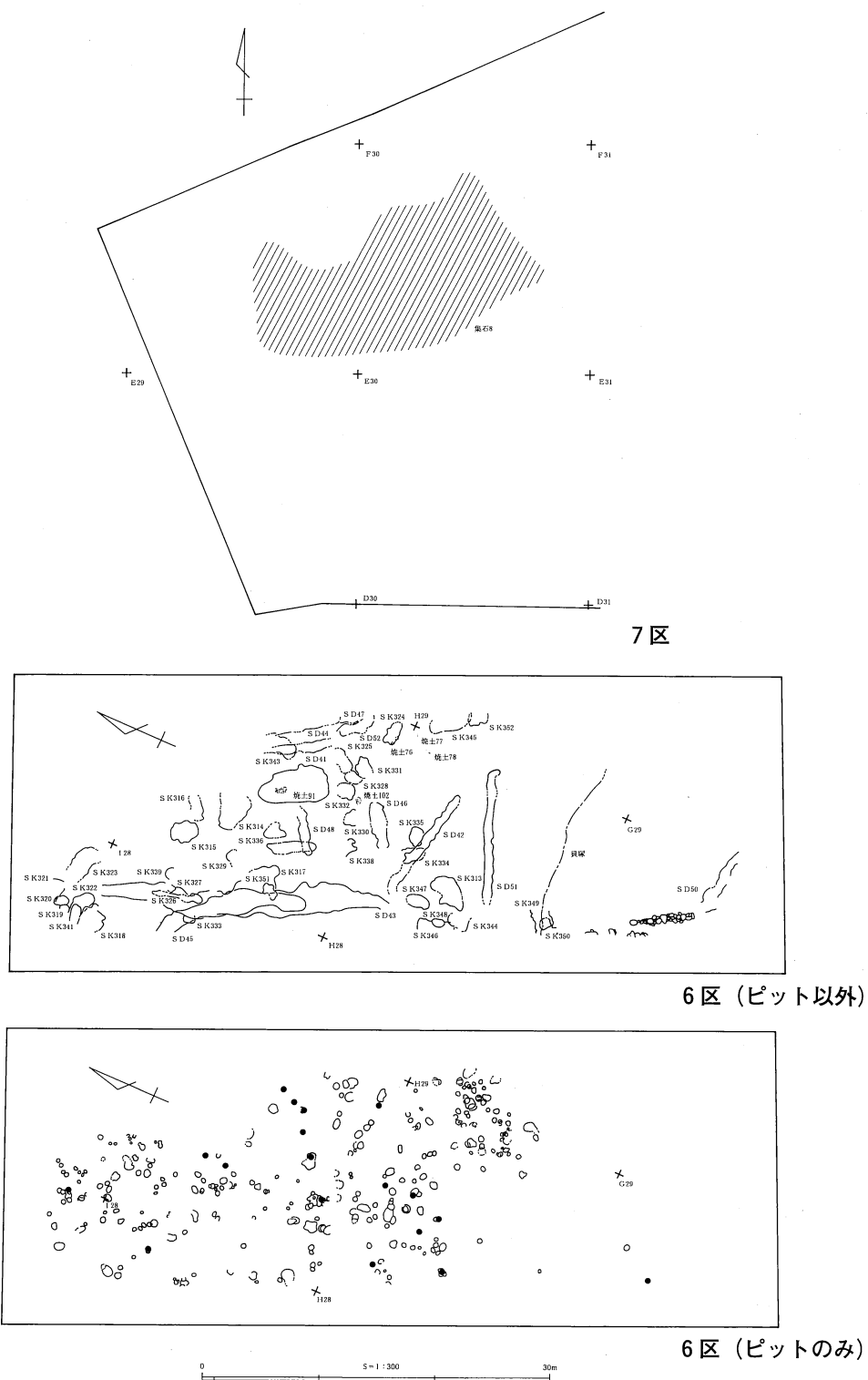
調査指導 鳥取県教育委員会事務局文化課 鳥取県埋蔵文化財センター

下記の方々に発掘作業員、室内整理作業員として従事、協力いただいた。

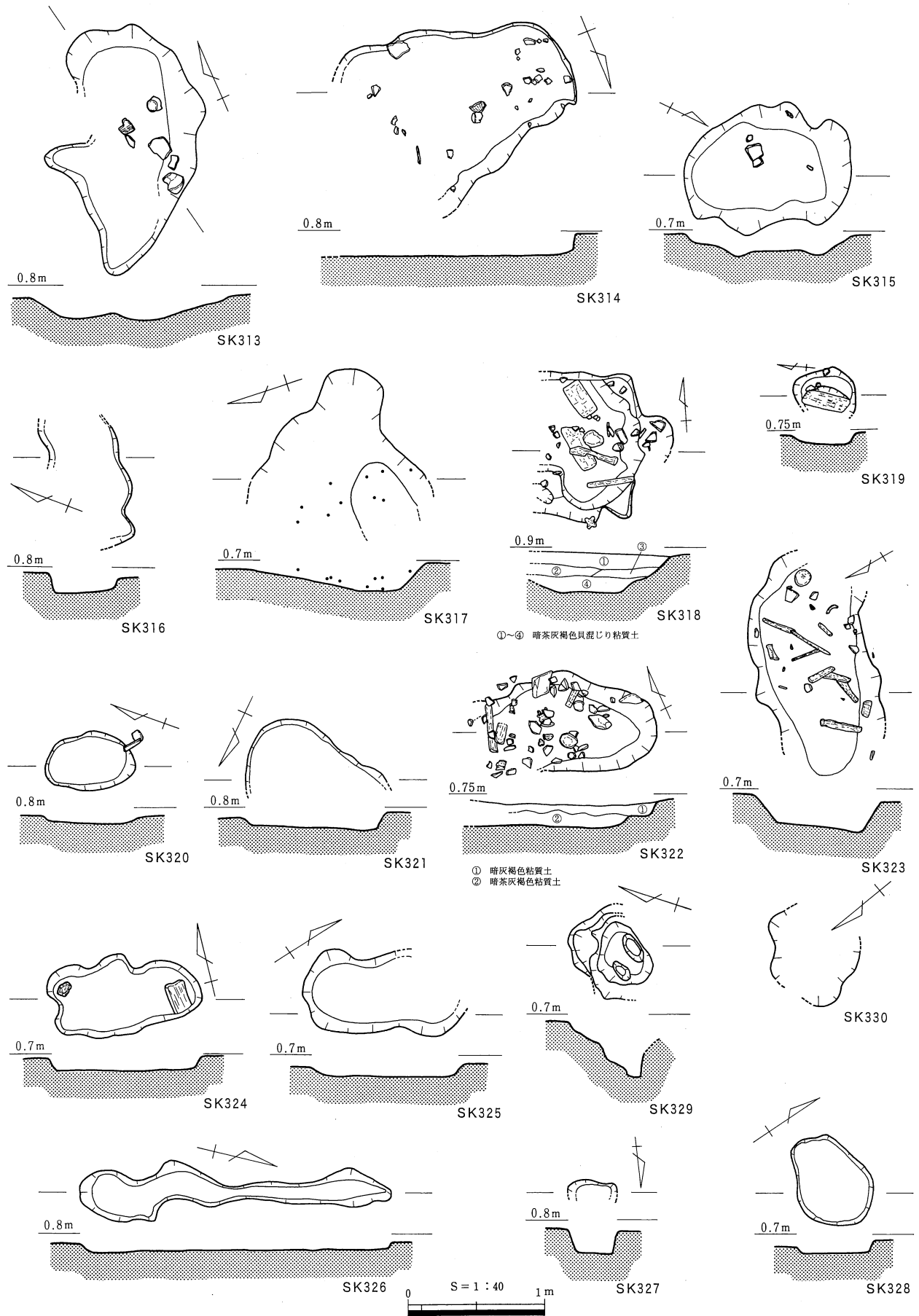
小谷修一 谷口寿治 藤原静雄 蔵光寿栄雄 長谷川武久 桑田 進 清水好江 前田求馬 谷川 肇
藤原弘文 大谷ますゑ 尾崎壮治 徳田正治 八幡常子 土橋道夫 川口嘉市 田中立己 石原 匡
岡本真澄 徳安 勉 小谷 武 池田美智江 遠藤和之 廣澤博子 石原敬子 黒田光子 山内 修
浜田佐奈枝 鈴木栄美 田中 稔 伊藤節子 田中清江 原田ひとみ 鳥戸理津子 富山香織 玉川春実
尾崎範夫 倉本一正 中西あきの 田中 保 細川正明 藤田頼美 浜本節也 倉本澄子 尾崎恭子
山中誠一 森 貞子 廣富キミコ 田中捷美 田中照雄 田中紀美雄 山根義雄 近藤敏彦 山本久美恵
野崎悦子 伊藤恵美子 南條孝子 米山麻紀 福田延子 表 明美 山本博子 厨子彰子 松本敬子
塚北寿美恵 清水房子 福田弥千代 小山菜穂子 山本清子 中原千恵 大東敦子 長谷川 栄
大角典子 福田早余子 井殿加奈子 高淵徳子 山下 都 椎本千春 高垣美代子 大倉裕子 新牧初栄
藤田麻耶子 森藤郁美 奥田康智 田中孝昌 渡辺 誠 森田和登 山口大輔 松井裕樹 辰巳佳央
中島裕美 安田久美子 河上仁美 森田恵子 田中ゆかり 長谷川由紀子 西迫陽子 村尾美禰子
蔵光みさゑ 尾崎照子 前田定子 垣屋紀子 柳川好枝 田中としゑ 坂田たき枝

第2章 遺構の概要

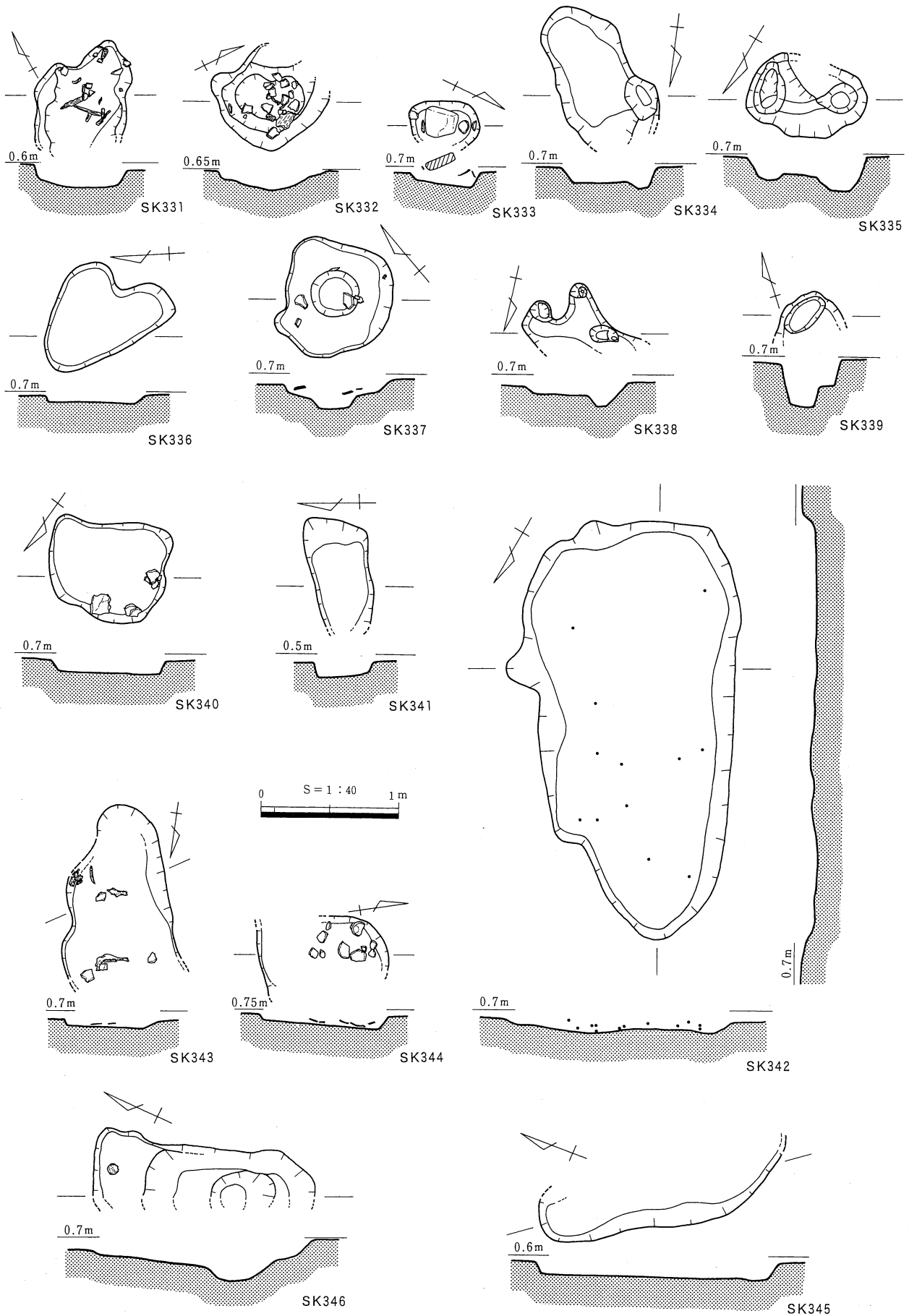
本章では平成12年度以降に調査された遺構について報告する。時期ごとに節を設け、各時期を特徴付ける遺構については最初に詳しく述べ、それ以外は概略的な説明にとどめた。伴出する土器も主要な遺構に限って掲載していることをお断りしておきたい。各遺構の詳細は各節の最後に掲げた遺構一覧表を参照されたい。



第8図 弥生時代前期末～中期前葉遺構配置図

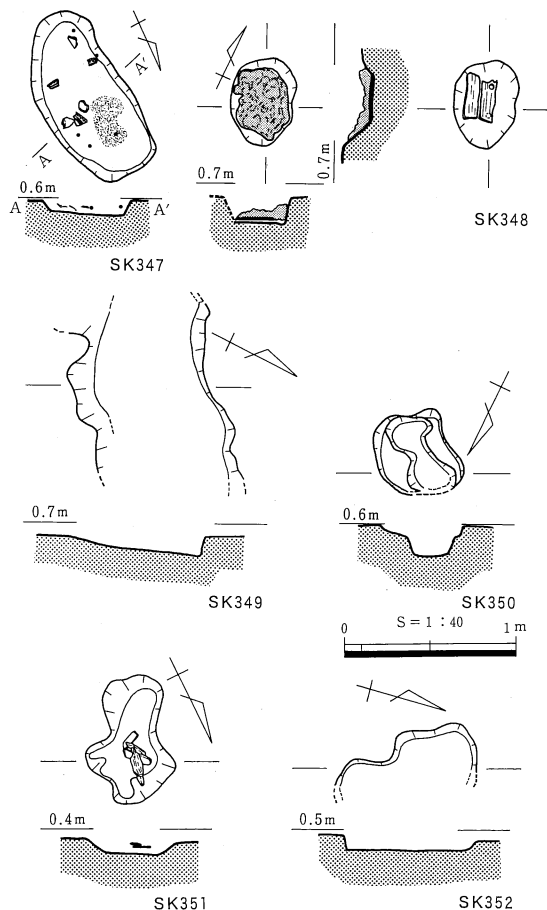


第9図 SK313~330



第10図 S K 331~346

第1節 弥生時代前期末～中期前葉の遺構



第11図 SK 347～352

土坑の概要 当該期の土坑は6区で検出されている。ここでは同時期の遺物包含層が6枚確認されており、それらを層位的に掘り下げる過程で遺構を検出した。第8図に示したように土坑は切り合いながら多数検出された。総数は40基を数える。第9～11図に遺構図を掲げたが、基本的な形態は不整円形か不整楕円形で、径が1mを大きく超えないものがほとんどである。遺構一覧表に示すとおり、土坑内からは土器以外に各種の遺物が出土しているが、遺物を多量に含む遺物包含層を掘り込んで築かれているので、各土坑に本来伴っていたかどうかを判断するのは難しい。

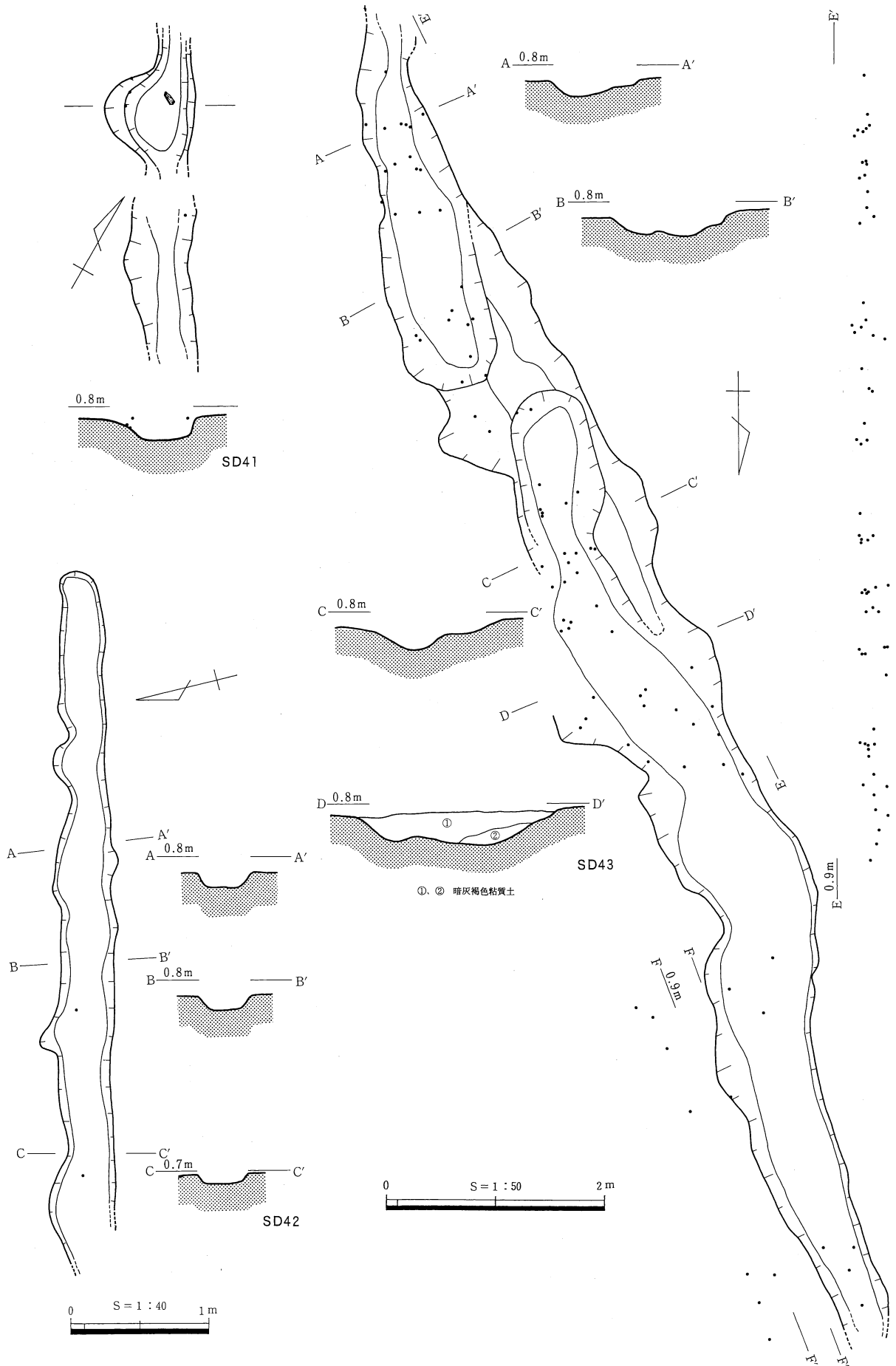
特徴的な土坑としてSK348がある(第11図)。埋土下層に粘土が認められ、平面的には土坑のほぼ全面を覆っている。断面を見ると中央がくぼむように堆積していることが分かる。粘土を除去すると底面に貼り付くように板材が据えられており、粘土の断面形状と併せ考えると柱穴の可能性はある。他に例はないが、柱の固定法をあらわすものとして注目しておきたい。

溝の概要 溝は9条確認している。土坑と同じく6区にのみ認められた。溝単体を観察しても大きな違いはないが、県道5区で検出した同時期の溝と合わせて検討すると興味深い点が浮かび上がってくる⁽¹⁾。これらの溝の方向は基本的に北西から南東方向か、それに直交する方向のものに限られる。

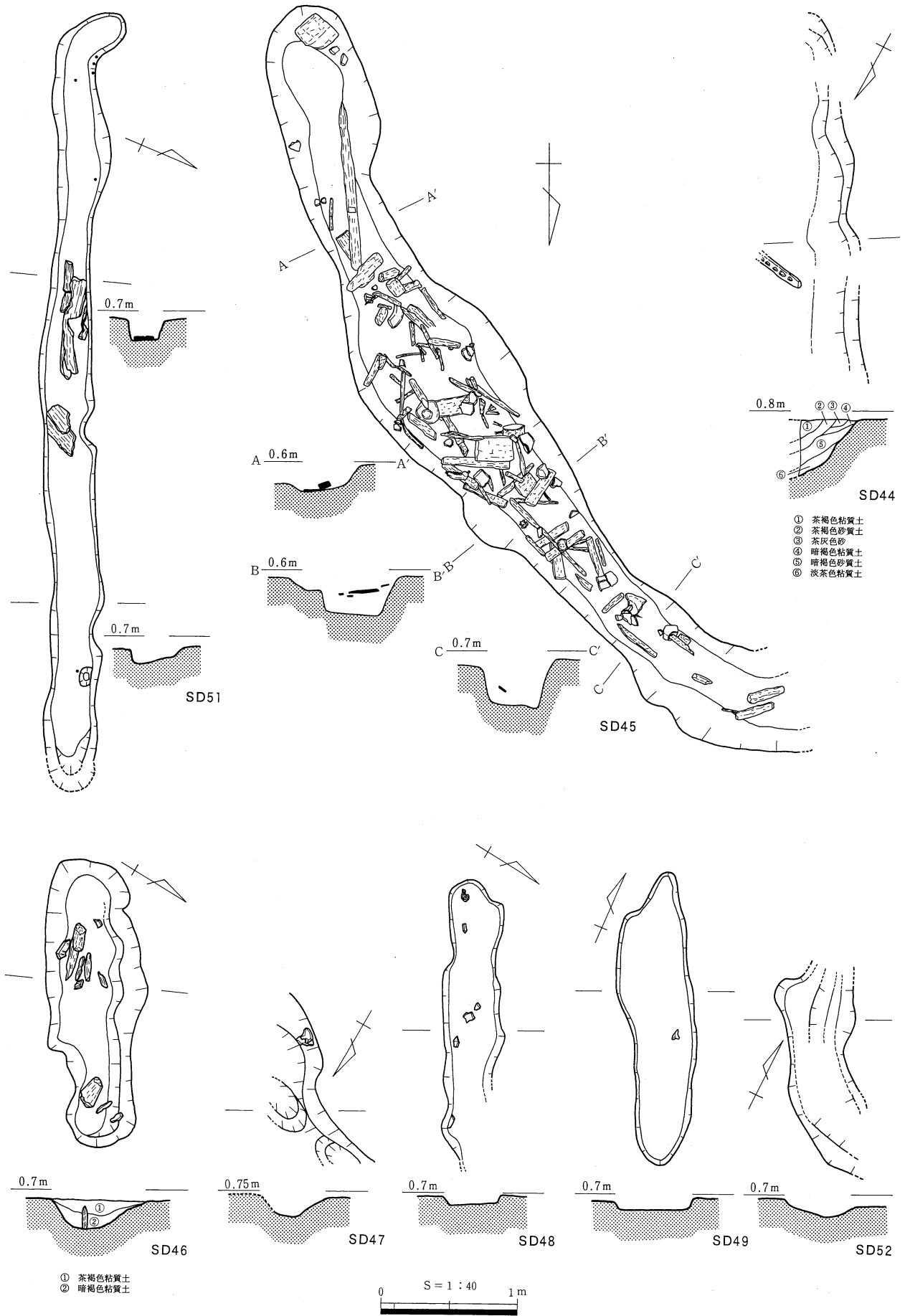
SD1とSD6は屈曲しながらも、その方向性を保っている。おそらくこの段階の溝は区画溝として掘り込まれたものであろう。5区・6区ともに多数のピットを検出している。それらは数の多さもあり建物と認定できたものはないが、おそらく柱穴であり、弥生時代前期末～中期前葉段階には微高地の縁辺に近いところには高床建物が建ち並んでいた景観が想定できる。溝と報告するものはこうした建物群を区画する機能を果たしていたものと考えたい。一定の深さを残しているものは木器や木材が遺存している場合が多く、こうしたなかには建物に伴っていた材も含まれているのかもしれない。SD50は西側部分の一部に人頭大よりも大きい礫がまとまって認められた(第14図)。検出状況からは意図的に積み上げられたものか分からず、調査区境にかかっていることもあり、どのような意味をもつものか分からない。

貝塚の概要 6区南側で面的に確認した(第8図)。南へ行くほど厚く堆積しており、最大で50cmほどになるが、上半は土の割合が多く、中期の土器も含むのでその段階に攪乱されたのであろう。貝塚を構成する貝種は明らかにしえないが、調査時の印象ではカキが多く、細かく碎けて堆積していた。貝塚は微高地縁辺の傾斜部に形成されたものだが、6区では上面の標高0.7m程度なのに対し、貝塚の先端部と思われる7区M層の東端は-1.0mである(第6、7図)。両調査区の境で旧地形が大きく変換するのであろう。

貝塚に伴う遺物 M層もふくめて貝塚より出土した遺物としては、土器・石器・木器・骨角器がある。土器に関しては後述する。石器は環状石斧未製品(193)・石庖丁・大型石庖丁などがある。目立つのは管玉製作に関わる資料で、第197～199図に示した。木器は鋤形としたもの(412)を除けばすべて農具で、直柄平鋤(20)・同未製品(24～26)・組合せ平鋤(48、49)がある。骨角器は意外に少ない。製品と認定できるものは20点弱であるが、銅剣形製品(235)・ヘラ(182)のように目を引くものがある。



第12図 SD41～43

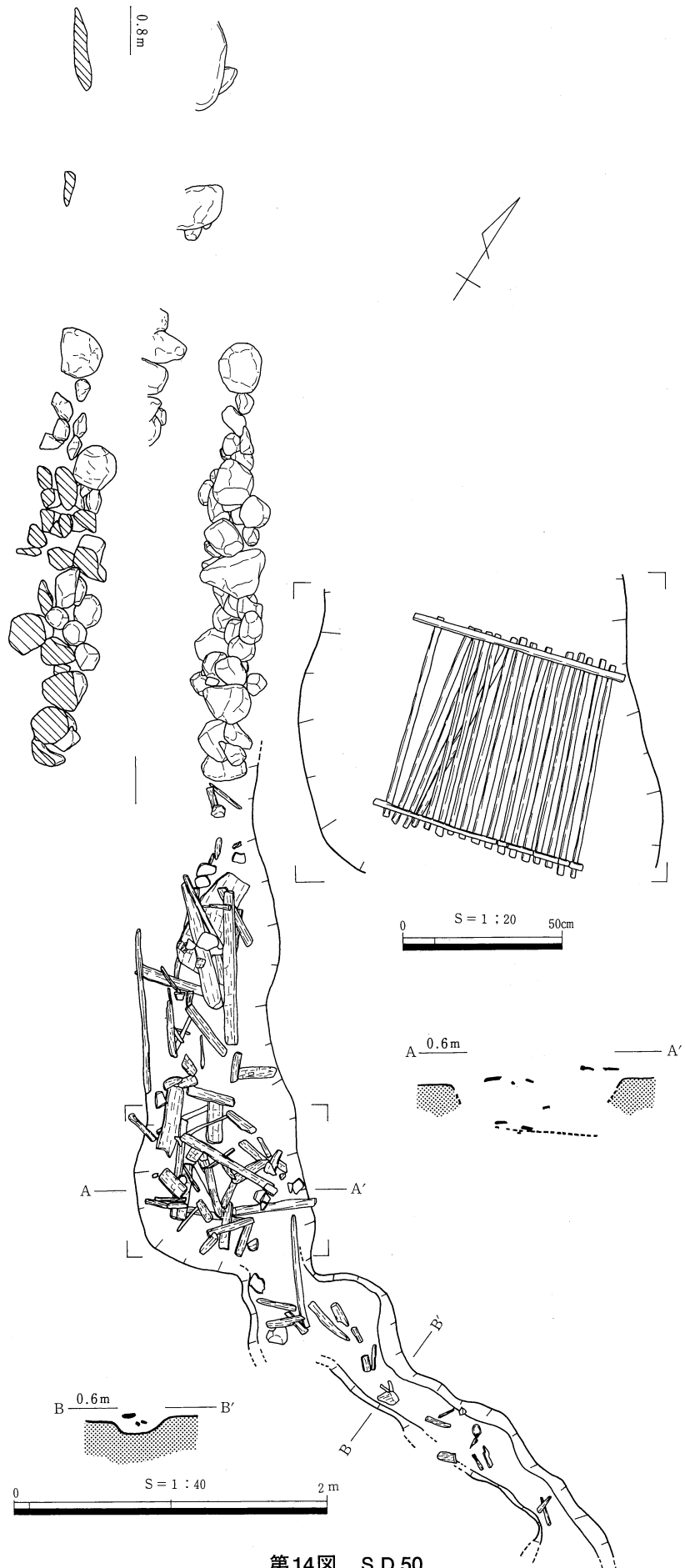


第13図 SD 44~49、51、52

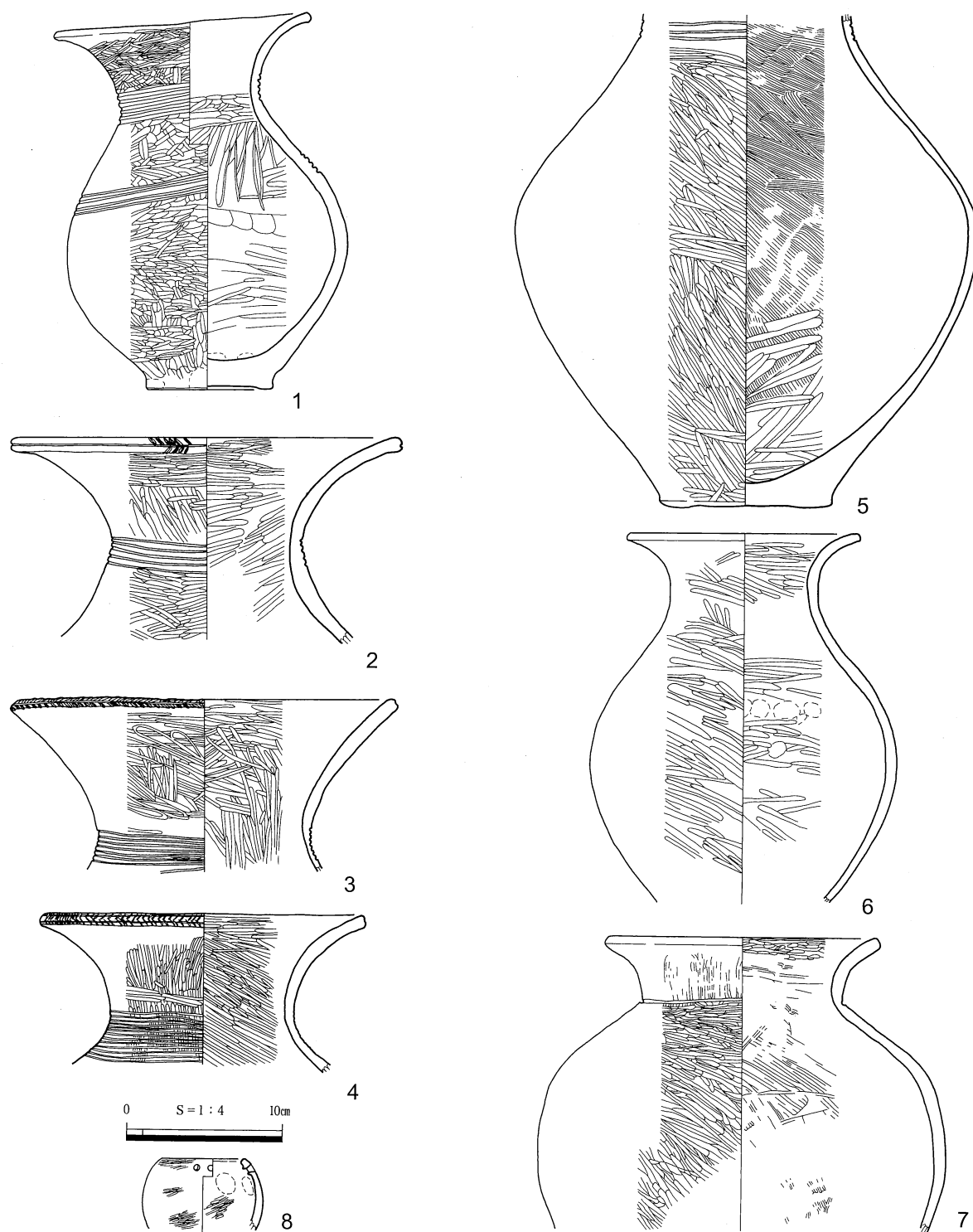
貝塚出土土器 (第15～18図)

第15図は壺である。1～6は外反して大きく開く口縁部を持ち、体部中央に最大径がくる形態のものである。1は全体の残るもので、安定した底部を有する。頸部と肩部にヘラ描き沈線を巡らす。2～4は口縁部に1条の沈線とその上下に方向を違えるキザミを加えた有軸羽状文を施すものである。いずれも肩部以下を失うが、頸部にはヘラ描き沈線を巡らせる。5は口縁部を欠く。体部中央に最大径をもつものであるが、他の体部形状の分かるものに比べ張りが強い印象を受ける。6は底部を失うが、1同様安定した底部をもつものであろう。ヘラ描き沈線は認められない。7は外反して開く口縁部は同じであるが、体部のプロポーシオンがかなり異なる。頸部が短く肩部にかけてすぐに張るもので、頸部には1条のヘラ描き沈線が施される。以上の壺類はいずれも細かなヘラミガキを駆使して器体を調整している。8は無頸壺で、蓋を伴うものと思われ、鈕孔を認める。

第16、17図には甕を掲げた。9～12は如意状口縁で、肩部から底部にかけてすぼまる形態となる。肩部には条数の違いはあるがヘラ描き沈線が巡り、口縁部にはキザミが加えられる。9は全形の分かるものである。口縁部にはキザミ以外に1状の沈線を巡らせ、肩部の沈線の上下には刺突文を連続的に加える。体部外面ハケ調整の後、縦方向のヘラミガキで仕上げる。内面

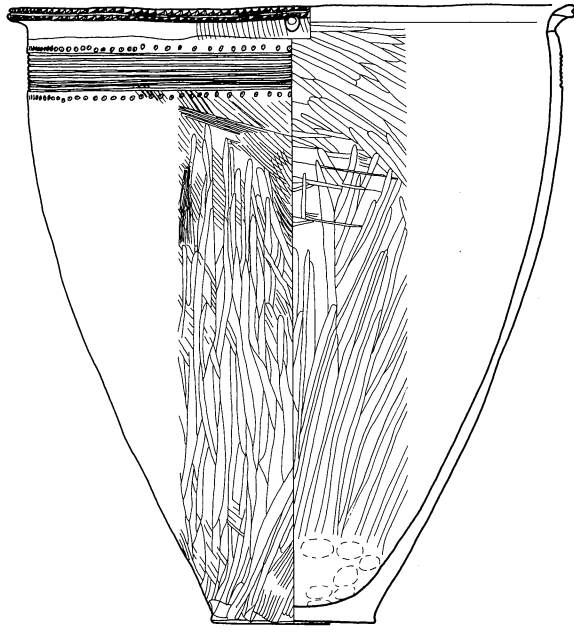


第14図 S D 50

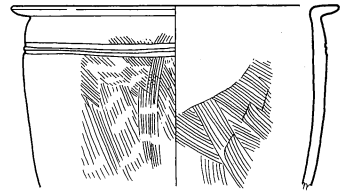


第15図 貝塚出土土器(1)

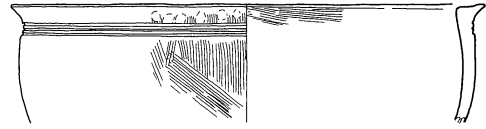
挿図番号	遺構	器高	口径	底径	施文・調整	取上番号
1	貝塚	24.6	(16.6)	8.3	頸部・肩部ヘラ描沈線文、内外面ヘラミガキ	12500
2	貝塚	(12.9)	(25.1)	—	口縁部有軸羽状文、頸部ヘラ描沈線文、内外面ヘラミガキ	47129
3	貝塚	(11.0)	(25.0)	—	口縁部有軸羽状文、頸部ヘラ描沈線文、内外面ヘラミガキ	48188
4	貝塚	(9.9)	(20.8)	—	口縁部有軸羽状文、頸部ヘラ描沈線文、内外面ヘラミガキ	14243
5	貝塚	(32.0)	—	(11.2)	頸部ヘラ描沈線文、内外面ハケ後ヘラミガキ	14965
6	貝塚	(24.0)	(15.0)	—	内外面ヘラミガキ	48195
7	貝塚	(19.1)	(18.0)	—	頸部ヘラ描沈線文、内外面ハケ後ヘラミガキ	47094
8	貝塚	(4.6)	(5.2)	—	内外面ヘラミガキ	48445



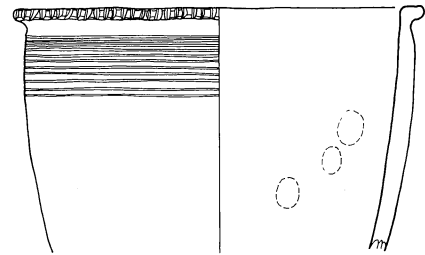
9



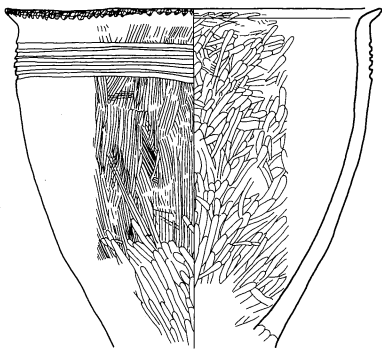
13



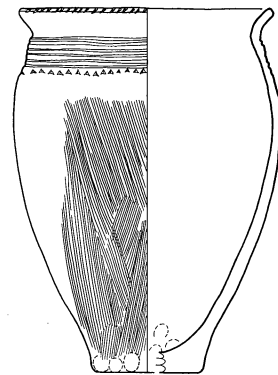
14



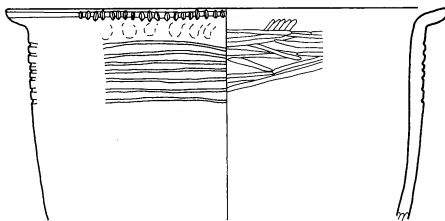
15



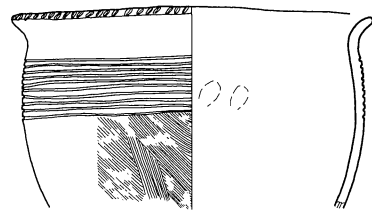
10



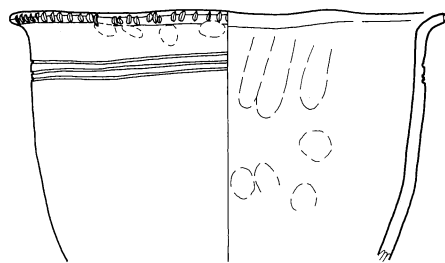
16



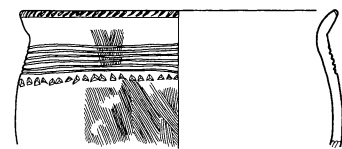
11



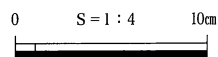
17



12

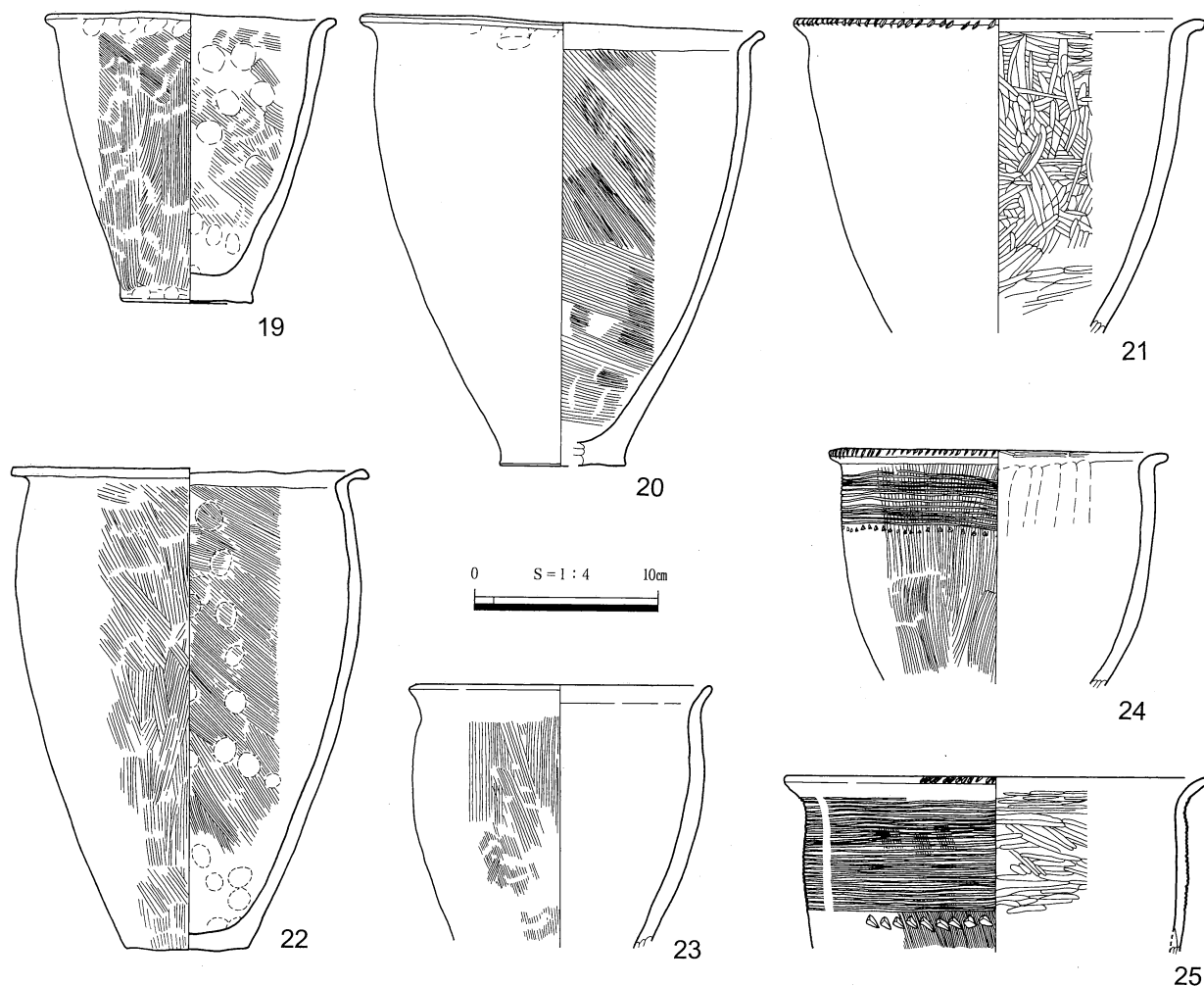


18



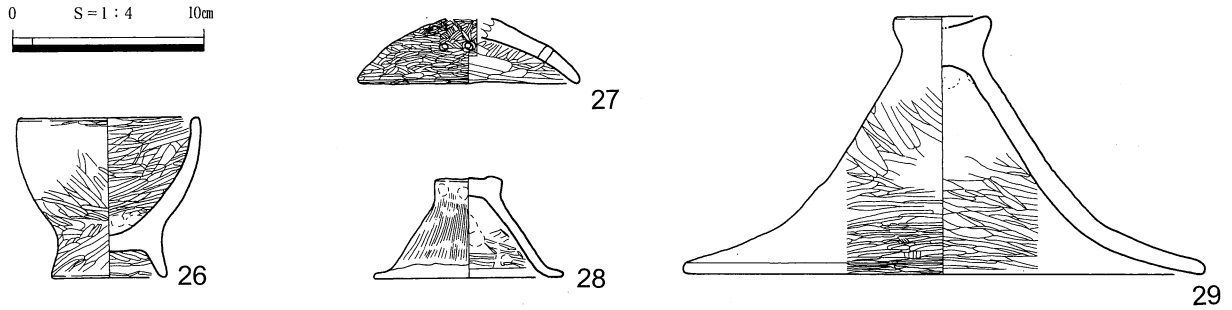
第16 貝塚出土土器 (2)

にもヘラミガキを施している。10はやや小型で、底部を欠くが、9と同じ形態のものであろう。体部内外面の調整は9と同様である。13～15は口縁部が逆L字状を呈するものである。16～18は9～12と体部形状が対比されるもので、肩部の下で体部が張り出す。器体の残り具合によるものかもしれないが、前者のように体部内外面に顕著なヘラミガキを認めない。19～23は体部にヘラ描き沈線を施さないものである。肩部施文がヘラ描きか櫛描



第17図 貝塚出土土器（3）

挿図番号	遺構	器高	口径	底径	施文・調整	取上番号
9	貝塚	32.6	30.1	8.7	口縁部沈線文後キザミ、肩部ヘラ描沈線文・刺突文、内外面ハケ後ヘラミガキ	14248
10	貝塚	(17.9)	(19.8)	—	口縁部キザミ、肩部ヘラ描沈線文、体部内外面ハケ後ヘラミガキ	47090
11	貝塚	(11.0)	(23.2)	—	口縁部キザミ、肩部ヘラ描沈線文、内外面ナデ、頸部ユビオサエ	14158
12	貝塚	(13.0)	(23.0)	—	口縁部キザミ、肩部ヘラ描沈線文、内外面ナデ	15201
13	貝塚	(9.5)	(17.2)	—	肩部ヘラ描沈線文、体部内外面ハケ、口縁部ナデ	49110
14	貝塚	(6.2)	(25.0)	—	肩部ヘラ描沈線文、体部外面ハケ、体部内面ハケ後ナデ、頸部ユビオサエ	48570
15	貝塚	(13.0)	(21.5)	—	口縁部キザミ、肩部ヘラ描沈線文、内外面ナデ	14107
16	貝塚	19.2	(13.5)	5.4	口縁部キザミ、肩部ヘラ描沈線文・刺突文、体部外面ハケ、口縁部・体部内面ナデ	14207
17	貝塚	(10.5)	(19.1)	—	口縁部キザミ、肩部ヘラ描沈線文、内外面ハケ	48199
18	貝塚	(7.0)	(16.6)	—	口縁部キザミ、肩部ヘラ描沈線文・刺突文、体部外面ハケ、口縁部・体部内面ナデ	14191
19	貝塚	16.0	(15.9)	(7.2)	口縁部ナデ、体部内外面ハケ	15135
20	貝塚	24.9	(22.3)	(7.0)	口縁部ナデ、体部内外面ハケ	15369
21	貝塚	(17.2)	(22.5)	—	口縁部キザミ、体部内外面ハケ	14230
22	貝塚	26.5	(19.7)	6.6	体部内外面ハケ、口縁部ナデ	14184
23	貝塚	(14.5)	(16.2)	—	体部外面ハケ、口縁部・体部内面ナデ	48194
24	貝塚	(12.6)	(18.5)	—	口縁部キザミ、肩部櫛描沈線文・刺突文、体部外面ハケ、口縁部・体部内面ナデ	15322
25	貝塚	(9.5)	(23.2)	—	口縁部キザミ、肩部櫛描沈線文・刺突文、体部外面ハケ、口縁部・体部内面ハケ後ナデ	15401



第18図 貝塚出土土器（4）

挿図番号	遺構	器高	口径	底径	施文・調整	取上番号
26	貝塚	(8.4)	(9.4)	6.0	体部・脚部内外面ヘラミガキ	47870
27	貝塚	(3.4)	(11.4)	—	内外面ヘラミガキ	47719
28	貝塚	5.2	(10.0)	(3.5)	外面ハケ、内面ユビオサエ・ヘラミガキ	47749
29	貝塚	14.6	(27.0)	(4.8)	内外面ヘラミガキ	47092

きかを指標として前期と中期を区別しているのであるが、こうした無文のものはどちらに属するものか判断できない。21のみ口縁部にはキザミを加える。

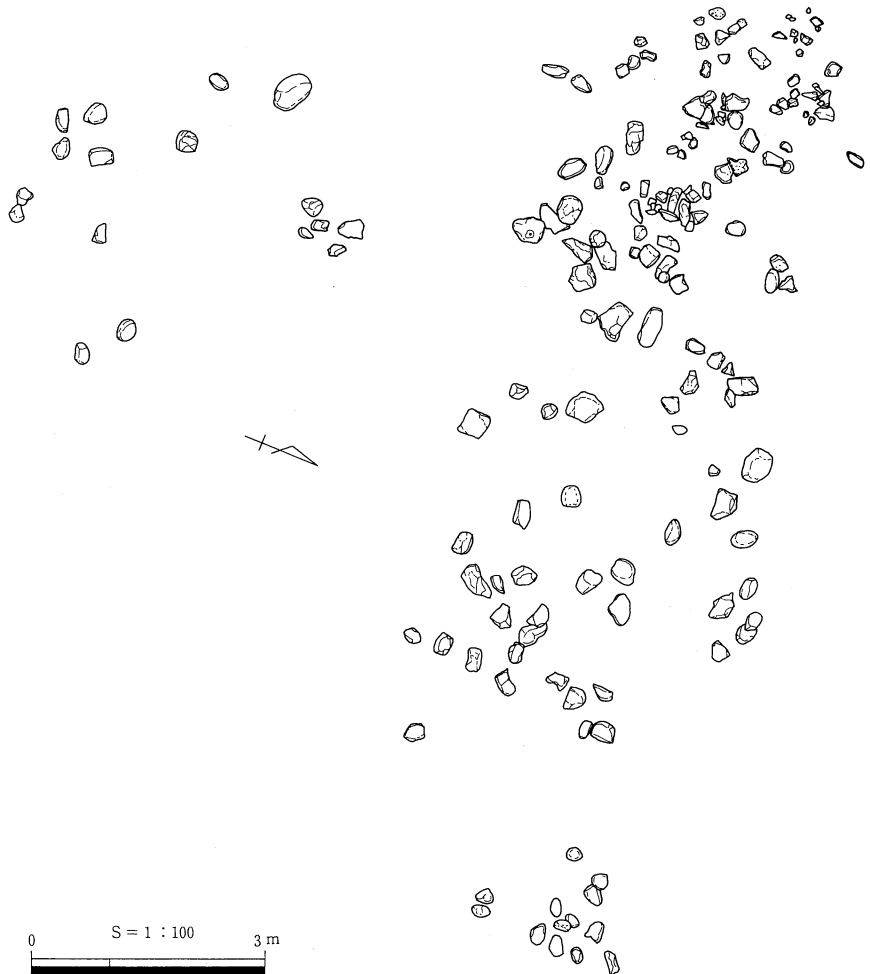
24、25は櫛描き沈線を肩部に巡らせる。口縁部はキザミ、体部形態はともに底部にかけてすぼまるものである。

26は鉢としておく。小型で、高台状の脚をもつ。

27～29は蓋である。27が壺用蓋、29が甕用蓋であろう。27は上端部を欠失する。29は笠形の形態で、上端部には面をもつ。28は形態的には29と同様だが、口径の小ささから壺用としておく。

その他の遺構 集石遺構としたものがある。第19図に示した集石8は、7区西側で検出されたもので、M層掘り下げに伴って確認された。人頭大あるいはそれ以上の礫を並べたもので、並べ方自体に規格性は認められない。礫は円礫もあれば角礫もあり、採取場所が1ヶ所ではないものと考えられる。なかには穿孔貝による巣穴を認めるものもあり、海岸から運んできたものもあるようである。

礫の分布はM層の範囲を超えず、貝塚形成時に足場を確保するための踏み石として置かれたものではないだろうか。



第19図 集石8

第2章 遺構の概要

註

(1) 湯村 功編 2000『青谷上寺地遺跡1』(財)鳥取県教育文化財団。

(2) 北浦弘人編 2000『青谷上寺地遺跡2』(財)鳥取県教育文化財団。

新名	旧名	調査区	グリッド	最大長(m)	最大幅(m)	最大深(m)	検出レベル(m)	出土遺物
SK313	SK293	6区	G28	1.83	1.15	0.17	0.718	P B 剥片
SK314	SK294	6区	H28	(1.65)	(1.35)	0.22	0.817	P S 砥石
SK315	SK295	6区	H28	1.2	0.95	0.19	0.74	B 剥片、刺突具
SK316	SK296	6区	H28	(1.03)	(0.6)	0.14	0.74	S 砥石
SK317	SK301	6区	H28	(2.0)	(1.1)	0.21	0.687	P
SK318	SK302	6区	I27	1.12	0.99	0.28	0.836	P S 剥片(ガラス質安山岩)
SK319	SK303	6区	I27	0.43	0.36	0.12	0.723	B 切断痕のある鹿角
SK320	SK304	6区	I27	0.62	0.47	0.07	0.731	W 不明木製品
SK321	SK306	6区	I27	(0.92)	(0.67)	0.11	0.75	P
SK322	SK305	6区	I27	(1.25)	(0.71)	0.2	0.7	S 石鏃、蔽石
SK323	SK307	6区	I27	(1.6)	(0.97)	0.32	0.665	S 管玉製作関係、石庖丁未製品、蔽石、台石、剥片(その他石材)、剥片(サヌカイト、ガラス質安山岩)、素材剥片(ガラス質安山岩)
SK324	SK308	6区	H28	1.1	0.58	0.174	0.694	B 骨針
SK325	SK311	6区	H28	(1.08)	(0.52)	0.67	0.631	P S 楔形石器(ガラス質安山岩)、台石、微細剥離剥片(その他石材)、碎片(サヌカイト)、剥片(ガラス質安山岩)
SK326	SK309	6区	H27	2.23	0.46	0.09	0.736	P 切断痕のある鹿角、加工痕のある鹿角、骨針、加工途上品
SK327	SK310	6区	H27	0.35	0.11	0.182	0.73	P
SK328	SK312	6区	H28	0.63	0.59	0.102	0.643	P
SK329	SK315	6区	H28	(0.7)	(0.53)	0.514	0.759	P
SK330	SK316	6区	H28	0.66	0.72	-	-	P S 石鏃
SK331	SK314	6区	H28	0.81	0.73	0.127	0.657	B ヘラ?
SK332	SK313	6区	H28	0.85	0.77	0.15	0.644	P
SK333	SK322	6区	H27	0.52	0.33	0.105	0.647	P
SK334	SK325	6区	G28	1.07	0.83	0.095	0.69	P
SK335	SK326	6区	G28	0.84	0.6	0.256	0.692	S 碎片(サヌカイト)、楔形石器(サヌカイト)
SK336	SK329	6区	H28	0.94	0.78	0.063	0.673	S 碎片(ガラス質安山岩)
SK337	SK332	6区	H28	0.91	0.86	0.227	0.667	P
SK338	SK331	6区	G28	(0.88)	(0.5)	0.165	0.632	B 切断痕のある鹿角
SK339	SK328	6区	H27	0.5	0.36	0.269	0.686	P S 蔽石
SK340	SK333	6区	H28	0.89	0.79	0.13	0.64	B 縦断半裁加工品
SK341	SK337	6区	I27	0.88	0.46	0.166	0.569	P
SK342	SK334	6区	H28	3.08	1.64	0.09	0.64	P
SK343	SK335	6区	H28	(1.29)	(0.86)	0.96	0.646	S 剥片(ガラス質安山岩)
SK344	SK336	6区	G28	0.91	0.52	0.125	0.733	S 楔形石器(サヌカイト)
SK345	SK338	6区	G28	(1.84)	(0.44)	0.19	0.587	B 剥片、加工途上品
SK346	SK340	6区	G28	(1.6)	(0.52)	0.329	0.708	P
SK347	SK339	6区	G28	1.05	0.51	0.078	0.608	P
SK348	SK341	6区	G28	0.52	0.36	0.16	0.631	S 碎片(その他石材)
SK349	SK344	6区	G28	(1.05)	(1.03)	0.121	0.631	P
SK350	SK343	6区	G28	0.48	0.46	0.206	0.607	P
SK351	SK345	6区	H28	0.76	0.52	0.098	0.444	P
SK352	SK346	6区	G28	0.82	0.26	0.121	0.468	P
SD41	SD51	6区	H28	(2.25)	(0.65)	0.162	0.54	P S 碎片(黒曜石)
SD42	SD57	6区	G28	(5.06)	(0.56)	0.134	0.696	P S 蔽石、剥片(サヌカイト)
SD43	SD53	6区	H28	(10.0)	(1.65)	0.3	0.63	B ヘラ
SD44	SD52	6区	H28	(2.6)	(0.43)	0.396	0.728	P S 管玉製作関係、蔽石、台石、砥石、器種不明(サヌカイト)、器種不明、剥片(黒曜石)、碎片(黒曜石)
SD45	SD56	6区	H28	(6.8)	(1.2)	0.36	0.727	B W 鏹石、切断痕のある鹿角、刺突具、釣針、ノ字状ヤス 不明木製品、漆塗膜
SD46	SD55	6区	H28	2.1	0.7	0.275	0.655	D 土笛、紡錘車
SD47	SD54	6区	H28	(1.06)	(0.32)	0.11	0.709	P S 楔形石器(黒曜石)
SD48	SD58	6区	H28	(2.05)	(0.45)	0.095	0.694	W 不明木製品
SD49	SD59	6区	H28	2.16	0.56	0.075	0.658	P B 鏹石、加工痕のある歯牙
SD50	SD62	6区	F28	東西(2.98)	(1.05)	0.43	0.5	W 不明木製品
SD51	SD61	6区	G28	5.56	0.38	0.278	0.758	P B 蔽石 鏹石 農具、農具の素材、建築部材、不明木製品
SD52	SD60	6区	H28	1.5	0.58	0.185	0.715	P 剥片
焼土74	焼土99	6区	H28	0.5	0.25	0.08	0.812	
焼土75	焼土102	6区	H28	0.32	0.31	0.4	0.78	
焼土76	焼土103	6区	H28	0.5	0.22	0.12	0.76	
焼土77	焼土104	6区	H28	0.18	0.16	0.3	0.76	
焼土78	焼土105	6区	G28	0.2	0.32	0.3	0.76	
焼土79	焼土107	6区	G28	0.24	0.08	0.18	0.76	
集石8	集石14	7区	D29~D30	(13.5)	(11.25)	1.375	-0.274	

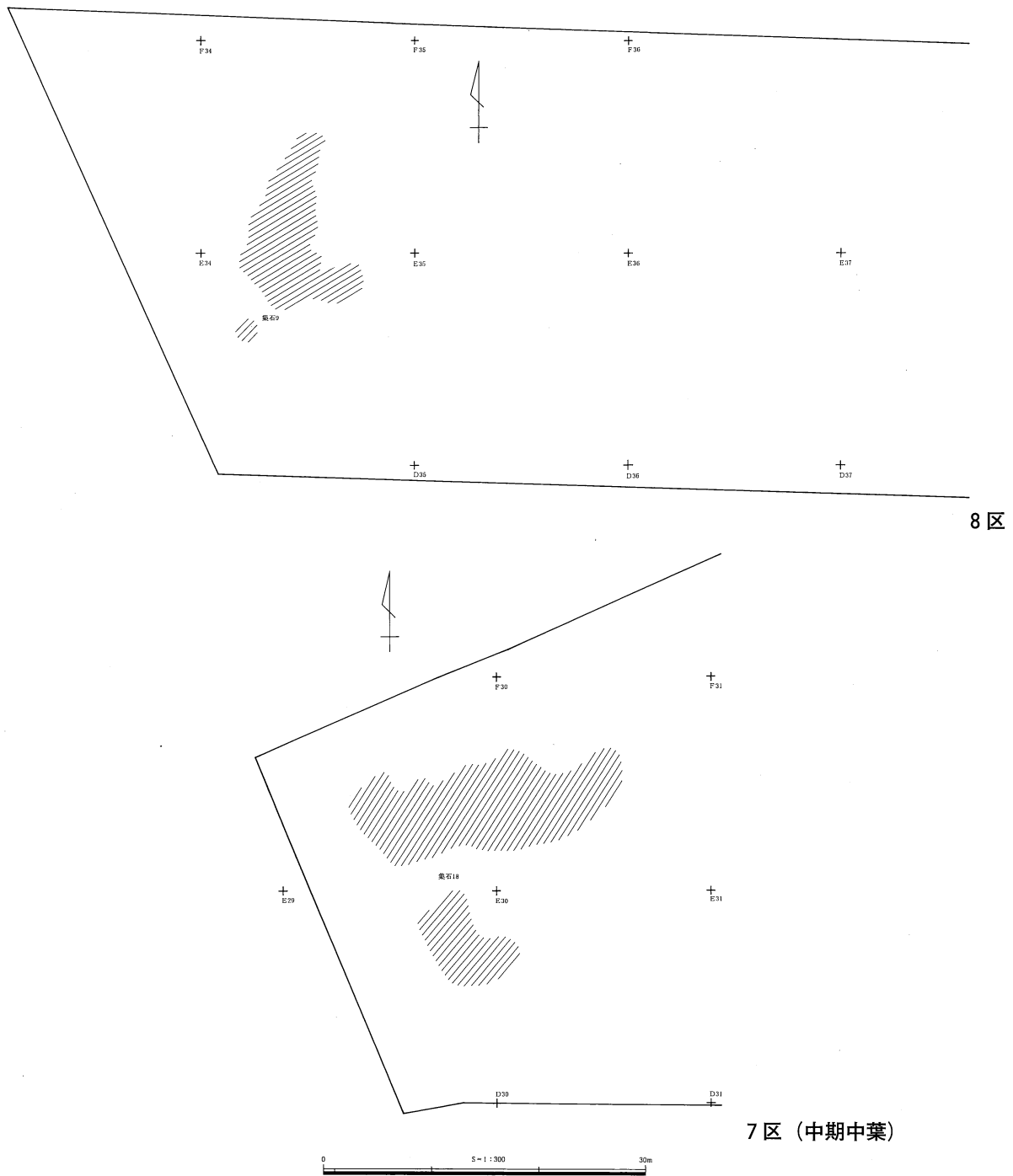
表1 前期末～中期後葉遺構一覽表

第2節 弥生時代中期中葉～後葉の遺構

SD 27 (第24～31図) 7区で検出された溝である。南西から北東方向に延び調査区外へと続く。平成11年度に調査された国道調査区3区で確認された溝の続きであり⁽¹⁾、同一遺構名を付している。

第24図に平面図を掲載した。検出した範囲は西側肩で18m、東側肩で12mを測る。最大幅は17mと国道3区検出部分の最大幅が5.3mなのに比べかなり幅広となっている。底面の標高は-0.8mで、部分的に-1.0mに及ぶ。国道3区とほぼ同じレベルである。

護岸施設の構造 このような溝の中に大きく見て8列の護岸施設が築かれていた。これらの基本的な構造は板材を横長に並べ杭で固定するもので、国道3区検出部分と同じである。便宜上東側からアルファベットを付した

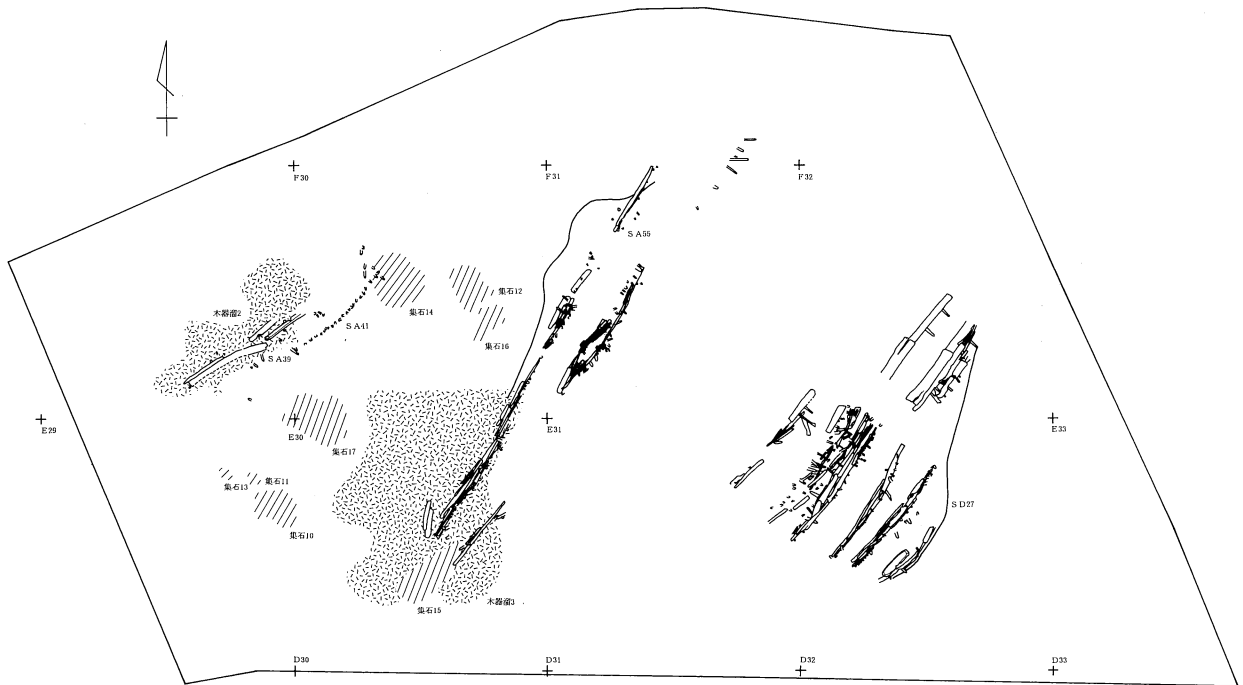


第20図 弥生時代中期中葉～後葉遺構配置図(1)

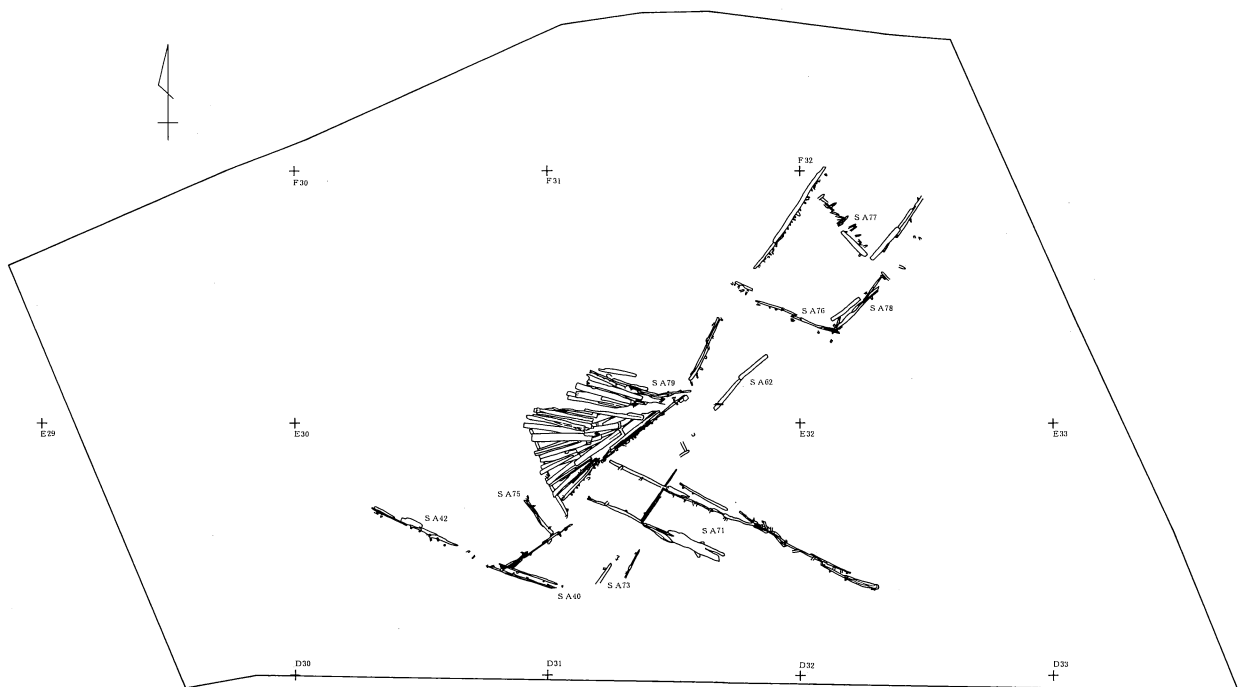
うえで、第25図に掲げた立面図とともに説明を加える。

A-A'間はおよそ3mほどを検出した。幅20cmの板材を一部重なるように立て並べ、杭で固定している。杭は溝を基準に見た場合、板材の外側を中心に打たれている。平面的には溝の肩に沿って湾曲するように並べられていることが分かる。板材に接して長さ1.4mという大型の槽が認められ、護岸材に転用された可能性もある。

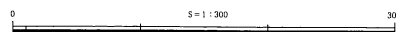
B-B'間はおよそ5m分を検出している。A-A'間と同じ規模の板材を用いており、杭の打ち込みは板材



7区 (中期後葉第1段階)



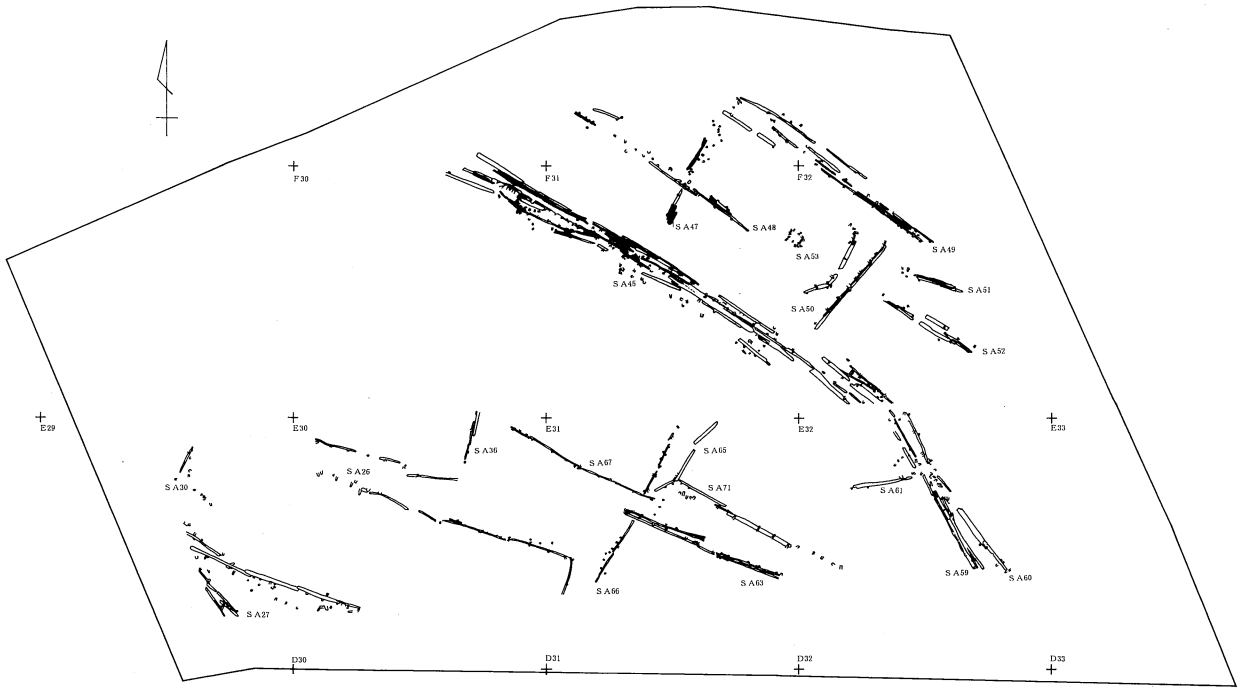
7区 (中期後葉第2段階)



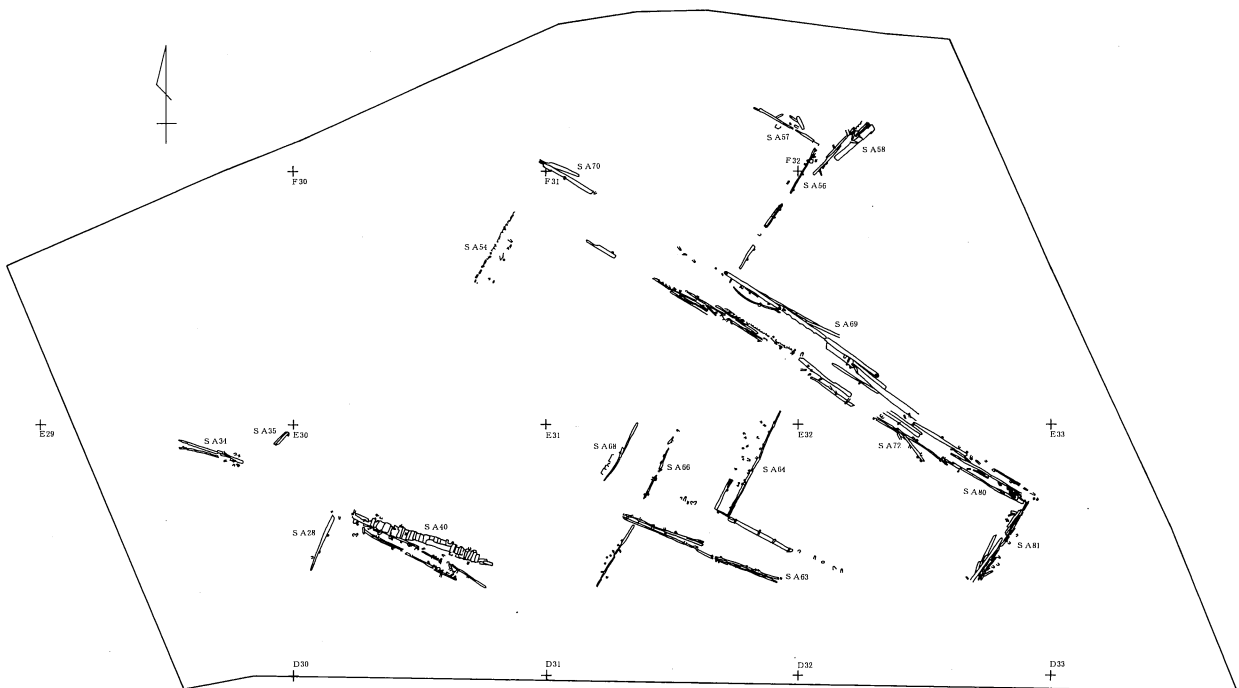
第21図 弥生時代中期中葉～後葉遺構配置図(2)

の外側を基本とする。

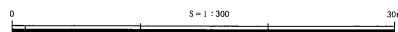
C-C' 間は2列分とみた方がいいかもしれない。溝の外側に位置するものは、やはり長さ2m、幅20cm程度の板材を横長に立て並べ、杭で固定する。板材の延びる方向からしてD-D'間と同じ列のものであろう。両者を合わせて10mほどを検出したことになる。杭の打ち込みは板材の外側が基本で、内側にも少数認められる。D-D'間の板材はかなり倒れていた。



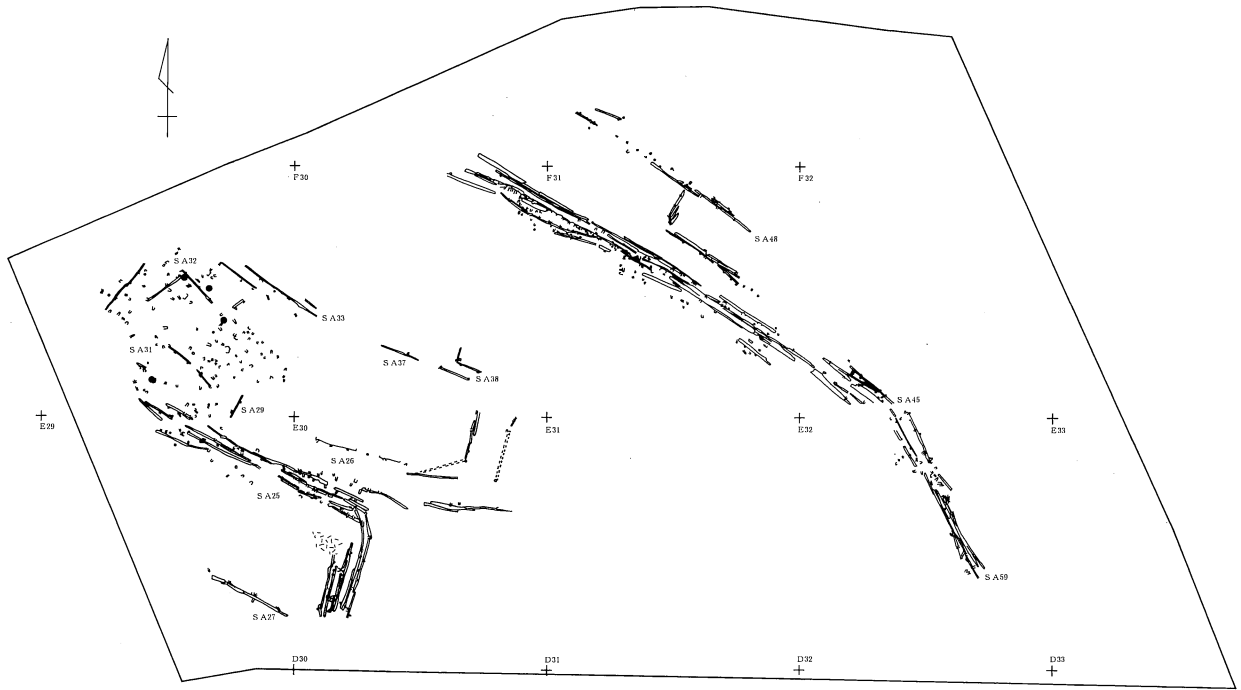
7区 (中期中葉第3段階)



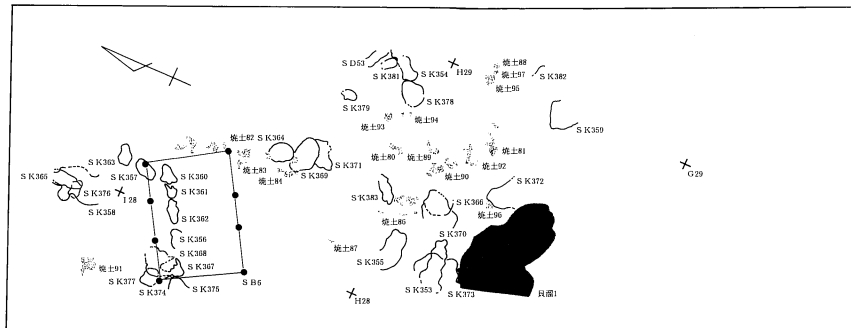
7区 (中期中葉第4段階)



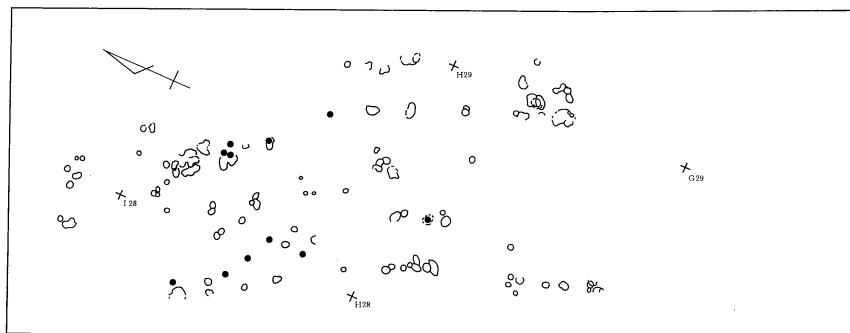
第22図 弥生時代中期中葉～後葉遺構配置図 (3)



7区 (中期後葉第5段階)



6区 (ピット以外)



6区 (ピットのみ)

0 S=1:300 30m

第23図 弥生時代中期中葉～後葉遺構配置図 (4)

C-C'間のもう1列は、長さ2.5m、幅40cmという大きな板材が用いられている。国道3区部分で使用されたものより少し小さいとはいえ、大型の板材を護岸に用いるというSD27の特徴をよく表している。内側からの圧力によるものか、かなり傾いていた。

E-E'間も大型の板材を使用している。内側からの圧力によるものと思われるが、板材は完全に倒れており、固定するために外側に打たれた杭も大きく傾いている。C-C'間、E-E'間ともに大型板材の列が南側へ続かないが、E-E'間と同方向のG-G'間に固定用の杭が残っており、地中深く打たれたそれらの杭の地上部分がかかなりの高さをもつことから、ここにつながっていた可能性が高い。両者合わせて11.5mの長さを確認したことになる。

F-F'間は少なくとも2列分あると思われる。板材は倒れているものが多いが、長さ2m、幅20cm程度のものを部分的に重ねあわせ、杭で固定したものである。第25図に見るように、地上部分のかかなり高い杭が数本残っており、C-C'間の続きがここに延びていた可能性がある。

H-H'間は5mほどを検出した。北側への続きは認められなかった。かなり乱れているが、長さ1.5m、幅20cm程度の板材が用いられている。固定用の杭は外側に打たれるものが基本となっている。

上記の護岸施設は溝の東側に連なるものであり、以下に記すものは溝の西側肩に築かれたものである。

I-I'間には部分的に2列分認められ、うち1列はJ-J'間とつながるのであろう。長さ2m、幅20cm程度の板材を横に立て並べ、杭で固定するあり方は溝東側の護岸と変わらない。固定用の杭は密に打たれており、部分的に集中しながら溝の内側にも顕著に認められる。北側では板材は残っておらず、杭のみを検出した。今回検出した護岸施設の中では最長の20mに及ぶ範囲を確認した。

K-K'間とL-L'間とは同じ列のものである。SD27西側肩に沿うもので、17mの長さを確認した。護岸に用いられた板材は幅20cm程度と他の列と同様である。長さは一定でなく、3mに及ぶものも認められた。固定用の杭は多く打ち込まれ、溝の内側に偏る。

以上のように護岸施設を概観してみると興味深いことに気づく。板材を固定するために打たれた杭は、東側の一群では溝を基準とした場合の外側に偏っているが、西側の一群では逆に内側に偏る。すなわちすべての護岸列が西側からの圧力に耐えるよう築かれているのである。SD27という溝の肩を守るためのものであったならば、東側の一群の杭は逆側に打たれているのが自然である。これら全体はSD27という溝の中に収まり、方向も一致するので無関係とは思えないが、単なる溝の護岸とするには、なお検討が必要である。

SD27に伴う遺物 土器を除いた遺物の中で顕著であったのは木器である。図示したものを列挙すれば、斧直柄未製品(17)・直柄平鍬(22)・田下駄(66)・カセ(94)・紡錘車(97、105、106)・アカトリ(123)・刀剣装具(160)・匙(218、220)・匙未製品(229)・皿形容器(246)・椀形容器(255)・蓋(267、333、334)・曲物(369)・絵画のある琴板(398)・武器形(406)・盾把手(426)・腰かけ(433)である。骨角器ではヤス(77)・針(186)を示したほか、4点出土したト骨の2点を図示している(319、330)。国道3区ではSD27が埋没していく過程でト骨の意図的な集積が確認されており興味深い⁽²⁾。石器は意外に少なく、砥石が10点出土したことが目立つくらいである。3点図示した(77、81、82)。

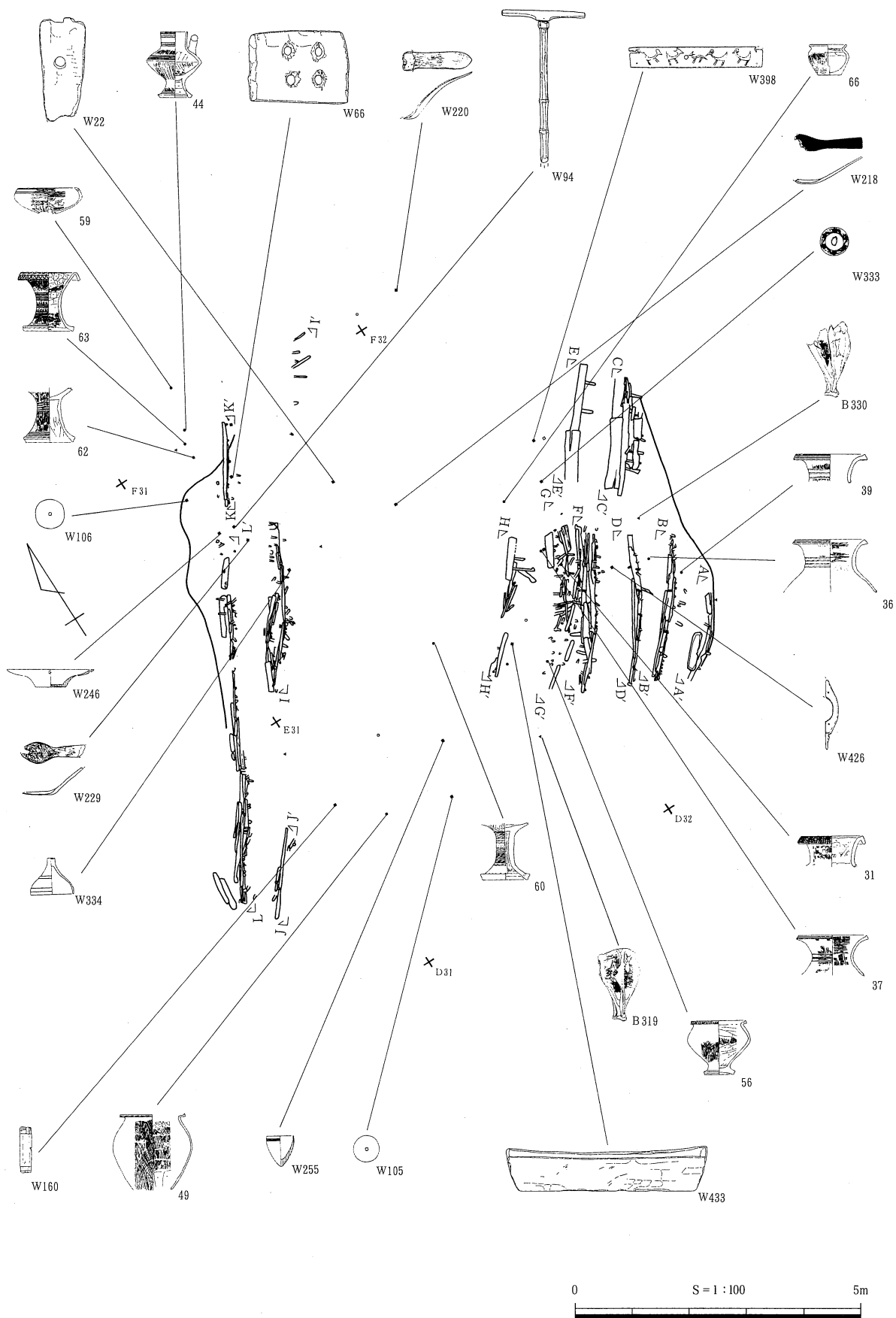
SD27出土土器(第26～31図) 第26、27図に壺を示す。39までは口縁部が広く外反するものである。

30～32は口縁部への加飾が見られる。30は口縁端部を下垂させそこへ円形浮文を貼り付け、キザミを施す。肩部以下には波状沈線を確認できるだけでも6段にわたり巡らせる。体部の張りは大きいようである。31も口縁端部を下垂させキザミを加える。32は上下に拡張された口縁端部にキザミを施す。

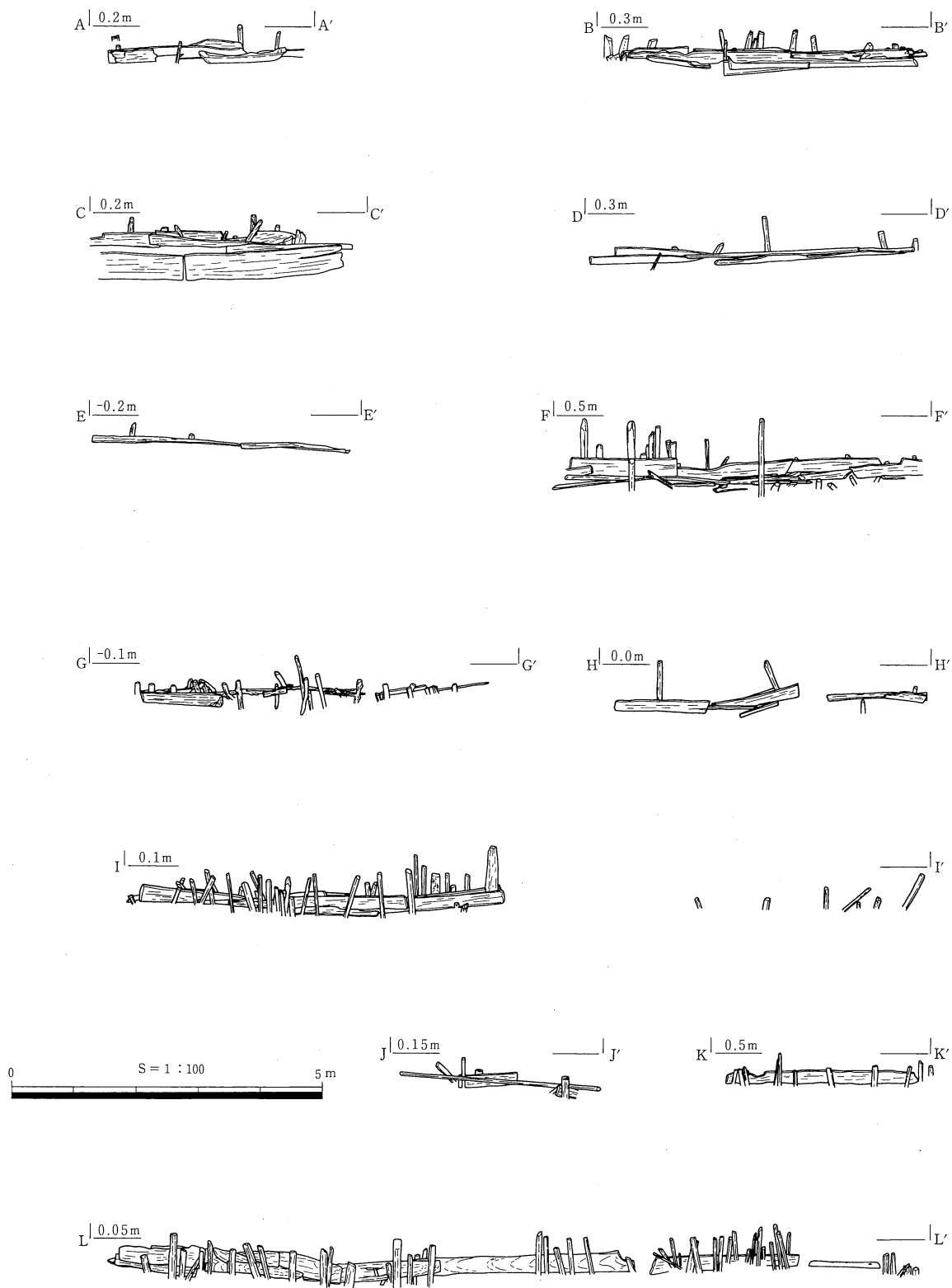
壺は完存するものがないため、全体の形状を比較することができない。口縁部の形態差を中心に記述する。33は上下に拡張される端部が強く内傾する。38は直立気味に頸部が立ち上がり、口縁部は水平に開く。その他のものは外反して開く口縁部の端部は控えめに拡張されている。

40は体部が算盤玉状に張る器形のもので、下位の遺物包含層からの混入か。

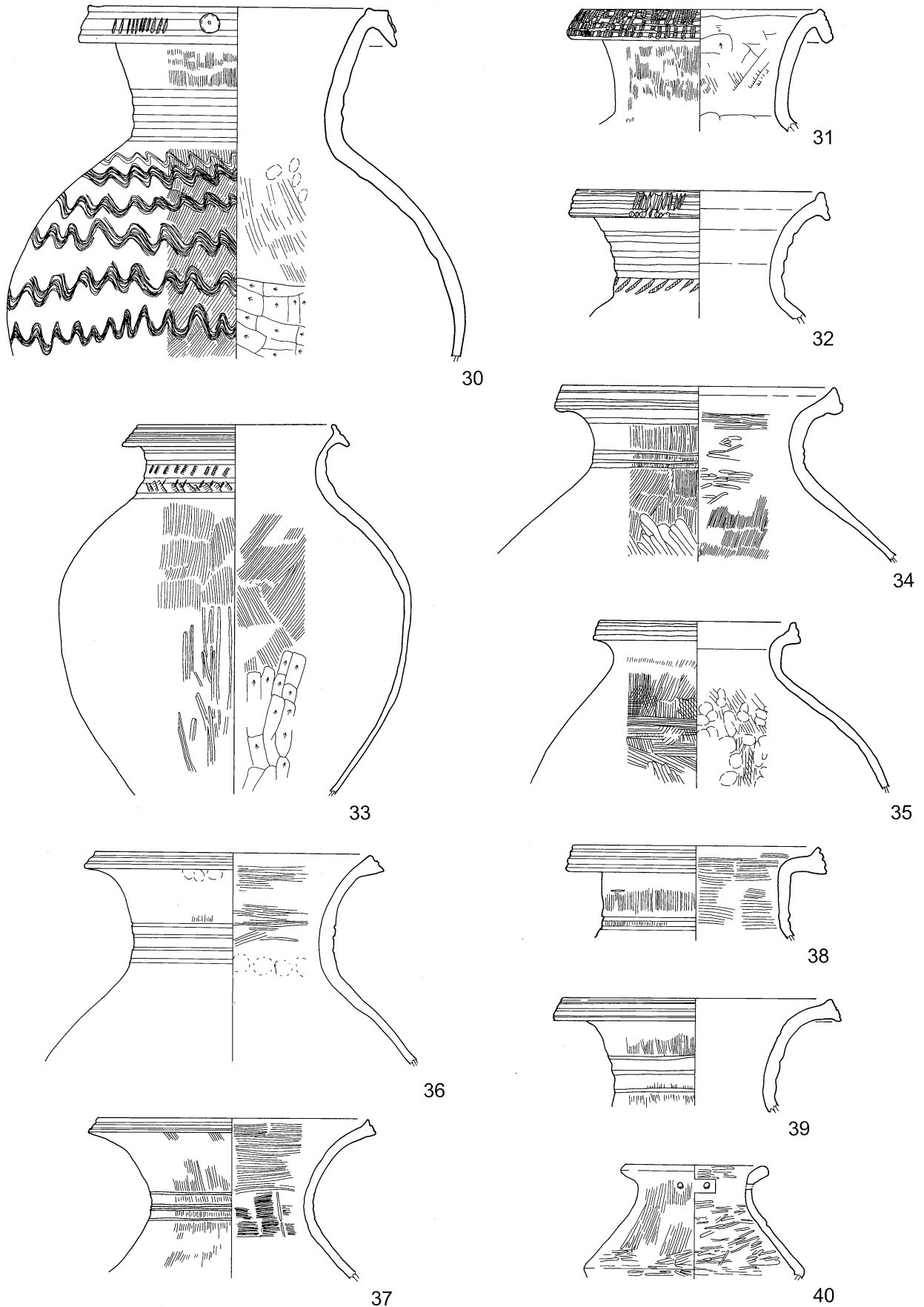
第27図は水差形土器である。本遺跡においては比較的多数認められる器種である。いずれも直口する口縁部を



第24図 S D 27



第25図 SD 27 立面図



第26図 S D 27出土土器 (1)

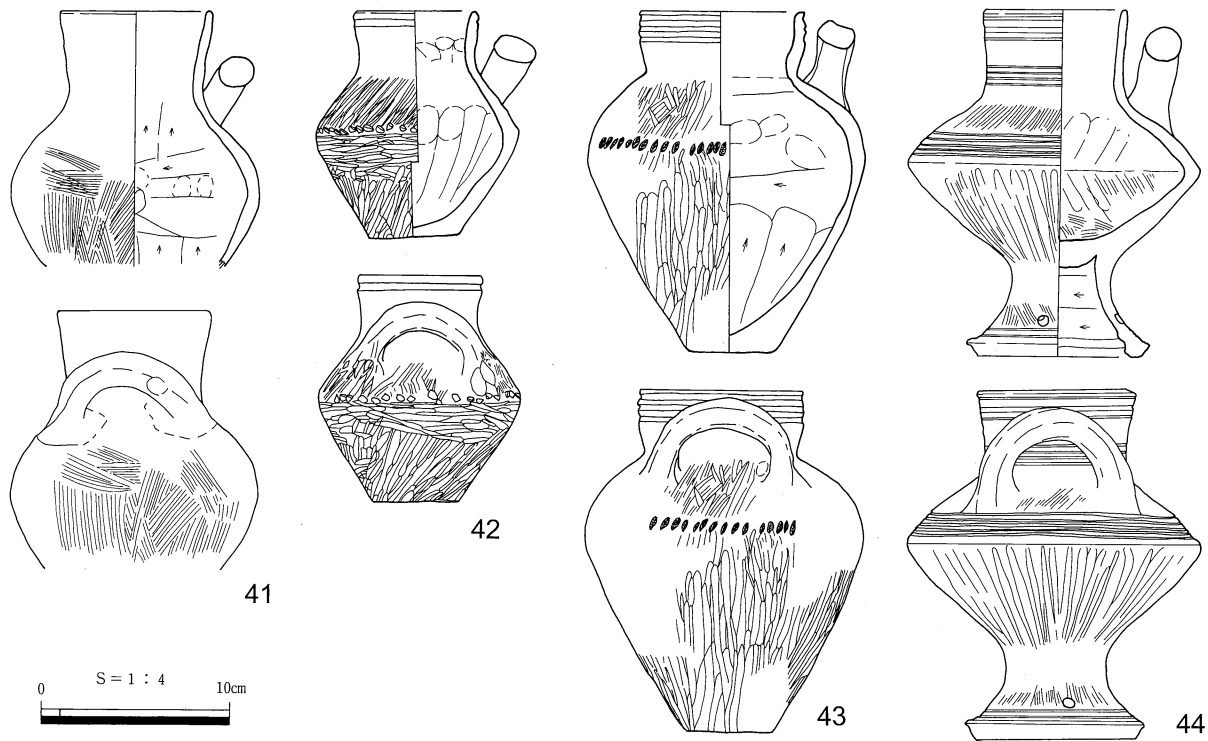
もち、肩部に横位の把手が付く。41は外面ハケ調整で、装飾は加えられない。42は体部中央に最大径をもちそこが屈曲する形態である。外面縦方向のヘラミガキを中心として、最大径位置には横方向のヘラミガキと刺突文を加えることにより体部調整にアクセントをつけている。43は肩部が大きく張る。42同様、最大径位置に刺突文を巡らせる。44は算盤玉状に体部が強く屈曲し、凹線文で飾るとともに、脚台部を有する。

第28、29図に甕を掲げた。45は口縁部形態が異質で、断面三角形の突帯状となる。頸部から体部上半にかけて沈線と波状沈線で飾る。46、47は口縁部にキザミ、円形浮文を認めるものである。

48～51は口縁端部の拡張が弱いものである。49を除いて体部上半あるいは中央に刺突文を巡らせる。

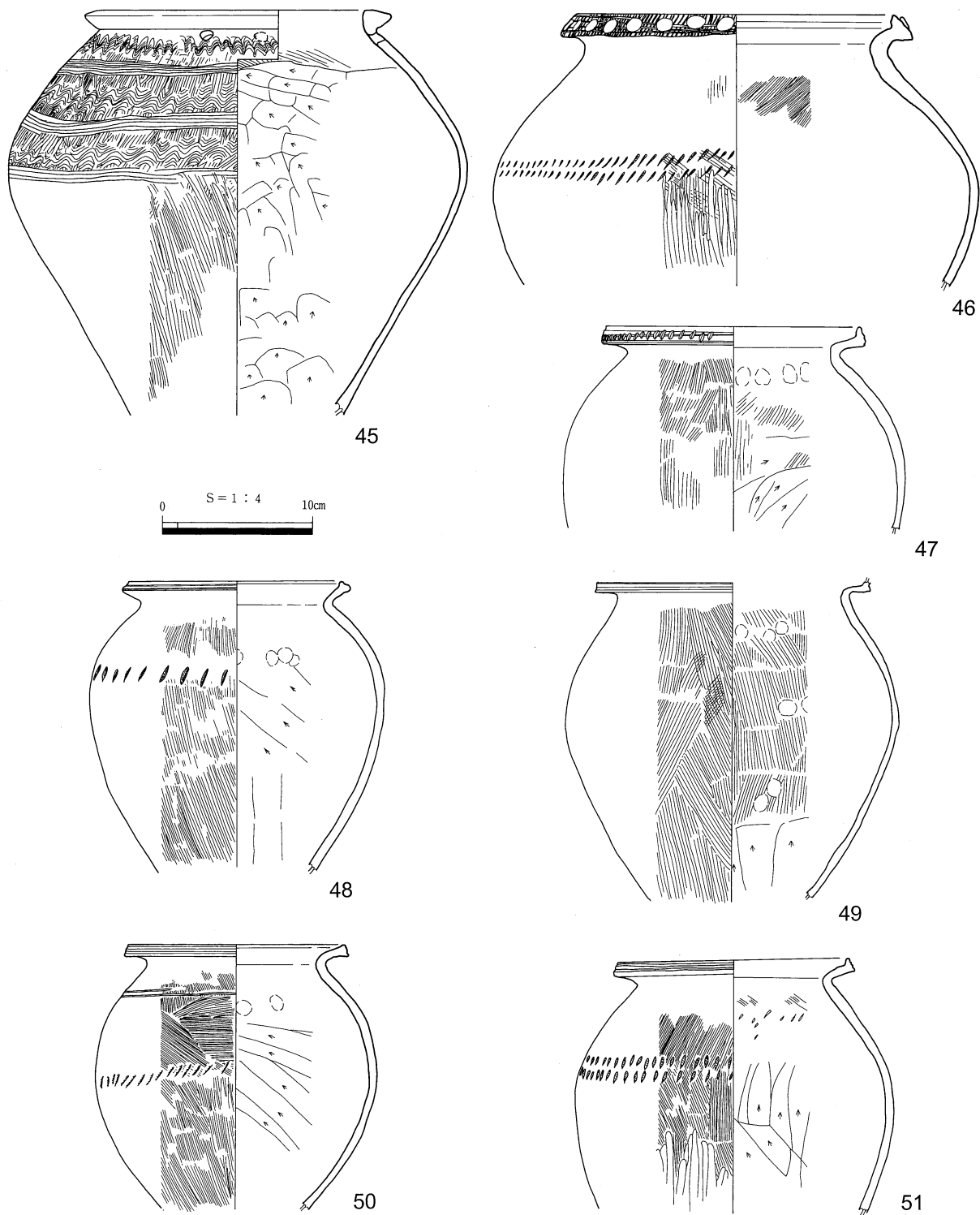
52～55は上記のものに比べ口縁端部を広く拡張する。52は大型品で、53は拡張が弱いように見えるが、上下への広がり方が明確である。55はとくに上方へ顕著に拡張する。

57～62は高杯である。57は屈曲した後大きく外反する杯部をもち、脚柱部の径は細めである。58は皿形の杯部、59は強く内傾する杯部が特徴である。60以下は脚部のみ残っており、杯部形態は不明である。



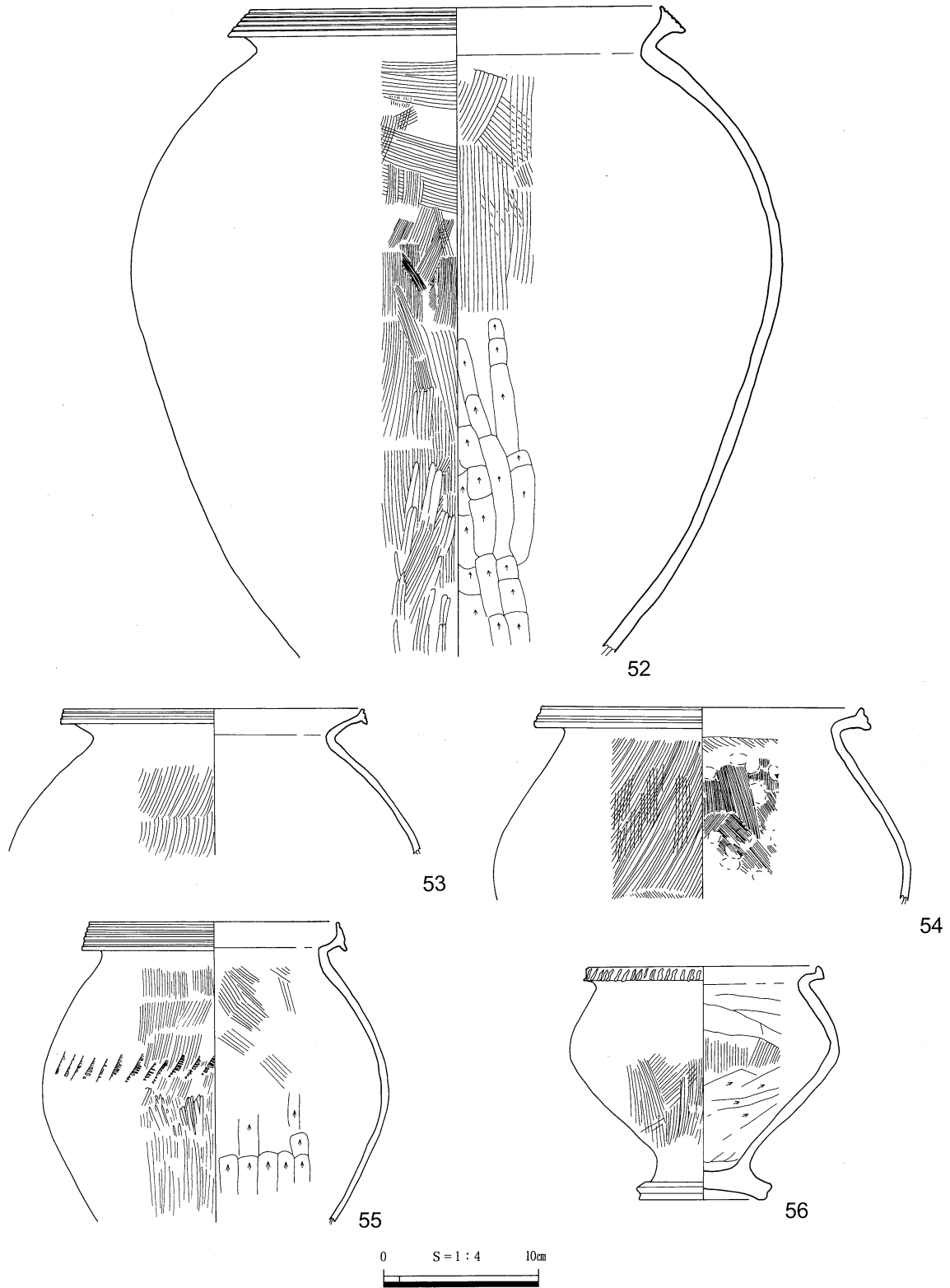
第27図 SD27出土土器(2)

挿図番号	遺構	器高	口径	底径	施文・調整	取上番号
30	SD27	(25.1)	(21.4)	—	口縁部凹線文・キザミ・円形浮文、頸部凹線文、体部上半波状文、体部内外面ハケ後内面肩部以下ヘラケズリ・内面頸部下 ユビオサエ	43496
31	SD27	(8.1)	(18.9)	—	口縁部凹線文後キザミ、頸部内外面ハケ後内面ナデ	42239
32	SD27	(8.9)	(17.4)	—	口縁部・頸部凹線文後キザミ、口縁部内面ナデ	43036
33	SD27	(26.5)	(13.8)	—	口縁部・頸部凹線文後頸部キザミ、体部内外面ハケ後外面下半ヘラミガキ・内面下半ヘラケズリ	43530
34	SD27	(12.0)	(19.4)	—	口縁部・頸部凹線文、体部内外面ハケ後外面肩部以下ヘラミガキ、口縁部内面ナデ	43529
35	SD27	(11.8)	(14.0)	—	口縁部凹線文、体部内外面ハケ後内面頸部下ユビオサエ、口縁部内面ナデ	43253
36	SD27	(15.0)	(19.5)	—	口縁部・頸部凹線文、体部内面ハケ後頸部下ユビオサエ、口縁部内面ハケ	42210
37	SD27	(11.0)	(19.2)	—	口縁部・頸部凹線文、頸部外面ハケ、口縁部内面ハケ	42208
38	SD27	(6.5)	(16.5)	—	口縁部・頸部凹線文、頸部内外面ハケ、口縁部内面ナデ	43494
39	SD27	(7.7)	(19.1)	—	口縁部・頸部凹線文、頸部外面ハケ、口縁部内面ナデ	42175
40	SD27	(8.1)	9.8	—	体部外面ハケ後ヘラミガキ	42235
41	SD27	(10.5)	(8.0)	—	体部内外面ハケ後内面下半ヘラケズリ、口縁部ナデ、	42986
42	SD27	12.0	6.2	4.6	口縁部凹線文、体部刺突文、体部外面ハケ後下半ヘラミガキ、口縁部・体部内面ナデ	43411
43	SD27	(12.6)	(21.0)	—	口縁部凹線文、体部刺突文、体部内外面ハケ後内面ユビオサエ、口縁部内面ナデ	42880
44	SD27	18.4	7.0	8.6	口縁部・体部・脚柱部凹線文、体部内外面ハケ後外面下半ヘラミガキ、口縁部ナデ	42368



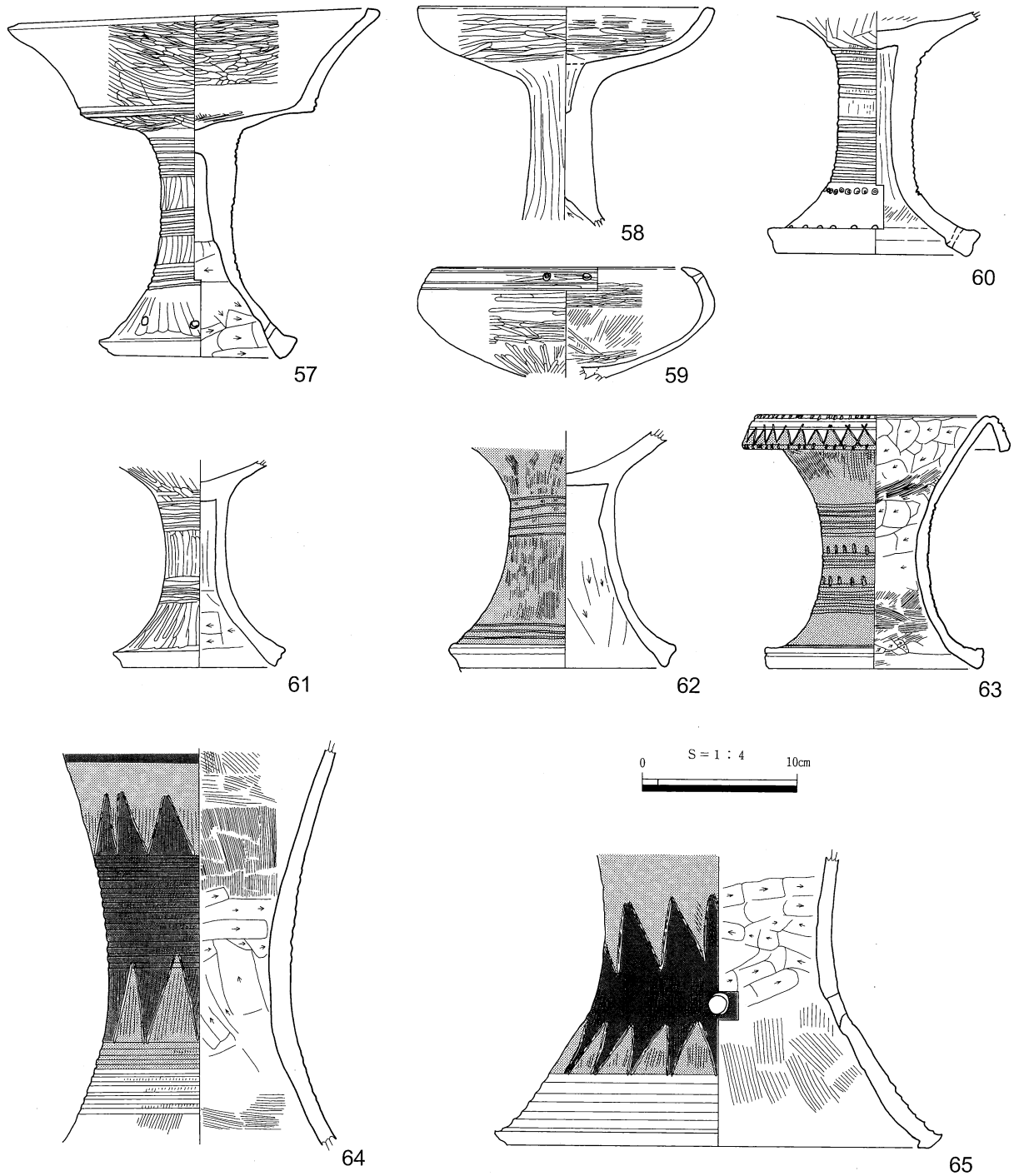
第28図 S D 27出土土器 (3)

挿図番号	遺構	器高	口径	底径	施文・調整	取上番号
45	SD27	(27.1)	(20.4)	—	口縁部凹線文、体部上半波状沈線文・平行沈線文、体部内外面ハケ後内面肩部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	43376
46	SD27	(18.0)	(21.2)	—	口縁部凹線文後キザミ・円形浮文、肩部刺突文、体部内外面ハケ後外面下半ヘラミガキ、口縁部内面ナデ	43545
47	SD27	(13.5)	(17.0)	—	口縁部凹線文・キザミ、肩部刺突文、体部内外面ハケ後内面肩部以下ヘラケズリ、口縁部内面ナデ	43548
48	SD27	(18.9)	—	(29.0)	脚裾部凹線文、脚注部・脚裾部鋸歯文・2色の彩色、内外面ハケ後脚柱部内面ヘラケズリ、肩部刺突文	43533
49	SD27	(21.2)	(18.4)	—	口縁部凹線文、体部内外面ハケ後内面ナデ・ユビオサエ、口縁部内面ナデ	42164
50	SD27	(17.7)	(14.3)	—	口縁部凹線文、肩部刺突文、体部内外面ハケ後内面肩部以下ヘラケズリ・内面頸部下ユビオサエ、口縁部内面ナデ	42920
51	SD27	(16.9)	(15.4)	—	口縁部凹線文、肩部刺突文、体部内外面ハケ後外面下半ヘラミガキ・内面肩部以下ヘラケズリ、口縁部内面ナデ	43067



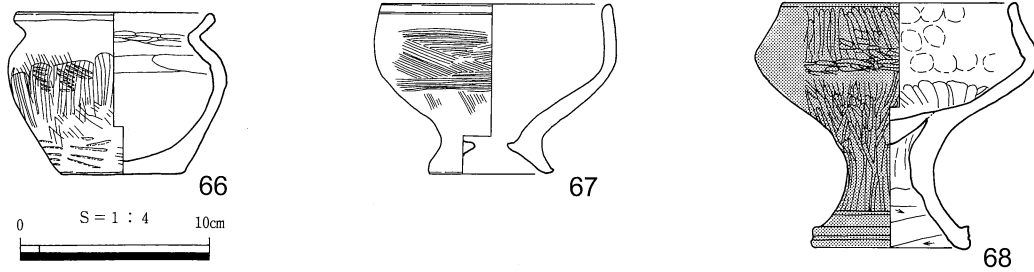
第29図 S D 27出土土器 (4)

挿図番号	遺構	器高	口径	底径	施文・調整	取上番号
52	SD27	(42.7)	(27.0)	—	口縁部凹線文、体部外面タタキ?後内外面ハケ・外面下半ヘラミガキ・内面下半ヘラケズリ、口縁部内面ナデ	43494
53	SD27	(9.3)	(19.6)	—	口縁部凹線文、体部内外面ハケ後外面肩部以下ヘラミガキ、口縁部内面ナデ	43061
54	SD27	18.0	(8.4)	4.3	口縁部凹線文、体部刺突文、体部内外面ハケ、口縁部ナデ	42880
55	SD27	(19.7)	(16.4)	—	口縁部凹線文、肩部刺突文、体部内外面ハケ後外面下半ヘラミガキ・内面下半ヘラケズリ、口縁部内面ナデ	43527
56	SD27	15.2	(15.2)	8.2	口縁部キザミ、体部内外面ハケ後内面下半ヘラケズリ、頸部内面ヘラミガキ口縁部内面・脚台部ナデ	42204



第30図 SD27出土土器(5)

挿図番号	遺構	器高	口径	底径	施文・調整	取上番号
57	SD27	(22.8)	(23.8)	(10.7)	杯部・脚柱部凹線文、外面ヘラミガキ、杯部内面ハケ後ヘラミガキ、脚台部内面ヘラケズリ	43060
58	SD27	(13.9)	(19.0)	—	外面ヘラミガキ、杯部内面ハケ後ヘラミガキ、脚台部内面ヘラケズリ	43072
59	SD27	(7.0)	(15.7)	—	口縁部凹線文、杯部内外面ハケ後ヘラミガキ	42317
60	SD27	(15.8)	—	(12.4)	脚柱部凹線文・刺突文、内外面ハケ後ナデ	42203
61	SD27	(13.1)	—	(9.7)	脚柱部凹線文、外面ハケ後ヘラミガキ、杯部内面ナデ、脚台部内面ヘラケズリ後ナデ	42973
62	SD27	(14.8)	—	(14.6)	脚台部凹線文、外面ハケ、脚台部内面ヘラケズリ後ナデ	42421
63	SD27	16.4	(17.3)	(14.1)	口縁部・脚柱部・脚裾部凹線文、口縁部キザミ・鋸歯文、脚柱部刺突文、外面赤彩外面ハケ、器受部内面ヘラケズリ後ナデ・一部ハケ、脚裾部内面ヘラケズリ後ハケ	42370
64	SD27	(20.6)	—	—	脚柱部凹線文後鋸歯文、2色の彩色、内外面ハケ後内面一部ヘラケズリ	43927
65	SD27	(19.5)	(14.1)	—	口縁部凹線文、肩部刺突文、体部外面ハケ、口縁部内面ナデ、体部内面肩部以下ヘラケズリ	43533



第31図 SD 27出土土器(6)

挿図番号	遺構	器高	口径	底径	施文・調整	取上番号
66	SD27	8.5	(10.2)	6.4	体部外面タタキ後ハケ、体部内面ヘラケズリ、口縁部ナデ	42257
67	SD27	(9.0)	(12.1)	(6.6)	口縁部凹線文、外面ハケ後ナデ、内面ユビオサエ後ナデ、底部穿孔	43404
68	SD27	(12.9)	12.2	(8.2)	外面・杯部上半赤彩、外面ハケ後ヘラミガキ、杯部ナデ後半ヘラミガキ、脚台部内面ヘラケズリ	43648

63～65は器台を示した。63は器受部端部が下垂し、広い面を設けたうえ凹線文や鋸歯文で飾る。器高は低い。64は脚柱部のみ残るものであるが、器高の高いものであろう。65の脚裾部が同じような形態のものかもしれない。

第31図は鉢である。66は寸詰まりな体部に広い口縁部と底部をもつ。体部には左上がりの、底部直上には水平のタタキ整形痕を残している。67は碗形の体部に低い脚が付く。底部は穿孔されている。68は内傾する体部に脚台部をもつ。形態は高杯と同じだが、小型であり、鉢としておく。甕とした56も鉢に含めた方がいいものかもしれない。

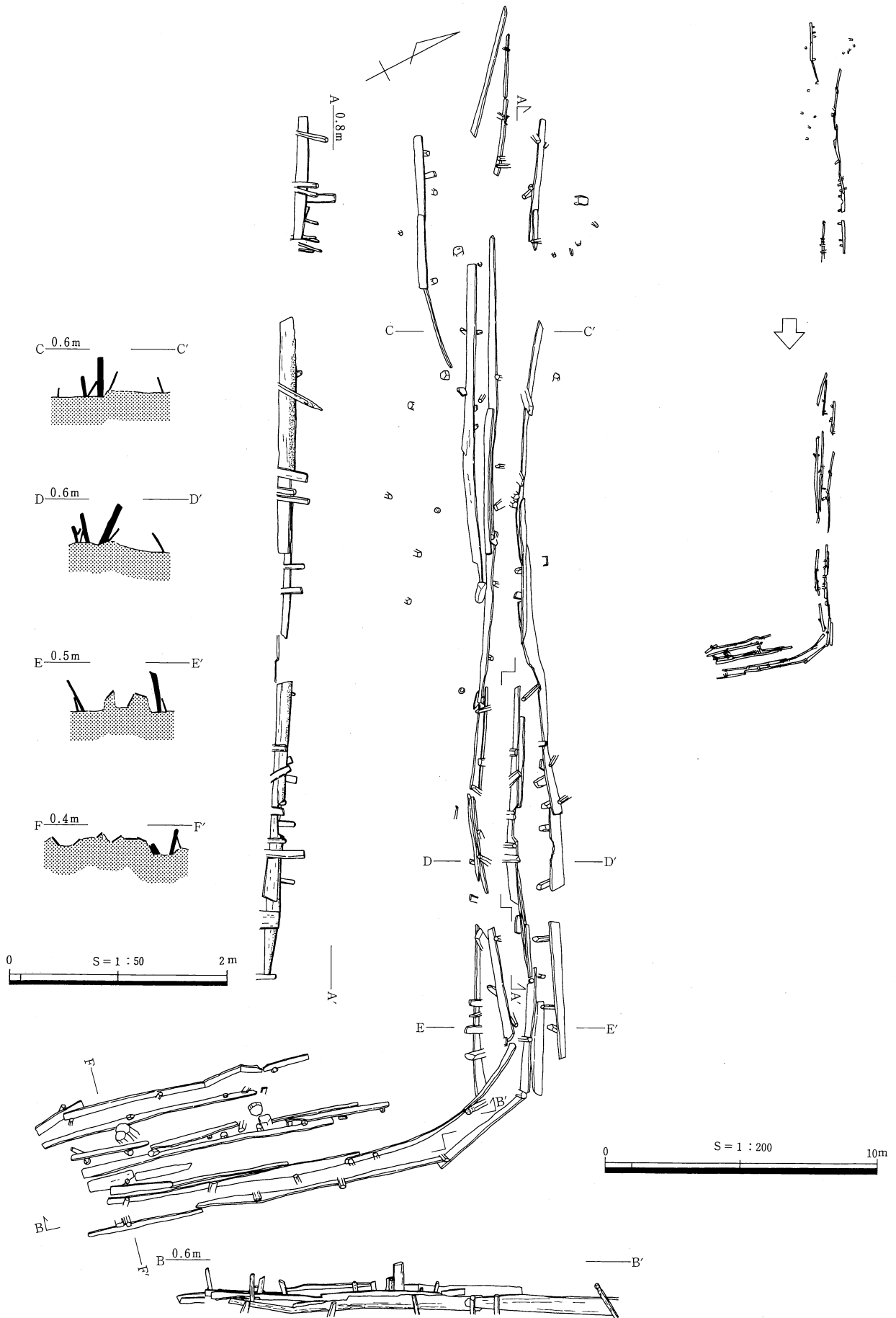
SD 27の性格 SD 27は弥生中期中葉後葉段階に微高地縁辺部を巡るもので、大型の板材を用いた護岸施設が特徴である。この護岸施設は板を固定するために打ち込まれた杭のあり方から、単に溝の護岸としていいか検討を要することは述べておいた。この点はSD 27の性格を考えるうえで重要な点となるように思える。それとともに次に述べるSA群との関わりが問題となる。はっきりした性格付けはできないが、弥生中期中葉における集落展開の画期を如実に表す遺構であることは明らかであろう。

7区におけるSA群(第32～40図) 7区では弥生後期の遺構面の下位にI層と命名した砂層が堆積していた。これを掘り下げていったのであるが、次々と現れる遺構群に目を見張ることとなった。弥生後期段階でも認められたSAと呼ぶものが重なり合うように検出されたのである。板材を横に立て並べ杭で固定する構造物なのであるが、検出し写真撮影、図化を終え取り上げて掘り下げると同じようなものがまた出てくるということを幾度も繰り返した。しかもそれぞれ調査区全体に及んでいたのである。板材の重なりなどもあるが、どれが一時期のものか判断しにくい場合が多く、検出面やレベルを考慮してとりあえず段階ごとと理解したものが第21～23図である。

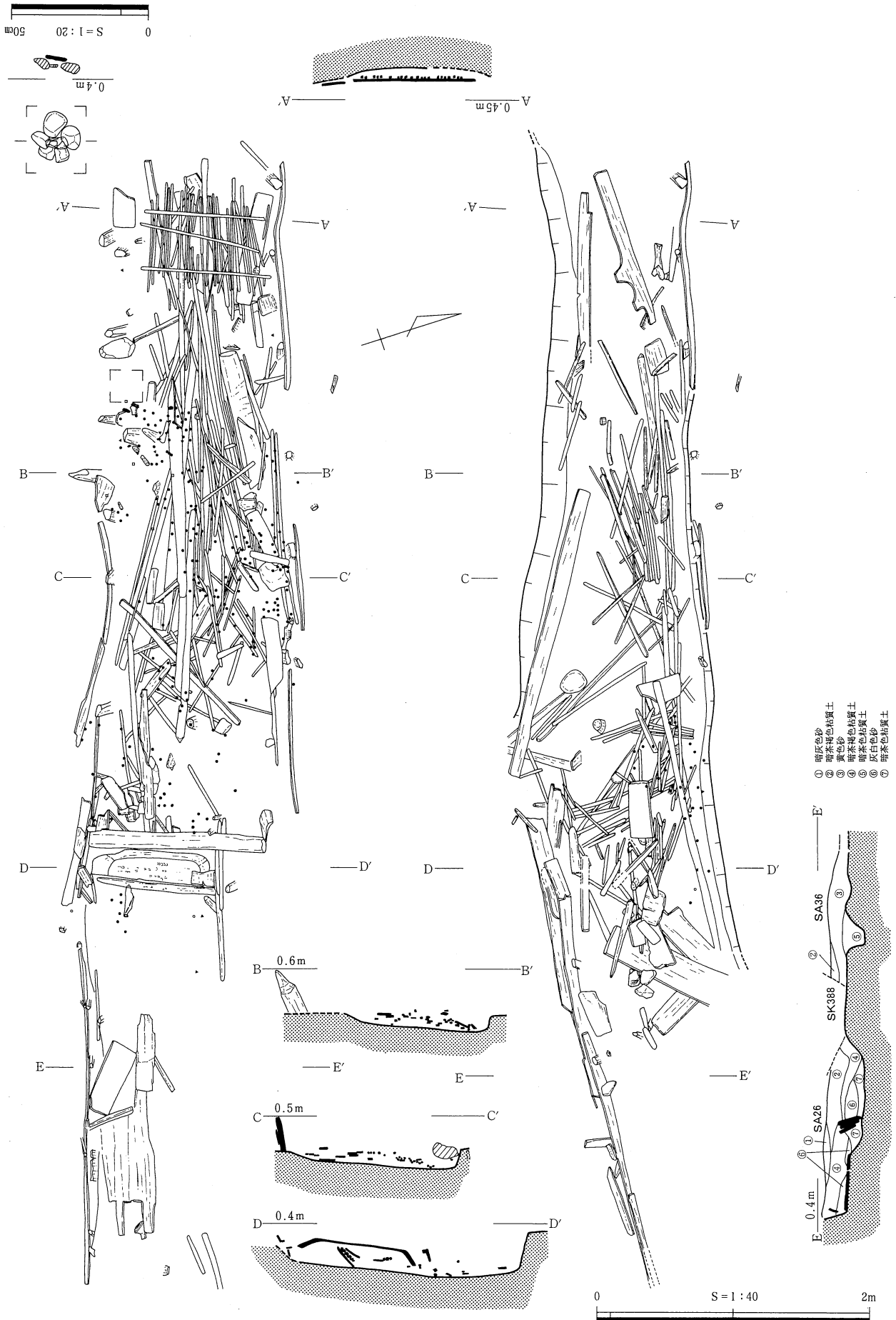
SA群の変遷 第1段階としてSD 27が機能していた段階がある(第21図上段)。SD 27の記述でもふれたが、ここに築かれた護岸は時期差をもつものかもしれない。これとは別に西側にはSA 41が存在する。弧状に打たれた杭列内に木器溜2が伴う(第35図)。

第2段階としてSA 62を中心とする段階がある(第21図下段)。SD 27は埋没しており、溝としての機能を失っているが、SA 62はその方向を維持している。SA 62は長さ2m前後、幅30cm程度の大型の板を立て並べ、固定用の杭は密に打たれている(第40図)。板の列は直線的でなく、いったんくびれるように並ぶ。これに直交して複数のSAが築かれているが、厳密に同時性があるのか分からない。SA 62の西に接して長さ2mを超える大型の板が30枚程度敷かれたように集中していた(第39図)。

第3段階は7区全域にSA群が広がる(第22図上段)。前段階までがSD 27の延びる方向主体であったのが、それに直交する向き主体に変化する。SA 45、59はそのなかでも中心となるようなものである(第37図)。南東部分で少し屈曲して延びていき、30m弱の長さを検出した。一部に板材でなく矢板を用いているところがあり、



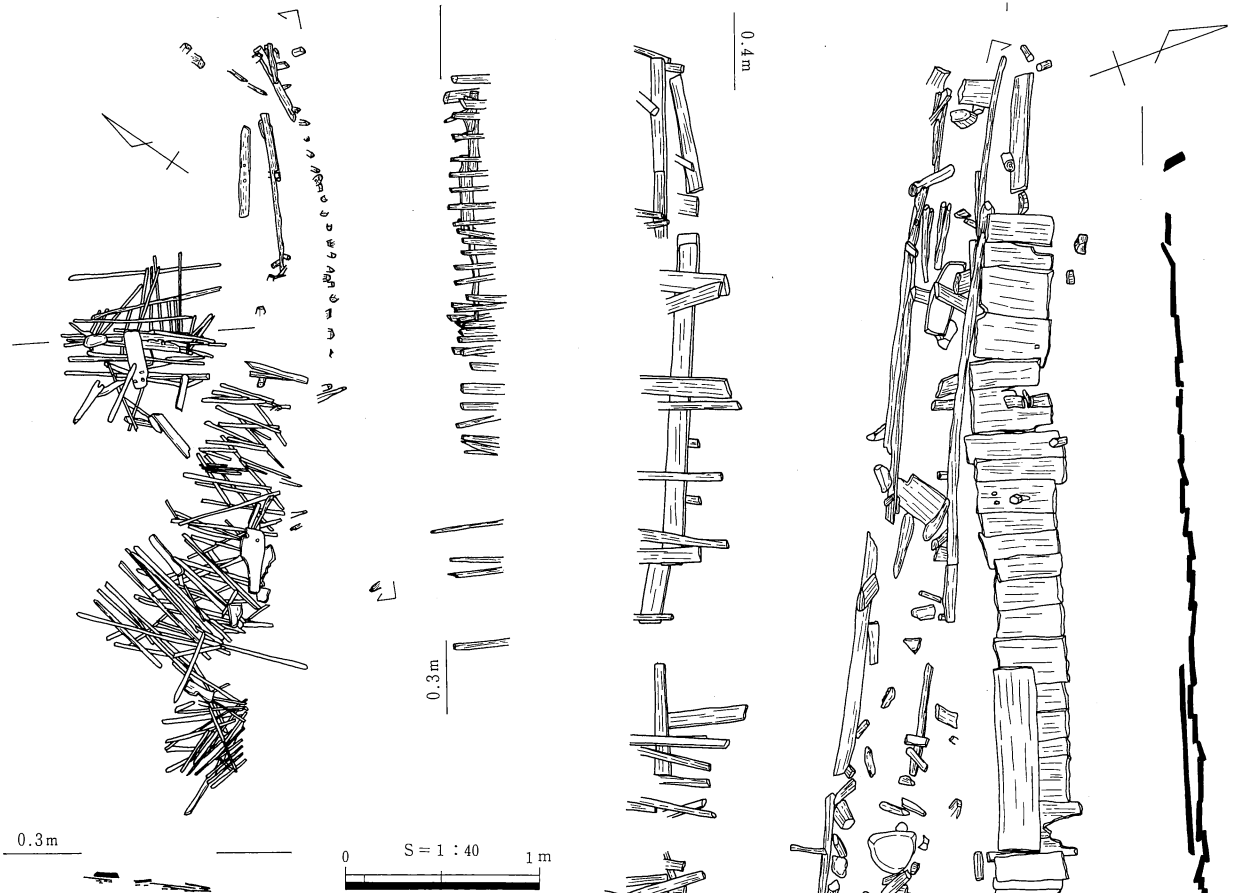
第32図 S A 25



第33図 S A 26



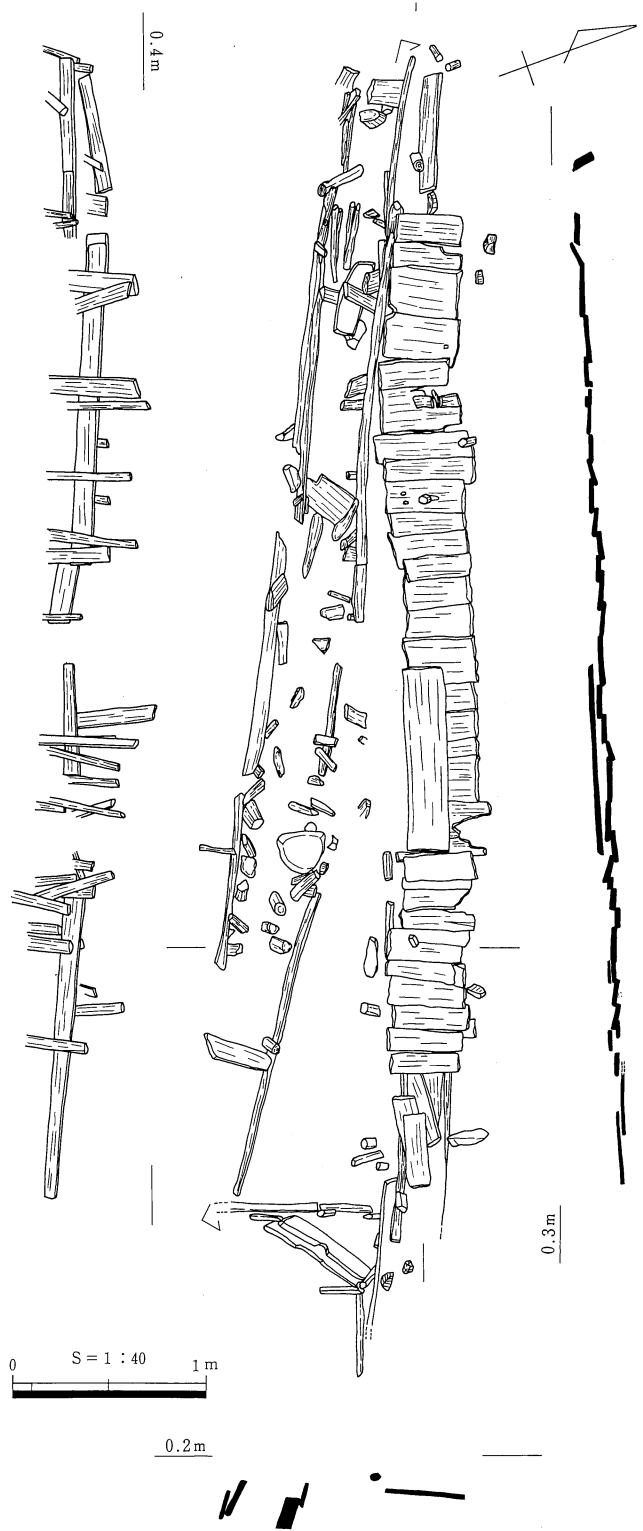
第34図 S A 69、70、72、80、81



第35図 SA 41

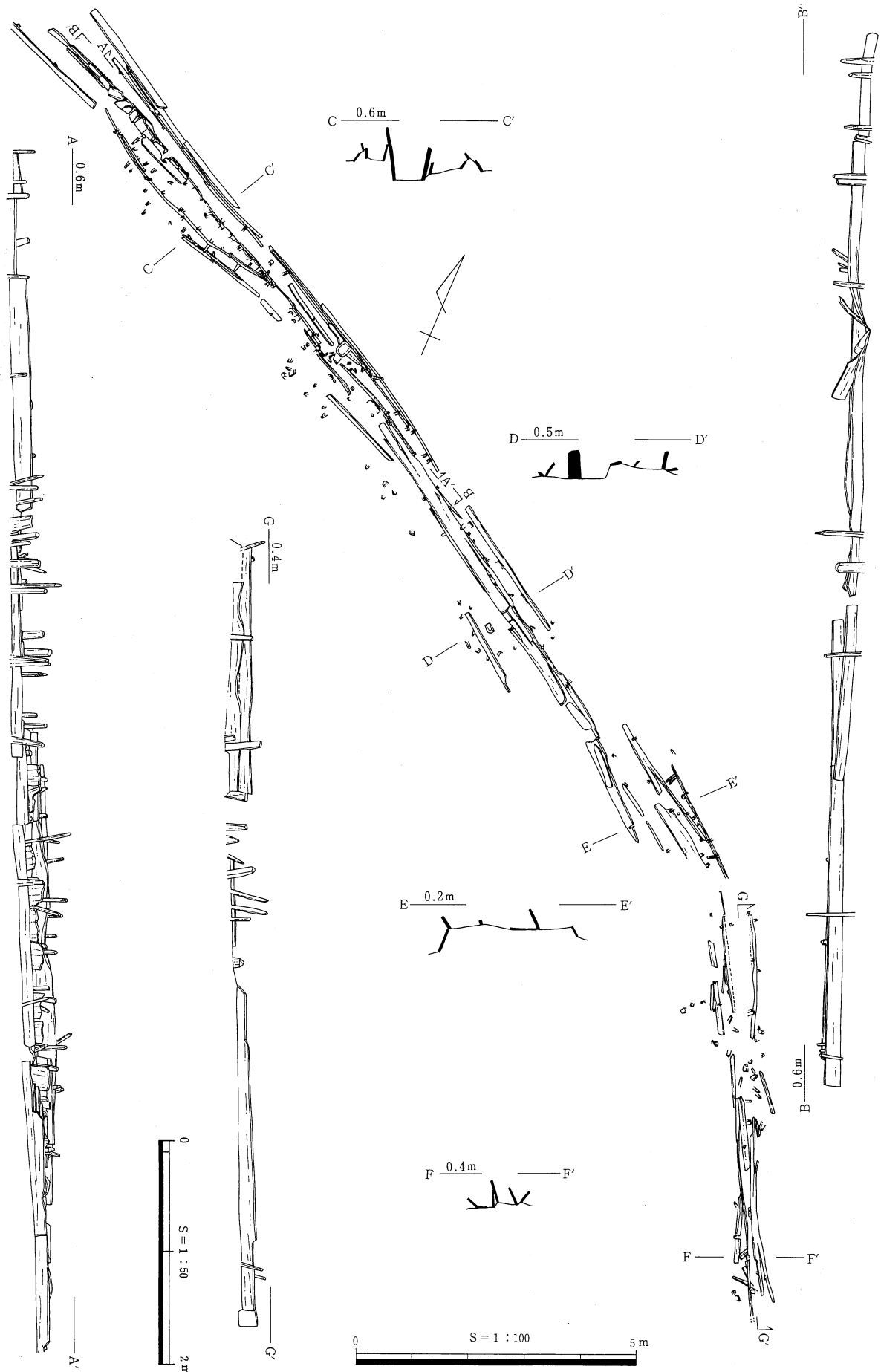
別のものが重なっている可能性もある。第38図はSA 45、59の北側に築かれた一群を示したものである。これらはいずれかのSAとつながるものと思われ、第3段階は複数の時期を同時に捉えている可能性がある。

第4段階は築かれた位置や方向を見ると第3段階を踏襲しているように思える（第22図下段）。SA 45、59と重なる位置にSA 69が築かれており、中心となるような構造物が同じところに設けられた点に継続性を感じる。SA 69はおよそ25m分を検出しており、板材を横に立て並べて杭で固定したものである（第34図）。部分的に矢板を列状に打ち込んだところがある。7区西側にはSA 40が存在する（第36図）。板材を横長にして2列に立て並べ、杭で固定したものであるが、それに接して40cm×20cmほどの板を1列に敷いたものが確認された。断面図にも示したように板の据えられたレベルは一定である。両者は並ぶように設けられているが、東に行くにつれ離れていっており必ずしもセットであるかは分からない。

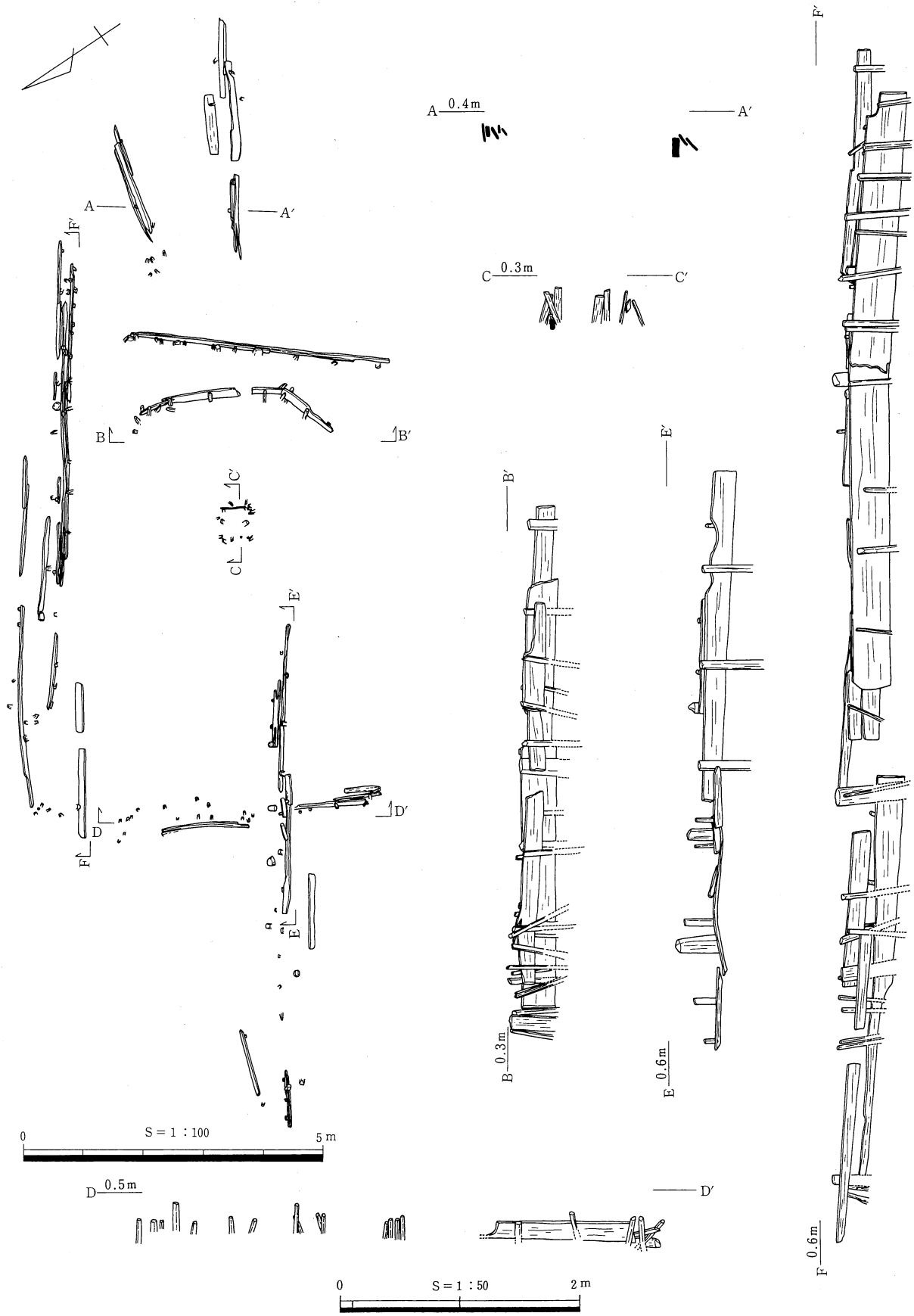


第36図 SA 40

第5段階もSA 45がその下のものと同じ位置・方向に築かれており、第3段階以降の継続性が窺える（第23図上段）。この段階にいたり、それまで希薄だった7区西側部分にも多く認められるようになる。SA 25は南側に築かれたもので、板材の列を途中から曲げて方向を変えている（第32図）。板材のつなぎ目で曲げるのではなく、板そのものを曲げて杭で動かさないようにしている。SA 26はSA 25の北に接して作られている（第33図）。板材



第37図 S A 45、59

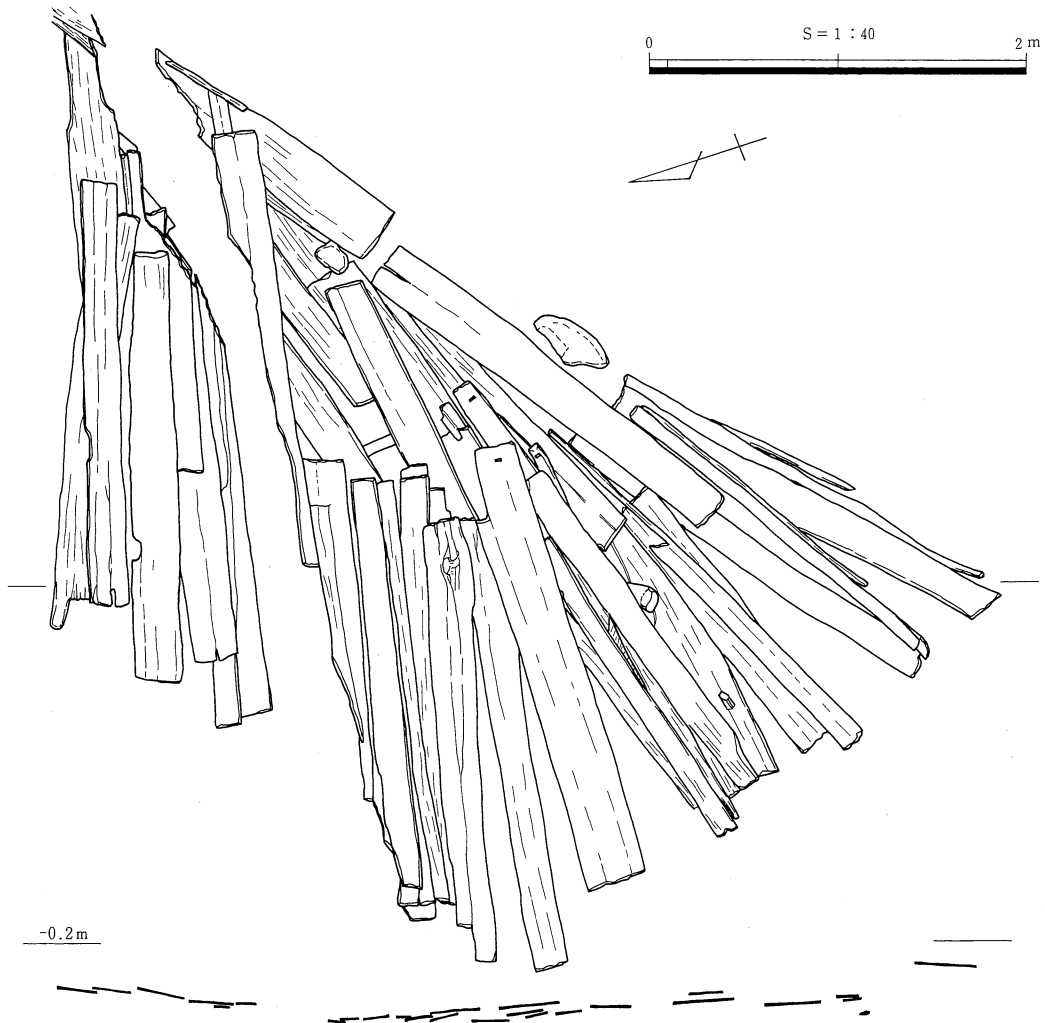


第38図 S A 47～52、53

の列間は他のものより広めで、棒材などの木材が多量に認められた。こうした遺構内に堆積しているものを取り除いた状態で掘り込みを検出している。他のSA群ももともとはこのような掘り込みをもっていたものであろうか。

SA群の性格 上述のように弥生時代中期後葉の7区においては、板材を立て並べて杭で固定するSAと呼ばれる構造物が連続と築かれていた。それらはSD27を始めとし（第1段階）、その方向性を維持しながらも直交するものが作られ始め（第2段階）、7区全体に広がるとともにSD27と直交する方向に主体を変え（第3～5段階）、西側にも分布を広げていく（第5段階）という流れがたどれる。築かれる方向は南西から北東と、それに直交するもので、これは前期末～中期前葉段階、あるいは後期初頭～後葉段階の建物群を区画する溝の方向とまったく同じである。SA26のような掘り込みを伴うものの存在からすれば、これらは本来溝状の掘り込みの中に築かれていたものである可能性が高い。ベースが砂であったため速やかに埋没していったのであろう。それにしても埋もれたものを掘り起こさずに新たに作り直すということを繰り返すほど、必要なものであったことは間違いなく、前期末から後期に至るまで堅持された方向性といい、特殊な性格というより集落構造の継続性のなかで理解する必要がある。

中期後葉の自然環境 連続と作られつづけたSA群はI層と呼んだ砂層に埋もれていた。I層は全体としてみれば純粋な砂の堆積であるが、その間に細かな間層が多く認められた。砂の堆積と休止が繰り返されたと思われるが、このI層を構成する砂は風成砂の可能性が指摘されており⁽³⁾、次々と作り直されたSA群からは自然と人間との格闘を見る思いがする。SD27およびSA群を埋めるI層は中期後葉の土器を包含しているが、その下位のJ～L層も土器から見た時期は同じである。J層は植物の腐食物から、K層は砂からそれぞれなり、L層は粘

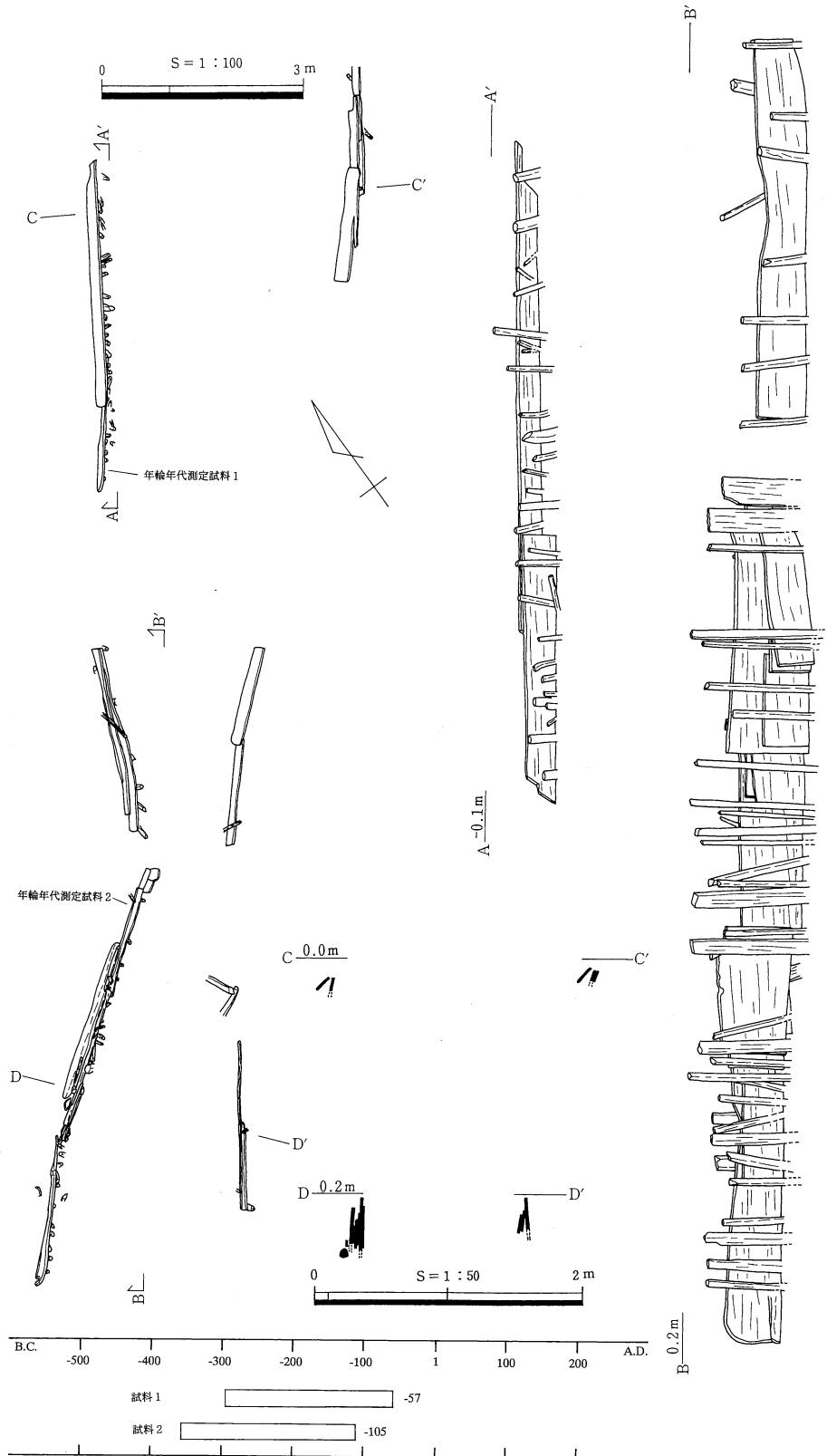


第39図 SA群第2段階に伴う板材出土状況

質土の堆積である。中期後葉段階にさまざまな土壌が堆積、形成されたのを見ると、中期後葉と呼んでいる凹線文を施す土器に表される時期は割合に長い時間幅をもっていたのではないかという気がする。その間には自然環境の変化もあり、それが近畿地方に顕著に見られる拠点集落の解体の要因となっていた可能性はないだろうか⁽⁴⁾。

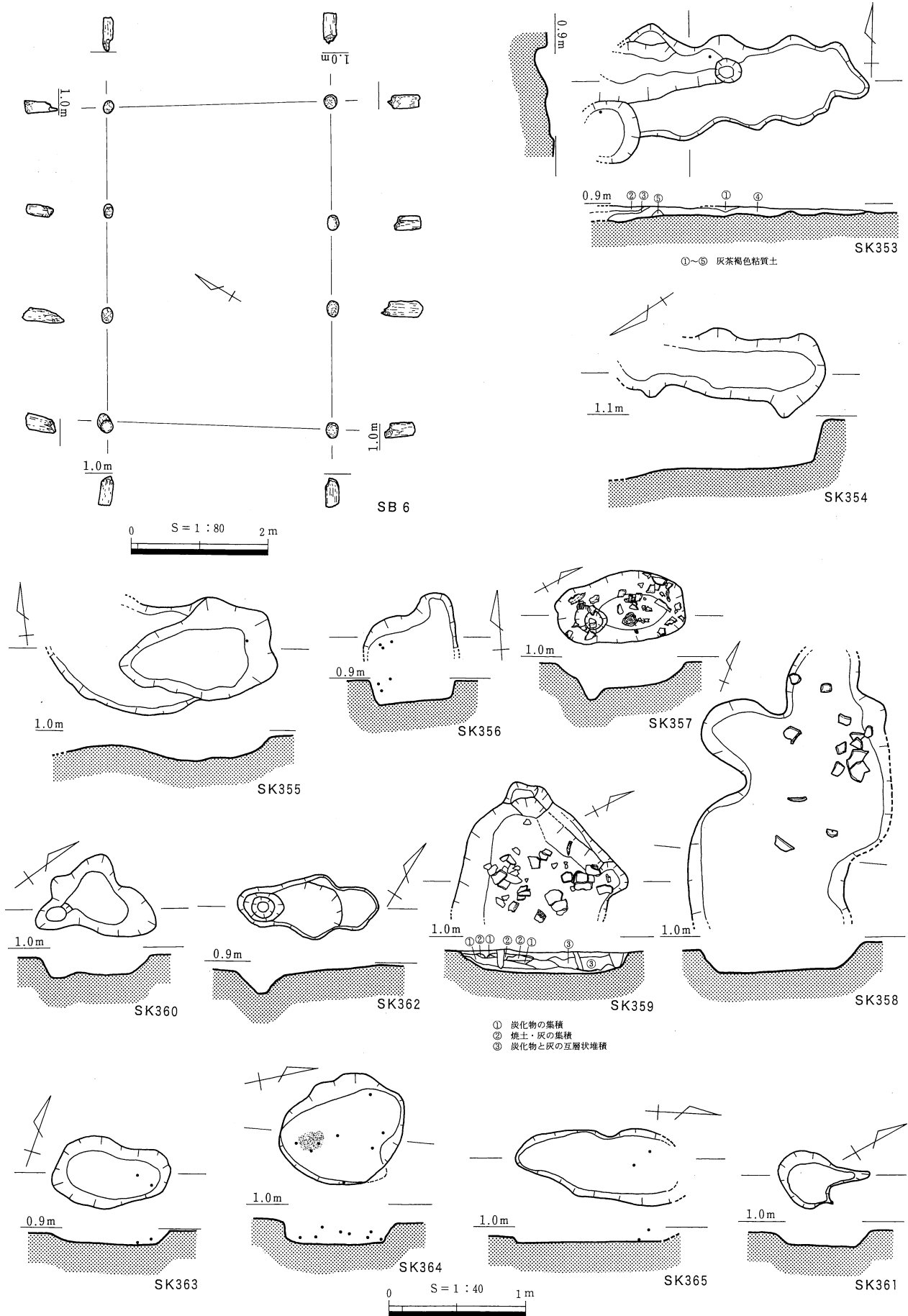
S A 62使用木材の年輪年代
 光谷拓実氏に測定を依頼し、結果を得た(第40図)。試料1は樹皮型で伐採年代が57 B. C. と確定した。試料2は心材型で105 B. C. という年代が出ている。試料1の年代は山陰地方の中期後葉の土器に実年代を与えるもので、その意義は大きい。

その他の遺構 掘建柱建物
 S B 6を検出した(第41図)。3間×1間を確認しているが6区を横断するように建てられているため、さらに広がる可能性がある。各柱穴には径20cmほどの柱根が遺存していた。**土坑**は6区のみで確認され、31基を数える(第41、42図)。規模や形態に規格性がない点は前期末～中期前葉の土坑と共通する。**溝**と認識したSD53は1m弱を検出したにすぎない(第42図)。**集石遺構**は7区から8区の西側にかけて10基確認している(第43、44図)。

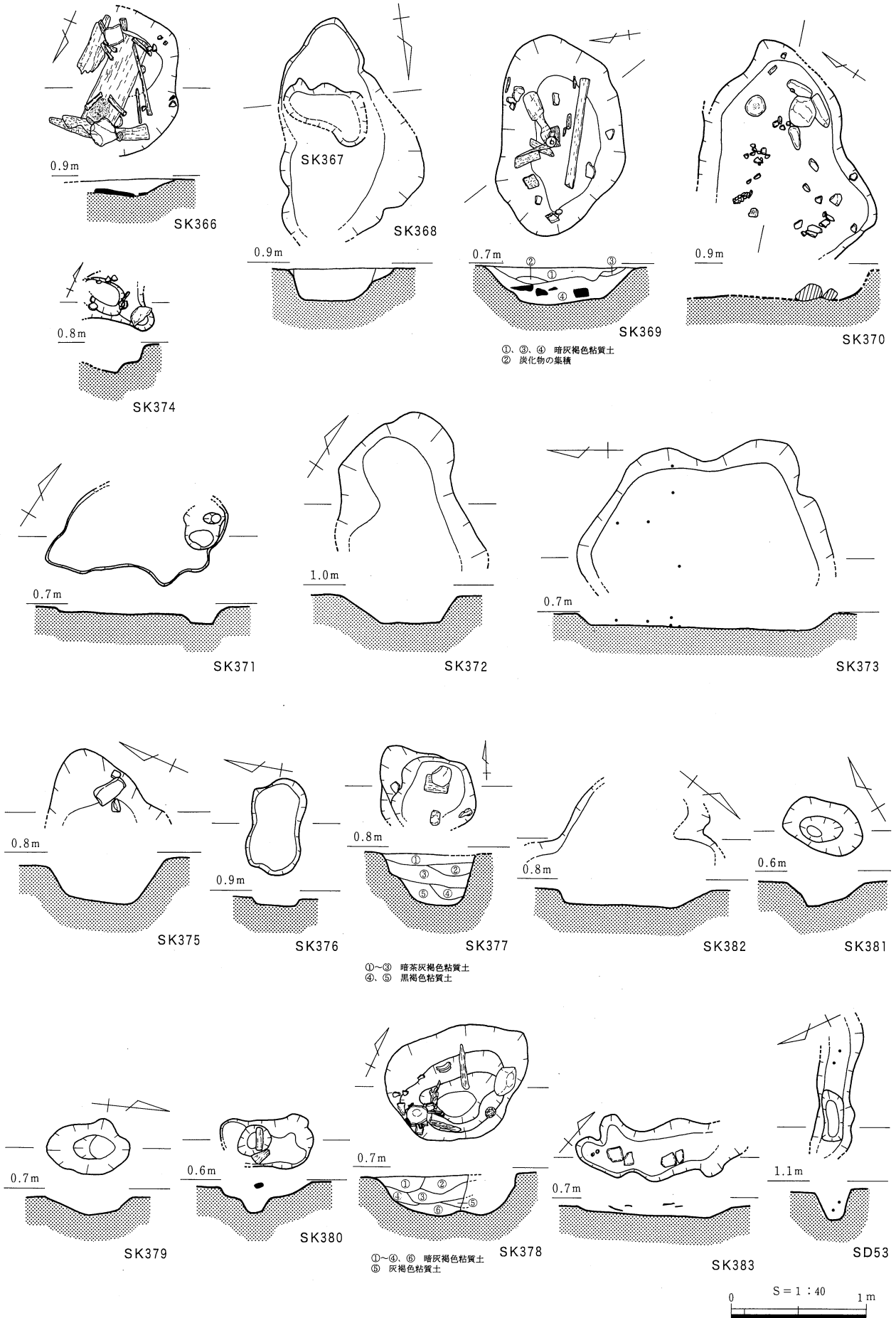


試料番号	用材	年輪数	試料の形状	年輪年代	出土状況	取上番号
1	板材	237	樹皮型	57 B. C.	護岸?	43440
2	板材	248	心材型	105 B. C.	護岸?	43442

第40図 S A 62



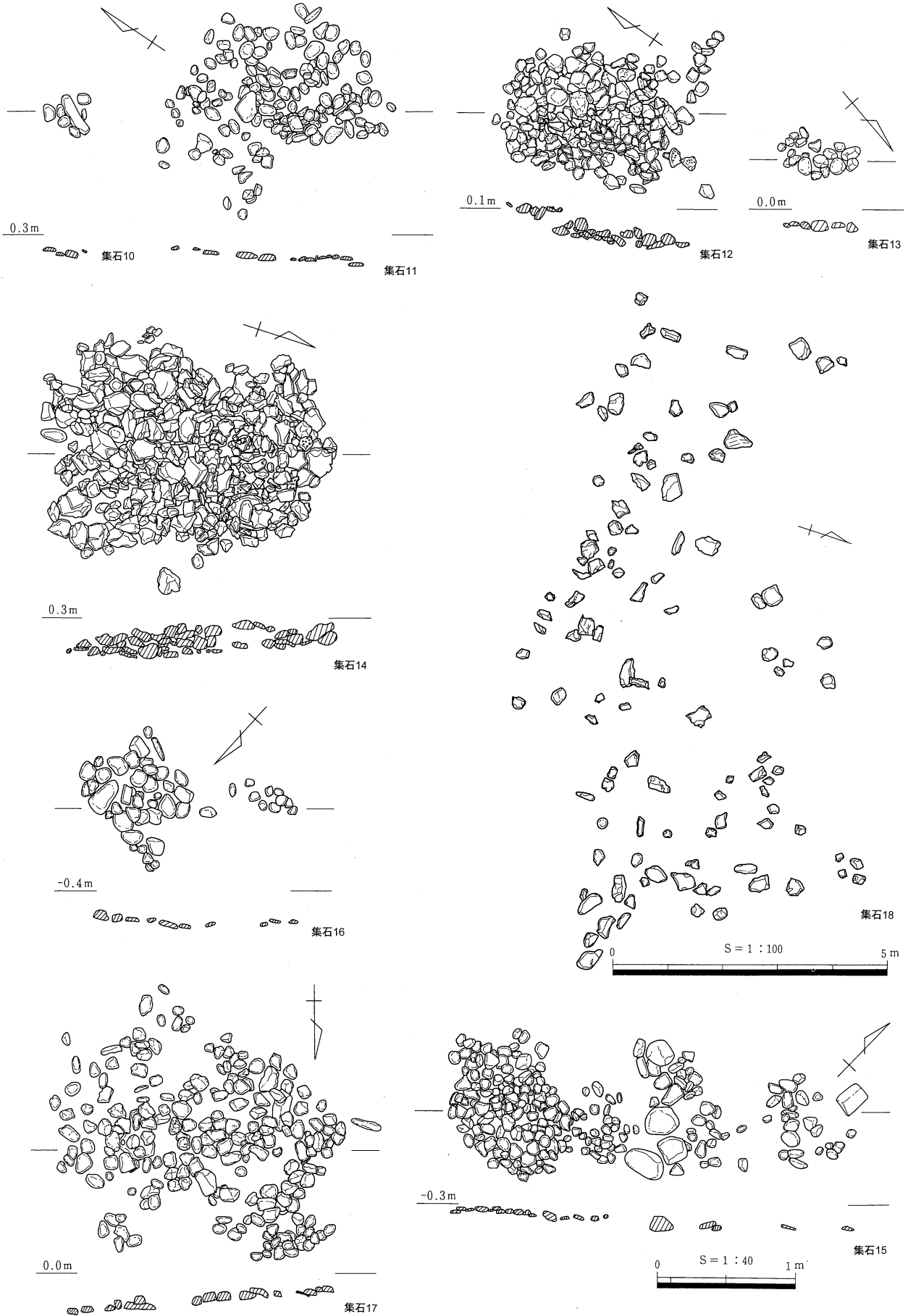
第41図 SB 6、SK 353～365



第42図 SK 366～383、SD 53



第43図 集石9



第44図 集石10～18



第45図 木器溜 3

木器溜はふたつ検出した。木器溜2はSA41に伴うものである(第37図)。弧状を描き打ち込まれたSA41の杭列の内側に長さ1.5m、幅数cmの板材が集中していた。板材の大きさはよくそろっており、同じ目的に使用されたと考えられるが、具体的な用途は不明である。ただ板材が南北方向と東西方向の向きに組み合うように出土しているところを見ると、別の場所で使用されたものがここへ廃棄されたというよりは、検出位置がもともと使用されていた場所を表しているのではないかと思われる。木器溜3も同じような板材が顕著に認められる。堆積状況は木器溜2に比べランダムではあるが、この位置か、ごく近いところで使用されていたものではなかろうか。板材の集積する東側部分では少し幅広のものが多い。また図では少し薄く表示しているが、編み物状のものも認められた。ふたつの木器溜の性格はよく分からないのであるが、同じような材が大量に用いられる場合として建築物に伴うものを想定しておきたい。(湯村 功)

註

(1) 北浦弘人編 2000『青谷上寺地遺跡2』(財)鳥取県教育文化財団。

(2) 註(1)前掲文献。

(3) 2001年1月に開催されたシンポジウム「青谷上寺地遺跡の自然環境とヒト」における、星見清晴氏の発表による。

(4) 同様な内容を第50回埋蔵文化財研究集会において発表した。

湯村 功 2001「日本海沿岸の弥生時代の生活環境—青谷上寺地遺跡を中心として—」『第50回埋蔵文化財研究集会
環境と人間社会 発表要旨集』

新 名	旧 名	調査区	グリッド	最大長(m)	最大幅(m)	最大深(m)	検出レベル(m)	出 土 遺 物
SK353	SK272	6区	G28	(1.94)	(0.82)	0.254	1.084	P B 加工痕のある骨
SK354	SK273	6区	H28	(1.48)	(0.78)	0.465	1.069	P
SK355	SK275	6区	G28	(1.66)	(0.82)	0.201	0.987	P B 糞石、切断痕のある角座骨
SK356	SK277	6区	H27	(0.7)	(0.43)	0.244	0.9	P
SK357	SK279	6区	H28	0.95	0.53	0.362	0.939	P S 石庖丁、砥石、砕片(サヌカイト)、楔形石器(ガラス質安山岩)
SK358	SK276	6区	I27~28	(2.1)	(1.44)	0.223	1.084	B 加工痕のある骨 S 管玉製作関係、砥石、砕片(サヌカイト)、剥片(ガラス質安山岩) B 切断痕のある鹿角、加工途上品
SK359	SK278	6区	G29	(1.32)	(1.03)	0.184	0.902	P S 石庖丁未製品
SK360	SK280	6区	H28	0.83	0.7	0.163	0.94	P S 管玉製作関係
SK361	SK281	6区	H28	0.66	0.4	0.127	0.922	P
SK362	SK282	6区	H27	1.01	0.49	0.234	0.9	P
SK363	SK288	6区	I28	0.86	0.53	0.98	0.982	P
SK364	SK285	6区	H28	1.76	0.78	0.16	0.872	P S 打製石剣未製品
SK365	SK287	6区	I28	1.15	0.59	0.138	1.006	B 糞石、切断痕のある鹿角
SK366	SK286	6区	G28	1.07	0.77	0.14	0.995	P S 砥石 W 不明木製品
SK367	SK283	6区	H27	0.68	0.52	0.198	0.833	P
SK368	SK284	6区	H27	1.62	1.06	0.121	0.859	P
SK369	SK289	6区	H28	1.49	0.91	0.285	0.693	P S 微細剥離剥片(ガラス質安山岩)
SK370	SK292	6区	G28	(1.63)	(1.33)	0.285	0.985	B 素材 B 切断痕のある角座骨 S 台石
SK371	SK290	6区	H28	(1.37)	(0.63)	0.161	0.682	P B 加工途上品
SK372	SK291	6区	G28	(1.2)	(1.14)	0.234	1.02	S 管玉製作関係、楔形石器(サヌカイト)
SK373	SK297	6区	G28	(1.92)	(1.04)	0.14	0.68	P B 刺突具
SK374	SK298	6区	H27	(0.6)	(0.38)	0.266	0.829	P
SK375	SK299	6区	H27	(0.85)	(0.72)	0.336	0.752	P
SK376	SK317	6区	I27~28	0.71	0.41	0.86	0.853	P
SK377	SK300	6区	H27	0.81	0.71	0.363	0.748	P S 石核(ガラス質安山岩)
SK378	SK319	6区	H28	1.11	0.84	0.31	0.66	P S 砕片(サヌカイト)
SK379	SK320	6区	H28	0.62	0.42	0.036	0.637	P
SK380	SK323	6区	H27	0.69	0.38	0.284	0.643	P
SK381	SK330	6区	H28	0.59	0.36	0.205	0.542	P
SK382	SK342	6区	H28	(1.32)	(0.53)	0.13	0.724	P
SK383	SK324	6区	H28	(1.21)	(0.61)	0.094	0.634	P S 管玉製作関係 B 糞石
SD27	SD48	7区	D30~32 E31~32	(21.0)	(18.6)	1.131	0.224	P S 大型石庖丁、大型石庖丁未製品、敲石、砥石、器種不明 B 直状ヤス、固定鋸、アワビオコン?、骨針、刺突具、垂飾品、細板状加工品、加工途上品、加工痕のある鹿角、切断痕のある骨、切断痕のある鹿角、ト骨、糞石、ポイント状骨角器 W 槽・盤、椀形容器、杯形容器、箱?、容器の蓋、腰掛け、琴板、栓、炭化米、直柄平鋸、組合平鋸、農具未製品、横槌、田下駄、農具の素材、紡錘車、アカトリ、舟、櫂、ヤス、盾の把手、不明木製品、建築部材 F 鉄片 D 土錘
SD53	SD50	6区	H28	(0.98)	(0.34)	0.128	1.033	P
SA25	SA12	7区	D29~30	北西(10.6) 南東(4.25)	(1.26)	0.77	0.82	P W 農具未製品、カセ?、ヘラ状木製品、建築部材
SA26	SA13	7区	D30	(11.8)	(1.52)	0.36	0.38	P S 小玉、石鏝、石鏝、敲石、砥石、擦痕のある礫、棒状石製品 B 直状ヤス、骨針入れ、ト骨 W カセ?、紡錘車、舟、槽・盤、その他容器、不明木製品、建築部材、栓 F 板状鉄斧、棒状鉄器、鉄器片、不明鉄製品
SA27	SA14	7区	D29	6.9	1.61	0.52	0.6	W 組合平鋸、建築部材
SA28	SA15	7区	D30	2.5	0.4	0.44	0.36	W 建築部材
SA29	SA16	7区	E29	3.4	0.82	0.36	0.649	W
SA30	SA17	7区	D29	4.5	0.54	0.402	0.618	W
SA31	SA18	7区	E29	4.7	1.6	0.4	0.75	W 建築部材
SA32	SA19	7区	E29	南北5.6 東西4.0	1.34	0.334	0.71	W 建築部材
SA33	SA21	7区	E29~30	4.46	0.5	0.33	0.52	W 建築部材

表2 弥生時代中期中葉～後葉遺構一覧表(1)

第2章 遺構の概要

新名	旧名	調査区	グリッド	最大長(m)	最大幅(m)	最大深(m)	検出レベル(m)	出土遺物
SA34	SA23	7区	D29	2.69	0.32	0.32	0.39	W 建築部材
SA35	SA24	7区	D29	0.71	0.21	0.2	0.3	
SA36	SA25	7区	D30	4.66	1.34	0.47	0.56	P 建築部材
SA37	SA26	7区	E30	3.7	0.5	0.32	0.31	W 建築部材
SA38	SA27	7区	E30	1.46	0.64	0.18	0.22	W 建築部材
SA39	SA28	7区	E30	5.6	1.04	0.57	0.47	P 桶、建築部材、杭
SA40	SA29	7区	D30	2.96	1.42	0.63	0.43	W 建築部材
SA41	SA30	7区	E30	7.7	1.8	0.68	0.25	S 敲石
SA42	SA31	7区	D30	6.12	0.46	0.48	0.12	W 桶形容器、建築部材
SA43	SA32	7区	D29	2.06	0.38	0.21	0.12	W 建築部材
SA44	SA33	7区	D30	7.15	1.64	0.7	0.05	W 盾
SA45	SA39	7区	E30~32	(19.9)	(1.32)	0.63	0.48	P 腰掛けの脚
SA46	SA40	7区	E31	5.72	0.48	0.383	0.114	W 建築部材
SA47	SA41	7区	E31~F31	4.46	0.64	0.474	0.386	W 建築部材
SA48	SA42	7区	E31	8.4	0.6	0.57	0.54	W 建築部材
SA49	SA43	7区	E31~32	10.0	1.1	0.59	0.4	W 建築部材
SA50	SA44	7区	E32	(4.4)	(1.5)	0.44	0.3	W 建築部材
SA51	SA45	7区	E32	(2.35)	(0.3)	0.39	0.37	W 建築部材
SA52	SA46	7区	E32	4.1	0.55	0.4	0.36	W 建築部材
SA53	SA52	7区	E31	0.55	0.52	0.25	0.19	W 建築部材
SA54	SA56	7区	E30	3.2	0.72	0.52	0.43	W 建築部材
SA55	SA57	7区	E30~31	5.9	0.25	0.5	0.5	P 微細剝離剥片(サヌカイト)
SA56	SA58	7区	E31~F31	5.64	0.52	0.37	0.21	W 建築部材
SA57	SA59	7区	F32	3.0	0.81	0.38	0.28	W 建築部材
SA58	SA60	7区	E31~F32	4.02	0.6	0.28	0.19	P 台石
SA59	SA61	7区	D32	7.66	0.86	0.38	0.44	W 建築部材
SA60	SA62	7区	D32	3.24	0.38	0.44	0.37	S 建築部材
SA61	SA63	7区	D32	2.44	0.64	0.27	0.23	P 敲石
SA62	SA64	7区	D31~E31	(18.35)	(4.1)	0.76	0.48	W 田下駄
SA63	SA65	7区	D31~32	6.7	2.2	0.45	0.29	P 装身具関係?、大型石庖丁、磨石、ト骨
SA64	SA66	7区	D31	4.8	0.66	0.45	0.29	W 石鏝
SA65	SA67	7区	D31	5.0	0.7	0.45	0.22	W 舟、不明木製品
SA66	SA68	7区	D31	7.9	0.4	0.6	0.4	W 舟
SA67	SA69	7区	D30~31	6.4	0.46	0.45	0.34	W 建築部材
SA68	SA70	7区	D31	2.7	0.38	0.34	0.26	W 舟、槽・盤?、武器形、建築部材
SA69	SA71	7区	E31~32	(16.3)	(1.7)	0.6	0.14	W 舟、槽・盤?、武器形、建築部材
SA70	SA73	7区	F31	2.5	0.44	0.5	0.32	W 建築部材
SA71	SA74	7区	D31~32	(12.3)	(1.9)	1.07	0.56	P 舟、槽・盤、建築部材
SA72	SA75	7区	D32	4.5	1.2	0.66	0.4	W 建築部材
SA73	SA76	7区	D31	1.95	0.86	0.4	0.1	W 建築部材
SA74	SA77	7区	D30~31	3.4	0.26	0.73	0.07	W 建築部材
SA75	SA78	7区	D30	4.1	1.24	0.68	0.06	W 建築部材
SA76	SA79	7区	E31~32	4.7	0.46	0.89	-0.31	W 建築部材
SA77	SA80	7区	E32~F32	3.0	0.52	0.62	0.05	W 建築部材
SA78	SA81	7区	E32	4.9	0.56	0.89	-0.16	W 建築部材
SA79	SA82	7区	E31	4.0	0.6	0.99	-0.22	W 建築部材
SA80	SA83	7区	D32	4.0	0.7	0.25	0.0	W 建築部材
SA81	SA84	7区	D32	3.8	0.8	0.33	0.11	W 建築部材
集石9	集石3	8区	E33~34	(9.6)	(6.0)	0.326	-0.872	P 管玉、敲石、台石、砥石、擦痕のある礫
集石10	集石5	7区	D29	1.74	1.5	0.195	0.261	B 刺突具?、骨鏝
集石11	集石6	7区	D29	0.34	0.32	0.098	0.218	P 骨鏝
集石12	集石7	7区	E30	1.78	1.36	0.285	0.146	S 敲石、磨石、砥石、擦痕のある礫
集石13	集石9	7区	D29	0.6	0.38	0.09	-0.067	S 敲石
集石14	集石8	7区	E30	2.15	1.97	0.395	0.278	P 素材礫(ガラス質安山岩)、素材剥片(ガラス質安山岩)
集石15	集石13	7区	D30	3.05	1.04	0.223	-0.269	B 加工痕のある猪牙
集石16	集石12	7区	E30	1.6	1.05	0.157	-0.445	W 建築部材
集石17	集石10	7区	D29~30	2.42	1.95	0.264	-0.062	W 建築部材
集石18	集石15	7区	D29~30	(12.5)	(6.5)	0.551	0.062	W 不明木製品、建築部材
SB6	SB6	6区	H27~28	5.04	2.15	0.6	1.06	P 直状ヤス
木器溜2	木器溜7	7区	E29	6.85	4.85	0.351	0.132	W 炭化米、匙、椀・杯形容器、箱、編物
木器溜3	木器溜1	7区	D30	8.5	7.2	0.82	0.221	W 炭化米、匙、椀・杯形容器、箱、編物
焼土80	焼土82	6区	H28	0.44	0.24	0.06	0.952	
焼土81	焼土84	6区	G28	1.36	0.76	0.086	0.916	
焼土82	焼土85	6区	H28	2.06	0.76	0.06	1.02	
焼土83	焼土86	6区	H28	1.0	0.6	0.16	0.98	
焼土84	焼土87	6区	H28	1.54	0.94	0.5	0.96	
焼土85	焼土89	6区	H28	0.38	0.32	0.8	0.9	
焼土86	焼土90	6区	H28	1.76	0.82	0.16	0.98	
焼土87	焼土92	6区	H27	1.13	0.5	0.08	0.986	
焼土88	焼土93	6区	G29	0.41	0.25	0.32	0.94	
焼土89	焼土95	6区	H28	0.63	0.4	0.117	0.915	
焼土90	焼土96	6区	H28	0.68	0.57	0.065	0.895	
焼土91	焼土97	6区	I27	1.0	0.72	0.1	0.9	
焼土92	焼土98	6区	G28	0.86	0.78	0.098	0.931	
焼土93	焼土100	6区	H28	0.4	0.38	0.18	0.82	
焼土94	焼土101	6区	H28	0.46	0.24	0.36	0.8	
焼土95	焼土106	6区	G28	0.54	0.36	0.3	0.82	
焼土96	焼土108	6区	G28	0.38	0.26	0.6	0.88	
焼土97	焼土110	6区	G28	0.22	0.2	0.1	0.8	
貝溜1	貝溜1	6区	G28	(4.46)	(3.24)	0.14	1.124	S 管玉製作関係、石鏝、扁平片刃石斧、敲石

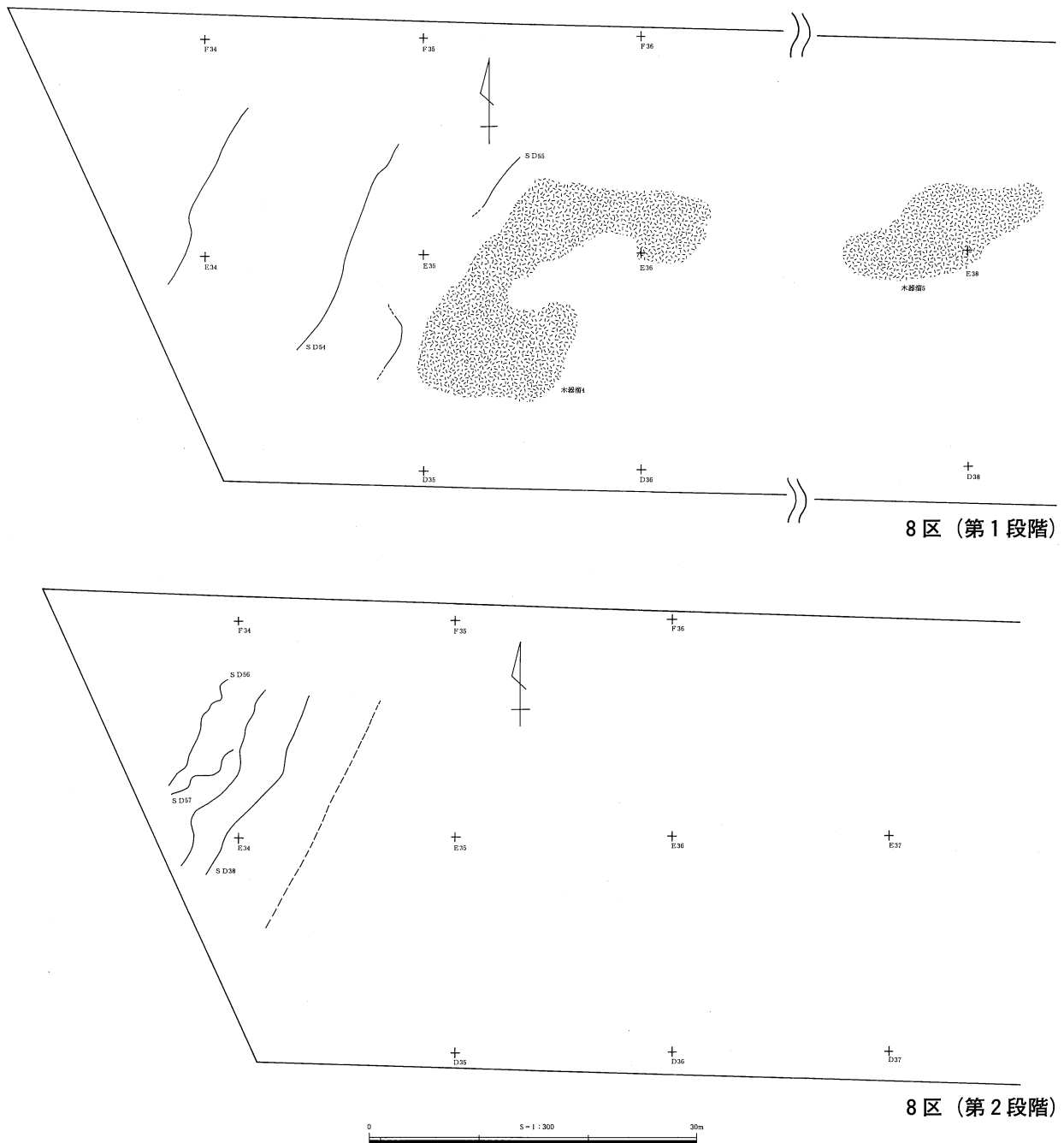
表3 弥生時代中期中葉~後葉遺構一覧表(2)

第3節 弥生時代後期初頭～後葉の遺構

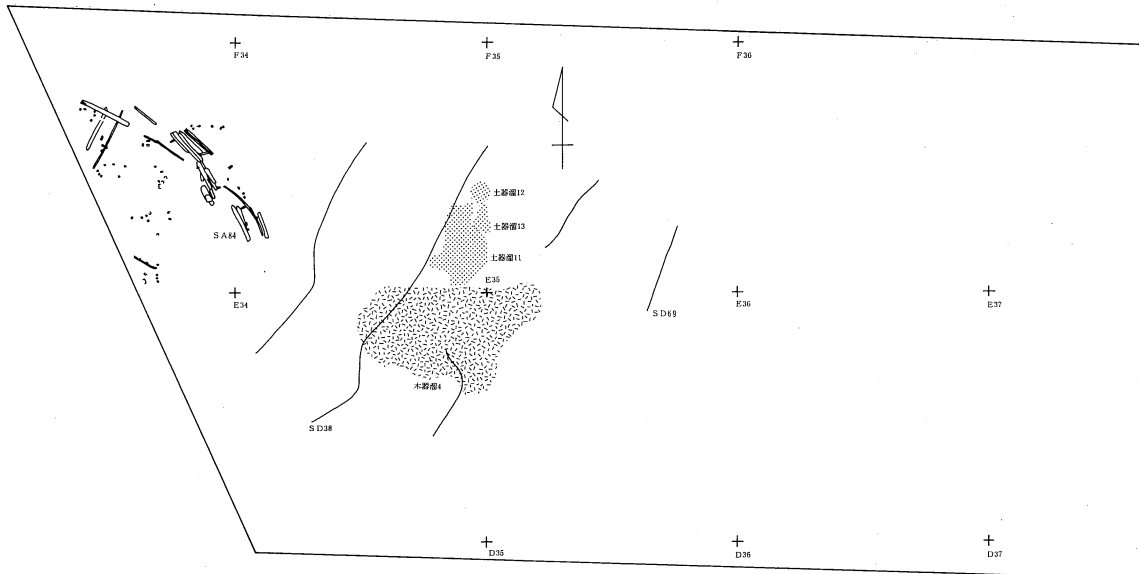
SD38 (第48～63図)

8区西側で検出された溝である。検出位置や南西から北東へ延びる方向性、矢板列の構造、伴出土器から国道調査区4区で検出されたSD38の続きと判断できる⁽¹⁾。矢板列の構造などから3段階の変遷を把握しているが、国道調査区のSD38-1からSD38-3に必ずしも対応しないところがある。以下、最古段階をSD38-1、次をSD38-2、最終段階をSD38-3として記述する。

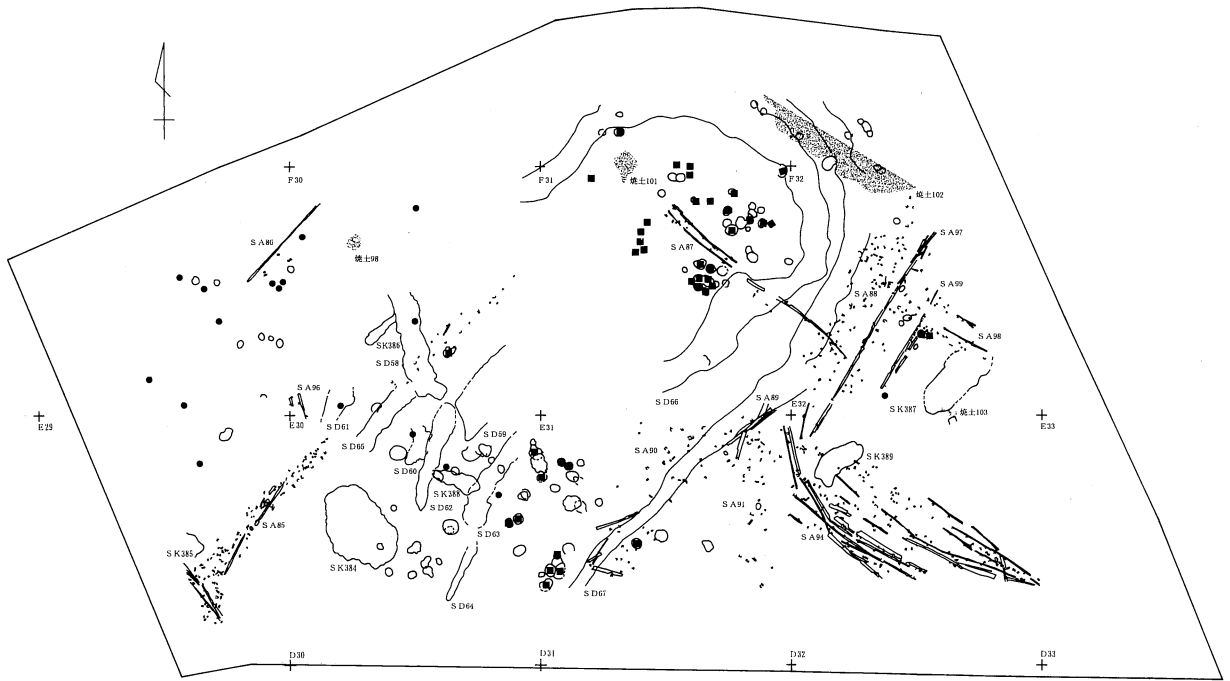
SD38-1は最も微高地寄りに築かれたもので、これ以降の矢板列とは明らかなレベル差をもっている(第48図)。東側の肩は消失しており、本来の規模は分からない。西側肩で板材を横に立て並べ杭で固定した護岸施設を確認している。国道調査区のSD38は中期後葉に遡る段階が想定されているが、ここでは中期の土器との共伴関



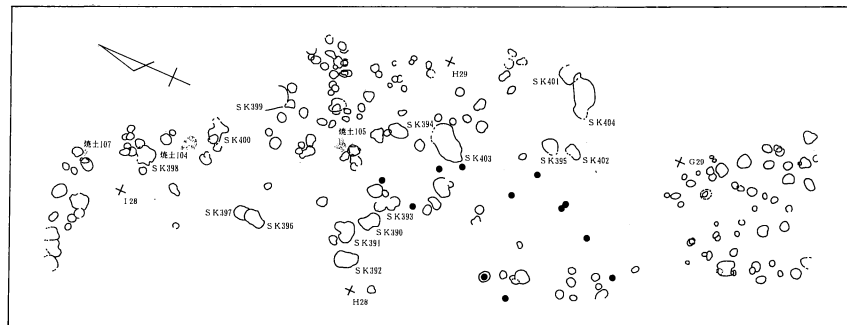
第46図 弥生時代後期初頭～後葉遺構配置図(1)



8区 (第3段階)



7区



6区

第47図 弥生時代後期初頭～後葉遺構配置図(2)

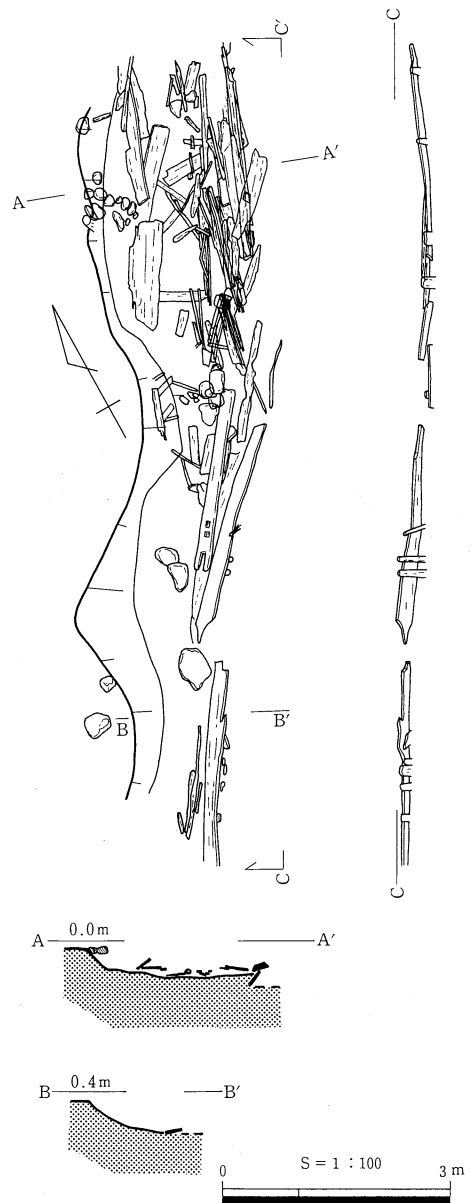
係は捉えられず、むしろ後期初頭～前葉段階（松井V～VI）のものと考えられる。第51図にこの段階の土器の分布状況を示した。これ以降にある程度乱されたであろうが、西側に平面分布が偏り、かつ出土レベルも深い傾向にある。

S D 38-2の護岸施設は前段階よりも東に築かれる（第49図）。板材を横に建て並べるものと矢板を列状に打ち込むものが複数あり、時期的に細分される可能性がある。西肩を確認できなかったが、微高地側に築かれたS A 84がS D 38-2に付随するものと思われることから、矢板列に近い位置に肩をもつのであろう。その結果推定される溝の幅は9mを少し超えるくらいとなる。第52図に示した後期中葉～後葉（松井VII～X）と後期末～古墳前期初頭（松井XI～XIII）の土器分布を見ると、前者は溝全体に分布するのに対し、後者は溝の東側の狭い範囲に偏り、出土レベルも高いことが分かる。S D 38-2に伴うのは前者である。

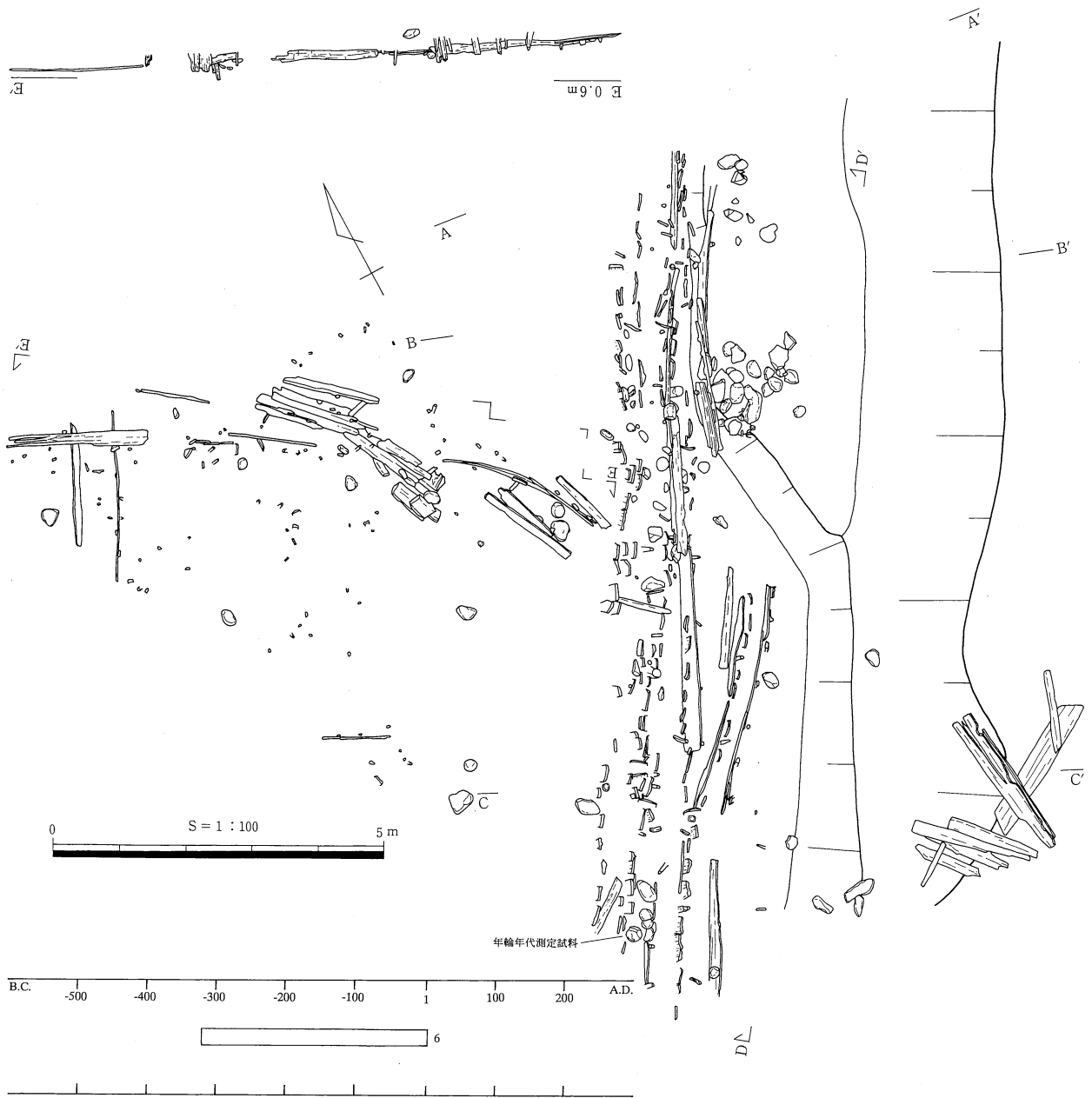
S D 38-3は後期末～古墳前期初頭に至り溝としてはほとんど埋没した段階で、溝の長軸方向に沿って杭を列状に打ち込んでいる。溝の東側に偏って出土した土器は基本的に杭列よりも微高地側に存在しない。S D 38-3には微高地部より直交してS A 82、83が築かれている。この構造物は性格がよく分からないのであるが、前節で述べた中期後葉に次々と作り変えられていったものと同じ構造をもつ。

S D 38の人骨 S D 38から出土した人骨はおよそ5300点、個体数にすれば少なくとも109体分という量である。それらが溝の埋土中に土器などの遺物とともに埋もれていた。発掘時には個体ごとの骨が認識できず散乱状態というイメージを抱いていたが、第4章第1節に述べられるように個体ごとのまとまりがある程度認められるようである。第51、52図で人骨と土器の出土状況を対比した。松井XI～XIII段階の土器は人骨よりも上位にあり、S D 38-3に伴う杭が骨を貫いていた例もあり、この段階にはすでに人骨は溝の中に埋もれていたと分かる。それ以前の段階の双方の分布を照らし合わせた場合、関連が窺えるのは松井VII～Xの段階であり、人骨の埋没時期をここに求めることができる。すなわちS D 38-2の段階がそれに相当する。人骨の表面は風化しておらず、動物の咬痕も基本的に認められないうえ、S D 38-2の矢板列より西に分布しないことから、微高地側から流出したとは考えられない。第52図の断面に見るように人骨の垂直分布は、溝の東側に中央がくぼむように堆積しており、矢板列を含め溝がある程度埋没した段階に残されたようである。きわめて集中的な出土状況は人骨が一度に埋もれたことを示しており、第4章第1節に示されるように殺傷痕以外の刃物キズの存在を考えると、埋葬された遺体が掘り起こされ、再びこの溝に埋められたと理解するのが妥当であろう。先にふれた骨の表面の状態もそれを支持する。掘り起こしは脳組織の一部が遺存していたことから、埋葬直後に行われたと考えられる。それにしてもこのような出土状況はあまり例のあることではなく、加えて人骨に殺傷痕が認められたことから、その解釈が問題となるのである。殺傷痕についても第4章第1節で詳しく述べられているが、銅鏃およびその可能性のあるものの嵌入例のほか鋭利な切り傷（割創痕）、刺し傷（刺創痕）が認められる。S D 38出土人骨については第5章で再論する。

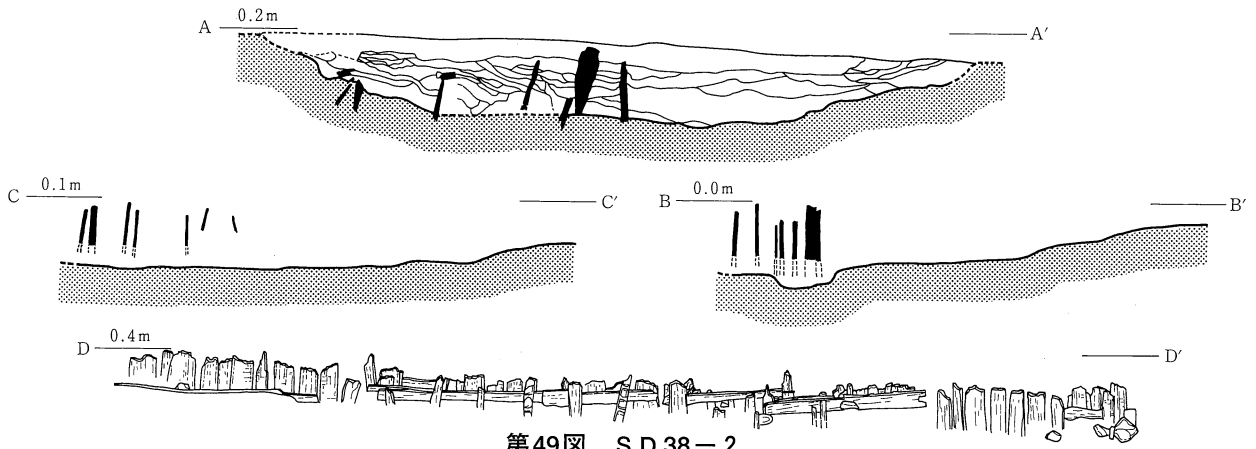
S D 38に伴う遺物 遺物は土器をはじめ、石器・鉄器・青銅器・木器・骨角器・ガラス製品などがある。以下



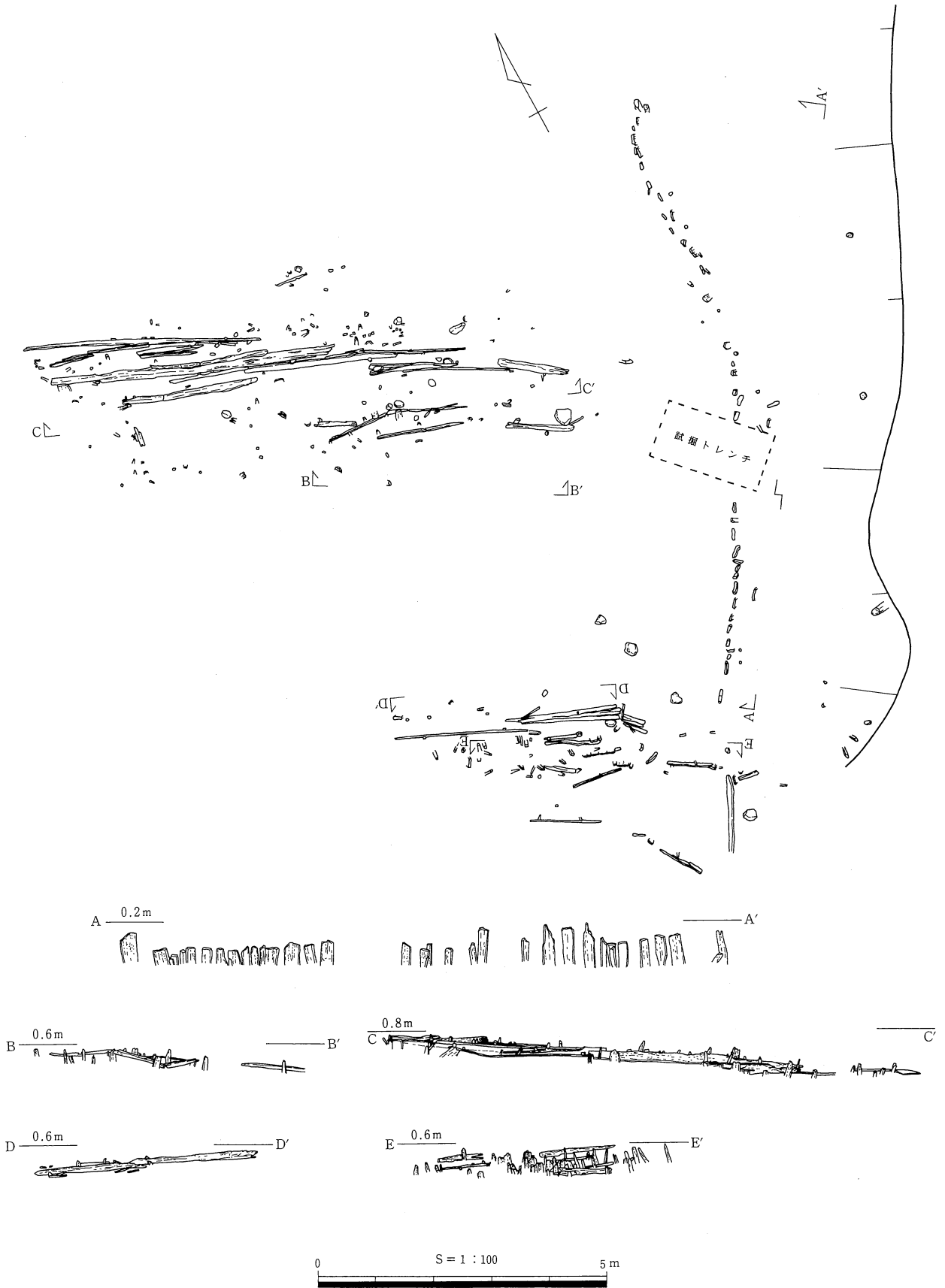
第48図 S D 38-1



試料番号	用材	年輪数	試料の形状	年輪年代	出土状況	取上番号
	杭	322	心材型	6 A. D.	護岸杭	28865



第49図 S D 38-2



第50図 SD 38-3

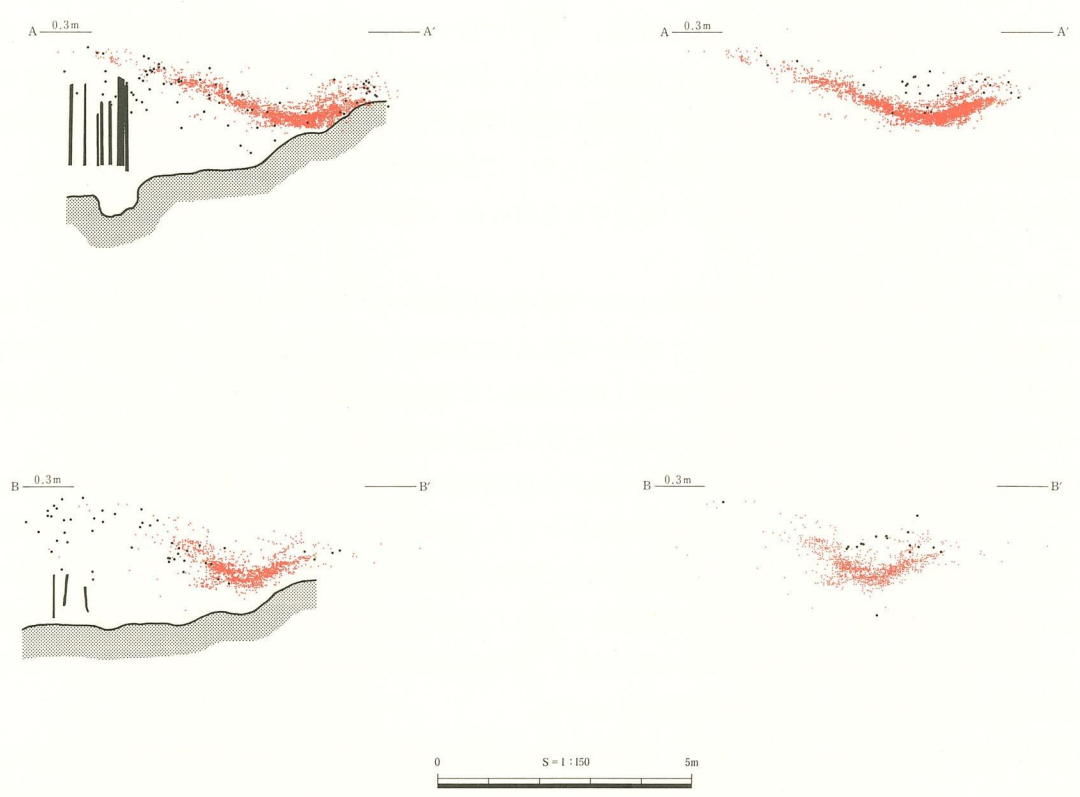


第51図 S D 38-1 遺物出土状況 (1)

※第51、52図はS D 38の各段階の構造物と土器の出土状況(黒点)を示す図面に人骨の分布(赤点)を重ねたものであり、各段階すべてに人骨が伴うわけではない。

概観する。括弧付き番号は本書掲載の遺物番号を示すものである。特徴的なものとして管玉などの装身具を挙げたい。点数でいえば管玉17点・管玉を分割した小玉19点・ガラス勾玉1点・ガラス小玉43点であるが、これらが1ヶ所にまとまっていた例があり注目される。ひとつは管玉1点とそれを分割した小玉19点・ガラス勾玉1点・ガラス小玉22点の計43点が、わずかひと握りの範囲にまとまっていた。もう1例はガラス小玉15点が同じような範囲に認められた。人骨の埋没した過程を考えると、遺体を飾っていた装身具であったものと思われる。管玉は(324)～(330)に、ガラス勾玉は(1)に、ガラス小玉は(5)～(23)に示した。石器はあまり多くないが、敲石が20点出土しているのが注意を引く。2点図示した(66、73)。この他伐採石斧・扁平片刃石斧・砥石が若干認められた。鉄器は袋状鉄斧(21)・刀子(46)・穿孔具(51)・鉄鏃(65)・不明製品(76)の5点が出土した。青銅器は銅鐸の鱗を示した(1)。S D 38-1に伴うものと考えられる。図示していないが人骨に嵌入した銅鏃およびその可能性のあるものが4点ある。木器は大量に出土している。工具3点・農具15点・紡織具1点・漁具1点・武具7点・服飾具2点・食器具4点・容器24点・祭祀具1点・雑具2点を図示した。個別に掲げないので、第3章第6節の各図に対応する一覧を参照されたい。特記すべきものを挙げれば容器類の多さであろう。(239)、(240)に示した台付き装飾壺と蓋のセットや高杯の豊富さは注目できる。骨角器も40点と一定量出土している。そのうちト骨は8点で、国道調査区の13点と合わせS D 38の主要な遺物となっている。

S D 38出土土器 (第54～63図) 第54、55図は壺である。69は内傾して立ち上がる口縁端部に凹線文を施すもので、キザミも加えている。頸部にはハケの原体を用いたと思われる刺突文を施す。頸部より下を欠失するため体部内面のケズリ調整の具合が確認できない。70も肥厚する口縁端部に凹線文を施す。体部内面のケズリは肩部までにとどまる。71も肥厚する口縁端部をもつ。強いナデにより不明瞭となっているが、1条の凹線文を認めることができる。内面のケズリは頸部直下に及ぶ。松井V期に属し、若干遡る可能性もあるものを含む一群である。72～75は松井VI期のものである。72は直立する頸部から外反した後短く立ち上がる口縁部をもち、端部には3状の沈線を施す。73は体



第52図 SD 38-2、3 遺物出土状況 (2)

部中央に最大径をもつが、広い底部を有するため下膨れの印象を与える形状となっている。口縁部は厚く、複合口縁としては未発達である。74は大きく張り出す体部が特徴的である。口縁部の立ち上がりも弱い。75は体部上半に最大径をもち、なだらかにすぼまり底部に至る。他のものに比べ複合口縁としての特徴を備えてはいるが、立ち上がりはやはり短い。端部には3条の沈線を巡らせる。

76、77は斜め上方へ立ち上がる複合口縁に多条化した沈線を施すもので、松井Ⅶ期に属する。76は頸部に突帯を有する稀有な例である。バランスよく丸く整形された体部に突出する平底が付く。77の口縁部の立ち上がりはやや短い、沈線は多条化している。78は厚めに作られた口縁部外面を横方向のヘラミガキで仕上げるもので、松井Ⅹ期のものか。79は小型のもので、球状の体部に短く外半する口縁部をもつ。内外面とも細かなヘラミガキで調整される。鈕孔と思われる小孔を頸部に穿つ。81～83は台付装飾壺またはそれに関係するものである。82は低い器体に大きく張り出す体部をもつ。口縁部は短く立ち上がり、低い脚部が付く。体部外面には沈線で区切られた文様帯に貝殻腹縁による刺突文を飾る。83も同じような器形だが82ほど扁平ではない。体部外面は沈線、貝殻腹縁による刺突文のほかにスタンプ文を駆使してにぎやかに飾る。81は装飾壺というまでのものではないが、貝殻腹縁による刺突文をもち、似たような機能をもたせたものだろうか。

84は松井ⅩⅠ期以降に属すると思われる。ラッパ状に高く立ち上がる口縁部が特徴で、あまり見かける形態ではない。口縁部外面には刺突文とスタンプ押捺による竹管文を加える。

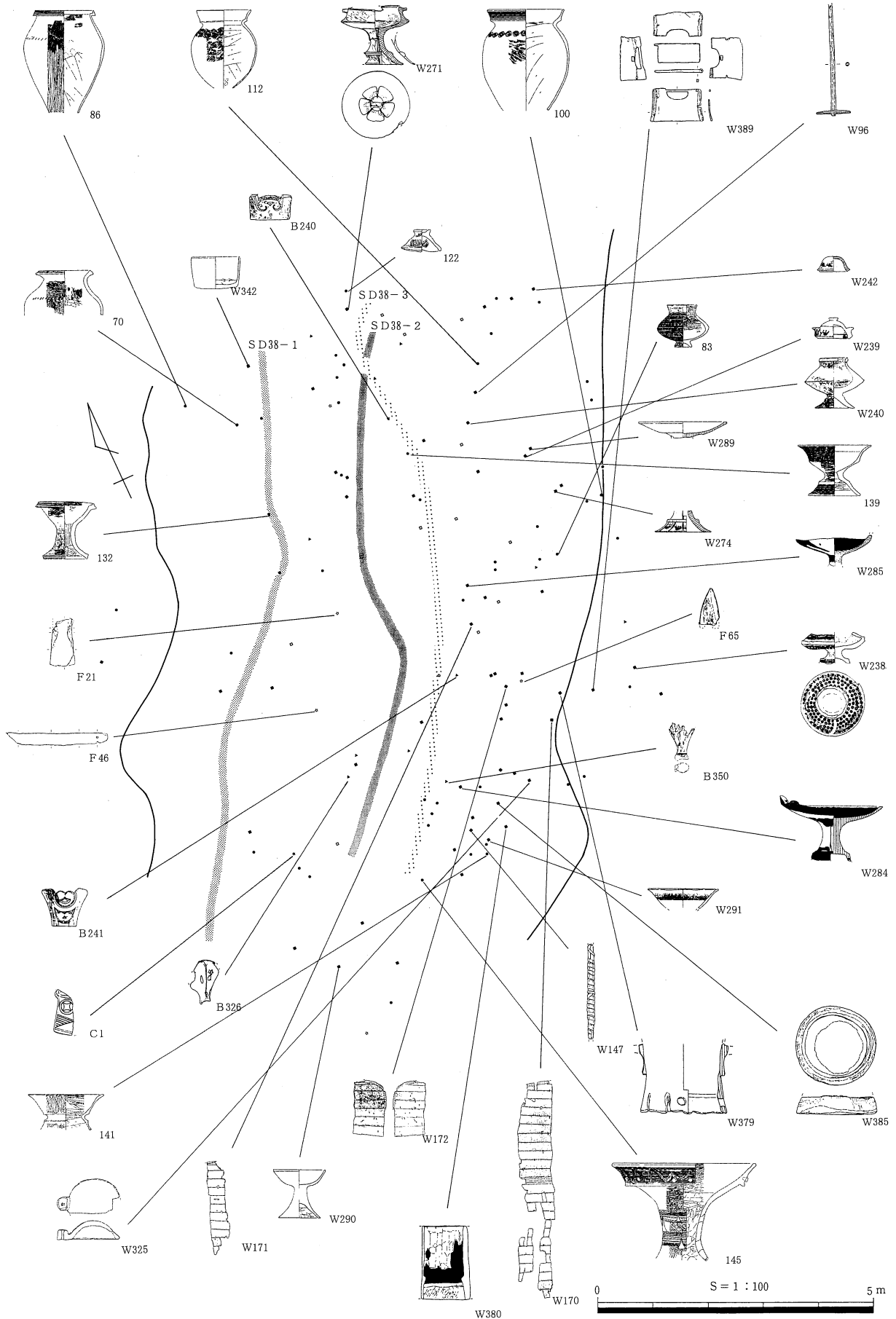
第56～59図は甕である。85～91は口縁端部を肥厚または拡張させ、凹線文を施すものである。85、86は体部内面のケズリ調整が上半に及ばない。SD 38は国道調査区4区に続く溝であるが、その初源のSD 38-1は中期後葉に遡ると報告されている⁽²⁾。この2点はそれを表すものかもしれないが、県道調査区では中期の土器のみを純粹に伴う段階は確認しておらず下位の遺物包含層のものを取り込んだ可能性も否定できない。87以下は松井Ⅴ期に属する。92～94は複合口縁成立段階のもので、松井Ⅵ期に相当する。いずれも口縁部外面には数条の沈線を施す。93の肩部には刺突文が連続的に巡る。

95～102は口縁部が斜め上に延び、多条沈線が施される松井Ⅶ期のものである。98のように波状沈線の場合もある。肩部にも櫛状工具による押し引き文や多条沈線などが施される。100にはスタンプによる連続渦文が認められる。103、104は口縁部外面の多条沈線を施文後、一部ナデ消す。103は体部上半に最大径をもち、大きく張らないまま平底へと至る。104は口径に比して体部が小さい。最大径が肩部に位置し、そのまま底部へきつくすぼまる。ともに松井Ⅷ～Ⅹ区に相当する。105～110は口縁部外面をナデ調整により仕上げる松井Ⅹ期のものである。口縁部が厚手で短く立ち上がるものとそうでないものとに分けられる。107は器体がやや歪んでおり、体部の一部が発泡している。二次的に熱を受けているものと思われる。口縁部形態も内湾して立ち上がる点が他と異なる。

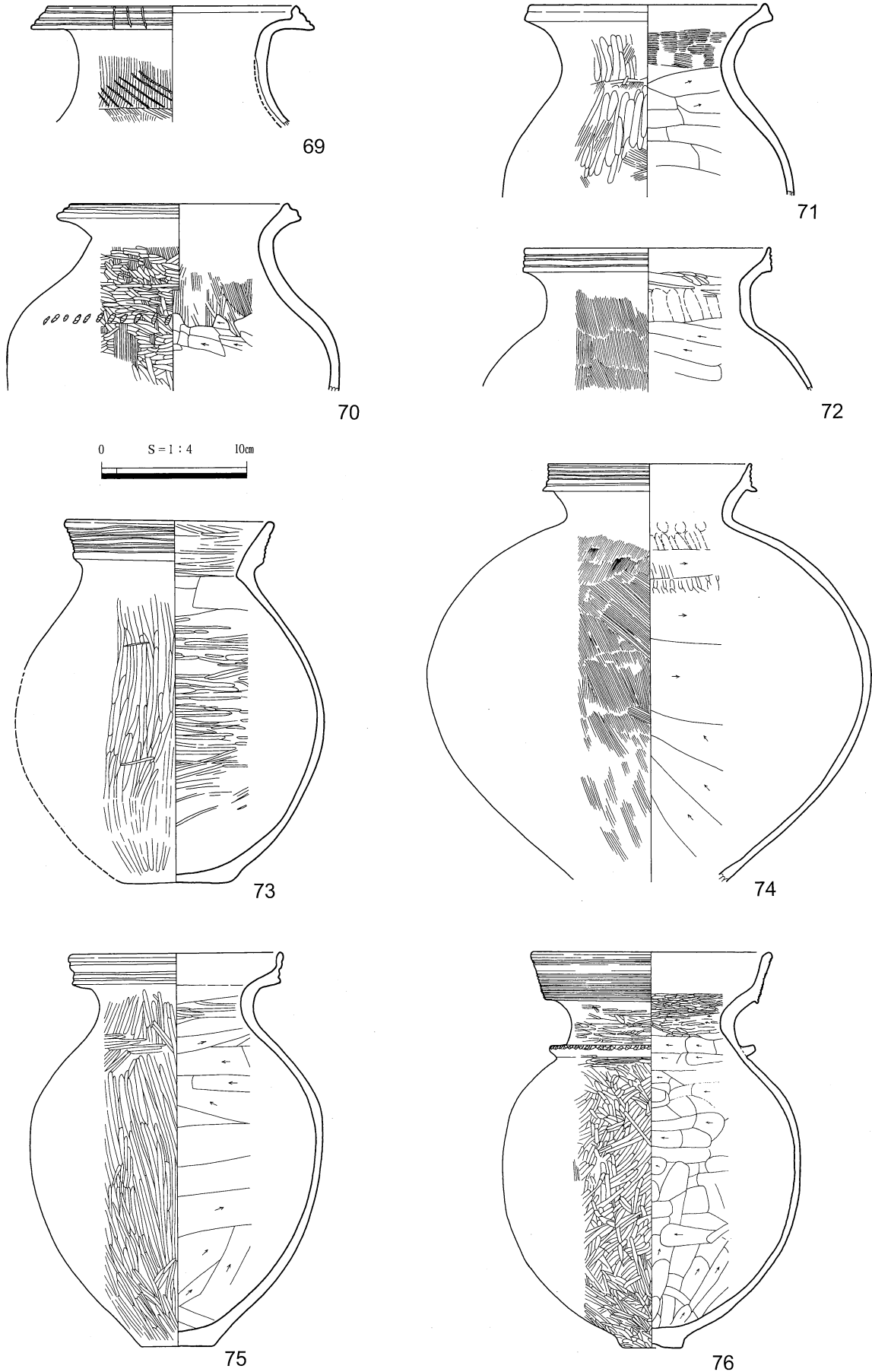
111～115は松井ⅩⅠ期以降のもので、従前のものと違い体部内面のヘラケズリが右方向に変わる。111は同一個体であるが接合しないため、図上で復元している。体部上半に最大径をもち、底部にかけてきつめにすぼまる。底部は完全な丸底ではなく、平底を痕跡的に残す。内面底部には指頭圧痕を顕著に認める。112は尖り気味の底となるものか。113の口縁部には肩部に施されたものと同じ沈線を波状に描く。

116～120には鉢を掲げた。116は外方に長く立ち上がる複合口縁を有し、多条の沈線を施す。体部はやや扁平な球状で、これだけでは自立しない。117も複合口縁となるが、器体全体が小さいこともあってか、口縁部の立ち上がりも短い。沈線は3条を数えるのみである。118は複合口縁状に立ち上がり、端部を肥厚させ3条の沈線を加える。口径の割に体部は低く、浅い椀形の器体を呈する。これら3点は内外面ともにヘラミガキを駆使して丁寧に仕上げている。119は小型の器形に広い底部と短く外半するだけの口縁部をもつ。120は低く作り出された脚部から若干内湾しながら立ち上がる椀形の体部を有する。

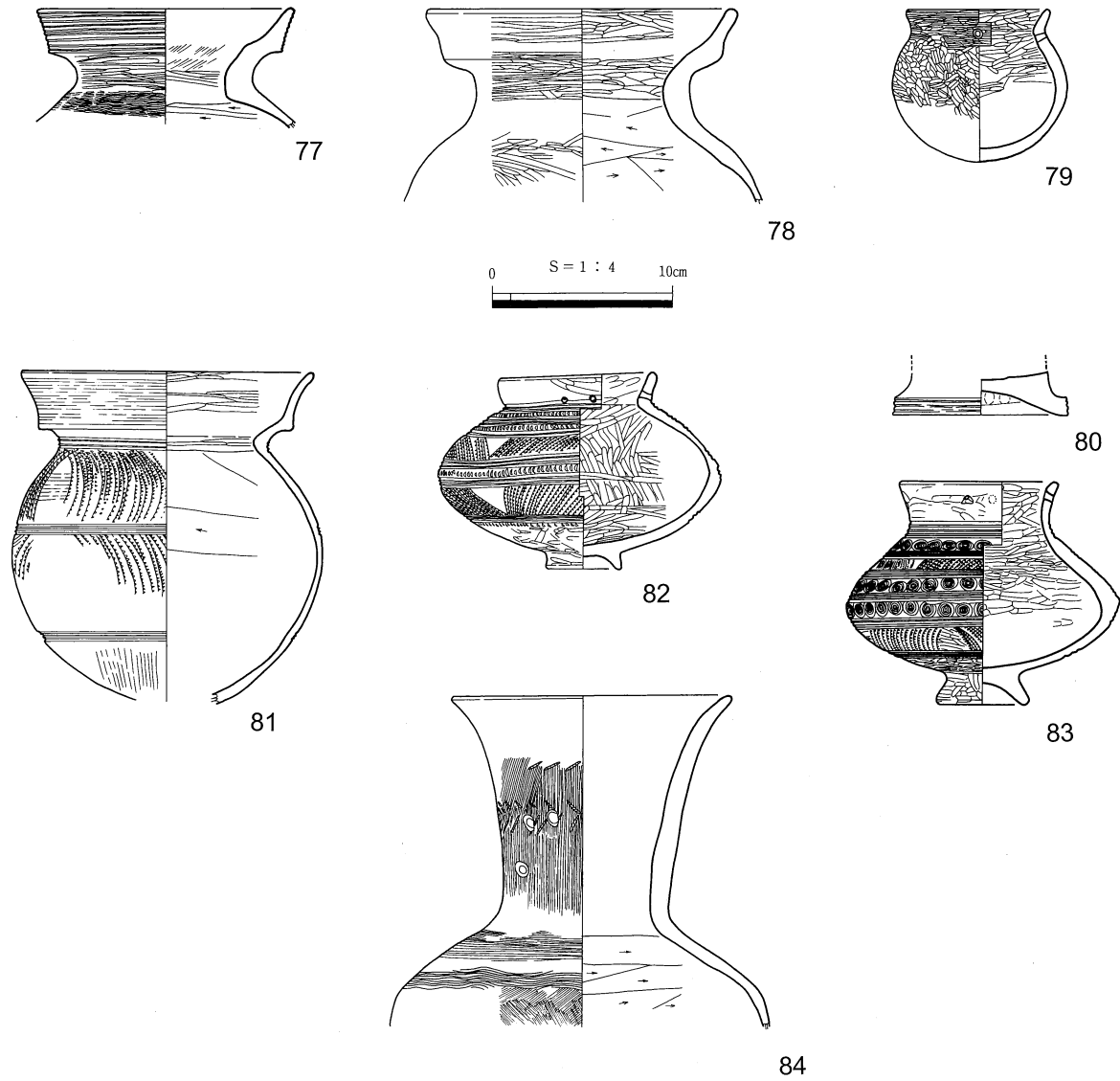
121～125は蓋で、121は小型のものである。整形時の指頭圧痕を明瞭に残す。122は器体が著しく歪み、器面に発泡が見られる。107同様二次的に熱を受けているものと思われるが、これだけ変形するほどの熱を受ける状況というのはどのような場合であったのだろうか。123以下はほぼ同形態の蓋である。123、124は細かなヘラミ



第53図 SD 38遺物出土状況 (3)

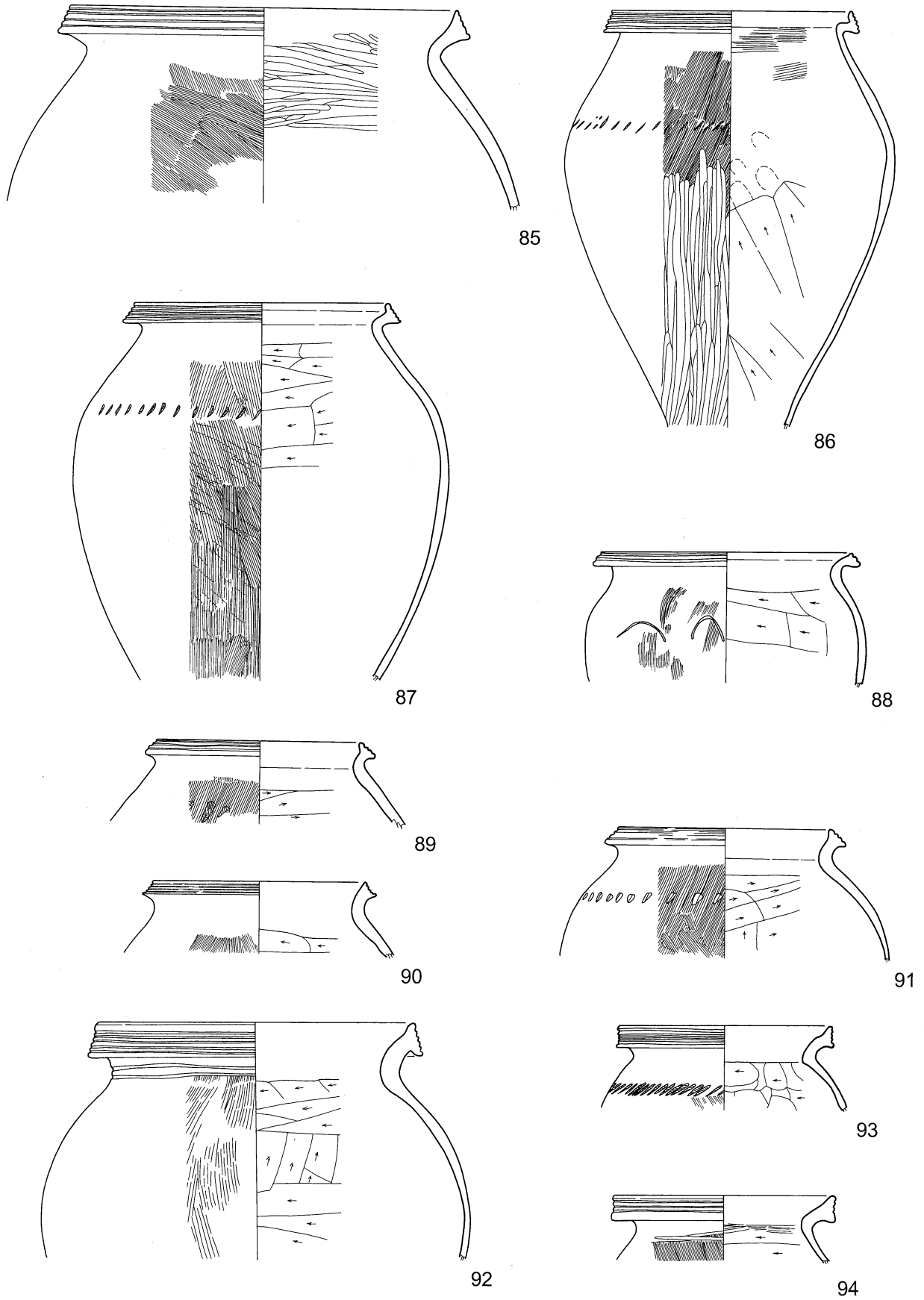


第54図 S D 38出土土器 (1)

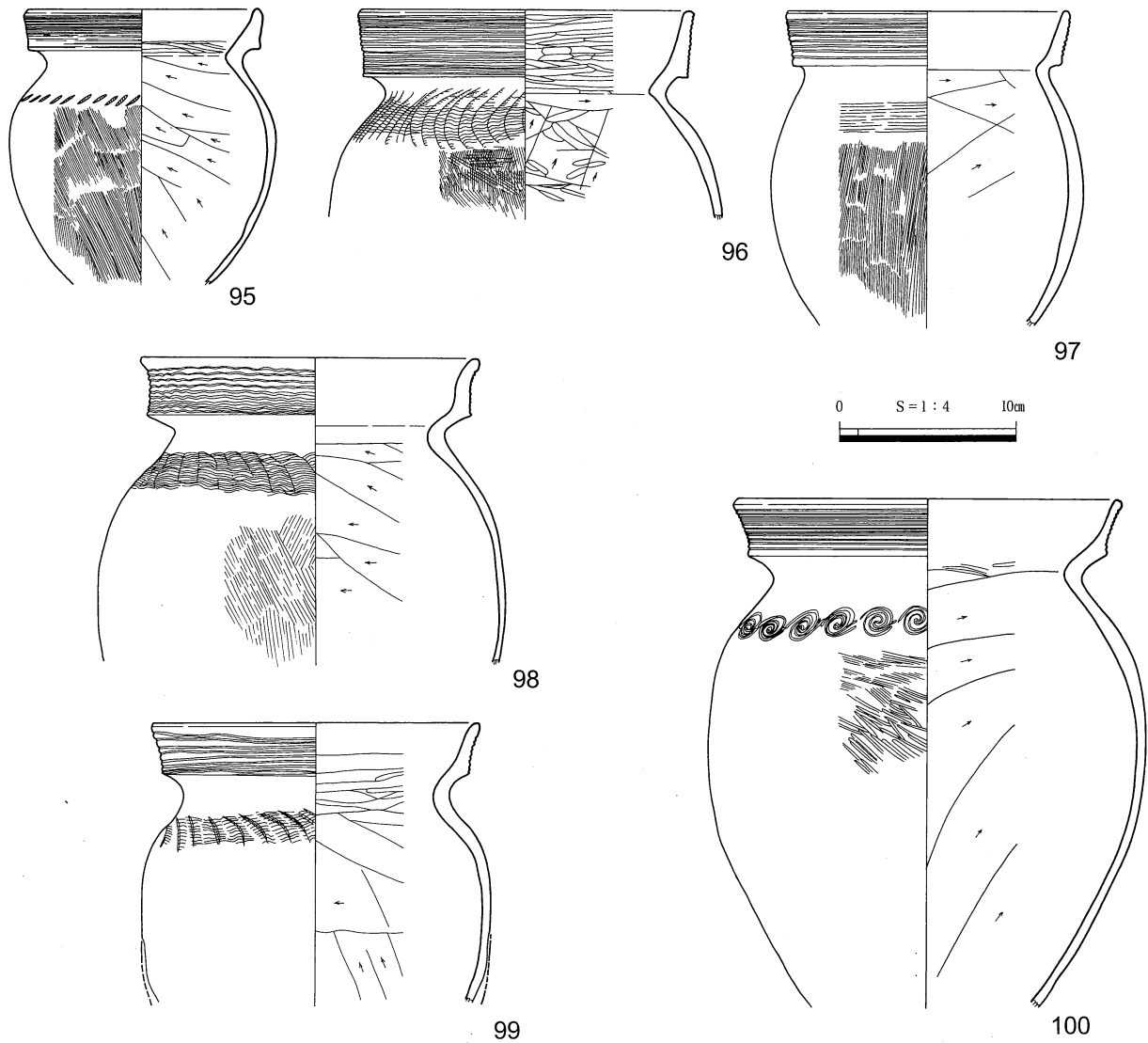


第55図 S D 38出土土器 (2)

挿図番号	遺構	器高	口径	底径	施文・調整	取上番号
69	SD38	(8.0)	(17.3)	—	口縁部凹線文後キザミ、頸部刺突文、体部外面ハケ後ヘラミガキ、内面ヘラケズリ、口縁部ナデ	28963
70	SD38	(12.9)	(17.1)	—	口縁部凹線文、体部外面ハケ後ヘラミガキ、内面ハケ後肩部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	30418
71	SD38	(15.4)	(16.5)	—	口縁部凹線文後ナデ、体部外面ハケ後ヘラミガキ、内面ハケ後頸部以下ヘラケズリ、口縁部内面ハケ後ナデ	30311
72	SD38	(9.8)	(17.0)	—	口縁部平行沈線文、体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ、内面頸部ユビオサエ、口縁部ナデ	28545
73	SD38	(25.5)	(14.5)	7.4	口縁部平行沈線文、体部ハケ後ヘラミガキ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部内面ヘラミガキ	33429
74	SD38	(29.2)	(14.2)	—	口縁部凹線文、体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	33166
75	SD38	(27.5)	(14.8)	5.0	口縁部平行沈線文、体部外面ハケ後ヘラミガキ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	28638
76	SD38	27.7	16.9	4.3	口縁部多条平行沈線文後一部ナデ消し、頸部貼付突帯文、体部ハケ後ヘラミガキ、内面頸部以下ヘラケズリ	27085
77	SD38	(6.3)	(14.1)	—	口縁部多条平行沈線文、肩部押引文、体部内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	28514
78	SD38	(10.6)	(17.2)	—	体部外面ヘラミガキ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部内面ヘラミガキ、外面ナデ後一部ヘラミガキ	33432
79	SD38	8.3	8.0	—	体部外面・口縁部内外面ヘラミガキ、体部内面頸部以下ヘラケズリ後ヘラミガキ	33175
80	SD38	(2.4)	—	(9.6)	脚台部平行沈線文、内外面ナデ	30050
81	SD38	(18.1)	(16.2)	—	口縁部多条平行沈線文、体部平行沈線文・刺突文、体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ後ナデ、口縁部内面ヘラミガキ	28569
82	SD38	10.9	8.8	4.2	頸部・体部外面平行沈線文・刺突文、内外面ヘラミガキ	34524
83	SD38	(10.2)	(8.8)	—	頸部・体部外面平行沈線文・スタンプ文・刺突文、内外面ヘラミガキ	33454
84	SD38	(18.4)	(16.5)	—	頸部刺突文・スタンプ文、肩部波状沈線文・平行沈線文、体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ	27334

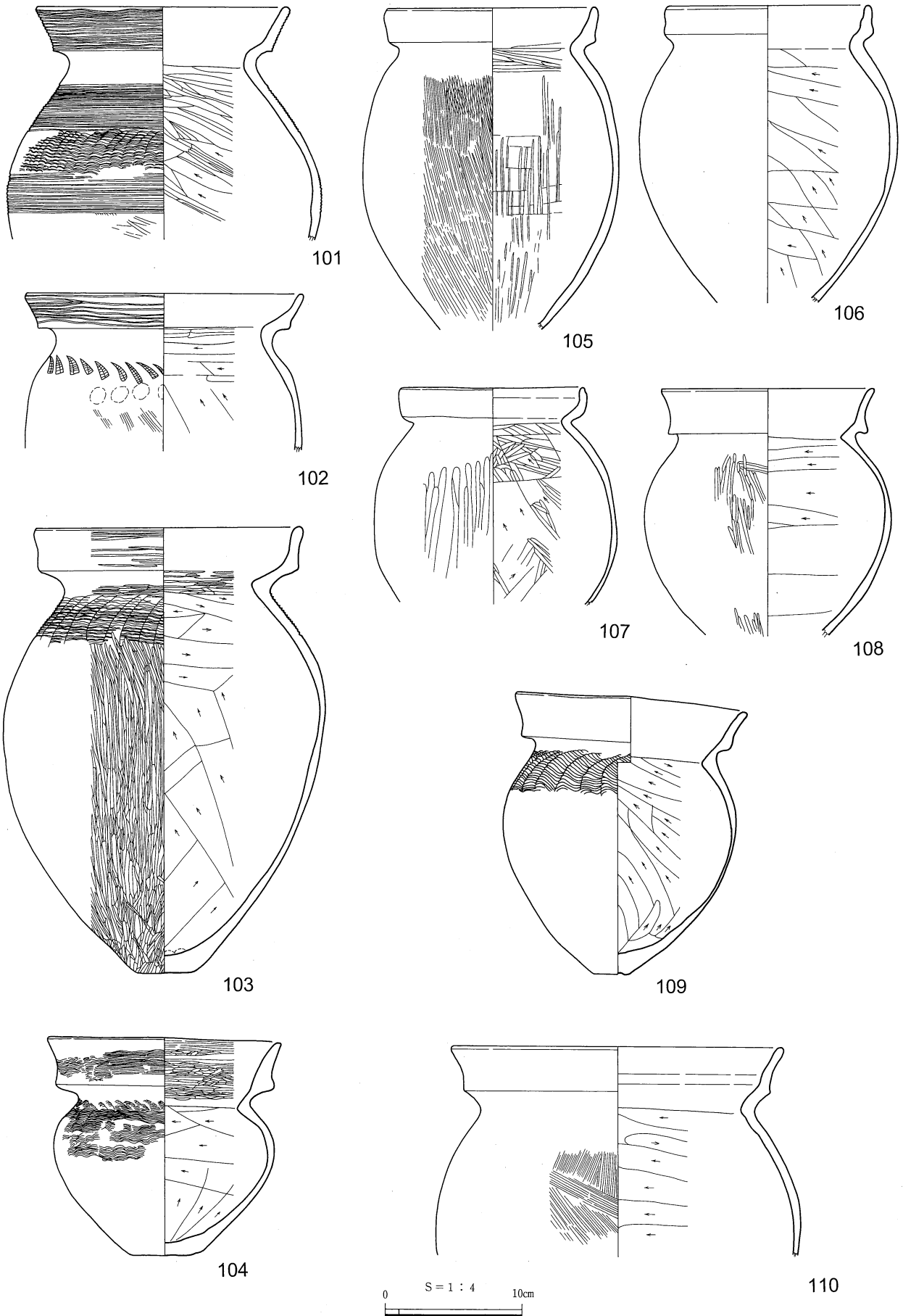


第56図 S D 38出土土器 (3)



第57図 S D 38出土土器 (4)

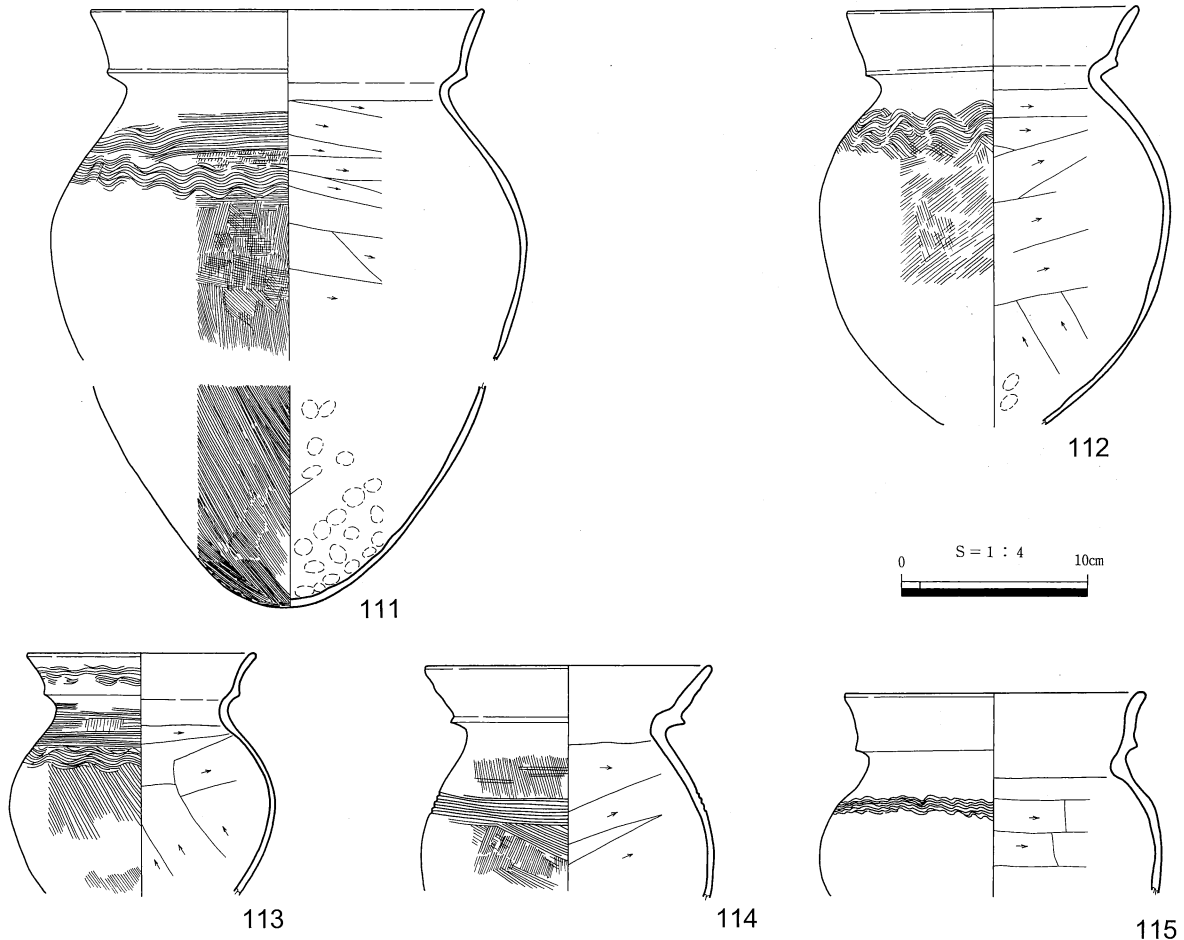
挿図番号	遺構	器高	口径	底径	施文・調整	取上番号
85	SD38	(14.8)	(27.6)	—	口縁部凹線文、体部外面ハケ、内面肩部以下ヘラケズリ後ヘラミガキ、口縁部ナデ後ヘラミガキ	28529
86	SD38	(29.6)	(17.0)	—	口縁部凹線文、体部外面ハケ後半ヘラミガキ、内面ハケ後肩部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	33014
87	SD38	(26.9)	(17.8)	—	口縁部凹線文、肩部刺突文、体部外面タタキ後ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ後ナデ、口縁部ナデ	28632
88	SD38	(9.4)	(17.7)	(19.6)	口縁部凹線文、肩部刺突文、体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	28533
89	SD38	(5.9)	(14.6)	—	口縁部凹線文、肩部刺突文、体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	28504
90	SD38	(5.1)	(15.0)	—	口縁部凹線文、体部外面ハケ、内面肩部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	28589
91	SD38	(9.1)	(15.1)	—	口縁部凹線文、肩部刺突文、体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	28590
92	SD38	(16.9)	(22.6)	—	口縁部平行沈線文、体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	28613
93	SD38	(5.8)	(15.2)	—	口縁部平行沈線文、肩部刺突文、体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	30419
94	SD38	(4.6)	(15.7)	—	口縁部平行沈線文、体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ハケ後ナデ	28508
95	SD38	(15.8)	(13.0)	—	口縁部多条平行沈線文、肩部刺突文、体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ヘラミガキ	28976
96	SD38	(11.9)	(19.4)	—	口縁部多条平行沈線文、肩部押引文、体部外面ハケ後ヘラミガキ、内面頸部以下ヘラケズリ後ヘラミガキ、口縁部内面ヘラミガキ	27048
97	SD38	(18.1)	(16.0)	—	口縁部多条平行沈線文、体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	28642
98	SD38	(17.3)	(19.5)	—	口縁部多条平行沈線文、口縁部・肩部波状沈線文、体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	27311
99	SD38	(16.2)	(18.9)	—	口縁部多条平行沈線文、肩部刺突文、体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ後ナデ、口縁部ヘラミガキ	33168
100	SD38	(29.5)	(22.1)	—	口縁部多条平行沈線文、肩部スタンプ文、体部外面ハケ後ヘラミガキ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	33430



第58図 S D 38出土土器 (5)

ガキで仕上げられている。

第61図には高杯を示した。126は口縁部下端が鋭く突出し、大きく外半しながら開いた後、端部を上方へ折り返し面を作る。この端部には3条の沈線を巡らせ、突出させた下端部にはキザミを施す。脚柱部は長く直立し、4方向に透かし孔をもつ脚裾部の端部にはやはり面を形成し、強いナデにより沈線状の凹みを1条巡らせる。127も全体の形状は126と似ているものの、杯部や脚裾部いずれも端部に面は作り出さない。128、129の杯部も斜め外方へ向けて開いた後、屈曲部を経て外半する。口縁下端は強く突出しない。130は内湾気味に大きく開く杯り



第59図 SD38出土土器(6)

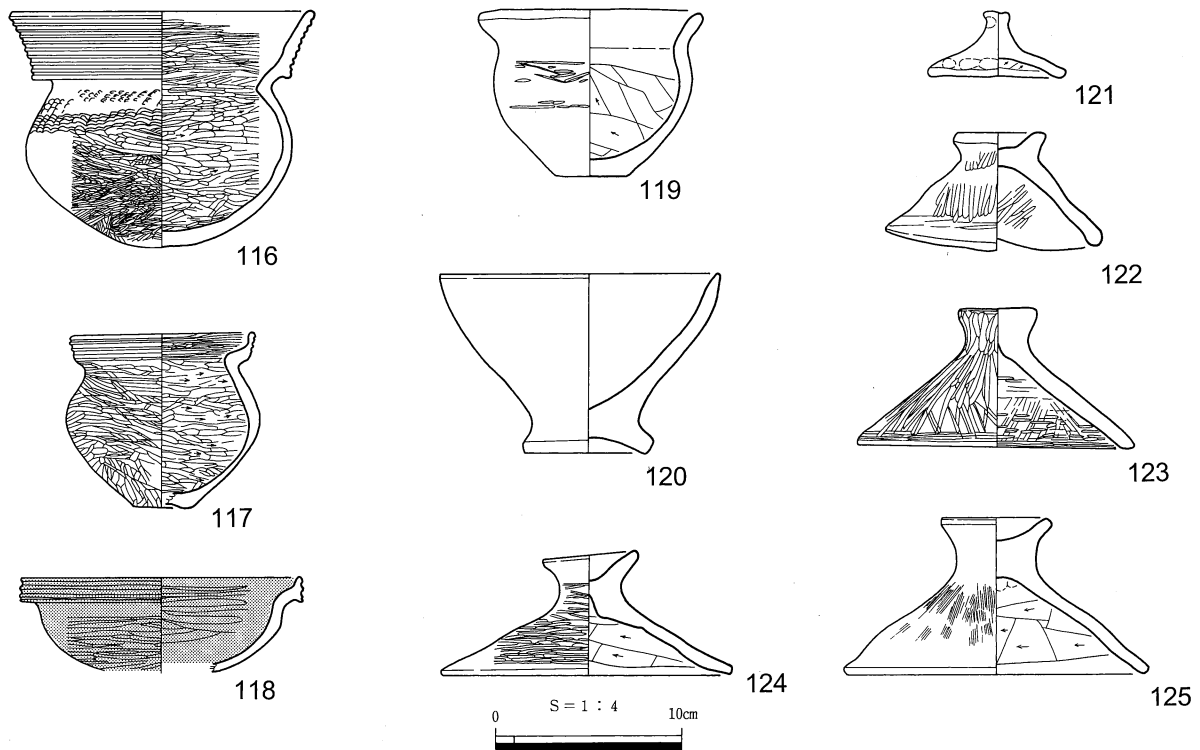
挿図番号	遺構	器高	口径	底径	施文・調整	取上番号
101	SD38	(17.0)	(18.6)	—	口縁部多条平行沈線文、肩部波状沈線文・平行沈線文、体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ後ナデ、口縁部ナデ	29194
102	SD38	(11.4)	(20.0)	—	口縁部多条平行沈線文、肩部刺突文、体部内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ、内面頸部ヘラミガキ	28588
103	SD38	32.7	(19.2)	4.8	口縁部多条平行沈線文をナデ消し、肩部押引文、体部外面ヘラミガキ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	28504
104	SD38	15.9	17.0	5.4	口縁部・肩部波状沈線文、口縁部一部ナデ消し、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部内面ハケ後ヘラミガキ、底部被熱により発泡・変形	30090
105	SD38	(23.6)	15.4	—	体部外面ハケ、体部内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	28511
106	SD38	(21.8)	(14.6)	—	体部内面ヘラケズリ後ナデ、口縁部ナデ	30248
107	SD38	(15.6)	(13.8)	—	体部外面ハケ、体部内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ、体部被熱により一部発泡・変形	30091
108	SD38	(18.0)	(15.5)	—	体部外面ハケ後ヘラミガキ、体部内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	29173
109	SD38	20.7	16.8	2.7	肩部押引文、体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	30384
110	SD38	(15.2)	(24.2)	—	体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	27981
111	SD38	(18.8)	(21.2)	—	肩部波状沈線文、体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	26757
112	SD38	(22.6)	(15.5)	—	肩部波状沈線文、体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	27032
113	SD38	(13.0)	(12.4)	—	口縁部波状沈線文、肩部平行沈線文・波状沈線文、体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	27029
114	SD38	(12.5)	(15.4)	—	肩部平行沈線文、体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	26714
115	SD38	(11.0)	16.1	—	肩部波状沈線文、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	27967

部で、脚部は完存しないが、脚柱部の広がり強く、器高はそう高くないのであろう。131は小型の器台型高杯である。浅い碗形に開く杯部と脚裾部の広がり特徴的である。松井XⅡ期より認められる器種である。

132～142、145、146は器台である。132は器受部の端部を拡張するだけのもので、凹線文を加える。133も複合口縁状となるが、上方への拡張は弱い。器受部、脚裾部とも数条の沈線を施す。134～138は多条沈線を施すものである。134、135は図上でうまく復元できないが、同一個体ではないかと思われるものである。脚柱部にも沈線が施され、透かし孔も認められる。139は脚柱部の短いものである。器受部、脚裾部ともに多条沈線を施し、その後ナデているが、沈線を消すには至っていない。140は器受部を失う。外面に沈線は認められず、細かなヘラミガキを施している。141、142は脚柱部が見られないほどになる、いわゆる鼓形器台である。一般にこの形態のものは外面ナデ調整で仕上げるが、141はヘラミガキの痕跡を明瞭に残す。

第63図には大型器台を掲載した。とくに146は器高44cm、口径46cm、底径31cmと超大型である。ともに多波状沈線を施し、器受部には円形浮文を貼り付け、さらに脚柱部には2段の透かしを設けるなど、装飾性に富んでいる。この大型器台は山陰でも東伯耆に集中して見られ、また時期的にも限定されるという指摘がある⁽³⁾。本遺跡は因幡に属するが、東伯耆との境に位置するためこうした特殊な器種を伴っているのだろう。

S D 38の性格 国道調査区の報告においては、この溝が常に水を流す性格をもっていたかは疑問であるとし、

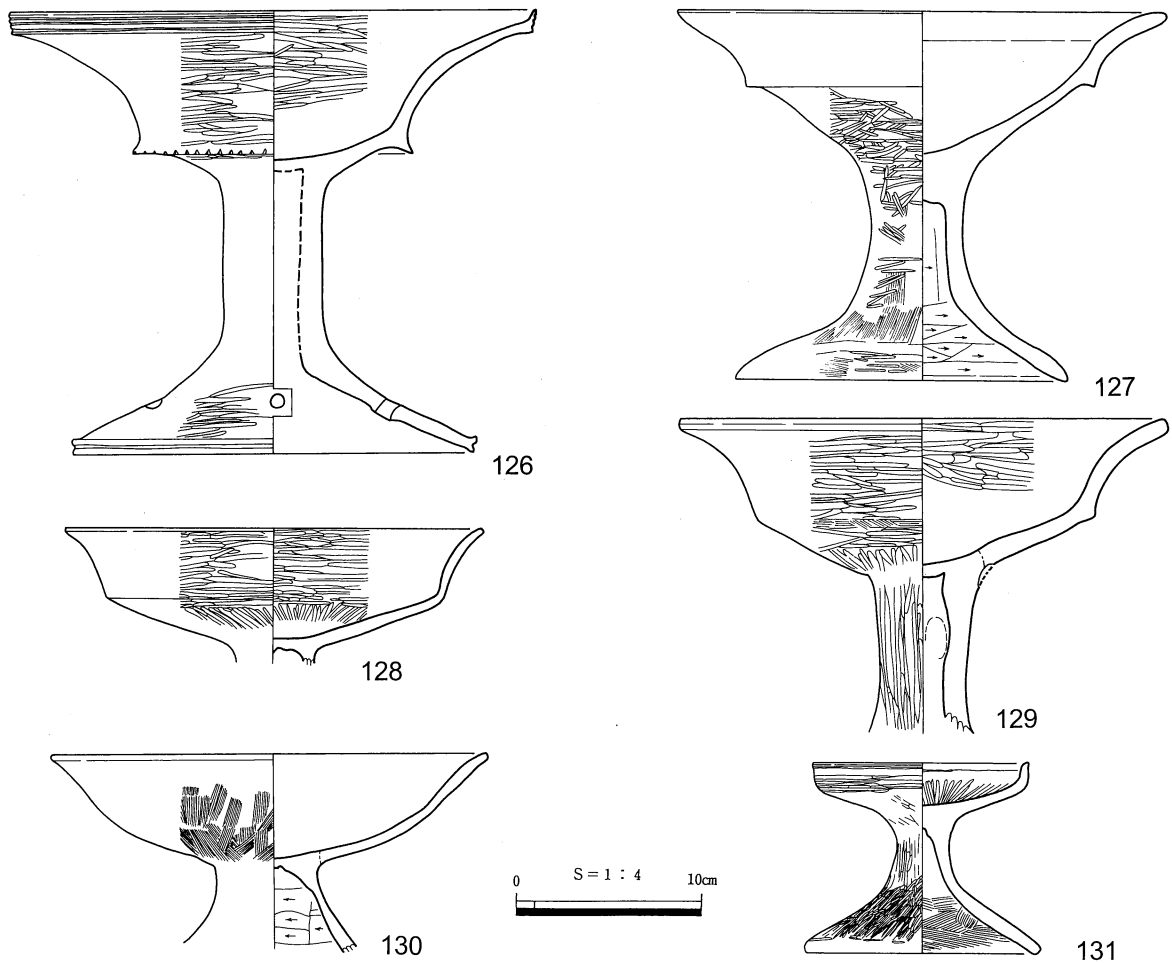


第60図 S D 38出土土器 (7)

挿図番号	遺構	器高	口径	底径	施文・調整	取上番号
116	SD38	(12.7)	(16.4)	—	口縁部多条平行沈線文、肩部押引文、体部外面ヘラミガキ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部内面ヘラミガキ	26781
117	SD38	(9.6)	(10.0)	(3.0)	口縁部平行沈線文、外面・口縁部内面赤彩、体部外面ヘラミガキ、内面頸部以下ヘラケズリ後ヘラミガキ、口縁部内面ヘラミガキ	28931
118	SD38	(5.1)	(15.1)	—	口縁部平行沈線文、外面・口縁部内面赤彩、体部内外面ヘラミガキ後ナデ	28901
119	SD38	9.0	12.2	4.1	体部外面・口縁部内外面ナデー部ヘラミガキ、体部内面頸部以下ヘラケズリ	30050
120	SD38	9.8	15.0	6.5	体部内面ナデ	30092
121	SD38	3.6	7.5	1.4	内外面ユビオサエ後ナデ、内面ヘラケズリ?	33060
122	SD38	6.4	(11.6)	5.1	外面ハケ後ヘラミガキ、内面ヘラケズリ後ナデ、被熱により発泡・変形	29422
123	SD38	7.5	(15.0)	4.2	外面ハケ後ナデ、内面ヘラケズリ後ナデ	33165
124	SD38	6.7	(15.5)	5.4	外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ後ナデ	30057
125	SD38	8.5	(16.4)	6.0	外面ハケ後ナデ、内面ヘラケズリ後ナデ	26663

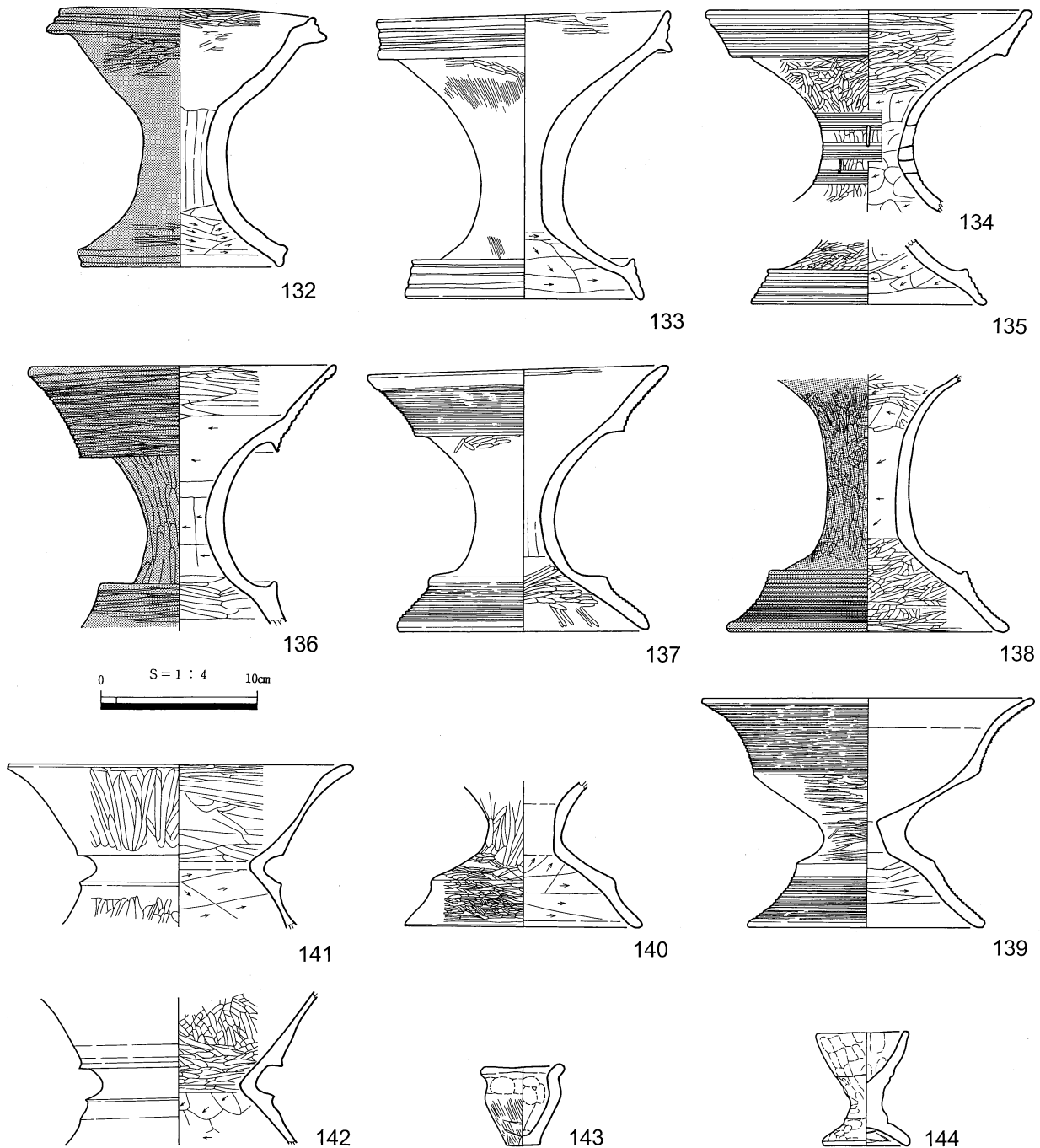
人為的に埋められていく過程で祭祀行為を行う場でもあったと推測している。確かに今回報告する部分においても多種多量の遺物が出土しており、それらが自然に堆積していったとは考えにくい。ト骨も顕著であった。しかしそれは本来の機能を失った段階の二次的な性格であり、本来掘削された意味は別に考える必要がある。SD38と同じ時期の溝で、規模や矢板列の構造が同じものがある。微高地西側を画するSD11がそれで、掘削の時期と埋没の時期はSD38と同じである⁽⁴⁾。微高地南側でこれに直交する方向に検出されたSD33も同様である。これらは様子の分からない北側を除き微高地縁辺をコの字状に巡り、環濠と呼んで差し支えないと思う。区画のためか防御の性格も併せもっていたか、それは不明であるが、当初の機能は環濠であったのだ。幾重にも打たれた矢板列はSD11の県道4区検出部でのあり方を考えると興味深い。ここでは集落の出入り口かと思われる範囲を境に矢板列の角度がはっきりと変化しており、護岸施設の作り変えといった時期差を表すものではなく、少なくともある時期には複数列設けられていたことを教えてくれる⁽⁵⁾。これは明確な区画の表現と理解したい。

SD11とSD33は調査した範囲内ではつながっておらず、SD11はさらに南へ延びている。SD33は幅が少し狭いこともあり、環濠内をさらに区画する溝とも考えられる。やがて環濠は埋まるにまかせられ本来の機能を失っていく。国道調査区1区で検出されたSD11の矢板列は調査区南端で溝の延びる方向から外れ微高地内へ大きくカーブする。県道調査区8区のSD38-3の杭列と同じ性格であるならば、区画の方法が環濠から杭列(柵



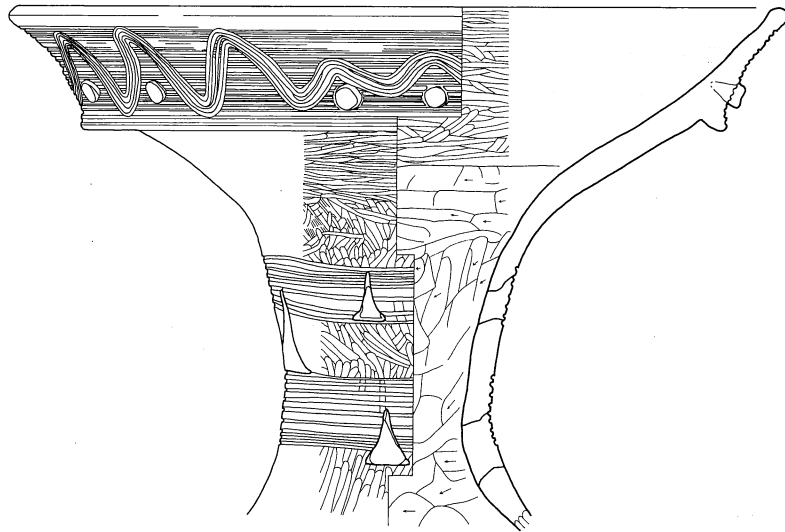
第61図 SD38出土土器(8)

挿図番号	遺構	器高	口径	底径	施文・調整	取上番号
126	SD38	(24.0)	(28.4)	(21.5)	口縁部平行沈線文、外面・杯部内面ヘラミガキ、脚裾部内面ナデ	28686
127	SD38	20.0	(26.4)	18.0	杯部外面上半ナデ、外面下半・脚柱部ヘラミガキ、脚裾部外面ハケ後ナデ、内面ヘラケズリ後ナデ	30051
128	SD38	(7.1)	(22.5)	—	杯部外面ハケ後ヘラミガキ、杯部内面ヘラミガキ	28999
129	SD38	(17.2)	(26.3)	—	杯部外面ハケ後ヘラミガキ、杯部内面ヘラミガキ、脚柱部ヘラミガキ	30311
130	SD38	(10.7)	(23.2)	—	杯部外面ハケ、内面ヘラケズリ後ナデ、脚部外面ナデ、内面ヘラケズリ	27038
131	SD38	10.4	(11.5)	12.4	杯部内外面ナデ、脚柱部・脚裾部外面ヘラミガキ、脚裾部内面ハケ	27328

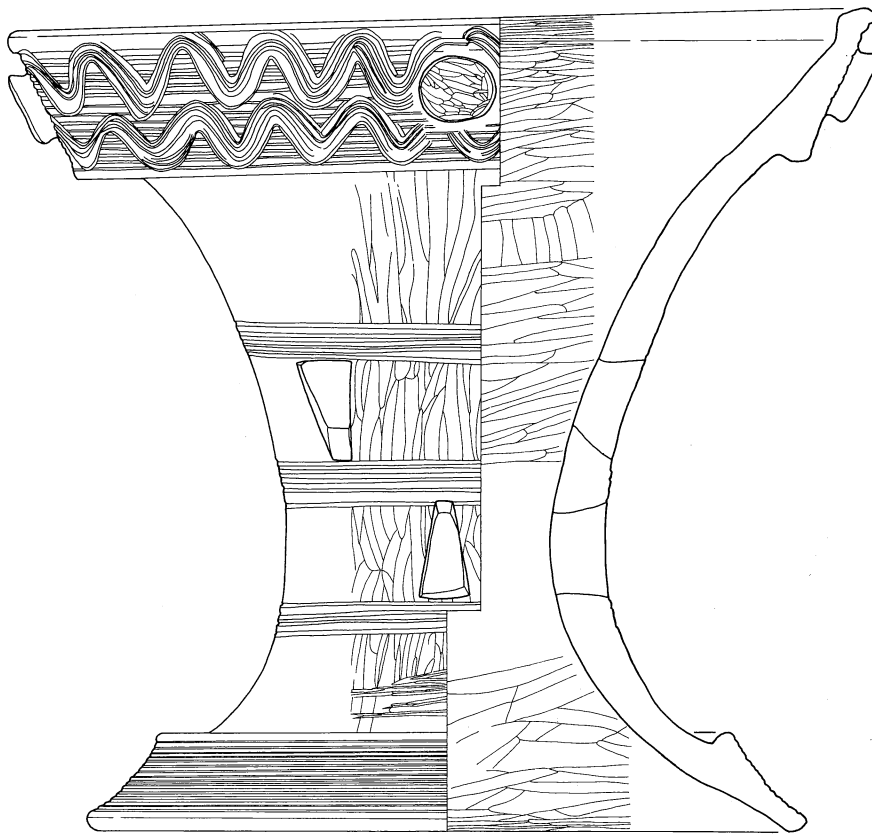


第62図 SD38出土土器(9)

挿図番号	遺構	器高	口径	底径	施文・調整	取上番号
132	SD38	16.6	16.3	12.8	口縁部凹線文、外面・器受部内面赤彩、外面・器受部内面ヘラミガキ、脚裾部内面ヘラケズリ	33488
133	SD38	18.5	18.6	(15.0)	口縁部平行沈線文、外面・器受部内面ヘラミガキ、脚裾部内面ヘラケズリ後ナデ	28647
134	SD38	(12.3)	(20.8)	—	器受部・脚裾部多条平行沈線文、脚柱部方形透かし、外面ヘラミガキ、器受部内面ヘラケズリ後ヘラミガキ	34117
135	SD38	(4.2)	—	(15.0)	脚裾部多条平行沈線文、脚柱部方形透かし、外面ヘラミガキ、器受部内面・脚裾部内面ヘラケズリ後ヘラミガキ	34117
136	SD38	(16.5)	(19.7)	—	器受部・脚裾部多条平行沈線文、外面・器受部内面赤彩、外面・器受部内面ヘラミガキ、脚裾部内面ヘラケズリ後粗いヘラミガキ	28774
137	SD38	(16.9)	(19.1)	(16.0)	器受部・脚裾部多条平行沈線文、外面ヘラミガキ、器受部内面・脚裾部内面ヘラケズリ後ヘラミガキ	30125
138	SD38	(16.1)	—	(18.0)	脚裾部多条平行沈線文、外面赤彩、器受部・脚裾部内面ヘラケズリ後ヘラミガキ	33034
139	SD38	14.8	(21.3)	(15.0)	器受部・脚裾部多条平行沈線文、外面ヘラミガキ、器受部内面・脚裾部内面ヘラケズリ後ヘラミガキ	29182
140	SD38	(9.3)	—	(15.2)	外面ヘラミガキ、脚裾部内面ヘラケズリ	26650
141	SD38	(10.2)	(22.1)	—	外面ナデ後ヘラミガキ、器受部内面ヘラミガキ、脚台部内面ヘラケズリ	27968
142	SD38	(9.6)	—	—	外面ナデ、器受部内面ヘラミガキ、脚台部内面ヘラケズリ	30089



145



146

S = 1 : 4
0 10cm

第62図 S D 38出土土器 (10)

挿図番号	遺構	器高	口径	底径	施文・調整	取上番号
143	SD38	5.2	5.3	2.2	内外面ユビオサエ後ナデ、体部外面ハケ	33420
144	SD38	(7.4)	5.9	5.6	内外面ユビオサエ後ナデ、脚裾部内面ヘラケズリ	33350
145	SD38	(27.6)	(41.9)	—	器受部平行沈線文・波状沈線文・円形浮文、脚柱部平行沈線文・三角形透かし、外面ハケ後ヘラミガキ、器受部内面ヘラミガキ、脚柱部内面ヘラケズリ	33365
146	SD38	44.6	46.6	31.8	器受部平行沈線文・波状沈線文・円形浮文、脚柱部平行沈線文・三角形透かし、外面ハケ後ヘラミガキ、器受部内面ヘラミガキ、脚柱部内面ヘラケズリ	28679

か) に変わったとも考えられよう。

S D 38出土木材の年輪年代 S D 38-2 に伴う杭を当方で選別し、独立行政法人奈良文化財研究所光谷拓実氏に年輪年代測定を依頼した。測定試料は第49図に位置を示した杭で、柱を転用したものと思われる。測定の結果、年輪年代は6 A. D. となった。年輪数は322であったものの、光谷氏の分類でいう心材型であり⁽⁶⁾、伐採年代を確定するに至っていない。

S D 69 (第64、66、67図) S D 38の東に近接して掘り込まれた溝で、S D 38と並行する。肩の位置や護岸施設の状況から2段階に分けて捉えられる。古いほうをS D 69-1、新しいほうをS D 69-2として記述する。S D 69-1は約5mの幅をもつ溝で、東側肩から壁面に板材を杭で固定した護岸施設が一部矢板を混じえながら築かれている。杭は溝の外側に打たれ、内側からの圧力に耐えるよう板を固定している。遺物は埋土上層から底面にかけて出土しており、土器(147)・銅鏃(23)・斧直柄(13)・アカトリ(122)を図化した。

S D 69-2はS D 69-1よりやや西に寄って掘り込まれている。東側の肩が残っていないが、護岸施設付近と想定すれば5mほどの幅をもつことになる。板材を並べた護岸はS D 69-1のものに比べ西に移動しており、板材は2列に並べられている。固定用の杭は溝の内側に打たれており、S D 69-1とは逆である。最終的には大量の木材などが廃棄され埋没しており、遺物としては土器(148~155)・アカトリ(121)・木鏃(149)・槽(311、



第64図 S D 69-1

312)・蓋(326)・漆塗り曲物(364)・桶(372)・ト骨(343)を示した。

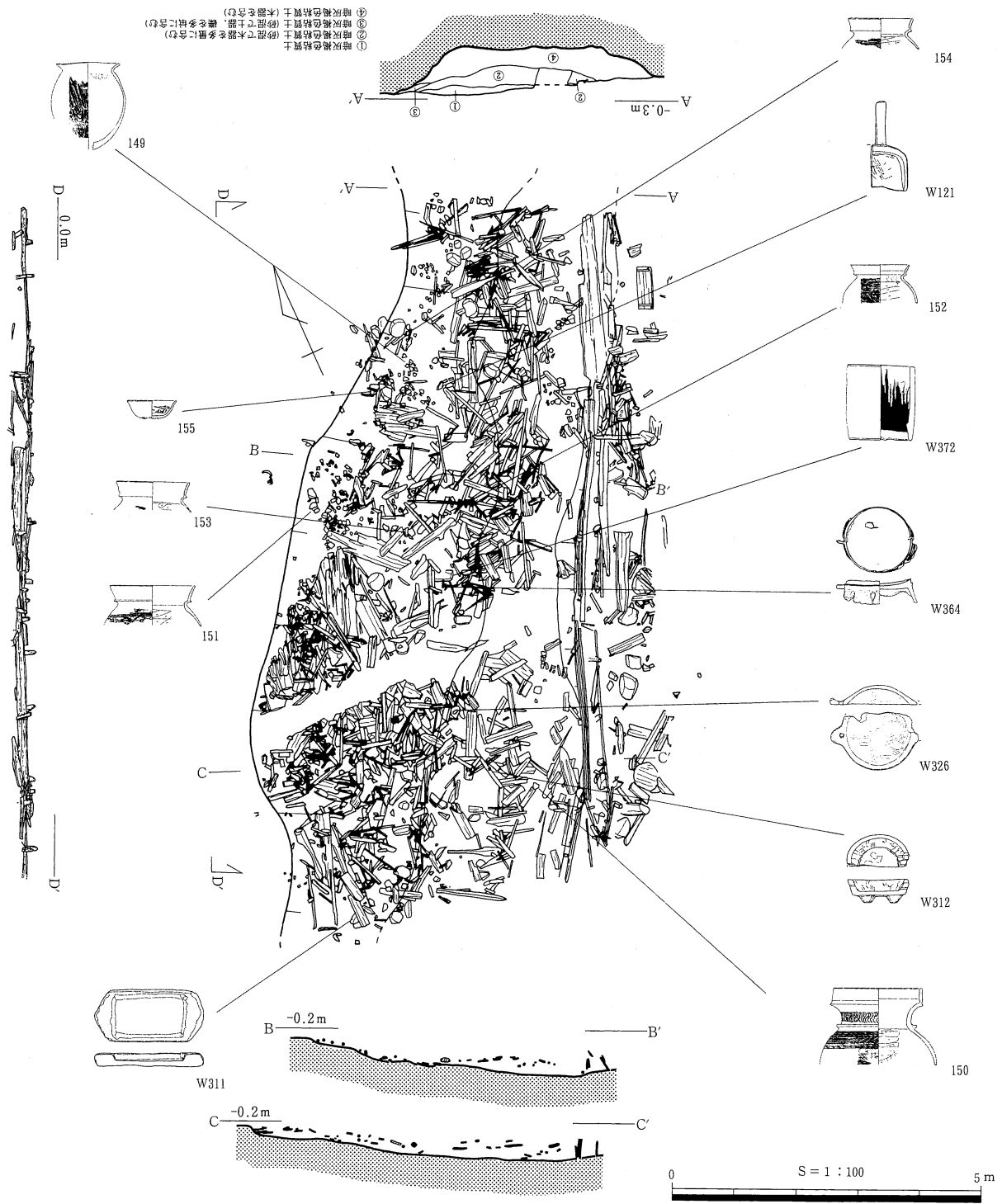
SD 69出土土器(第67図) 147、148は口縁端部に多条沈線を施すもので、SD 69-1の時期を示すものであろう。147はナデ肩となるもので、口縁部は外方へ開く。口縁部外面と肩部には沈線と波状沈線を巡らせている。148は147ほど口縁部の開きは大きくない。体部はやはりそう大きく張らないものと思われる。149は単純口縁の甕である。体部は倒卵形を呈し、やや歪みがあるため図化できていないが、尖底気味となるものか。体部外面は粗い縦方向のハケ調整で、内面はケズリである。時期が特定しにくいだが、おそらく147、148に伴うものであろう。

150以下は弥生時代後期末～古墳時代前期初頭に位置付けられ、SD 69-2の時期を示す一群である。150は壺である。体部に比して口径が大きい。口縁部はいったん外反した後直立する。頸部には突帯を貼り付け、その上位にスタンプによる半裁竹管文を2段に、一部向きを変えて施す。151～154は甕である。口縁部ヨコナデ調整で、器壁の薄い一群である。155は高杯である。脚部を失う。杯部は口縁部がやや外反する椀形を呈し、内面に付着物が認められる。分析を行っていないが、薄い膜状で剥離しやすく、漆ではないかと思われる。156は小型の鼓形器台で、脚台部外面には波状の沈線を施している。

SD 69の時期と性格 SD 69は遺構の状況から2段階が把握でき、伴う土器も弥生後期末～古墳前期初頭のものの2時期に分けられる。SD 69-1として取り上げた土器には新相を示すものが若干ある一方、SD 69-2として取り上げたなかにも148のように古い型式のものもあるが、図示した後期末～古墳前期初頭の土器すべてがSD 69-2から出土しているのも、それぞれ時期差をもって掘り込まれた遺構と考えられる。そうするとSD 69-1はSD 38-1、2と併存していたこととなり、深さが無いのが問題であるが

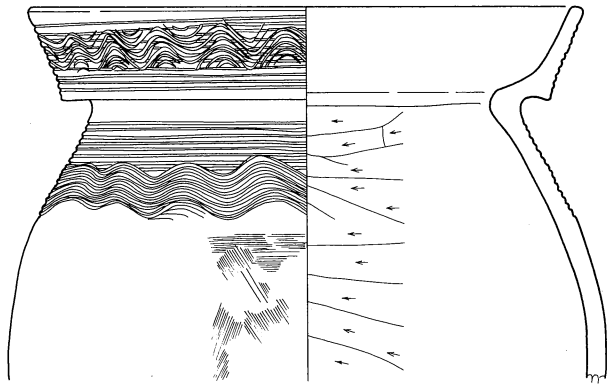


第65図 木器溜4

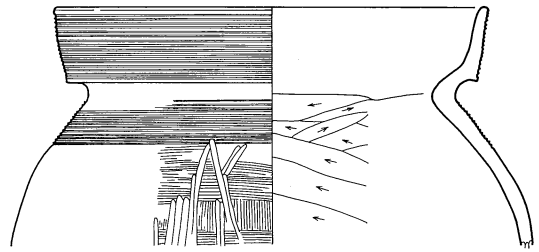


第66図 SD 69-2

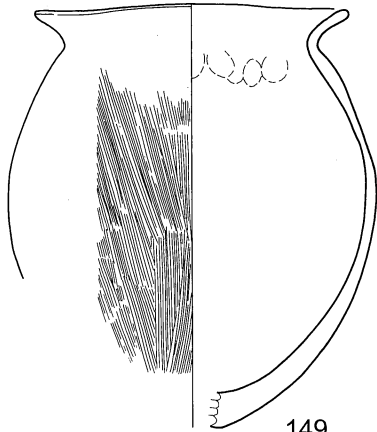
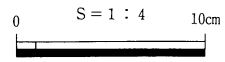
挿図番号	遺構	器高	口径	底径	施文・調整	取上番号
147	SD69	(15.6)	(29.3)	—	口縁部・肩部波状沈線文・多条平行沈線文、体部外面ハケ後ヘラミガキ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	27749
148	SD69	(12.5)	(22.9)	—	口縁部・肩部多条平行沈線文、体部外面ハケ後ヘラミガキ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	27505
149	SD69	(22.5)	(16.5)	—	体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ後ナデ?、口縁部ナデ	27474
150	SD69	(19.6)	(22.8)	—	頸部スタンプ文・貼付突帯文、肩部平行沈線文・刺突文、体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	27696
151	SD69	(10.2)	(22.2)	—	肩部平行沈線文・波状沈線文、体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	27529
152	SD69	(10.0)	(15.0)	—	肩部平行沈線文、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	27557
153	SD69	(7.5)	(19.2)	—	肩部波状沈線文、体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	27550
154	SD69	(7.8)	(16.6)	—	肩部平行沈線文、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	27472
155	SD69	(5.0)	(12.6)	—	杯部外面ハケ後ナデ、内面ヘラミガキ、内面に付着物	27500
156	SD69	(10.8)	15.3	(15.0)	脚台部外面波状沈線文、外面ナデ、器受部内面ヘラケズリ後ヘラミガキ、脚台部内面ヘラケズリ	27332



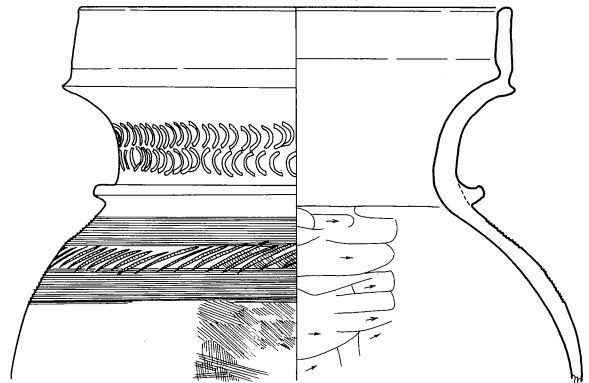
147



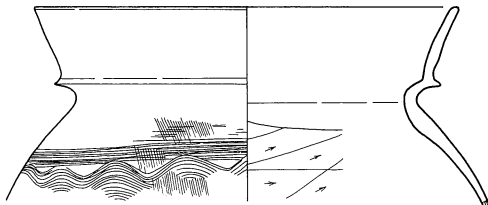
148



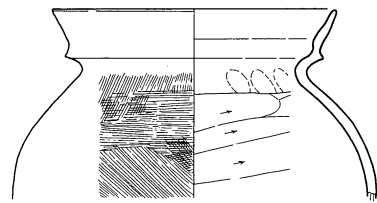
149



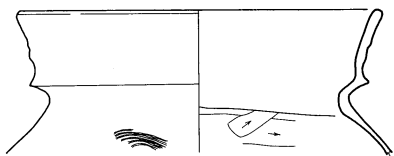
150



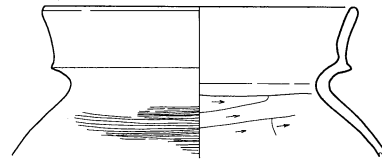
151



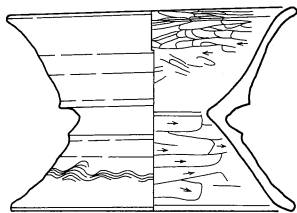
152



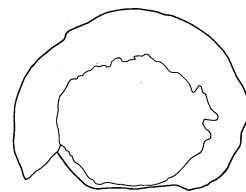
153



154



156



155

第67図 S D 69出土土器

環濠として機能していた可能性もある。SD 69-2はSD 38-3と同時期となり、SD 38埋没後になお微高地縁辺を区画する環濠であったかのである。しかし護岸施設の位置から想定される溝の深さが依然として深くないことや、微高地西側にこれに対応する溝が認められないことから、環濠とする積極的な根拠はない。なお第65図に示したような板材の集積がSD 38とSD 69の間に認められた。木器溜4と命名したが、どちらに伴うものか、どのような意味をもつのか不明である。

SD 11 遺物出土状況 (第68図) SD 11は概要についてはすでに報告済みである⁽⁷⁾。ここからは多量の遺物が出土した。土器に関しては次に述べるので、それ以外のものについて概観する。

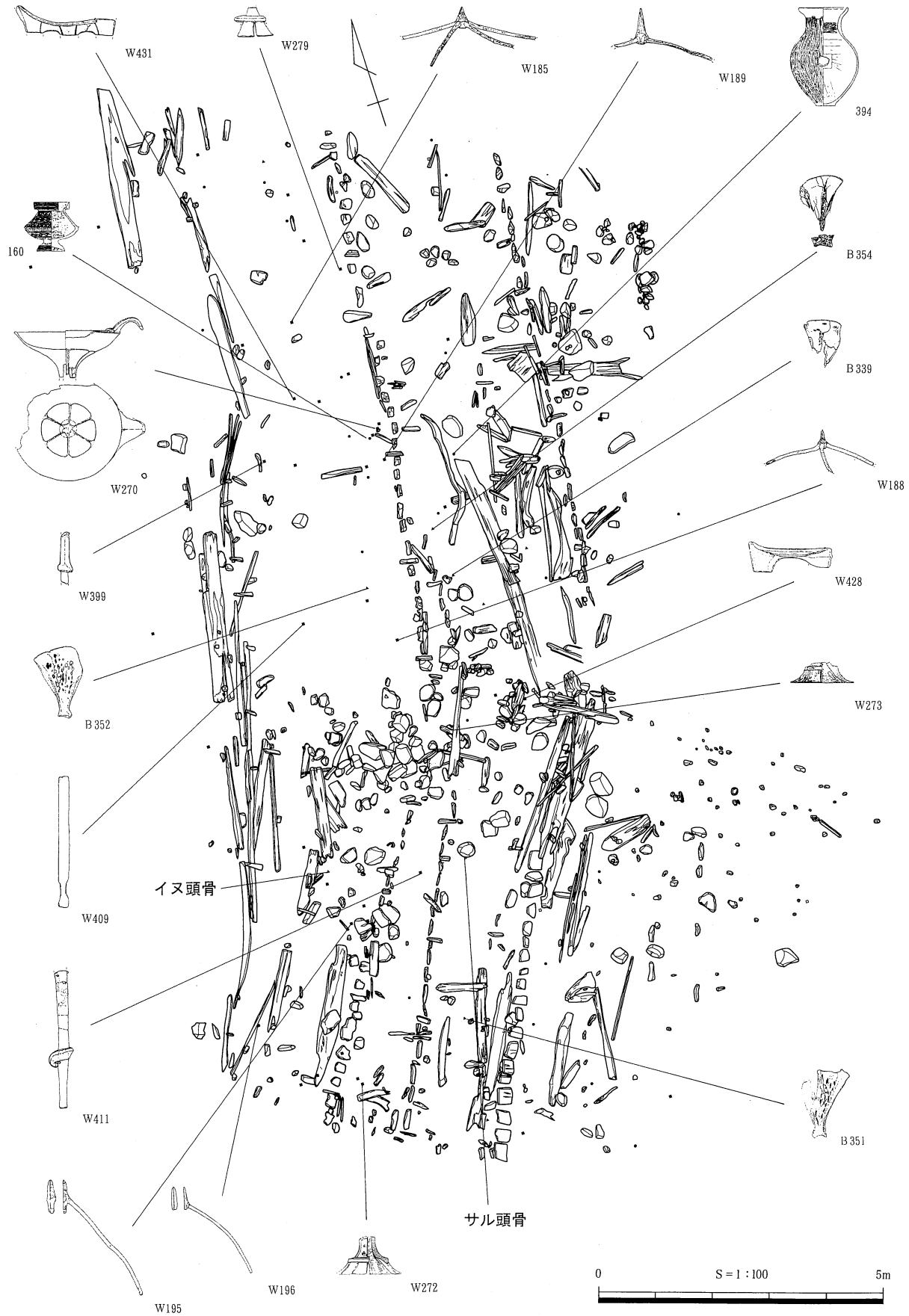
図示したものを列挙すれば、石器は砥石(89)・石錘(153、163)・軽石加工品(361)が、木器は斧膝柄(6)・直柄又鋏(32)・直柄横鋏(40)・鋏曲柄(46)・田下駄(72)・木庖丁(75、76)・横槌(87、88)・櫂(109、112)・アカトリ(120)・網杵(133)・刀剣装具(159)・盾(163~166)・縦櫛(181)・衣笠(185~189、191、193、195、196)匙(204~207、211~213)、片口(232)、片口未製品(236)・高杯(270、272、273、277、279、281、293、294)・槽(316)・蓋(323、324)・把手(346)・曲物底板(363)・桶(370、373、374、383)・武器形(399、408、409)・儀杖?(411)・鳥形(415、416、418)・腰かけ(428、431)・机の脚(437)・栓(441、443~445)・不明製品(472)が、骨角器はヤス(8)・骨鋸(202、205、211)・?(234)・ト骨(339、341、351、352、354、355)がある。木器や骨角器といった有機質遺物の遺存状態がきわめて良好であることが特徴である。

SD 11 出土遺物の特徴 遺物の中では祭祀に関わりそうな遺物が目立つ。ト骨をはじめ、武器形木製品・鳥形木製品・儀杖かと思われる木製品などで、衣笠も関係するものかもしれない。土器にもスタンプ文などで加飾するものがある(160、161)ほか、体部に穿孔のある土器(394)が認められる。この他サルやイヌの頭骨のみが見つかっている。

SD 11の県道調査区4区検出部分では集落の出入り口ではないかと想定されるものが存在する。遺構内に打ち込まれた複数の矢板列は環濠の長軸に沿わず、緩やかに屈曲して「く」字状となる。その屈曲部には矢板の打たれていない範囲があり、そこに大型の角材で囲まれた区画が設けられていた。その範囲はおおむね2m×3mを測る。この区画部分の西側には人頭大の礫が集中しており、また、微高地側に向かい道状に杭列が打たれていた。こうした状況から出入り口と考えているのであるが、その周辺から祭祀に関わりそうな遺物が出土していることは興味深い。ここで祭祀行為が行われた可能性もまったく否定はできないが、同じ環濠の東側にあたるSD 38でも同様な内容の遺物が出土しており、他所で祭祀行為が行われた後、ここへ廃棄されたものと考えられる。祭祀行為といってもどのような内容であるかはわからず、出土した遺物はそれが定例的なものなのか突発的なものだったのかも語ってはくれない。ただ本遺跡が有機質遺物の遺存状況に恵まれていたとはいえ、ト骨点数の多さは目を引くものがあり、具体的なことは不明であるにしても弥生人の精神生活の一端を垣間見るような思いがする。

SD 11の性格と矢板列 SD 11についてはSD 38の部分でふれたように、環濠であると考えている。弥生後期初頭に掘り込まれ、後期末~古墳前期初頭にはほとんど埋没しており、その上に土坑が築かれている。掘削と埋没の時期がSD 38と同じであることも、環濠であることの傍証と思われる。

両者はともに複数の矢板列が認められ、SD 38においては構造などから時期別に段階を想定できたが、SD 11に関しては時期差を把握していない。打ち込まれた矢板の列は環濠の長軸に沿わないで屈曲していることは繰り返し述べているところであり、さらに並んで打たれた矢板は数枚おきに直交する方向に向きを変えている。このような特殊な打ち込み方をしているにもかかわらず、相互の矢板列は並列していることが分かる。そのうえ屈曲部には出入り口と思われるものが設けられ、いずれの矢板列もそこをまたがらない。このことは複数打たれた矢板列が同時並存していたことを示すであろう。そうすると矢板列は環濠の肩を補強するためといった単なる護岸施設と見ることはできない。外見を意識したものか、または強い区画の意思を示すのか、そういう意味合いがあったのではなかろうか。



第68図 SD 11遺物出土状況

SD 11出土土器 (第69～74図) 第69図には壺を掲げた。157は大型品である。体部上半に最大径位置をもち、頸部は直立気味に長く立ち上がる。肩部との境にはキザミを施した突帯を貼り付けている。口縁部は外半し、端部を拡張した複合口縁となる。端部に施された沈線は5条を数える。松井VI期に属するものか。

158は直立気味に立ち上がる頸部から外半し、端部を上下に拡張した口縁部をもつ。端部には凹線文が施される。159の口縁端部は内傾し、やはり凹線文が施される。ともに内面のケズリ調整は頸部直下まで達しており、松井V期に相当するものである。

160は台付装飾壺である。算盤玉状の体部に複合口縁としっかりした脚台部をもつ。沈線により区画された文様帯にスタンプ文によって加飾され、スタンプ文は連続渦文と国道調査区の報告でE類と分類されたものが交互に施される。161も貝殻腹縁による刺突文で飾られる。SD 38で触れた81同様、台付装飾壺に類するものである。

162は松井X I期以降に位置付けられる壺である。体部上半に最大径をもつ張りのある器形で、底部は丸底となる。

第70～72図は甕である。163～165は松井V期に相当する。肥厚する口縁端部には凹線文が施される。体部内面のケズリ調整は頸部に達する。

166～171は複合口縁の成立したもので、口縁部外面には数条の沈線が巡る。肩部に刺突文を連続的に施すものは多いが、沈線は口縁部に限られるのが一般的であるようだ。166の口縁部は発達しているように思えるが、沈線が多条化していないので、この時期に含めた。松井VI期に該当する一群である。

172～177は発達した複合口縁外面に多条沈線を施す一群で、松井VII期に属する。172は体部中央付近に最大径をもち、平底に向かいなだらかにすぼまる。173は小型品で、口径に比して体部が小さい。体部中央で最も張り出し、底部に向かって急激にすぼまる。174以下は完存しない。これらの肩部には押し引き文や波状文が施されることが多い。172のように刺突文の場合もあるが、肩部の施文方法はこの時期を境に変化が認められる。

178～180は口縁部の多条沈線を一部ナデ消す。松井VIII～IX期に該当しよう。178は波状沈線の上端をナデ消している。179は口径に比べ器高が低い。180は体部中央に最大径が位置するもので、底部にかけてのすぼまりは緩やかで、底部も広めとなる。

181は体部のみならず口縁部外面にもヘラミガキを多用して仕上げている。182は体部のヘラミガキが細かいように密に施される。口縁部はヨコナデ調整である。182のような小型品の位置付けは難しいが、ともに松井X期としておきたい。

第72図の甕は松井X I期以降のものである。183は丸い体部にわずかに平底が付く。184は倒卵形の体部となる。底部は欠失する。185以下は体部下半を失うものである。188は扁平な球状を呈するものか。松井X期以降口縁部外面の施文は基本的に見られなくなるが、押し引き文は施されないものの、肩部に線を引くというVII期以来の施文方法は弥生時代後期末～古墳時代前期初頭に至るこの時期にも引き継がれている。

189、190は鉢である。189は算盤玉状の体部をもち、底部は広めで、上下に拡張された口縁端部には凹線文が施される。体部最大径位置にも同様の施文を見ることができる。190は小型品であり、口縁端部は肥厚し、やはり凹線文が施されている。

191～194は蓋である。191、192は施文されない。193、194は多条沈線を施す点は同じであるが、口縁部以外では194が上端部に施されるのに対し、193はやや下がった位置に認められる。

195～199は高杯である。195～197は杯部がいったん外に開いた後、屈曲して内湾しながら立ち上がる形態のものである。199は鼓形器台と同形態であるが、脚柱部が中空とならないため高杯とするものである。

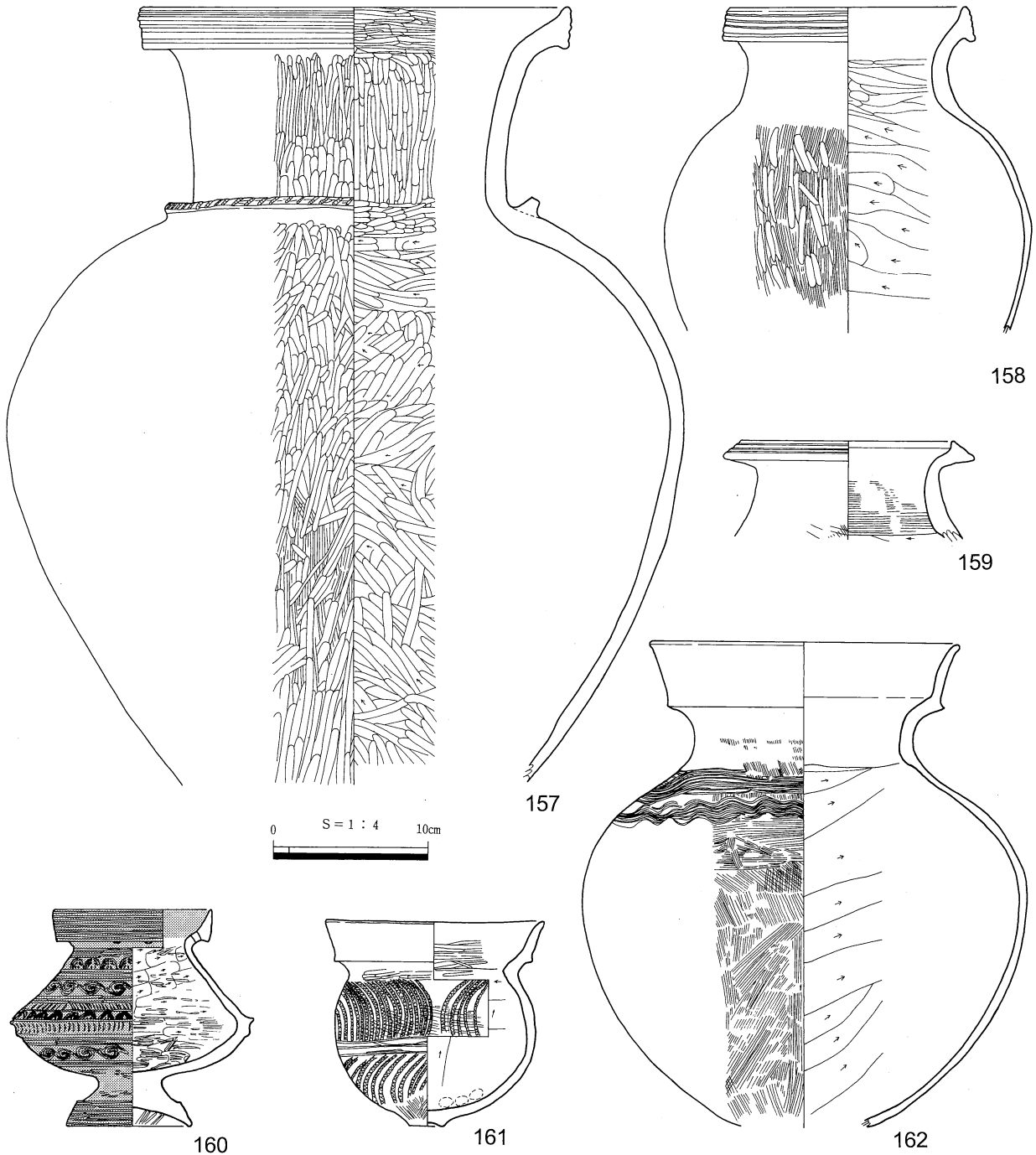
第74図は器台を掲げた。200は他のものと異なる筒形を呈するものである。器体にはおそらく全周すると思われるが、穿孔と竹管文とが交互に列をなして施される。穿孔は焼成前に行われているが、穿孔部の内面側は残っている部分すべてが破損しており、あたかも焼成後に穿孔を施したかのようなものである。

201の施文は凹線文で、202は沈線である。ともに器受部、脚裾部の拡張は小さい。

203～206は多条沈線を施すもので、204の脚柱部には三角形の透かしが入り、206のそれは透かしとならずに

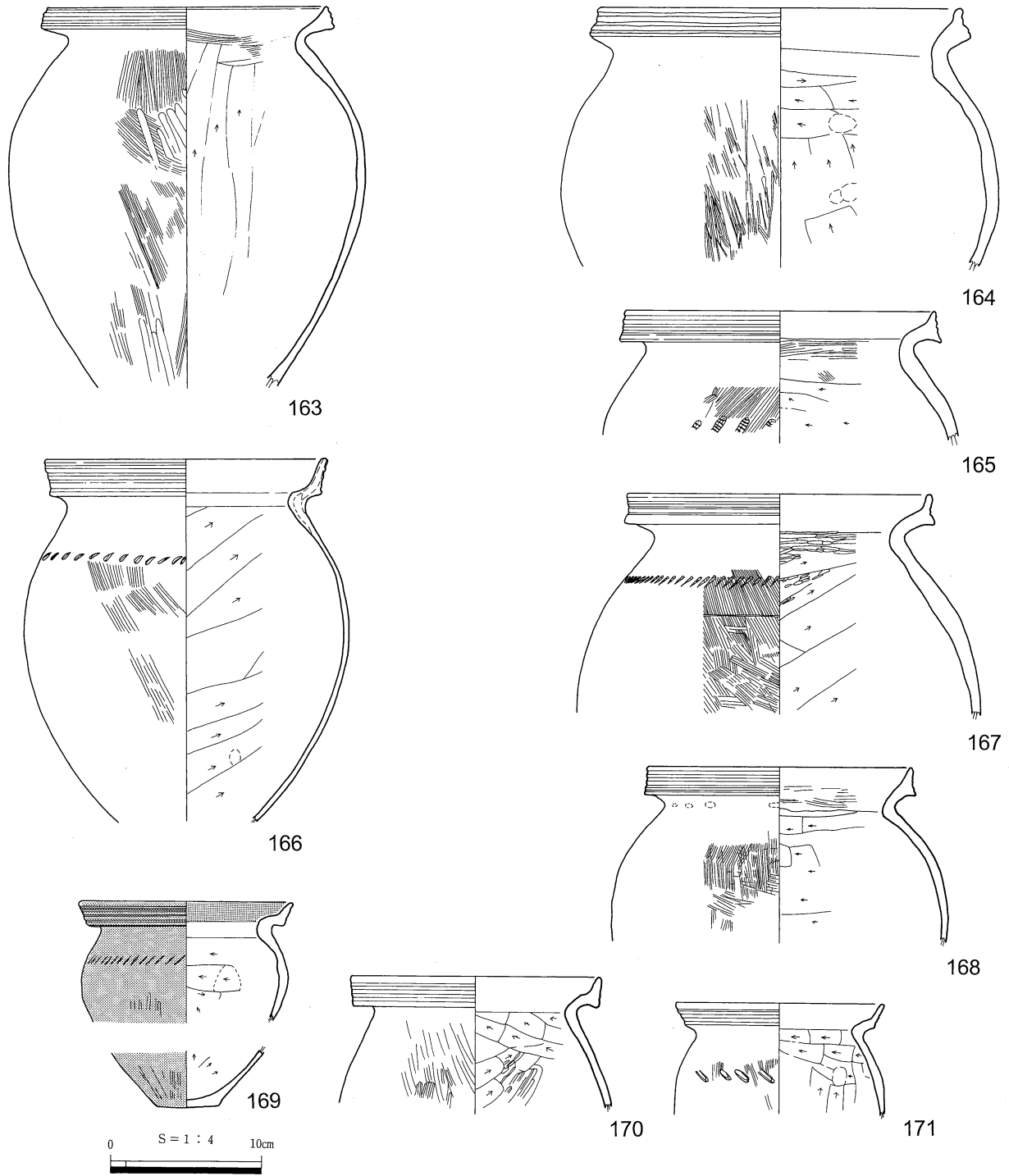
溝を彫りくぼめた形となっている。207の外面はヘラミガキにより覆われる。

208、209は松井X I期以降の鼓形器台である。器壁は薄く仕上げられ、器面も丁寧に調整されている。脚柱部は認められない。



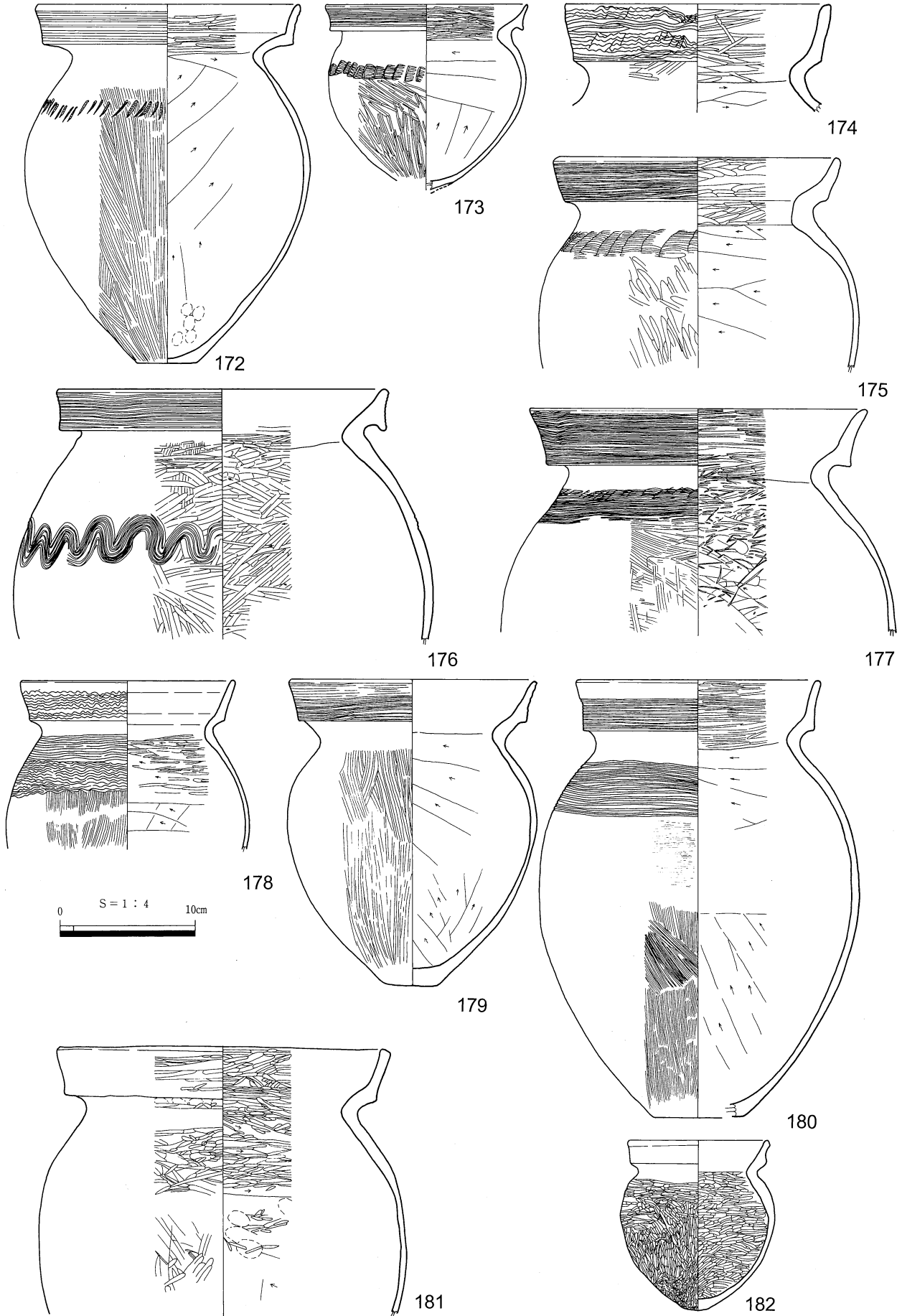
第69図 SD 11出土土器 (1)

挿図番号	遺構	器高	口径	底径	施文・調整	取上番号
157	SD 11	(50.6)	27.8	—	口縁部平行沈線文、頸部貼付突帯文、体部外面ハケ後ヘラミガキ、内面頸部以下ヘラケズリ後ヘラミガキ、頸部内面・口縁部内面ヘラミガキ	1831
158	SD 11	(20.7)	15.5	—	口縁部凹線文、体部外面ハケ後ヘラミガキ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	3552
159	SD 11	(6.2)	(13.5)	—	口縁部凹線文、体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ、頸部内面ハケ	3484
160	SD 11	13.9	(10.0)	(7.4)	口縁部・脚台部多条平行沈線文、体部平行沈線文・キサミ・スタンプ文、体部内面頸部以下ヘラケズリ後ヘラミガキ	4417
161	SD 11	13.3	(14.0)	2.2	体部平行沈線文・刺突文、体部外面ハケ後ヘラミガキ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ、内面ヘラミガキ	4023
162	SD 11	(31.1)	(20.0)	—	肩部波状沈線文・平行沈線文、体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ、内面底部ユビオサエ、口縁部ナデ	3082

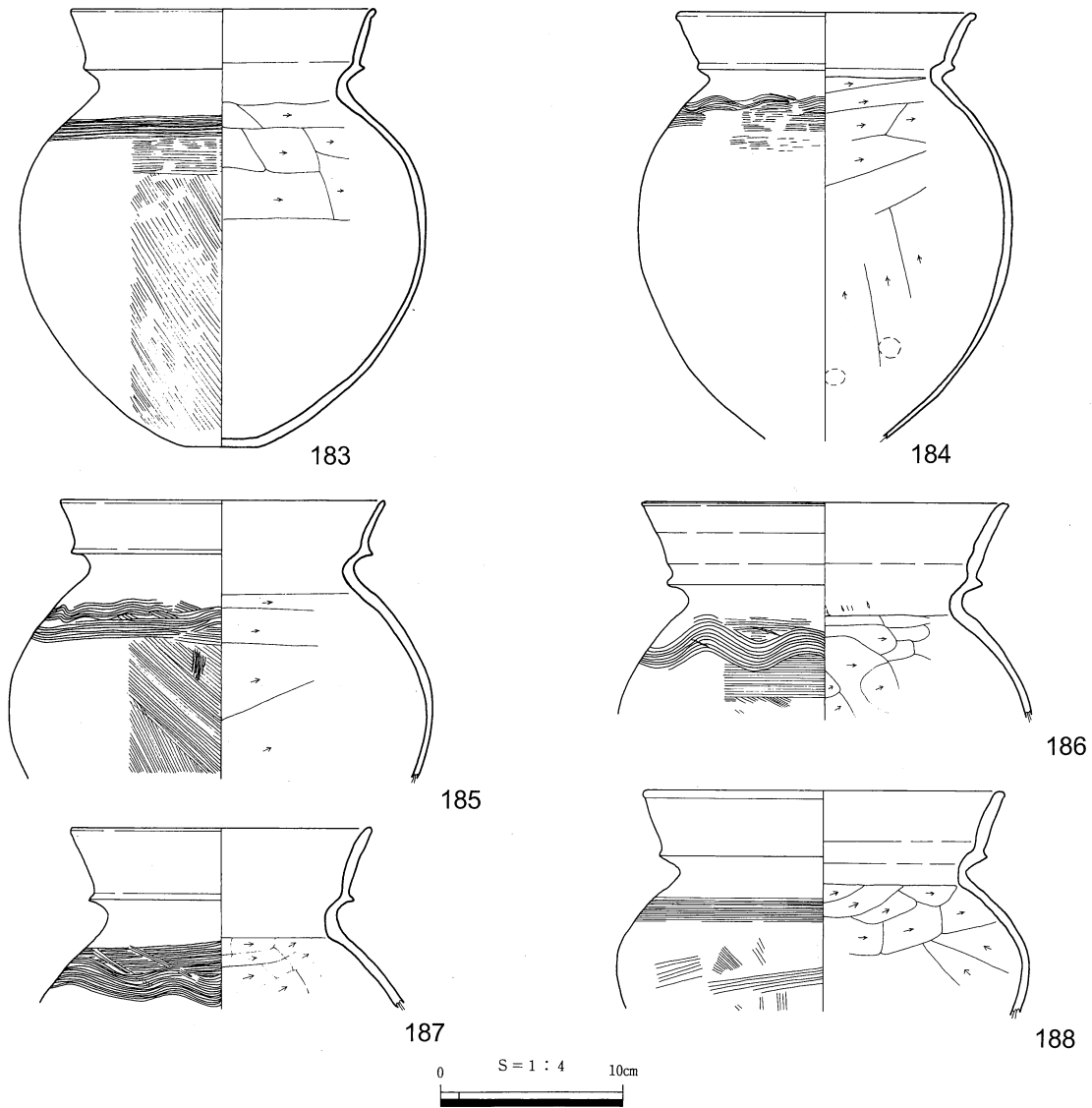


第70図 SD11出土土器(2)

挿図番号	遺構	器高	口径	底径	施文・調整	取上番号
163	SD11	(25.0)	(18.4)	—	口縁部凹線文、体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	4398
164	SD11	(17.0)	(22.6)	—	口縁部凹線文、体部外面ヘラミガキ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	4212
165	SD11	(8.2)	(20.0)	—	口縁部凹線文、肩部刺突文、体部外面ハケ、内面ハケ後頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	4249
166	SD11	(23.9)	(18.5)	—	口縁部平行沈線文、肩部刺突文、体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	6079
167	SD11	(14.5)	(19.8)	—	口縁部平行沈線文、肩部刺突文、体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	5983
168	SD11	(8.4)	(16.3)	—	口縁部平行沈線文、体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	3485
169	SD11	(7.9)	(13.6)	4.1	口縁部平行沈線文、肩部刺突文、外面・口縁部内面赤彩、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	5836
170	SD11	(10.1)	(17.0)	—	口縁部平行沈線文、体部外面ハケ、内面ハケ後頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	5945
171	SD11	(7.3)	(13.6)	—	口縁部平行沈線文、肩部刺突文、体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	3489

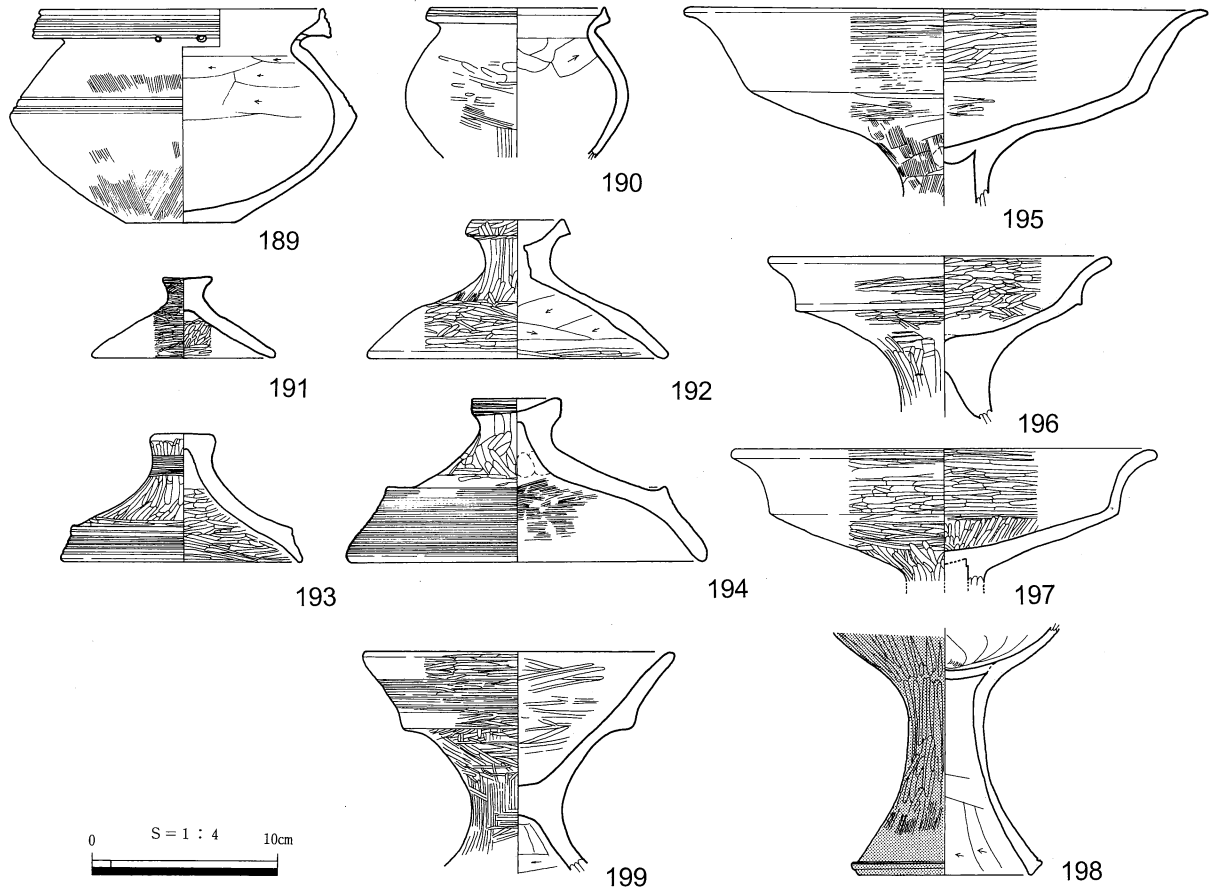


第71図 SD11出土土器(3)



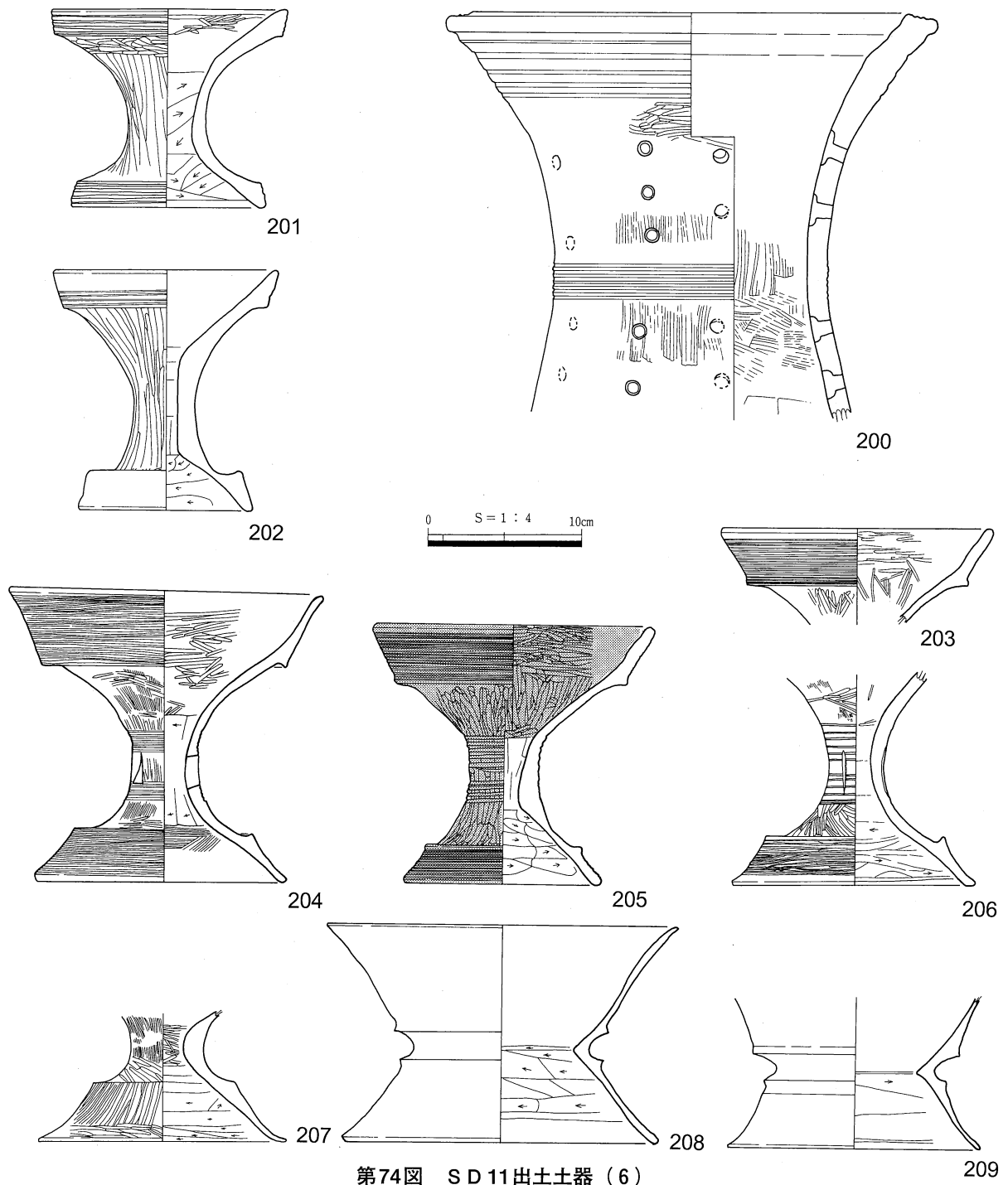
第72図 SD11出土土器(4)

挿図番号	遺構	器高	口径	底径	施文・調整	取上番号
172	SD11	26.3	(19.3)	4.3	口縁部多条平行沈線文、肩部刺突文、体部外面ハケ、内面ハケ後頸部以下ヘラケズリ、口縁部ヘラミガキ	3636
173	SD11	(13.0)	(14.8)	—	口縁部多条平行沈線文、肩部刺突文、体部外面ハケ後ヘラミガキ、内面ハケ後頸部以下ヘラケズリ、口縁部ヘラミガキ	3821
174	SD11	(7.4)	(19.6)	—	口縁部多条平行沈線文・波状沈線文、頸部外面ヘラミガキ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部内面ヘラミガキ	4403
175	SD11	(15.6)	(21.1)	—	口縁部・肩部多条平行沈線文、体部外面ヘラミガキ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部内面ヘラミガキ	3597
176	SD11	(18.4)	(24.2)	—	口縁部多条平行沈線文、肩部波状沈線文、体部外面ハケ後ヘラミガキ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	3139
177	SD11	(16.6)	(24.8)	—	口縁部・肩部多条平行沈線文、体部外面ハケ後ヘラミガキ、内面頸部以下ヘラケズリ後ヘラミガキ、口縁部内面ヘラミガキ	3823
178	SD11	(12.3)	(16.0)	—	口縁部波状沈線文後一部ナデ消し、肩部平行沈線文・波状沈線文、体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ後ヘラミガキ、口縁部ナデ	3095
179	SD11	22.5	(18.2)	3.5	口縁部多条平行沈線文後一部ナデ消し、体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	3898
180	SD11	32.4	(18.0)	6.6	口縁部多条平行沈線文後一部ナデ消し、肩部平行沈線文、体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部内面ヘラミガキ	3926
181	SD11	(19.7)	(24.5)	—	体部外面ハケ後ヘラミガキ、内面頸部以下ヘラケズリ後ヘラミガキ、口縁部ナデ後内面ヘラミガキ	3597
182	SD11	12.5	11.4	—	体部外面ハケ後ヘラミガキ、内面頸部以下ヘラケズリ後ヘラミガキ、口縁部ナデ	3042
183	SD11	(24.0)	(16.6)	3.4	肩部平行沈線文、体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ、内面底部ユビオサエ、口縁部ナデ	2632
184	SD11	(23.4)	(16.4)	—	肩部波状沈線文・平行沈線文、体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ、内面底部ユビオサエ、口縁部ナデ	2835
185	SD11	(15.3)	(17.6)	—	肩部波状沈線文・平行沈線文、体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	2630
186	SD11	(11.6)	(20.0)	—	肩部波状沈線文、体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	3900
187	SD11	(9.8)	(16.4)	—	肩部波状沈線文・平行沈線文、体部外面ハケ、内面ハケ後頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	3900
188	SD11	(12.2)	(19.4)	—	肩部平行沈線文、体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	3900



第73図 SD11出土土器(5)

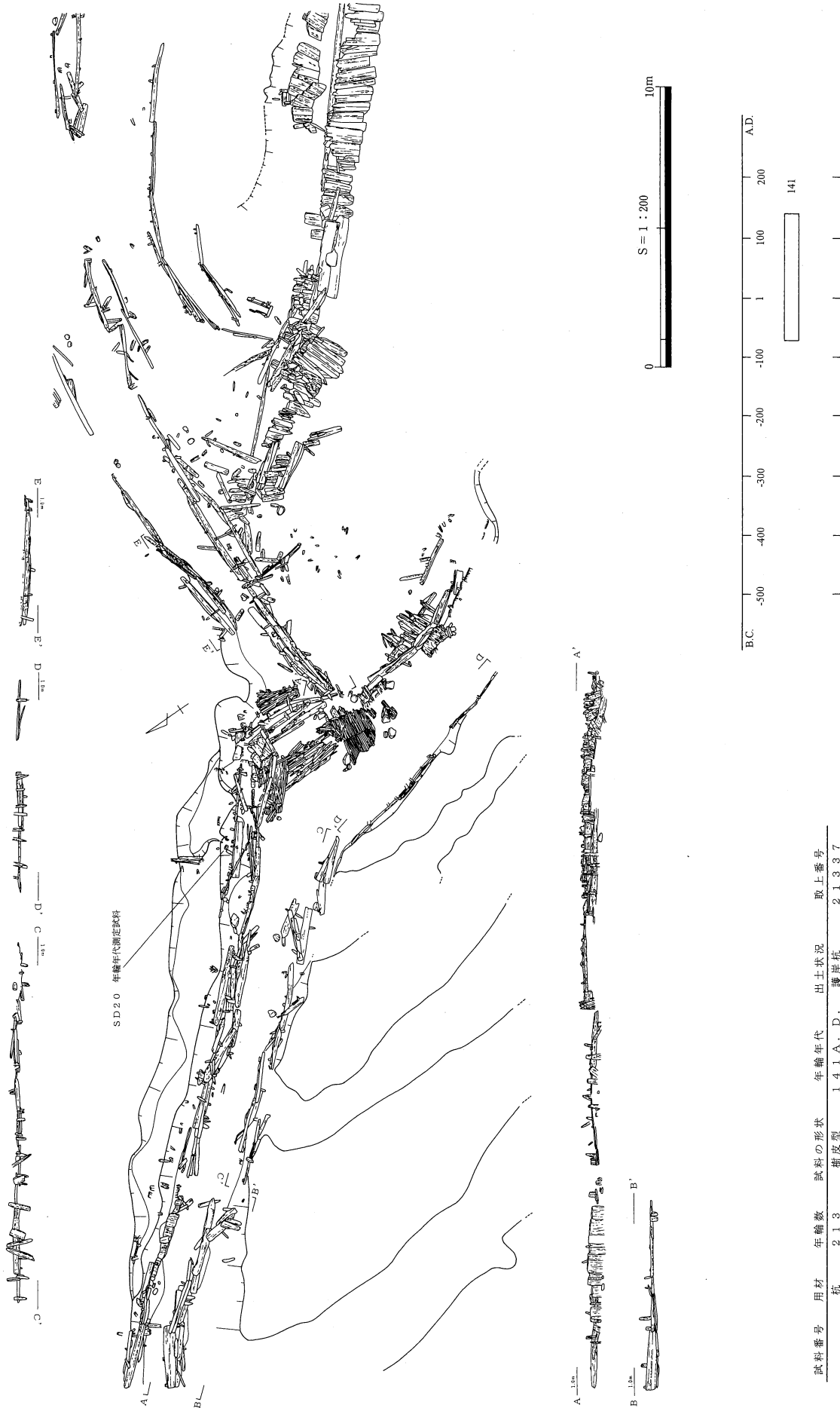
挿図番号	遺構	器高	口径	底径	施文・調整	取上番号
189	SD11	11.5	(15.2)	5.9	口縁部・肩部平行沈線文、体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	5865
190	SD11	(8.1)	9.3	—	口縁部平行沈線文、体部外面ハケ後ヘラミガキ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	6168
191	SD11	9.9	3.4	2.6	外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ後ヘラミガキ	4346
192	SD11	7.4	(16.2)	4.8	外面ハケ後ヘラミガキ、内面ヘラケズリ後ヘラミガキ	3155
193	SD11	6.9	13.1	3.2	口縁部・つまみ部多条平行沈線文、内外面ヘラミガキ	4345
194	SD11	8.8	(19.0)	4.8	口縁部・つまみ部多条平行沈線文、外面ヘラミガキ、内面ハケ	4387
195	SD11	(10.5)	28.1	—	杯部外面ハケ後ヘラミガキ、杯部内面ヘラミガキ	3902
196	SD11	(8.3)	(17.4)	—	杯部内外面ヘラミガキ	5914
197	SD11	(7.1)	(22.8)	—	杯部内外面ハケ後ヘラミガキ	3694
198	SD11	(13.2)	—	10.3	杯部・脚台部外面ハケ後ヘラミガキ、杯部内面ナデ、脚台部内面ヘラケズリ	6138
199	SD11	(11.5)	(16.8)	—	杯部内外面ヘラミガキ、脚柱部外面ヘラミガキ、脚裾部内面ヘラケズリ	4081
200	SD11	(26.4)	(28.0)	—	器受部・脚柱部平行沈線文、脚柱部スタンプ文・穿孔、内外面ハケ後ナデ	3496
201	SD11	12.9	15.3	12.4	器受部・脚裾部凹線文、外面ヘラミガキ、器受部内面ヘラケズリ後ヘラミガキ、脚裾部内面ヘラケズリ	4411
202	SD11	15.5	(14.6)	11.2	器受部平行沈線文、脚柱部ヘラミガキ、器受部・脚裾部内面ヘラケズリ後ナデ	5984
203	SD11	(6.2)	(17.6)	—	器受部多条平行沈線文、内外面赤彩、器受部内外面ヘラミガキ	4402
204	SD11	(19.0)	(20.5)	16.4	器受部・脚柱部・脚裾部多条平行沈線文、器受部内面ヘラミガキ、脚柱部内面ヘラケズリ、脚裾部内面ヘラケズリ後ナデ	4481
205	SD11	16.8	(18.2)	(12.8)	器受部・脚柱部・脚裾部多条平行沈線文、外面・器受部内面赤彩、外面ヘラミガキ、器受部内面ヘラケズリ後ヘラミガキ、脚裾部内面ヘラケズリ	3081
206	SD11	(13.5)	—	(15.7)	脚柱部・脚裾部多条平行沈線文、脚柱部透かし風の施溝、外面ヘラミガキ、器受部内面ヘラミガキ?、脚裾部内面ヘラケズリ	3148
207	SD11	(8.2)	—	(15.9)	外面赤彩、外面ハケ後ヘラミガキ、器受部内面ヘラミガキ?、脚裾部内面ヘラケズリ	2904
208	SD11	14.2	(22.7)	(20.6)	外面ナデ、器受部内面ヘラケズリ後ナデ、脚台部内面ヘラケズリ	3052
209	SD11	(9.6)	—	(16.2)	外面ナデ、内面ヘラケズリ後ナデ	2920



第74図 SD 11出土土器 (6)

SD 20使用木材の年輪年代 SD 20の概要は報告済みである⁽⁸⁾が、溝の護岸に用いられた木材のうち年輪年代測定に適したものを光谷拓実氏に現地で選んでいただき、年代測定をお願いしており、ここに掲載する。試料はスギ材の杭で、検出位置を第75図に示した。SD 20を検出した部分の中央付近で、SD 19がつながるあたりの北側に打ち込まれたものである。測定結果を第75図に掲げているが、141 A. D. という年代が得られた。測定試料は年輪数213を数え、光谷氏の分類でいう樹皮型であり、伐採年代が確定した。

SD 20は微高地西側の低湿地部を流れる河道と思われるもので、第75図に再録したとおり、護岸のあり方には溝の西側に見る板材を横に立て並べる方法と、東側の板材を立てて固定する方法の2者がある。次に述べる土器も型式的には複数のものを含み、長きにわたり維持されていたものと思われる。141 A. D. という年代が、どの土器に対応するものかを特定することは残念ながらできない。



第75図 SD20年輪年代測定試料位置図

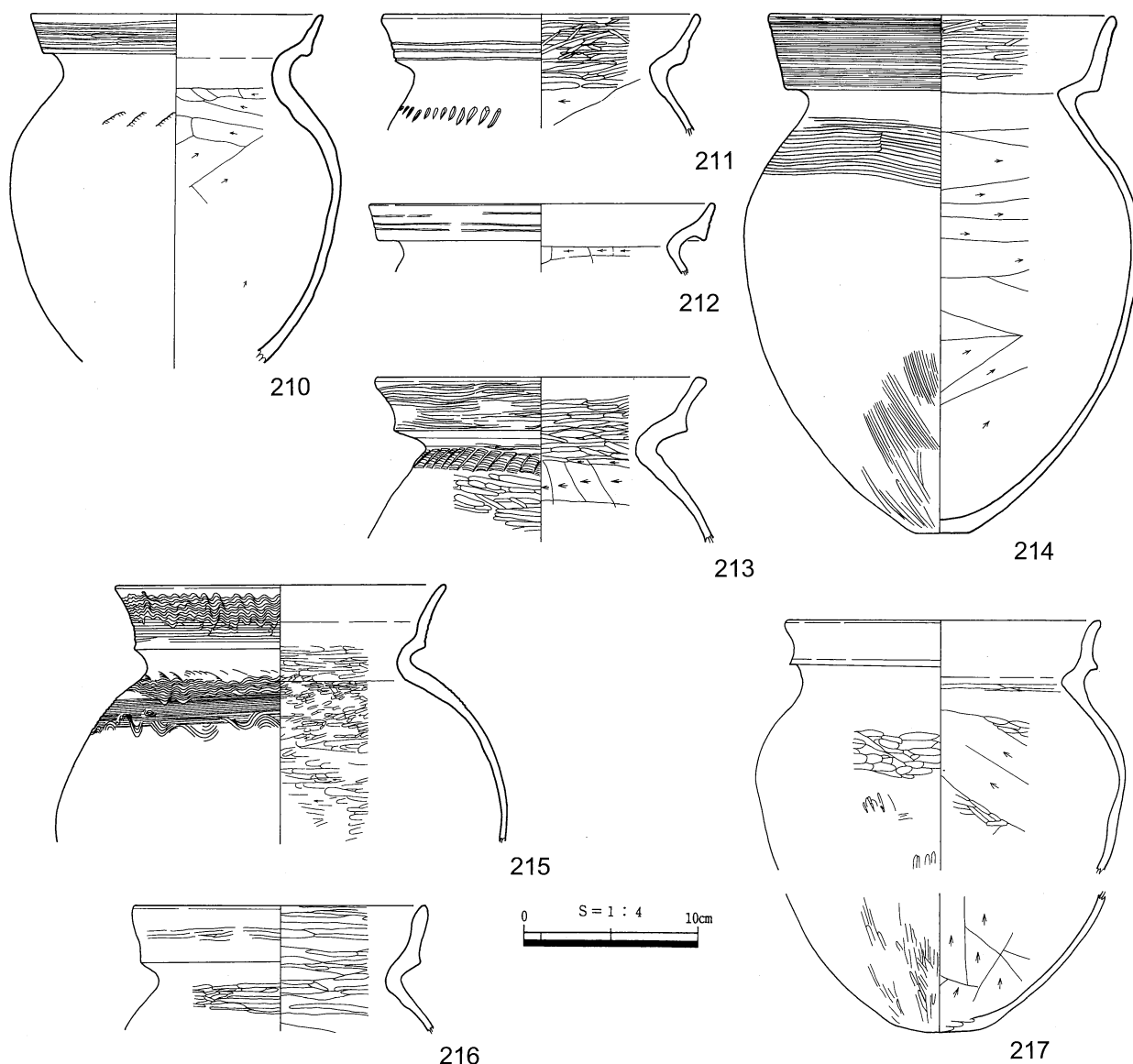
SD 20出土土器（第76、77図） 第76図には弥生時代後期前葉～後葉の土器を掲げた。

210～212は松井VI期に相当する甕である。口縁部は複合口縁となるも立ち上がりが短く、外面の沈線の条数も少ない。肩部の施文は刺突による。

213～215は口縁部が外方へ大きく延び、沈線も多条化する。215は波状沈線も併用される。松井VII期の一群で、肩部は押し引き文、沈線、波状沈線で装飾する。

216、217は松井X期のもので、口縁部外面はヘラミガキまたはヨコナデ調整である。

第77図には松井XI期以降のものを掲げた。218、219が壺、220～222が甕、223は低脚杯である。223は器高が低く、杯部は内外面ともに放射状のヘラミガキで仕上げている。

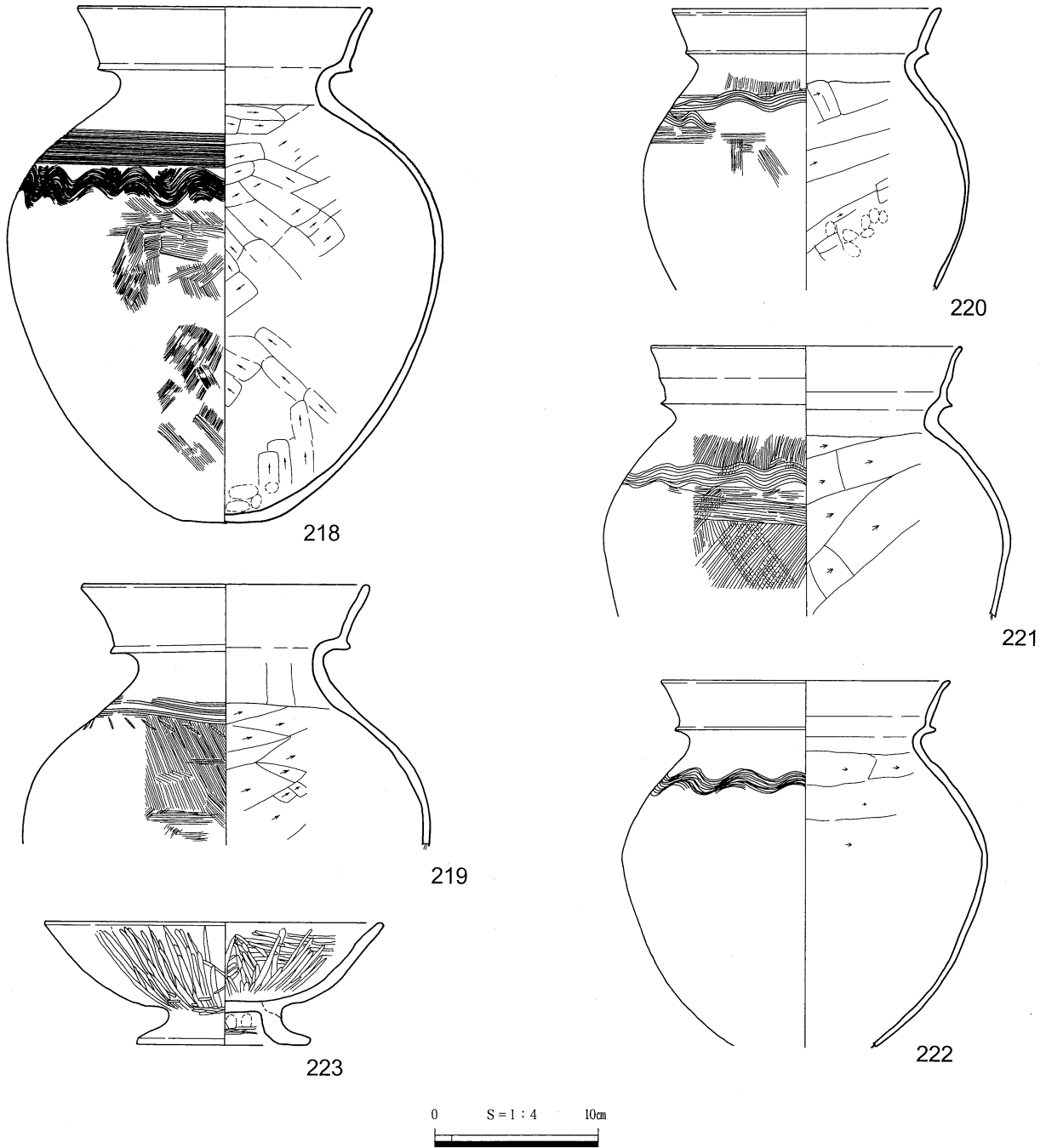


第76図 SD 20出土土器（1）

挿図番号	遺構	器高	口径	底径	施文・調整	取上番号
210	SD20	(20.1)	(16.8)	—	口縁部平行沈線文、肩部刺突文、体部内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	21151
211	SD20	(6.5)	(18.1)	—	口縁部平行沈線文、肩部刺突文、体部内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部内面ヘラミガキ	21282
212	SD20	(4.0)	(19.8)	—	口縁部平行沈線文、体部内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	20206
213	SD20	(6.3)	(19.0)	—	口縁部多条平行沈線文後一部ナデ消し、肩部押し引き文、口縁部内面・体部外面ヘラミガキ、内面頸部以下ヘラケズリ	21202
214	SD20	30.0	(20.0)	3.0	口縁部・肩部多条平行沈線文、体部外面ハケ後ヘラミガキ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部内面ヘラミガキ	21173
215	SD20	(14.9)	(19.1)	—	口縁部・肩部多条平行沈線文・波状沈線文、体部内面頸部以下ヘラケズリ後ヘラミガキ、口縁部ナデ	20812
216	SD20	(7.1)	(16.8)	—	体部外面ヘラミガキ、内面頸部以下ヘラケズリ後ヘラミガキ、口縁部内面ヘラミガキ	21434
217	SD20	(14.4)	(18.1)	—	体部外面ハケ後一部ヘラミガキ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	21558

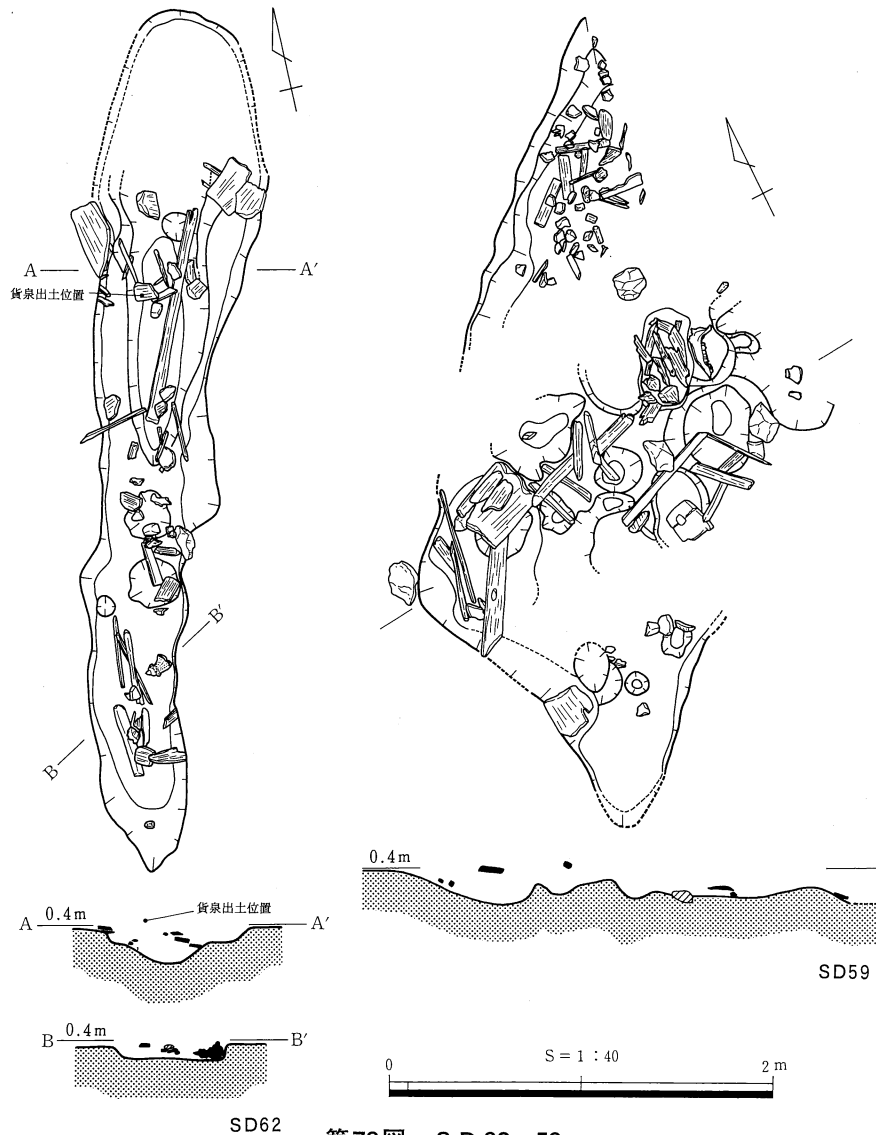
218は体部上半が大きく張り、底部へと至る。底部は体部との境があいまいながら平坦となる。219は体部上半以下を失うが、218ほどは張らないものと思われる。

甕も若干の形態差が認められる。222のように体部中央で強めに張るものもあれば、それ以外のものはそれほど張りはない。



第77図 SD20出土土器(2)

挿図番号	遺構	器高	口径	底径	施文・調整	取上番号
218	SD20	32.2	(18.2)	5.0	肩部波状沈線文・平行沈線文、体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	21569
219	SD20	(16.1)	(17.8)	—	肩部刺突文・平行沈線文、体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	20858
220	SD20	(22.6)	(17.8)	—	肩部波状沈線文、体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	21558
221	SD20	(17.0)	(19.2)	—	肩部波状沈線文・平行沈線文、体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	21147
222	SD20	(17.5)	(16.5)	—	肩部波状沈線文、体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	21057
223	SD20	7.6	(20.9)	(10.6)	杯部外面・脚部内外面ハケ後ナデ、杯部内外面ヘラミガキ、	21283



第78図 S D 62、59

S D 62 (第78図) 7区 D 30グリッドで検出された溝状遺構である。弥生中期後葉の遺物包含層であるI層上面で検出した。長さ4.45m、最大幅95cmを測り、それほど長く伸びるものではない。北側部分はやや幅広で2段掘りとなる。埋土中からは土器や木材などが出土したが、注目されるのは貨泉である。写真図版23に出土状況を示した。貨泉は底面ではなく、埋土の上層でも検出面に近いレベルで出土している。

S D 62出土土器 (第79図) 残りのいいものはほとんどないが、口縁部が残存しているものはすべて図化した。以下にやや詳しく記述する。

224は壺の口縁部と思われる。上下に拡張された口縁端部に4条の凹線文が施される。内面の頸部との境には明確な稜を形成している。内外面に赤色塗彩される。225は口縁部が外方へ大きく開くも

のである。肥厚する端部には4条の凹線文が施される。長頸壺か。226は上下に拡張され内傾する口縁端部に4条の凹線文を巡らせる。残存している範囲では内面にケズリ調整は見られない。外面に煤が付着していることから甕であろう。227は器面の風化が激しく調整が観察できない。器形からすると壺と思われる。228は短く外半する口縁部をもち、端部は強くナデられているが、2条の凹線文状の凹みをかすかに見て取れる。内面の頸部直下に及ぶケズリを認めることができる。229は小型の壺で、各面に手で整形した際の凹凸が残る。内面は頸部直下までケズる。230、231は高杯の脚裾部であろう。230では外面に、231では端部外面に凹線文が施されている。

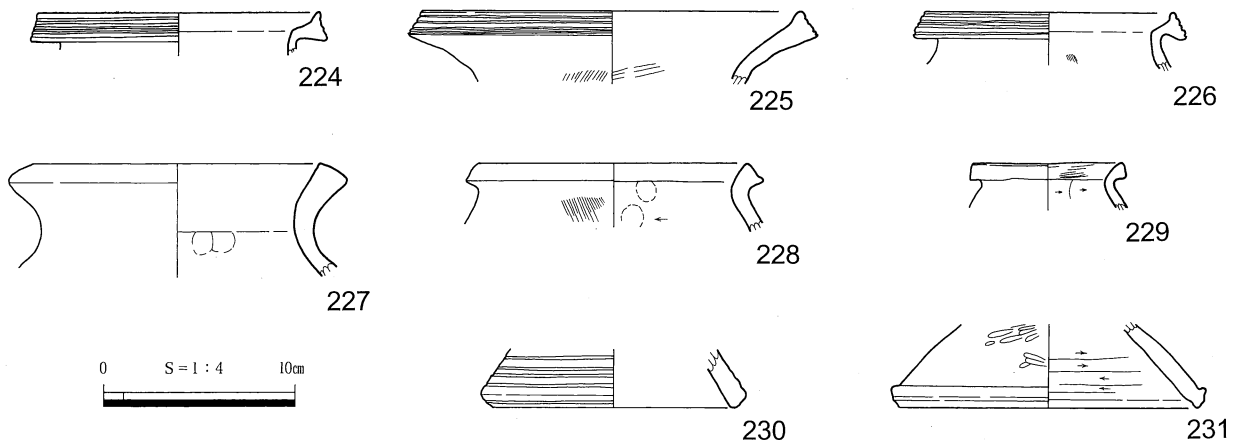
第80図はS D 62またはS D 59から出土したものである。取り上げの際遺物を混同しており、どちらに属するか特定ができないが、参考までに掲げておく。S D 59の遺構図も第78図に示した。S D 62同様、I層上面で検出された溝状遺構で、両者は近接して掘り込まれていた。

232は長頸壺である。長い頸部から外半して開く口縁部の端部は上方へ拡張され、内傾気味となっている。4条の凹線文が施される。頸部外面にはハケ状工具を斜めに長く押し付けた刺突文が巡る。233～236は甕で、いずれも肩部以下を欠く。233は上下に拡張された口縁端部に2条の凹線文を施し、体部内面のケズリ調整は頸部のやや下に及ぶ。胎土・焼成ともに他のものより良好で、煤の付着は見られない。234は上方へ拡張された口縁端部に3条の凹線文を施す。体部内面のケズリは肩部に及ぶ。235の口縁部は上下に拡張され、3条の凹線文を端部にもつ。残っている範囲では体部内面にケズリは見られない。234とともに煤の付着が見られる。236は上下に

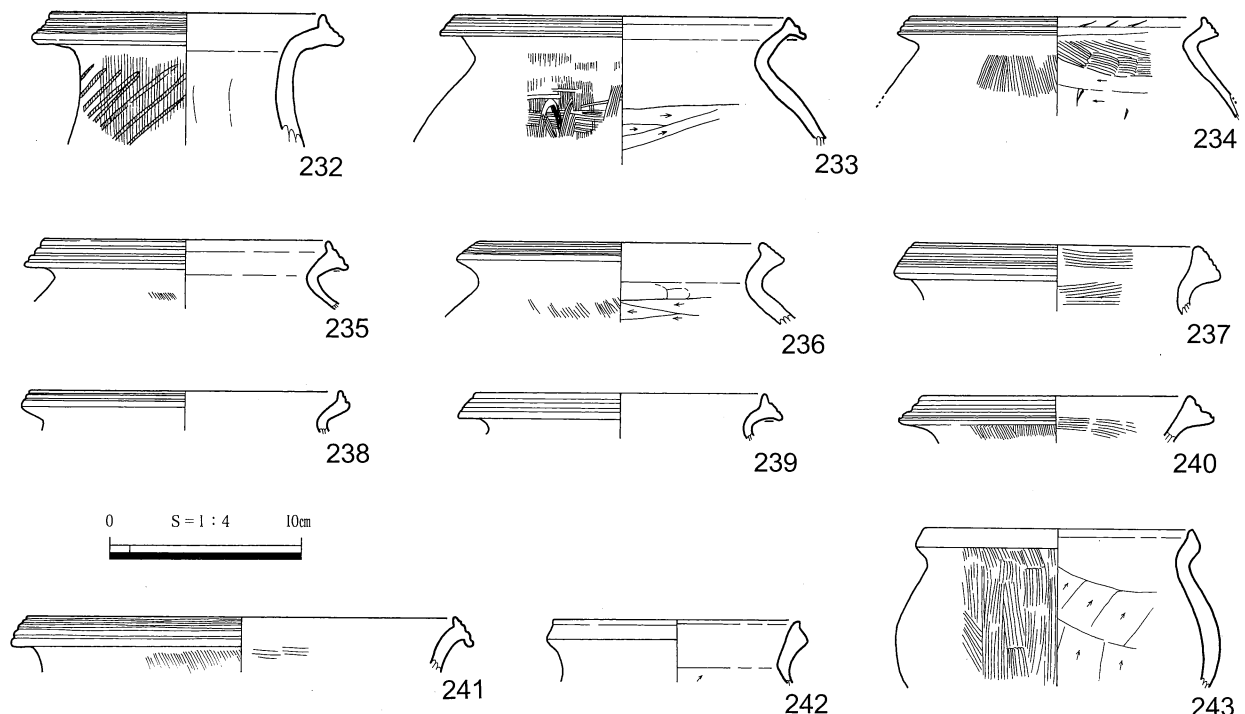
拡張された端部に浅い3条の凹線文を認めることができる。体部内面のケズリは頸部直下に及んでいる。煤の付着は見られない。237～241は口縁部外面に凹線文の施されるものであるが、壺か甕かの判別はできない。体部内面のケズリ調整がどこまで及ぶかは分からない。242、243は口縁部が短く上方に立ち上がる小型の甕である。ともに煤の付着するものである。242の口縁部は強くヨコナデされ外面端部直下がくぼむ。243の体部内面は粗くケズられ、器壁は厚い。

S D 62出土土器の時間的位置付け S D 62に伴う土器は形態の分かるものが少ないうえ、残存部位も限られているが、凹線文を施す時期のものであることは間違いない。体部内面のケズリ調整は不明な部分が多いが、228のように頸部直下に及ぶものがある。この点を重視してS D 62出土土器は後期初頭に位置付けたい。第80図に掲げた土器にも矛盾するものはない。

S D 62出土貨泉のもつ意味 S D 62は溝状遺構ということもあり、遺物の一括性に対する評価は難しいが、上記のように土器を見てみると後期初頭と限定してよさそうである。貨泉と弥生土器との共伴例をみると、岡山市高塚遺跡では後期初頭のもの⁽⁹⁾、八尾市亀井遺跡では中期末～後期初頭のもの⁽¹⁰⁾と伴っており、本遺跡と時代的に一致する。貨泉が鋳造された時期は短く、それゆえ弥生時代の実年代を論じる際に有効なものとして扱われることが多い。ここでは実年代の議論はおいておくとして、上記諸例から弥生後期の始まる時期が山陰・瀬戸内・



第79図 S D 62出土土器



第80図 S D 62、59出土土器

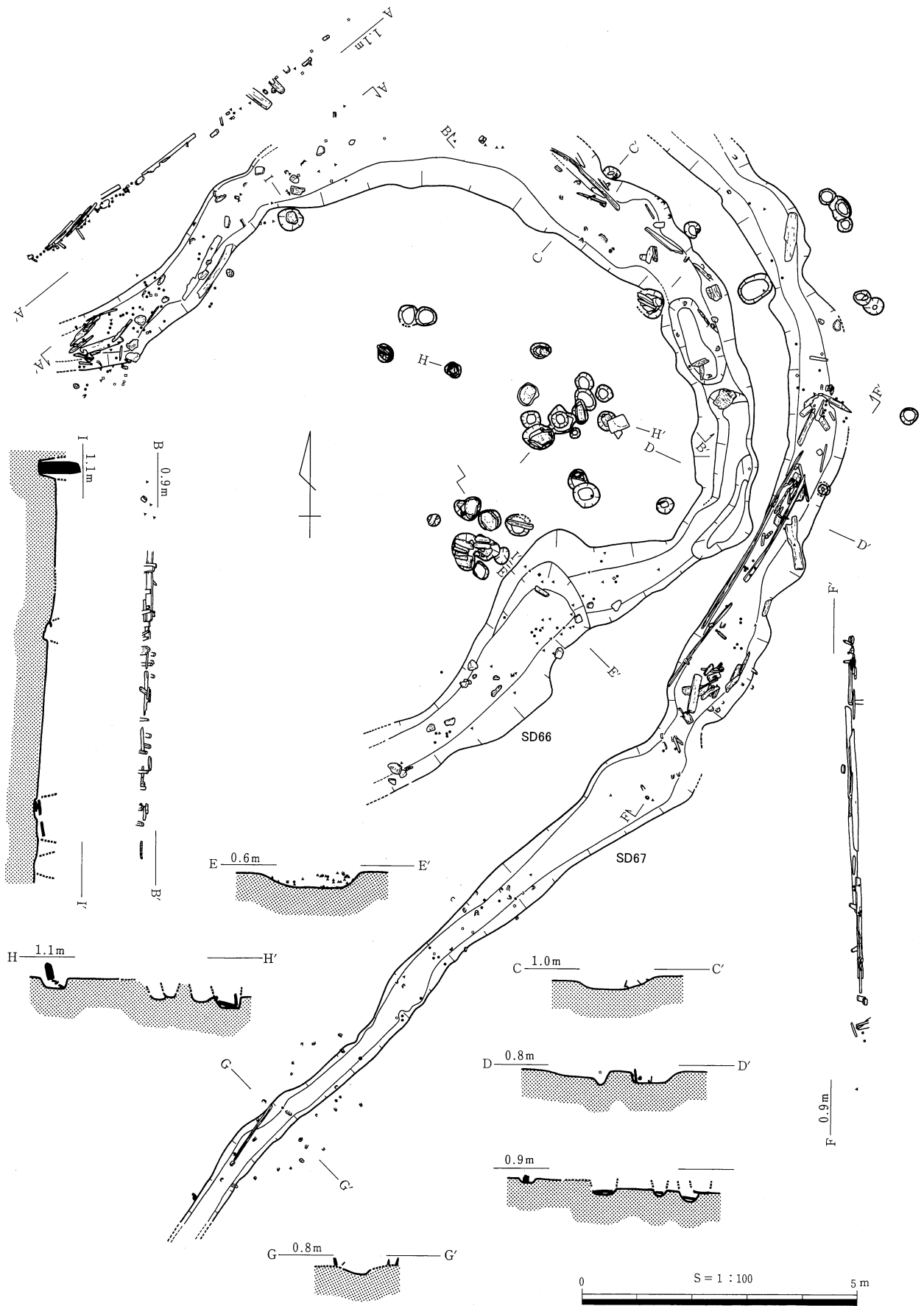
挿図番号	遺構	器高	口径	底径	施文・調整	取上番号
224	SD62	(2.3)	(14.8)	—	口縁部凹線文、口縁部内面ナデ	37331
225	SD62	(3.8)	(20.2)	—	口縁部凹線文、頸部内外面ハケ、口縁部内面ナデ	37394
226	SD62	(3.0)	(13.2)	—	口縁部凹線文、頸部内外面ナデ、口縁部内面ナデ	37419
227	SD62	(6.0)	(15.2)	—	風化のため調整不明	37425
228	SD62	(3.6)	(14.2)	—	口縁部内外面ナデ、体部外面ハケ	37331
229	SD62	(2.4)	(7.8)	—	口縁部内外面ナデ、体部内面頸部以下ヘラケズリ	37394
230	SD62	(3.1)	—	(12.6)	脚裾部外面凹線文、内面ナデ	37384
231	SD62	(4.4)	—	(15.6)	脚裾部外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ	37331
232	SD62-59	(7.0)	(14.4)	—	口縁部外面凹線文、内面ナデ、頸部外面ハケ後刺突文	37382
233	SD62-59	(6.5)	(17.4)	—	口縁部外面凹線文、体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部内面ナデ	37382
234	SD62-59	(4.1)	(15.5)	—	口縁部外面凹線文、体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部内面ナデ	37382
235	SD62-59	(3.4)	(15.2)	—	口縁部凹線文、頸部内外面ハケ、口縁部内面ナデ	37382
236	SD62-59	(4.2)	(15.0)	—	口縁部外面凹線文、体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部内面ナデ	37382
237	SD62-59	(3.1)	(15.0)	—	口縁部外面凹線文、内面ハケ	37382
238	SD62-59	(2.1)	(16.4)	—	口縁部外面凹線文、内面ナデ	37382
239	SD62-59	(2.2)	(15.4)	—	口縁部外面凹線文、内面ナデ	37382
240	SD62-59	(2.5)	(14.2)	—	口縁部外面凹線文、頸部外面ハケ、口縁部内面ハケ後ナデ	37382
241	SD62-59	(2.9)	(22.8)	—	口縁部外面凹線文、頸部外面ハケ、口縁部内面ナデ	37382
242	SD62-59	(3.3)	(13.0)	—	口縁部内外面ナデ、体部内面頸部以下ヘラケズリ	37382
243	SD62-59	(8.5)	(14.2)	—	口縁部内外面ナデ、体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ	37382

近畿の各地域ともに同じである可能性が高いことを指摘しておきたい。

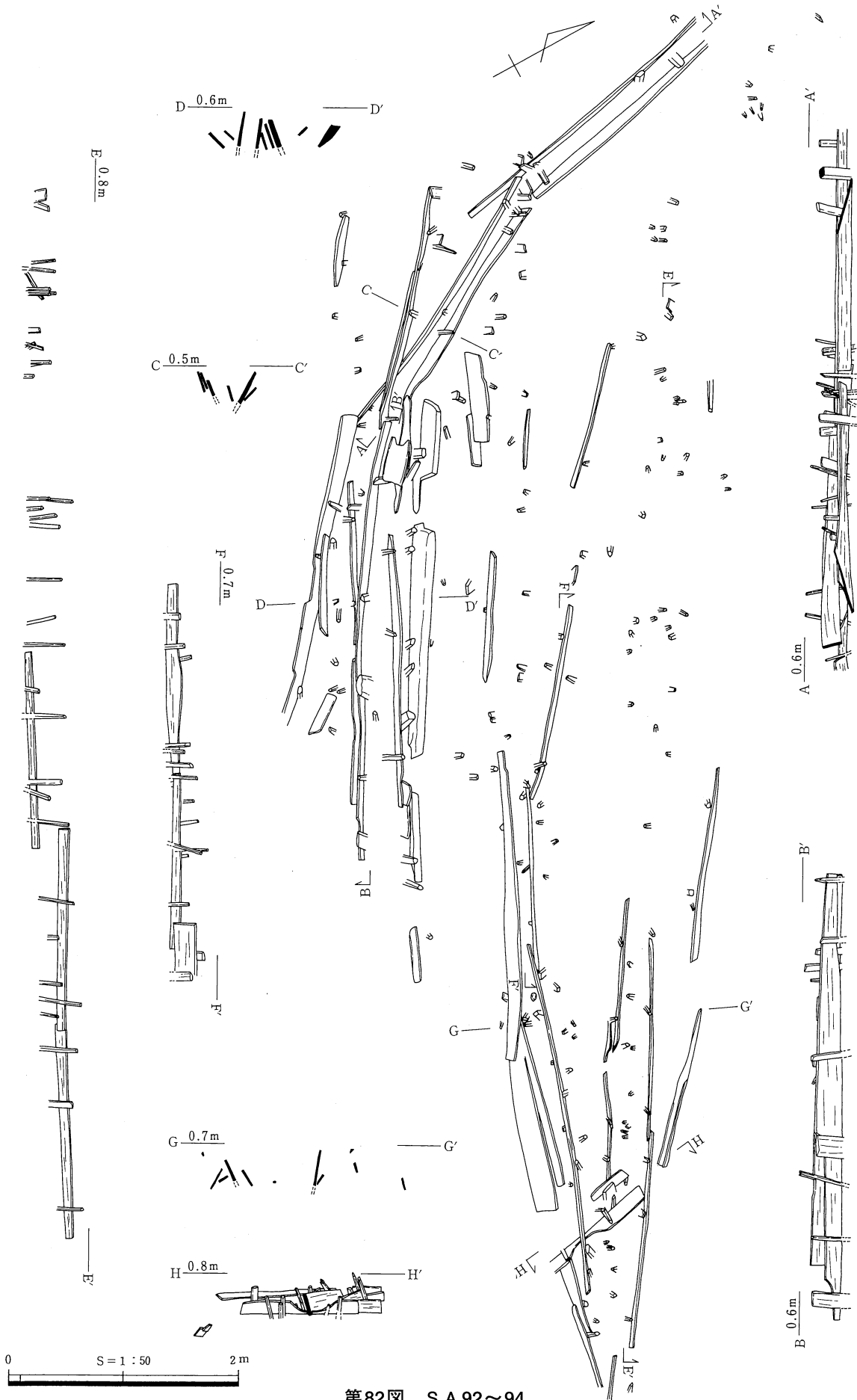
S D 66、67およびS A群 (第81、82図) S D 66、67は7区東側で検出した溝である。S D 66はコの字状に湾曲し、その外周をS D 67が巡る。ともに幅1.0～1.5m程度を測る。本来は板材を横長に立て並べ杭で固定する構造物を溝の中に有していたようで、S D 67にはそれが部分的に残り、両者ともに多数の杭を伴っている。こうしたあり方は中期後葉から作り続けられた同様の構造物、すなわち本報告でS Aと呼んでいるものの性格を考えると重要である。

後期のS A群 後期初頭～後葉段階にもS Aと呼んだものは作られている。S A 82～99がそれで、規模や遺存状態に違いはあるものの、基本的には板材を横長に立て並べ杭で固定するという構造をもつ。第82図にS A 92～94を示した。横長に並べた板材2列を1単位とすれば、ここには5単位認められる。ひとつは板材2枚を残すのみで遺存状態はよくない。もうひとつは調査区の東端にまで延びるもので、西側部分の板材は残っておらず、杭列がその存在を教えてくれる。2列の板材はともに南側中心に打たれた固定用の杭で留められている。その南に接して緩やかなカーブを描いて築かれたものもある。西側部分の残りはよくない。さらに南に別の単位があり、やはり緩やかなカーブを描くように築かれている。西端のものの上に乗る部分があり、時期差を表している。西端のものは湾曲しながら北へ延びていくもので、べつのもとの重なった付近は板材が倒れたりしているなど遺存状態がよくない。これらはS D 67に伴っていたものと同じ構造をもち、大きさにも大きな違いはないので、本来は溝が掘り込まれたなかに立て並べられていたのであろうが、現場でそれを認識するのは困難であった。

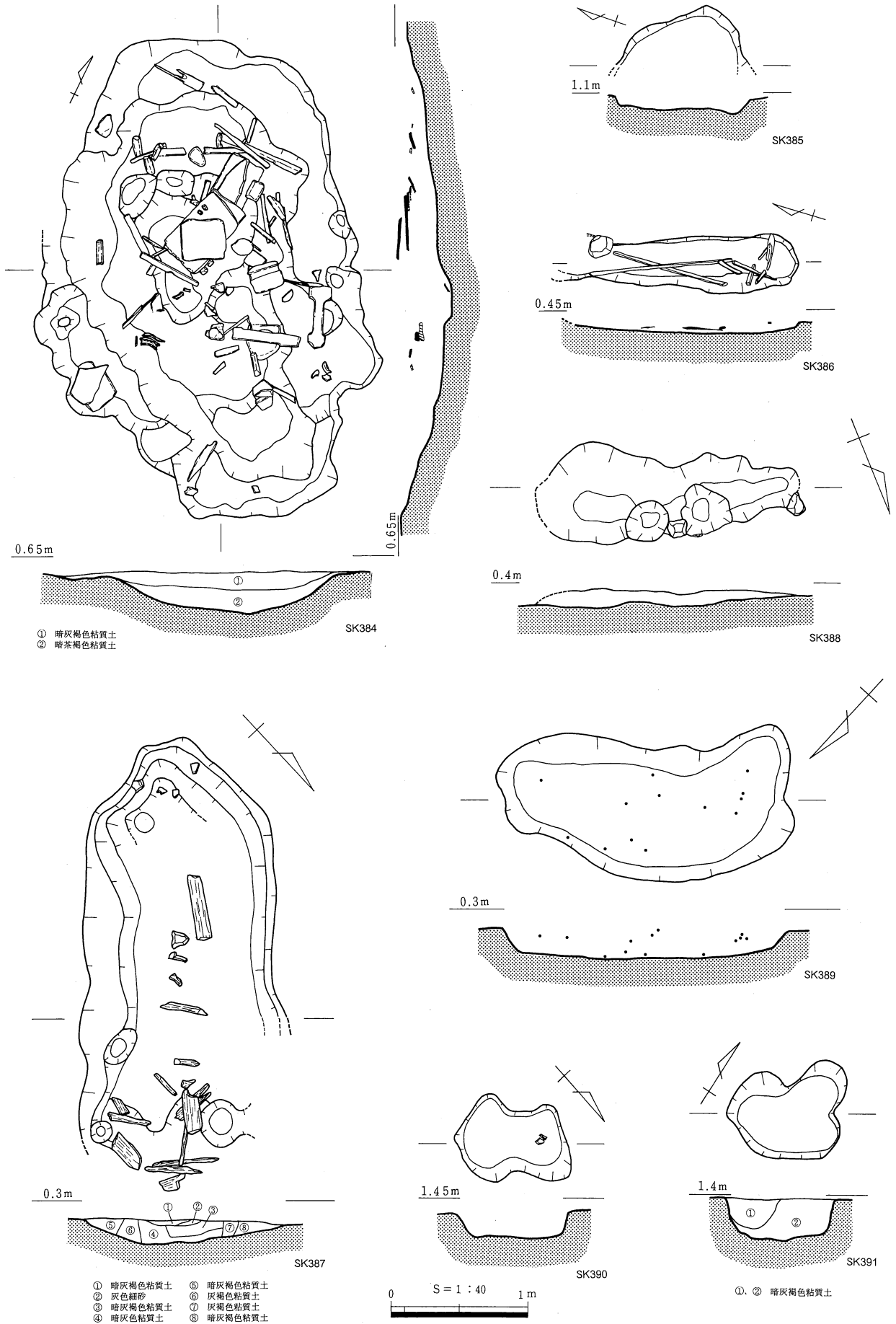
青谷上寺地遺跡の遺構の方向性 7区の弥生時代後期初頭～後葉段階の遺構配置を第47図に示した。ここに存在する溝やS A群はその延びる方向が基本的に一致しており、大変興味深い。南西から北東方向に延びるものが大部分で、S D 58といくつかのS Aがそれに直交する方向に築かれる。これらとともに多数のピットが確認されており、7区での特徴といえるのであるが、礎板をもつものが多い。第328、329図にその一部を示している。多くがスギの板材を用いており、両端をカットした厚めの板を据えている。なかには複数枚据えられている場合もあった。こうしたピット群は高床建物の柱穴と考えられる。柱穴が掘り込まれた地盤はI層と命名した砂層であり、柱を固定するために礎板が必要だったのだろう。7区で検出した溝は、こうして建てられた建物群を区画する溝として機能していたものであろう。S Aと呼んでいるものも方向を同じくすることから、建物を含めた遺構



第81図 SD 66、67



第82図 S A 92~94

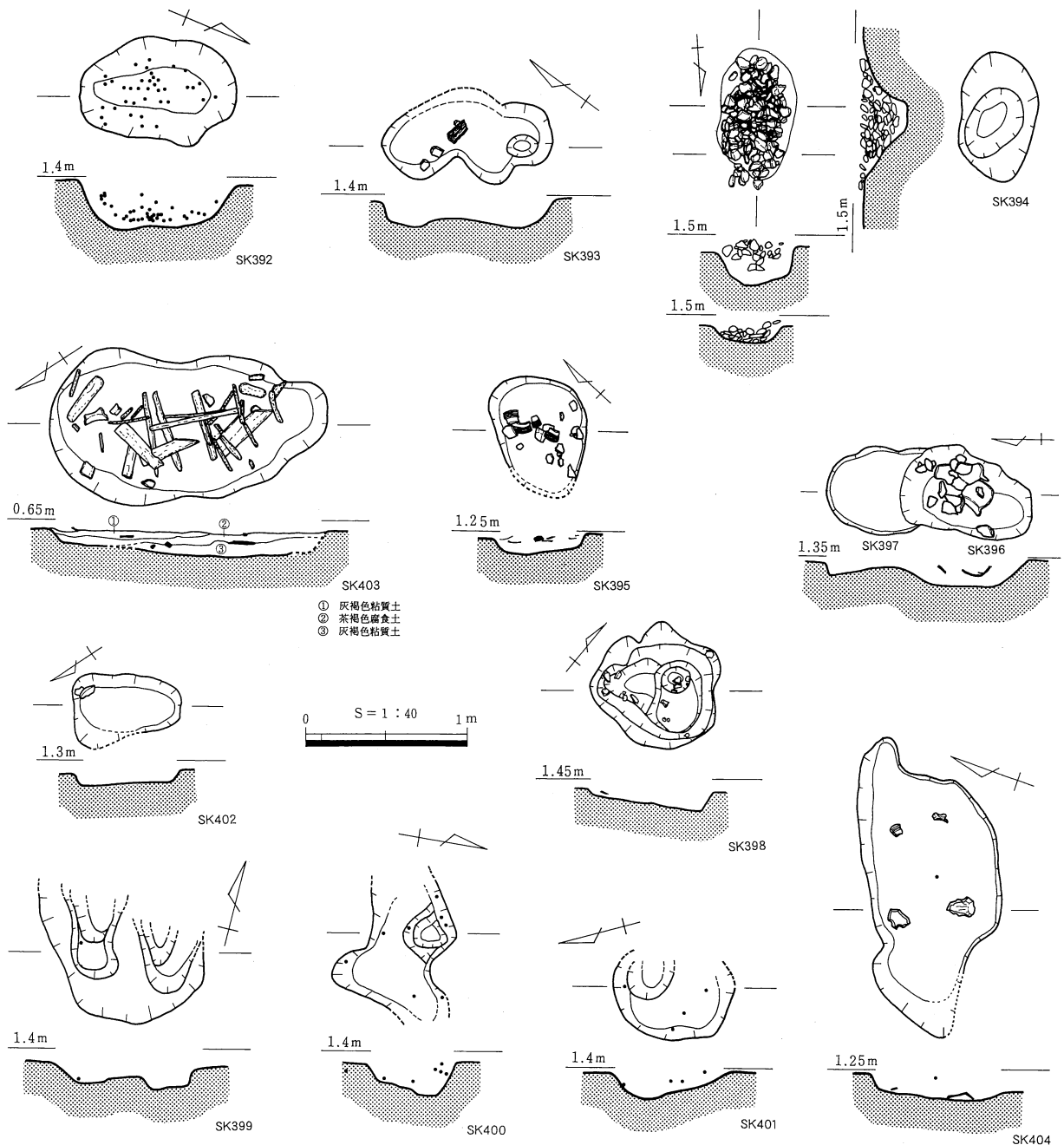


第83図 S K 384～391

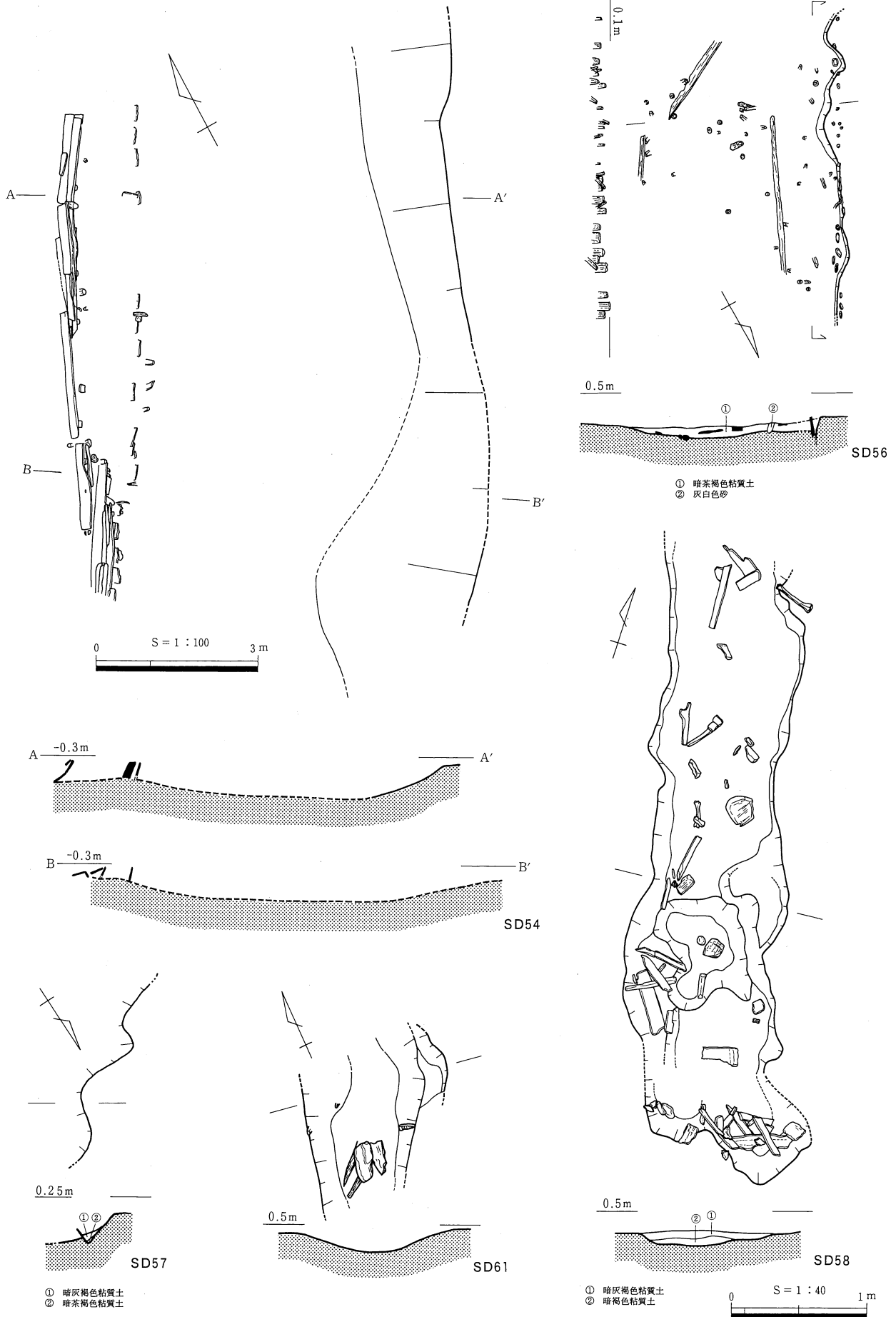
群と密接な関係をもっていたであろうことは想像がつく。6区における前期末～中期前葉の建物群を区画する溝といい、7区の中期後葉のSD27に始まり、連綿と作り続けられたSA群といい、長きにわたって同じ方向が意識されていることは注目すべき点であろう。

土坑の概要 第83、84図にこの時期の土坑の実測図を掲げた。20基検出されたうちの14基が6区に存在する。7区は6基と少ないが、ここには中期後葉以前には土坑などが築かれておらず、後期段階の多数のピットから想定される高床建物群やそれらを区画する溝が示すように、この時期には微高地の東側がさらに拡大したことを示している。SK384は長辺3.6m、短辺2.5mと大型の土坑で、壁面に複数の段をもつように掘り込まれている。土器や石器、木器が土坑中央付近にまとまって出土した。断面図に示したとおり、遺物は埋土上層より出土しており、これらは土坑の埋没とともに廃棄されたものと考えられる。7区で検出された土坑は概して大型のものが多

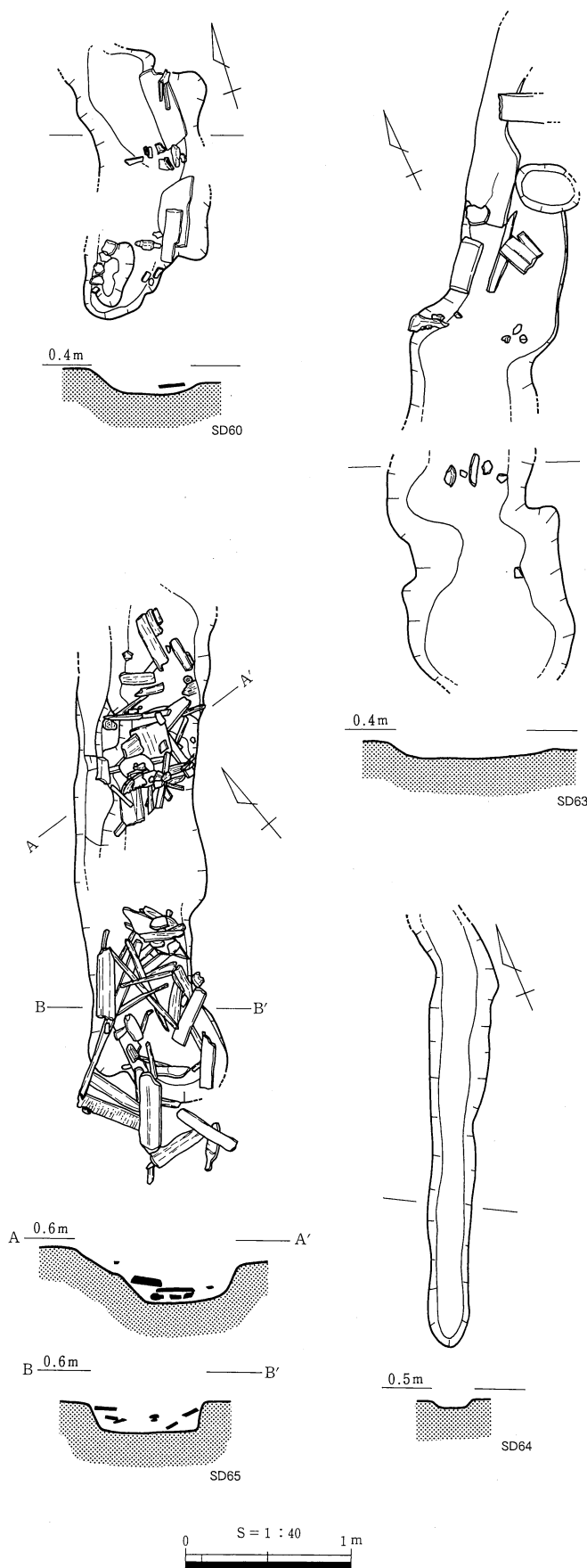
い。6区の土坑は径1m未満の不整形な形態のものを基本とする。SK394は長辺81cm、短辺42cmの楕円形で、挿鉢状の掘り込みをもち、26cmの深さを測る。土坑は拳大程度の礫で埋められており、一部例外はあるが、おおむ



第84図 S K 392～404



第85図 S D 54、55～58、61



第86図 S D 60、63～65

ね底面まで礫の存在が確認された。検出当初は土壌墓ではないかと考えたが、それを裏付ける所見は得られず、また礫はとくに使用された痕跡もないため、遺構の性格は不明であるが、このような土坑のあり方はほかにはない。

溝の概要 節の始めに報告したもの以外についてここで述べる。

初期段階の環濠 S D 54、56、57は8区の西端付近で確認されたもので、S D 38に先立って掘り込まれた溝である(第85図)。S D 38により切られていたり、調査区境に位置していたために部分的な検出にとどまっているが、板材を杭で固定して立て並べる護岸のあり方や石器・骨角器・木器など土器以外の多彩な遺物を伴うことからS D 38と同様の機能をもっていた可能性がある。伴っていた土器からすると、これらは弥生後期の遺構であり、微高地東側縁辺では環濠の掘削や護岸の作り直しが次々と行われていたようである。図示した土器以外の遺物を列挙するとS D 54では袋状鉄斧(19)・斧鏃柄未製品(10)・弓(146)・木鏃(153、154)・盾(175)・縦櫛(182)・衣笠(190)・把手付椀形容器(247)・高杯(275、276、278)・蓋(319、322、331)・容器の脚(355)・ト骨(333、336、342、347)が、S D 56では砥石(87)・匙(208、214、215)・匙未製品(227)・片口(235)・漆塗り蓋(237)が、S D 57では石錘(156)がある。

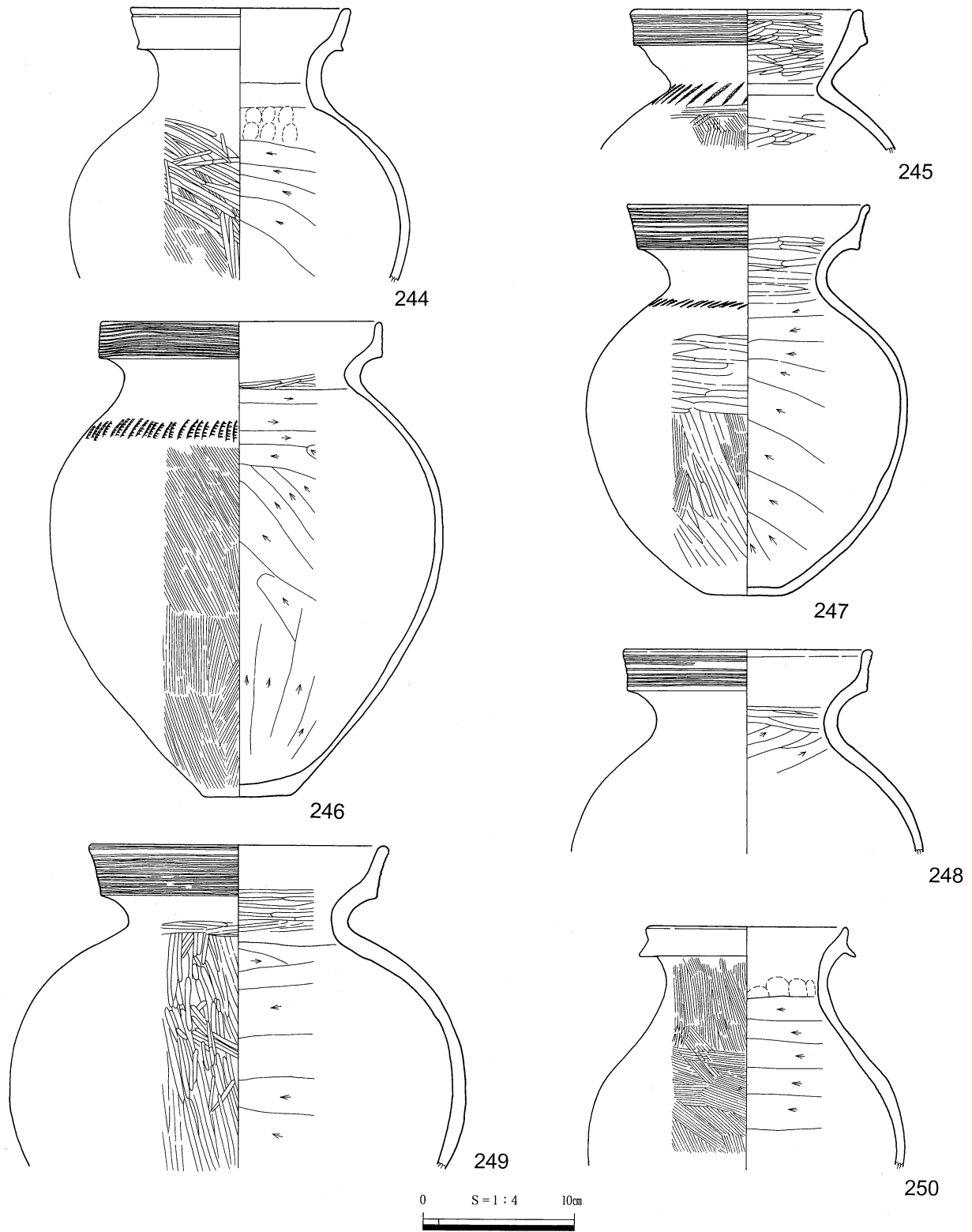
その他の溝(第85、86図) 7区で検出された溝を図示している。これらは掘り込まれた方向性から、S D 66、67などと関連性をもって掘り込まれたものであろうことはすでに述べた。微高地縁辺部に建ち並ぶ建物群の区画溝として機能していたものと考えられる。

土器溜11(第87～90図) 8区のS D 38とS D 69の間に形成された土器溜である。およそ2m×3mの範囲に土器が集中していたが、とくに南側において顕著であった。土器は特定の機種に偏ることはなく、あるいは壺と器台の数が一致するといったこともない。土器の型式を見た場合、S D 38に人骨が埋められ、また、S D 69の掘り込まれた時期と一致するものが多い。互いに関連するものか否か、断言するのは難しいのであるが、注意しておきたいところである。

土器溜11出土土器（第88～90図） 第88図は壺である。244は頸部が長めに立ち上がる。口縁部外面は強くナデておりはっきりしないが、凹線文を施していたようである。松井V期のものか。245、246は口縁部外面に多条沈線を施す。245の頸部は強く屈曲する。246は頸部の立ち上がりが明瞭でないため甕とも思えるが、口径と体部最大径の比較から壺と判断した。体部中央に最大径をもち、平底へ向かい自然にすぼまる。肩部には刺突文が巡る。松井VI期に属するものである。247～249は多条沈線を一部ナデ消す。247は体部中央に最大径をもち、底

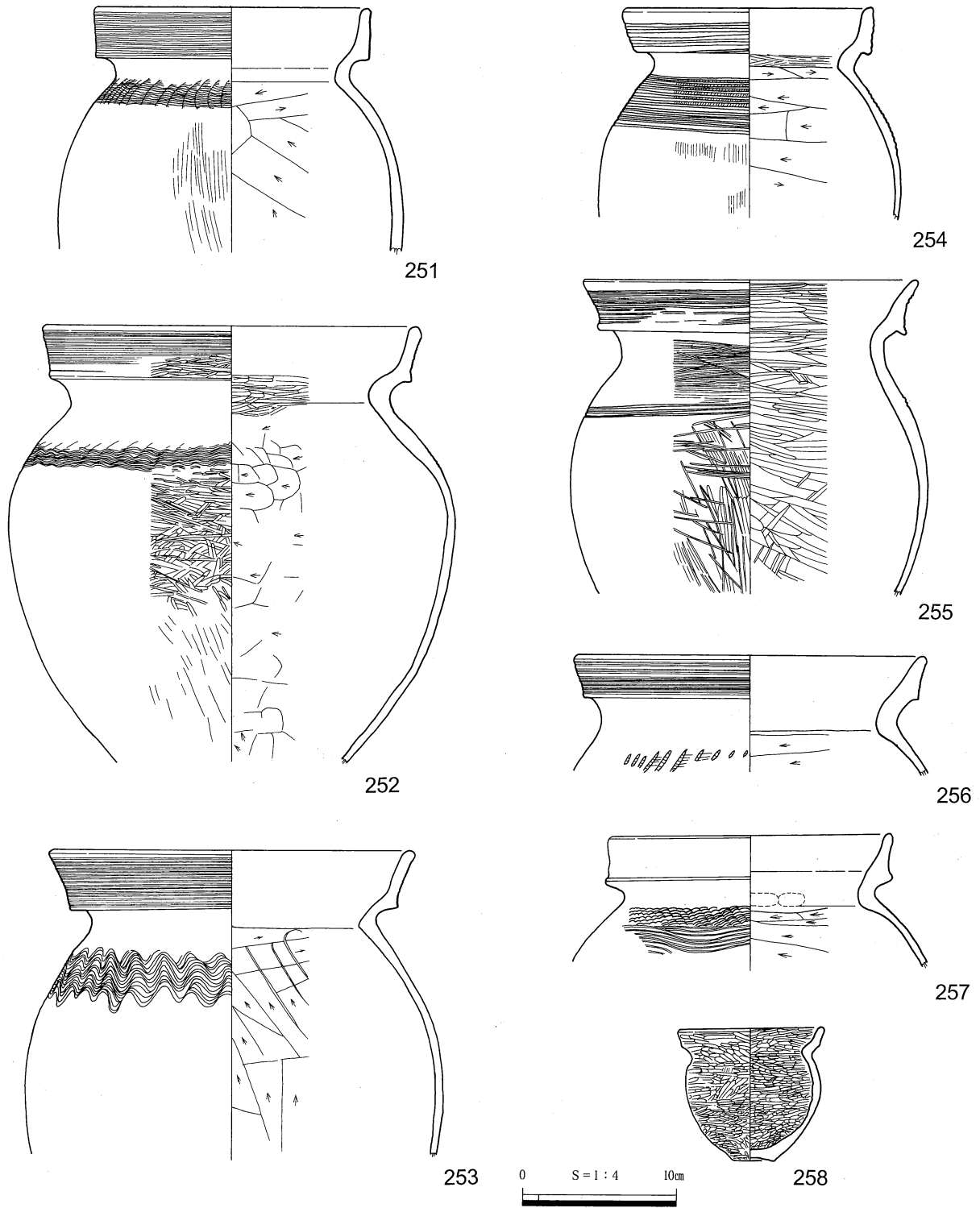


第87図 土器溜11



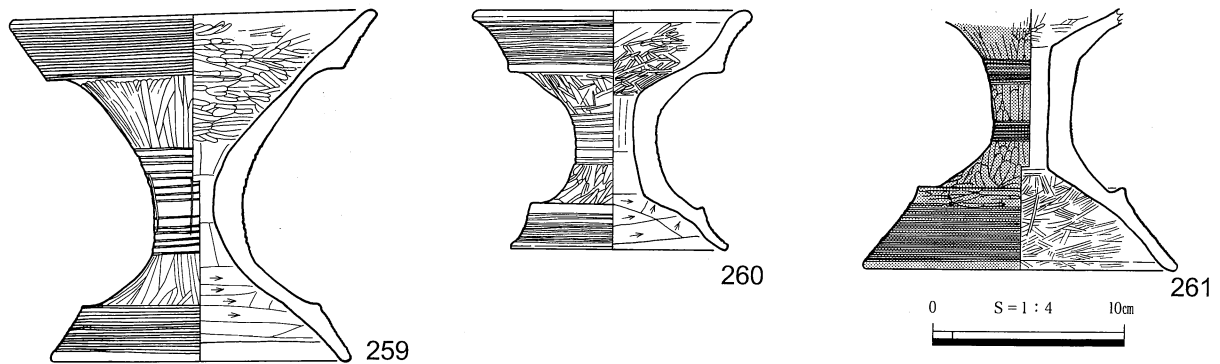
第88図 土器溜11出土土器 (1)

挿図番号	遺構	器高	口径	底径	施文・調整	取上番号
244	土器溜11	(18.0)	(14.5)		— 口縁部凹線文?後ナデ、体部外面ハケ後ヘラミガキ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	26999
245	土器溜11	(9.4)	(15.5)		— 口縁部多条平行沈線文、肩部刺突文、体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ後ヘラミガキ、口縁部ヘラミガキ	26996
246	土器溜11	31.8	18.7	5.7	— 口縁部多条平行沈線文、肩部刺突文、体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ、内面頸部ヘラミガキ、口縁部ナデ	26943
247	土器溜11	26.1	(16.0)	5.0	— 口縁部多条平行沈線文後一部ナデ消し、肩部刺突文、体部外面ハケ後ヘラミガキ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ヘラミガキ	28100
248	土器溜11	(13.7)	(16.5)		— 口縁部多条平行沈線文後一部ナデ消し、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	28101
249	土器溜11	(21.5)	(20.0)		— 口縁部多条平行沈線文後一部ナデ消し、体部外面ハケ後ヘラミガキ、内面頸部以下ヘラケズリ、内面頸部ヘラミガキ、口縁部ナデ	28017
250	土器溜11	(16.0)	(13.4)		— 体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ、内面頸部ユビオサエ、口縁部ナデ	28018



第89図 土器溜11出土土器(2)

挿図番号	遺構	器高	口径	底径	施文・調整	取上番号
251	土器溜11	(15.9)	(18.0)	—	口縁部多条平行沈線文、肩部押引文、体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	26977
252	土器溜11	(28.6)	(25.0)	—	口縁部多条平行沈線文、肩部波状沈線文、体部外面ヘラミガキ、内面頸部以下ヘラケズリ、内面頸部ヘラミガキ、口縁部ナデ	26929
253	土器溜11	(19.7)	(24.0)	—	口縁部多条平行沈線文、肩部波状沈線文、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	28018
254	土器溜11	(13.7)	(16.4)	—	口縁部・肩部平行沈線文、口縁部一部ナデ消し、体部外面ハケ、内面ハケ後頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	26801
255	土器溜11	(20.6)	(21.8)	—	口縁部多条平行沈線文一部ナデ消し、肩部平行沈線文、体部外面ハケ後ヘラミガキ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部内面ヘラミガキ	26938
256	土器溜11	(7.7)	(23.0)	—	口縁部多条平行沈線文後一部ナデ消し、肩部刺突文、体部内面頸部以下ヘラケズリ	28012
257	土器溜11	(8.4)	18.1	—	肩部押引文・平行沈線文、体部内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	26972
258	土器溜11	(8.7)	9.6	2.6	体部外面ハケ後ヘラミガキ、内面頸部以下ヘラケズリ後ヘラミガキ、口縁部外面ナデ、内面ヘラミガキ	26988



第90図 土器溜11出土土器 (3)

挿図番号	遺構	器高	口径	底径	施文・調整	取上番号
259	土器溜11	18.6	(19.3)	15.8	器受部・脚柱部・脚裾部多条平行沈線文、脚柱部透かし風の施溝、外面ヘラミガキ、器受部内面ヘラミガキ、脚裾部内面ヘラケズリ	26940
260	土器溜11	12.7	(14.7)	(11.5)	器受部・脚柱部・脚裾部多条平行沈線文、外面ヘラミガキ、器受部内面ヘラミガキ、脚裾部内面ヘラケズリ	26934
261	土器溜11	(13.1)	—	(16.6)	脚柱部・脚裾部多条平行沈線文、外面ヘラミガキ、器受部内面ヘラミガキ、脚裾部内面ハケ	26926

部にかけてすぼまるが、体部下半も丸みを維持している。249も体部の張りは大きい。248はナデ肩となる。松井Ⅷ～Ⅸ期に相当しよう。250はさらにナデ肩で、頸部との境がはっきりしない。口縁部はナデ調整され、そのせいか端部中央が大きくくぼむ。

251～257は甕である。253までは口縁部外面の多条沈線をナデ消さないもので、松井Ⅶ期に属しよう。251は体部は張らないようで、口縁部は直立する。肩部には押し引き文が施される。252は肩部が張る形態である。口縁部は外半する。253は251同様体部の張りはない。口縁部は外湾しながら開く。252、253の肩部には波状沈線を施す。254～256の多条沈線は一部ナデ消される。254の口縁は直立気味に立ち上がり、肩部とともに貝殻腹縁による沈線を施す。255は器体の調整にヘラミガキを多用する。256の口縁部の立ち上がりは短い。肩部には刺突文を巡らせる。松井Ⅷ～Ⅸ期と思われる。

258は鉢である。小型品ながら複合口縁を表現しており、器体の調整は細かなヘラミガキで埋め尽くされる。第90図には器台を示した。259は器受部と脚柱部の境があいまいである。脚柱部には透かしが退化したと思われる

縦方向の溝を刻んでいる。260は小型品である。



第91図 土器溜12、13

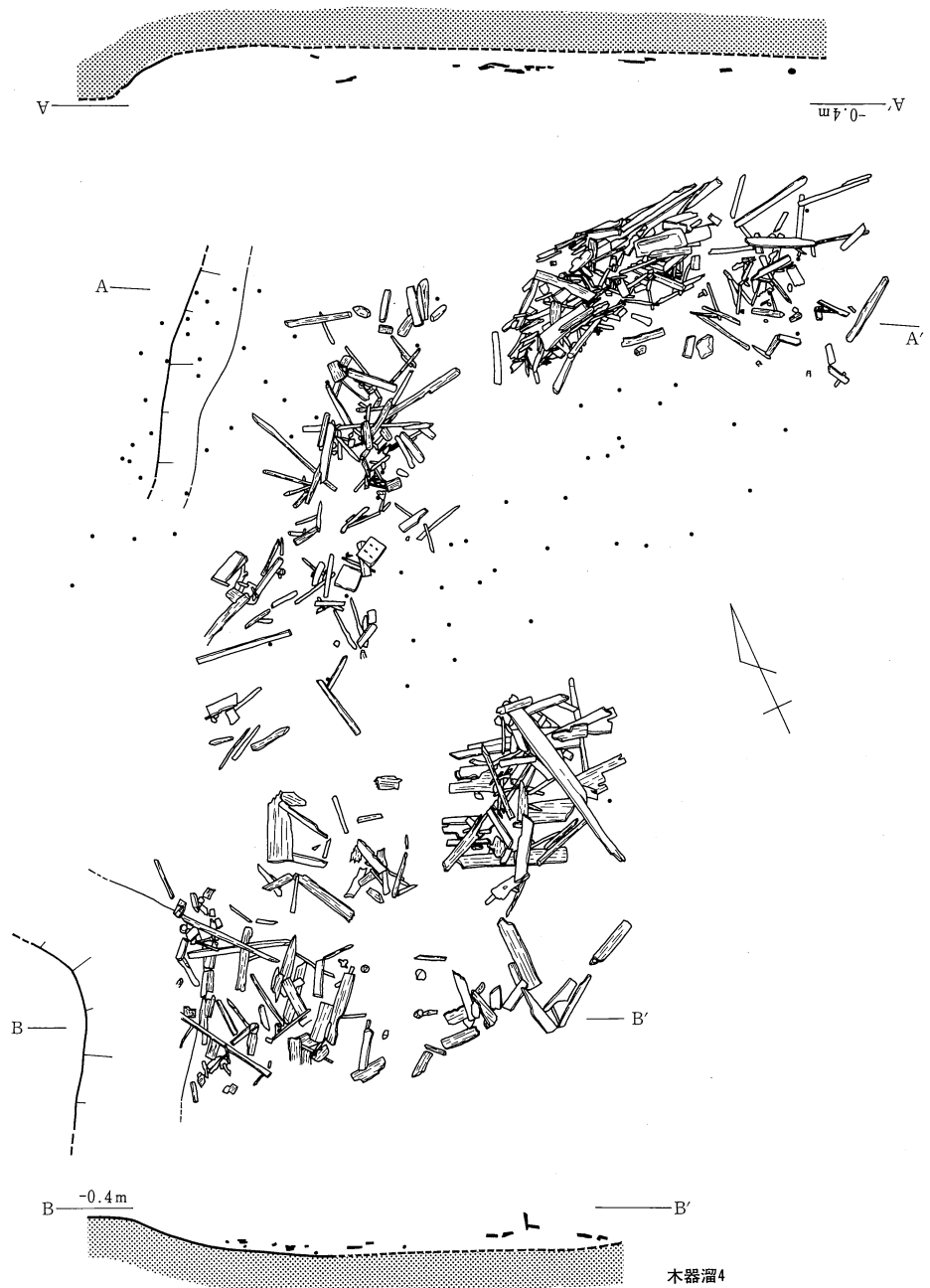
土器溜12、13 (第91図) 土器溜11に近接して検出した。土器溜12は1m×80cmの範囲を有する。壺(329、331、333)と甕(341)を第111、112図に示した。331は底部にX字状のヘラ記号が刻まれている。333は口縁部外面に貝殻腹縁による刺突文を巡らせている。いずれもやや異質な印象を受ける。土器溜13は1.2×80cmの範囲に土器が分布する。壺(335)と器台(346、347)を第111、113図に示した。346と347は接合しないが、同一個体の可能性がある。

当該期の土器溜については5区でも

検出されている⁽⁴⁾。基本的に1 m程度の範囲に土器片が散布するもので、完形のものを据え置いたようなものではない。また特定の機種に偏ることはなく、特殊な器形のものも顕著に伴うわけではない。前回の報告で述べたように、その多くは本来掘り込みをもったものであった可能性がある。

木器溜 第92図に8区で検出した木器の集積を掲載した。これらは微高地と低湿地部の境などに形成されたもので、遺構と認定していいか疑問な部分もある。ともにE層上面の検出で、249に示した椀形容器などは中期に遡る可能性が強いが、全体としてみれば層位的には後期と考えられる。唯一図示できた椀形容器を除けば基本的に板材や棒材で構成され、出土状況にもまとまりがない。

(湯村 功)



第92図 木器溜4、5

註

- (1) 北浦弘人編 2001『青谷上寺地遺跡3』(財)鳥取県教育文化財団。
- (2) 註(1)前掲文献。
- (3) a 土井珠美 1986「鳥取県下の状況」『第18回埋蔵文化財研究会 弥生時代後期から古墳時代初頭のいわゆる山陰系土器について 発表記録』。
b 松井 潔 1997「東の土器、南の土器—山陰東部における弥生時代中期後葉～古墳時代初頭の非在地系土器の動態—」『古代吉備』第19集。
- (4) a 湯村 功編 2000『青谷上寺地遺跡1』(財)鳥取県教育文化財団。
b 北浦弘人編 2000『青谷上寺地遺跡2』(財)鳥取県教育文化財団。
- (5) 註(4) a 前掲文献。
- (6) 光谷拓実編 2000『年輪年代法の最新情報—弥生時代～飛鳥時代—埋蔵文化財ニュース』奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター。
- (7) 註(4) a 前掲文献。
- (8) 註(4) a 前掲文献。
- (9) 平井泰男 2000「高塚遺跡出土の貨泉について」『高塚遺跡 三手遺跡2 (第3分冊)』岡山県文化財保護協会。
- (10) a 寺川史郎・尾谷雅彦編 1980『亀井・城山』(財)大阪文化財センター。
b 森井貞雄 1999「新しい弥生の年代観 3世紀は古墳時代か?」『卑弥呼誕生』。
- (11) 註(4) a 前掲文献。

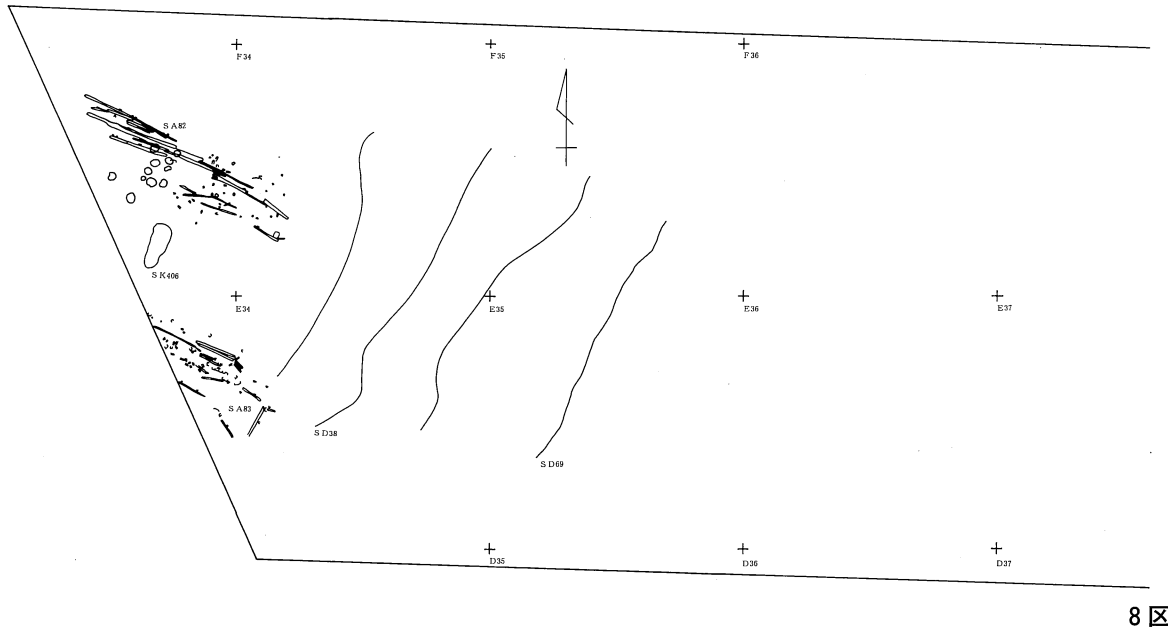
新名	旧名	調査区	グリッド	最大長(m)	最大幅(m)	最大深(m)	検出レベル(m)	出土遺物
SK384	SK200	7区	D30	3.6	2.5	0.3	0.59	P S W 敲石、台石、軽石加工品 盾、把手、建築部材
SK385	SK201	7区	D29	0.98	0.47	0.094	0.48	
SK386	SK202	7区	E30	1.72	0.42	0.061	0.353	W 建築部材
SK387	SK219	7区	E32	1.68	0.76	0.205	0.169	P B W 切断痕のある鹿角 アカトリ、栓
SK388	SK203	7区	D30	1.93	0.74	0.174	0.334	P
SK389	SK220	7区	D32	2.22	1.16	0.224	0.177	P W アカトリ
SK390	SK232	6区	H28	0.82	0.63	0.207	1.355	P
SK391	SK233	6区	H28	0.78	0.73	0.31	1.384	P
SK392	SK234	6区	H28	0.98	0.68	0.316	1.386	P B 直状ヤス
SK393	SK236	6区	G28	1.06	0.51	0.202	1.392	P
SK394	SK238	6区	H28	0.81	0.42	0.26	1.43	P
SK395	SK269	6区	G28	0.75	0.56	0.124	1.235	P D
SK396	SK254	6区	H28	0.84	0.58	0.183	1.348	P
SK397	SK255	6区	H28	0.63	0.55	0.134	1.339	
SK398	SK246	6区	H28	0.78	0.78	0.141	1.397	P S 管玉製作関係
SK399	SK263	6区	H28	(1.06)	(0.96)	0.148	1.304	P
SK400	SK265	6区	H28	0.81	0.48	0.205	1.328	P
SK401	SK252	6区	G29	(0.78)	(0.46)	0.195	1.47	P
SK402	SK270	6区	G28	0.69	0.44	0.111	1.265	P
SK403	SK274	6区	G28	1.73	1.0	0.157	0.999	P S 石庖丁 B 切断痕のある鹿角
SK404	SK268	6区	G29	1.81	0.8	0.2	1.234	P B D 弓、卜骨 紡錘車
SK405	SK244	6区	G28	1.26	0.86	0.189	1.377	P S 軽石加工品
SD38	SD33	8区	D33~34 E33~34	(13.2)	(9.5)	1.10	0.264	P W 泥除、木庖丁、木鎌、田舟、田下駄、斧柄未製品、袋状鉄斧柄、紡錘車、カセ?、舟、タモ枠、盾、戈の柄、匙、杓子、桶、桶底板、桶蓋、高杯、槽・盤、槽・盤未製品、杯形容器、容器の蓋、腰掛け、把手、衣笠、栓、建築部材、直柄又鎌、直柄横鎌、曲柄又鎌、組合平鋤、曲柄平鋤、整杆、田下駄未製品、作業台、板状鉄斧柄か扁平片刃石斧柄、斧直柄未製品、木釘、カセ、櫛、櫛未製品、盾、絞櫛、片口、片口状容器?、椀形容器、台付き装飾壺、箱、武器形、舟形、繻物、縄、衣笠、不明木製品
								B ヤス、擬顔状骨角器、骨鎌、把頭、腕輪、用途不明品 D 土錘 F 袋状鉄斧、刀子、鉄鎌、棒状鉄器、不明鉄製品 C 銅鐸(鑄)
SD56	SD34	8区	E33~34	(5.7)	(3.68)	0.114	0.001	P S 石庖丁、敲石、台石、凹石、砥石、棒状石製品 B ポイント状骨角器、固定鋸、刺突具、骨鎌、加工痕のある鹿角、両端加工の鳥骨、擦切痕のある骨、切断痕のある骨・鹿角 W 舟、匙、脚付槽、矢板、曲柄平鋤、楯把手、杓子未製品、桶、桶底板、刳り物桶、把手付き桶、高杯杯部?、槽、槽・盤、朱塗りの蓋、腰掛け、栓 D 勾玉形

表4 後期初頭～後葉遺構一覧表(1)

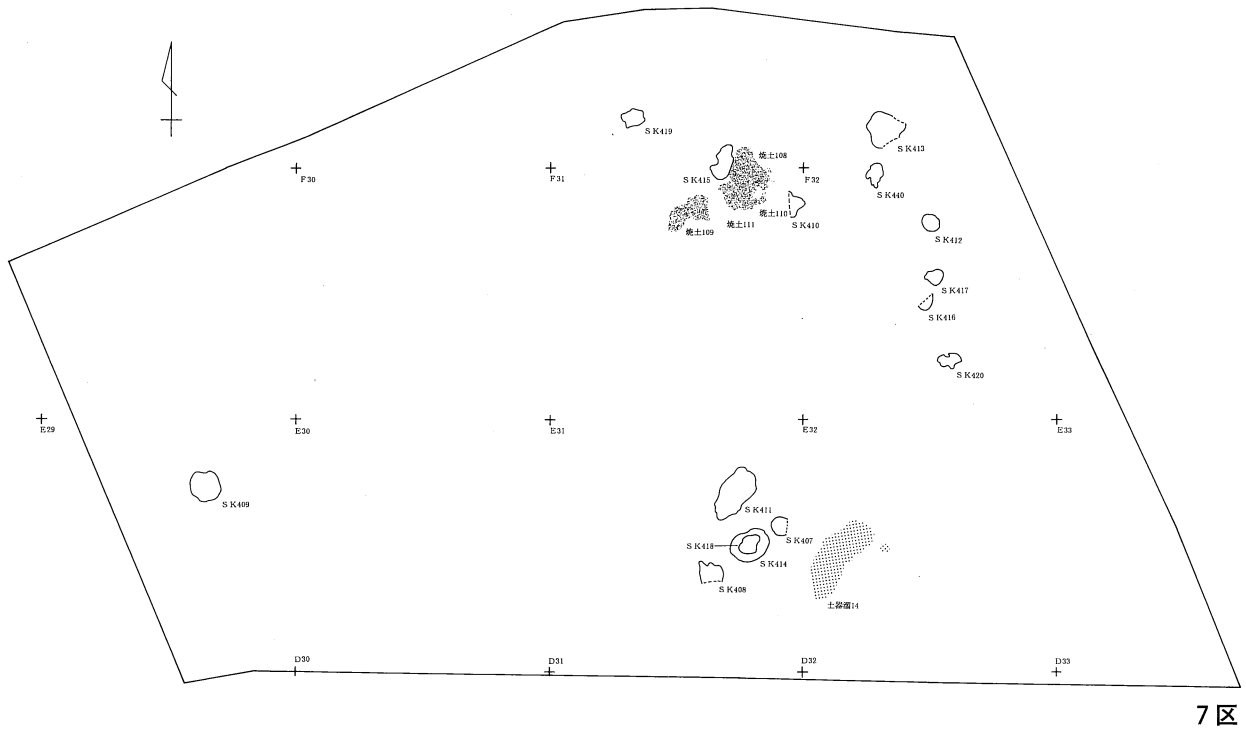
第3節 弥生時代後期初頭～後葉の遺構

新名	旧名	調査区	グリッド	最大長(m)	最大幅(m)	最大深(m)	検出レベル(m)	出土遺物
SD54	SD35	8区	D34～E34	(11.9)	(3.1)	1.459	-0.39	P 敲石、ガラス小玉 S 直状ヤス、固定鋸、アワビオコシ、ヘラ、ポイント状骨角器、有頭状鹿角加工品、加工痕のある鹿角片、切断痕のある骨・鹿角、ト骨 B 腕形容器、曲柄又鋸、組合平鋸未製品、組合平鋸の柄、木庖丁、田下駄、斧膝柄、櫂、網杓、ヤス、木鋸、弓状木製品、弓？、盾、竪櫛、匙、桶、桶底板、桶蓋、高杯、槽・盤、容器の蓋、腰掛け、編物、縄、衣笠、栓、不明木製品、建築部材 W 袋状鉄弁 F 土鍾
SD55	SD36	8区	D35～E35	(13.25)	(4.44)	1.1	-0.5	P 木庖丁、盾、栓、不明木製品、建築部材
SD57	SD37	8区	E33	(3.5)	(1.1)	0.55	0.001	P 石鍾 S 直状ヤスカ刺突具、加工痕のある鹿角片、切断痕のある鹿角、ト骨 B 木庖丁、斧柄、櫂、栓、不明木製品
SD58	SD38	7区	E30	4.75	1.14	0.277	0.493	P 敲石 S 直状ヤス、骨鋸
SD59	SD39	7区	D30～E30	4.0	2.25	0.203	0.398	P ヤス、刺突具、加工痕のある鹿角、切断痕のある鹿角、ト骨 B 組合平鋸 W 底板
SD60	SD41	7区	D30	1.7	0.93	0.201	0.695	P 建築部材
SD61	SD45	7区	E30	1.34	1.11	0.167	0.465	W 筒状加工品、加工痕のある鹿角、切断痕のある鹿角、ト骨
SD62	SD40	7区	D30	4.45	0.95	0.258	0.463	W 桶底板、栓 C 貨泉
SD63	SD42	7区	D30	4.0	1.01	0.145	0.34	P 切断痕のある鹿角
SD64	SD43	7区	D30	2.56	0.38	0.138	0.459	P 敲石、台石 S 擬頭状骨角器、切断痕のある鹿角
SD65	SD44	7区	D30	6.58	0.98	0.341	0.56	W 木庖丁、盾、箱、栓
SD66	SD46	7区	E31	(24.75)	(2.5)	0.28	0.85	P 石鍾、大型石庖丁未製品、敲石、台石、砥石、器種不明、軽石加工品、研磨痕のある礫、擦痕のある礫 B 直状ヤス、アグ先、ヤス、漁撈刺突具、固定鋸、加工途上用品、加工痕のある骨、切断痕のある骨・鹿角、刺片、柄状骨角器 W 木針、筒形容器 F 鉄器未製品、鉄片
SD67	SD47	7区	D31	(24.5)	(1.55)	0.25	0.75	P 敲石、軽石加工品、ガラス小玉 B 漁撈刺突具、切断痕のある鹿角 W 槽・盤、箱、火鑽臼 F 鋤(鋸)先
SA82	SA8	8区	E33～34	(10.5)	(1.75)	0.749	0.651	P 砥石、石核(黒曜石) B 刺突具 W 紡錘車、桶底板、槽・盤、栓
SA83	SA9	8区	D33～34	(6.45)	(1.55)	0.564	0.538	P 敲石、台石、擦痕のある礫
SA84	SA10	8区	E33～34	(8.75)	(1.05)	0.844	0.55	P 建築部材
SA85	SA11	7区	E30	(8.6)	(2.84)	0.43	0.94	P 管玉製作関係 S 直状ヤス、骨鋸、筒形容器 B 建築部材 W 建築部材
SA86	SA20	7区	E29～30	5.2	1.64	0.49	0.82	W 建築部材
SA87	SA34	7区	E31～32	9.32	0.44	0.41	0.59	
SA88	SA35	7区	E32	9.6	1.8	0.69	0.9	
SA89	SA36	7区	D31	2.9	2.66	0.43	0.73	
SA90	SA37	7区	D31	4.2	2.5	0.34	0.55	P キャップ状加工品 B 建築部材
SA91	SA38	7区	D31	4.86	1.5	0.38	0.56	W 建築部材
SA92	SA53	7区	D32	(10.5)	(0.72)	0.5	0.7	W 建築部材
SA93	SA54	7区	D31～32	(9.0)	(0.76)	0.42	0.63	W 建築部材
SA94	SA55	7区	D31～32	(7.0)	(2.64)	0.43	0.62	W 建築部材
SA95	SA72	7区	F32	1.4	0.58	0.31	0.55	
SA96	SA85	7区	D30～E31	1.0	0.5	0.15	0.55	
SA97	SA86	7区	D32～E32	7.8	1.16	0.49	0.63	
SA98	SA87	7区	E32	4.3	0.76	0.4	0.76	
SA99	SA88	7区	D32～E32	24.5	0.58	0.25	0.54	
焼土98	焼土67	7区	E30	0.65	0.55	0.7	0.59	
焼土99	焼土70	7区	E31	1.4	1.1	0.9	0.49	
焼土100	焼土72	7区	E31	0.6	#	0.8	0.6	
焼土101	焼土73	7区	E31	1.2	0.88	0.2	0.583	
焼土102	焼土76	7区	F32	(7.1)	(1.4)	0.6	0.48	
焼土103	焼土77	7区	E32	0.56	0.24	0.6	0.62	
焼土104	焼土88	6区	H28	1.4	0.6	0.18	0.984	
焼土105	焼土91	6区	H28	0.56	0.54	0.13	0.97	
焼土106	焼土94	6区	H28	0.22	0.16	0.4	1.02	
焼土107	焼土109	6区	I28	0.25	0.01	0.4	1.02	
土器溜11	土器溜11	8区	E34	3.3	2.26	0.12	-0.16	P
土器溜12	土器溜9	8区	E34	1.19	0.78	0.07	-0.05	P
土器溜13	土器溜10	8区	E34	0.85	0.75	0.12	-0.05	P
木器溜4	木器溜5	8区	D34	13.12	8.6	0.39	-0.3	P 建築部材 W

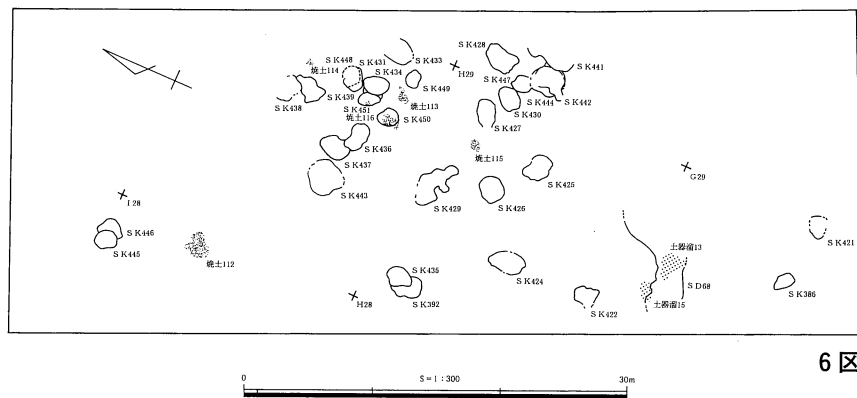
表5 後期初頭～後葉遺構一覧表(2)



8区



7区



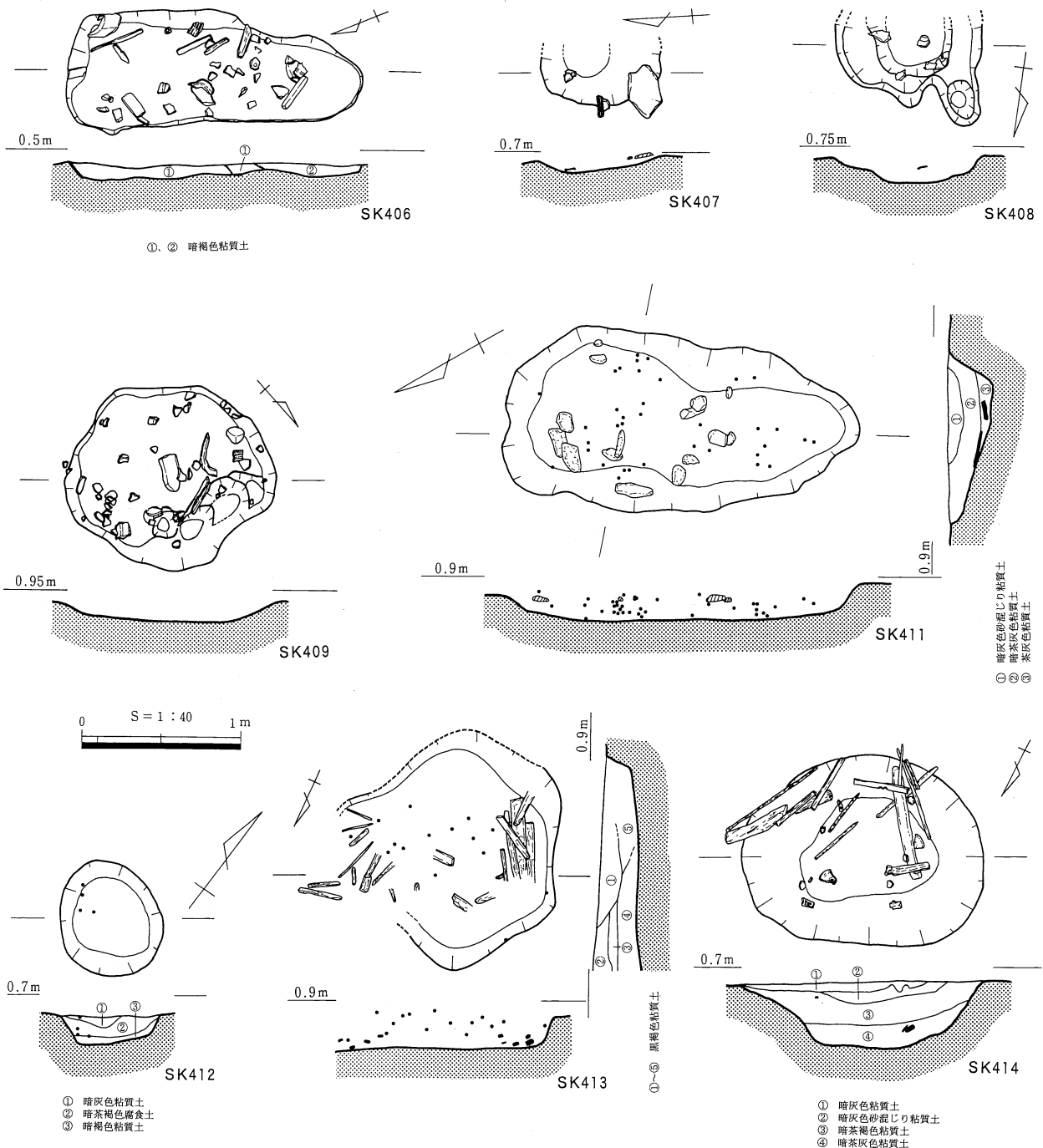
6区

第93図 弥生時代後期末～古墳時代前期初頭遺構配置図

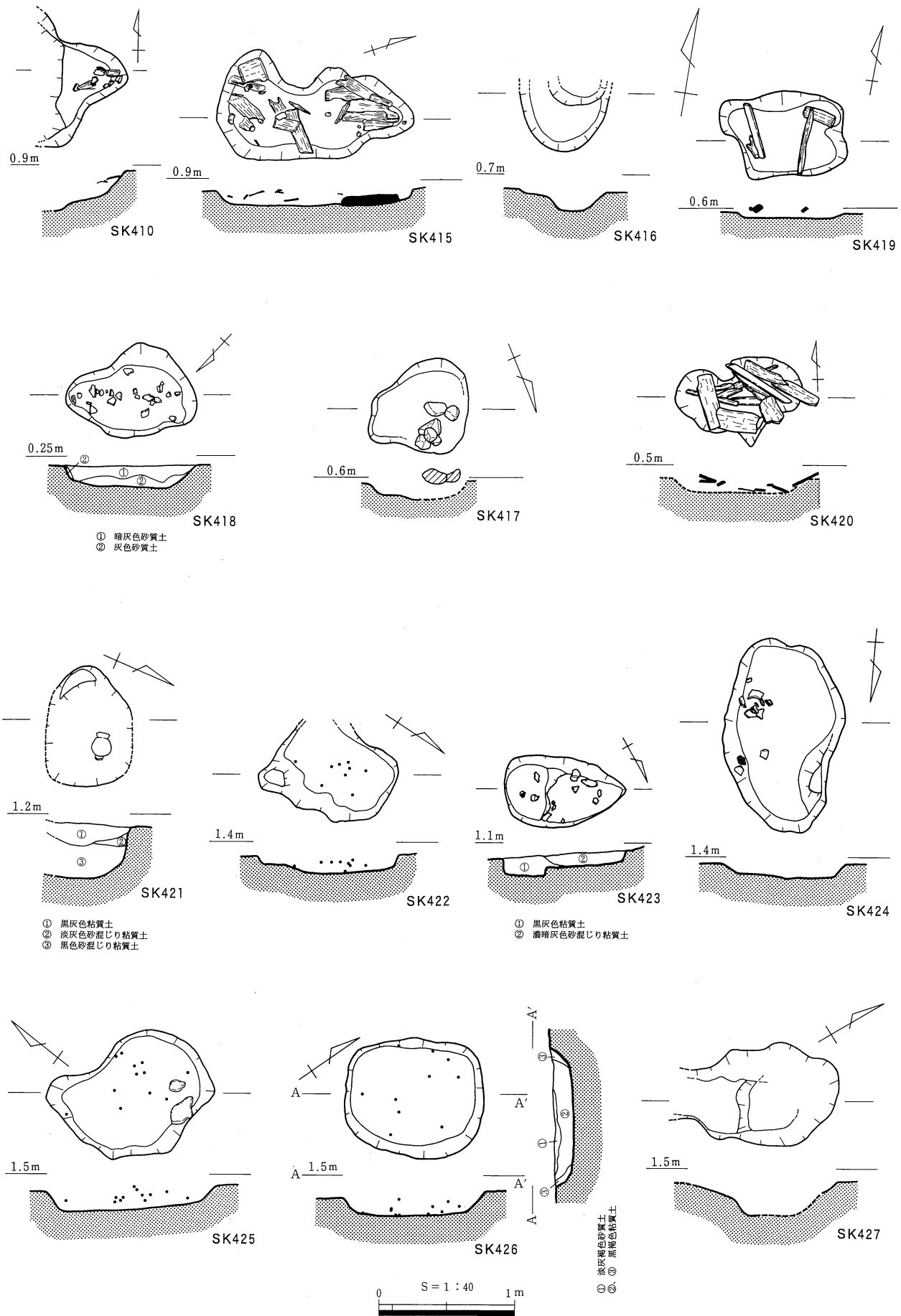
第4節 弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の遺構

土坑・溝の概要 土坑は47基検出した（第94～97図）。調査区ごとに分布を見ると8区1基、7区14基、6区32基となる。本遺跡の土坑は基本的に微高地上に築かれるものであり、7区の土坑が後期初頭～後葉段階よりも増えていることは、この場所が前段階よりも安定した地盤となったためであろうか。この時期にはS D 69の機能はまだ残っていたと思われるが、S D 38はほとんど埋没している。微高地西側のS D 11が埋没した部分にはいくつか土坑が掘り込まれていたが、S D 38の存在した微高地東側である8区には1基の土坑しか確認できていない。S D 38に人骨が埋められていたことと関係するのであろうか。

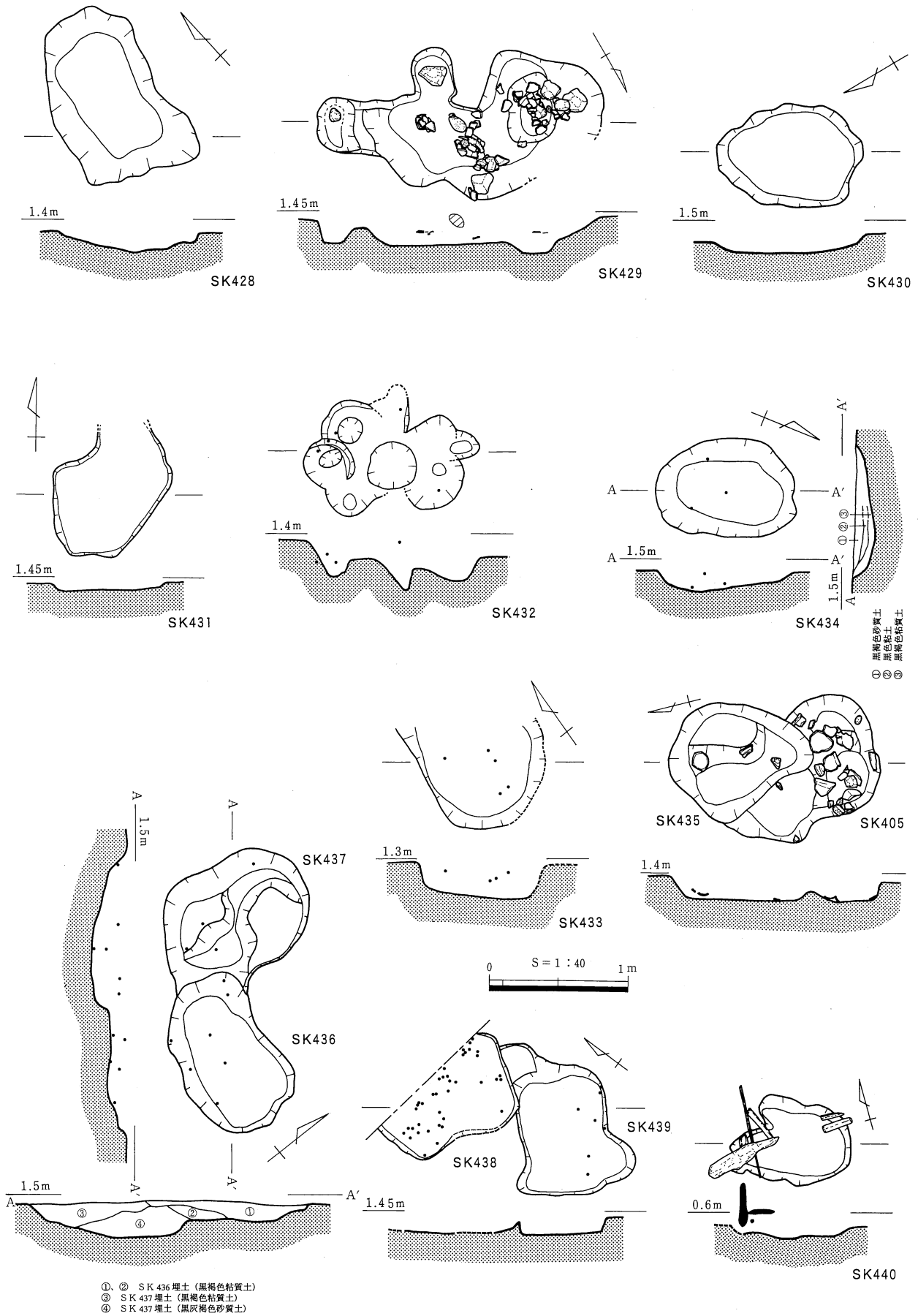
検出された47基の土坑は径1 mを大きく超えるものは少なく、いずれも不整形な円形・楕円形を呈する。埋土中には各種の遺物が認められたが、弥生後期以前の遺物包含層を掘り込んでいるため、本来土坑に伴っていたも



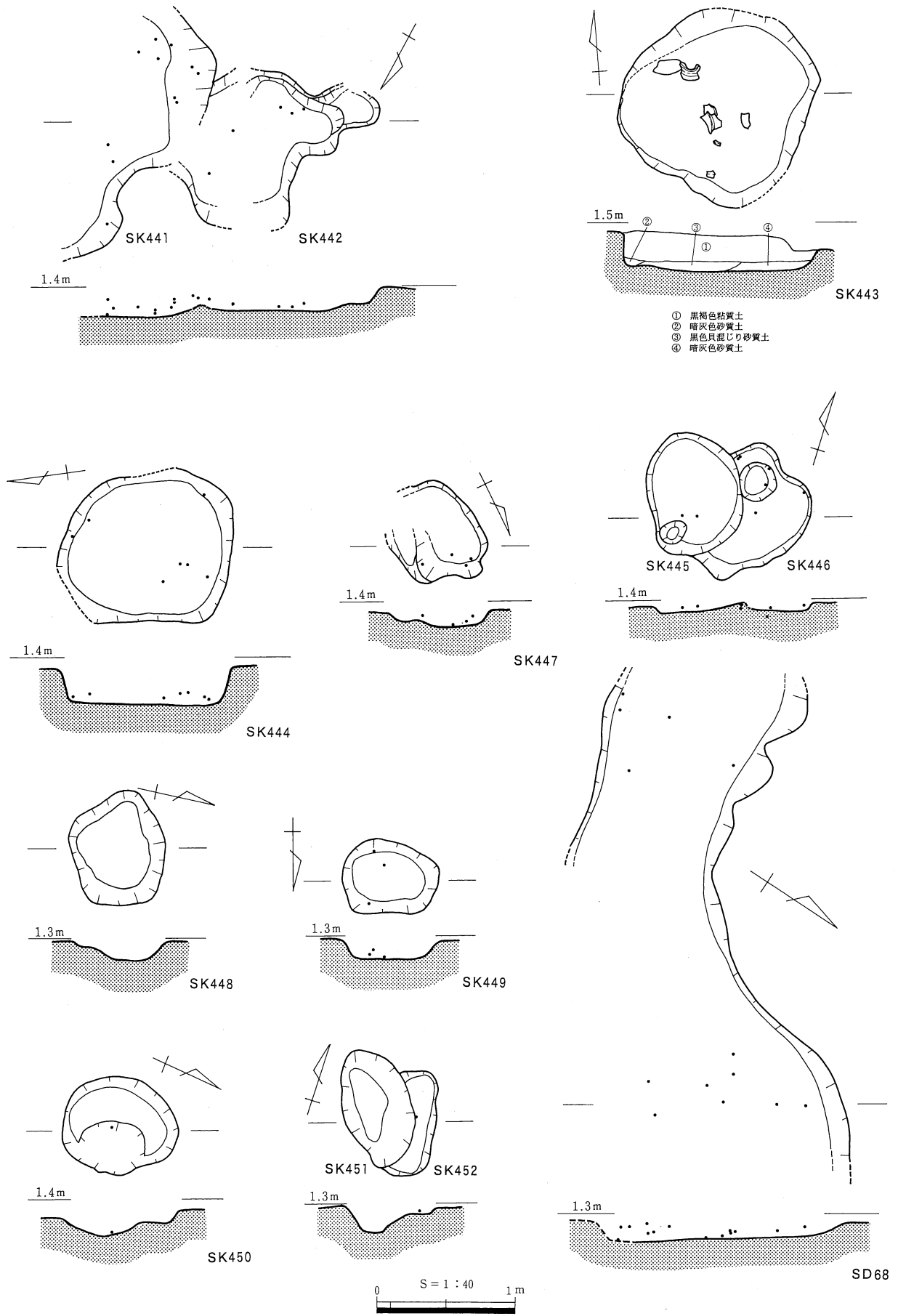
第94図 S K 406～409、411～414



第95図 SK 410、415～427



第96図 S K 428～440、405



第97図 SK 441~452、SD 68

のかどうかを判断するのは難しい。

特徴的な土坑について若干ふれる。SK 414は7区D 31グリッドで検出した。1.5m×1.2mのほぼ正円形を呈し、搦鉢状の掘り込みをもつ。埋土中からは板材などとともに武器形木製品が出土した。土器は破片が少量認められたが、それらは古墳時代前期初頭の特徴を示す。SK 421は6区F 29グリッドに位置する。検出できなかった部分もあるが、90cm×50cmほどの楕円形となるものであろう。掘り込みはしっかりしており、40cmの深さを確認している。埋土中から甕形土器が完形で出土した。第115図357に図を示したが、球形の体部に内湾気味に立ち上がる単純口縁をもち、布留系の甕であろう。本節では古墳時代前期初頭までの遺構を一括して扱っているが、そのほとんどは弥生時代後期末のもので、ここに記したふたつの土坑が築かれた段階には青谷上寺地遺跡は大規模集落としての機能を失っていたものと思われる。

環濠以外の溝はSD 68を確認したのみである(第97図)。微高地上である6区で検出したものであるが、後期初頭～後葉段階のように建物を区画するような溝ではないようである。微高地上に土坑群が築かれるあり方は前段階と変わらないが、後期末には環濠という集落を象徴するものは基本的に廃れており、遺構の数や分布範囲だけを問題にすれば集落の規模は保たれているように見えるが、その性格は大きく変わっていたように思う。

土器溜 14 (第98図) 7区D 32グリッドで検出された。離れて認められた若干例を除けば3m×1mの範囲に広がり、排水溝を切った付近

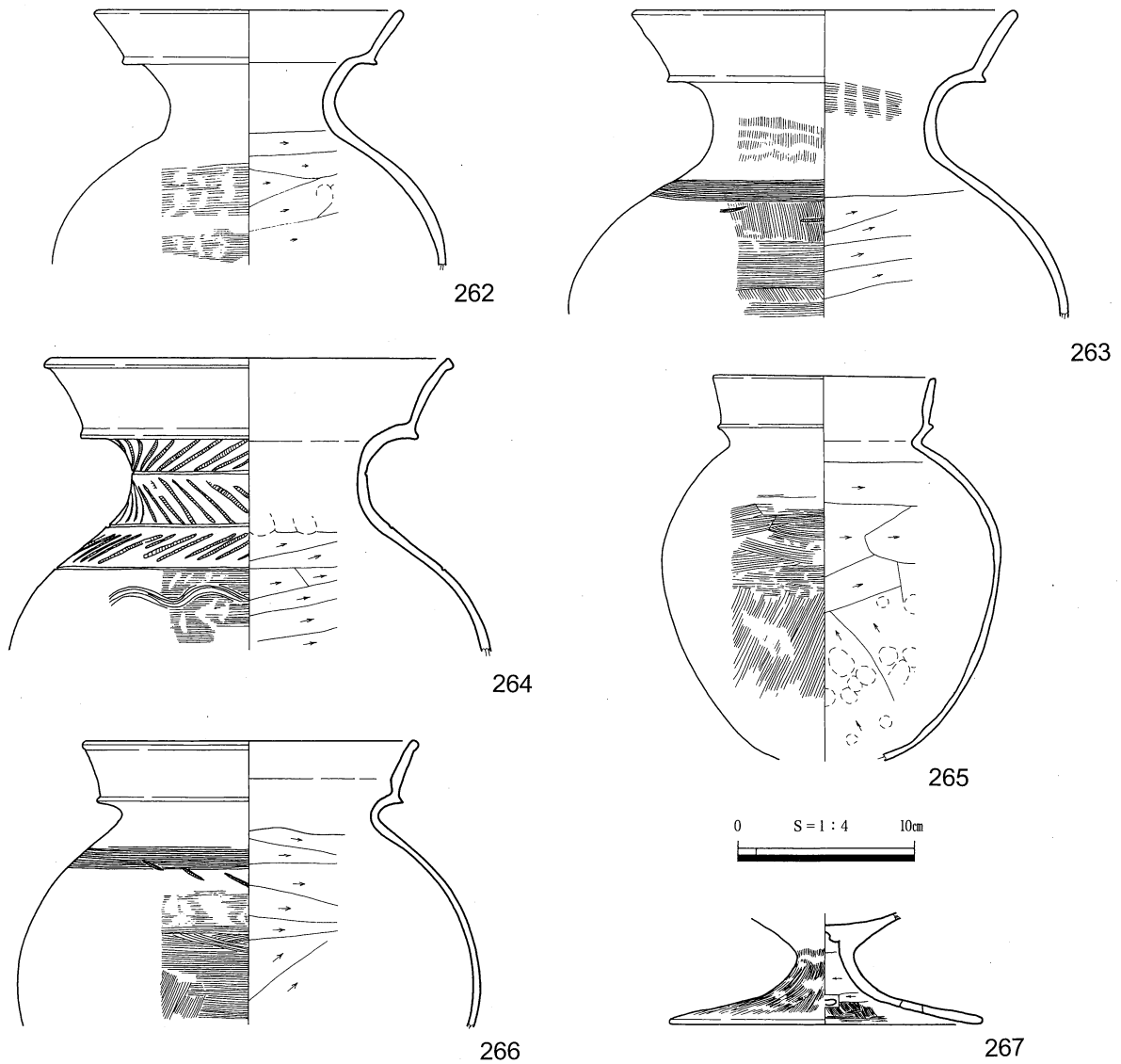


第98図 土器溜 14

にはとくに集中する。土器は一定の厚みをもって堆積しており、凶化して取り上げた後にその下から再び土器片が検出されるという状態であった。この時期の土器は器壁を薄く仕上げるため、細かく破損したものが多く、接合作業でも完全に復元できたものはない。

土器溜14出土土器 (第99図) 262~264はいずれも口縁部が大きく外反する形態をもつ。264は頸部に1条の沈線を入れ、それを挟んでハケ状工具による刺突を加え、羽状文としている。同様の工具を用いた刺突は肩部上半にも施される。これら3点ともに体部上半までしか残っていないため、全体の形状を知ることはできない。

265、266は甕である。265は体部上半に最大径をもつものの、下半も丸みを失っておらず、欠損しているが底部も丸く収めるものではなかろうか。口縁部は直立気味に立ち上がる。体部内面には整形に伴う指頭圧痕をよく残し、体部中央付近にまで及ぶ。266の口縁部は外反して開く。



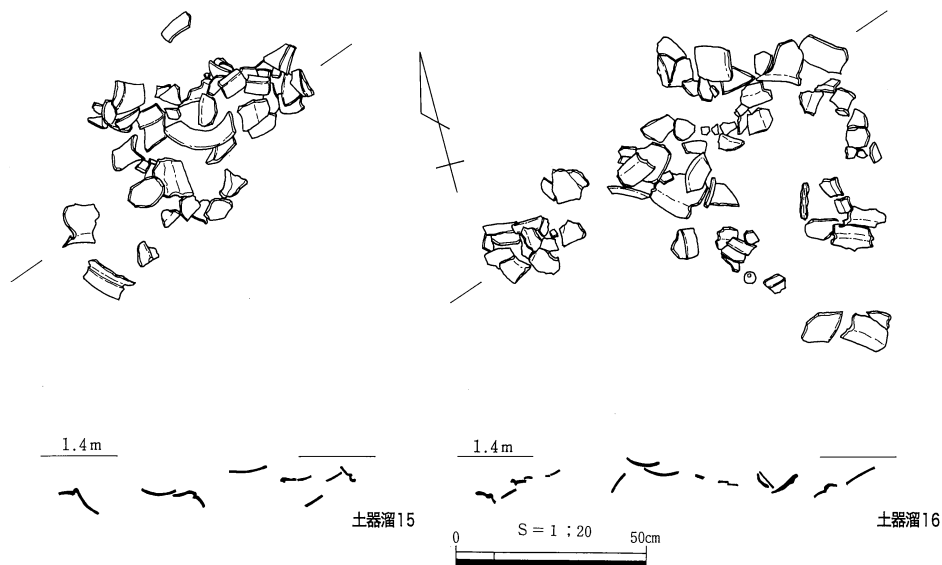
第99図 土器溜14出土土器

挿図番号	遺構	器高	口径	底径	施文・調整	取上番号
262	土器溜14	(14.5)	(16.4)	—	体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	41580
263	土器溜14	(17.7)	(22.2)	—	肩部平行沈線文、体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	41564
264	土器溜14	(16.7)	(22.6)	—	頸部・肩部綾杉文、肩部波状沈線文、体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	41692
265	土器溜14	(22.1)	(12.8)	—	体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ、内面下半ユビオサエ、口縁部ナデ	41693
266	土器溜14	(16.5)	(19.2)	—	肩部平行沈線文、体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	41693
267	土器溜14	(6.3)	—	(18.0)	杯部内外面ナデ?、脚部外面ハケ、内面ヘラケズリ後ハケ、杯部内面に付着物	41691

267の高杯は杯部を失う。脚柱部が短く脚裾部は大きく開いている。

これらは松井XⅢ期の特徴を備え、土器溜14は古墳時代前期初頭のものと位置付けられる。大規模集落としての機能を終えた時期に残されたものといえる。

土器溜15、16 (第100図) 6区F28グリッドで確認した小規模な土器の集積である。土器溜15は80cm×50cmの規模で、破片の数は少ない。土器を図示していないが、松井XⅠ期のものであった。土器溜16は土器溜15の東側50cmに位置し、径1mの範囲に土器が散漫に分布する。土器の示す時期は土器溜15と同じである。このふたつは土器の集積に伴う掘り込みは確認されておらず、土器溜と呼んでいるのであるが、土器溜11や14のような集中度はなく、遺構として捉えていいか疑問なところもある。(湯村 功)



第100図 土器溜15、16

新名	旧名	調査区	グリッド	最大長(m)	最大幅(m)	最大深(m)	検出レベル(m)	出土遺物
SK406	SK198	8区	E33	1.88	0.79	0.101	0.411	P D S 敲石 W 匙
SK407	SK208	7区	D31	0.75	0.4	0.098	0.667	P
SK408	SK209	7区	D31	0.93	0.64	0.203	0.623	P
SK409	SK199	7区	D29	1.33	1.17	0.153	0.828	P S 敲石
SK410	SK204	7区	E31	1.01	0.6	0.306	0.882	P S 管玉
SK411	SK206	7区	D31	2.26	1.2	0.193	0.528	P S ガラス小玉 D
SK412	SK212	7区	E32	0.76	0.64	0.157	0.567	P W 匙
SK413	SK211	7区	F32	1.66	1.42	0.291	0.828	P S 凹石 W 不明木製品
SK414	SK207	7区	D31	1.52	1.2	0.413	0.601	P W 武器形、火鑽白
SK415	SK205	7区	E31	1.41	0.82	0.14	0.842	S 軽石加工品 B 漁撈刺突具、加工痕のある鹿角剥片 D W 建築部材
SK416	SK213	7区	E32	(0.6)	(0.56)	0.132	0.59	P
SK417	SK214	7区	E32	0.74	0.69	0.144	0.572	P
SK419	SK215	7区	F31	1.0	0.7	0.093	0.613	P S 管玉製作関係、器種不明 B 卜骨
SK420	SK217	7区	E32	1.05	0.66	0.152	0.446	W 不明木製品

表6 後期末～古墳前期初頭遺構一覧表(1)

第2章 遺構の概要

新 名	旧 名	調査区	グリッド	最大長(m)	最大幅(m)	最大深(m)	検出レベル(m)	出 土 遺 物
SK418	SK218	7区	D31	0.95	0.69	0.11	0.18	P
SK421	SK221	6区	F29	(0.9)	(0.51)	0.4	1.14	P
SK422	SK223	6区	G28	(1.03)	(0.71)	0.127	0.299	P
								S 砥石
SK423	SK222	6区	F28	0.9	0.53	0.19	0.95	P
SK424	SK224	6区	G28	1.44	0.93	0.099	1.45	P
SK425	SK226	6区	G28	1.24	0.93	0.199	1.425	P
								S 敲石
SK426	SK225	6区	G28	1.03	0.88	0.203	1.413	P
								S 敲石、砥石
SK427	SK227	6区	G28	(1.22)	(0.76)	0.273	1.42	P
SK428	SK229	6区	G29	1.3	0.95	0.139	1.33	P
SK429	SK231	6区	G28	2.1	1.02	0.27	1.418	P
								S 敲石、砥石
SK430	SK228	6区	G28	1.06	0.76	0.137	1.392	P
SK431	SK243	6区	H28	1.1	0.77	0.05	1.4	P
SK432	SK245	6区	H28	1.28	0.88	0.436	1.419	P
SK433	SK266	6区	H28	1.04	0.78	0.292	1.302	P
SK434	SK237	6区	H28	1.02	0.71	0.149	1.421	P
								S 砥石、軽石加工品
SK435	SK235	6区	G28	1.05	0.86	0.202	1.391	P
SK436	SK239	6区	H28	1.18	0.71	0.41	1.459	P
SK437	SK240	6区	H28	1.28	0.92	0.285	1.429	P
SK438	SK241	6区	H28	(1.07)	(0.62)	0.055	1.387	P
SK439	SK242	6区	H28	1.27	0.91	0.144	1.42	P
SK440	SK271	6区	F28	0.84	0.6	0.09	0.51	
SK441	SK253	6区	G29	(1.82)	(0.75)	0.211	1.376	P
SK442	SK249	6区	G29	1.52	1.06	0.143	1.348	P
SK443	SK267	6区	H28	1.5	1.48	0.259	1.432	P
								S 大型石庖丁
SK444	SK250	6区	G28~29	1.2	1.08	0.28	1.344	P
SK445	SK247	6区	I27	0.9	0.69	0.12	1.4	D
SK446	SK248	6区	I27	1.02	0.68	0.116	1.4	P
								S 管玉製作関係
SK447	SK251	6区	G29	(0.82)	(0.62)	0.083	1.307	P
								D
SK448	SK264	6区	H28	0.88	0.73	0.158	1.296	P
SK449	SK256	6区	H28	0.69	0.54	0.159	1.277	P
SK450	SK257	6区	H28	0.84	0.72	0.183	1.306	P
SK451	SK258	6区	H28	0.87	0.5	0.207	1.295	
SK452	SK259	6区	H28	0.8	0.28	0.082	1.286	P
SD68	SD49	6区	F28	(3.36)	(1.1)	0.12	1.27	P
								S 敲石
								B 離頭鋸頭(福浦形?)
SD69	SD32	8区	D35~E35	(12.0)	(6.65)	0.6	-0.28	P
								S 伐採石斧、農具破片、敲石、磨石、砥石、軽石加工品
								B 加工痕のある鹿角、卜骨
								W 曲柄又鋸、鋤柄、木庖丁未製品、竪杵、横槌、田下駄、台?、斧直柄、斧膝柄、紡錘車、舟、櫂、櫂末製品、アカトリ、夕毛杵、木鏝、匙、桶、桶底板、桶蓋、槽・盤、曲物、栓、舟形、火鑽白、火鑽杵、不明木製品、建築部材
								C 銅鏝
焼土108	焼土68	7区	E31	2.6	2.0	0.15	0.83	
焼土109	焼土69	7区	E31	2.0	1.2	0.11	0.74	
焼土110	焼土74	7区	E31	1.78	0.66	0.108	0.747	
焼土111	焼土75	7区	E31	0.4	0.31	0.086	0.748	
焼土112	焼土78	6区	H28	1.1	0.9	0.12	1.3	
								S 石鏝
焼土113	焼土79	6区	H28	0.7	0.3	0.09	1.12	
焼土114	焼土80	6区	H28	0.3	0.3	0.04	1.16	
焼土115	焼土81	6区	H28	0.5	0.4	0.13	1.16	
焼土116	焼土83	6区	H28	1.7	0.54	0.08	-	
土器溜14	土器溜12	7区	D32	(6.72)	(0.31)	0.42	0.78	P
土器溜15	土器溜14	6区	F28	(0.8)	(0.52)	0.13	1.37	P
土器溜16	土器溜13	6区	F28	(1.1)	(1.02)	0.12	1.4	P
								D

第7図 後期末~古墳前期初頭遺構一覽表(2)

第3章 出土遺物

第1節 土器

はじめに

ここでは弥生時代前期末～古墳時代前期初頭にいたる土器を時期別に概観する。遺物包含層のもの以外に、第2章で説明できなかった遺構内出土のものも含む。

遺物の時期決定は土器の型式に基づいている。本来ならば遺構単位・包含層単位で説明すべきであろうが、例えば3層は中期中葉～後葉の土器を含んでおり、また2層は後期～古墳前期初頭までの土器が認められるなど、層位による時期の細分は困難である。各包含層における土器組成は第5章第1節で述べるので、そちらを参照されたい。本節では先学の業績に従い土器の時期を決定した⁽¹⁾。

なお、時期別の記述以外に線刻絵画土器・異形土器・外来系土器・スタンプ文土器を掲げ、個別に述べる。

弥生時代前期末～中期前葉の土器（第101～103図）

268～273は壺である。268、269は口縁部が大きく開く形態をもつ。268は口縁部に1条の沈線をめぐらせキザミを加える。頸部にはキザミのある貼付突帯が2条巡る。肩部以下を失うが、体部の張る形態となりそうである。269は施文が見られず、体部も張らない。270～273は口縁部の開きは小さい。270は体部の張りはそう大きくないが、広い底部をもつもので、寸詰まりな印象を受ける。272は小型品で、頸部に3条のヘラ描沈線を巡らす。273も7条のヘラ描沈線を頸部にもつ。

274～277は甕である。274、275は口縁部にキザミをもち、肩部にはそれぞれ7条、9条のヘラ描沈線が巡るが、体部の形態が異なる。274は外反する口縁部を除けば底部にかけてほぼ直線的にすぼまるが、275の体部は丸みを帯びる。

278～280は鉢である。280は大型で底径に比して口径が大きい。

第103図には櫛描文をもつ土器とそれに伴うであろうものを掲げた。

281～283は壺である。281は大きく広がらない口縁部に格子状のキザミを加える。体部には半円状の文様を描いている。282も同様な形態と思われ、やはり体部に半円状の文様が描かれる。281のように横への広がりはないが、半円状の文様が天地を逆に、弧を描く部分を接して配置される点は同じで、両者とも同じものを表現しているのだろう。283は長い頸部が特徴的である。貼付突帯を残存範囲で8条認める。

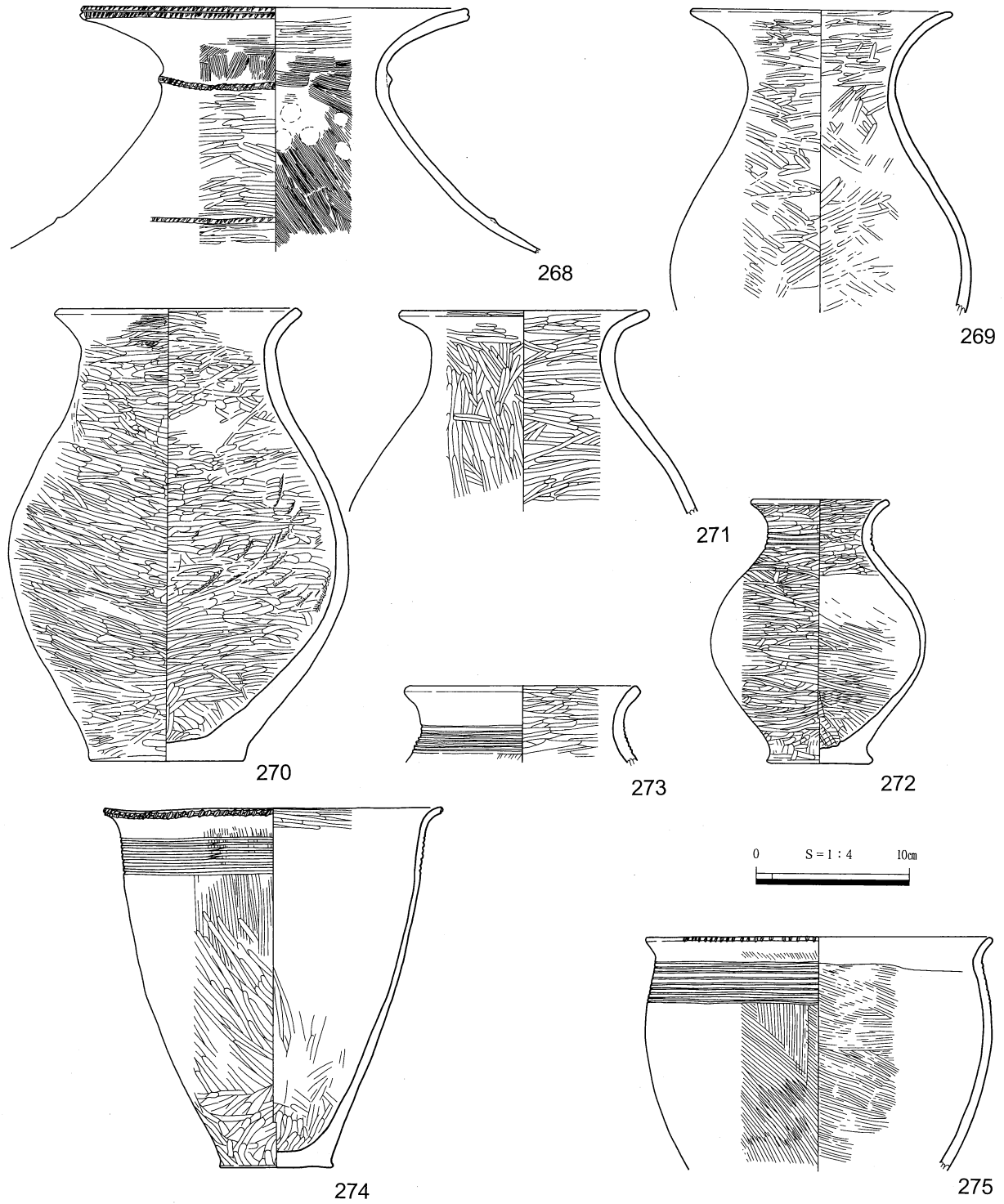
284以下は甕である。284、285の口縁は如意状となる。ともに口縁端部にキザミを施し、体部には櫛描きによる直線文（285には波状文も）と刺突文が見られる。286、287の口縁部は逆L字状となる。286ではそうでもないが、287は口縁部内面に明確な稜を形成している。口縁端部のキザミは287では格子状となる。

弥生時代中期中葉の土器（第104～106図）

第104図には壺を掲げた。288は口縁部が水平に広がる壺である。体部中央に最大径をもち、底部は安定する。頸部には沈線を巡らせる。

289、290の口縁部は外反しながら立ち上がるが大きく開かない。端部は内側にわずかに折り返され、面をなしている。それぞれ装飾形態が異なり、289は突帯を設け、そこに連続するキザミを加える。290は口縁部の装飾はなく、頸部に指頭圧痕文突帯を貼り付ける。

291は内傾して立ち上がる頸部に続き口縁部は外反し端部を外に拡張する。口縁端部に装飾は見られないが、口縁部直下に突帯を設けキザミを加え、頸部には櫛描きの沈線文と波状文を交互に配する。あまり見かけない器形である。



第101図 弥生時代前期末～中期前葉の土器（1）

挿図番号	器高	口径	底径	施文・調整	遺構・層位	取上番号
268	(16.0)	(25.5)	—	口縁部ヘラ描沈線文・キザミ、頭部・肩部貼付突帯文、頭部・肩部外面・口縁部内面ハケ後ヘラミガキ、口縁部外面・体部内面ハケ	SD45	49061
269	(20.0)	(17.4)	—	内外面ハケ後ヘラミガキ	③層	45593
270	30.1	(16.1)	9.8	外面ヘラミガキ、内面ハケ後ヘラミガキ	⑥層相当	6242
271	(13.3)	(16.4)	—	内外面ハケ後ヘラミガキ	⑤層	16684
272	(17.5)	(9.1)	7.0	頭部ヘラ描沈線文、内外面ヘラミガキ	⑥層	9562
273	(5.0)	(14.8)	—	頭部ヘラ描沈線文、口縁部外面ナデ、内面ヘラミガキ	⑥層～⑦層	48889
274	(23.9)	(22.3)	7.5	口縁部ヘラ描沈線文・キザミ、肩部ヘラ描沈線文、体部外面上半ハケ、下半ヘラミガキ、内面ナデ	②層	9429
275	(15.5)	(22.7)	—	口縁部キザミ、肩部ヘラ描沈線文、体部内外面ハケ	⑤層	16796

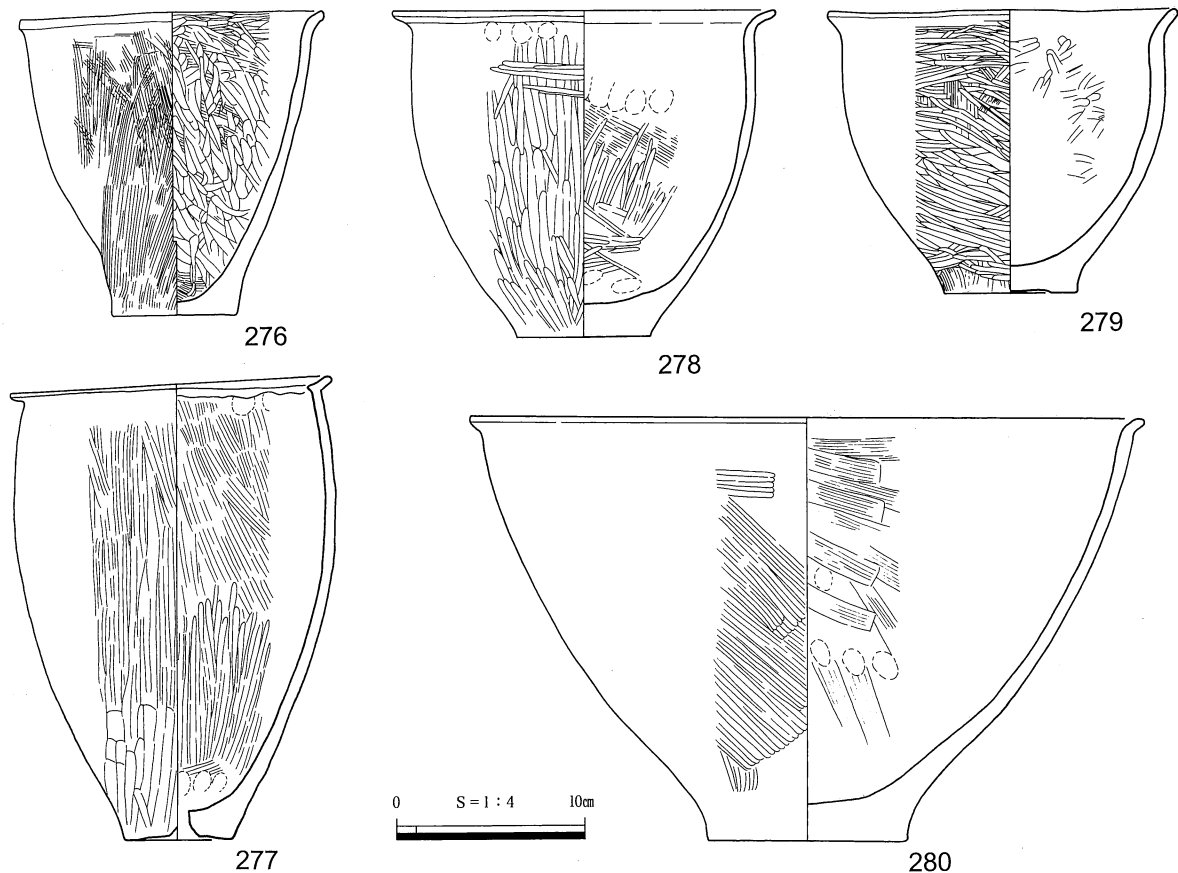
292～296は小型の一群である。293は体部の張りが弱く、広い口縁部と安定した底部をもつ。頸部にはタタキ整形の痕跡を残す。294は丸い体部と短く外反する口縁部を有し、口縁端部は肥厚気味に作る。小型の壺にしては器壁が厚い。295、296は算盤玉状に張る体部が特徴的で、丸みをもちながら厚めに作る口縁端部や、縦方向のミガキを主体としながら体部最大径部分は横方向にミガキなど、作りに共通点が多い。同様な壺は近畿地方においても認められ、中期後葉（第Ⅳ様式）を中心に存在するようである⁽²⁾。295、296も中期中葉という層位的根拠はないが、中期後葉に属する国道調査区SD27出土例では口縁部に凹線文が施されている⁽³⁾ため、凹線文の有無を重視して中期中葉と理解しておく。292も同じ系譜のものかもしれない。

297は無頸壺と呼べるものである。外に張らない体部に大きな底部をもち、口縁部は外へ拡張するように形成される。

第105図は甕である。298、299は短くくの字状に屈曲する口縁部の端部には何のアクセントも認められない。298は体部上半に最大径をもち、下半部は強く絞り込まれて底部に至る。299は体部の張りは大きくなく、そのまますぼまって底部となる。

300、301は口縁端部を上方に折り曲げるものである。300の折り曲げはごくわずかである。体部は大きく張り、最大径は中位のあたりで、底部に向かい強くすぼまる。301の口縁端部の折り曲げは明確で、それによって面を形成する。体部は張るものの300ほどではなく、底部にかけての絞り込みもきつくない。

302、303の口縁端部は顕著でないものの、上下への拡張が図られ面を形成している。302は口縁部に凹線文状



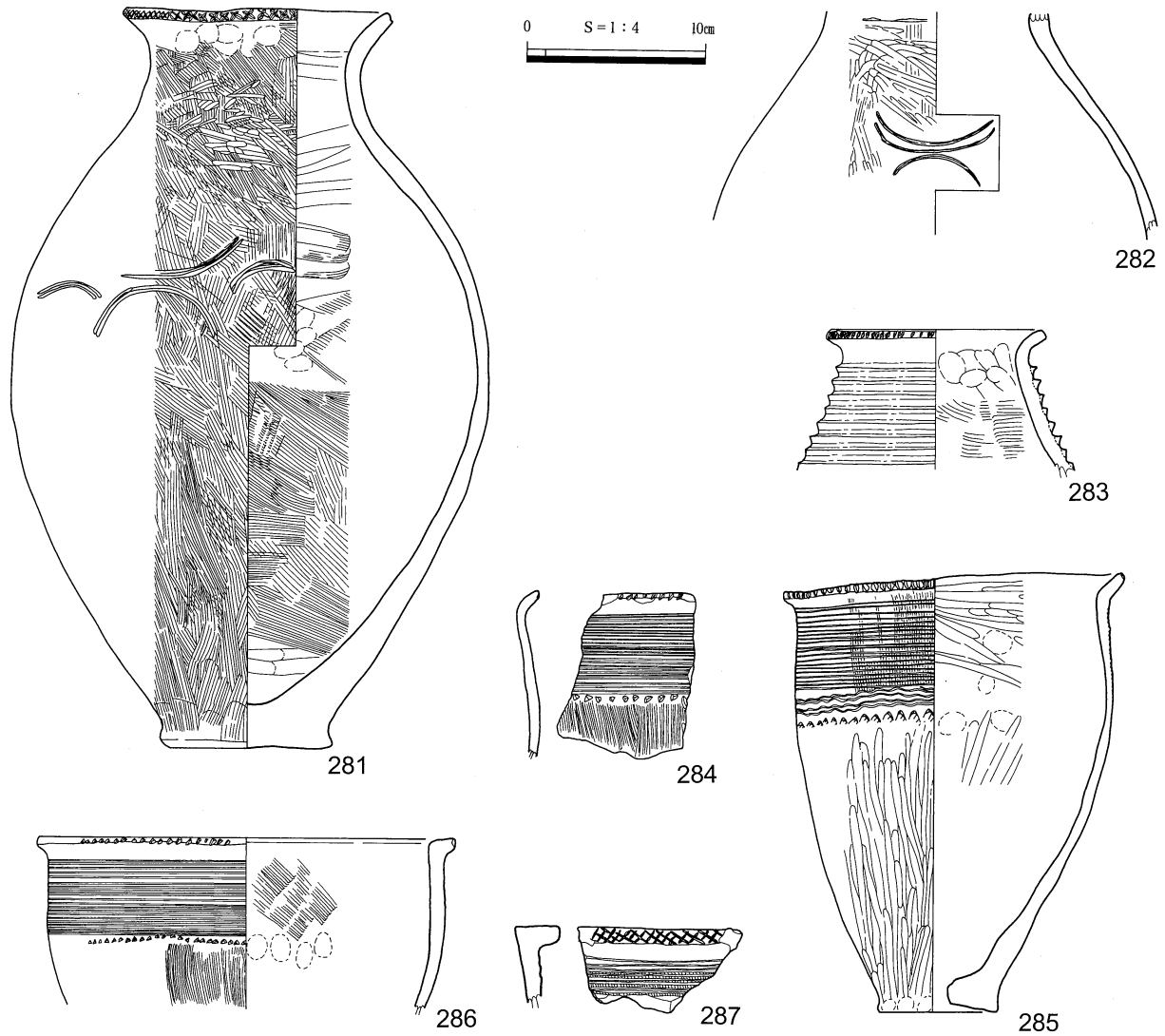
第102図 弥生時代前期末～中期中葉の土器（2）

挿図番号	器高	口径	底径	施文・調整	遺構・層位	取上番号
276	(16.4)	(16.4)	7.3	体部外面ハケ、内面ハケ後ヘラミガキ	②層	9429
277	25.0	(17.1)	5.8	体部内外面ハケ、底部穿孔	灰茶褐色粘質土	5774
278	(17.7)	(20.6)	7.0	内外面ハケ後ナデ・一部ヘラミガキ	③層相当	5226
279	(15.4)	(18.8)	7.2	内外面ハケ後ヘラミガキ	②層	9238
280	22.8	(36.3)	10.8	体部外面ハケ、内面ハケ後ナデ	⑤層	16455

の凹みを1条有する。体部上半に最大径をもち、広めの底部までの高さは高くない。体部内面のケズリは上半にまで及ぶ。303は肩部以下を欠失するため形状は不明だが、大きめの甕である。口縁端部の拡張はそれほど明確ではないにしても認めることができる。体部外面にはタタキ調整を認めることができる。

304、305は拡張された口縁端部をキザミ、頸部には指頭圧痕文突帯を巡らす。ともに体部上半以下を失うが、体部の張り具合や体部最大径と口径の比率などに違いが見られる。

これらの甕で底部まで残るものには、焼成後に底部に施された穿孔が見られるものが多い。数字としては把握しておらず印象的なものだが、中期中葉の甕に多く見られる。甕としての機能にかかわるものであれば焼成前に穿孔したのであろうが、そうではなく、機能の転換が図られたものと思われる。今回は検討できなかったが、今後注意する必要がある。

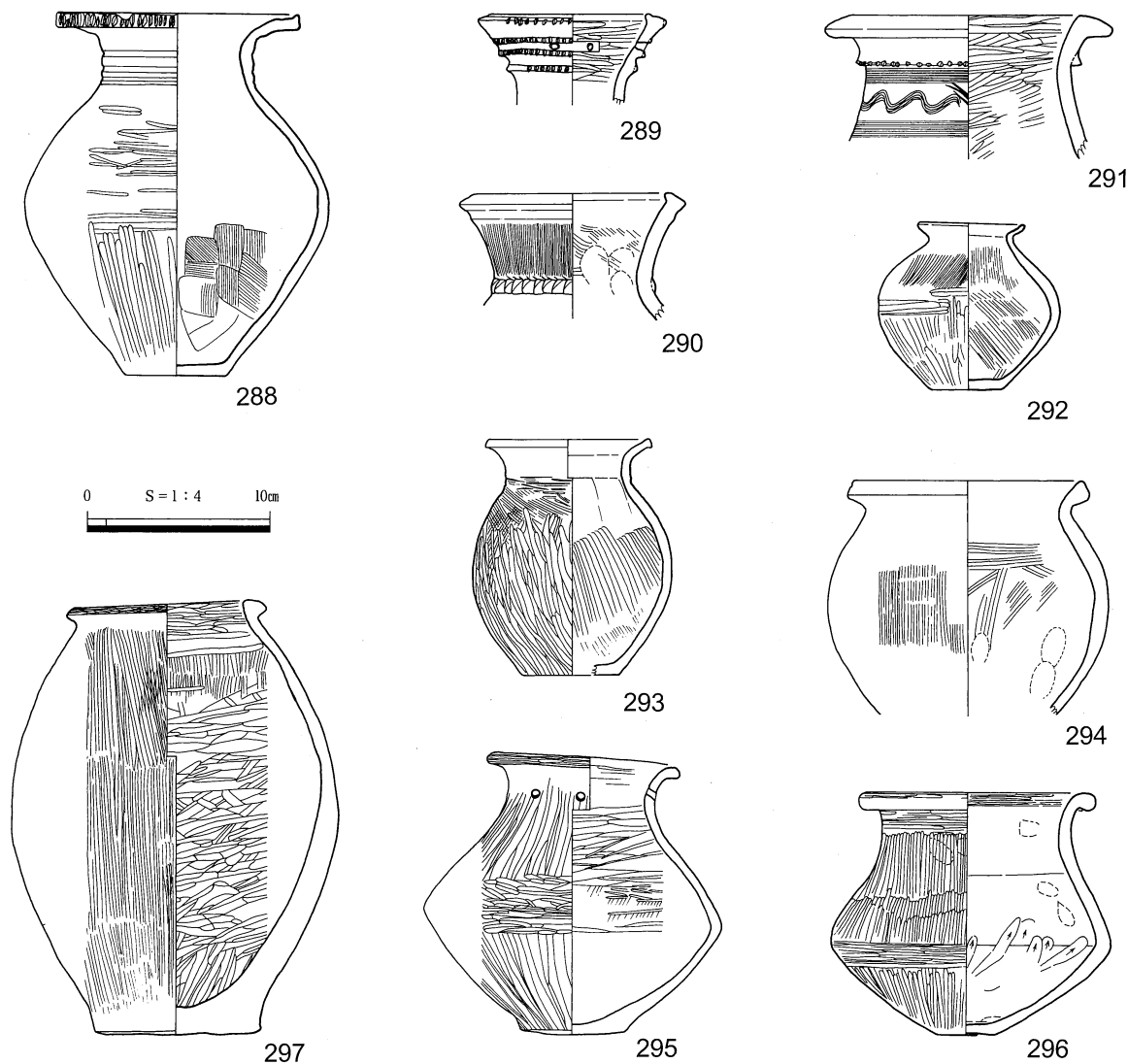


第103図 弥生時代前期末～中期前葉の土器（3）

挿図番号	器高	口径	底径	施文・調整	遺構・層位	取上番号
281	42.0	(15.3)	9.8	口縁部キザミ、肩部線刻文様、体部内外面ハケ後一部ヘラミガキ、口縁部ナデ	⑥層	6245
282	(12.7)	—	—	体部外面ヘラミガキ、肩部線刻文様	⑤層	16601
283	(8.0)	(6.9)	—	口縁部キザミ、頸部貼付突帯文、口縁部・頸部外面ナデ、内面ハケ後ナデ	⑥層	49085
284	(10.5)	—	—	口縁部キザミ、肩部櫛描沈線文・刺突文、体部外面ハケ、内面ヘラミガキ	⑤層	47813
285	(25.0)	(19.7)	(5.7)	口縁部キザミ、肩部櫛描沈線文・刺突文、体部外面ハケ・下半ヘラミガキ、内面ナデー部ヘラミガキ	②層	8114
286	(9.6)	(23.7)	—	口縁部キザミ、肩部櫛描沈線文・刺突文、体部外面ハケ、内面ハケ後ナデ	⑤層	47894
287	(4.0)	—	—	口縁部キザミ、肩部櫛描沈線文、体部外面ハケ、内面ハケ後ヘラミガキ	③層	46664

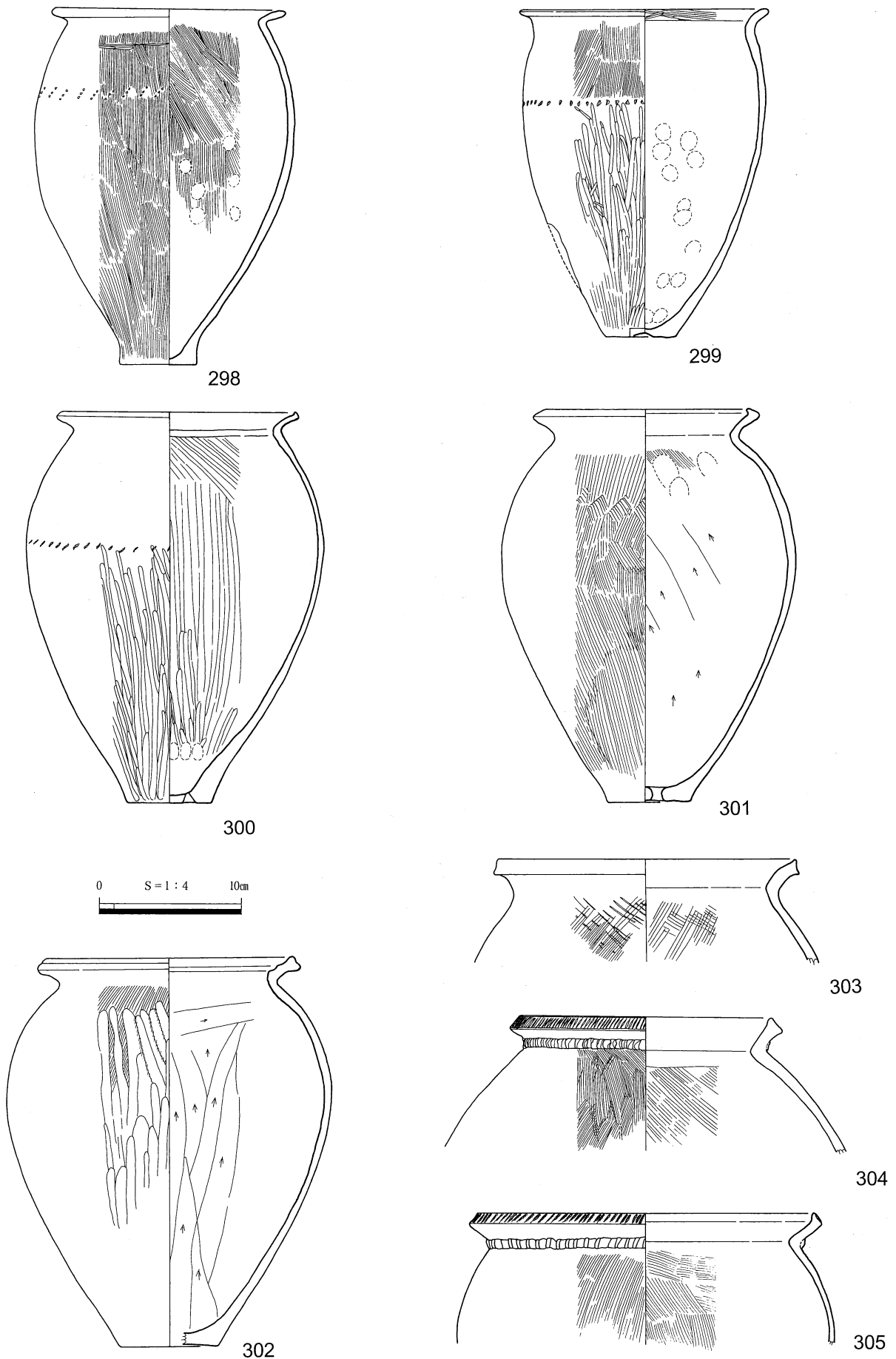
306は鉢で、外に開きながら直線的に立ち上がる器体が考えられる。キザミを有する突帯や櫛描きの沈線文と波状文を交互に施す点は289、291に示した壺と共通する装飾方法である。

307以下は高杯である。307、308の形態は木器と共通する（第293、294図）。この高杯が顕著に見られる近畿地方では中期中葉～後葉（第Ⅲ様式～第Ⅳ様式）にかけて存在し⁽⁴⁾、本遺跡の同形態の木製高杯が基本的に中期後葉であることもあり、307、308の所属時期は必ずしも中期中葉に限定できない。309も口縁部が水平に広がるものであるが、端部を拡張しないことや杯部が内湾する形態を示すなど、異なる特徴を有している。310は内湾する杯部の口縁端部が拡張され、面を形成している。鈕孔かと思われる穿孔があり、蓋を伴うものであろうか。

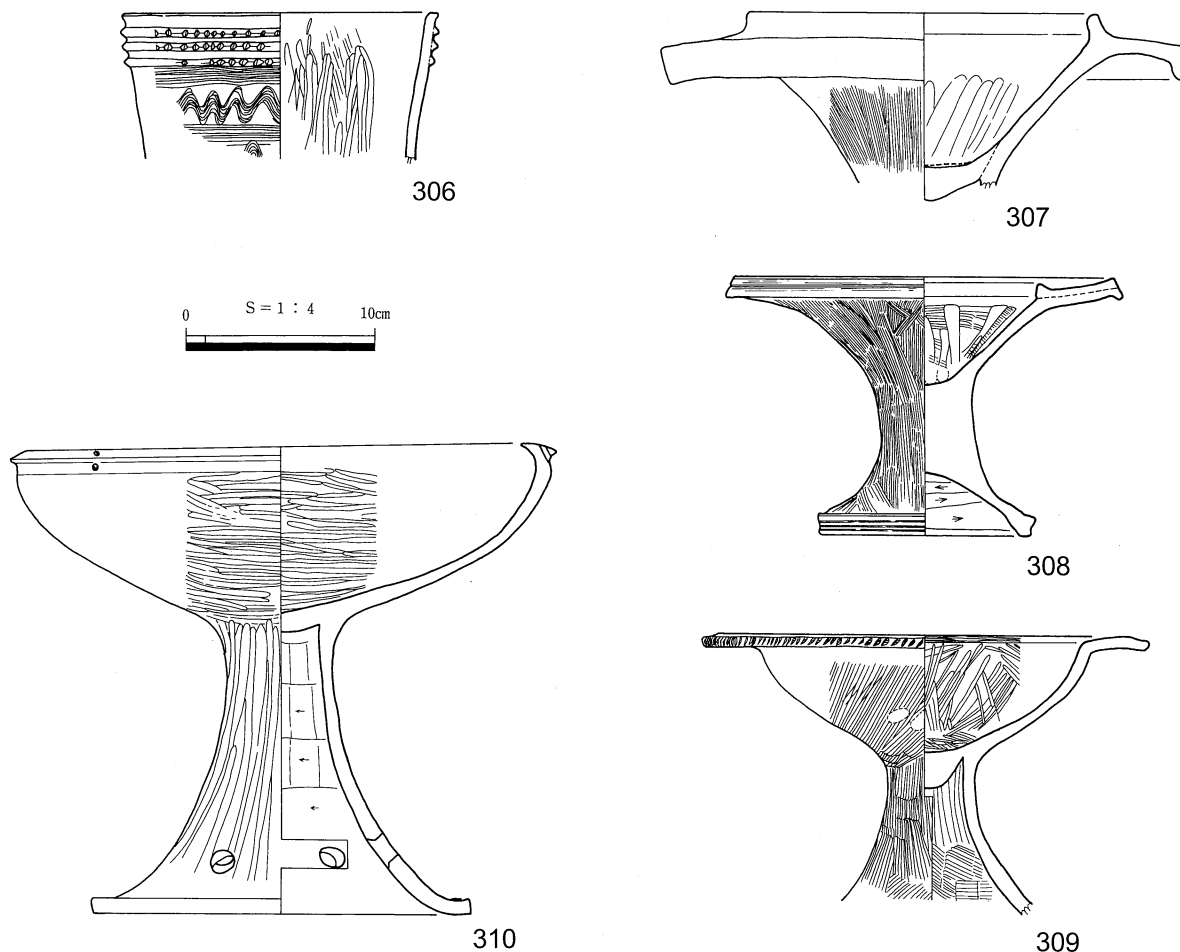


第104図 弥生時代中期中葉の土器（1）

挿図番号	器高	口径	底径	施文・調整	遺構・層位	取上番号
288	20.2	13.4	5.4	口縁部キザミ、頸部沈線文、体部外面ヘラミガキ、内面ハケ、口縁部ナデ	③層	44205
289	(5.0)	(8.5)	—	口縁部下貼付突帯文、頸部・口縁部外面ナデ、内面ヘラミガキ	③層	47597
290	(7.0)	(12.6)	—	頸部指頭圧痕文突帯文、頸部内外面ハケ、口縁部ナデ	②層～③層	45458
291	(8.0)	(16.0)	—	口縁部下貼付突帯文、頸部櫛描沈線文・波状文、頸部外面ハケ、内面ヘラミガキ	③層～⑤層	47739
292	9.4	6.0	3.9	体部外面ハケ後ヘラミガキ、内面ハケ	①層～②層	45067
293	13.2	(8.9)	5.5	体部外面タタキ後ハケ・ヘラミガキ、内面ハケ	②層	46017
294	(12.9)	(12.8)	—	体部内外面ハケ、口縁部ナデ	②層相当	4762
295	15.6	(10.7)	5.8	内外面ヘラミガキ	②層相当	4740
296	13.5	(12.4)	3.2	体部外面ヘラミガキ、体部内面下半ヘラケズリ	SD11	6144
297	24.2	(11.0)	(9.0)	体部外面ハケ、内面ハケ後ヘラミガキ、口縁部ヘラミガキ	J層	36828



第105図 弥生時代中期中葉の土器（2）



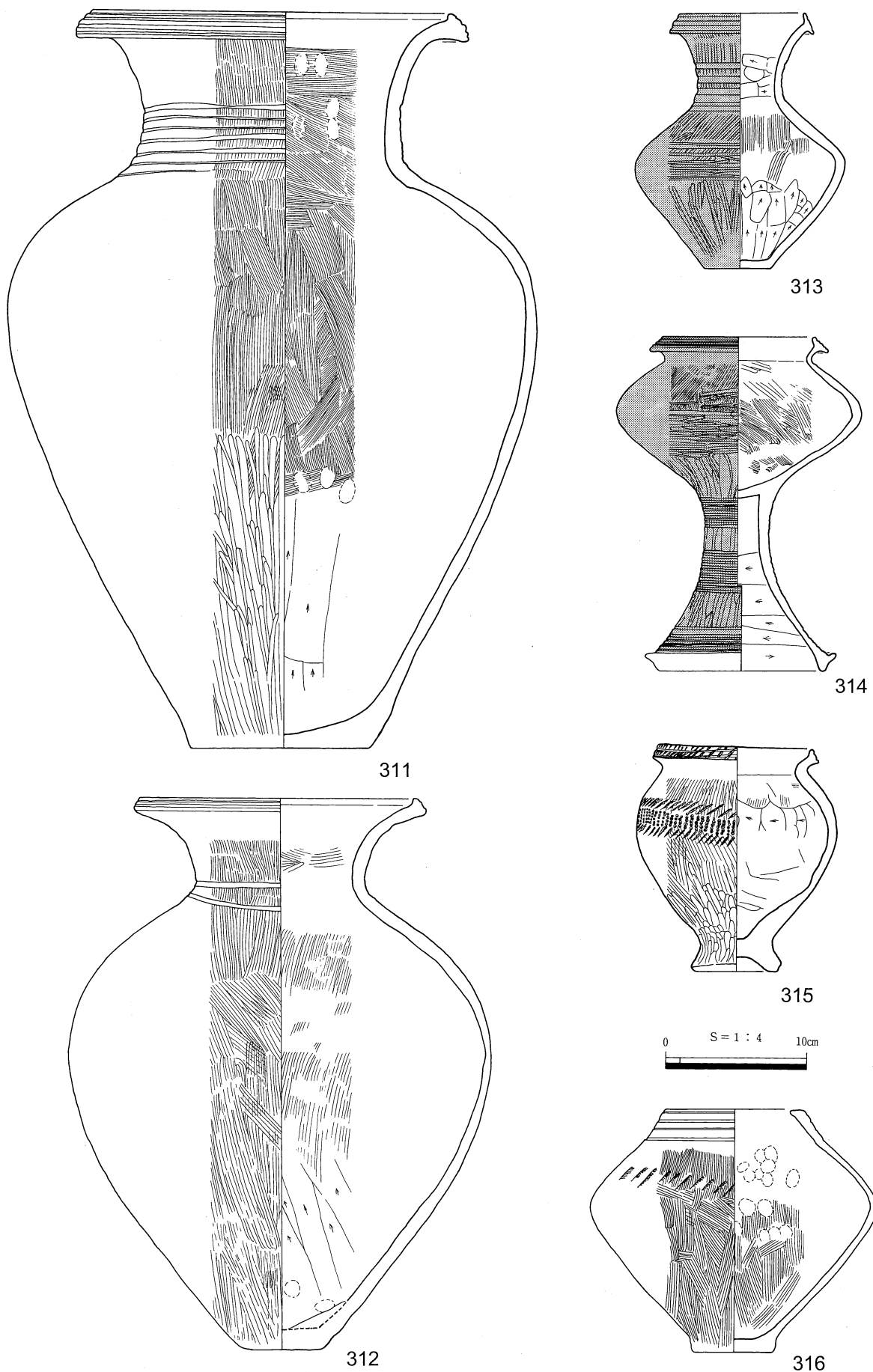
第106図 弥生時代中期中葉の土器（3）

挿図番号	器高	口径	底径	施文・調整	遺構・層位	取上番号
298	25.5	(16.5)	5.5	肩部刺突文、体部内外面ハケ、口縁部ナデ	J層	37892
299	23.5	17.7	4.9	肩部刺突文、体部外面ハケ後ヘラミガキ、体部内面ナデ、口縁部ナデ	灰茶褐色粘質土	5774
300	(28.0)	(17.2)	(6.0)	肩部刺突文、体部外面ハケ後ヘラミガキ、体部内面ハケ、口縁部ナデ	灰茶褐色粘質土	5531
301	28.2	(16.0)	(6.0)	体部外面ハケ、内面ハケ後肩部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	J層	37880
302	27.9	(17.5)	(7.0)	口縁部沈線文、体部外面ハケ後ヘラミガキ、内面肩部以下ヘラケズリ、口縁部内面強いナデによる沈線	J層	37855
303	(7.3)	(21.2)	—	体部外面タタキ後ハケ、体部内面ハケ、口縁部ナデ	I層	42941
304	(9.4)	(18.0)	—	口縁部キザミ、頸部指頭圧痕文突帯文、体部内外面ハケ、口縁部ナデ	N層	44504
305	(9.2)	(24.0)	—	口縁部キザミ、頸部指頭圧痕文突帯文、体部内外面ハケ、口縁部ナデ	K2層	43976
306	(7.6)	(16.7)	—	口縁部貼付突帯文、体部外面平行沈線文・波状沈線文、体部内面ハケ後ヘラミガキ	③層	46068
307	(9.0)	(18.5)	—	杯部内外面ハケ後ナデ・一部ヘラケズリ	J層	36711
308	13.6	(20.0)	(11.0)	口縁部平行沈線文、外面ハケ、杯部内面ハケ後ヘラミガキ、脚裾部内面ヘラミガキ	不明	不明
309	(14.8)	(25.6)	—	口縁部キザミ、外面ハケ、杯部内面ハケ後ヘラミガキ、脚裾部内面ハケ	③層相当	5515
310	25.0	(25.8)	20.1	杯部内外面ヘラミガキ、脚柱部外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ	③層	44237

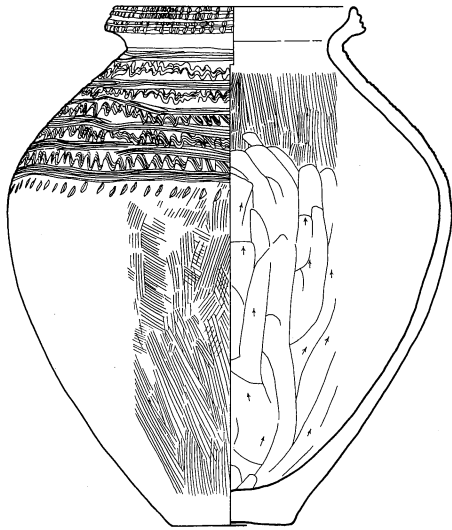
弥生時代中期後葉の土器（第107～110図）

第107図は壺である。311、312は口縁部が大きく開く大型品である。311は肩部に最大径をもち、広い底部をもつもので、直立する頸部と口縁端部には凹線文が施される。312は頸部か外反しながら立ち上がり、口縁部との境が明確でない。体部最大径も肩より下がった位置にある。

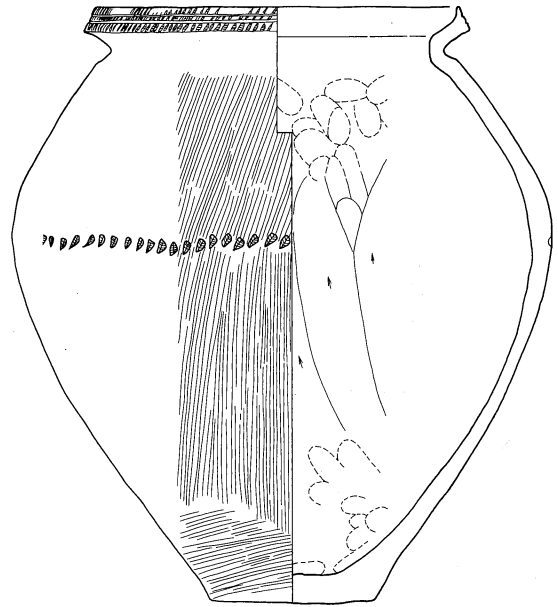
313は小型の壺で、強く張る体部が特徴的である。頸部は長く、上下に拡張された口縁部とともに凹線文が施される。この壺の中には第134図に掲げた土玉が24個入っていた。このうちの1個には輪の一部が残っていたが、



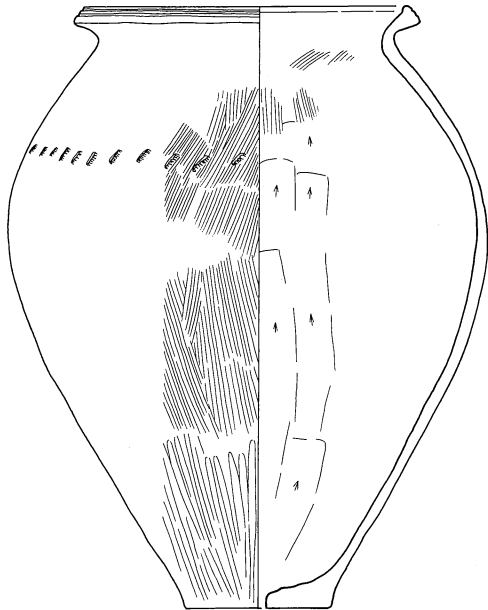
第107図 弥生時代中期後葉の土器（1）



317

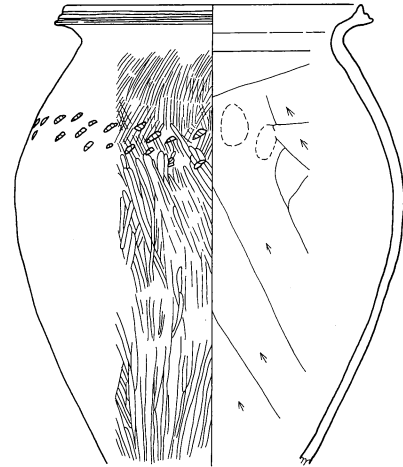


318

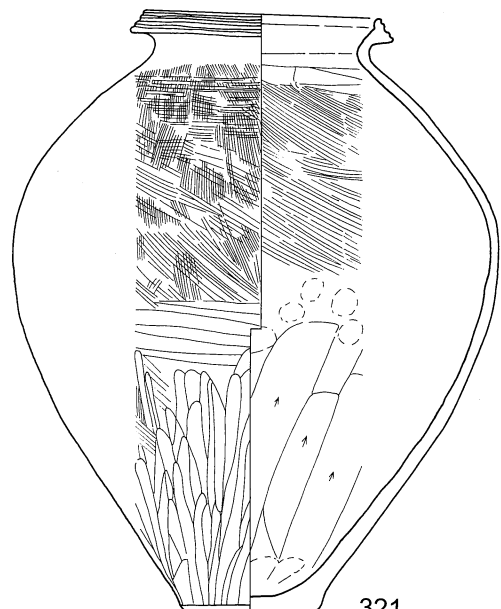


319

0 S=1:4 10cm

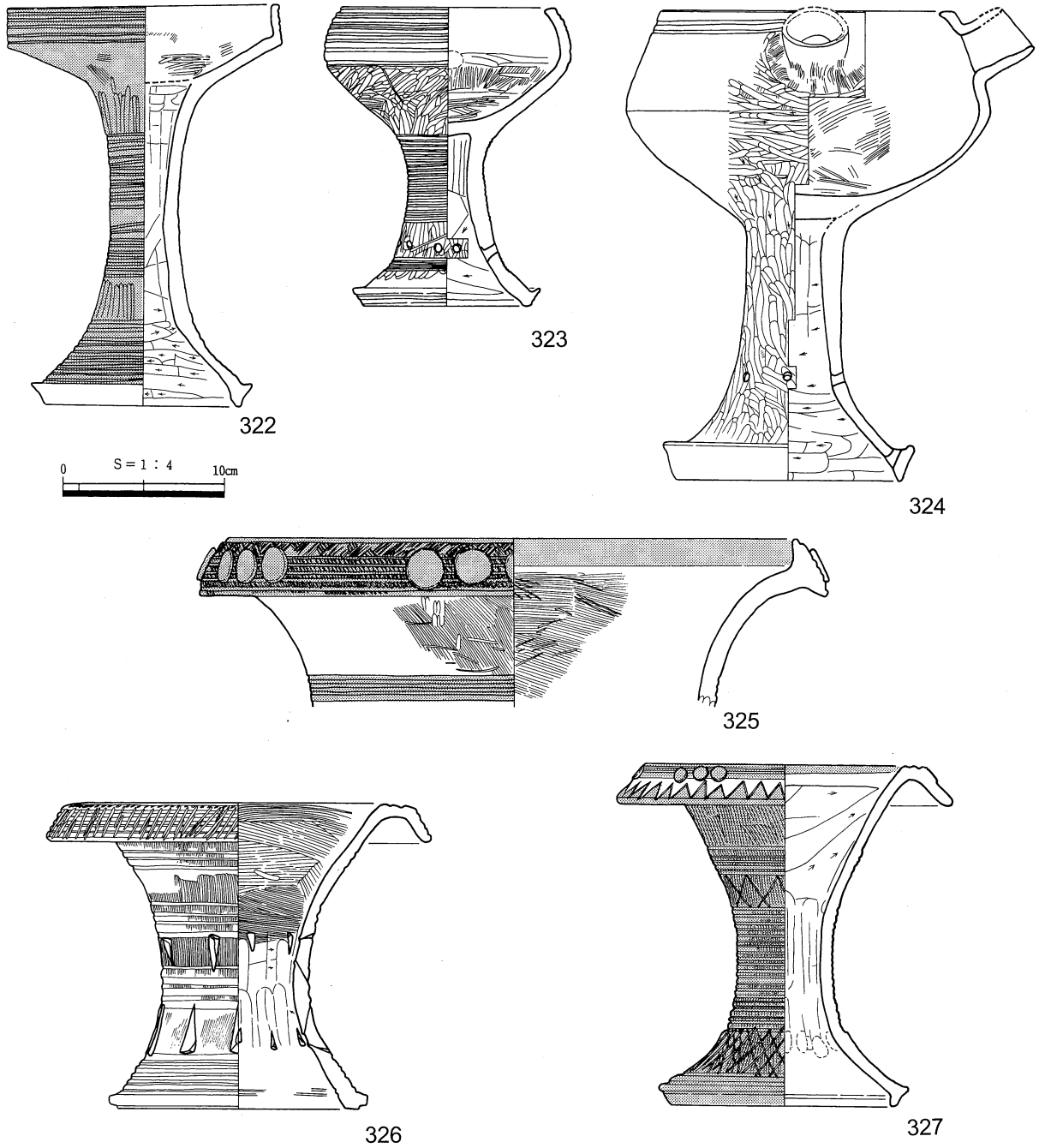


320



321

第108図 弥生時代中期後葉の土器（2）



第109図 弥生時代中期後葉の土器（3）

挿図番号	器高	口径	底径	施文・調整	遺構・層位	取上番号
311	52.0	(27.5)	(12.5)	口縁部・頸部凹線文、体部外面ハケ・下半ヘラミガキ、内面ハケ・下半ヘラケズリ、口縁部内面ハケ後ナデ	灰茶褐色粘質土	5685
312	(39.0)	(20.5)	(5.2)	口縁部・頸部凹線文、体部外面ハケ、内面ハケ・下半ヘラケズリ、口縁部ナデ	不明	3225
313	18.2	8.8	4.6	口縁部・頸部凹線文、体部外面ハケ後下半ヘラミガキ、内面下半ヘラケズリ、口縁部ナデ	K層	44038
314	23.6	(10.7)	11.6	口縁部・脚柱部・脚裾部凹線文、外面・口縁部内面赤彩、体部外面ハケ・下半ヘラミガキ、体部内面ハケ、脚裾部内面ヘラケズリ	不明	37120
315	16.0	11.0	6.3	口縁部凹線文・キザミ、肩部刺突文、体部外面ハケ・下半ヘラミガキ、内面ハケ後肩部以下ヘラケズリ	I層	37610
316	7.2	(10.0)	6.0	口縁部凹線文、肩部刺突文、体部外面ハケ、内面ハケ・上半ユビオサエ、口縁部ナデ	SD12	4498
317	27.6	13.7	6.5	口縁部凹線文・キザミ、体部上半波状沈線文・平行沈線文・刺突文、体部外面ハケ、内面ハケ後肩部以下ヘラケズリ	②層相当	4245
318	31.7	(19.1)	8.4	口縁部凹線文・キザミ、肩部刺突文、体部外面ハケ、内面肩部以下ヘラケズリ	木器溜3	36997
319	32.0	(17.0)	7.5	口縁部凹線文、体部外面ハケ・下半ヘラミガキ、内面ハケ後肩部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ、底部穿孔	木器溜3	39085
320	(24.4)	(15.6)	—	口縁部凹線文、肩部刺突文、体部外面ハケ・下半ヘラミガキ、内面肩部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	木器溜3	41891
321	31.5	12.3	7.4	口縁部凹線文、体部外面タタキ後ハケ・下半ヘラミガキ、内面ハケ後ナデ・下半ヘラケズリ、口縁部ナデ	③層相当	5077

その他は土玉のみであった。壺の内容物を知ることができた例として重要であるが、土玉を入れることが当時一般的であったのか否かは分からない。

314は脚台付の壺である。外面全体と口縁部内面が赤色塗彩されている。体部が強く張るのも特徴的である。口縁部は上下に拡張し凹線文を施す。割に口径の大きいもので、赤色塗彩がなければ口縁部のみ出土しても甕と区別できないだろうし、同様に脚台部のみでは高杯と区別できない。

315は小型で、口縁部には凹線文とともにキザミを加える。体部には刺突文を巡らせているものの、器体の粗いハケ調整を顕著に残し、器壁も厚い作りとなっている。

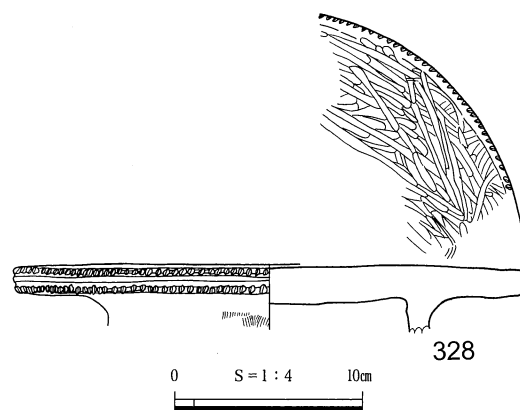
316は無頸壺である。口縁部外面には3条の凹線文を巡らせ、肩部には刺突文を施す。器体の強い張りが特徴である。

第108図は甕である。いずれも拡張された口縁部外面には凹線文が施される。317は口縁部にはキザミを加え、体部上半までは沈線文と波状文を交互に描くなど装飾性に富んでいる。318は体部中央に最大径をもつ張りの強い器形で、口縁部にはキザミが施される。319、320はそれほど張らない体部のものである。321は体部中央に最大径をもつもので、体部最大径に比して口径が小さい。317もそうした傾向があり、この2点は壺と見るべきだろうか。

322、323は高杯である。322は細長い脚柱部をもち、杯部は外反した後強く屈曲して立ち上がる。杯部・脚柱部・脚裾部に凹線文が巡らされる。杯部と脚柱部は円盤充填法で接合されているが、充填部が剥落している。323は椀形の杯部となる。

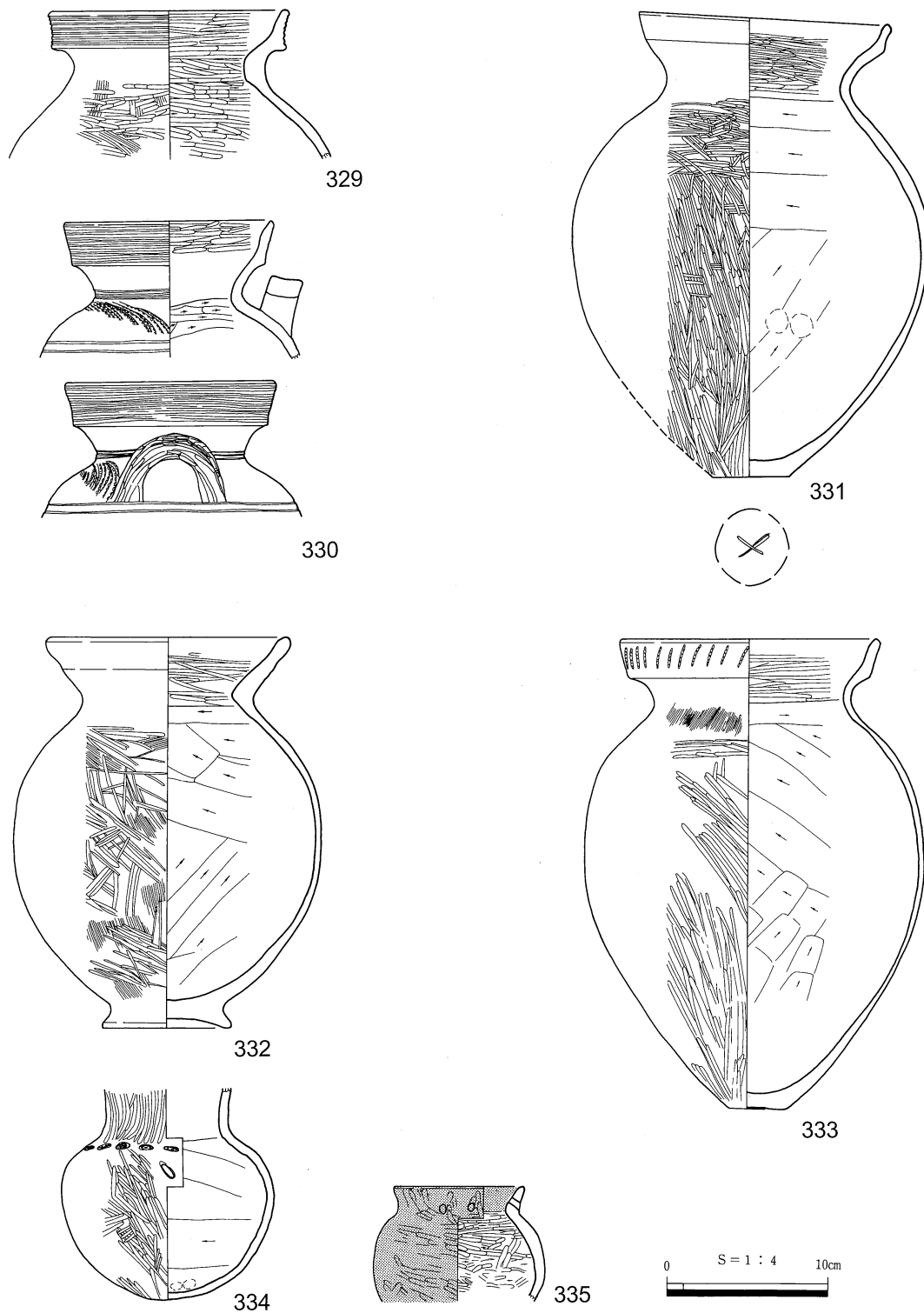
324は台付の鉢とするべきものか。深い椀形の体部には注口が付き、脚裾部は広がりながら外面に面を形成する。杯部外面の凹線文から中期後葉と判断しているが、注口をもつこの時期の台付きの鉢は山陰地方には本来ないもので、また本例がやや大型なことから備後地方の影響を受けている可能性がある。装飾性の乏しさから搬入品とは考えがたいが、外来系土器に含めたほうがいいかもしれない。

325以下は器台である。325は大型で、器受部のみが残存であるが、凹線文のほかにキザミや円形浮文を加えていることから装飾性の高いものではなかったかと想像できる。326は器高の低いもので、下垂する広めの器受部とそう広くない脚裾部をもつ。脚柱部には三角形の透かしを入れる。327は全体的な形態は326に似るが、脚柱部



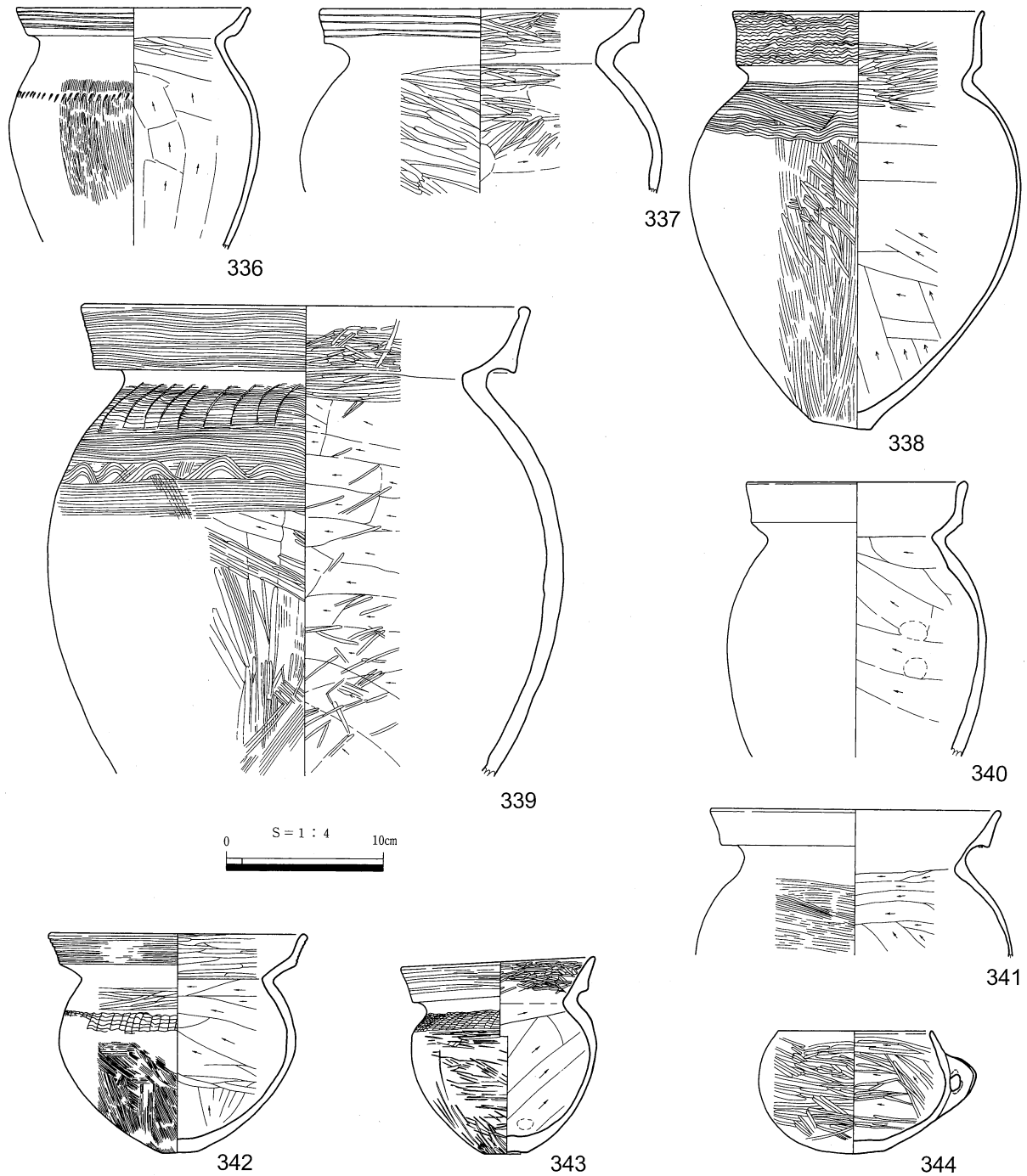
第110図 弥生時代中期後葉の土器（4）

挿図番号	器高	口径	底径	施文・調整	遺構・層位	取上番号
322	25.2	16.9	12.2	口縁部・脚柱部・脚裾部凹線文、杯部下半ハケ、脚柱部外面ヘラミガキ、杯部内面ハケ後ヘラミガキ、脚裾部内面ヘラケズリ	K層	44078
323	18.7	(13.2)	10.4	口縁部・脚柱部・脚裾部凹線文、杯部外面下半・脚柱部外面ヘラミガキ、杯部上半・脚裾部ナデ、杯部内面ハケ後ナデ、脚裾部内面ヘラケズリ後ナデ	SK25	8911
324	(29.4)	(18.2)	15.6	口縁部凹線文、杯部上半ハケ後ナデ、下半・脚柱部・脚裾部外面ヘラミガキ、杯部内面ハケ、脚裾部内面ヘラケズリ、被熱により一部発泡	SK25	9070
325	(10.4)	(35.0)	—	口縁部凹線文・キザミ・円形浮文、口縁部内外面・外面の一部赤彩、器受部内外面ハケ	②層相当	8026
326	19.1	(17.6)	(15.0)	外面凹線文・キザミ・三角形透かし、外面ハケ、器受部内面ハケ、脚柱部・脚裾部内面ヘラケズリ	SK148	9024
327	21.3	(17.6)	(14.2)	外面凹線文・鋸歯文・円形浮文、外面赤彩、外面ハケ、器受部内面ヘラケズリ後ナデ、脚裾部内面ナデ	③層相当	5090
328	(3.6)	(27.6)	—	口縁部凹線文・キザミ、台上面ヘラミガキ、脚部外面ハケ	不明	37671



第111図 弥生時代後期初頭～後葉の土器（1）

挿図番号	器高	口径	底径	施文・調整	遺構・層位	取上番号
329	(9.1)	14.9	—	口縁部多条平行沈線文、体部外面ハケ後ヘラミガキ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部内面ヘラミガキ	土器溜12	26728
330	(8.5)	(13.0)	—	口縁部多条平行沈線文、肩部刺突文、体部内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	土器溜2	11796
331	29.0	15.7	4.6	体部外面ヘラミガキ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ、底部ヘラ記号	土器溜12	26732
332	24.2	15.0	8.0	体部外面ヘラミガキ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	SD54	34709
333	29.1	16.0	3.5	口縁部キザミ、体部外面ヘラミガキ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部内面ヘラミガキ、口縁部刺突文	土器溜12	26805
334	(13.0)	—	不明	肩部スタンプ文、体部外面ヘラミガキ、内面頸部以下ヘラケズリ	土器溜1	11775
335	(7.1)	8.1	—	外面・口縁部内面赤彩、体部外面ヘラミガキ、内面頸部以下ヘラケズリー部ヘラミガキ	土器溜13	26795



第112図 弥生時代後期初頭～後葉の土器（2）

挿図番号	器高	口径	底径	施文・調整	遺構・層位	取上番号
336	(15.0)	(14.8)	—	口縁部平行沈線文、肩部刺突文、体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	①層	11416
337	(11.7)	(20.5)	—	口縁部平行沈線文、体部外面ヘラミガキ、内面頸部以下ヘラケズリ後ヘラミガキ、口縁部内面ヘラミガキ	①層	11447
338	26.6	(15.8)	3.8	口縁部波状沈線文、肩部平行沈線文・波状沈線文、体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ、内面頸部ヘラミガキ、口縁部ナデ	①層	1503
339	(30.0)	(28.5)	—	口縁部多条平行沈線文、肩部平行沈線文・波状沈線文、体部外面ハケ後半ヘラミガキ、内面頸部以下ヘラケズリ、内面頸部ヘラミガキ	①層	12282
340	(17.5)	(14.0)	—	体部外面ナデ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	①層	11064
341	(9.3)	(18.4)	—	体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	土器溜12	26724
342	14.9	(16.5)	2.5	口縁部平行沈線文、肩部押引文、体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	②層相当	4752
343	12.6	(12.3)	2.8	口縁部平行沈線文、肩部押引文、体部外面ヘラミガキ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部内面ヘラミガキ	②層	12533
344	7.8	(9.7)	4.2	外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ後ヘラミガキ	土器溜4	11795

が細く仕上げられ、その結果器受部と脚裾部を強調する効果を生んでいる。外面には鋸歯文・斜格子文・円形浮文などを施し、また顔料の塗り分けを行うなど装飾性を高めている。

328は台形土器と考えられる。一般にこの土器は飾り立てないのだが、本例は凹線文のほかにキザミを加えるなどやや特異な側面をもっている。

弥生後期初頭～後葉の土器（第111～113図）

ここでは松井潔の編年でいうV～X期の土器について述べる。

第111図には壺を掲げた。329は口縁部の拡張はそう大きくないが、沈線の多条化を認め、松井Ⅶ期と理解している。山陰地方においては弥生後期に入ると壺と甕の区別がつきにくくなる傾向があるが、本例は口径と復元される体部の径とを比較して壺と判断した。口縁部内面・体部内外面は横方向のヘラミガキで整えられている。330も同じ時期のものである。肩部に横方向の把手をもつ。貝殻腹縁を用いた連続刺突文はスタンプ文を施す土器に特徴的な文様であり、本例も欠失部分にスタンプ文が存在した可能性がある。331は体部中央に最大径をもつ壺で、口縁部は外反した後短く立ち上がる。この境がやや明確ではない。体部外面と口縁部内面は細かなヘラミガキによって丁寧に仕上げられている。底部には×印の記号？がある。332はくの字状に外反する口縁部をもつが、いわゆる複合口縁ではない。ただナデによってアクセントはつけており、そういった口縁の意識はあるのかもしれない。体部は球形に近く、低い台状の脚を有する。333はナデ調整された口縁部に貝殻腹縁で連続刺突文を施したものである。体部中央に最大径をもち、口縁部内面と体部外面はヘラミガキにより仕上げられる。

334は口縁部を欠くが、体部は小さめで球状を呈する。肩部には3重圏の同心円文がスタンプにより押捺される。335は小型の壺で、鈕孔と思われるものをもつ。

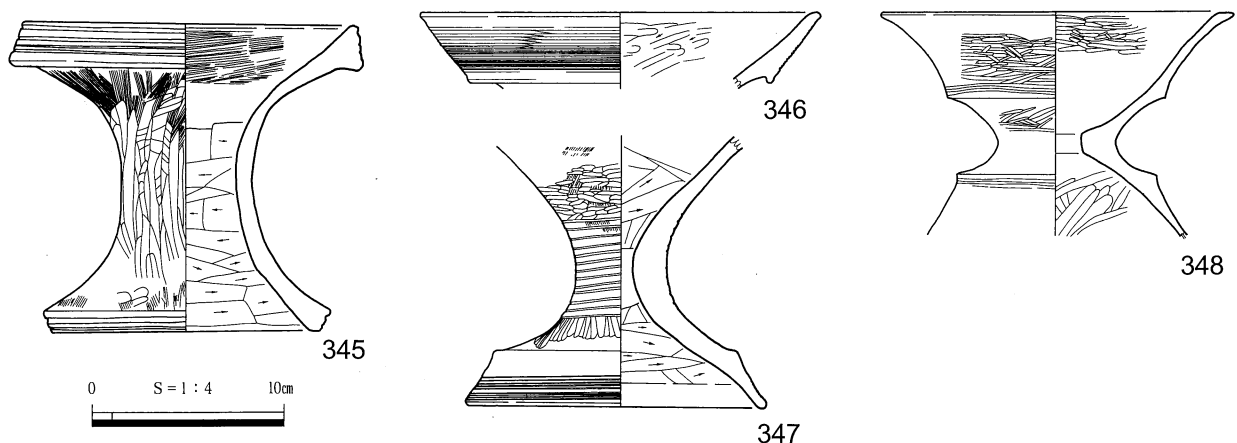
336～341には甕を示した。336、337は立ち上がりの弱い口縁部に沈線文⁽⁵⁾を施す松井Ⅶ期のものである。337では特にミガキが多用されている。

338、339は松井Ⅶ期のものである。338は多条の波状沈線を、339は多条沈線をそれぞれ口縁部に施す。松井Ⅶ期同様ミガキ調整を多用する。

340、341は松井Ⅹ期に相当する。340は小型で、体部の張りは少ない。

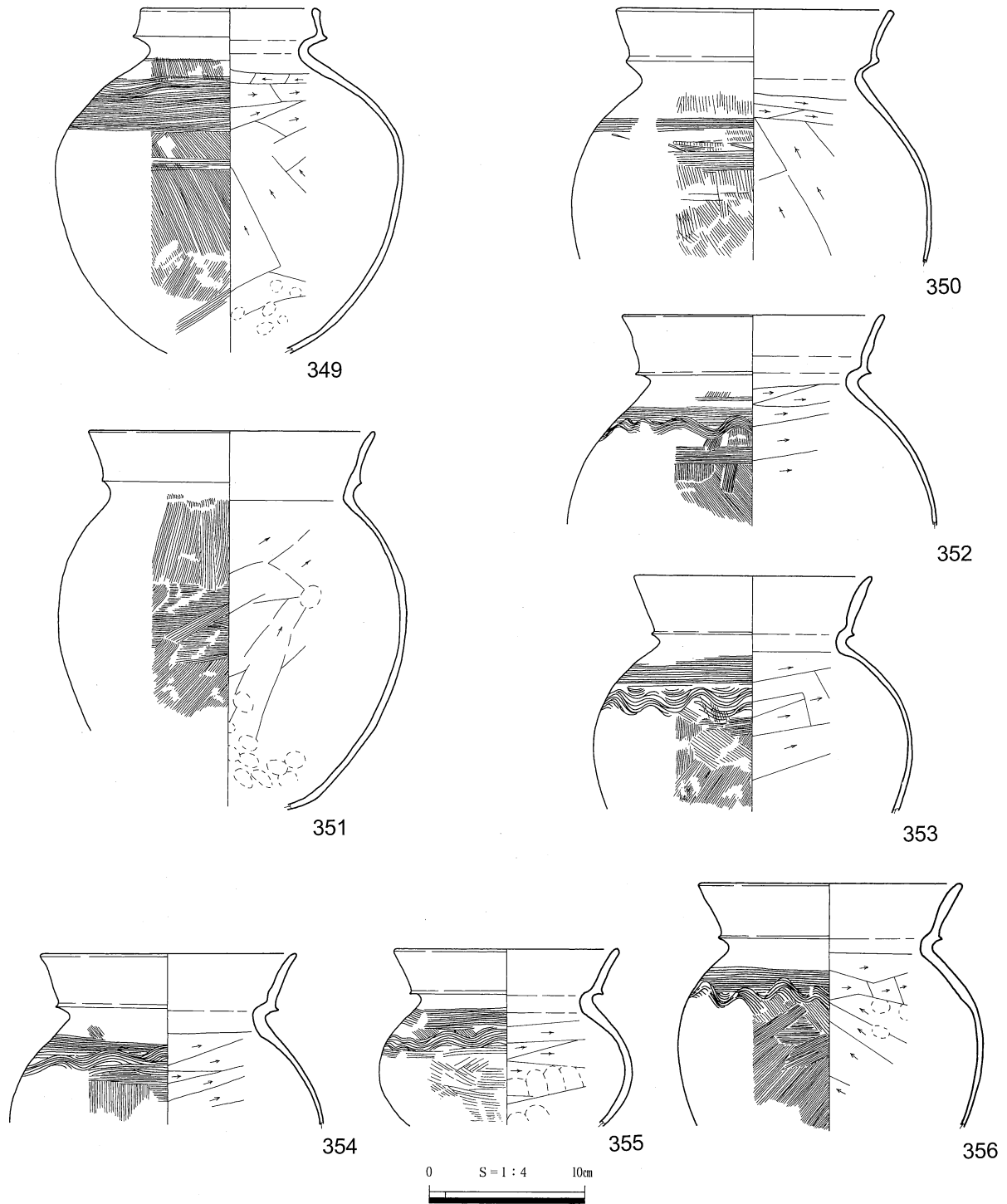
342、343は鉢というべきか。口径と体部最大径からすると壺とは呼びがたい。かといって甕というには小型すぎる。山陰地方は後期に入り壺と甕の区別がつきにくいと述べたが、この鉢も加えて複雑な様相となる⁽⁶⁾。

344は椀形土器である。把手の装飾性がやや異なるが、木器に類似品がある（第285図247）。内外面ともにヘラミガキで丁寧に整えられている。



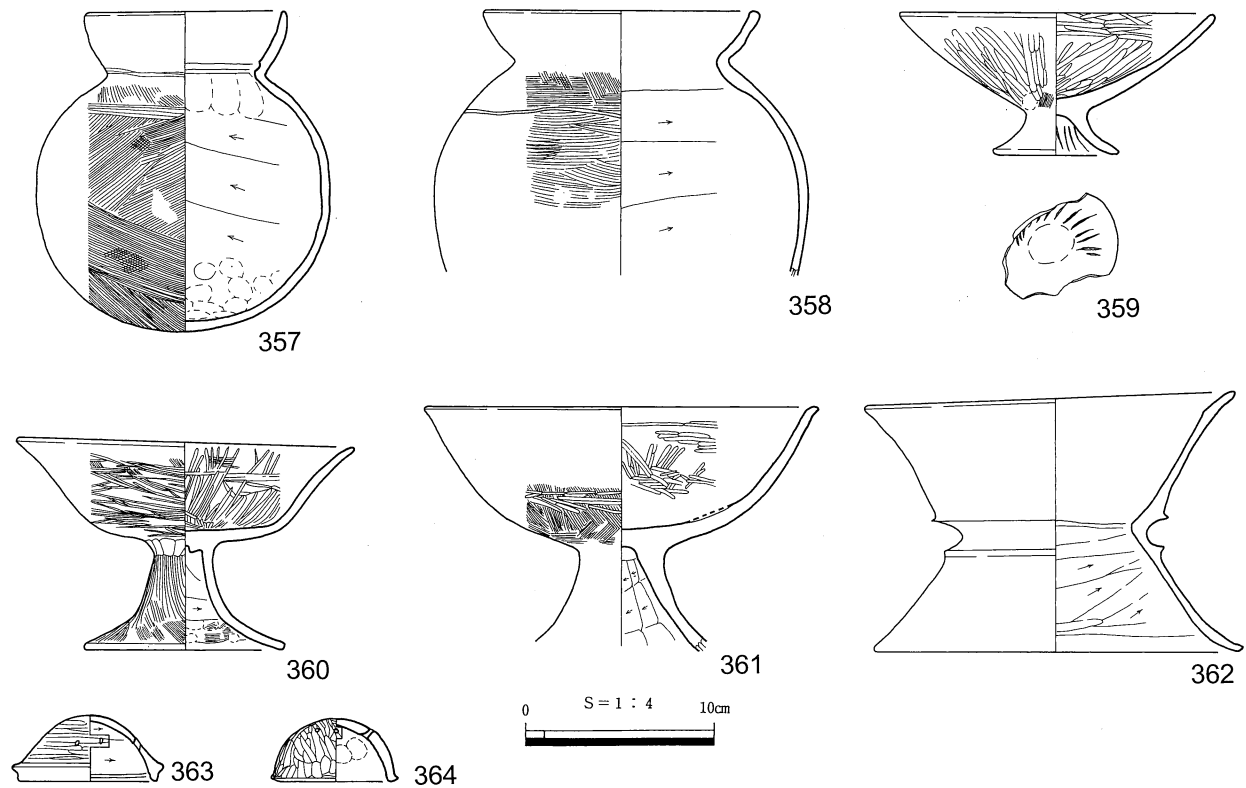
第113図 弥生時代後期初頭～後葉の土器（3）

挿図番号	器高	口径	底径	施文・調整	遺構・層位	取上番号
345	16.2	17.5	14.1	器受部・脚裾部凹線文、外面ハケ後ヘラミガキ、器受部内面ハケ、脚裾部内面ヘラケズリ	②層相当	3223
346	(5.0)	(21.0)	—	器受部多条平行沈線文、器受部内面ヘラケズリ後ヘラミガキ	土器溜13	26897
347	(14.4)	—	(15.5)	脚台部多条平行沈線文一部ナデ消し、脚柱部平行沈線、外面ヘラミガキ、器受部内面・脚台部内面ヘラケズリ後ナデ	土器溜13	26800
348	(11.8)	(18.6)	—	外面平行沈線文、外面ナデ、器受部内面・脚台部内面ヘラケズリ後ナデ	②層	13435



第114図 弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の土器（1）

挿図番号	器高	口径	底径	施文・調整	遺構・層位	取上番号
349	(22.4)	(11.6)	—	肩部平行沈線文、体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	③層	2427
350	(16.3)	(18.1)	—	肩部平行沈線文、体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	①層	10275
351	(24.5)	(18.6)	—	体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ、内面下半ユビオサエ、口縁部ナデ	①層	11681
352	(13.6)	(17.1)	—	肩部波状沈線文・平行沈線文、体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	SK158	11380
353	15.1	15.4	—	肩部波状沈線文・平行沈線文、体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	SK158	11377
354	(9.9)	(16.6)	—	肩部波状沈線文・平行沈線文、体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	SK158	11381
355	(11.4)	14.6	—	肩部波状沈線文・平行沈線文、体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	②層	12444
356	(15.7)	(16.1)	—	肩部波状沈線文・平行沈線文、体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	SK158	不明



第115図 弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の土器（2）

挿図番号	器高	口径	底径	施文・調整	遺構・層位	取上番号
357	17.0	10.3	—	体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	SK421	45449
358	(13.9)	(14.6)	—	体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	⑨層	27300
359	7.5	(16.5)	(6.7)	杯部内外面ハケ後ヘラミガキ、脚部内外面ナデ、内面ヘラ記号	SK128	3761
360	11.2	17.8	10.4	杯部内外面ハケ後ヘラミガキ、脚部内外面ハケ	①層	1310
361	(12.3)	(20.8)	—	杯部外面ハケ後ナデ、内面ヘラミガキ、脚部内面ヘラケズリ	SK128	3767
362	(13.5)	(19.6)	(19.6)	外面ナデ、器受部内面ヘラケズリ後ナデ、脚台部内面ヘラケズリ	①層	10274
363	3.5	7.2	—	外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ	①層以下	45036
364	3.3	6.7	—	外面ヘラミガキ、内面ナデ、内外面部分的に赤色顔料付着、パレットに転用か	②層相当	3633

第113図には器台を掲げた。345は口縁部に凹線文を施すもので、松井V期に属する。346、347は図面にすると径が合わないが、同一個体の可能性がある。口縁部・脚裾部に多条沈線をもつ松井Ⅷ期の資料である。348は沈線の施文は見られない。器形とあわせ考えると松井X期のものか。

弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の土器（第114、115図）

349は壺である。球状の体部をもち、口縁部は外反した後内傾して短く立ち上がる。

350～356は複合口縁をもつ甕で、器壁が薄く仕上げられるため破損して出土した場合は底部を復元しにくい。ここに示した6点も体部下半がうまく接合できなかったものである。357、358は単純口縁の甕である。球状の体部に内傾して立ち上がる口縁をもつ。

359は低脚杯で、脚部内面に多条のヘラ記号が刻まれる。このようなヘラ記号は弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の鼓形器台や低脚杯の脚部内面にしばしば認められることを以前指摘したことがある⁽⁷⁾。基本的に2～4条のものがほとんどなのであるが、本例のように数多く刻まれる例も存在したことがわかる。

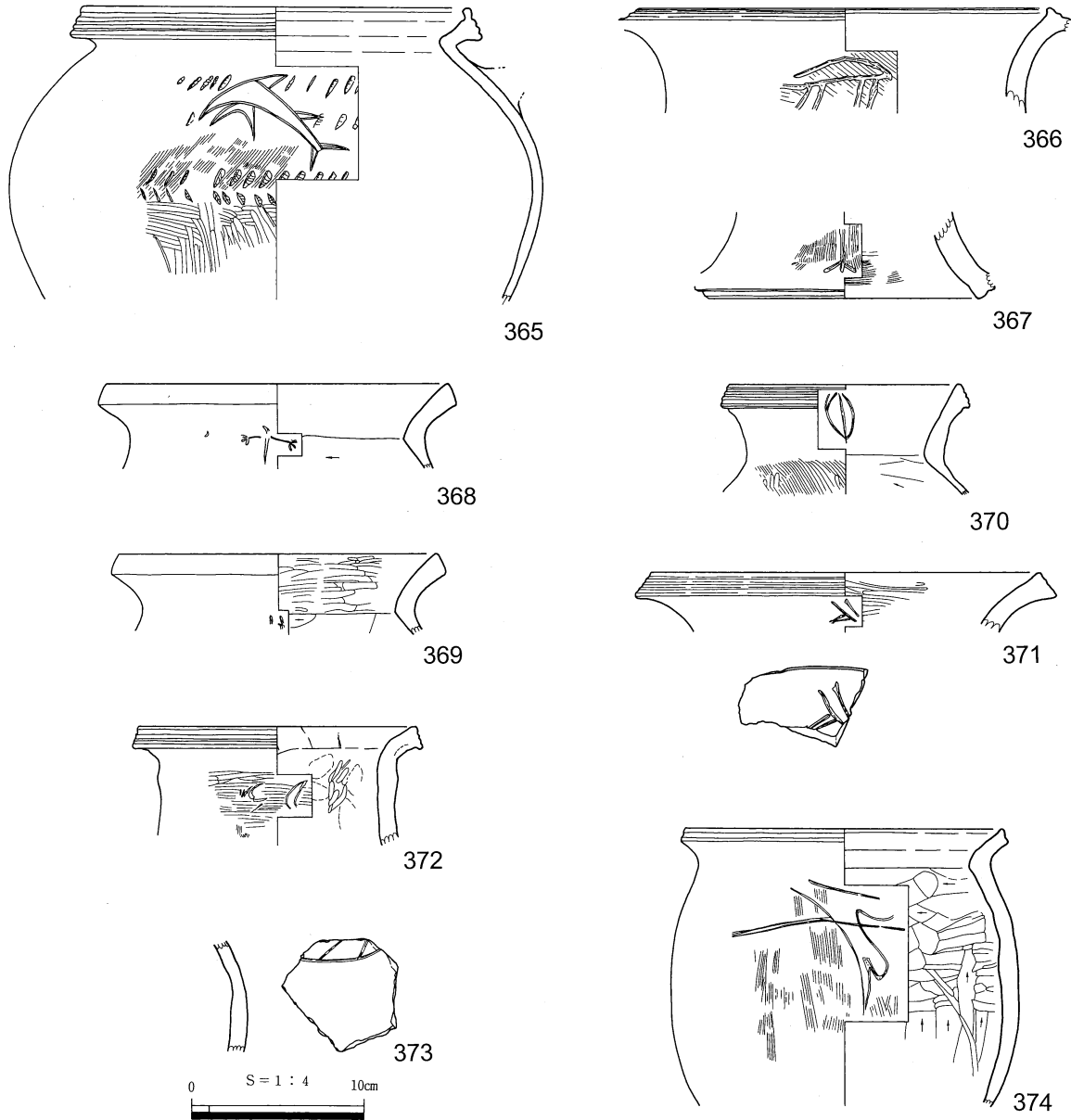
360、361は高杯、362は器台である。

363、364は蓋である。木製装飾壺に伴うものと形態的に類似するものであるが、この2例の胎土が349以下に示した土器と同じ白っぽい色調を呈するものであることから、この時期に属すると考えている。

線刻絵画土器（第116、117図）

線刻絵画土器としたものには意匠のはっきりしないものや記号あるいは文様と理解できるものを含んでいる。

365は中期後葉の壺の肩部に魚を描いたものである。非常にシャープな線で焼成前に描かれたもので、流線型の体、尖った頭部、強調された胸鱗と尾鱗、ふたつの背鱗といった特徴は、これまで知られている土器や銅鐸に描かれた魚とは異なる。上記諸特徴をもつ魚はサメと思われ、この土器にはサメが描かれたものと判断している。



第116図 線刻絵画土器（1）

挿図番号	器高	口径	底径	施文・調整	遺構・層位	取上番号
365	(17.0)	(22.6)	—	口縁部凹線文、肩部刺突文、体部外面ハケ後半ヘラミガキ、内面肩部以下ヘラミガキ、肩部外面サメを線刻	J層	44812
366	(6.1)	(23.8)	—	口縁部凹線文、頸部外面ハケ、口縁部ナデ、頸部外面シカを線刻	不明	不明
367	(5.0)	—	(15.6)	脚裾部内外面ハケ、脚裾部外面水鳥？を線刻	①層	1260
368	(4.9)	(19.8)	—	外面赤彩、口縁部内外面・頸部外面ナデ、内面頸部以下ヘラケズリ、頸部外面人物を線刻	①層	963
369	(4.7)	(18.6)	—	口縁部外面・頸部外面ナデ、口縁部内面ヘラミガキ、内面頸部以下ヘラケズリ、頸部外面意匠不明の線刻	①層	986
370	(6.4)	(13.4)	—	口縁部凹線文、体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ、口縁部内面意匠不明の線刻	SD11	4178
371	(3.5)	(22.6)	—	口縁部凹線文、口縁部内外面ナデ一部ヘラミガキ、頸部外面意匠不明の線刻	②層	8327
372	(6.4)	(16.0)	—	口縁部凹線文、頸部内外面ハケ後ナデ・ヘラミガキ、頸部外面意匠不明の線刻	D層	34269
373	6.7	—	—	体部外面ハケ、内面ヘラケズリ、体部外面意匠不明の線刻	①層	1583
374	(16.1)	(18.4)	—	体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ後ナデ、口縁部ナデ、肩部外面意匠不明の線刻	H層	41197

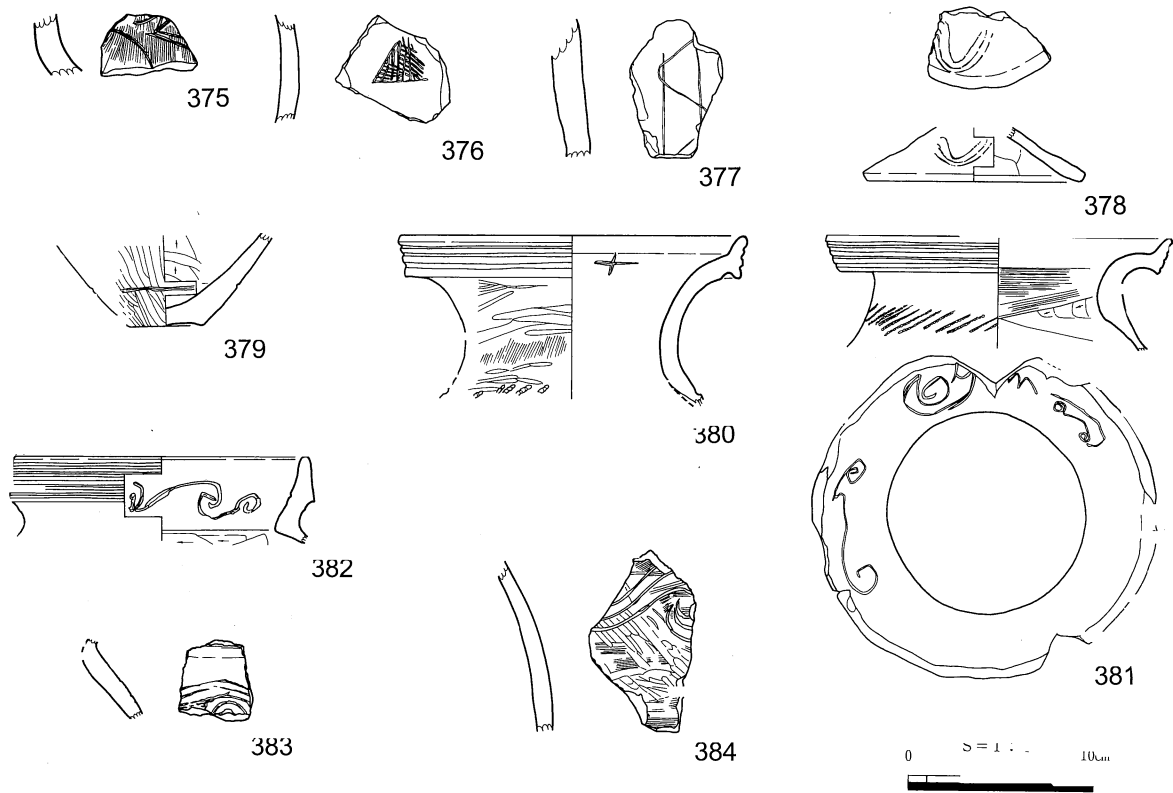
同じくサメと思われる絵画は木製品の琴にも描かれている（第317図）。また表現方法が多少異なるが、国道調査区出土の扁平礫にも認められる⁽⁸⁾。弥生時代の絵画が単に描かれるだけのものではなく、祭祀行為の重要なひとつをなすものであることは疑いない⁽⁹⁾。山陰地方およびその周辺では出雲市白枝荒神遺跡の中期の壺⁽¹⁰⁾、兵庫県出石町袴狭遺跡の後期の琴⁽¹¹⁾にもサメが描かれており、サメという意匠は日本海沿岸地域を特色付ける地域性のひとつであろう。なおこの土器は体部最大径に比して口径が大きく、これだけで見ると甕と呼ぶべきものであろうが、肩部に把手が付いていたような痕跡がわずかにあり、壺と呼んだほうがいいと思われる。

366は壺の頸部にシカが描かれる。頭部は欠失している。線はシャープさに欠け、土器の焼成前であっても胎土が乾いてから描いたような線である。

367は高杯の脚裾部か。三本指の動物の脚が一本認められる。

368は壺の頸部に人物が描かれる。足を除く部分が残っているが、立体的ではなく線描きである。広げられた両手の先には三本指が表現されている。369はあるいは同一個体かと思われ、頸部に線の一部が認められる。この2点が同一個体ならば頸部を巡るように絵が展開していた可能性もある。

370以下は意匠が不明なものなどである。380は絵画というより記号と見たほうがいいのかもしい。379は底部直上という位置が通常と異なる。381～384は連続渦文を手書きで表現したものである。



第117図 線刻絵画土器（2）

挿図番号	器高	口径	底径	施文・調整	遺構・層位	取上番号
375	(3.3)	—	—	外面ハケ、外面意匠不明の線刻	H層	41656
376	6.7	—	—	体部外面ハケ後ヘラミガキ、内面ハケ、体部外面意匠不明の線刻	②層	12464
377	7.4	—	—	外面ナデ？、内面ヘラケズリ、外面意匠不明の線刻	①層	1061
378	(2.9)	—	(12.0)	脚部外面ナデ一部ヘラミガキ、内面ヘラケズリ、脚部外面意匠不明の線刻	①～②層	13096
379	(4.9)	—	(4.0)	体部外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ後ヘラミガキ、外面底部直上線刻	H層	41214
380	(8.3)	(18.7)	—	口縁部凹線文、頸部外面ハケ後ヘラミガキ、口縁部ナデ	SD69	27528
381	(6.0)	(18.5)	—	口縁部平行沈線文、頸部刺突文、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部内面連続渦文を線刻	SD38	34115
382	(4.8)	(15.8)	—	口縁部多条平行沈線文、体部内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ、口縁部内面連続渦文を線刻	②層	13441
383	4.4	—	—	体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ、肩部外面連続渦文？を線刻	B層	26541
384	9.8	—	—	体部内外面ハケ後ヘラミガキ、外面連続渦文？を線刻	②層	8322

異形土器 (第118図)

特殊な器形を呈するものや特殊な用途が想定されるものを異形土器と呼んでここに述べる。

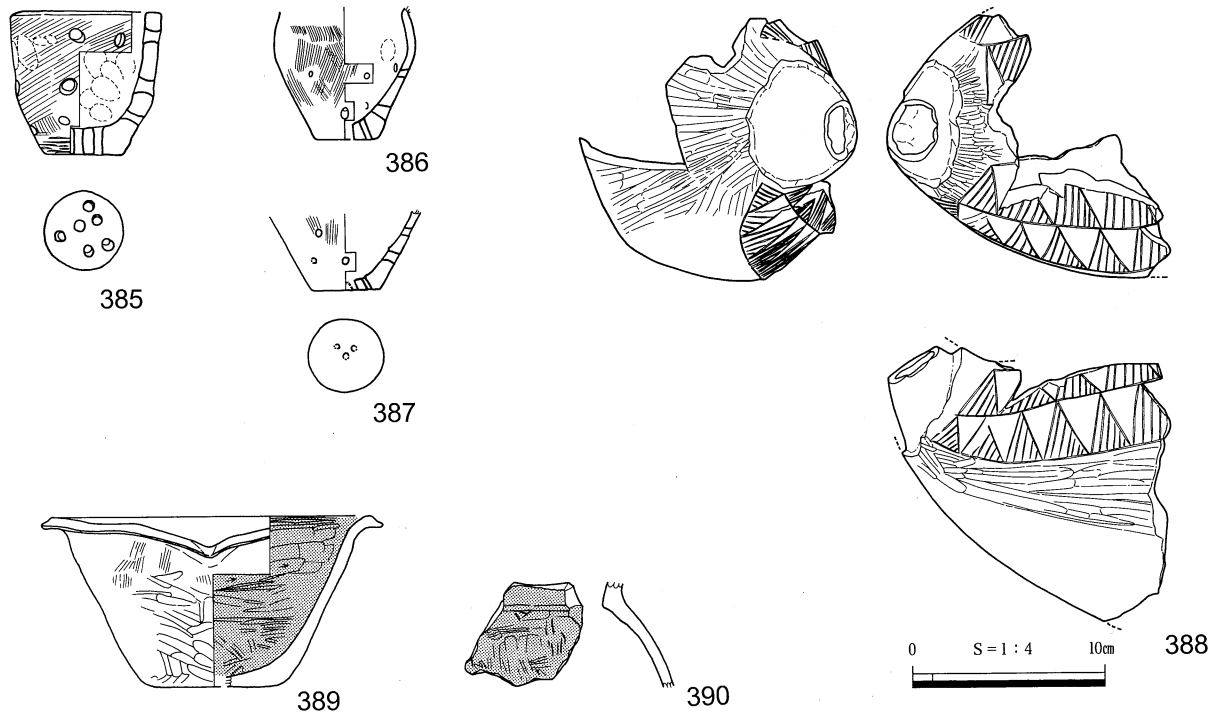
385～387は小型のコップ形のものであり、体部や底部に多数の穿孔を施す。穿孔は土器焼成前に行われ、土器の用途と不可分のものと考えられる。内面には灰状の付着物が見られるのも特徴である。角南聡一郎はこの土器を「多孔土器」と呼び、検討を加えている⁽¹²⁾。それによると分布は近畿地方を中心として28遺跡から35個体が知られており、時期は中期後葉に集中する。本遺跡の3点も中期後葉のSD27から出土している。角南はこの土器の用途を、失敗酒・腐敗酒を直すために灰を混ぜ、それを濾過するために用いられたと推定している。残念ながら本遺跡出土品では用途を決定する所見は得られていないが、分布の空白域を埋めるものとして注目される。

388は一部残るのみのものであるが、紡錘形の体部の一端を上向きに作っている。ここで接合されていた部分が剥落しているが、おそらくその部分は中空であったのだろう。器体はヘラミガキにより調整され、体部上半には左右両側面とも鋸歯文を2段にわたり施している。体部の続きがどうなるか不明であるが、国道調査区より参考になるものが出土している⁽¹³⁾。体部が双方に立ち上がり、その分岐するところに脚柱部を設ける。報告者は鳥形土器の可能性を考えている。それが正しいかどうか、またこの2例が同じものである確証もないが、いずれにせよ特殊な器形を示すものであることは間違いない。

389、390は内面に赤色顔料が付着している。貯蔵されたか、パレットに転用されたかであろう。

外来系土器 (第119～122図)

外来系土器には山陰地方以外で製作されたものが直接搬入された場合と、搬入品ではないが他地域の土器の器形・製作技術が見られる場合がある。そのような場合にどの地域のものが特定できるものは吉備系・畿内系などと地域名を付しておく。

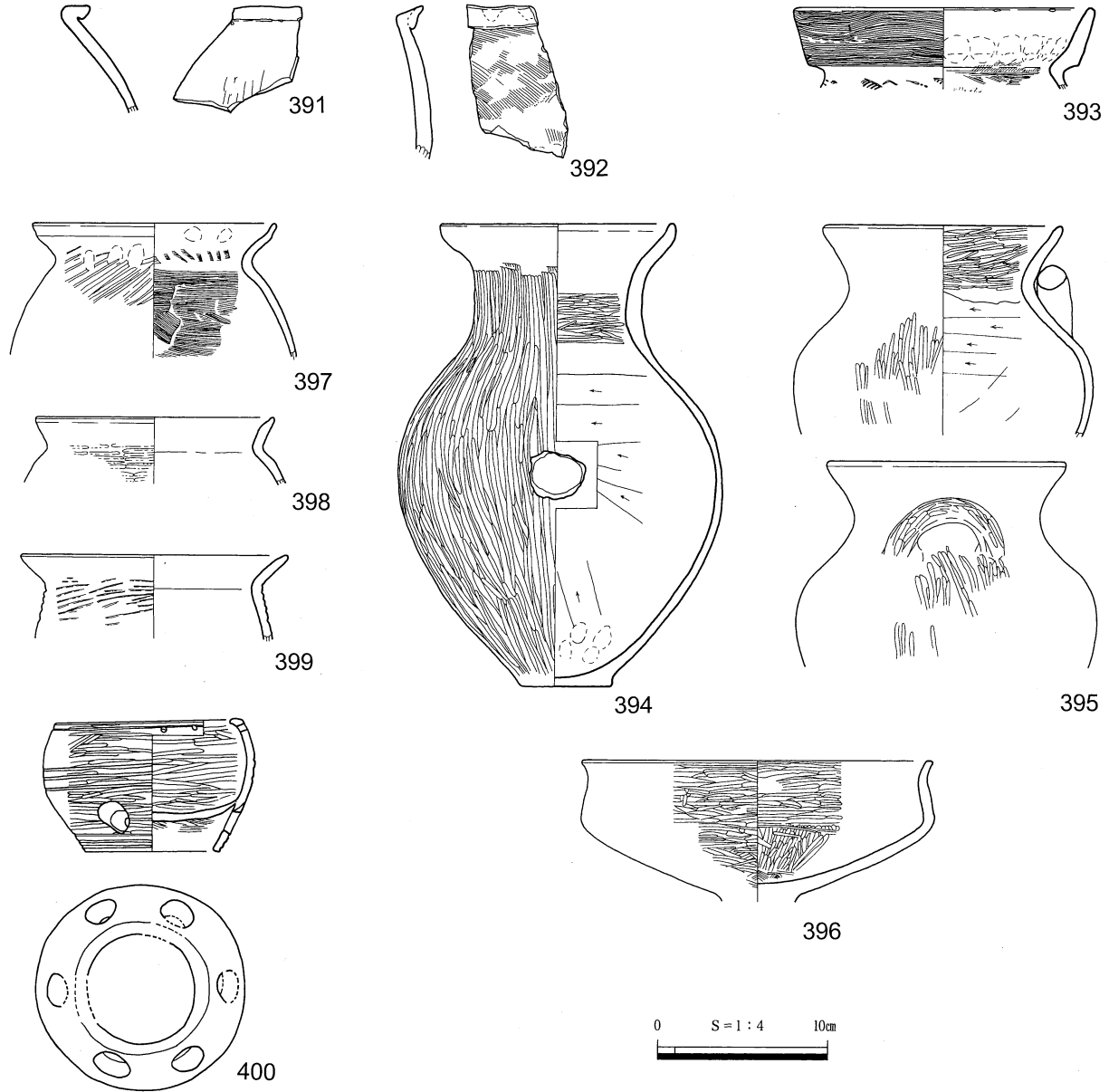


第118図 異形土器

挿図番号	器高	口径	底径	施文・調整	遺構・層位	取上番号
385	7.5	8.0	4.3	体部外面ハケ、内面ユビオサエ、体部穿孔、内面付着物	SD27	42165
386	(6.7)	—	(3.3)	体部外面ハケ、内面ユビオサエ、体部穿孔、内面付着物	SD27	43119
387	(4.0)	—	(3.5)	体部外面ハケ、内面ユビオサエ、体部穿孔、内面付着物	SD27	43118
388	(14.7)	—	—	外面鋸歯文、体部外面ヘラミガキ、内面ハケ後ナデ	SK69	15868
389	9.0	(16.2)	(6.0)	体部外面ナデ、内面ヘラケズリ、内面赤色顔料付着	土器溜3	11804
390	(5.5)	—	—	体部外面ナデ?、内面頸部以下ヘラケズリ、内面赤色顔料付着、パレットに転用か	②層	13443

391、392は朝鮮系無文土器である⁽¹⁴⁾。ともに断面三角形の粘土帯を貼り付け、口縁部を形作る。391は風化のため器面が荒れており調整が観察できないが、体部外面はハケ調整によっているものと思われる。392は体部外面に縦・斜め方向のハケ調整を施し、頸部をヨコナデする。体部内面および口縁部内外面はナデにより仕上げられている。

393は甕の口縁部内面に指頭圧痕を明瞭に残す。国道調査区でも報告例があり⁽¹⁵⁾、本例も北陸系の土器と考え



第119図 外来系土器(1)

挿図番号	器高	口径	底径	施文・調整	遺構・層位	取上番号
391	(6.4)	(12.8)	—	体部外面ハケ?	①層~1層	35323
392	(9.0)	—	—	体部外面ハケ、内面ナデ、口縁部ナデ	暗灰褐色粘質土	4859
393	(4.9)	(18.0)	—	口縁部多条平行沈線文、口縁部内面ユビオサエ、内面頸部以下ヘラケズリ	②層	12443
394	27.6	(14.0)	5.5	体部外面ハケ後ヘラミガキ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ、体部穿孔	SD11	4015
395	(12.4)	(14.3)	—	体部外面ヘラミガキ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部外面ナデ、内面ヘラミガキ	SD38	34132
396	(8.4)	(20.8)	—	杯部内外面ヘラミガキ	②層相当	3738
397	(7.9)	(14.5)	—	体部外面タタキ、内面ハケ、口縁部ナデ	SD20	20905
398	(3.9)	(14.0)	—	体部外面タタキ、内面ナデ、口縁部ナデ	H層	40138
399	(5.0)	(15.6)	—	体部外面タタキ、内面ナデ、口縁部ナデ	土器溜3	11804
400	8.0	(11.2)	8.0	外面凹線文、脚部円形透かし、体部内外面ヘラミガキ	K層~貝溜	43772

られる。口縁部の形態からすると法仏式併行のものか。

394～396は近畿北部系のものと考えている。394はSD11より出土したもので、体部に穿孔を認める。この土器の周辺からはト骨やサル・イヌの頭骨などがまとまって出土したことから、この壺も祭祀行為に使用された後廃棄された可能性がある。395の水差形土器の理解は松井に従う⁽¹⁶⁾。

397～400は畿内系土器で、399までの3点は体部外面にタタキ整形の痕跡を残す単純口縁の甕で、畿内第V様式系のもので理解している。山陰地方に畿内系土器が顕著に出現するのは庄内式併行期であり⁽¹⁷⁾、それに伴ってこの甕が見られることがある。畿内においても庄内式併行期に至るまでこの甕の存在が指摘されており⁽¹⁸⁾、V様式系と呼ぶ所以である。400は台付無頸壺・台付鉢などと呼ばれ中期後葉（第IV様式）に見られるものである⁽¹⁹⁾。

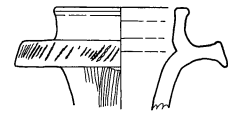
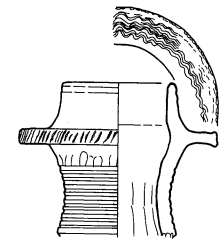
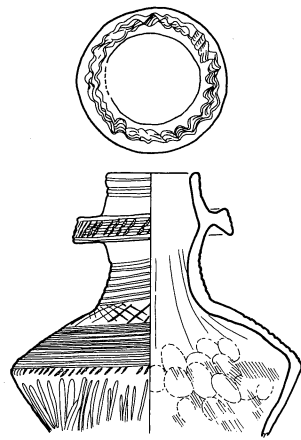
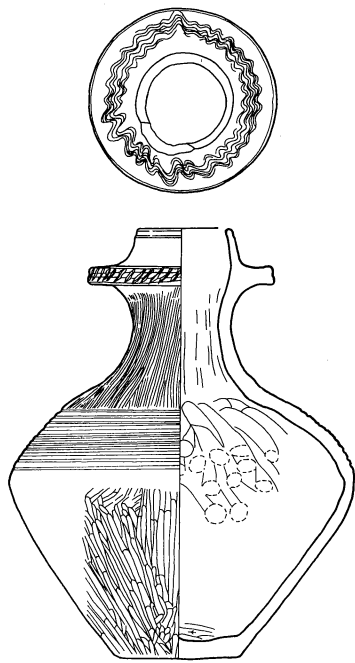
第120図には吉備系土器を掲げた。401～404は水平に広がる口縁部の上に筒状の作り出しがつくものである。国道調査区の報告でも指摘されたように美作地域に属する津山市ビシャコ谷遺跡に類例がある⁽²⁰⁾。両遺跡のものを比較すると、強く張る体部の形態だけでなく、例外もあるが水平に広がる口縁部外面に凹線文とともにキザミを有し、その内面には櫛描きの波状文を施し、頸部と肩部には多条の沈線文を巡らせるという共通点をもつ。器体の調整を見ても体部外面の縦方向のヘラミガキ、頸部内面のシポリメ、その下位のユビオサエと作りそのものも同じとっていい。ただ吉備南部の岡山県山陽町用木山遺跡では出土した7個体すべて体部以下を残していないという限界があるが、口縁部外面のキザミ、内面の波状文ともに認められない⁽²¹⁾。山陰地方も吉備地方もこのタイプの壺は数量的には同じなのだが、ビシャコ谷では同じ遺構内土器の中に筒状の作り出しがないだけで口縁部の作りや施文方法が似ているものがあり、今の時点では吉備地方に祖形をもつ外来系土器と理解しておく。

405～408は長頸壺である。因幡地域で後期段階の長頸壺がまとまって見られるのは珍しいが、本遺跡が因幡に属するとはいえ、東伯耆との境に位置するためであろう。409は短く立ち上がる口縁部に多条沈線文を施す甕である。

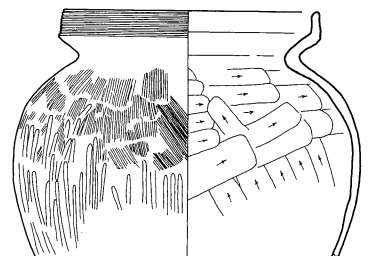
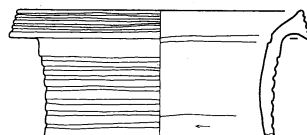
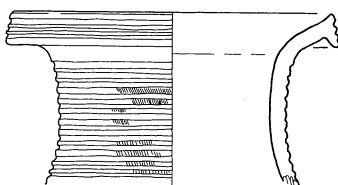
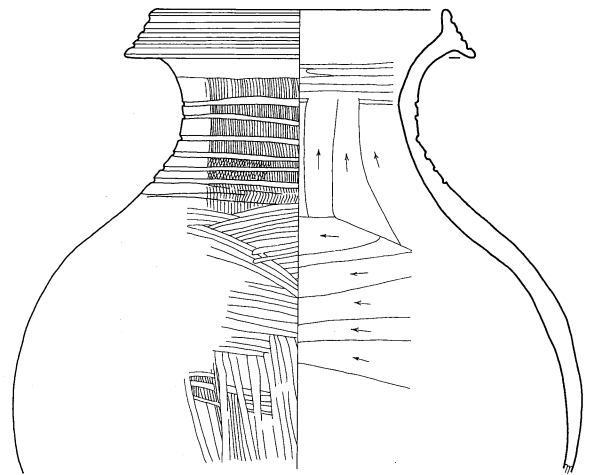
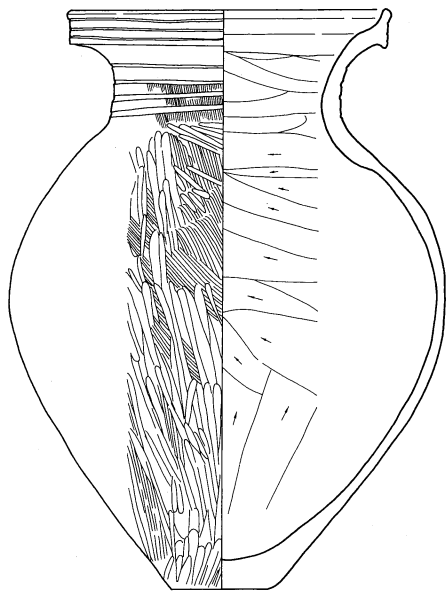
第121図は備後系と考えられる。注口をもつ台付鉢で、凹線文や鋸歯文などで飾り立てる、いわゆる塩町式土器⁽²²⁾である。412も復元実測のため図示した形になっているが、欠失部に注口があったものと思われる。

第122図には系統不明のものを掲げた。418は耳状把手の付く鉢で、口縁部の端部と外面に凹線文を施し、キザミを加える。このような鉢は山陰地方では系統が追えず、管見の及ぶ限りでは吉備地方と摂津地方に類例がある。前者は岡山市百間川原尾島遺跡⁽²³⁾、総社市南溝手遺跡⁽²⁴⁾で、後者は高槻市芝生遺跡⁽²⁵⁾であり、ともに後期に属する。418の形態は南溝手例に近い。

挿図番号	器高	口径	底径	施文・調整	遺構・層位	取上番号
401	22.8	5.1	6.5	口縁部凹線文・キザミ・波状沈線文、肩部凹線文、体部外面ハケ後半ヘラミガキ、内面上半ユビオサエ	③層	44204
402	(13.7)	(4.8)	—	口縁部凹線文・キザミ・波状沈線文、肩部・頸部凹線文、体部外面下半ヘラミガキ、内面上半ユビオサエ	暗茶灰色粘質土	1705
403	(8.1)	5.3	—	口縁部キザミ・波状沈線文、頸部凹線文	不明	4115
404	(5.4)	(10.2)	—	口縁部凹線文・キザミ、頸部外面ハケ	①層	11853
405	30.8	(17.0)	5.0	口縁部・頸部平行沈線文、体部外面ハケ後半ヘラミガキ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	②層相当	3606
406	(24.5)	(15.5)	—	口縁部・頸部平行沈線文、体部外面ハケ後半ヘラミガキ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	②層	35733
407	(9.1)	(16.8)	—	口縁部・頸部平行沈線文、頸部外面ハケ、口縁部ナデ	SD38	28495
408	(6.7)	(15.0)	—	口縁部・頸部平行沈線文、頸部外面ハケ、口縁部ナデ	SD38	28924
409	(13.1)	(13.6)	—	口縁部多条平行沈線文、体部外面ハケ後半ヘラミガキ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	①層	1317
410	39.7	(20.6)	25.2	外面凹線文・鋸歯文・キザミ・三角形透かし、外面ハケ後半ナデ、体部内面ハケ、脚裾部内面ヘラケズリ	②層相当	3223
411	(13.4)	(27.6)	—	外面凹線文・鋸歯文・キザミ、外面ハケ後半ヘラミガキ、体部内面ハケ	E層	27374
412	(9.3)	(29.0)	—	外面凹線文・鋸歯文・キザミ、外面ハケ後半ヘラミガキ、体部内面ハケ	②層相当	3226
413	40.1	(14.5)	16.2	外面ハケ後半ヘラミガキ、内面ハケ後半ヘラケズリ、口縁部内面ヘラミガキ、脚台部内面ヘラケズリ	D層	34804
414	35.5	(14.0)	(16.8)	頸部平行沈線文、肩部波状沈線文・刺突文、外面・口縁部内面赤彩、外面ハケ後半ヘラミガキ、脚台部内面ヘラケズリ	D層	34891
415	(10.4)	(13.0)	—	外面・口縁部内面赤彩、頸部貼付突帯文、頸部内外面ハケ、口縁部ナデ	I層	36553
416	(13.6)	(19.5)	—	肩部刺突文、体部外面ハケ、内面頸部以下ヘラケズリ、口縁部ナデ	SD38	34108
417	(10.3)	19.4	—	口縁部鋸歯文、頸部スタンプ文、外面・口縁部内面赤彩、口縁部内面ヘラミガキ、内面頸部以下ヘラケズリ	③層	2068
418	(16.5)	(39.0)	—	口縁部凹線文・キザミ・刺突文、体部外面ハケ後半ヘラミガキ、内面ハケ後半ヘラミガキ	SD57	34888



0 S = 1 : 4 10cm



第120图 外来系土器(2)

スタンプ文土器（第123、124図）一覧表に示したとおり324点出土した（表8、9）。スタンプ文が施される器種は壺を中心として器台などにも認められる。以下、文様の分類は高尾浩司に従い⁽²⁶⁾記述を進め、国道調査区の報告との対比は表に示した。

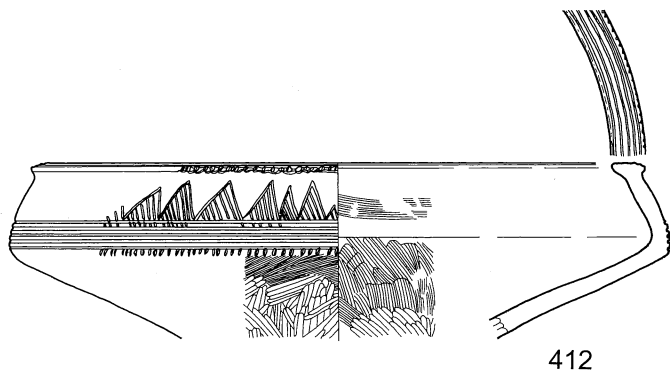
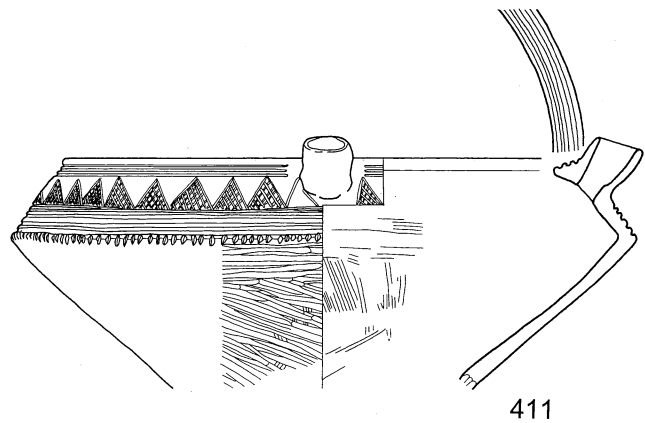
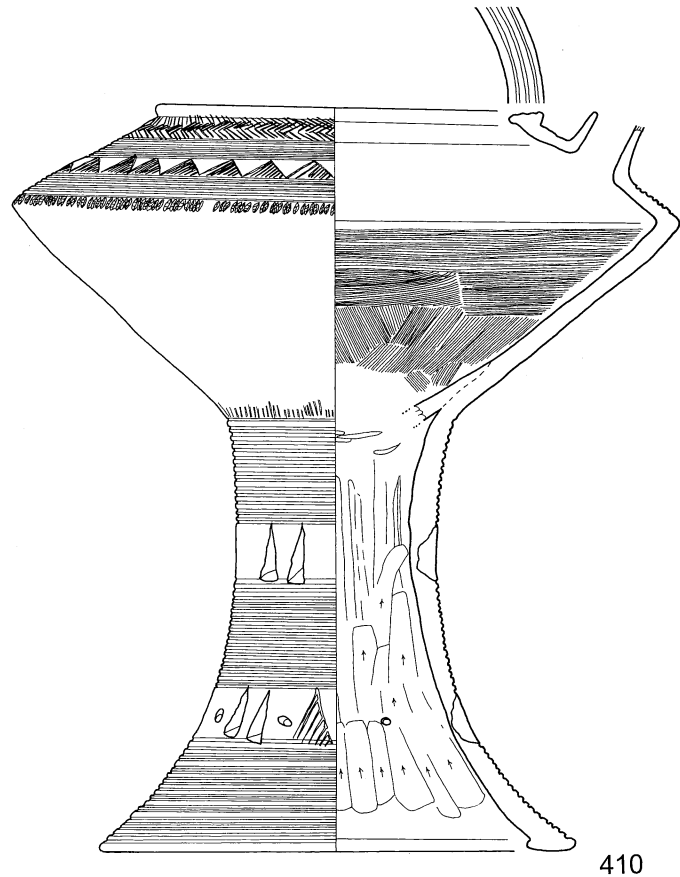
419～434は同心円文a類を施文する。2重圏から4重圏のものが認められる。435～438は同心円円文a類に連続渦文が、439、440はS字またはJ字文がそれぞれ加わる。

441～443は同心円文b類を施し、442、443は連続渦文が加わる。

444～449は連続渦文a類、450、451は連続渦文b類を基調とする。連続渦文には同心円文の間をスタンプによらずにつないだものがある。452、453は同心円文a類をヘラキザミの線でつないでおり、これを連続渦文①類と呼んでおく。これと似たものに同心円文a類の間をキザミでなく、棒状のものを押し当てることによって連続渦文状にしたものがある。これを連続渦文②類とする。454、455が該当する。また同じく同心円文a類の間を貝殻腹縁で押捺してつなげるものがあり、図示していないがこれを連続渦文③類とする。456は陰刻渦文の間を貝殻腹縁で押捺してつなげるもので、連続渦文④類と呼ぶ。連続渦文⑤類としたものは図示していないが、竹管文をヘラキザミでつなげて連続渦文状に仕上げたものである。竹管文の間を貝殻腹縁でつないだものは連続渦文⑥類とし、457に示した。

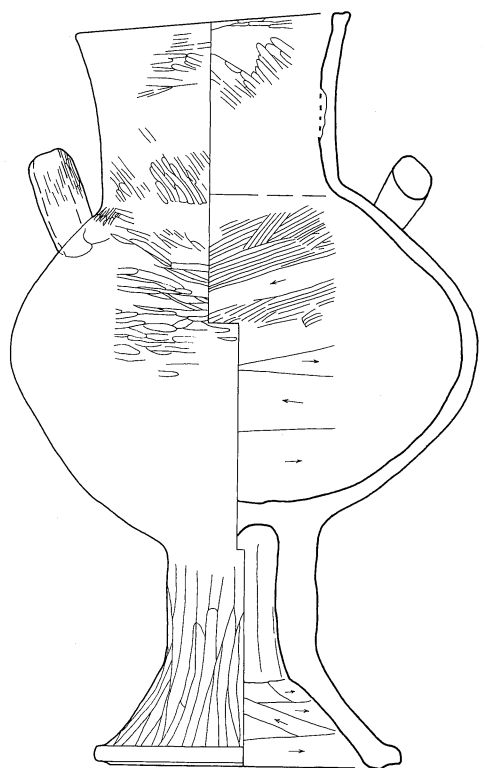
458～460は陰刻渦文、461～463はS字あるいはJ字文、466以下は竹管文または半裁竹管文である。

464、465は新しいタイプのもので、三日月状を呈し内部を沈線により埋めたものである。（湯村 功）

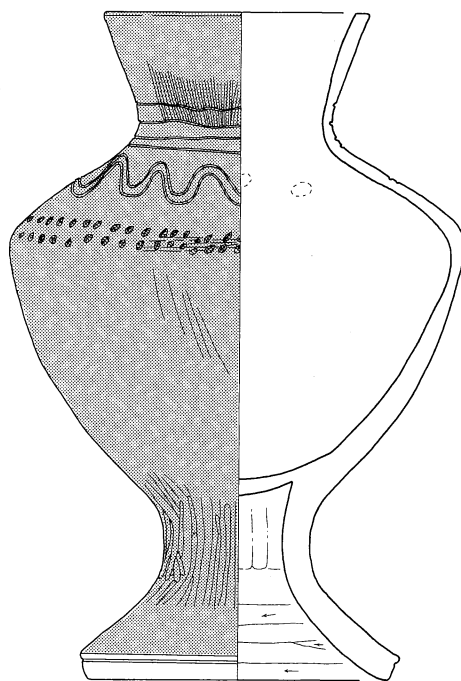


0 S=1:4 10cm

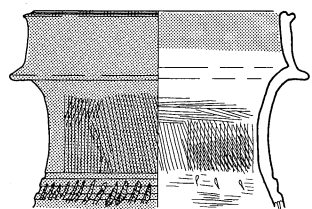
第121図 外来系土器（3）



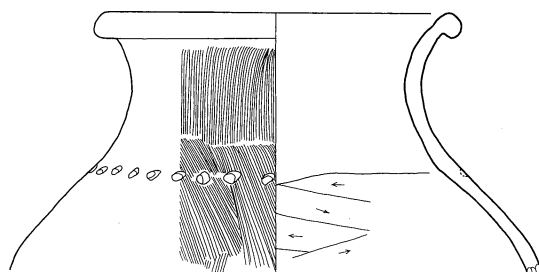
413



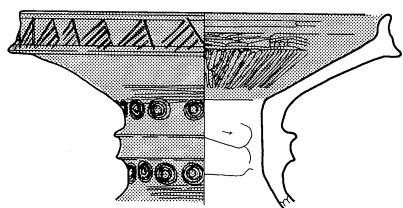
414



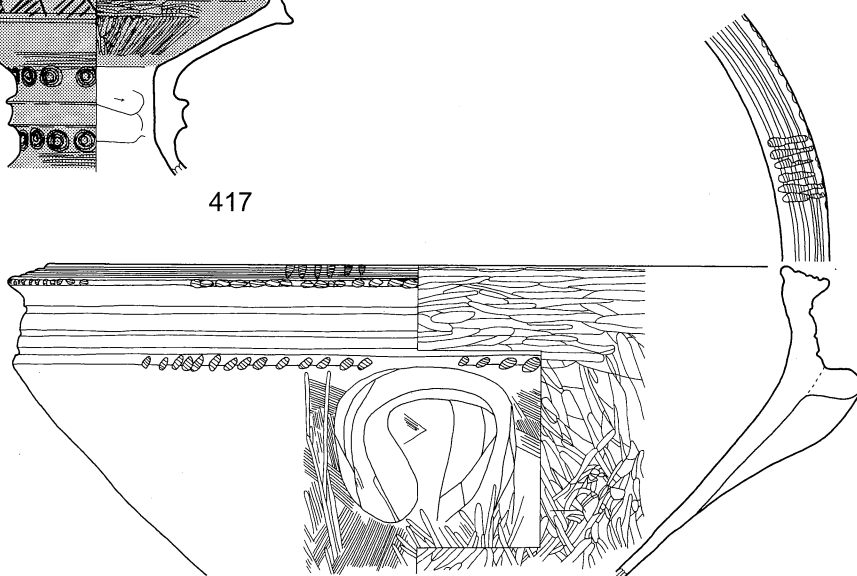
415



416



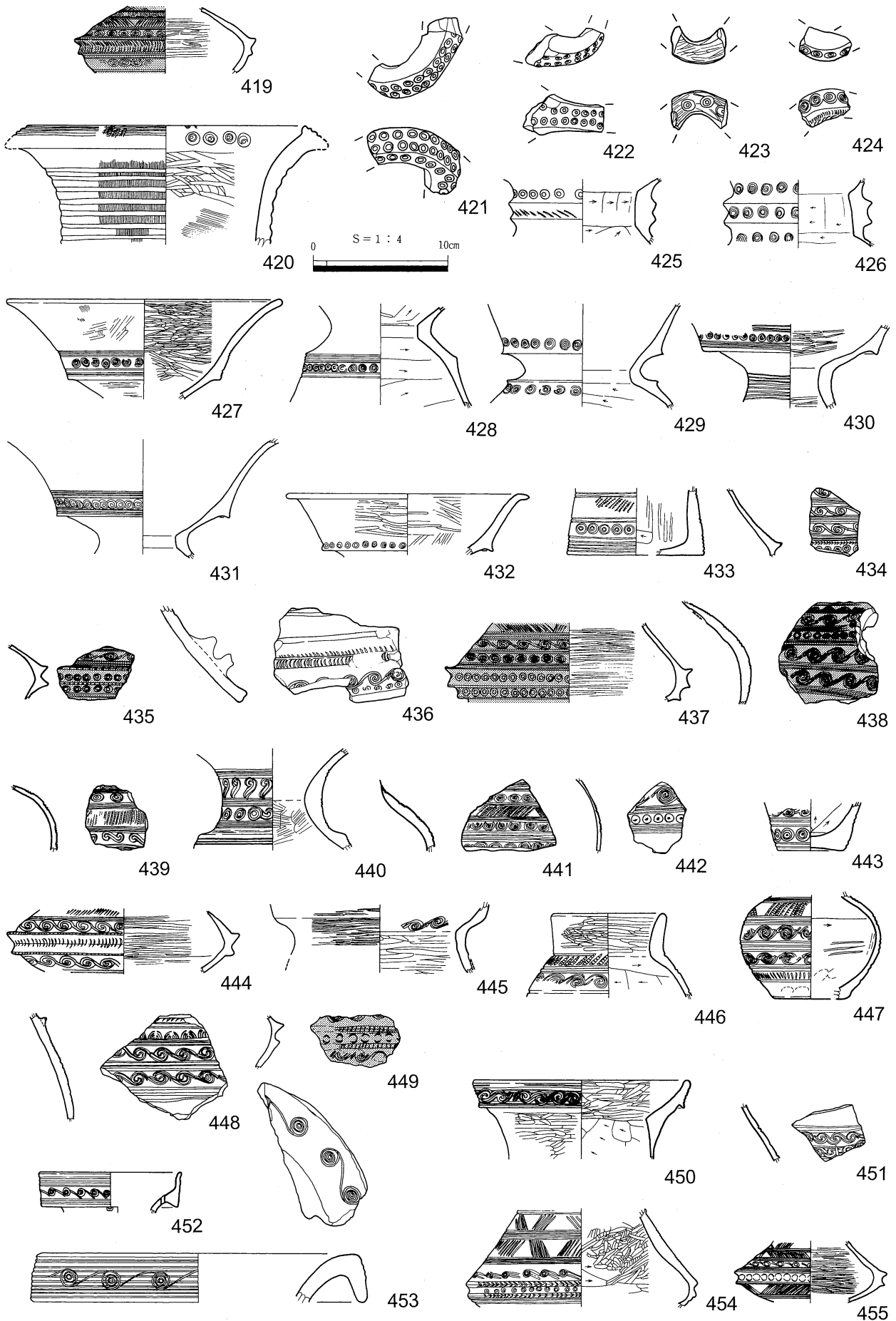
417



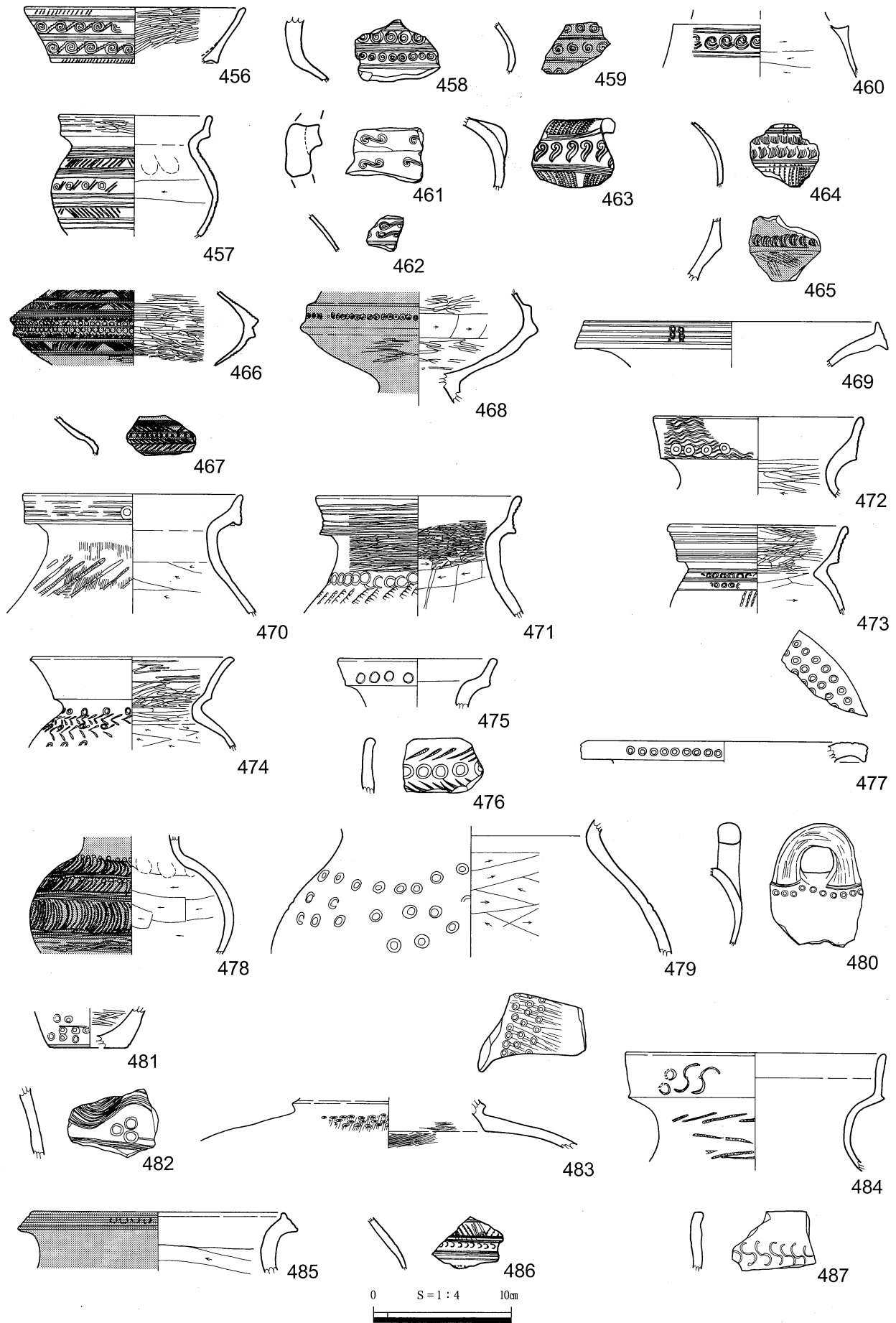
418

0 S=1:4 10cm

第122図 外来系土器(4)



第123図 スタンプ文土器 (1)



第124図 スタンプ文土器 (2)

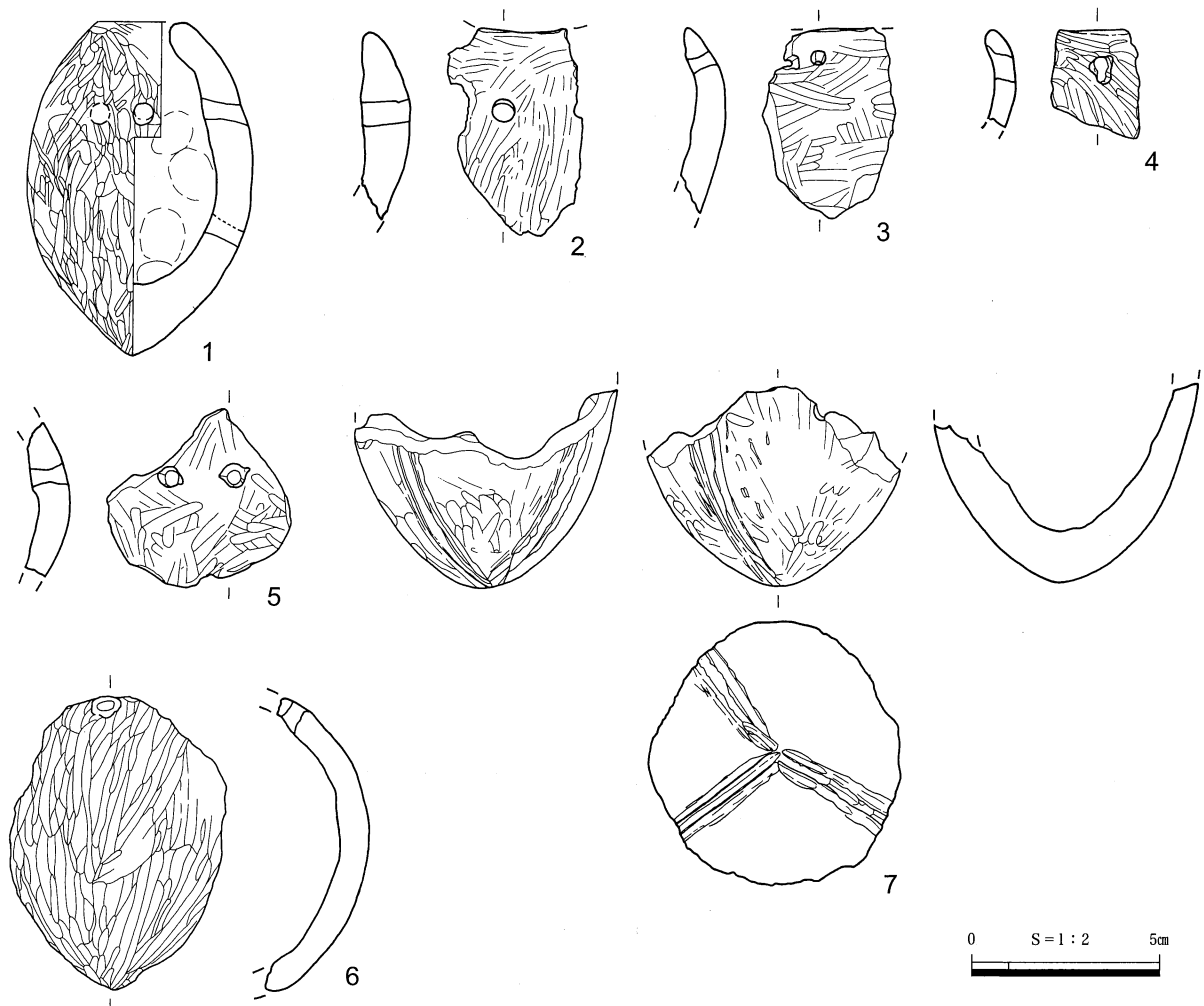
註

- (1) 土器の編年は以下の文献に従う。
- a 松井 潔 1997「東の土器、南の土器—山陰東部における弥生時代中期後葉～古墳時代初頭の非在地系土器の動態—」『古代吉備』第19集。
- b 清水真一 1992「因幡・伯耆地域」『弥生時の様式と編年 山陽・山陰編』。
- (2) 下記文献によれば、和泉地域の第Ⅲ様式を除けば、河内、摂津、近江の各地域の第Ⅳ様式に認められる。
- a 寺沢 薫・森岡秀人編 1989『弥生時の様式と編年 近畿編Ⅰ』。
- b 寺沢 薫・森岡秀人編 1990『弥生時の様式と編年 近畿編Ⅱ』。
- (3) 北浦弘人編 2001『青谷上寺地遺跡3』(財)鳥取県教育文化財団 の第37図12。
- (4) 註(2) a、b 前掲文献。
- (5) 松井 潔はこの施文を擬凹線と呼ぶ。擬凹線という用語は研究者によりさまざまな意味に用いられており、近年、高野陽子により整理がなされている(高野陽子 2000「擬凹線文について」『庄内式土器研究』XXⅢ)。ここでは擬凹線という用語は使わず、沈線と呼ぶこととし、その条数が多い場合は多条沈線、波状に描く場合は波状沈線と呼ぶ。
- (6) 出雲市西谷3号墓第1主体出土の複合口縁をもつ小型土器は壺と分類されている。
- 渡辺貞幸編 1987『西谷墳墓群の調査(Ⅰ)』(『山陰地方における弥生墳丘墓の研究』鳥根大学法文学部考古学研究室 1992に収録)。
- (7) 湯村 功 1997「天萬土井前遺跡の土器溜について」『天萬土井前遺跡』(財)鳥取県教育文化財団。
- (8) 註(3) 前掲文献の第112図116。
- (9) 橋本裕行 1995「弥生土器絵画研究の展望」『東アジアの古代文化』85号。
- (10) 米田美江子・三原一将編 1997『白枝荒神遺跡』出雲市教育委員会。
- (11) 藤田 淳 1998「出石町袴狭遺跡出土の「箱形木製品」について」『考古学ジャーナル』No.432。
- (12) 角南聡一郎 1999「弥生時代多孔土器初論」『滋賀考古』第21号。
- (13) 註(3) 前掲文献の第82図6。
- (14) 本例は厳密な比較検討を行ったわけではないので、片岡宏二の定義に従えば「朝鮮系無文土器」にも「擬朝鮮系無文土器」にも含まれない。ここでは今後検討すべき資料として議論の俎上に上ればと考へ、朝鮮系無文土器と呼んでおく。
- (15) 北浦弘人編 2001『青谷上寺地遺跡3』(財)鳥取県教育文化財団の第49図SD28-5。
- (16) 註(1) a 前掲文献。
- (17) 筆者の庄内式併行期についての理解は下記文献を参照されたい。
- 湯村 功 1998「庄内式併行期の山陰の様相」『庄内式土器研究』XⅧ。
- (18) 寺沢 薫 1986「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』奈良県立橿原考古学研究所。
- (19) 註(2) a、b 前掲文献。
- (20) 行田裕美編 1984『ビシャコ谷遺跡』津山市教育委員会。5号長方形住居状遺構より出土。
- (21) 神原英朗編 1977『用木山遺跡』山陽町教育委員会。第6支群第8号住居址、第7支群第1号住居址、第8支群第2土器溜り、第3号住居址支群、第9住居址支群より出土。
- (22) 塩町式土器については標識遺跡である塩町遺跡の正式報告がなく、今ひとつ実態が明確でないように思われる。ここではとりあえず以下の文献に従っておく。
- 伊藤 実 1992「備後地域」『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』。
- (23) 正岡睦夫編 1984『百間川原尾島遺跡2』建設省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会。土壙49より出土。
- (24) 平井泰男編 1995『南溝手遺跡1』岡山県教育委員会。井戸8より出土。
- (25) 森田克行 1990「摂津地域」『弥生時の様式と編年 近畿編Ⅱ』。
- (26) 高尾浩司 1997「鳥取県におけるスタンプ文について」『天萬土井前遺跡』(財)鳥取県教育文化財団。

第2節 土製品

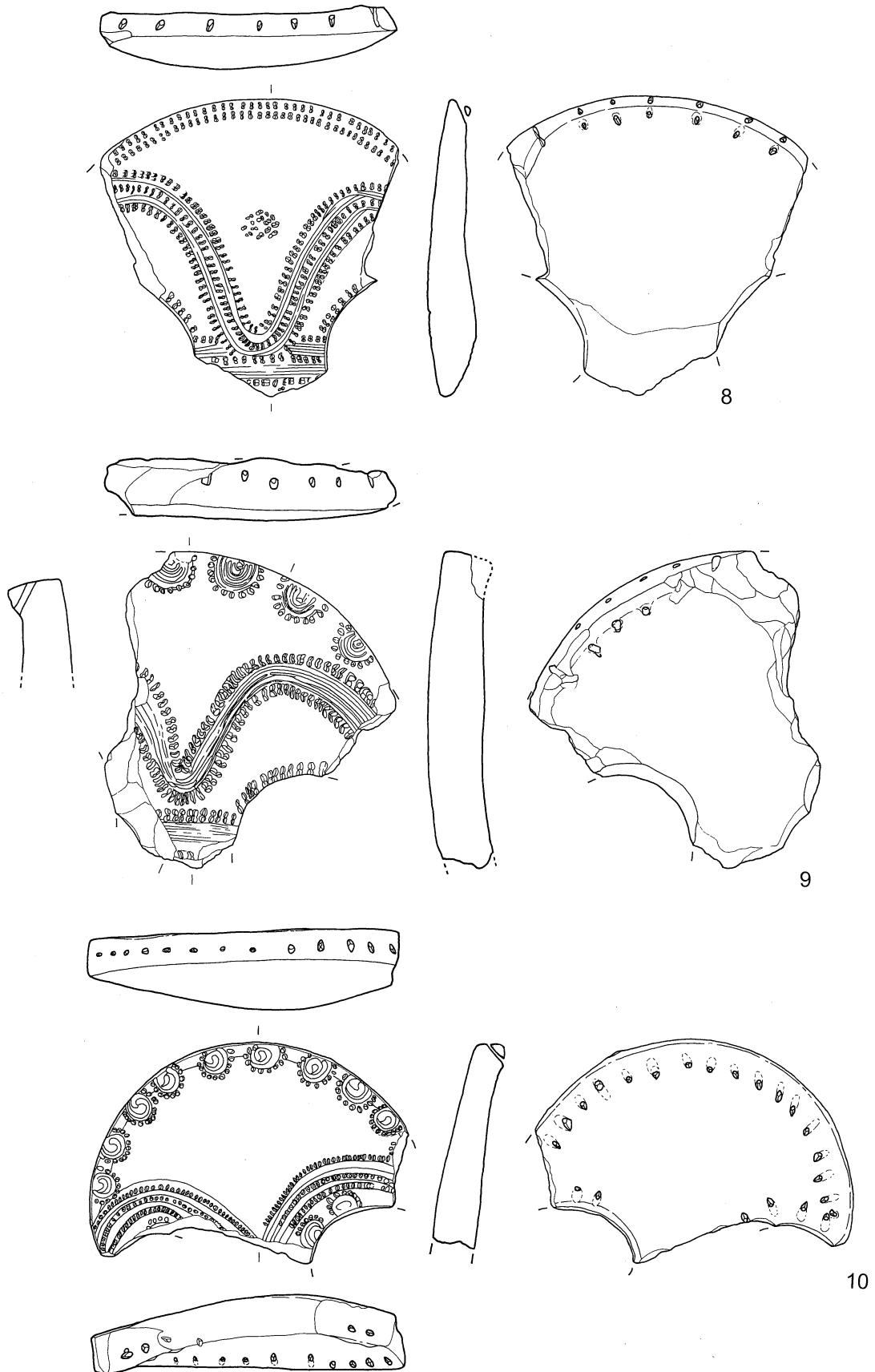
土笛 (第125図) 県道調査区からは7点出土した。すべてを図示している。完存するものがないため詳細を知りえないが、1は体部上半と下半に小孔が穿っており、それぞれが器体の前面・後面に位置する。7は器体の長軸に沿う3条の沈線が認められる。いずれも器体はヘラミガキによって仕上げられており、こうした諸特徴は多量に出土した松江市西川津遺跡⁽¹⁾の例と共通するものである。土笛は従来より福岡県から京都府にかけての日本海沿岸地域での分布が知られていたわけであるが⁽²⁾、今回のまとまった出土は鳥取県東部が空白域であったのを埋めることとなった。

分銅形土製品 (第126～130図) 出土した34点すべてを図化した。完存するものはなく、破片の状態出土する傾向があるのは従来より指摘されていたことである⁽³⁾。数字で示せず感覚的ではあるが、大きさには大小があるようで、8、9が大型に、10～24が中型に、25～41が小型に属する。器体は沈線文や刺突文で裝飾され、33や41といった無文のものや穿孔のみ施したものは例外的といっている。図面の展開は施文された側を表面として



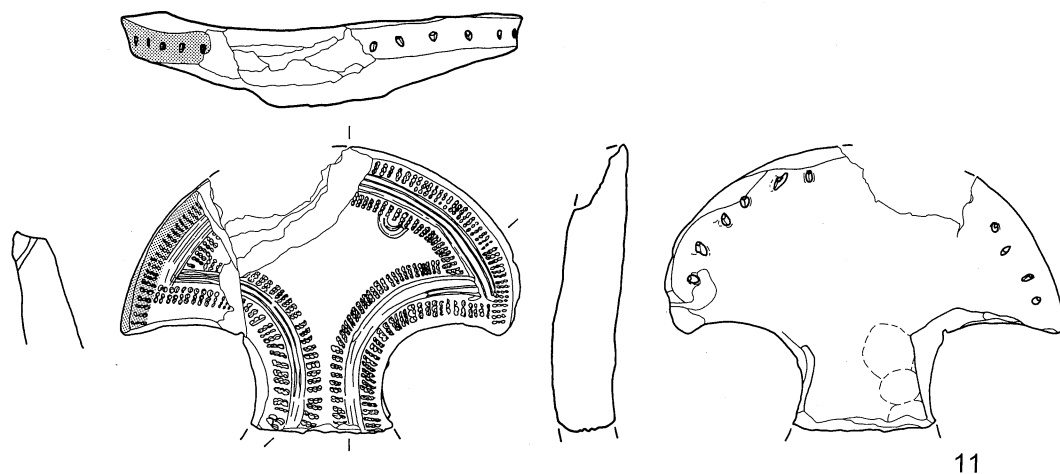
第125図 土笛

挿図番号	調査区	遺構・層位	時期	全長	最大幅	口径	孔径	調整技法	取上番号
1	6区	不明	不明	9.0	(6.1)	(2.3)	(0.5)	外面ヘラミガキ、内面コピオサエ後ナデ	47846
2	6区	③層	弥生中期中葉～後葉	(5.5)	(3.5)	不明	0.6	外面ヘラミガキ、内面ナデ	46785
3	5区	⑤層	弥生前期末～中期前葉	(5.2)	(3.5)	不明	0.4	外面ヘラミガキ、内面ナデ	16732
4	6区	⑥層	弥生前期末～中期前葉	(2.8)	(2.3)	不明	0.5	外面ヘラミガキ、内面ナデ後ヘラミガキ	48814
5	6区	⑤層	弥生前期末～中期前葉	(4.6)	(4.9)	不明	0.4	外面ヘラミガキ、内面ナデ	48872
6	6区	SD43	弥生前期末～中期前葉	(7.9)	(5.8)	不明	0.5	外面ヘラミガキ、内面ナデ	48580
7	5区	不明	不明	(5.4)	(6.8)	不明	0.5	外面ヘラミガキ、内面ナデ、外面沈線文	13418

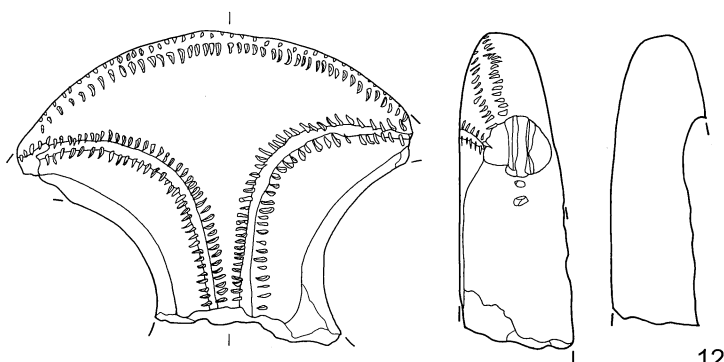


0 S = 1 : 2 5 cm

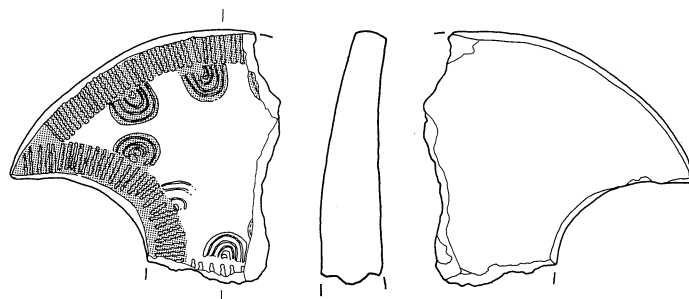
第126図 分銅形土製品 (1)



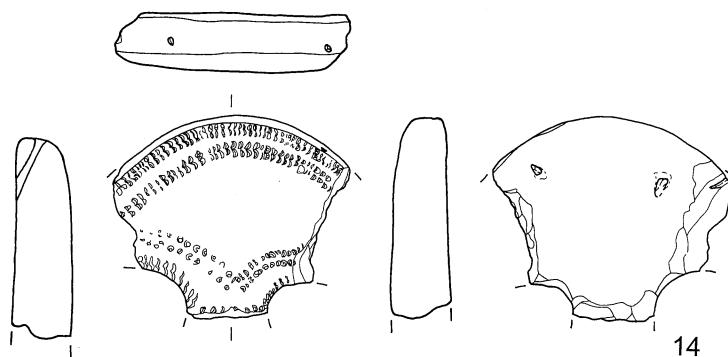
11



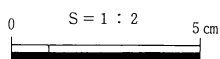
12



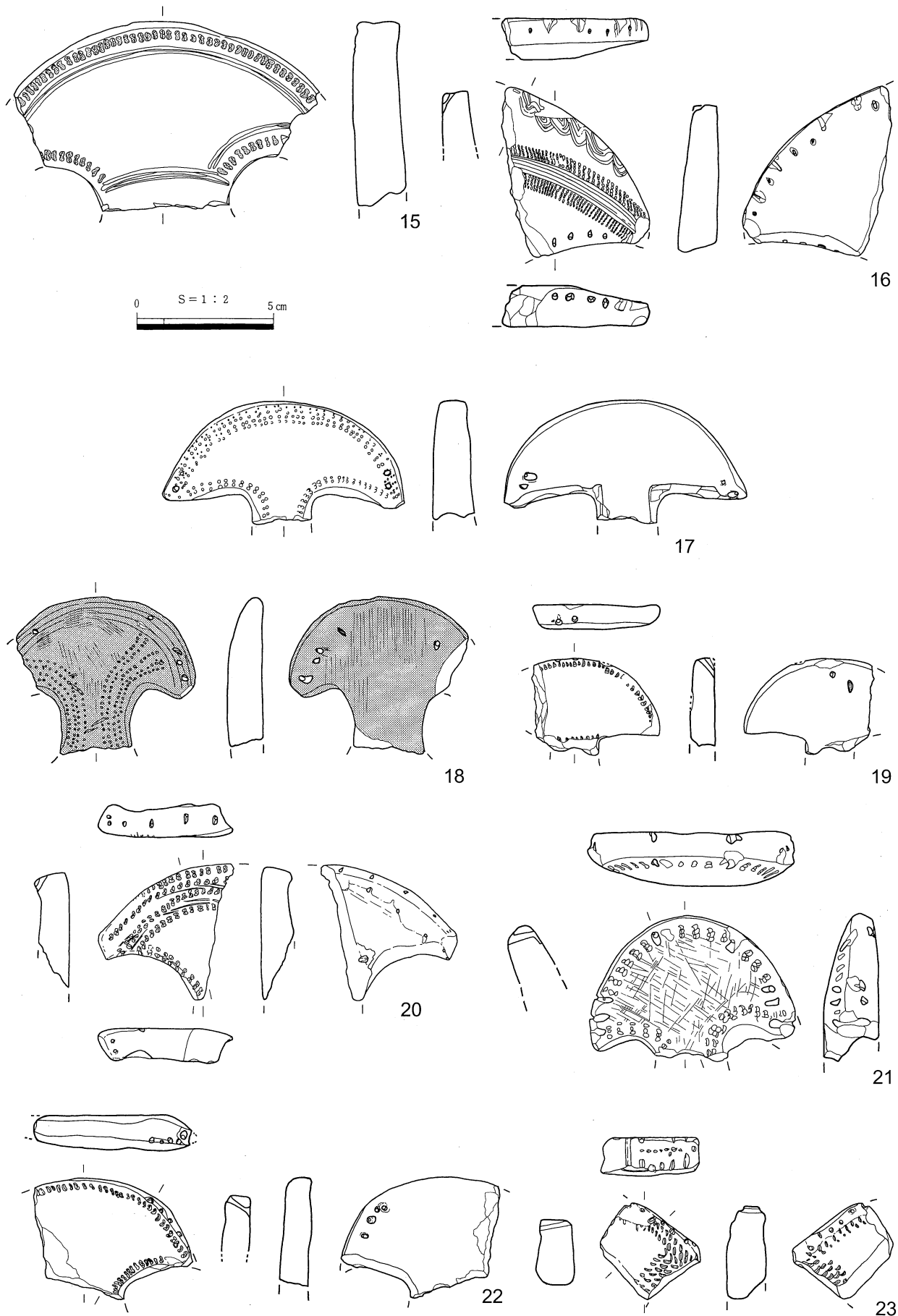
13



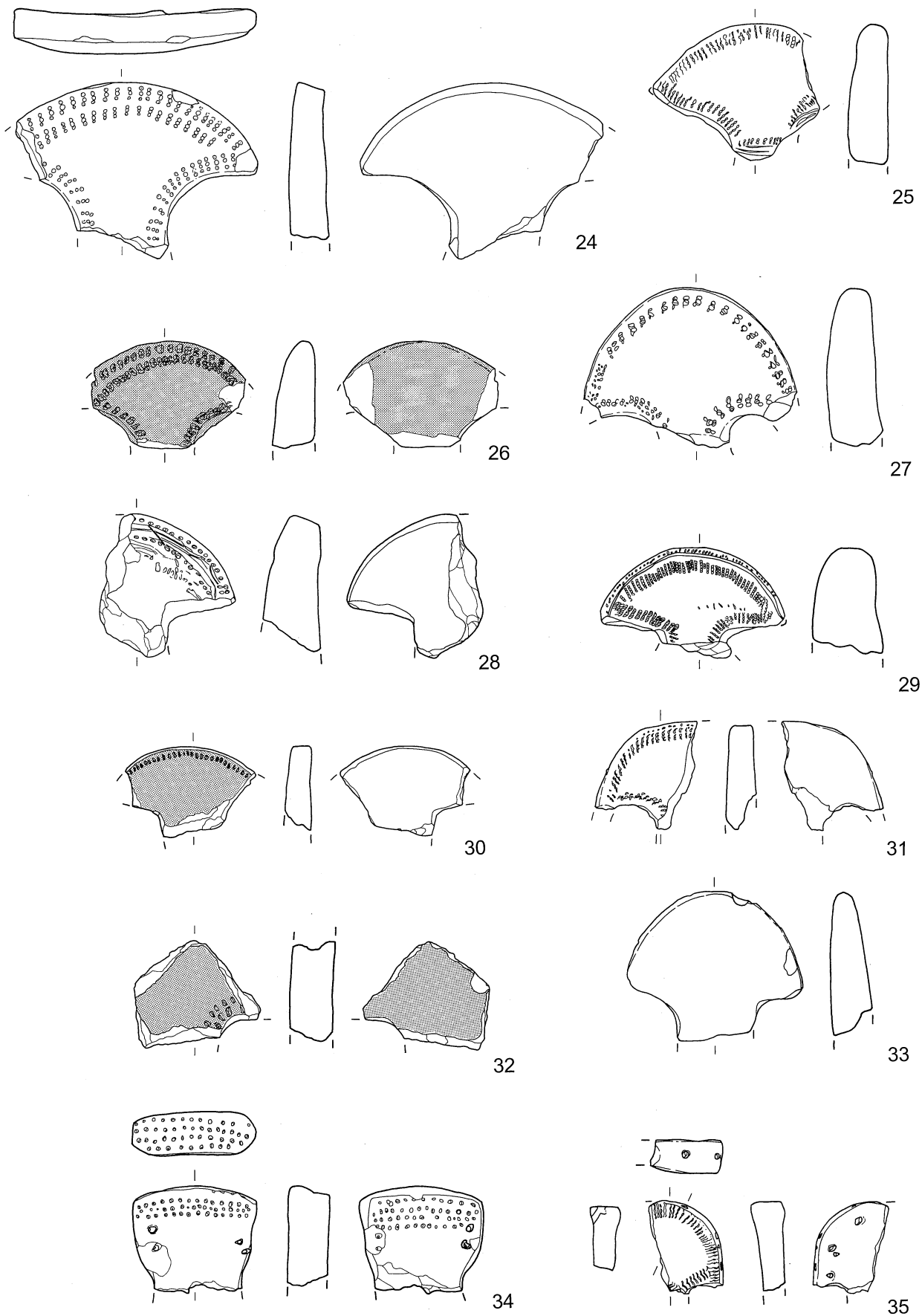
14



第127図 分銅形土製品(2)



第128図 分銅形土製品 (3)



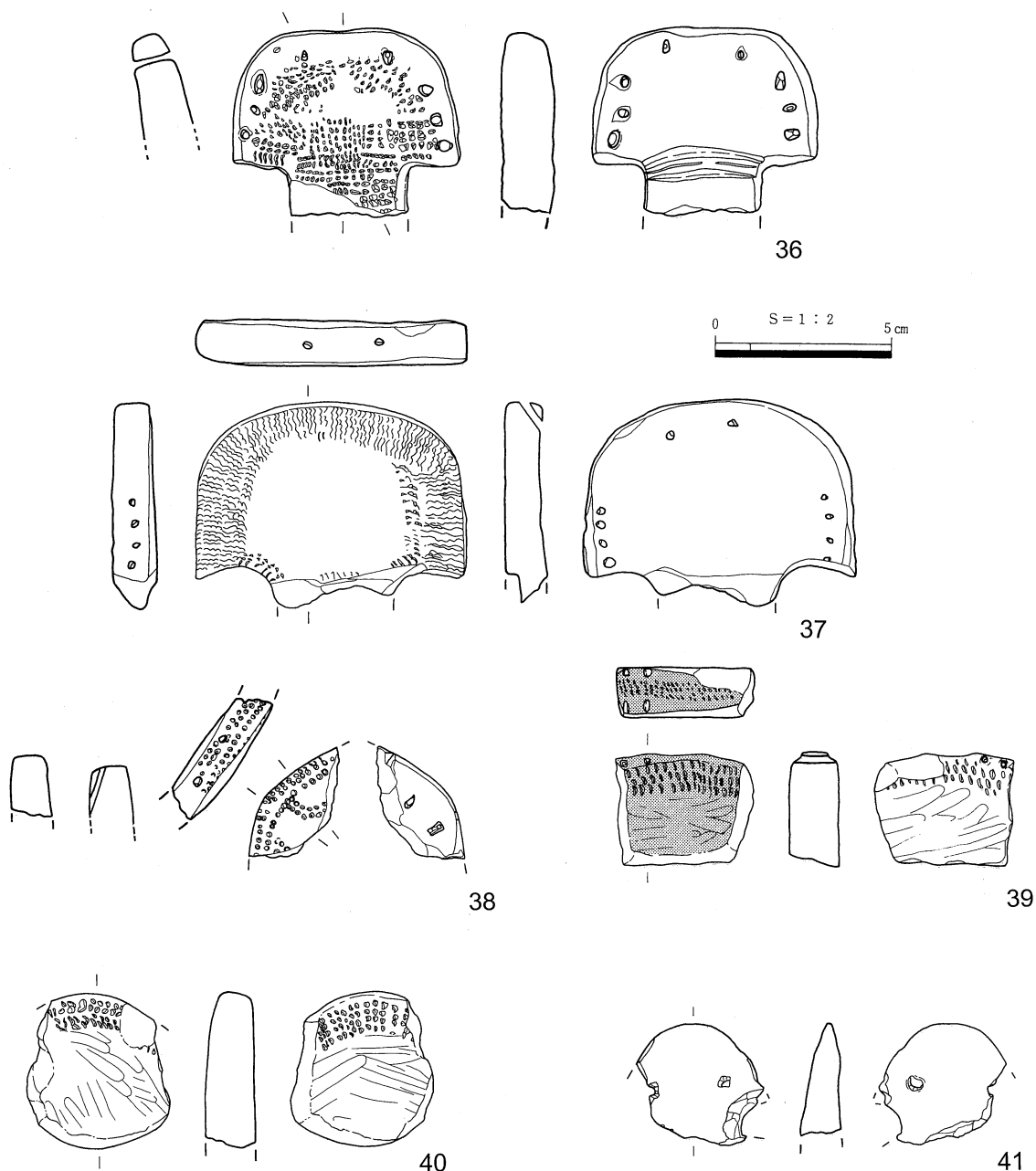
0 S = 1 : 2 5 cm

第129図 分銅形土製品(4)

いるが、文様の施されるのは基本的に表面のみである。この傾向は国道調査区出土分においても同様である⁽³⁾。裏面に施文のある例(23、34、39、40)も縁辺に沿った刺突文のみで、にぎやかなものではない。施文の状況を見ると大型・中型のものが装飾性が高いようだ。また縁辺に穿孔のあるものは20点であるが、小型のものは穿孔しない場合が多く、大型・中型品と小型品は機能を異にする可能性がある。器体は表面側にふくらむ緩やかなカーブを描く。穿孔の多寡は別として表面が見える状態で何かに取り付けられたものであろうか。

山陰地方における分銅形土製品は1999年時点では39遺跡で確認されている⁽⁵⁾。地域的に見れば因幡、出雲西部、石見は少なく、伯耆東部の天神川流域、伯耆西部の日野川流域、出雲東部の松江平野に多い。青谷上寺地遺跡の所在する因幡と伯耆東部の境の海岸部ではこれまで知られていなかったわけであるが、今回本遺跡全体で56点の出土を見たことで、数のうえでは山陰地方における中心的位置を占めることになった。

分銅形土製品は吉備に分布の中心をもつ⁽⁶⁾。なかでも山陽町東高月遺跡群⁽⁷⁾での出土量が強調されることが多い。ここでは55点の分銅形土製品が出土しており、その周辺を合わせた状況から、吉備に特徴的な遺物であることは疑いないが、山陰地方の、しかも細かく見れば従来知られていなかった地域で東高月遺跡群と同量の出土



第130図 分銅形土製品(5)

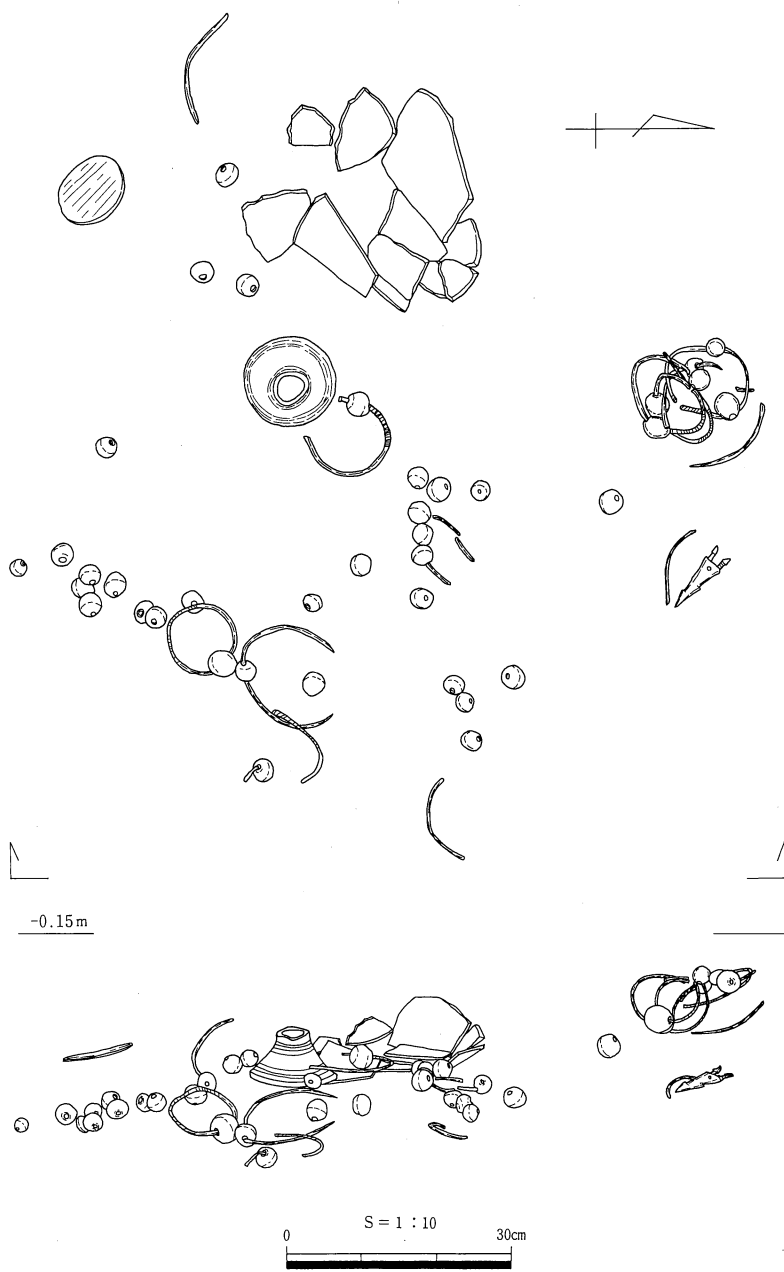
第3章 出土遺物

挿図番号	調査区	遺構・層位	時期	全長	最大幅	最大厚	文様の種類	縁辺部穿孔	赤彩の有無	取上番号
8	7区	L~M層	弥生前期末~中期後葉	(9.9)	(9.8)	1.6	沈線文・刺突文	有	無	43673
9	4区	②層相当	弥生後期~古墳前期初頭	(10.5)	(8.2)	1.8	沈線文・刺突文	有	無	3745
10	不明	不明	不明	(7.2)	(9.9)	1.4	沈線文・刺突文	有	無	50514
11	5区	②層	弥生後期~古墳前期初頭	(7.6)	10.6	1.7	沈線文・刺突文	有	有	8406
12	6区	③層	弥生中期中葉~後葉	(8.3)	(10.4)	3.0	沈線文・刺突文	有	無	46848
13	4区	SD11	弥生後期初頭~後葉	(6.8)	(7.1)	1.6	刺突文	無	有	3172
14	4区	③層相当	弥生中期中葉~後葉	(5.4)	(6.2)	1.5	刺突文	有	無	4884
15	7区	N層	弥生中期中葉	(6.8)	(11.0)	1.9	沈線文・刺突文	無	無	44967
16	4区	③~⑥層相当	弥生前期末~中期後葉	(6.2)	(5.3)	1.5	沈線文・刺突文	有	無	5548
17	4区	③層相当	弥生中期中葉~後葉	(4.5)	8.8	1.5	刺突文	有	無	4900
18	4区	不明	不明	(5.4)	(6.8)	1.3	刺突文	有	有	3266
19	4区	①層	弥生中期~奈良	(3.5)	(4.6)	0.9	刺突文	有	無	1290
20	7区	L~M層	弥生前期末~中期後葉	(4.9)	(4.2)	1.2	刺突文	有	無	43673
21	7区	J層	弥生中期後葉	(5.3)	(7.5)	2.0	刺突文	有	無	42361
22	4区	③~⑥層相当	弥生前期末~中期後葉	(4.4)	(5.3)	1.0	刺突文	有	無	5642
23	7区	H層	弥生後期	(3.3)	(3.4)	1.4	刺突文	有	無	37078
24	5区	①層	弥生中期~奈良	(6.3)	(8.6)	1.4	刺突文	無	無	11779
25	6区	③層	弥生中期中葉~後葉	(4.9)	(5.7)	1.4	沈線文・刺突文	無	無	46069
26	6区	③層	弥生中期中葉~後葉	(3.8)	(5.5)	1.5	刺突文	無	有	44226
27	7区	L層	弥生中期後葉	(5.6)	(7.6)	1.9	刺突文	無	無	44931
28	5区	②層	弥生後期~古墳前期初頭	(5.1)	(4.8)	2.0	沈線文・刺突文	無	無	12489
29	7区	H層	弥生後期	(3.9)	6.5	1.5	刺突文	無	無	36230
30	4区	①層	弥生中期~奈良	(3.2)	(4.6)	0.9	刺突文	無	有	1342
31	7区	I~J層	弥生中期後葉	(3.8)	(3.1)	1.1	刺突文	無	無	43021
32	5区	①~②層	弥生中期~奈良	(3.6)	(4.4)	1.5	刺突文	不明	有	8211
33	不明	不明	不明	(5.3)	6.2	1.4	施文なし	無	無	50153
34	5区	②層	弥生後期~古墳前期初頭	(3.8)	4.4	1.5	刺突文	有	無	12151
35	7区	SD27	弥生中期後葉	(3.2)	(2.2)	1.2	刺突文	有	無	43074
36	7区	I層	弥生中期後葉	(5.4)	6.4	1.6	刺突文	有	無	40775
37	7区	SD27	弥生中期後葉	(5.8)	7.7	1.3	刺突文	有	無	42307
38	5区	②層	弥生後期~古墳前期初頭	(1.9)	(4.0)	1.2	刺突文	有	無	15646
39	7区	K層	弥生中期後葉	(3.2)	(3.7)	1.4	刺突文	有	有	42507
40	7区	I層	弥生中期後葉	(4.4)	(4.0)	1.4	刺突文	有	無	41766
41	5区	③層	弥生中期中葉~後葉	(3.5)	(3.3)	1.1	施文なし	有	無	12765

を見たことは、分布論の怖さを教えてくれるとともに、分銅形土製品の起源や系譜を改めて考える必要性を示しており、これらが特徴的に分布する地域社会の比較も進めていかなければならないだろう。

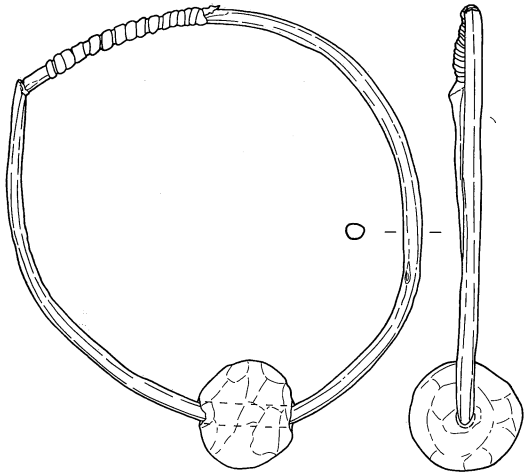
土玉（第131～134図） 国道調査区の報告（以下、『青谷上寺地3』とする）では有孔土玉とされている。径2.5cm程度の球形で、焼成前に穿たれた径0.6cmほどの孔が貫通する。土玉のみが出土する 경우가大部分であるが、土玉の孔に細枝を加工したものを通し、樹皮で緊縛して環状にしたものが一定量認められる。枝の緊縛部は平坦面を削りだし固定しやすいようにしている。環に取り付く土玉は1個で、例外は認められない。土玉すべてがこのような状態であったかは不明であるが、ある程度はこうした状態で使用されたことがあったことが分かる。

土玉の多くは単独で溝や包含層中より出土したのであるが、『青谷上寺地3』や第131図に示したようにまとまって出土することがある。また第134図に掲げた24点は第107図313の壺形土器に一括で入っていた。この点に意味を見出せるとすれば、土玉は単独ではなく複数個同時に用いられることが

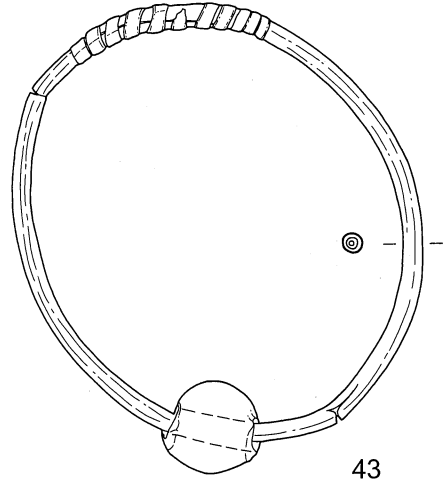


第131図 土玉出土状況図

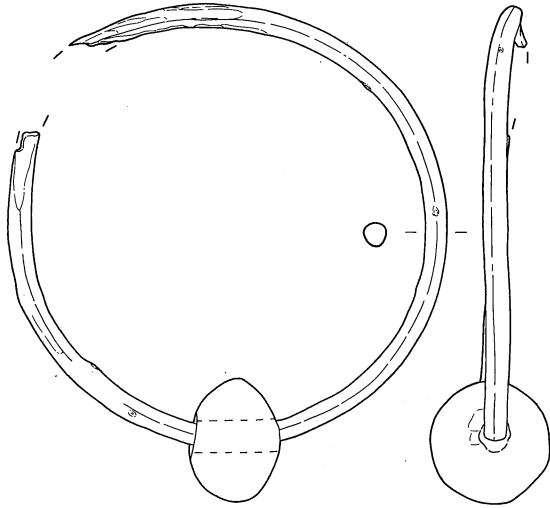
挿圖番号	調査区	遺構・層位	時期	土玉径	環の直径	環の径	環の緊縛方法	取上番号
42	7区	N層	弥生中期中葉	3.0×2.6	10.5	0.5	削り出した面を密着させ、樹皮で緊縛	36867
43	7区	SA62	弥生中期後葉	2.6×2.4	11.7	0.5	削り出した面を密着させ、樹皮で緊縛	43123
44	7区	I層	弥生中期後葉	3.2×2.4	11.6	0.6	緊縛部が残っていないため不明	42025
45	7区	J層	弥生中期後葉	2.9×2.5	(14.1)	0.5	削り出した面を密着させ、樹皮で緊縛	42358
46	7区	J層	弥生中期後葉	2.5×2.5	不明	0.4	削り出した面を密着させ、樹皮で緊縛	36670
47	7区	SD27	弥生中期後葉	2.5×2.4	不明	0.4	削り出した面を密着させ、樹皮で緊縛	42284
48	7区	SD27	弥生中期後葉	2.9×2.7	不明	0.3	削り出した面を密着。樹皮残存せず	42286
49	7区	N層	弥生中期中葉	2.5×2.3	不明	0.5	緊縛部が残っていないため不明	43904
50	7区	J層	弥生中期中葉	3.0×2.9	不明	0.4	緊縛部が残っていないため不明	44995
51	不明	不明	不明	3.0×2.5	なし	なし	環残らず	18002



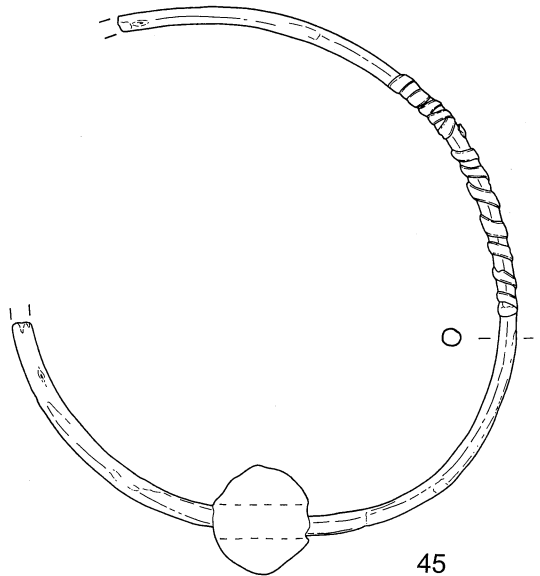
42



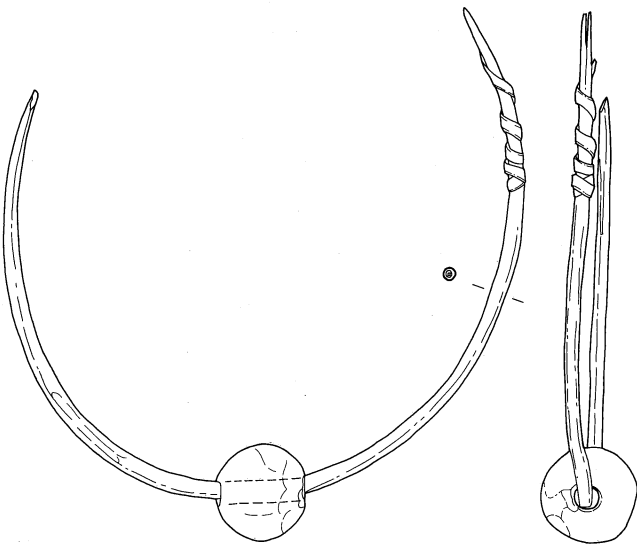
43



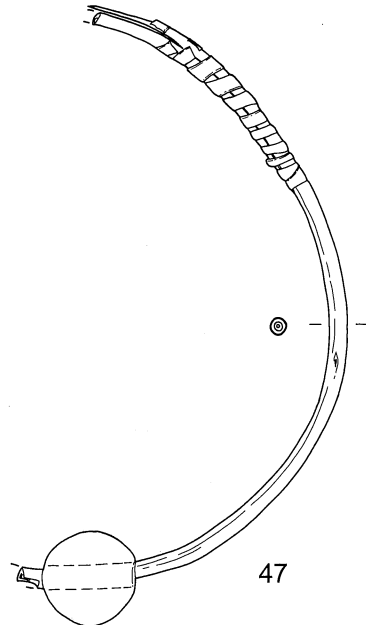
44



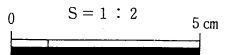
45



46



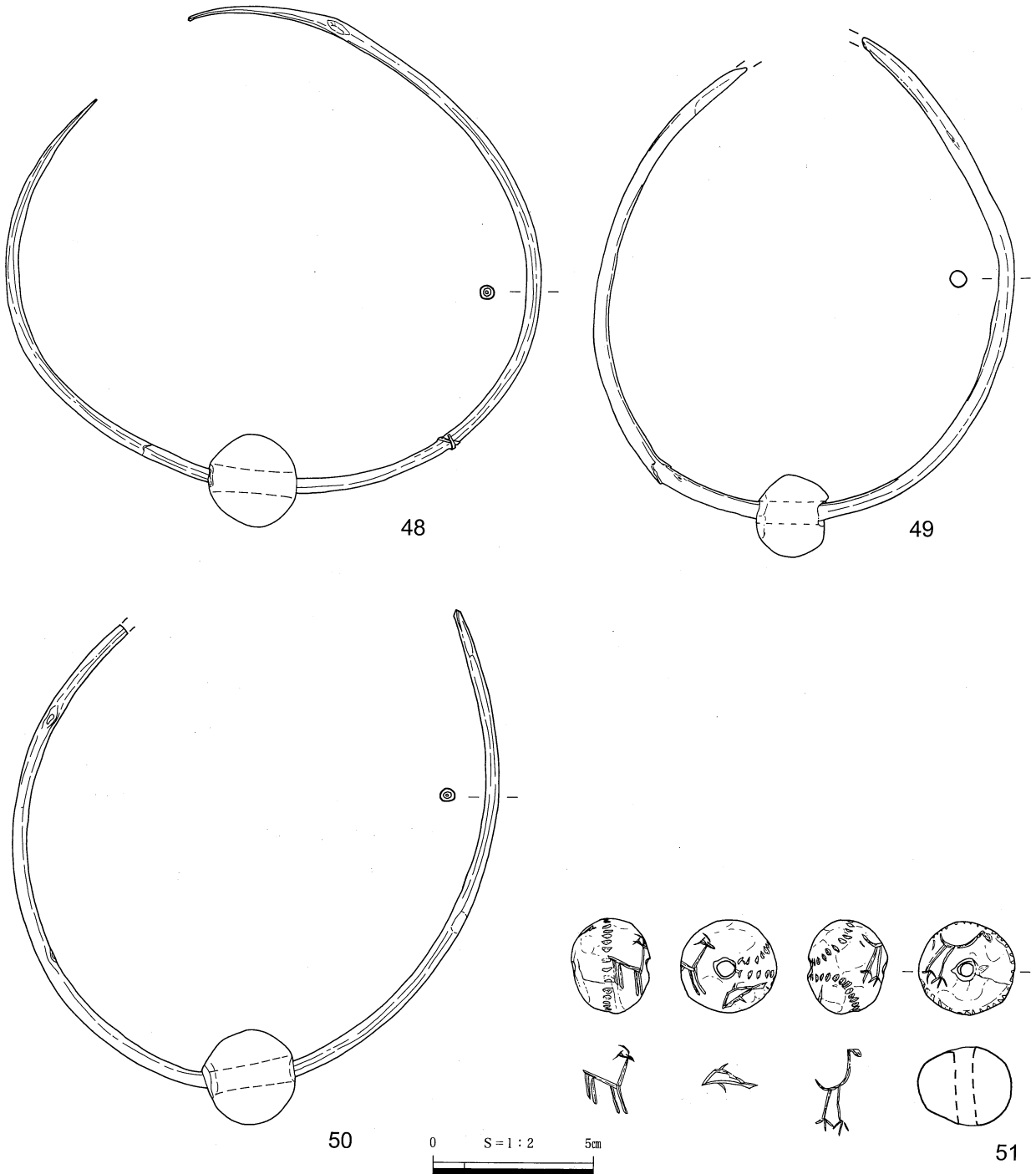
47



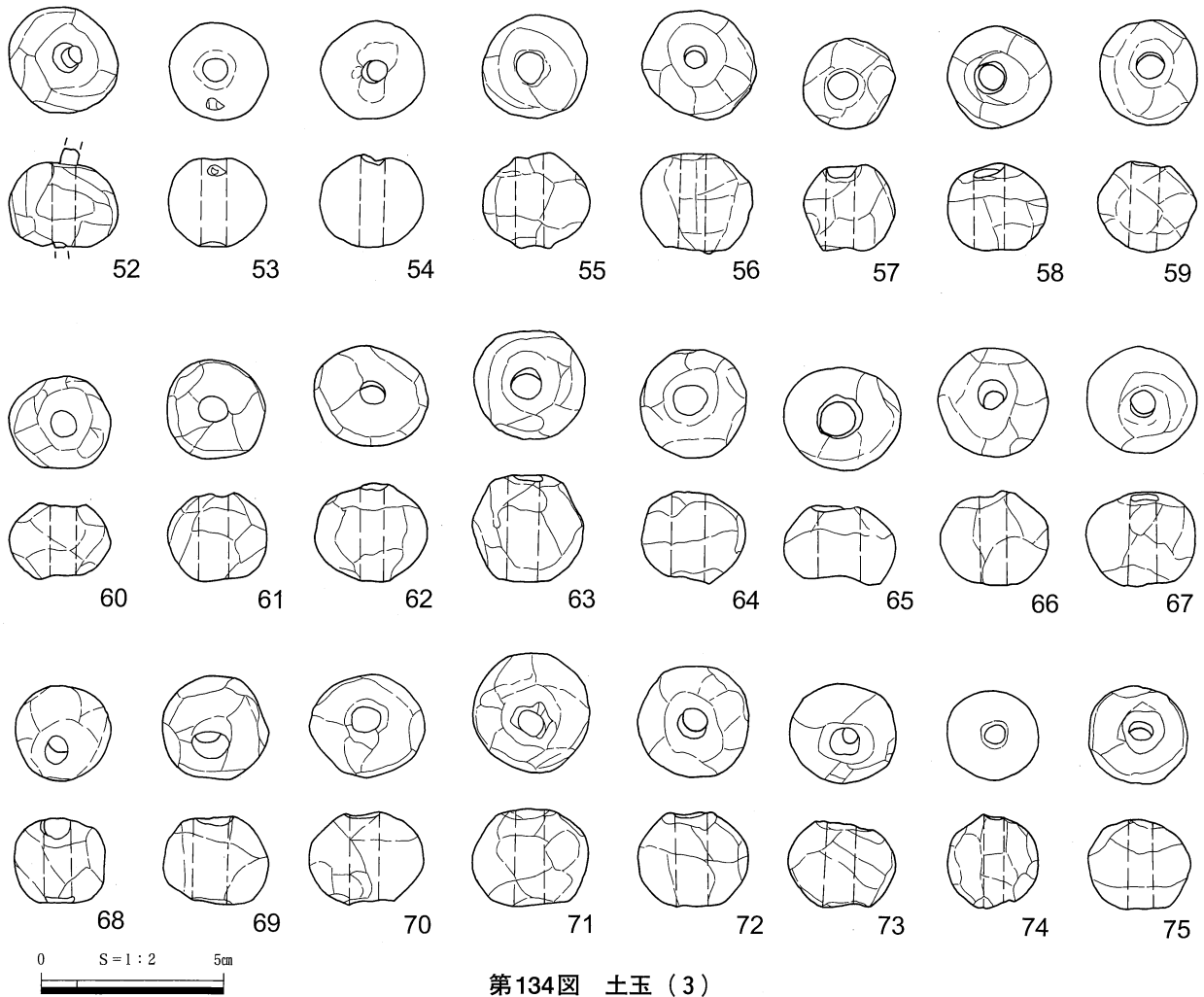
第132図 土玉(1)

あったのではないかとされる。土玉そのものは1個ずつを環に取り付けるという手の込んだことをしていることがある割には決して精巧な作りをしているわけではなく、装身具という性格を考えることはできない。想像の域を出ないが、環に取り付けられたものが数や重量の計測に用いられた可能性はないだろうか。

土玉は大きさもほぼ一定しており、規格性が高いように思われるが、特殊なものとして51に示した線刻絵画を有するものがある。連続する刺突文により器体を2面に区画し、1面にシカと魚を、もう1面に水鳥を描く。シカはV字形の頭部とふんばるように描かれた四足が特徴的である。魚は細長い体からすると壺形土器や木製琴板に描かれたサメを想起させる。水鳥は長い頸と足が特徴をよく表している。いずれも焼成前に刻まれたもので、シャープな線のあり方からしてためらうことなく描かれた、別の言い方をすれば画題をよく理解した者の手によって描かれたものと考えられる。県道調査区の土玉の数量的処理は行っていないが、遺跡全体で数千点に及ぶ量



第133図 土玉(2)



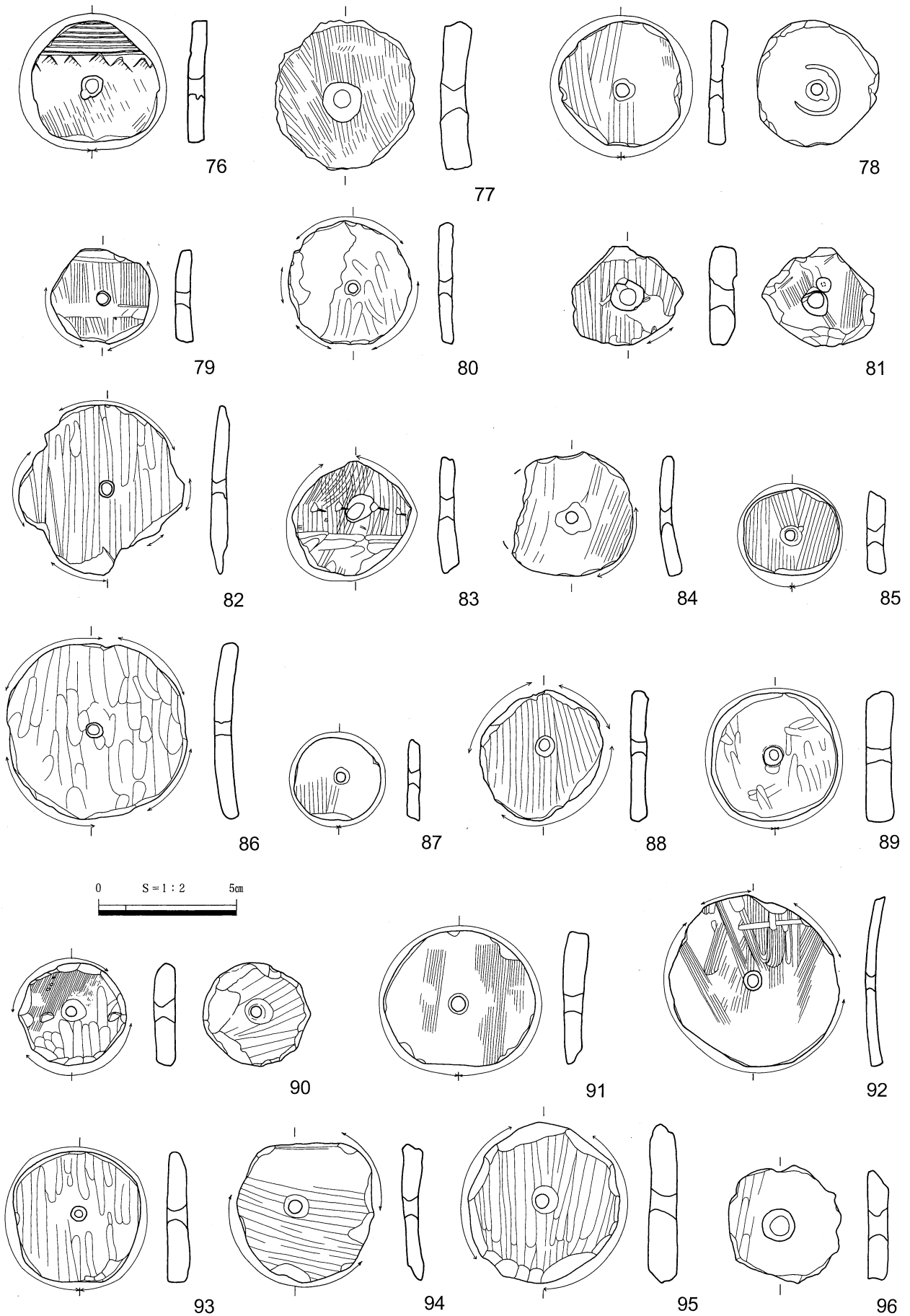
第134図 土玉 (3)

がある土玉のうち、絵画はおろか文様を施したのも唯一この1点のみである。この線刻絵画の認められる土玉の特殊性が窺われる。

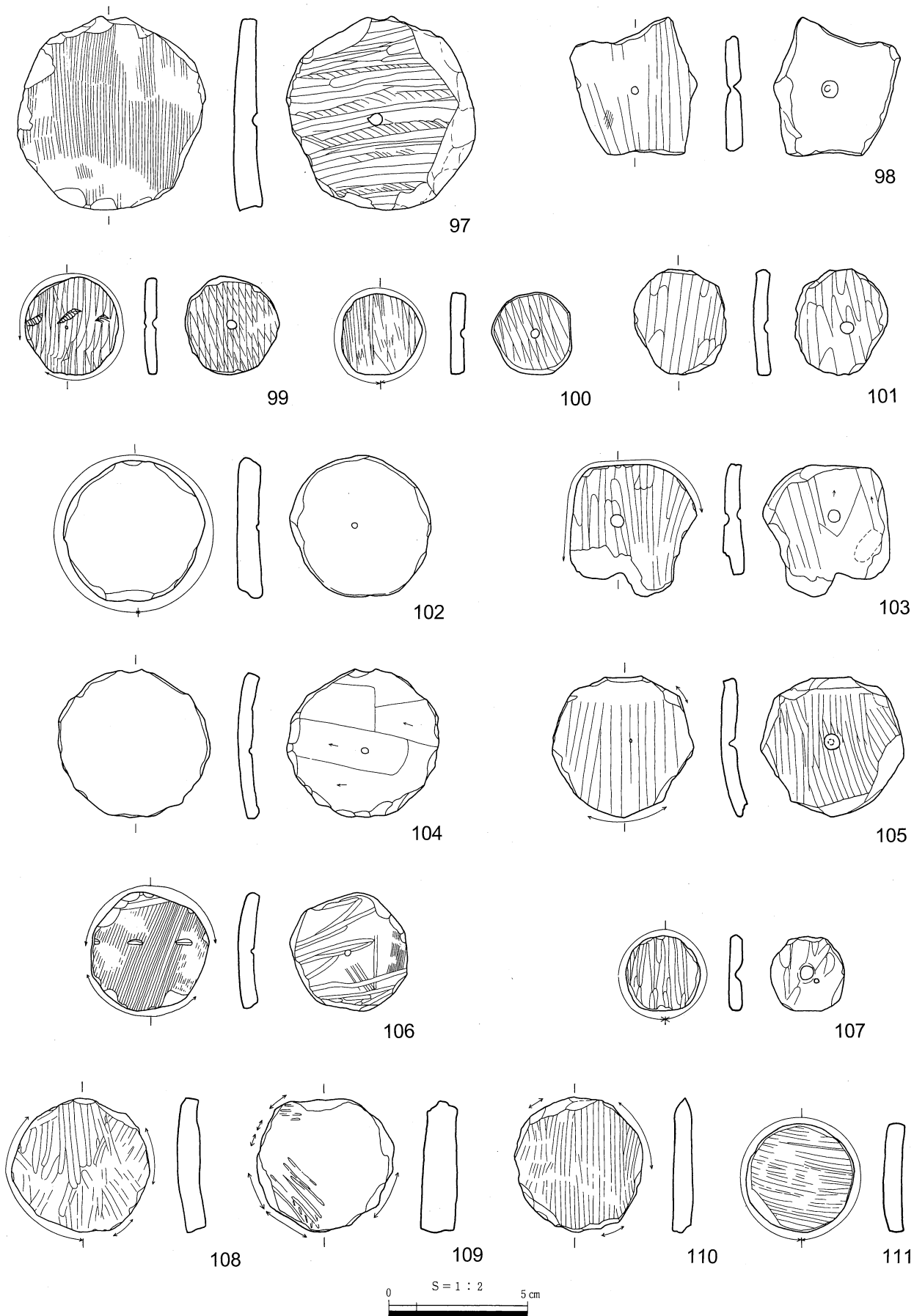
紡錘車 (第135～137図) 『青谷上寺地3』では有孔円盤とされている。ここに報告するものは土器片利用のもので、周縁を打ち欠き、そのうえ高い割合で研磨を施し円形に仕上げたもので、穿孔の状態が貫通しているもの、穿孔途中のもの、未穿孔のものがあるが、素材や整形の共通性から一連のものとして理解しており、紡錘車と呼んでおく⁽⁸⁾。

図示したものは40点である。詳細は一覧表に譲るが概説すると、第135図が穿孔済のもので76～78が前期末～中期前葉 (I期と仮称)、79～95が中期中葉～後葉 (II期)、96が後期～古墳前期初頭 (III期) に属する。穿孔途中のものは97がI期、98～106がII期、107がIII期に、未穿孔のものは108～111がI期、112、113がII期、114、115がIII期にそれぞれ属する。

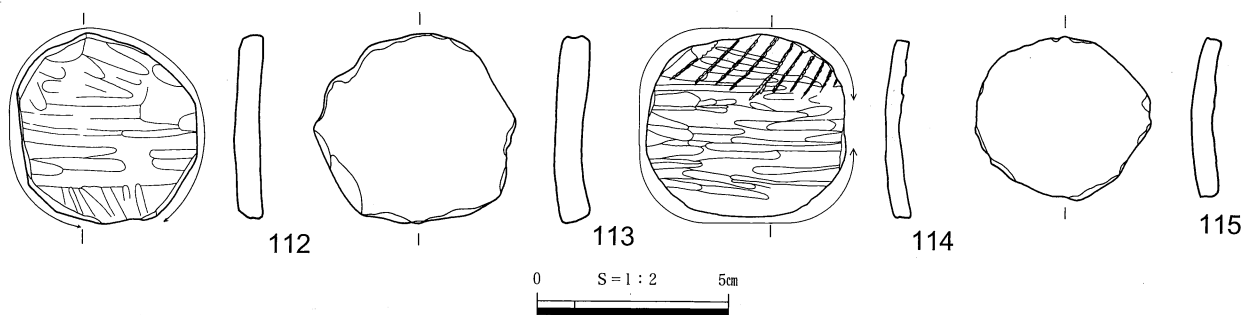
県道調査区では106点の土器片利用の紡錘車が出土しているが、I期13点、II期82点、III期9点、時期不明2点という内訳を示し、II期に偏ったあり方を示す⁽⁹⁾。同様の形態で木製のものも紡錘車として報告しているが、遺跡全体におけるこれらの所属時期の内訳はII期17点、III期17点、不明2点であり、土器片利用のものとは異なる様相を示す。ここに示される問題はII期とIII期における素材の変化ということになる。土器片利用のものがII期に急激に増加するもののIII期において激減している。紡織という行為が行われなくなったとは考えられないことから、III期に改めて材質の変化があったのだろうか。土器片や木以外のものを紡錘車に使用したものは鯨骨製が若干あるのみで、それに代わるものをイメージできない。



第135図 紡錘車 (1)

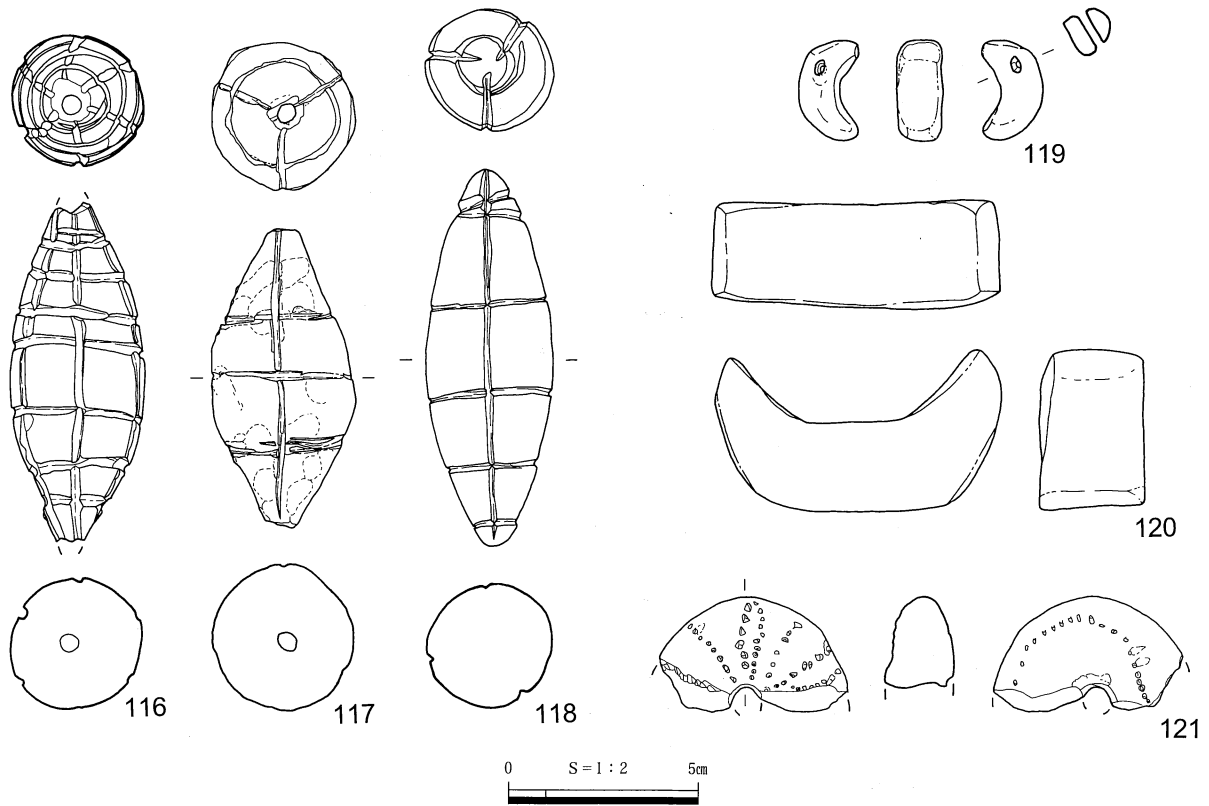


第136図 紡錘車 (2)



第137図 紡錘車(3)

挿図番号	調査区	遺構・層位	素材土器	時期	最大長	最大幅	最大厚	穿孔	周縁研磨	取上番号
76	4区	③層相当	I期体部	I期(弥生前期末~中期前葉)	4.4	4.6	0.6	貫通	有	5234
77	4区	③~⑥層相当	I期体部	I期(弥生前期末~中期前葉)	5.5	5.0	1.0	貫通	無	5768
78	4区	③層相当	II期体部	II期(弥生中期中葉~後葉)	4.6	4.5	0.6	貫通	有	5234
79	4区	③~⑥層相当	II期体部	II期(弥生中期中葉~後葉)	3.6	4.0	1.0	貫通	有	5422
80	4区	③層相当	II期体部	II期(弥生中期中葉~後葉)	3.5	3.6	0.6	貫通	有	4880
81	4区	③~⑥層相当	II期体部	II期(弥生中期中葉~後葉)	4.5	4.5	0.5	貫通	有	5429
82	5区	③層	II期体部	II期(弥生中期中葉~後葉)	6.3	6.0	0.6	貫通	有	13913
83	5区	③層	II期体部	II期(弥生中期中葉~後葉)	4.5	4.3	0.8	貫通	有	13948
84	5区	③層	II期体部	II期(弥生中期中葉~後葉)	4.5	4.3	0.5	貫通	有	14043
85	5区	③層	II期体部	II期(弥生中期中葉~後葉)	3.0	3.5	0.7	貫通	有	15067
86	7区	J層	II期体部	II期(弥生中期中葉~後葉)	6.7	6.5	0.6	貫通	有	36671
87	7区	K層	II期体部	II期(弥生中期中葉~後葉)	3.0	3.1	0.4	貫通	有	41852
88	7区	L~N層	II期体部	II期(弥生中期中葉~後葉)	4.8	4.5	0.6	貫通	有	43675
89	7区	N層	II期体部	II期(弥生中期中葉~後葉)	4.7	4.6	1.0	貫通	有	44060
90	7区	N層	II期体部	II期(弥生中期中葉~後葉)	3.7	4.0	0.8	貫通	有	44042
91	7区	N層	II期体部	II期(弥生中期中葉~後葉)	4.9	5.6	0.9	貫通	有	44958
92	7区	N層	II期体部	II期(弥生中期中葉~後葉)	6.3	6.2	3.5	貫通	有	44971
93	6区	③層	II期体部	II期(弥生中期中葉~後葉)	4.8	4.6	0.8	貫通	有	45935
94	6区	③層	II期体部	II期(弥生中期中葉~後葉)	5.1	5.0	0.7	貫通	有	46505
95	6区	③層	II期体部	II期(弥生中期中葉~後葉)	5.9	5.6	1.5	貫通	有	46602
96	4区	SD11	III期?体部	III期(弥生後期~古墳前期初頭)	4.3	4.2	0.7	貫通	無	3630
97	4区	③~⑥層相当	I期体部	I期(弥生前期末~中期前葉)	7.0	6.6	0.9	内側からの穿孔途中	無	5766
98	4区	③層相当	II期体部	II期(弥生中期中葉~後葉)	5.0	4.3	0.6	両面からの穿孔途中	無	4913
99	5区	②層	II期体部	II期(弥生中期中葉~後葉)	3.5	3.3	0.5	両面からの穿孔途中	有	8313
100	5区	③層	II期体部	II期(弥生中期中葉~後葉)	2.9	2.9	0.5	内側からの穿孔途中	有	16073
101	5区	③層	II期体部	II期(弥生中期中葉~後葉)	3.8	3.3	0.5	内側からの穿孔途中	無	13629
102	4区	②層相当	II期体部	II期(弥生中期中葉~後葉)	5.1	5.1	0.8	内側からの穿孔途中	有	2483
103	5区	③層	II期体部	II期(弥生中期中葉~後葉)	4.7	4.5	0.7	両面からの穿孔途中	有	14046
104	4区	③~⑥層相当	II期体部	II期(弥生中期中葉~後葉)	5.3	5.5	0.5	内側からの穿孔途中	無	5850
105	5区	③層	II期体部	II期(弥生中期中葉~後葉)	5.0	5.1	0.5	内側からの穿孔途中	有	13543
106	5区	③層	II期体部	II期(弥生中期中葉~後葉)	4.3	4.2	0.6	内側からの穿孔途中	有	14593
107	5区	不明	III期?体部	III期(弥生後期~古墳前期初頭)	2.7	2.7	0.5	貫通	有	8090
108	4区	③~⑥層相当	I期体部	I期(弥生前期末~中期前葉)	4.8	4.9	0.8	未穿孔	有	5785
109	4区	⑥層相当	I期体部	I期(弥生前期末~中期前葉)	4.8	4.9	1.2	未穿孔	有	6259
110	6区	SD43	I期体部	I期(弥生前期末~中期前葉)	4.9	4.6	0.7	未穿孔	有	47032
111	6区	⑤層	I期体部	I期(弥生前期末~中期前葉)	3.8	3.8	0.7	未穿孔	有	47903
112	4区	不明	II期体部	II期(弥生中期中葉~後葉)	5.0	4.7	0.6	未穿孔	有	6239
113	5区	SD8	II期体部	II期(弥生中期中葉~後葉)	5.0	5.3	0.8	未穿孔	無	8656
114	4区	不明	III期体部	III期(弥生後期~古墳前期初頭)	4.8	5.3	0.5	未穿孔	有	4567
115	4区	②層相当	III期体部	III期(弥生後期~古墳前期初頭)	4.2	4.6	0.6	未穿孔	無	4720



第138図 その他土製品

挿図番号	調査区	遺構・層位	時期	全長	最大幅	最大厚	孔径	備考	取上番号
116	8区	SD38	弥生後期初頭～後葉	(9.1)	3.5	3.5	0.5	九州型石錘と同形態	30128
117	8区	SD54	弥生後期初頭～後葉	8.0	3.8	3.9	0.5	九州型石錘と同形態	34702
118	6区	①層	弥生中期～奈良	10.1	3.4	3.3	なし	九州型石錘と同形態	45219
119	8区	SD56	弥生後期初頭～後葉	2.7	1.2	1.2	0.2	勾玉形	34550
120	7区	H層	弥生後期	7.6	4.3	2.8	なし	形態不明	37181
121	7区	N層	弥生中期中葉～後葉	(2.9)	(4.8)	1.8	(0.7)	有孔円盤状	44076

その他土製品（第138図） 116～118は土錘である。九州型石錘と同じ形態を示す。118を除いて孔が貫通する。119は土製勾玉で、ややいびつな形ながら孔も貫通させている。120は用途が分からない。くぼんだ面を上としたが、確証があるわけではない。121は有孔円盤で、両面に刺突文による装飾がある。（湯村 功）

註

- (1) 内田律雄編 1989『西川津遺跡発掘調査報告書V（海崎地区3）』鳥根県土木部河川課・鳥根県教育委員会。
- (2) 下記文献において出土地を集計した。
湯村 功編 2000『青谷上寺地遺跡1』（財）鳥取県教育文化財団の表5。
- (3) 神原英朗 1992「分銅形土製品」『吉備の考古学的研究（上）』。
- (4) 北浦弘人編 2001『青谷上寺地遺跡3』（財）鳥取県教育文化財団。
- (5) 田中義昭 1999「弥生時代」『新修米子市史第七巻 資料編考古 原始・古代・中世』の図4.2.21に本遺跡を加えた。
- (6) 註（3）前掲文献。
- (7) 神原英朗編 1977『用木山遺跡』山陽町教育委員会。
- (8) 第3章第6節で検討するように、こうした遺物をすべて紡織具とするには問題がある。以下の文献の指摘による。
山崎頼人 1998「156の弥生紡錘車—甲田南遺跡出土紡錘車の持つ意味—」『大阪文化財研究』第14号（財）大阪府文化財調査研究センター。
- (9) 時期決定は出土層位も重視しているが、素材となった土器の所属時期によっている。

第3節 石器

県道調査区では3,668点の石器が出土した。器種組成としては国道調査区と変わるところはないが、量的にはかなり多い。出土石器の事実記載を中心に述べる。

国道調査区の報告⁽¹⁾（以下、『青谷上寺地3』と略す）以降、新たな所見が加わっているので、最初に掲げておく。

- (1) 伐採石斧の未製品の検討により、大まかではあるが製作工程が把握できたこと（155ページ）
- (2) サヌカイトの搬入形態に2者があり、原石産地の違いを表している可能性があること（206ページ）
- (3) 管玉の製作に係わる資料によって製作工程が復元できたこと（214ページ）

なお、石器石材に関する点は第5章第3節を参照されたい。

工具

伐採石斧（第139～145図） 伐採石斧は79点出土した。

1、2は前期末～中期前葉のものである。1は完存するもので、研磨は刃部周辺に限られ、体部と基部は敲打痕で覆われる。敲打に先立つ剥離面は残されていない。2は体部半ばで欠損する。1とは異なり体部も研磨により仕上げている。

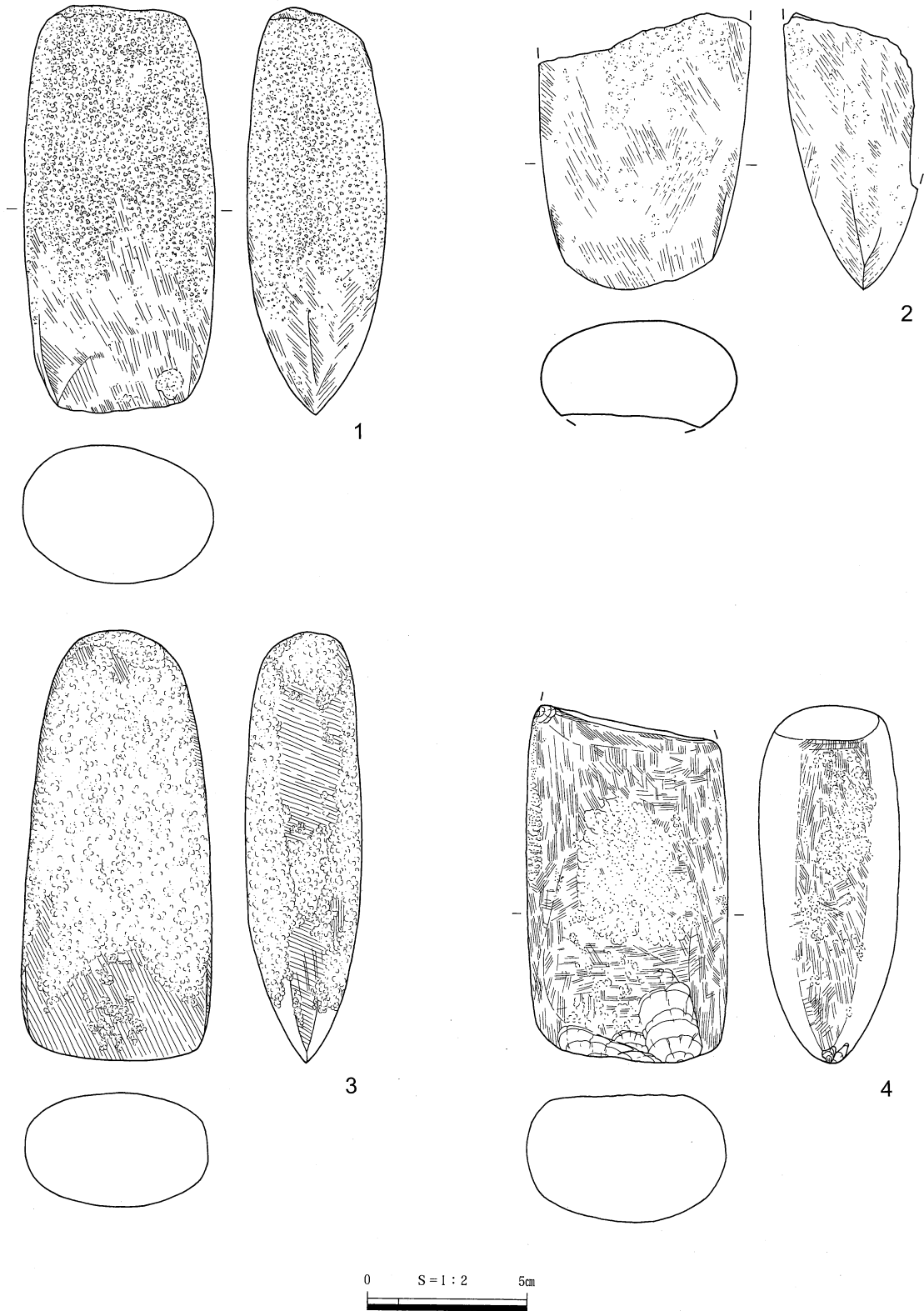
3、4は中期中葉～後葉のものである。3は全形の窺えるもので、扁平な形状を呈する。体部は敲打により整形し、その後研磨により仕上げている。1同様敲打痕を残しており、研磨が施されるのは刃部・基部に両側縁のみである。4は基部を欠失したものである。刃部も大きく欠損する。ともに欠損面の稜線に研磨が及んでおり、刃部・基部とも再生したものと分かる。

第140図は後期～古墳初頭のものである。5は完存する資料である。刃部を見るとかなり潰れている。伐採斧としてここまで使い込むものか、敲石に転用されたものか定かでないが、『青谷上寺地3』で明らかなように伐採石斧を敲石に転用する例は確実にある（報告書第99図35～37）ので、後者の可能性があるが、刃部の潰れ以外に二次的な使用をうかがわせるものはなく、伐採石斧としてここに掲載した。6も刃部の潰れが著しい。8は側縁を形成する稜線がはっきりしており、両側面も平坦面となり、角張った形を呈する。全面研磨により仕上げているが、素材となった角礫の形状を残したものと見える。

9、10はともに出土層位不明で、所属時期もわからない。シャープな刃部を残しており、9は直刃、10は丸刃である。10の形状は8同様角張っており、体部の厚みがある。

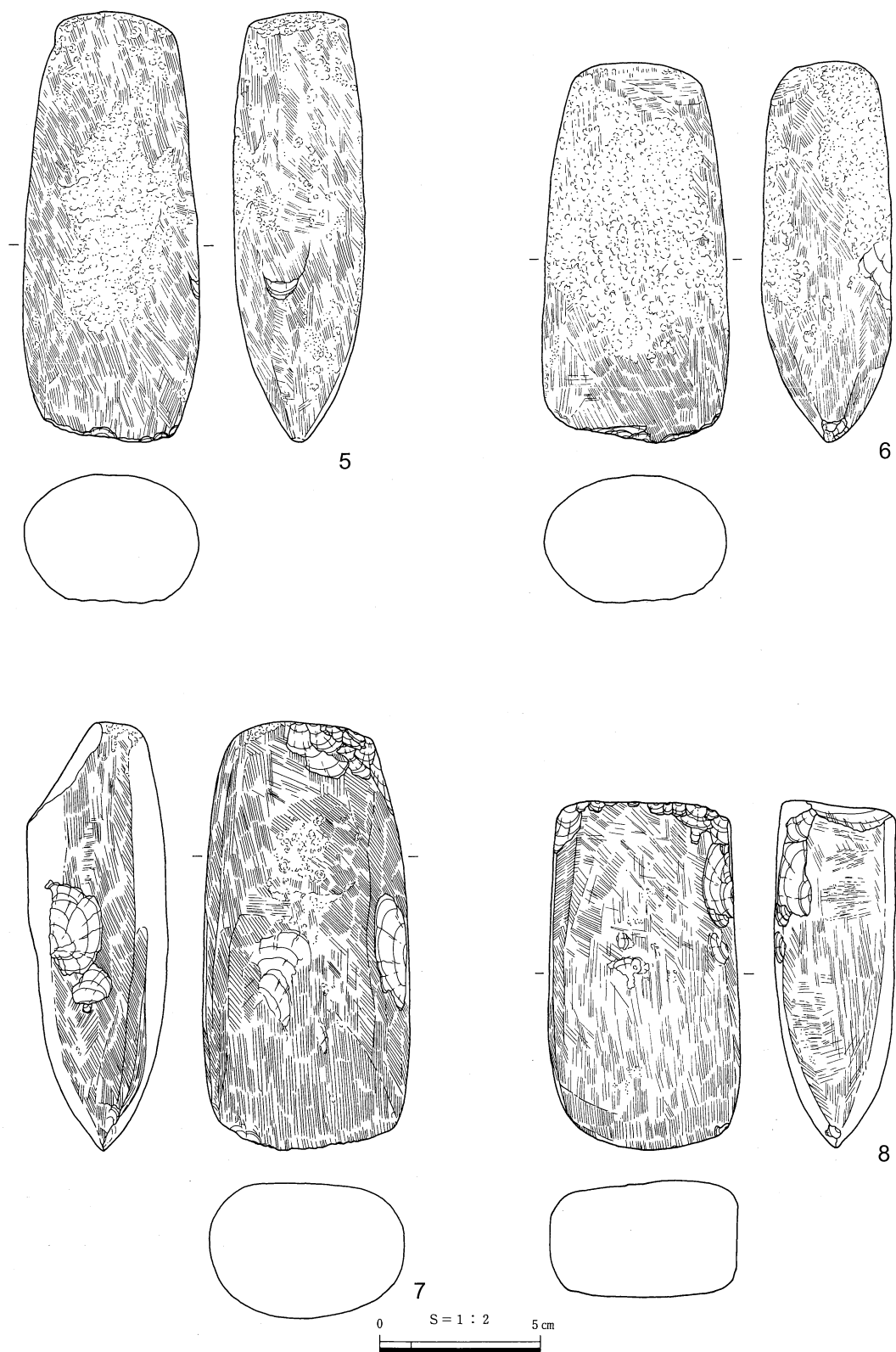
11～15に未製品を示した。11は角礫の稜線上を打ち欠いたものである。基部の作り出しも行っている。刃部側は自然面を残しておらず、もともとはもう少し長さがあったものと思われるが、整形の都合上打ち欠いたのであろう。敲打・研磨は加えられていない。12は整形剥離の後、敲打を加えたものである。基部は素材礫の形状を生かし、刃部は自然面の残る面と剥離面により作り出される。敲打は全面に及ぶも、いまだいびつな形を残している。研磨は認められない。13は整形剥離により全体の形状を整えたもので、稜線の角を取り去るのに敲打のみでなく研磨も併用している。体部には素材の平坦面や曲面をうまく利用していることが分かる。14は研磨による形状調整を始めている。研磨の及ぶ範囲は少なく、整形剥離と敲打、特に後者により形状はほぼ整えられている。13同様素材面をうまく利用している。15は大きく研磨を加えた段階のものである。整形剥離痕及び敲打痕を消し去るよう研磨を施しているが、完全なものではない。刃部の片側に刃を設ける剥離を加えている。基部は敲打により丸く形作るも、素材面を大きく残す。

未製品の状態から製作工程を復元することができる。図示した順序がそうなのであるが、今一度概観しておきたい。まずは素材が準備される。未製品を見る限り素材に供されたのは礫で、剥片素材のものは見当たらない。礫も角礫あるいは亜角礫を使用しているようであり、素材をいかにして入手したかを考えるに際し大いに参考となる。用意された角礫は、まず打ち欠きにより角を取り去る。直方体の素材を円柱状にする第一歩である。次に



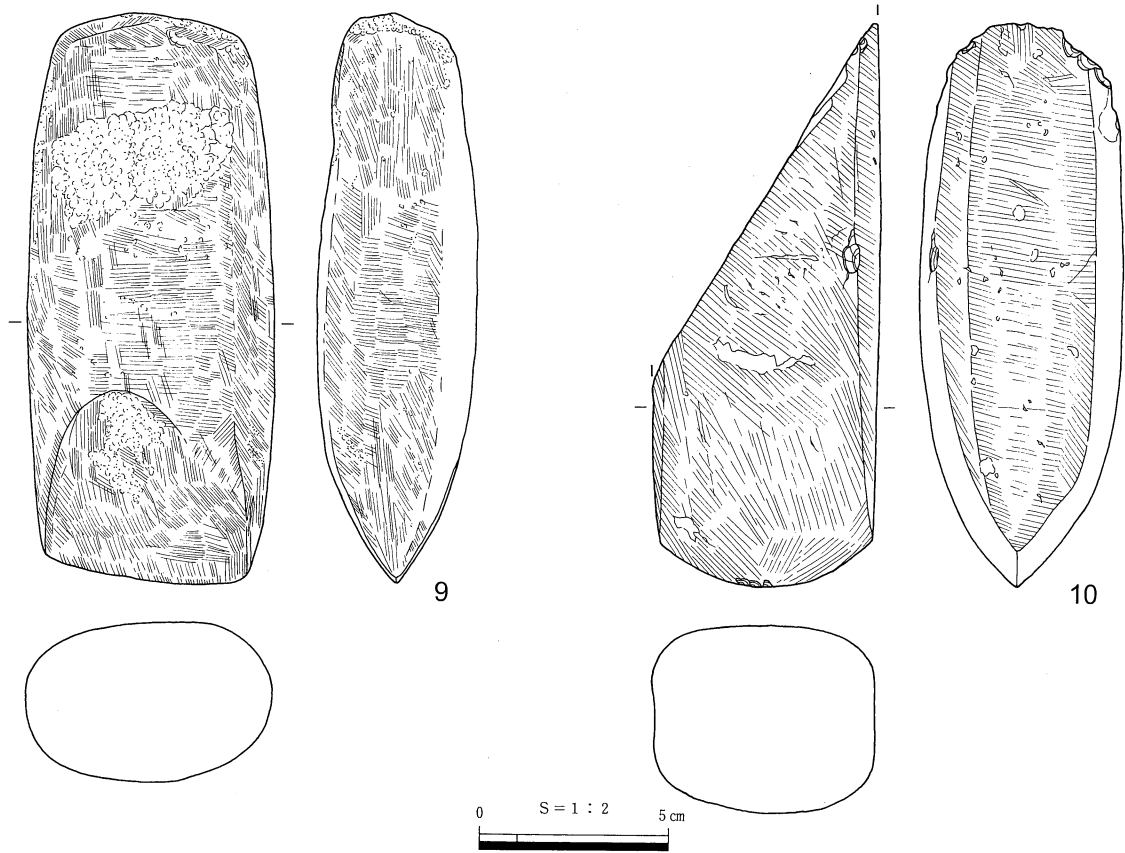
第139図 石器・伐採石斧（1）

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	全長	最大幅	最大厚	石材	取上番号
1	伐採石斧	6区	⑫層	弥生前期末～中期前葉	13.0	6.1	4.4		48134
2	伐採石斧	7区	M層	弥生前期末～中期前葉	(8.9)	6.8	4.2		40991
3	伐採石斧	5区	③層	弥生中期中葉～後葉	13.7	6.0	3.7	閃緑岩	14402
4	伐採石斧	4区	③層相当	弥生中期中葉～後葉	(11.4)	6.3	4.1	閃緑岩	5010



第140図 石器・伐採石斧（2）

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	全長	最大幅	最大厚	石材	取上番号
5	伐採石斧	5区	②層	弥生後期初頭～古墳初頭	13.4	5.5	4.1	斑レイ岩	9398
6	伐採石斧	5区	②層	弥生後期初頭～古墳初頭	11.8	5.8	4.1	斑レイ岩	9399
7	伐採石斧	4区	②層相当	弥生後期初頭～古墳初頭	14.4	6.5	4.3		3608
8	伐採石斧	5区	②層	弥生後期初頭～古墳初頭	10.9	6.0	3.8	黑色粘板岩	13514



第141図 石器・伐採石斧（3）

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	全長	最大幅	最大厚	石材	取上番号
9	伐採石斧	4区	不明	不明	15.2	6.5	4.2	閃緑岩	4051
10	伐採石斧	4区	不明	不明	(14.9)	6.0	5.4	含球顆安山岩	6203

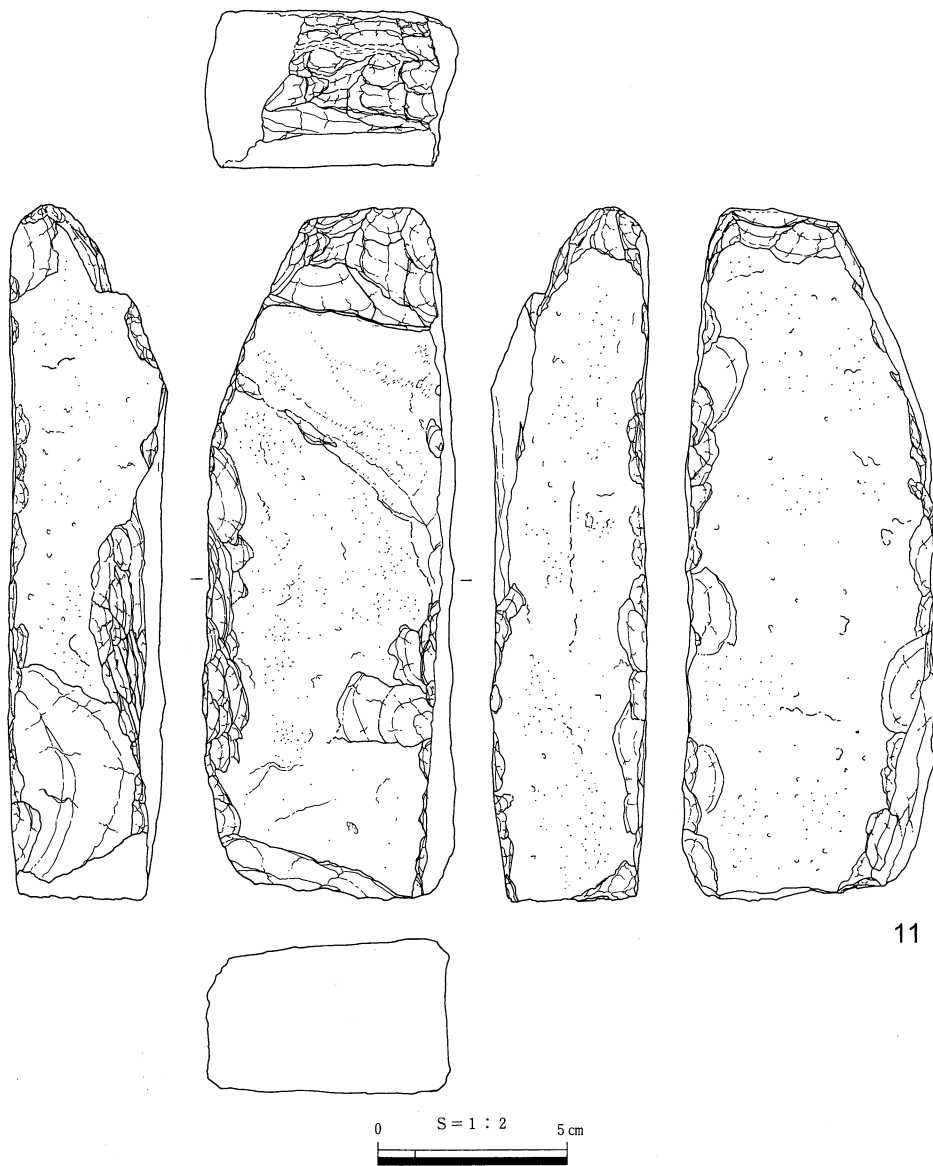
整形剥離によって側縁・刃部・基部を作り出す。このとき素材面をうまく取り込み整形の省略化を図る場合が多い。さらに敲打を加えることにより角を細かくつぶしていく。13に見たように研磨が併用されることがあったようである。こうして整えられた素材は全面研磨によって仕上げられるとともに、鋭利な刃部を作り出す。

未製品から見た伐採石斧の製作工程は以上のように捉えられる。流れそのものは一般的な伐採石斧の製作工程と変わるところはないが、整形作業のうち敲打の占める割合が高い点が注意される⁽²⁾。12は全面に敲打が及んでいるも素材のいびつな形状を残しており、整形剥離によりきちんと整えられていないことが分かるし、13、14は多くを研磨で消されてはいるが、敲打痕を全面に見ることができる。さらに顕著に物語るものが成品である1、3である。形状は丁寧に整えられているものの器体には敲打痕を残したままであり、このような例は極端なものであるかもしれないが、整形の前半段階のみでなく後半においても敲打の担う役割の大きさを感じる。その理由は定かでないが、13を見る限り剥離がコントロールしにくいという石材の性質によるものとは思えず、技術上の問題があったのではないかと想像される。剥離を加えるよりも敲打により整形したほうが破損のリスクが回避できたのであろうか。

次に伐採石斧の規格性について考えてみたい。長さについては刃部再生などにより減じることが予想されるため、幅と重量に付いて検討を加える。県道調査区出土の当該石器79点のうち最大幅計測可能なものは45点認められた。内訳の概略は6.0cmと6.1cmのものが5点ずつ、6.5cmのものが10点のほかは、4.2cmから7.5cmまでの間に各値1、2点となり、分布のうへでは6.0cm～6.5cmにピークがあるものの、幅の違いがグルーピングできるわけではない。完存または若干欠損するのみのもので重量が得られたものは15点ある。138.5gから868.0gまであり、最大幅と合わせ図化したものを第145図右に掲げた。一見して4グループが認識可能であるが、幅が狭小で重量

138.5g、174.3gの2点は扁平な礫に刃をつけただけのものである。また単独で分布する重量310.3gのものは蛤刃石斧ではあるが、器体が大きく欠損した後磨きなおしており、本来の法量を示していない。したがってこれらを除いた2グループが蛤刃石斧の大小を表しているものと思われる。小型のグループは幅5.5～6.5cm、重量465.6～605.9gに、大型のグループは幅6.1～7.5cm、重量732.3～868.0gに属する。この数値を見るかぎりでは、大小の別は大きさにあるというよりも重量にあるといえそうである。分析対象の絶対数が少ないので、この結果がどれだけ普遍的なものか定かでないうえ、時期ごとに違いがあるのか把握できていないが、とりあえず大小の2群が認識できたことで、今後の検証基準が提示できたものと思う。

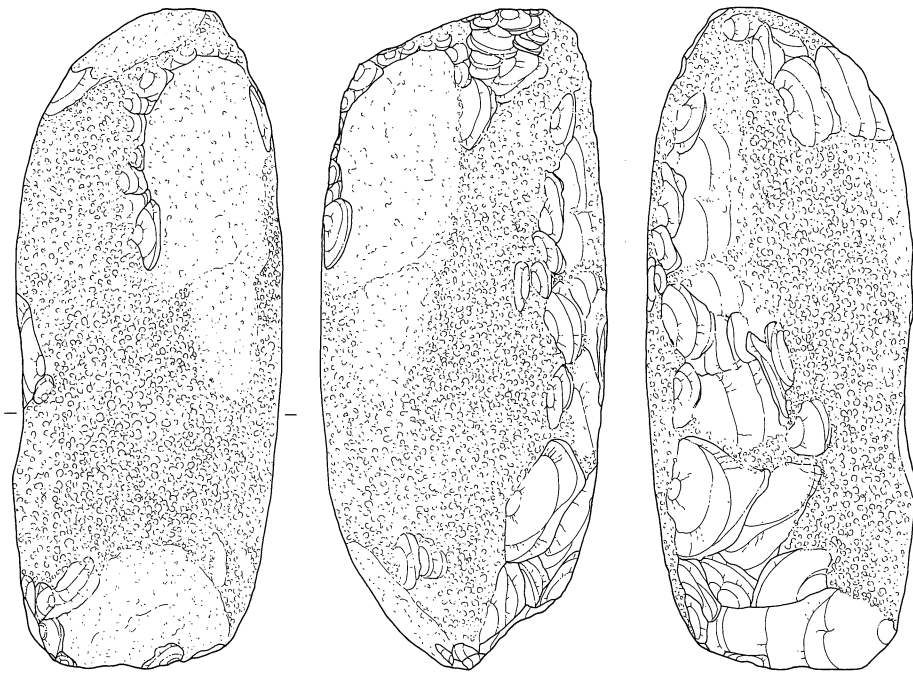
第145図16に示したものは扁平な礫を素材としたものだが、両刃であることから伐採斧とした。上に述べた狭小な幅で軽量なものとともに、また蛤刃石斧の大小も加え、伐採石斧の機能差が問題となろう。



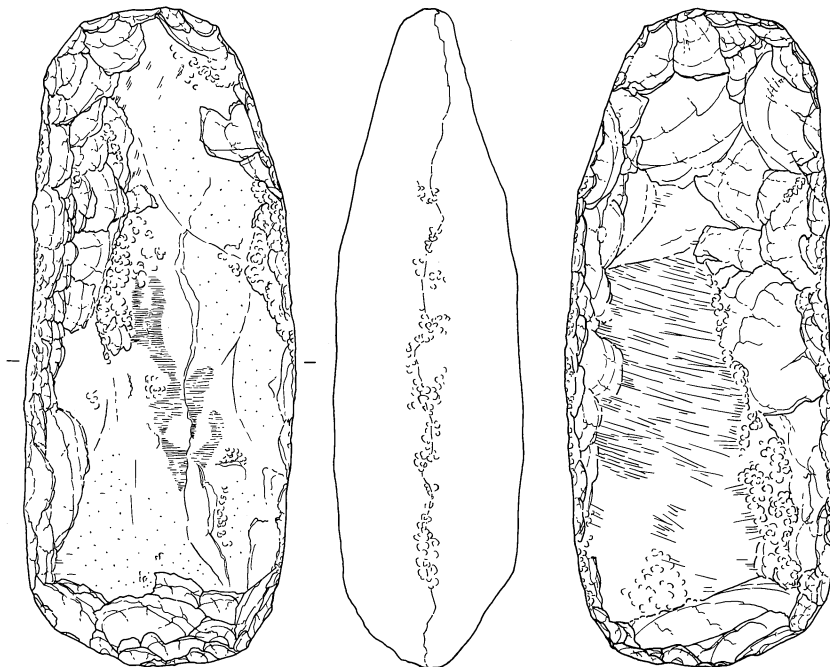
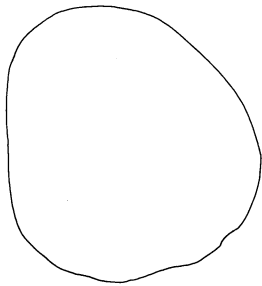
11

第142図 石器・伐採石斧（4）

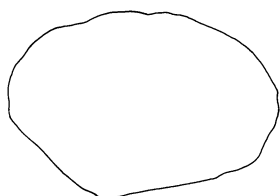
挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	全長	最大幅	最大厚	石材	取上番号
11	伐採石斧未製品	7区	不明	不明	18.3	6.7	4.2	安山岩溶結凝灰岩	35874
12	伐採石斧未製品	5区	SK54	弥生中期中葉～後葉	17.7	7.1	7.5		15571
13	伐採石斧未製品	6区	②～③層	弥生中期中葉～古墳初頭	17.5	7.1	5.1	酸性安山岩溶岩	46089
14	伐採石斧未製品	7区	M層	弥生前期末～中期前葉	17.4	5.9	3.7	酸性安山岩溶岩	40882
15	伐採石斧未製品	5区	SK65	弥生中期中葉～後葉	17.6	6.6	5.0		15809
16	伐採石斧	6区	①層	弥生中期～奈良	15.7	5.6	1.8		45046



12

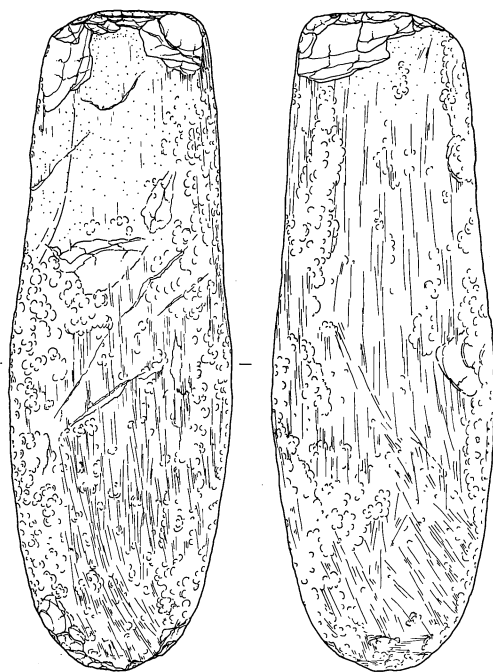


13

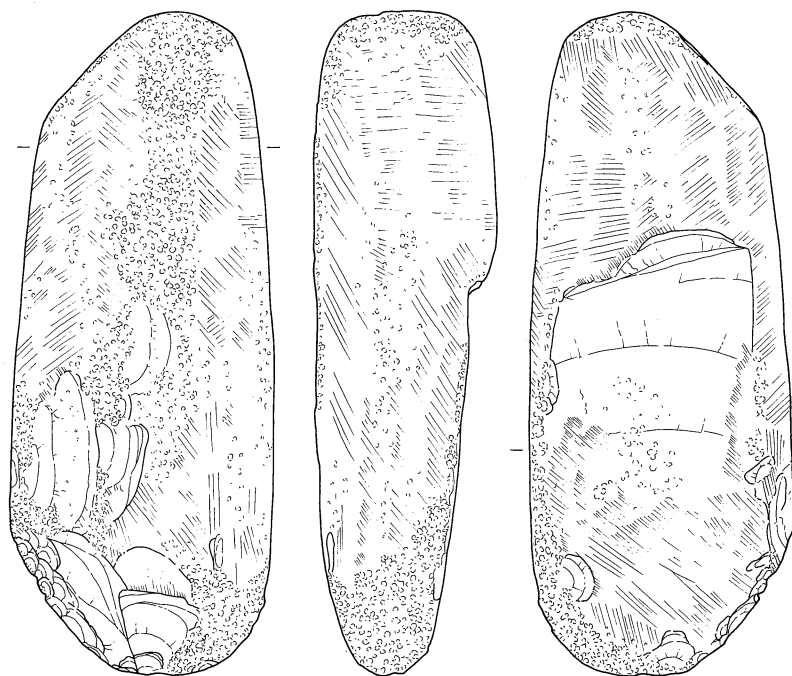
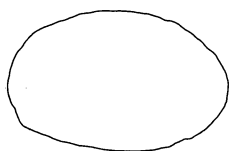


0 S=1:2 5cm

第143図 石器・伐採石斧 (5)



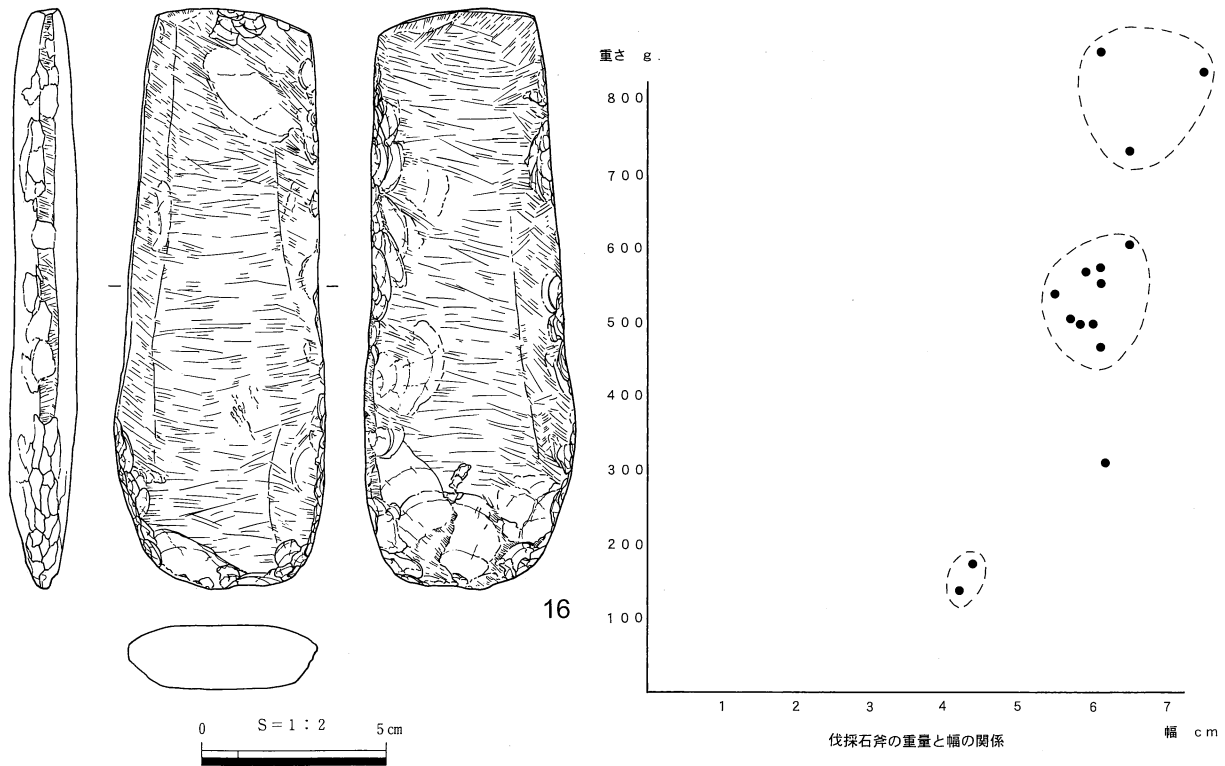
14



15

0 S=1:2 5cm

第144圖 石器・伐採石斧（6）



第145図 石器・伐採石斧（7）、伐採石斧の大小

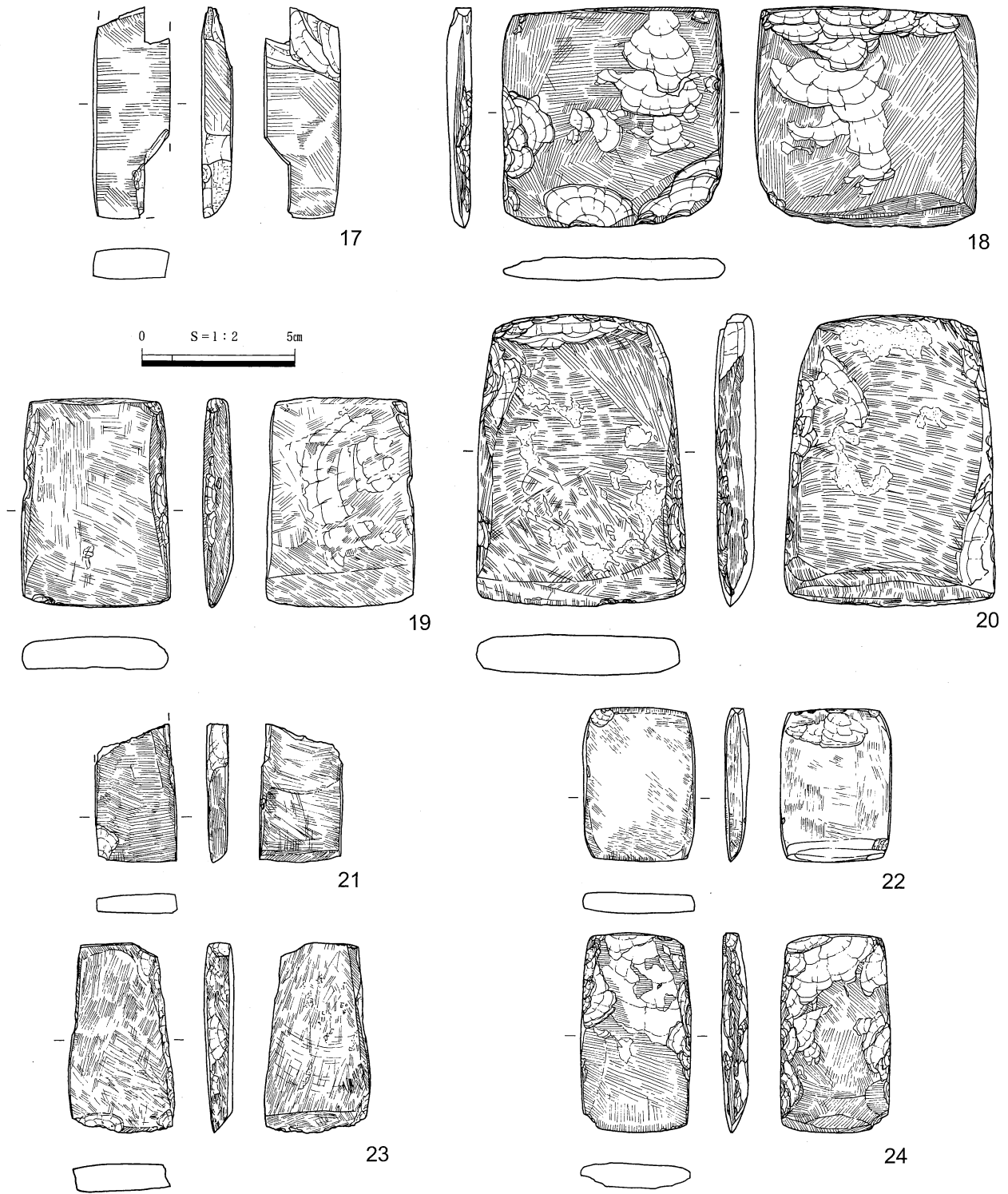
扁平片刃石斧（第146～150図） 時期ごとに分けたいえ、下條信行の区分に従い⁽³⁾、幅4.5cmを境に小型と大型に分類する。表裏については『青谷上寺地3』に準じ刃部の研ぎ出しを行った面を裏面とした。

17～20は前期末～中期前葉のものである。17はシャープな作りで、刃部の研ぎ出しは2段階となっている。裏面には斧台と接することにより生じた光沢が認められ、斧身の刃部側2.0cmが斧台より前に出ていることが分かる。18は寸詰まりな平面形を呈する。刃部の再生を繰り返した結果であろう。裏面右側縁も片刃状の研ぎ出しが見られ、刃部再生が進み器体が短小化する過程で刃部の位置が転移する場合があったのかもしれない。19の刃部は尖っていない。0.15cmほどの面ができています。この面は使用によって生じたものとは思いたく、二次的に研磨されたと考えられる。18で想定したような刃部転移とは異なり、どのような意図のもと行われたのか定かではない。考えられることとして、これが未製品であった場合、刃部を作り出す際に直刃を目的として刃先をそろえたものか、あるいは再生品であった場合、破損した刃部を再生する際、欠損部をすべて除去する目的で研磨を施したものであろうか。20は刃部表面も研ぎ出しており、両刃風である。17のみが小型品。

21～26は中期中葉～後葉に属する。21、23の裏面には17で見たように斧台と接していた部分に光沢をもつ。斧身として斧台より前に出ている範囲は21で2.2cm、23では1.1cmを測る。後者では刃の部分のみが出ていることになり、深く削りこむことは到底無理であったろう。ただ使用の当初からそうだったのか、刃部再生により器体が短小化したためか、いずれであるのかは決しがたい。23の全長は6.2cmで、これくらいの長さの扁平片刃石斧は刃先部分を除いて斧台に載っていたものがあるというにとどめておきたい。25、26が大型品となる。25は欠失する部分が多いが、残存部分を見ると各面とも非常にシャープな作りとすることができる。

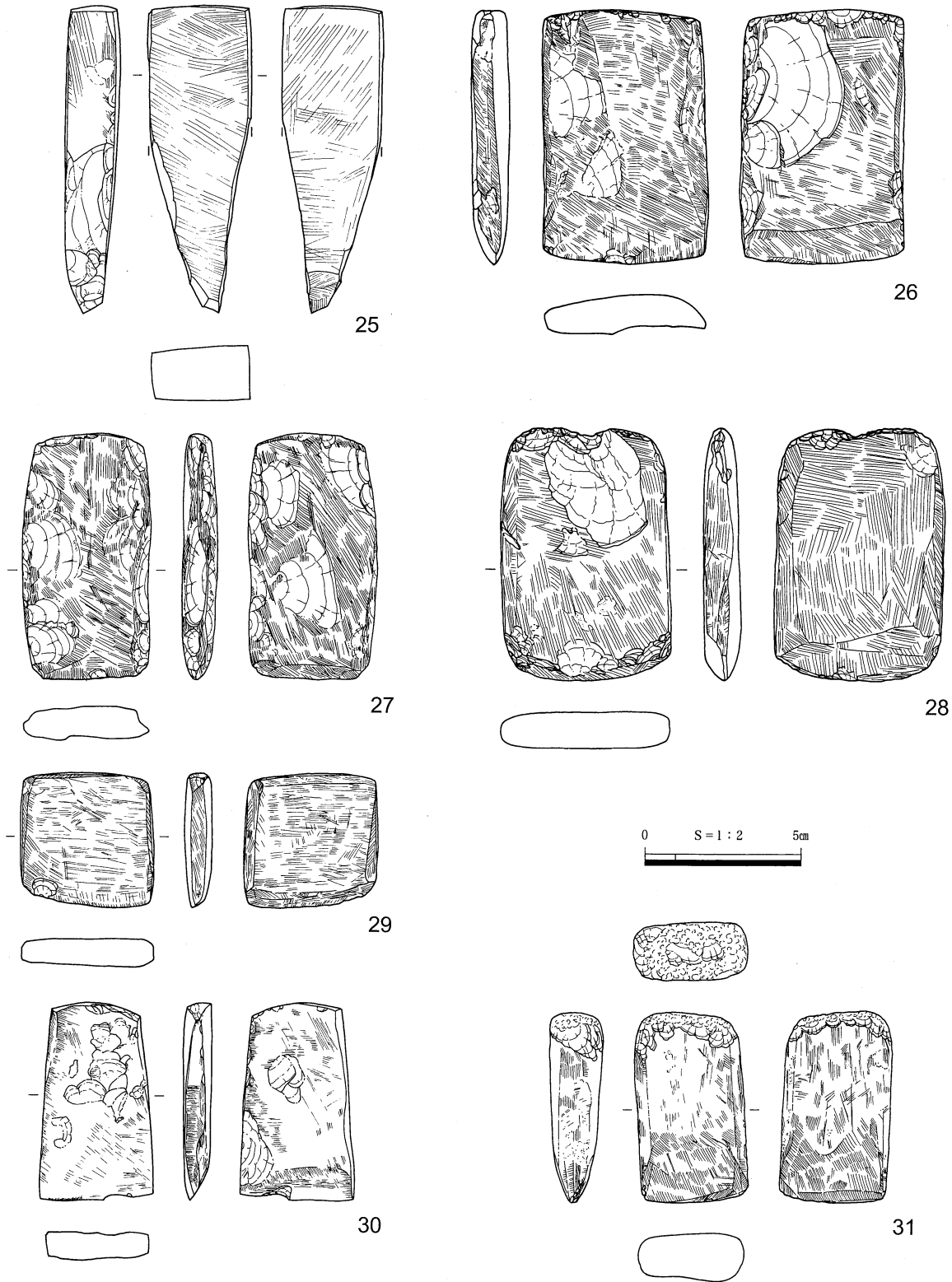
29～35が後期～古墳前期初頭の遺物包含層より出土したものである。31までが小型品である。31は両刃風の作りで、各面を形成する稜線もあまい。素材に大きく手を加えず刃部を設けただけのようなものである。19と同じく刃部を平坦に面取りしている。32～34は大型品でいずれも刃部幅の広い撥形を呈する。35は残存長17.5cmと長大で、刃部を欠失するが国道調査区出土品（『青谷上寺地3』第95図20）に類似する。

27、28は中期中葉～古墳前期初頭まで所属時期が考えられる。28は両刃となる。36～39は出土層位不明か短期的に混在が認められる層より出土したもので、所属時期が確定できない。39は伐採石斧と認識していたが、片



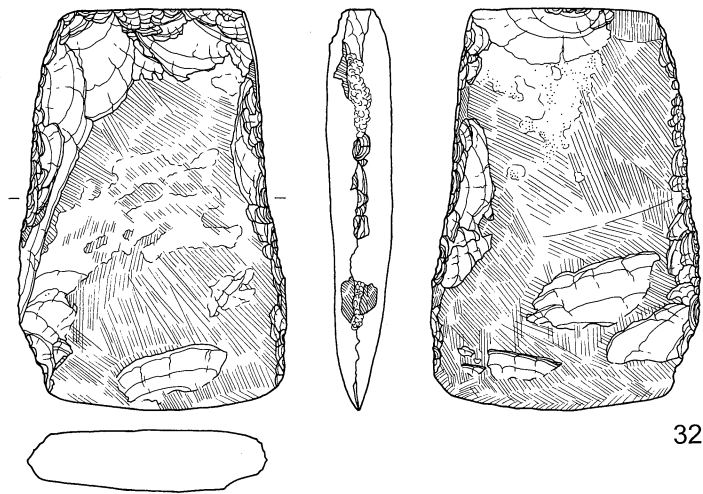
第146図 石器・扁平片刃石斧(1)

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	全長	最大幅	最大厚	石材	取上番号
17	扁平片刃石斧	5区	⑤層	弥生前期末～中期前葉	(7.0)	2.5	0.9	石灰質ラミナの入る粘板岩	16370
18	扁平片刃石斧	5区	⑤層	弥生前期末～中期前葉	7.3	7.3	0.8	緑色片岩	14770
19	扁平片刃石斧	5区	貝塚	弥生前期末～中期前葉	7.0	4.9	1.0	緑色片岩	13063
20	扁平片刃石斧	5区	③層～貝塚	弥生前期末～中期後葉	9.6	6.9	1.3	泥質片岩	13110
21	扁平片刃石斧	5区	③層	弥生中期中葉～後葉	(4.6)	2.7	0.7	粘板岩	13684
22	扁平片刃石斧	4区	③層相当	弥生中期中葉～後葉	5.1	3.7	0.7		4931
23	扁平片刃石斧	5区	③層	弥生中期中葉～後葉	6.2	3.5	1.0	硬質粘板岩	12913
24	扁平片刃石斧	5区	SK59	弥生中期中葉～後葉	6.5	3.6	0.8	硬質粘板岩	15725

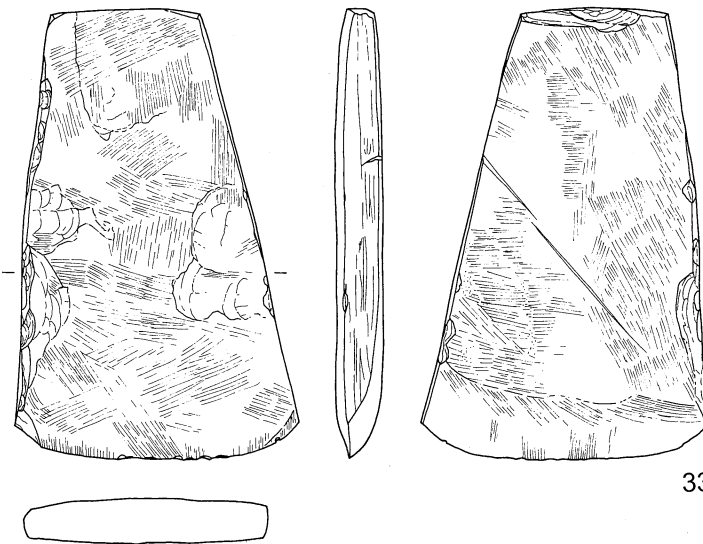


第147図 石器・扁平片刃石斧（2）

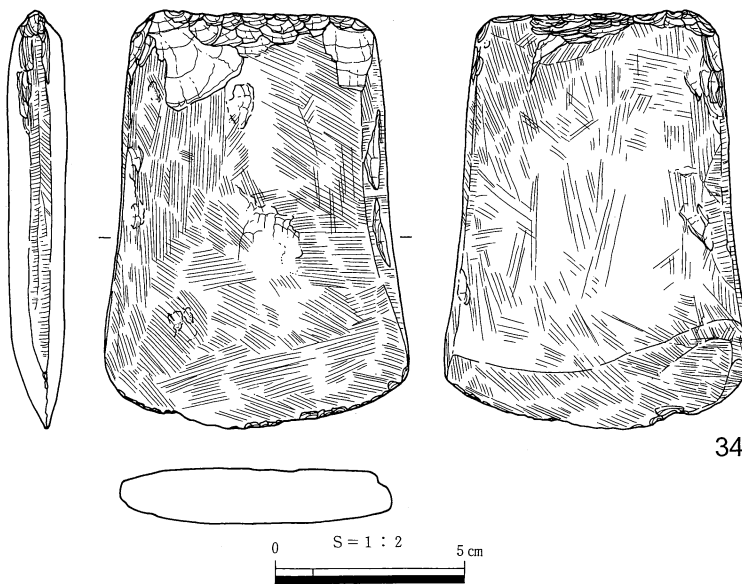
挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	全長	最大幅	最大厚	石材	取上番号
25	扁平片刃石斧	6区	③層	弥生中期中葉～後葉	10.0	(3.3)	1.5		46523
26	扁平片刃石斧	4区	③層相当	弥生中期中葉～後葉	8.2	5.3	1.2	泥質片岩	4874
27	扁平片刃石斧	5区	②～③層	弥生中期中葉～古墳初頭	8.0	4.2	1.1	泥質片岩	14333
28	扁平片刃石斧	5区	②～③層	弥生中期中葉～古墳初頭	8.2	5.5	1.3	砂質片岩	12403
29	扁平片刃石斧	5区	②層	弥生後期初頭～古墳初頭	4.4	4.3	0.9	点紋粘板岩	13081
30	扁平片刃石斧	4区	②層相当	弥生後期初頭～古墳初頭	6.4	3.7	0.9	斑レイ岩	4686
31	扁平片刃石斧	5区	②層	弥生後期初頭～古墳初頭	6.3	3.5	1.9	アブライト	13382



32



33



34

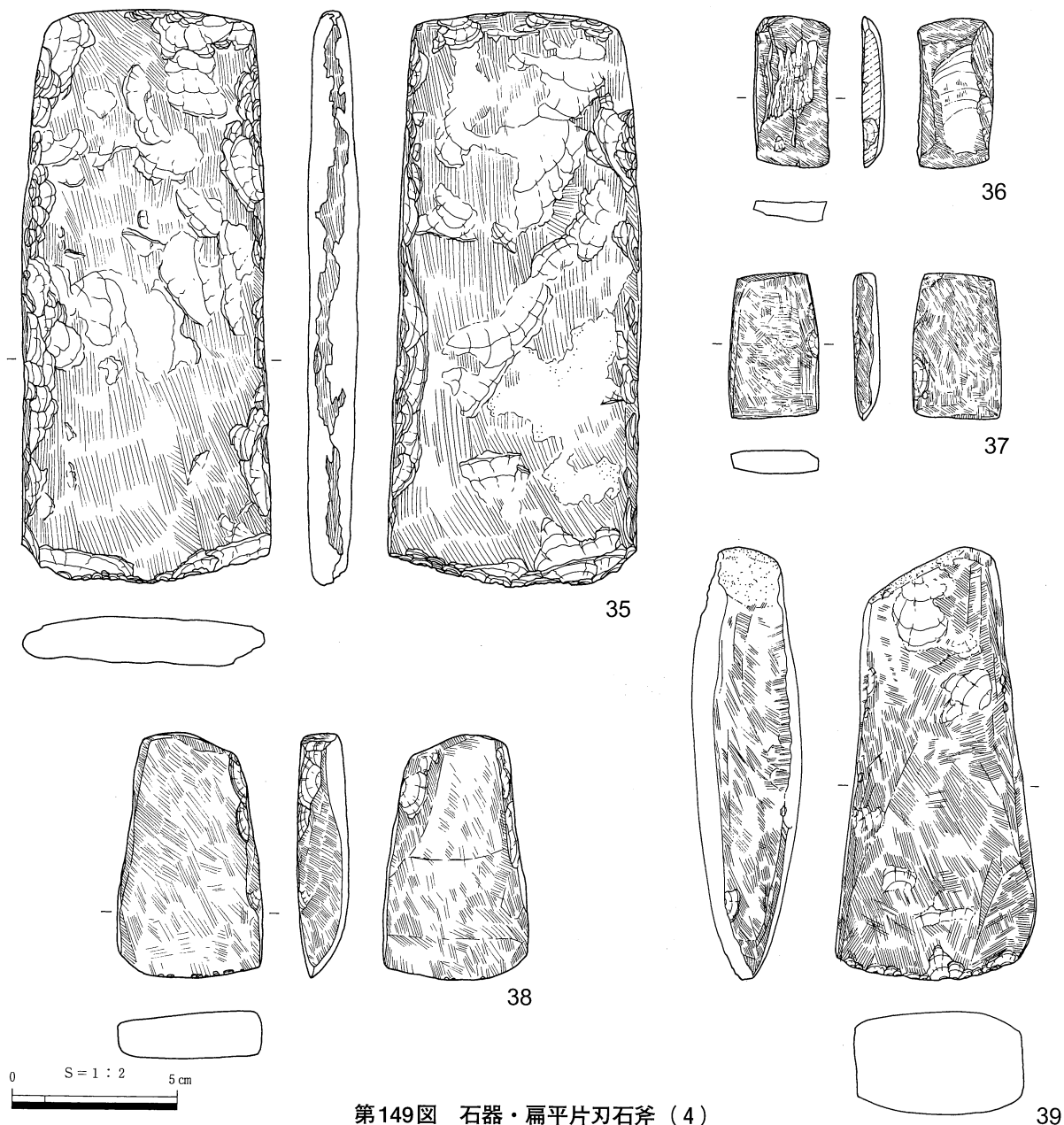
第148図 石器・扁平片刃石斧(3)

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	全長	最大幅	最大厚	石材	取上番号
32	扁平片刃石斧	5区	②層	弥生後期初頭～古墳初頭	10.6	7.1	1.7	板状安山岩	9184
33	扁平片刃石斧	5区	②層	弥生後期初頭～古墳初頭	12.0	7.5	1.2	綠色片岩	8249
34	扁平片刃石斧	5区	②層相当	弥生後期初頭～古墳初頭	11.0	8.0	1.5	綠色片岩	8873

刃であることを重視して加工斧とする。

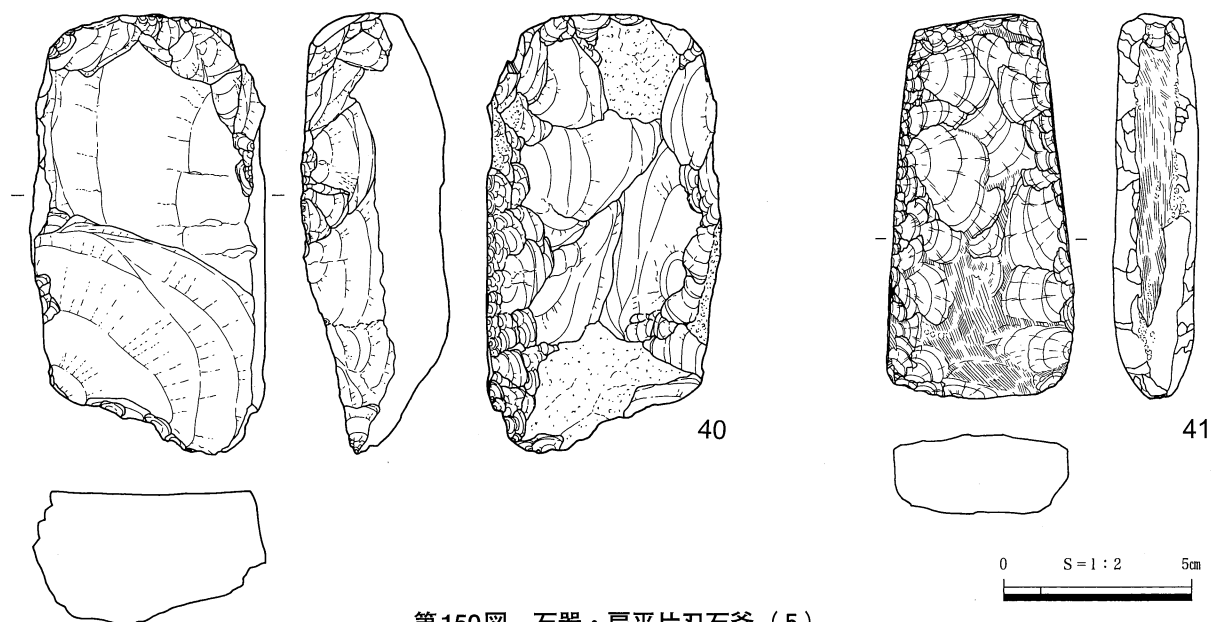
40、41は未製品である。いずれも器体の幅に対する厚さや想定される刃部のあり方などから扁平片刃石斧と思われる。40は平坦な分割面を表面に、自然面のカーブを刃部に利用することにより整形の簡略化を図っている。41も両側面と基部に自然面を残すことから、素材の形状を生かしていることが分かる。部分的に敲打痕が見られるが、調整方法としては主体ではない。伐採石斧と違い器体に曲面を作り出さないからであろう。

県道調査区出土の扁平片刃石斧も国道分と同様に、整形のための剥離面を顕著に残すものがほとんどである。そのようななかで非常にシャープに仕上げられた17は目を引く。使用石材も近傍では認められないものであり、製品の搬入を示すものかもしれない。



第149図 石器・扁平片刃石斧（4）

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	全長	最大幅	最大厚	石材	取上番号
35	扁平片刃石斧	5区	②層	弥生後期初頭～古墳初頭	(17.5)	7.5	1.7	緑色片岩	11111
36	扁平片刃石斧	5区	不明	不明	4.5	2.2	0.7	粘板岩	9647
37	扁平片刃石斧	5区	不明	不明	4.4	2.7	0.7	安山岩溶岩	9618
38	扁平片刃石斧	4区	①層	弥生中期～奈良	7.4	4.4	1.5	縞状花崗岩	939
39	扁平片刃石斧	5区	①層	弥生中期～奈良	13.1	6.0	3.3		11376



第150図 石器・扁平片刃石斧（5）

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	全長	最大幅	最大厚	石材	取上番号
40	扁平片刃石斧未製品	5区	②層	弥生後期初頭～古墳初頭	11.9	6.4	3.6		8471
41	扁平片刃石斧未製品	4区	③層相当	弥生中期中葉～後葉	10.4	5.1	2.1		3254

柱状片刃石斧（第151、152図） 未製品を含め8点図示した。

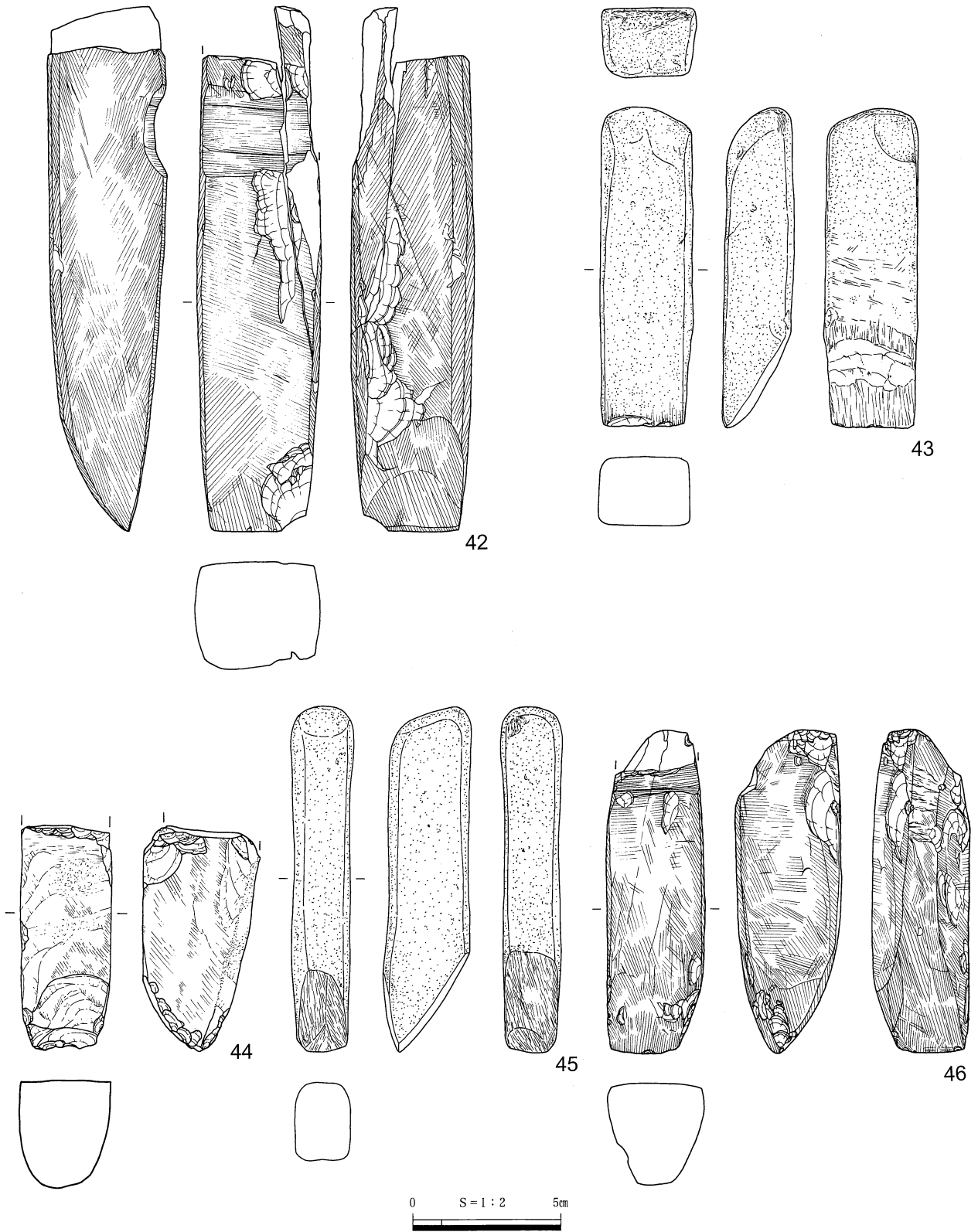
42、43は前期末～中期前葉のものである。42は割合しっかりとした作りで、大きく重量感もある。表面に幅広い抉りを認める。43は角柱状の礫の一端に刃を設けたもので、全体に調整加工を施し仕上げるといったものではない。下条のいう「小形片刃石斧N形」⁽⁴⁾（以下N形と省略）にあたるものと思われる。45も同様の石斧で、その形態から柱状片刃石斧に含めておく。43の基部には潰れが見られ、おそらく斧台との接触で生じたものであろう。

44、45は中期中葉に属する。44は器体のおよそ半分を欠失する。抉りが見られるが、裏面に設けられている。本資料の横断面形は台形となるが、通常このような横断面形をもつ場合は表面を上にしたとき46のように逆台形を呈するのが普通である。刃部は複数の剥離面で構成され、二次的な研磨を受けており稜線が磨耗している。石斧製作の当初からこのような刃部であったとは考えにくく、破損により刃部を再生しようとしたものであろう。その再生も破損面の形状に従って行われたため、再生前と再生後では表裏の逆転が起こったのである。

46～48は後期～古墳前期初頭のものである。46には抉りが見られ、47には見られない。47、48ともに表裏の判断がつきにくい、刃部の角度や鑄を意識しているか否かで判断した。

下條によれば山陰地方の当該石斧の展開は氏の分類でいうC型式とD型式が前期末～中期前半に存在し、中期後半以降の様相は不明とされた⁽⁵⁾。県道調査区出土品で見ると、前期末～中期前葉にC型式（42）とN形があり、中期中葉にD型式（44）とN形が確認できる。N形も前期から見られるようなので⁽⁶⁾、矛盾はない。後期以降にはD型式（46）とE型式（47）があり、48も抉りの有無は確認できないが横断面形からE型式と思われる。中期後葉段階の様子は不明だが、国道調査区SD27出土の資料がE型式ではないかと考えられるので⁽⁷⁾、中期後葉以降はD型式とE型式が展開したものと思われる。柱状片刃石斧の終焉は「弛緩後退形をもつ地域ほど遅くまで残る」⁽⁸⁾とされているので、本遺跡でのあり方も符合する。

49は未製品である。角柱状の礫に敲打と研磨を加え整形しており、表面基部側には抉りを設けるための凹みを作り出している。成品でも47のように敲打痕を顕著に残すものがあり、敲打整形は一定の割合で用いられていたようである。同じ加工斧でも扁平片刃石斧の製作には敲打整形が基本的に行われなかったことと対照的であり、柱状片刃石斧が伐採石斧同様厚みをもつことによるものであろう。



第151図 石器・柱状片刃石斧（1）

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	全長	最大幅	最大厚	石材	取上番号
42	柱状片刃石斧	5区	⑤層	弥生前期末～中期前葉	(15.9)	4.3	4.1	輝緑凝灰岩	16580
43	柱状片刃石斧	7区	M層	弥生前期末～中期前葉	11.0	3.2	2.4	アブライト	40850
44	柱状片刃石斧	7区	N層	弥生中期中葉	(7.7)	3.1	3.6		44987
45	柱状片刃石斧	7区	N層	弥生中期中葉	11.9	2.0	3.0	アブライト	44818
46	柱状片刃石斧	5区	②層	弥生後期初頭～古墳初頭	(11.1)	3.3	3.6		8926



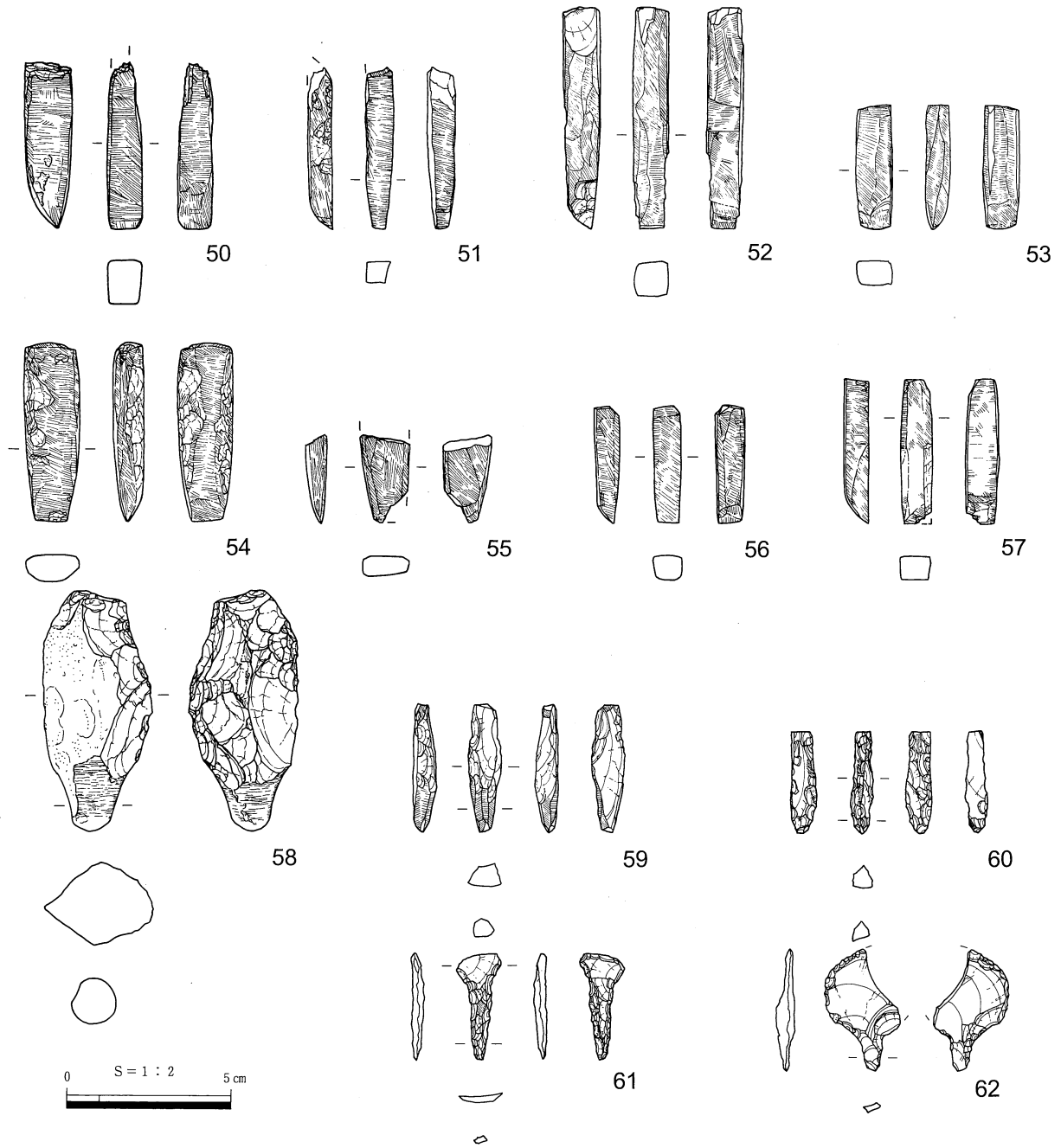
第152図 石器・柱状片刃石斧（2）

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	全長	最大幅	最大厚	石材	取上番号
47	柱状片刃石斧	4区	②層相当	弥生後期初頭～古墳初頭	12.7	4.2	4.7	黒色粘板岩	4515
48	柱状片刃石斧	5区	②層	弥生後期初頭～古墳初頭	(7.2)	3.2	3.6	硬砂岩	13517
49	柱状片刃石斧未製品	7区	P977	弥生前期末～中期前葉	18.6	3.7	4.7		49272

鑿状片刃石斧（第153図） 石斧と呼んではいるが、これに見合う柄がないため、具体的な用途は分からない。52のように抉りをもつものがあることから膝柄に緊縛されたのだろうが、抉りの位置は表裏の関係からすると逆である。装着痕をもつ例としてよく知られる神奈川県大塚遺跡例も、この種の石器である⁽⁹⁾。表面の基部側に緊縛痕が残っており、刃部を設けた側（裏面）を斧台に接して使用したことが分かる。さらに鑿状片刃石斧は大きさを無視すれば形態的に柱状片刃石斧と同一である。今のところは具体的な使用方法等は不明ながら、加工斧と理解しここで述べておく。

50～53は前期末～中期前葉のものである。全体として稜線はシャープであるし、刃部も表裏がはっきりしており、50を除けば鏹も明瞭である。

54、55は後期～古墳前期初頭の遺物包含層より出土した。54は平面形も横断面形も丸みを帯び、整形剥離痕を消しきらずに残す。刃部も片刃ではあるが前段階のものに比べつくりは甘い。55も作りはシャープさをもってい



第153図 石器・鑿狀片刃石斧、石錐

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	全長	最大幅	最大厚	石材	取上番号
50	鑿狀片刃石斧	5区	⑤層	弥生前期末～中期前葉	(5.1)	1.0	1.4	粘板岩	16297
51	鑿狀片刃石斧	5区	貝塚	弥生前期末～中期前葉	(4.9)	(0.8)	0.8	粘板岩	15194
52	鑿狀片刃石斧	6区	⑥層	弥生前期末～中期前葉	6.8	1.1	1.1		47142
53	鑿狀片刃石斧	6区	⑤層	弥生前期末～中期前葉	3.8	1.1	0.7		47812
54	鑿狀片刃石斧	4区	②層相当	弥生後期初頭～古墳初頭	5.4	1.6	0.9	閃綠岩	1918
55	鑿狀片刃石斧	4区	②層相当	弥生後期初頭～古墳初頭	(2.5)	1.4	0.7	閃綠岩	2485
56	鑿狀片刃石斧	5区	焼土53	弥生後期末～古墳初頭	3.5	0.9	0.8	粘板岩	9171
57	鑿狀片刃石斧	5区	不明	不明	4.4	1.0	0.7	粘板岩	9627
58	石錐	7区	N層	弥生中期中葉	7.4	3.3	2.6		44002
59	石錐	5区	③層	弥生中期中葉～後葉	3.9	1.0	0.7		13999
60	石錐	6区	SK321	弥生前期末～中期前葉	3.1	0.7	0.7		48609
61	石錐	6区	③層	弥生中期中葉～後葉	3.3	1.3	0.3		49140
62	石錐	不明	不明	不明	3.7	(2.3)	0.6		50034

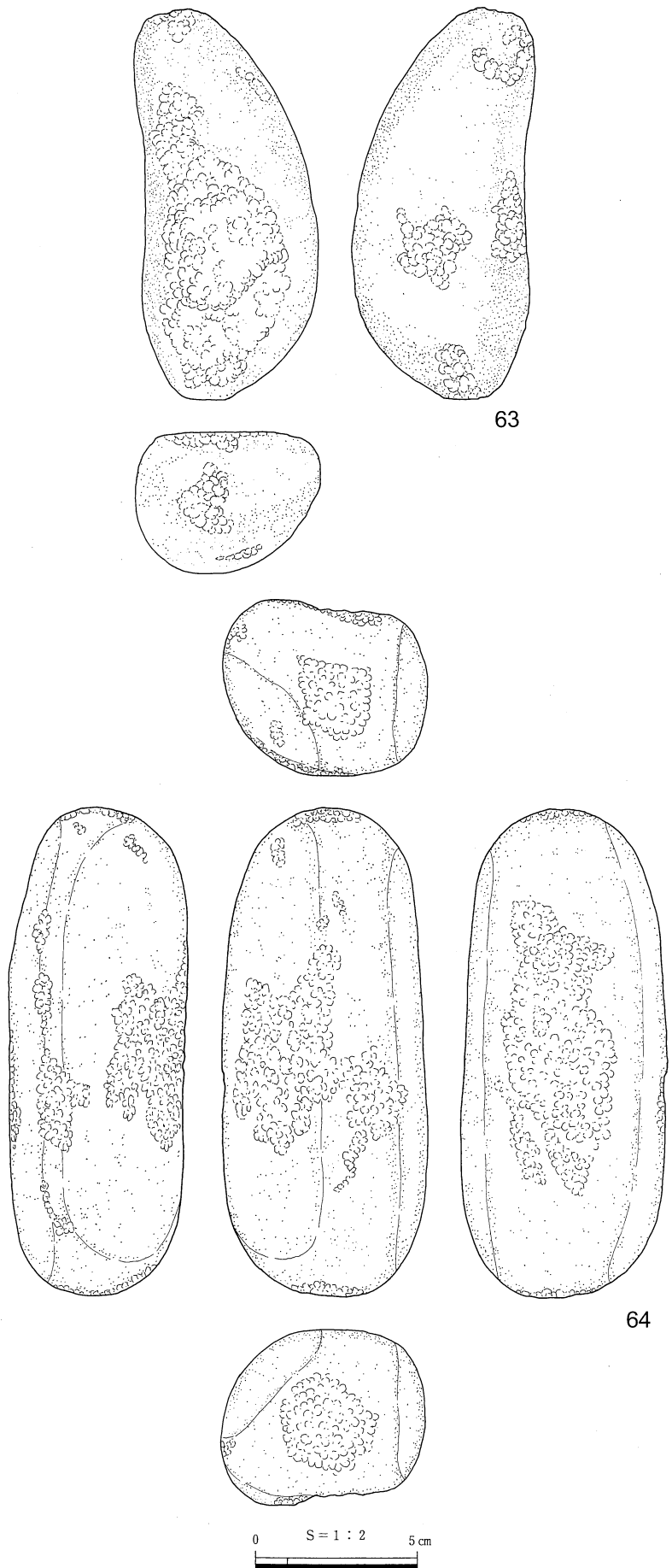
る。56は遺構内の出土で、しっかりした作りであるが、焼土遺構という性格と、弥生後期末～古墳前期初頭の遺構ではあっても、古い時期の遺物包含層をベースとしており、混入の可能性も否定できない。こうしてみると古いものはしっかり作られ、新しいものは退化するという他の加工斧などと同じ傾向があるといえる。

石錐（第153図） 5点図示した。58は礫を分割したものの先端に錐部を設けたものである。錐部は使用により摩滅している。器体は素材面（自然面）を残しつつ、両側縁からの整形剥離によって横断面形が菱形となるように形作られている。

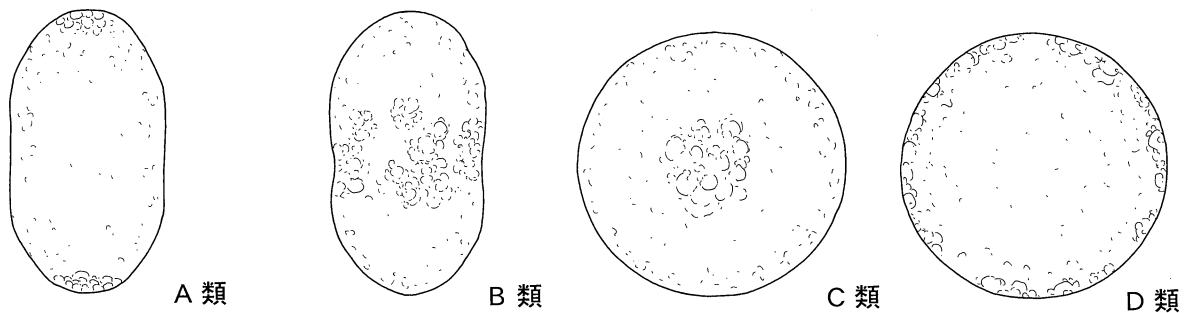
59～62は小形品である。59は横断面形が台形となるように整形された棒状の器体に尖り気味の錐部をもつ。錐部は摩滅しているが、稜線のはっきりした多面体をなしており、錐として使用される以前のものかもしれない。60は素材の分割面を残し、角錐状に作られている。器体本体と錐部は明瞭な境をもつわけではない。稜線上に一部摩滅を見ることができる。61、62は頭部が広がる形態を呈する。61は細かく加工された長い錐部をもつ。62の錐部は短く、61のように微細な剥離面に覆われるというわけではない。

敲石（第154～159図） 礫の表面に敲打痕が認められるものを敲石としている。他の器種を転用したものも少量あるが、ほとんどが礫をそのまま使用しており、分割礫や剥片を敲石に供したものは基本的にない。

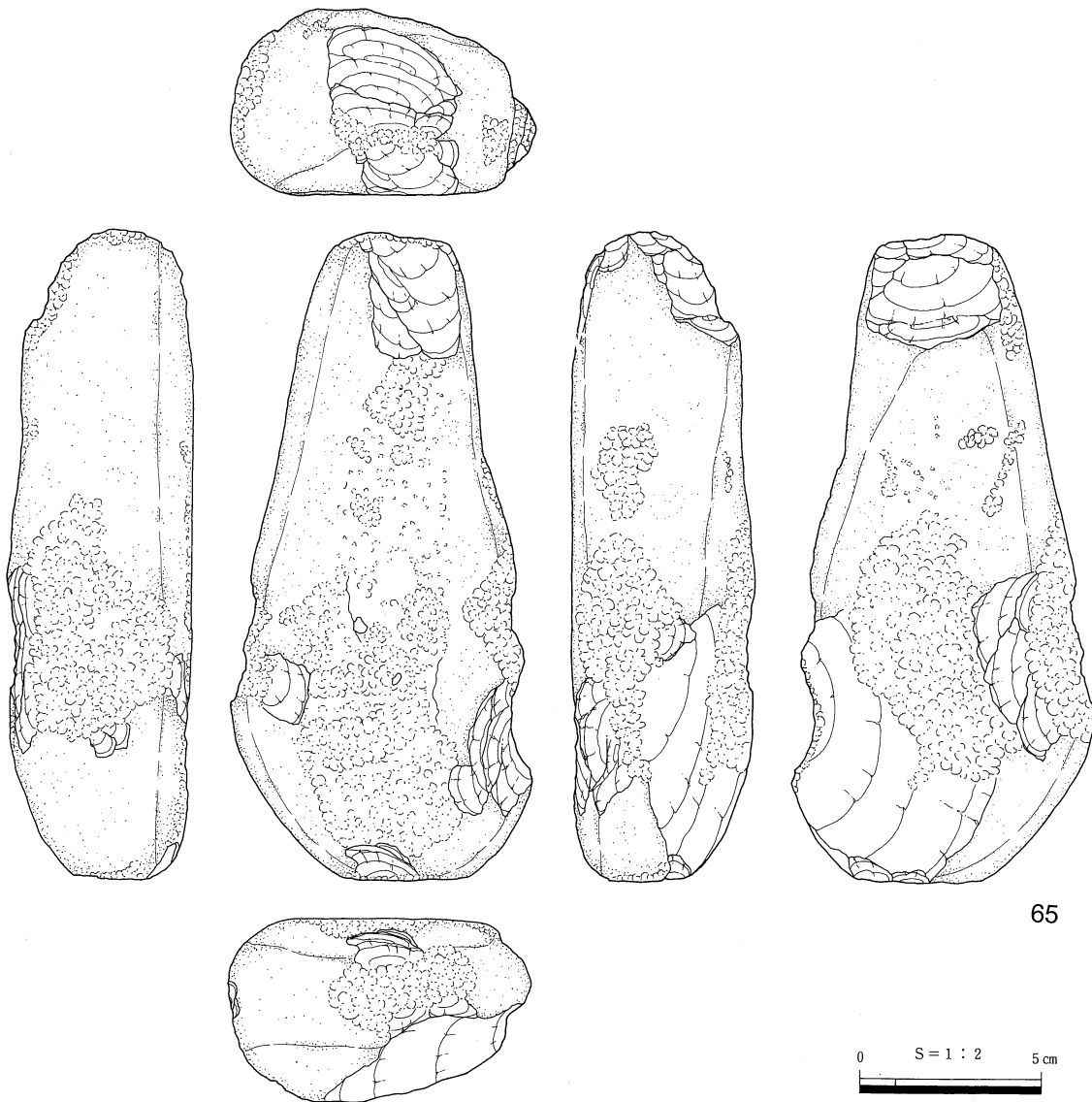
敲石は用いられた礫の形状や使用部位により、いくつかに分類できる（第155図）。素材となる礫が棒状を呈するものがA類、端部でなく器体本体に敲打痕が残るのがB類、両者の複合する



第154図 石器・敲石（1）



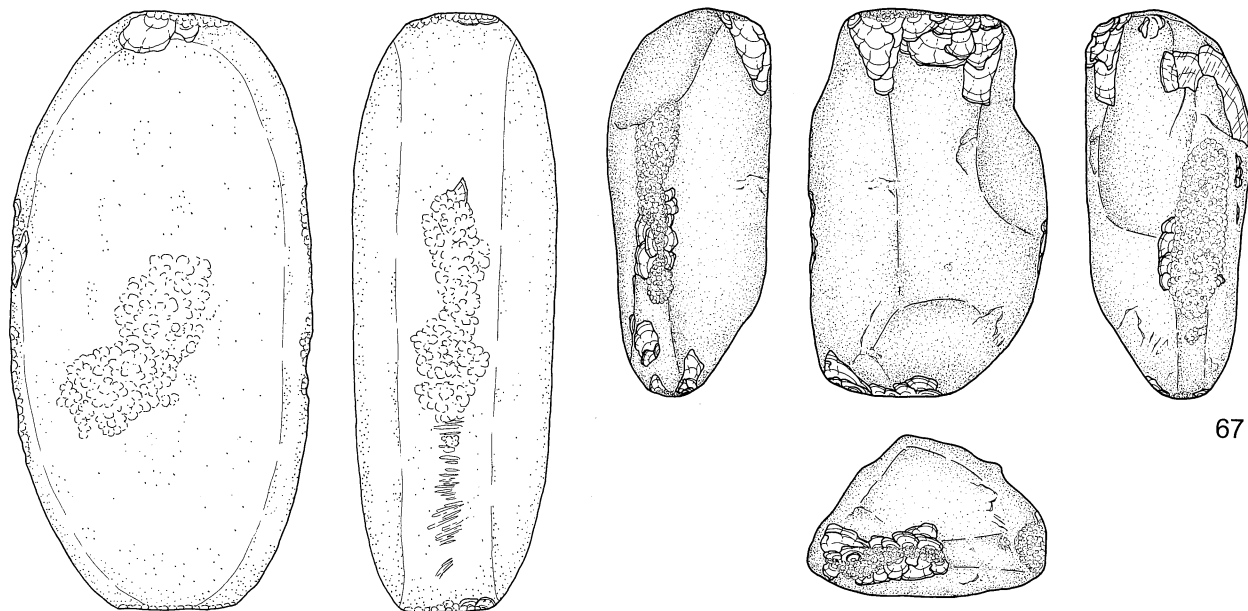
第155図 敲石模式図



65

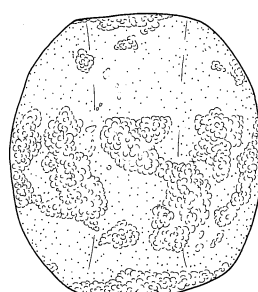
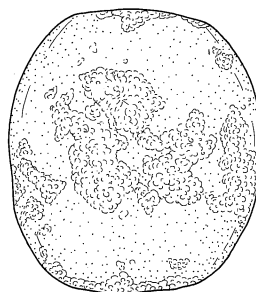
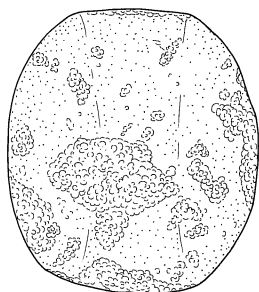
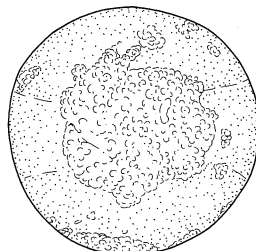
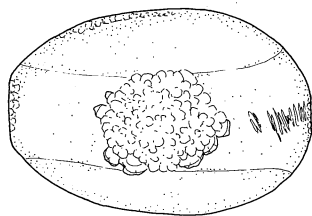
第156図 石器・敲石(2)

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	全長	最大幅	最大厚	石材	取上番号
63	敲石	6区	SD51	弥生前期末～中期前葉	12.1	5.7	5.7		49016
64	敲石	7区	I層	弥生中期後葉	15.1	6.4	5.5		42367
65	敲石	7区	I層	弥生中期後葉	17.9	8.3	5.1		36432
66	敲石	8区	SD38	弥生後期初頭～後葉	15.8	8.0	5.4		33127
67	敲石	5区	SD16	弥生後期初頭～後葉	10.3	6.2	4.2		13241
68	敲石	5区	集石1	弥生後期初頭～後葉	7.5	6.6	6.6		12429
69	敲石	7区	H層	弥生後期	12.7	5.8	5.0		36019

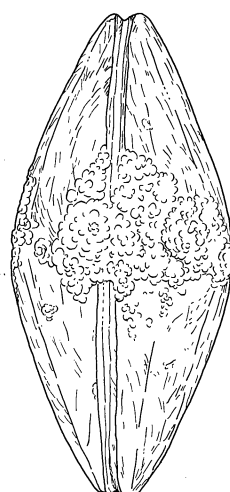
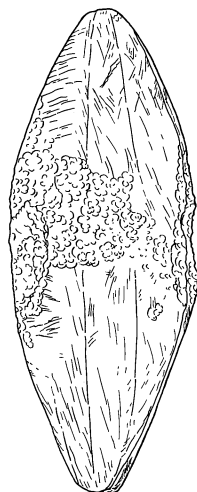
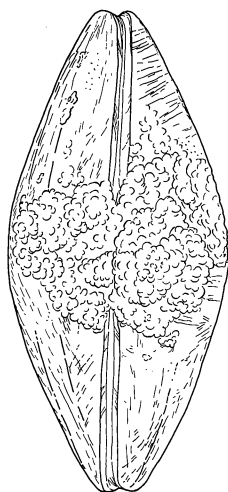


66

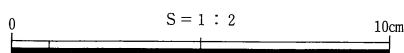
67



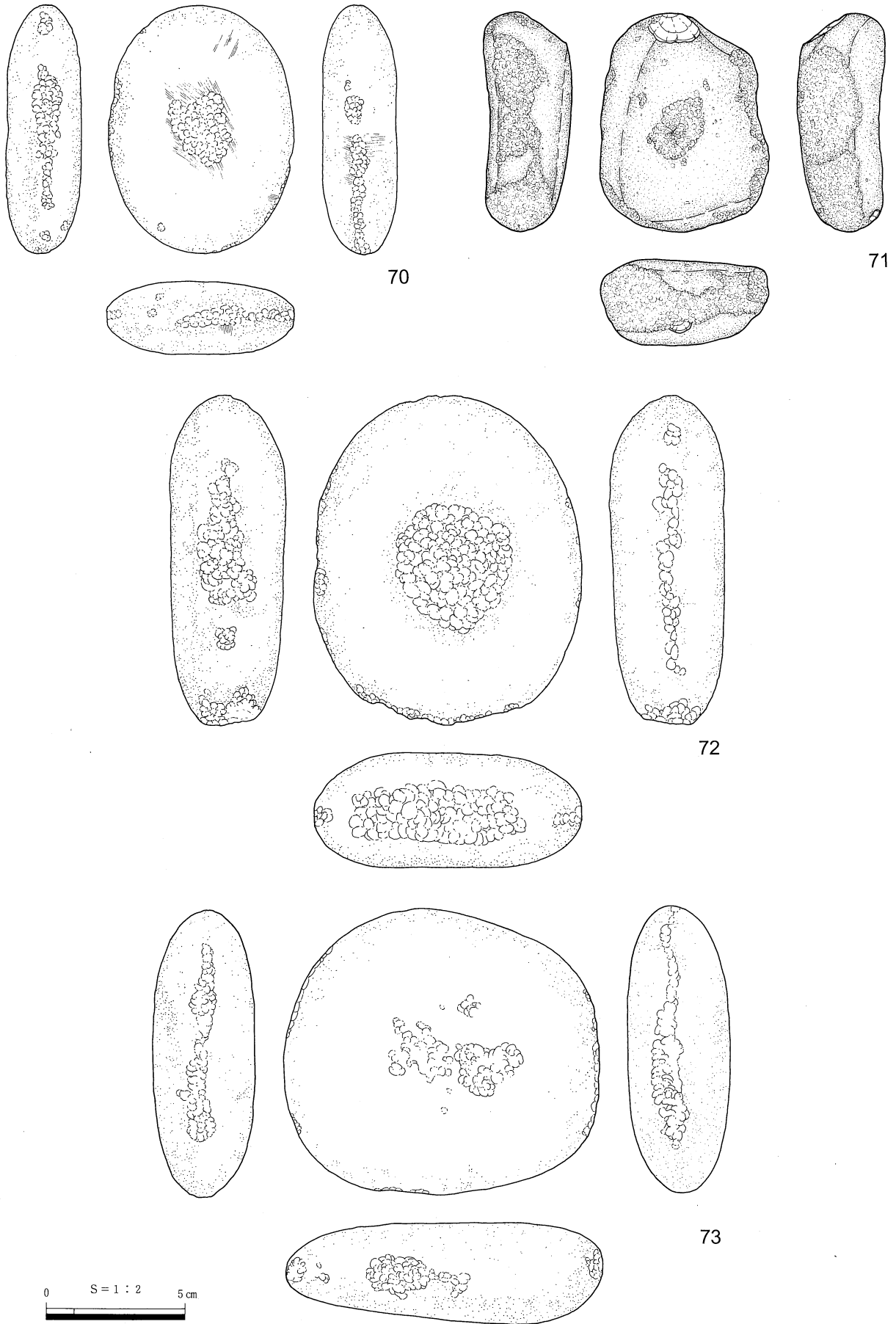
68



69



第157図 石器・敲石(3)



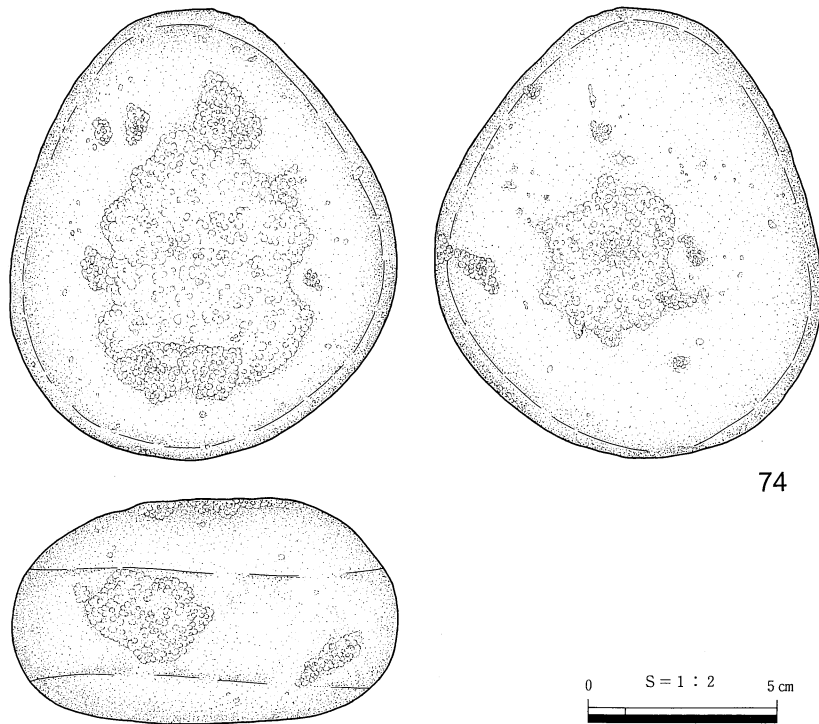
第158図 石器・敲石（4）

ものがA B類である。いっぽう扁平な磔を使用するものもあり、磔の中央に敲打痕のあるC類と、敲打痕が周縁を巡るD類に分けられる。C類とD類の複合タイプはC D類と呼ぶ。模式的に分類することは簡単なのであるが、実際は磔の形状が棒状なのか扁平なのか判断に迷うものもあるし、C類の大型品は台石との区別が付きにくい。磔をそのまま使用することが基本であるので、感覚的に手に持って使える重量であるか否かを判断基準としている。

第154～157図には棒状磔を素材とするものを掲げた。63は前期末～中期前葉に属する。器体に広く敲打痕を残し、両端部にも使用の痕跡を認める。64、65は中期後葉のもので、やはりA B類である。65の器体には使用により破損したと思われる剥離面があり、敲打痕と切り合い関係をもっている。少々破損しても使用には何ら支障がなかったのであろう。66～69は後期に属する。66は側縁の一部に引っかけたような痕跡も併せもつ。68は棒状磔とはいいい難いが、扁平でもなく、A B類としている。69は石錘の転用品でB類である。

第158、159図には扁平磔を用いたC D類を示した。A B類との違いは素材のみであり、周縁を敲打痕が全周するような典型的なD類は少なく、両者に機能的な差異はないのかもしれない。

敲石は県道調査区から346点出土している。棒状磔を素材とするものは241点（A類39点、B類34点、A B類168点）、扁平磔を素材とするものは105点（C類25点、D類16点、C D類64点）で前者の占める割合が大きい。時期別では前期末～中期前葉41点、前期～中期10点、中期中葉～後葉94点、後期～古墳前期初頭114点、不明87点と、中期中葉以降に顕著となる。出土地点の偏りも指摘でき、調査区に分かるもの334点で見ると、各時期を合わせて4区14点、5区42点、6区76点、7区138点、8区64点で、微高地部から東側縁辺部に集中的に出土した。微高地部は後期に溝で取り囲まれるようになるが、そうした一連の溝でも東側縁辺のS D 38から21点、S



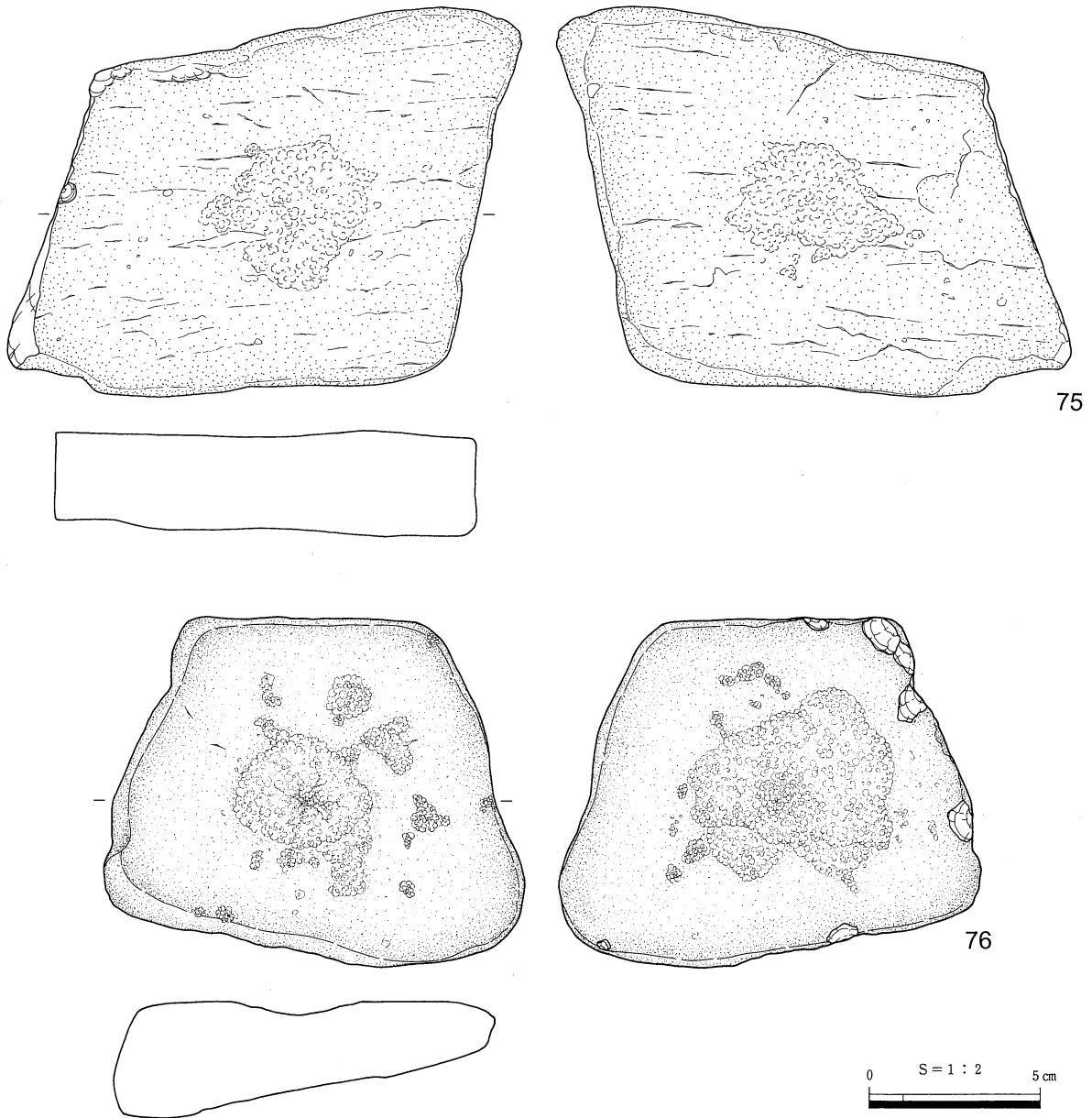
第159図 石器・敲石（5）

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	全長	最大幅	最大厚	石材	取上番号
70	敲石	6区	⑫層	弥生前期末～中期前葉	9.0	6.7	2.7		47847
71	敲石	5区	SK59	弥生中期中葉～後葉	7.9	6.0	3.1		15744
72	敲石	7区	N層	弥生中期中葉	11.9	9.6	4.1		40710
73	敲石	8区	SD38	弥生後期初頭～古墳初頭	10.4	11.3	3.7		34069
74	敲石	5区	集石1	弥生後期初頭～古墳初頭	11.8	10.1	6.0		12430

D69から8点出土しているのに対し、西側縁辺のSD11からは2点が出土したに過ぎない。さらに中期中葉～後葉段階には微高地東側縁辺部に集石遺構が数多く残されていたが、8区検出の集石9では21点もの敲石が含まれていた。このような出土傾向が敲石の機能と結びつくのかは定かでないが、特徴的な点として注意しておきたい。

台石 (第160図) 50点出土したうちの2点を図示したに過ぎない。敲石の説明でも述べたように、台石と敲石C類との区別は容易でないところがある。75、76も大きさとしては敲石をそう大きく上回るものではない。あえていえば、敲石C類の平面形態が円形を基調とし、断面形態も丸みを帯びているのに対し、台石としたものは角張ったものが多い。敲石が手に持って使用されたと想定されるのに対し、台石は地面に据えていたことを想定している。出土時の状況は使用の様子を表したものではなく、機能の差異を証明することはできないが、形態の相違から両者を区別しうるのではないかと考えている。

使用痕は平坦面の中央付近に残されている。使用痕は両面に認められるもの29点、片面のみに認められるもの21点で、両面使用のものが多かったことが分かる。実測図を示した75、76も両面に使用痕を有する資料である。



第160図 石器・台石

砥石（第161～165図） 県道調査区からは559点の砥石が出土した。まず図示したものの説明を加える。

砥石は石材によって大別できる。第161図～第163図96までは細粒石材を用いものである。第161図には長さが幅の2倍以上で、幅と厚さも大きく違わない一群を掲げた。大型のものではなく、小型棒状を呈する。器面に残る使用痕は細かな線条痕である。第162図に掲げたものは器面に幅0.5cm程度の溝が見られるものである。88は溝の深さが深い。このように繰り返し使用されたことが分かるものはむしろ例外的で、89以下は溝の数が多いか、浅く挟られているものである。研磨対象の違いや製作時のどの段階で用いられたかによる差なのであろう。95、96は幅が広めの線条痕を残すものである。

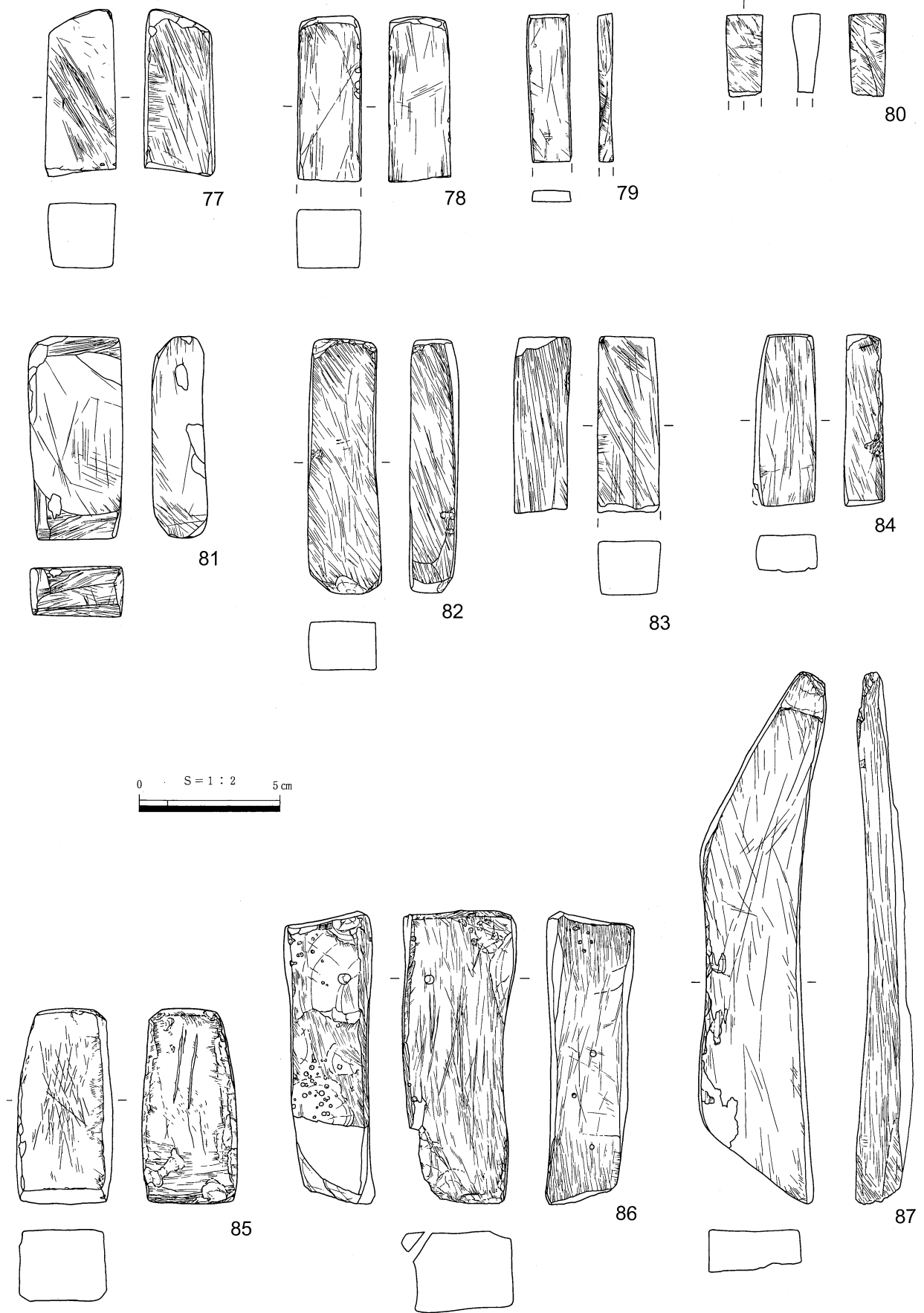
97以下は粗粒石材を用いたものである。第163図は小型のものを掲げた。第164図の大型のものと同様に、器面に残る使用痕は細かな線条根である。第165図には溝が形成されたものを示した。溝のあり方は細粒石材のものと変わらない。

559点という数は少なくない量である。いったい何を磨くためのものだったのだろうか。ここでは数量的な分析を中心として県道調査区出土の砥石の実態に迫ってみたい。

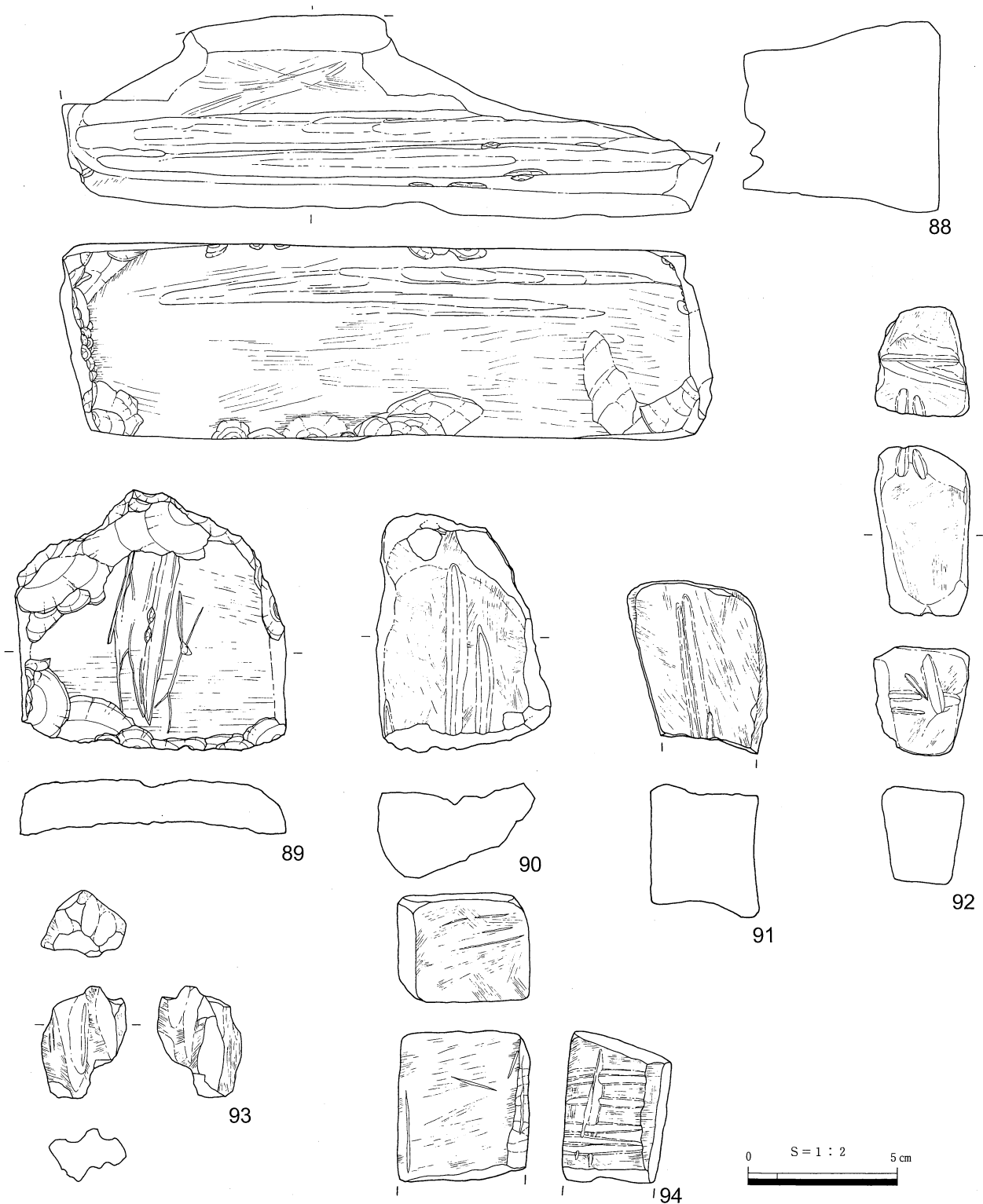
まず時期ごとの内訳であるが、79点は出土層位不明か細かな時期の特定ができないものであり、分析対象から除外する。また出土層位別に見た場合、①層に属するものが126点にのぼる。①層は弥生中期から奈良時代までの遺物を含み二次的な攪乱が予想されるものであるが、古墳時代前期初頭以降の土器は極めて少ないので後世の遺物が大量に混じっているとは考えにくい。また第422、423図に6、7区の層位ごとの土器組成を示したが、弥生中期以前の土器はそう混在しているわけではない。本章の記述では慎重を期して①層出土の遺物を基本的に時期不明と扱っているが、ここでは砥石の実態を明確にするために、①層出土のものを弥生後期に属するものとして記述を進める。前期末～中期前葉（以下、Ⅰ期と呼ぶ）には30点認められる。細粒石材が11点（36.7%）、粗粒石材が19点（63.3%）という内訳である。中期中葉～後葉（以下、Ⅱ期）には細粒石材61点（42.4%）、粗粒石材83点（57.6%）の計144点が認められた。後期～古墳初頭（以下、Ⅲ期）には細粒石材181点（59.2%）、粗粒石材125点（40.8%）の計306点が属する。時期を追うごとに点数が増加していくことが分かり、特にⅢ期における増加が著しい。細粒石材と粗粒石材の割合もⅡ期までは6対4で粗粒石材のほうが多かったのが、Ⅲ期では数字が逆転し細粒石材が多くなる。

次に砥石の器面に残る使用痕を観察してみる。観察のしやすい細粒石材のもので見ると、使用痕には細い線条痕・粗い線条痕・溝状の凹み・その他に大別でき、ひとつの個体に複数の使用痕が認められる場合があるので、各時期における種類別の数・割合で示すと、細い線状痕はⅠ期10点（76.9%）、Ⅱ期70点（79.5%）、Ⅲ期204点（81.3%）と各期ほぼ80%を占める。粗い線状痕はⅠ期には見られず、Ⅱ期9点（10.2%）、Ⅲ期28点（11.2%）となる。溝状の凹みはⅠ期1点（7.7%）、Ⅱ期2点（2.3%）、Ⅲ期11点（4.4%）を占める。全体としてⅠ期の資料数が少ないこともあり、正確な傾向が表れているか不安もあるが、溝状の凹みはⅢ期にやや増加している。使用痕の残り方は実際の使用法を示す場合が多いと考えられるが、石材により残り方に違いが表れることもあり検討が必要である。概観したかぎりでは先に述べた数量の増加ほどの変化が各期の間に認められない。

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	全長	最大幅	最大厚	石材	取上番号
77	砥石	7区	SD27	弥生中期後葉	5.9	2.5	2.3		42225
78	砥石	7区	I層	弥生中期後葉	(5.9)	2.2	2.1		40734
79	砥石	7区	J層	弥生中期後葉	(5.3)	1.5	0.4		44781
80	砥石	7区	J層	弥生中期後葉	(3.0)	1.3	0.9		38084
81	砥石	7区	SD27	弥生中期後葉	7.2	3.3	1.8		42977
82	砥石	7区	SD27	弥生中期後葉	9.1	2.6	1.7		42227
83	砥石	6区	②層	弥生後期初頭～古墳初頭	(6.2)	2.2	1.9		45284
84	砥石	7区	H層	弥生後期	6.1	2.1	1.4		36284
85	砥石	8区	②層相当	弥生後期初頭～古墳初頭	7.0	3.4	2.6		27142
86	砥石	7区	①層	弥生中期～奈良	10.5	3.8	3.2		35199
87	砥石	8区	SD56	弥生後期初頭～古墳初頭	19.0	4.5	2.0		30034



第161図 石器・砥石 (1)

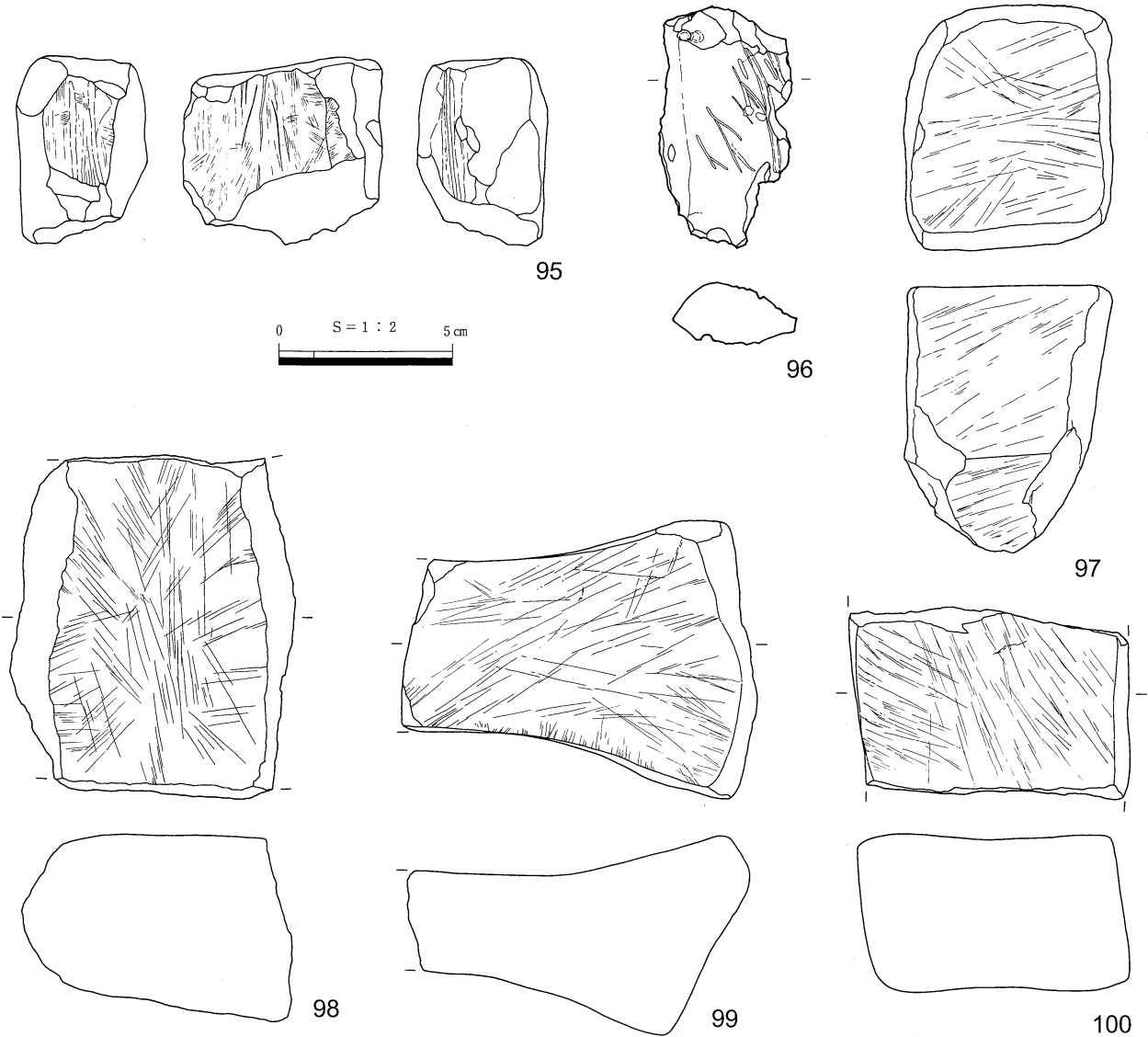


第162図 石器・砥石（2）

插图番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	全長	最大幅	最大厚	石材	取上番号
88	砥石	7区	1層	弥生中期後葉	21.7	(6.4)	6.5		41000
89	砥石	4区	SD11	弥生後期初頭～古墳初頭	8.7	8.7	2.3		3064
90	砥石	5区	②層	弥生後期初頭～古墳初頭	8.1	5.7	3.1		8471
91	砥石	5区	①層	弥生中期～奈良	(5.2)	4.2	5.2		10731
92	砥石	5区	①層	弥生中期～奈良	5.7	3.2	3.7		13504
93	砥石	4区	①層	弥生中期～奈良	3.8	2.9	2.4		758
94	砥石	4区	①層	弥生中期～奈良	(5.1)	4.4	3.7		716

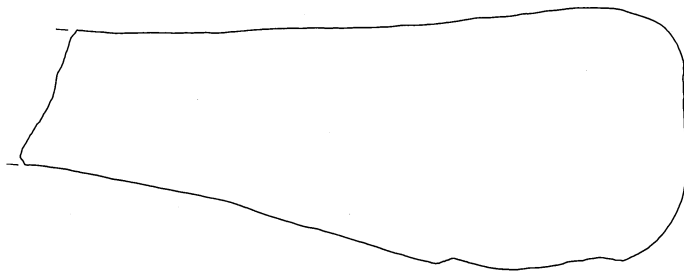
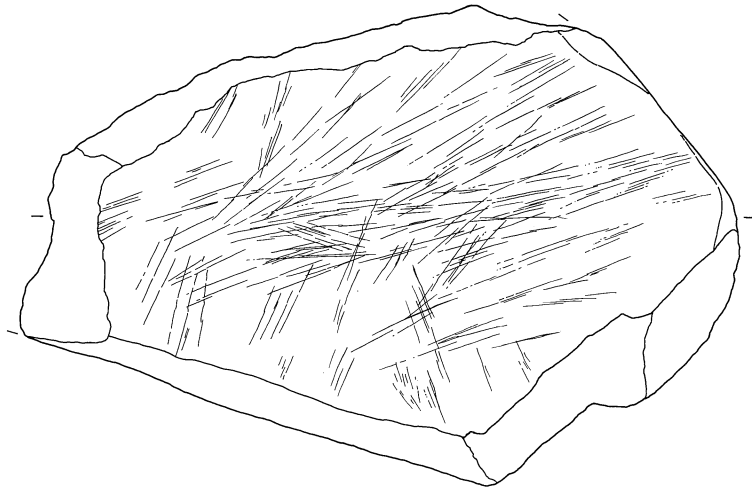
研磨される側に目を転じてみよう。研磨により整形される遺物には鉄器・青銅器・石器・骨角器がある。各期ごとの出土点数を見てみると、鉄器はⅠ期1点(0.8%)、Ⅱ期21点(17.5%)、Ⅲ期98点(81.7%)、青銅器はⅡ期1点(4.5%)、Ⅲ期21点(95.5%)、石器は研磨整形するものに限ればⅠ期140点(20.7%)、Ⅱ期308点(45.5%)、Ⅲ期229点(33.8%)、骨角器はⅠ期281点(16.9%)、Ⅱ期631点(38.0%)、Ⅲ期747点(45.0%)となり、砥石と同じくⅢ期に著しい増加を見るのは鉄器・青銅器といった金属器である。

以上、雑駁な検討ではあったが本遺跡における砥石の様相のうち、特に弥生後期～古墳前期初頭にかけての著しい増加は金属器の存在を抜きには語れないものであろう。もちろん砥石は前期末～中期前葉段階から存在しており、他の様々なものの製作に関わっていたことは当然なのであるが、一見同じように見える砥石にもさまざまな情報が秘められているのである。

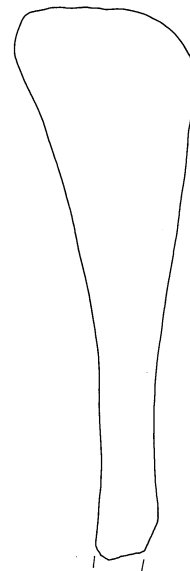
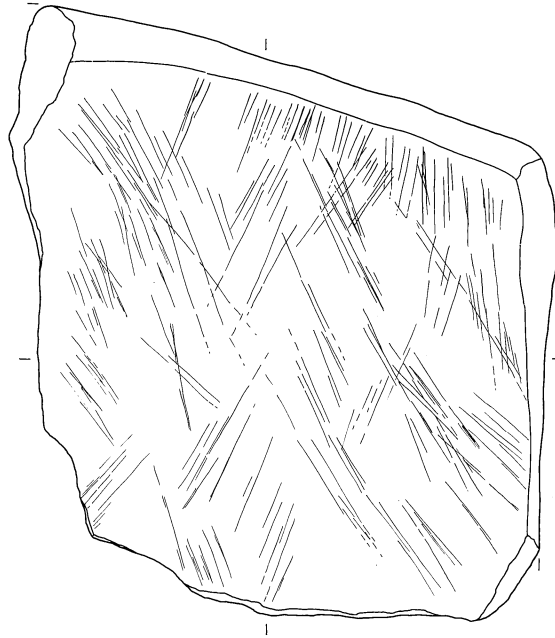


第163図 石器・砥石(3)

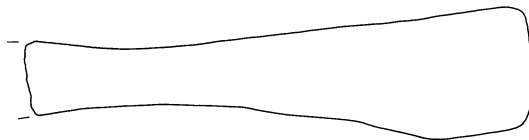
挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	全長	最大幅	最大厚	石材	取上番号
95	砥石	4区	①層	弥生中期～奈良	5.4	6.0	3.8		1222
96	砥石	5区	①層	弥生中期～奈良	6.7	3.8	1.9		11011
97	砥石	7区	N層	弥生中期中葉	7.1	5.5	7.7		44992
98	砥石	8区	SD38	弥生後期初頭～古墳初頭	9.9	(8.2)	5.4		28895
99	砥石	7区	I層	弥生中期後葉	8.0	(10.2)	5.3		42867
100	砥石	7区	I層	弥生中期後葉	(5.1)	8.1	4.5		42953
101	砥石	7区	SA26	弥生中期後葉	(12.7)	(18.9)	7.0		38000
102	砥石	7区	SD27	弥生中期後葉	(14.5)	(16.4)	5.9		42166



101

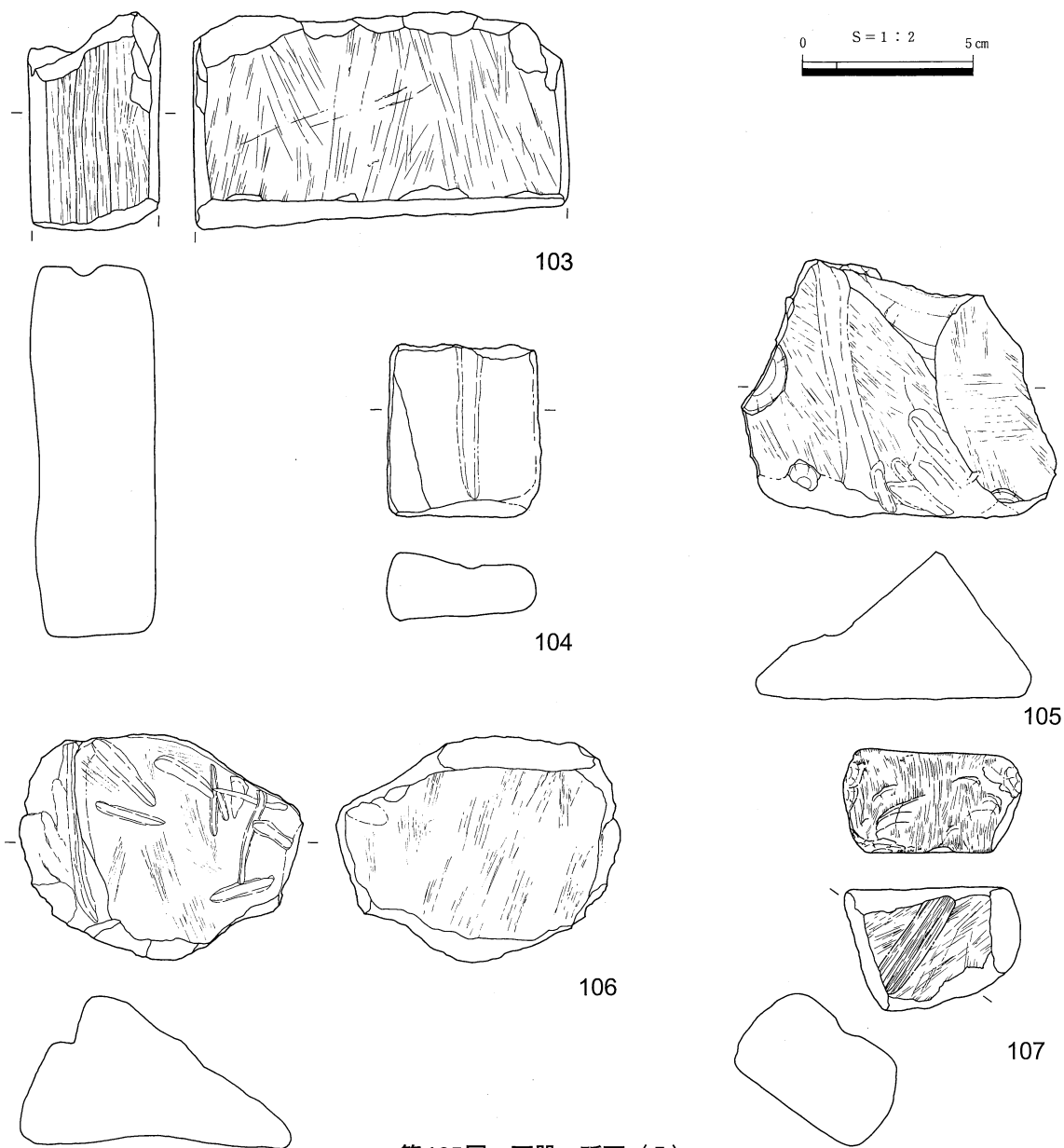


102



0 S=1:2 5cm

第164図 石器・砥石(4)



第165図 石器・砥石 (5)

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	全長	最大幅	最大厚	石材	取上番号
103	砥石	7区	M層	弥生前期末～中期前葉	(6.4)	3.9	11.0		40874
104	砥石	5区	①層	弥生中期～奈良	5.0	5.0	2.3		11324
105	砥石	4区	③層相当	弥生中期中葉～後葉	7.4	8.6	4.4		5016
106	砥石	5区	①層	弥生中期～奈良	6.6	8.2	4.5		11247
107	砥石	7区	J層	弥生中期後葉	3.6	5.2	3.1		36584

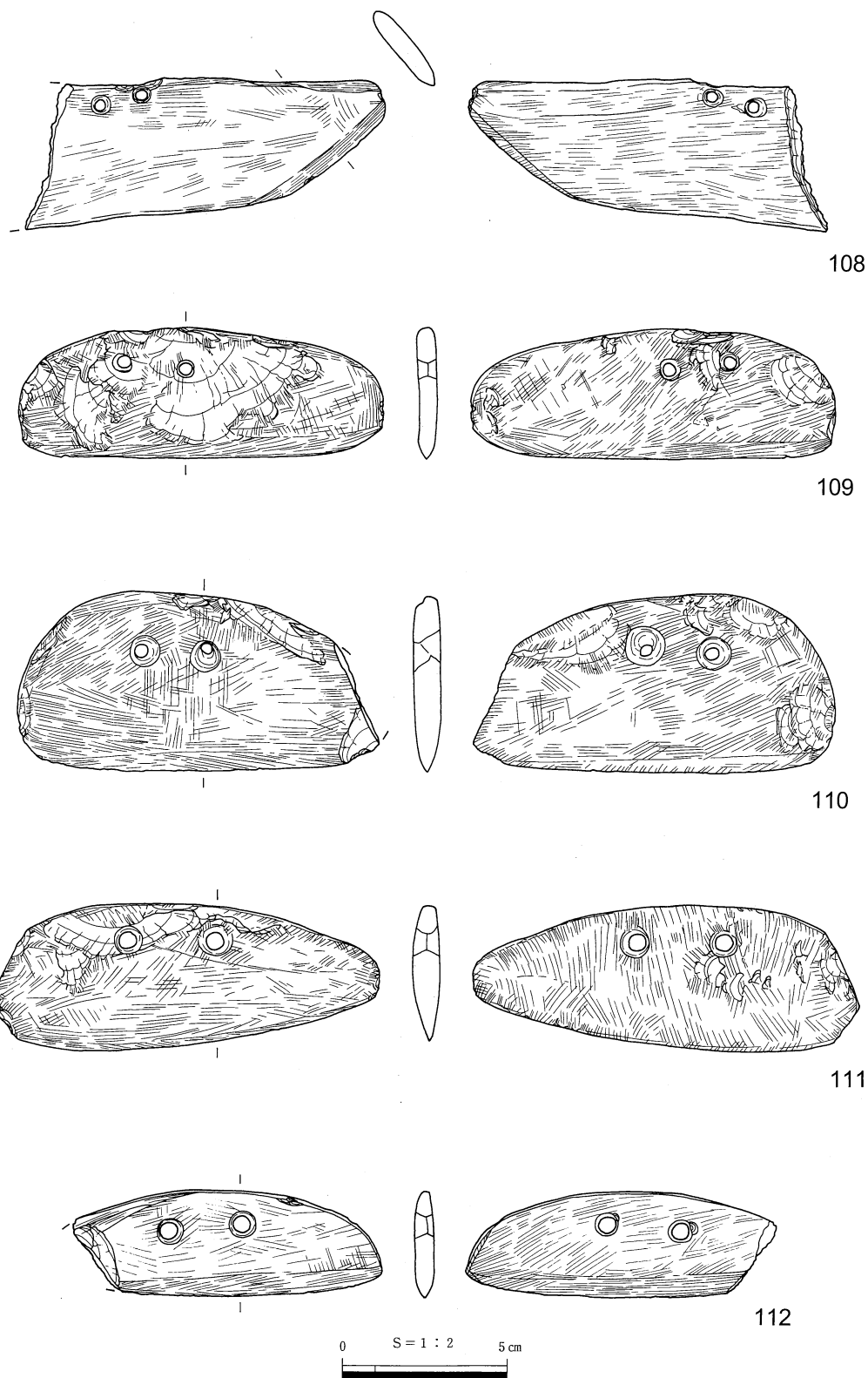
農具

石庖丁 (第166～168図) 108は前期末～中期前葉のものである。残存している端部が尖るように刃を設けている。背部に平行な部分は鋭利さを失っており、刃部再生により本来の器体形状を保っていないものであろう。

109、110は中期中葉～後葉に属する。ともに直線的な刃部をもつ。

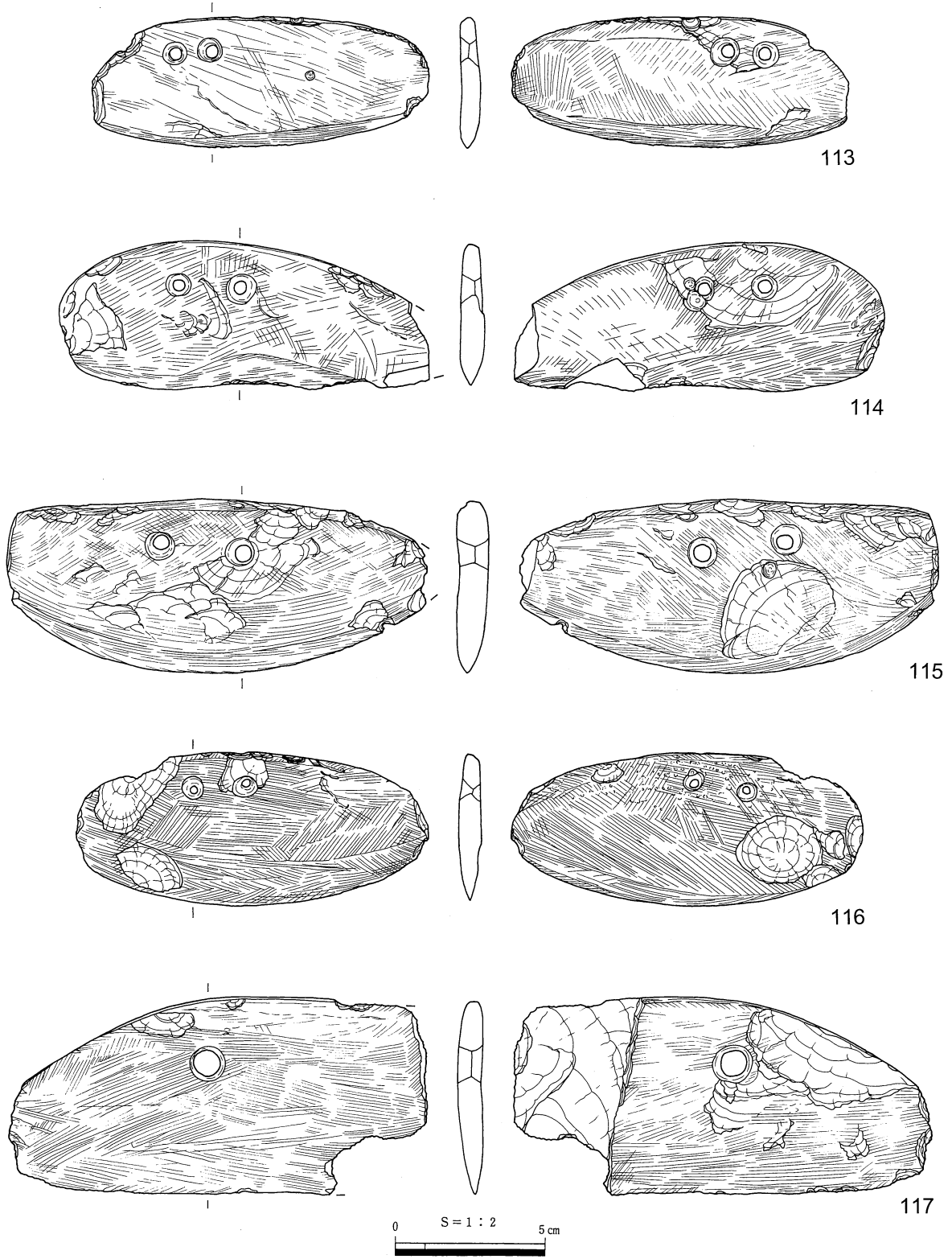
111～115は後期～古墳前期初頭のものである。刃部が直線となる112、114と湾曲する115がある。111、113も湾曲する刃部であるが、背部も同様で、杏仁形とされるものである。

116、117は出土層位不明である。116の体部に見られるはじけ飛んだような剥離面は受熱によるものであろう。117はやや大型である。



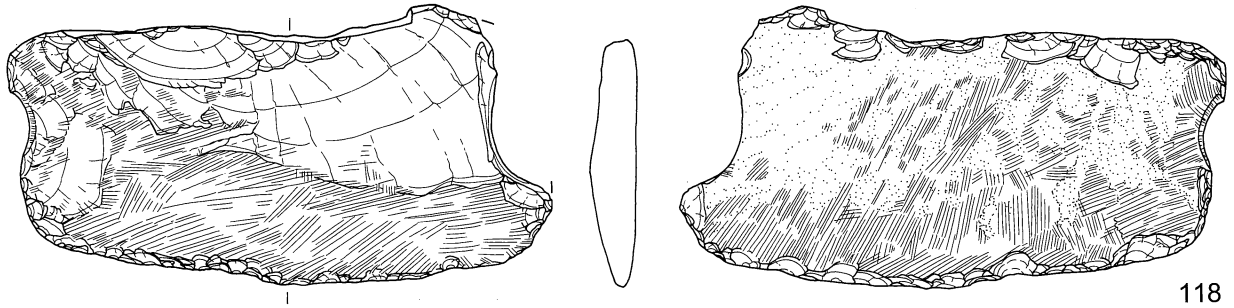
第166図 石器・石庖丁 (1)

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	全長	最大幅	最大厚	石材	取上番号
108	石庖丁	5区	SD1	弥生前期末～中期前葉	(9.9)	4.3	0.6	結晶片岩	17154
109	石庖丁	5区	③層	弥生中期中葉～後葉	11.1	3.9	0.5		13864
110	石庖丁	5区	③層	弥生中期中葉～後葉	(10.8)	5.5	0.7		12290
111	石庖丁	4区	②層相当	弥生後期初頭～古墳初頭	11.6	4.4	0.8	結晶片岩	4816
112	石庖丁	5区	②層	弥生後期初頭～古墳初頭	(8.7)	3.2	0.5		12592

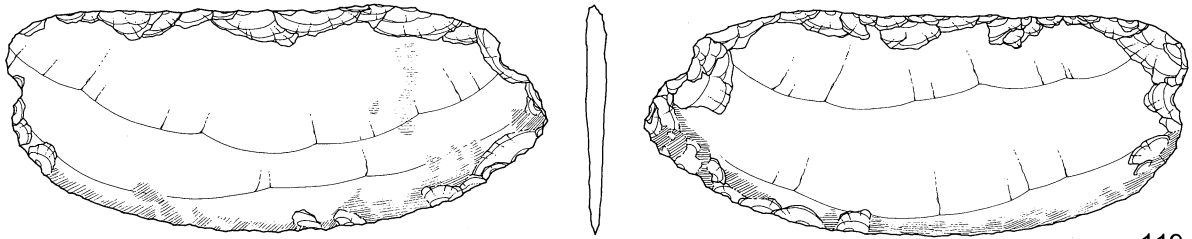


第167図 石器・石庖丁(2)

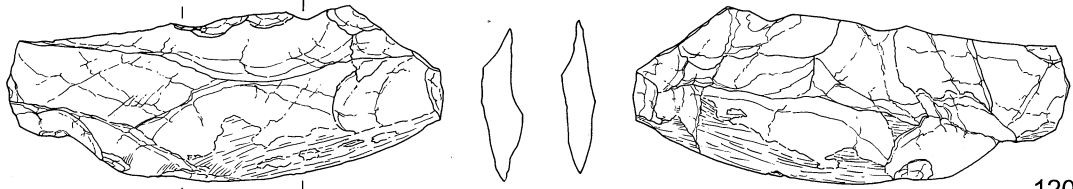
挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	全長	最大幅	最大厚	石材	取上番号
113	石庖丁	5区	②層	弥生後期初頭～古墳初頭	11.0	4.2	0.8		8221
114	石庖丁	5区	②層	弥生後期初頭～古墳初頭	(12.2)	4.9	0.8	結晶片岩	8247
115	石庖丁	5区	②層	弥生後期初頭～古墳初頭	(13.8)	5.8	1.0		8137
116	石庖丁	5区	不明	不明	11.6	5.1	0.7	結晶片岩	14328
117	石庖丁	4区	不明	不明	(13.8)	6.4	0.9		4495



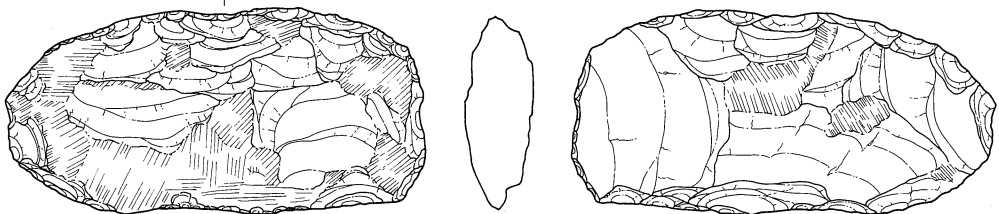
118



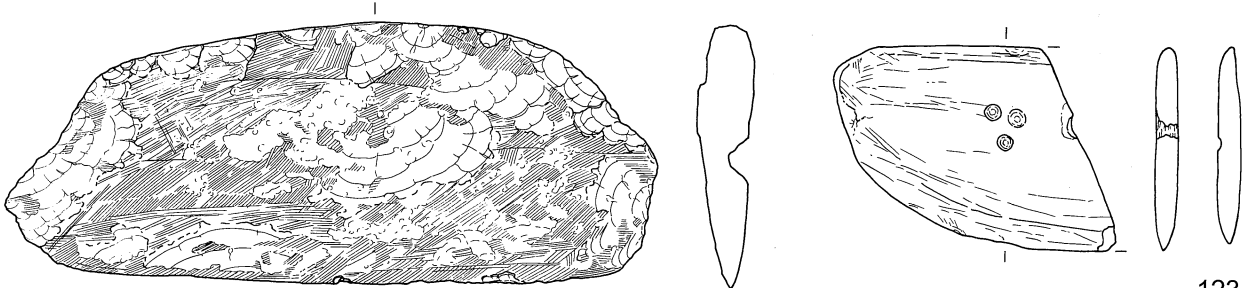
119



120

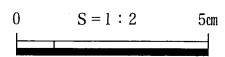
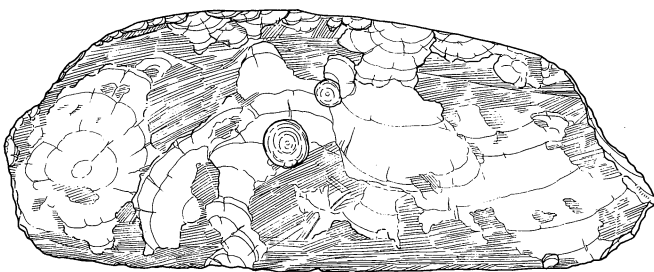


121



122

123



第168図 石器・石庖丁(3)

第168図には未製品を掲げた。図は基本的に時期ごとに配置したので、製作工程を表していない。

118は前期末～中期前葉のもので、板状に割れる石材に整形加工をそれほど加えることなしに研磨していく点や研磨後の刃縁に打ち欠きによる再生を施す点は大型石庖丁の特徴を示しているが、鈕孔が穿たれていることなどからここに含めておく。表面左側端部には研磨により仕上げられる抉りを有する。119は中期後葉に属し、薄い板状素材の周縁を打ち欠いて形を整え、刃部に研磨を加えている。器体全体を磨き上げれば外湾する刃部をもつ石庖丁となる。ただ両端部に設けられた抉りが気になる。中・四国地方における石庖丁の地域性について述べた平井典子によれば⁽¹⁰⁾、ⅢB類とされた抉りのある打製石庖丁で刃部を研磨したものは愛媛県や高知県で見られるという。管見の及ぶところで高知県田村遺跡群の例を見ると、Loc.44 S D 1（前期）、Loc.34A S T 14、Loc.34B S R 1（後期）にあるが、いずれも背部と刃部が平行する形態である⁽¹¹⁾。119の外湾する刃部をもつ形態とは大きく異なり、本例が四国地方からの搬入品であるとは考えにくいのであるが、抉り自体が山陰地方の一般的な石庖丁の属性にないため、注意しておきたい。122も同じ時期のものである。整形の際の剥離面を完全に消し去っていないが、研磨を全面に施しており、背部・刃部ともかなり仕上げられている。片面側から鈕孔を穿孔する途中で、上の孔は浅く下の孔は深い。位置関係からすると上の鈕孔は途中で穿孔を止めたのであろう。120、123は後期～古墳前期初頭に属する。120は残存範囲で見限り刃部の一部はおおむね仕上げられているようだ。123は片面側から空けかけた鈕孔が3ヶ所と両面から穿たれたものが1ヶ所に見られる。後者も孔の縁を見ると完全に空けきっていないように思われ、ここで折れていることから穿孔途中の折損品であろう。121は層位的に時期を特定できないが、整形剥離で形を整えた後に研磨を加えた段階のものである。

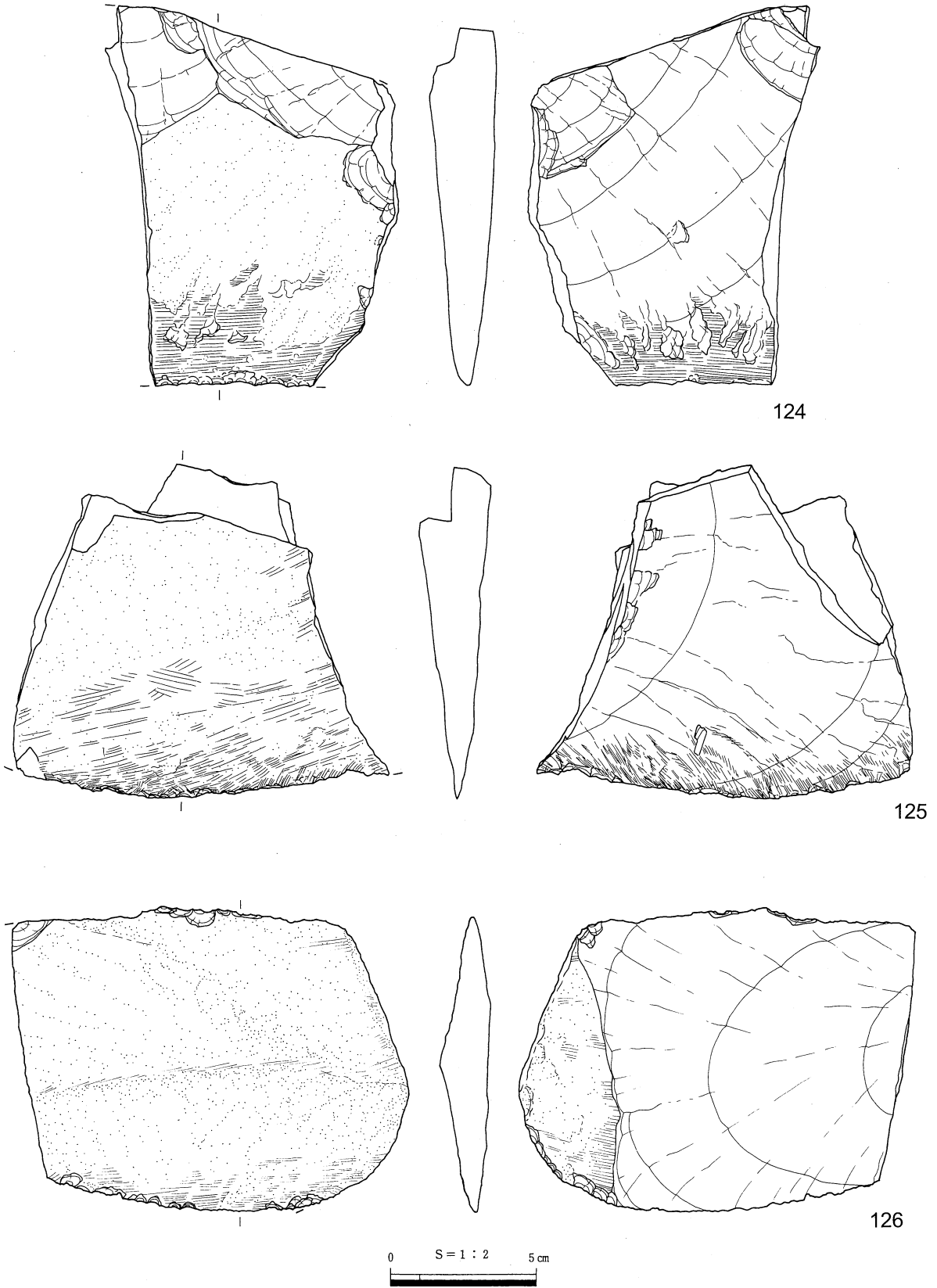
数は少ないもこれらの未製品から窺える石庖丁の製作工程は以下のとおりである。まず板状の剥片素材が用意され、厚みのないものは周縁を打ち欠き、厚いものは器体の中央にまで及ぶ整形剥離で目的とする石庖丁の形態を大まかに作る。この段階で敲打を加えたものはない。次に研磨を加え形状を仕上げるとともに、背部・刃部を作り出す。120のように全体の形状が完全に整っていないうちに刃部を磨きだすこともあったのだろうか。鈕孔の穿孔は磨きの途中で空け始めるものと、研磨調整終了後に空けるものがある。123で見たように穿孔の際に折れることもあったようで、器体の厚みがまだあるうちにリスクを回避するために穿孔を始めることもあったのだろうか。このように概観した製作工程であるが資料の乏しさから大まかにしかつかめず、時期による違いも検討できていない。

大型石庖丁（第169～173図） 『青谷上寺地3』に述べたように、ここで大型石庖丁と呼ぶものは、石庖丁を大型にしたものと、大型板状剥片に刃部を設けたものの2者を指す。前者を全面研磨タイプ、後者を素材面残置タイプとすると、総数107点のうち全面研磨タイプが11点、素材面残置タイプが96点と数に大きな偏りがある。今回は素材面残置タイプのみ図示した。

124～128は前期末～中期前葉のものである。128を除き刃部に光沢を有する。こうした刃部の光沢は研磨を加えたものもあるだろうが、多くは使用により生じたものと思われる。124や127では微細な剥離痕が光沢を切って施されており、刃部の再生を図ったものと思われる。したがって刃部に光沢のない128も当初は未製品と理解していたが、鋭い刃縁があるものは成品と見るべきであろう。

129～131は中期中葉～後葉に属する。130は背部両側に抉りを作り出す有肩のものである。131は刃部が作り出されておらず、未製品であろう。

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	全長	最大幅	最大厚	石材	取上番号
118	石庖丁未製品	5区	⑤層	弥生前期末～中期前葉	14.0	7.3	1.3	無斑晶板状安山岩	17117
119	石庖丁未製品	7区	I層	弥生中期後葉	13.8	5.8	0.6	角閃石安山岩	36301
120	石庖丁未製品	7区	②層	弥生後期初頭～古墳初頭	11.5	4.8	1.3		44192
121	石庖丁未製品	4区	①層	弥生中期～奈良	11.1	5.5	1.8	結晶片岩	1133
122	石庖丁未製品	5区	SK64	弥生中期中葉～後葉	17.0	6.9	1.6	アブライト	15770
123	石庖丁未製品	8区	D層	弥生中期～後期	(5.4)	7.4	0.6		27401



第169図 石器・大型石庖丁（1）

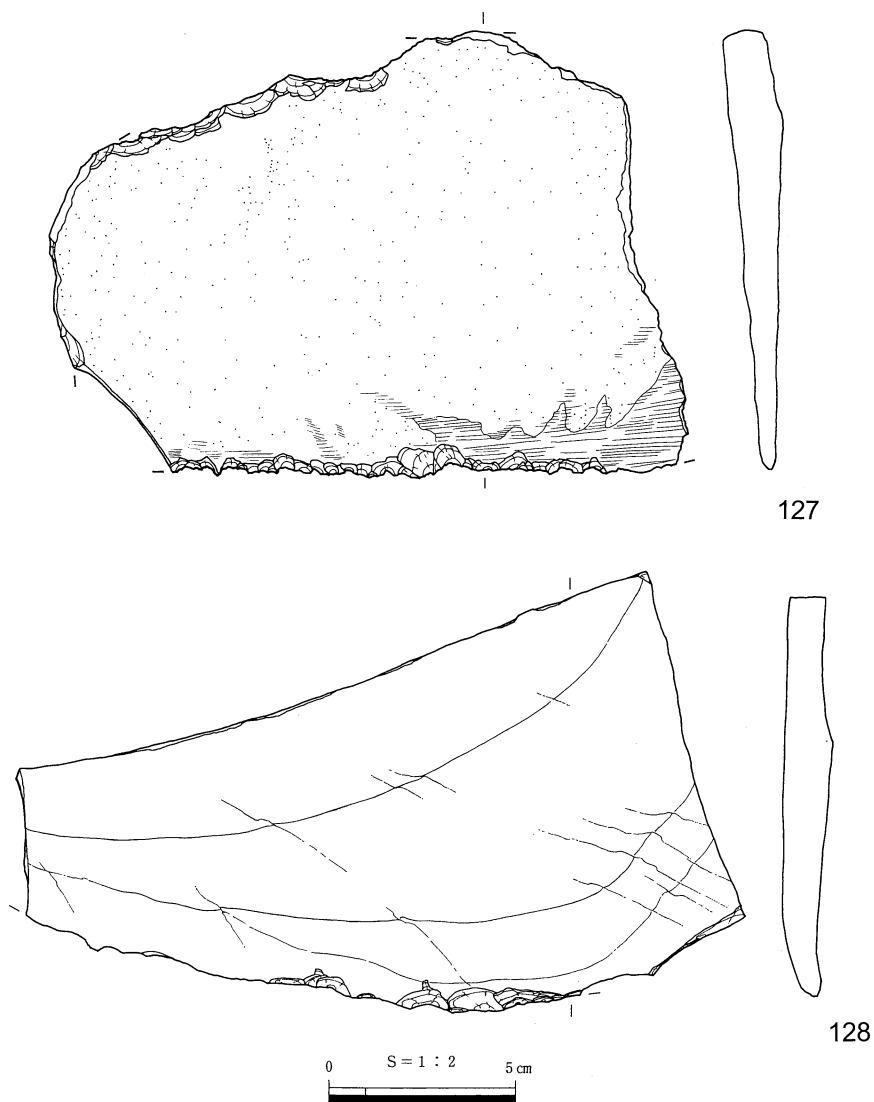
挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	全長	最大幅	最大厚	石材	取上番号
124	大型石庖丁	5区	⑤層	弥生前期末～中期前葉	(9.2)	12.8	2.2	石英安山岩	16096
125	大型石庖丁	4区	⑥層相当	弥生前期末～中期前葉	(12.5)	(11.3)	2.2		5705
126	大型石庖丁	4区	⑥層相当	弥生前期末～中期前葉	(12.8)	10.2	1.8		5780

132～136は後期～古墳前期初頭に位置付けられる。132、133ともに刃部の再生を行っているが、132ではその微細な剥離面さえもかなり摩滅している。133には鈕孔かと思われる穿孔が認められる。134～136の刃部にも細かな加工痕を認めることができ、136には一部摩滅も観察できる。

137は時期が確定できない。刃部を全体的に再生しているが、その磨耗度合いを見るとさらに使い込まれたことが分かる。

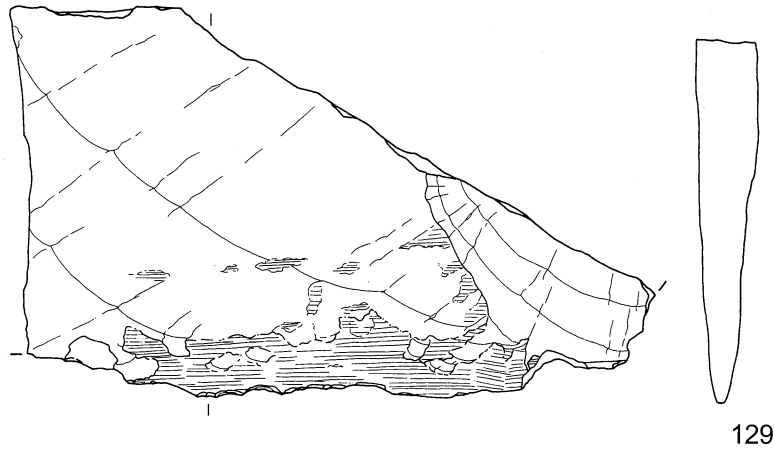
これらは大型の板状剥片を素材としているのであるが、表面には自然面・節理面のほか2～3枚程度の大きなネガティブな面を残すものがほとんどである。同じ原材から連続的に素材剥片を剥ぎ取っていったものと思われ、二次的な整形剥離をほとんど加えることなく使われたようである。

大型石庖丁はイネ科植物の切断を主な用途とする石器とされている⁽¹²⁾。たしかに125や132の刃部の光沢は著しいものがあり、単に使用により摩滅したというより何かが付着したものと思われる。こうした刃部のあり方や大型である程度の重量があることを考えると、残穢処理や草刈に用いられたというのも頷ける。素材面残置タイプが圧倒的多数を占めるのも、刃部再生を繰り返す必要があるためであると考えれば理解しやすい。そうすると石庖丁の形態そのままに、大きさのみ大型化した全面研磨タイプは異なった機能を有していたのかもしれない。

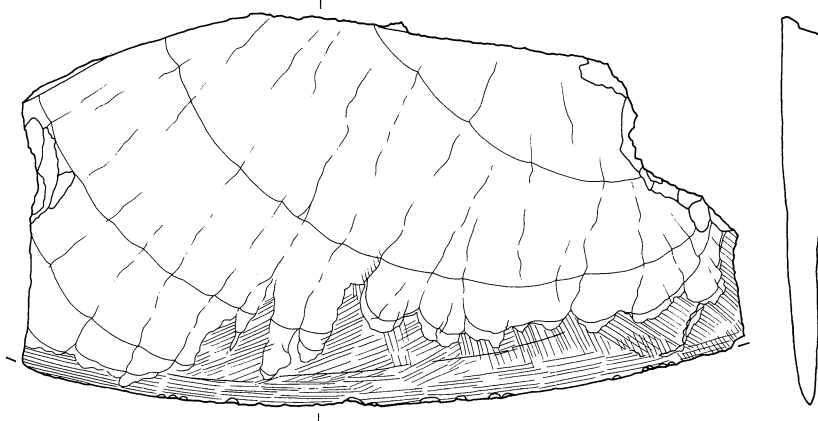


第170図 石器・大型石庖丁（2）

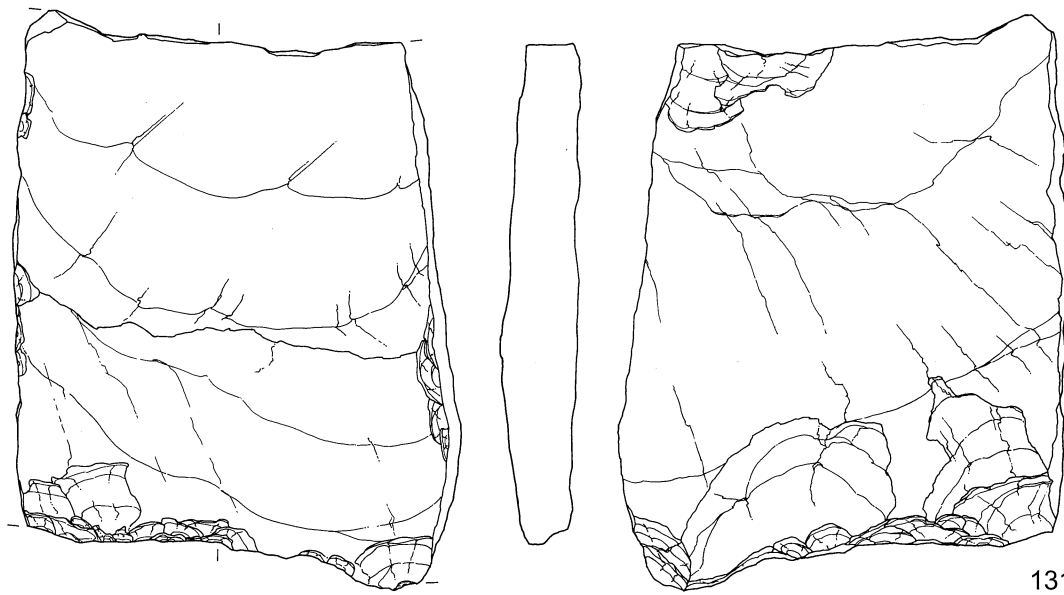
挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	全長	最大幅	最大厚	石材	取上番号
127	大型石庖丁	4区	㊦層相当	弥生前期末～中期前葉	(16.0)	11.7	1.3		5666
128	大型石庖丁	7区	M層	弥生前期末～中期前葉	(19.5)	(11.8)	1.3	石英安山岩	44805



129



130

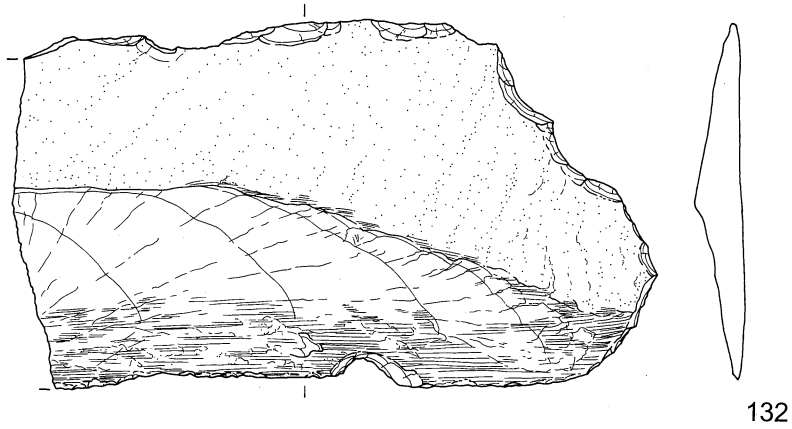


131

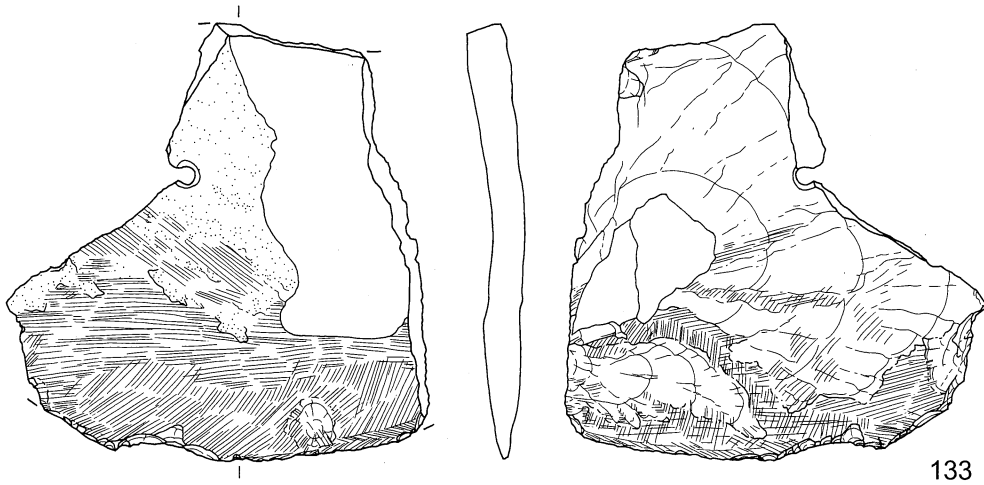
0 S = 1 : 2 5 cm

第171図 石器・大型石庖丁 (3)

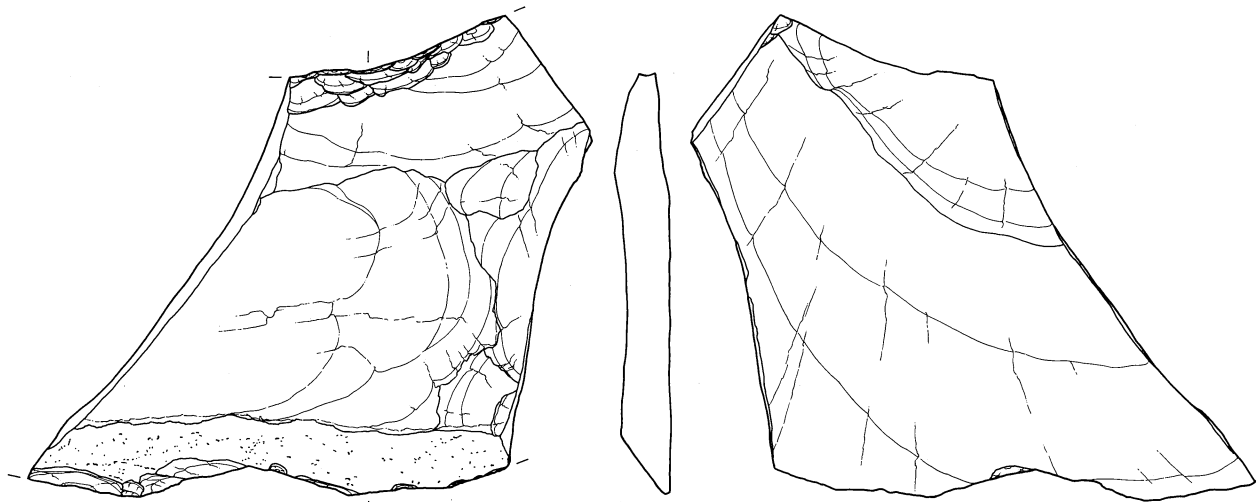
挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	全長	最大幅	最大厚	石材	取上番号
129	大型石庖丁	5区	③層	弥生中期中葉～後葉	(16.8)	10.0	1.7	石英安山岩	13618
130	大型石庖丁	4区	③層相当	弥生中期中葉～後葉	(19.0)	10.4	1.0	石英安山岩	6172
131	大型石庖丁	7区	J～K層	弥生中期後葉	(11.9)	(15.4)	2.1		38631



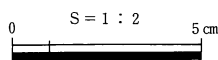
132



133

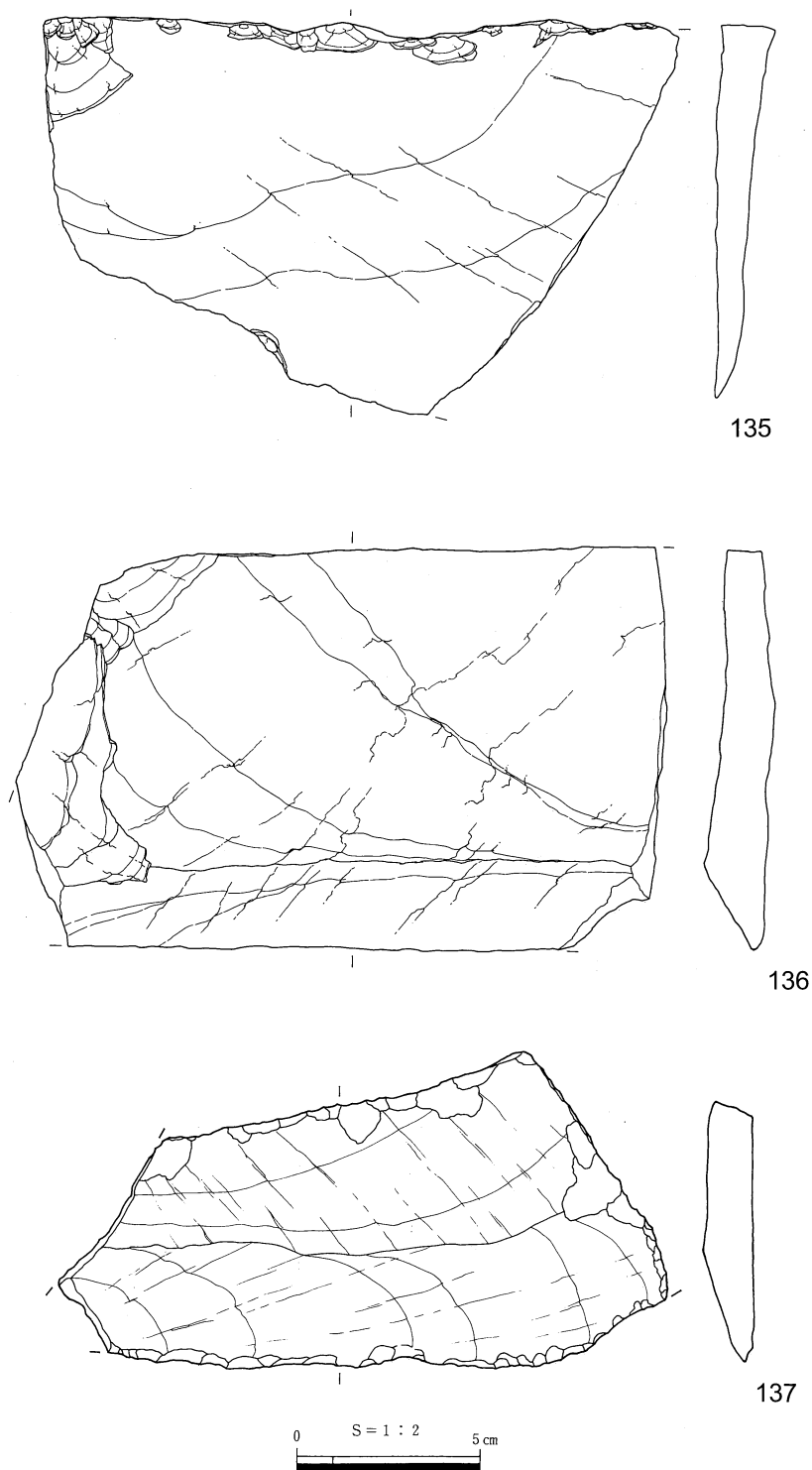


134



第172図 石器・大型石庖丁(4)

插图番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	全長	最大幅	最大厚	石材	取上番号
132	大型石庖丁	4区	②層相当	弥生後期初頭～古墳初頭	(16.6)	9.7	1.2	閃緑ヒン岩	6163
133	大型石庖丁	5区	②層	弥生後期初頭～古墳初頭	(11.0)	11.6	1.1		8261
134	大型石庖丁	7区	H層	弥生後期	(14.9)	(12.9)	1.6		37293



第173図 石器・大型石庖丁 (5)

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	全長	最大幅	最大厚	石材	取上番号
135	大型石庖丁	7区	SD66	弥生後期初頭~古墳初頭	(17.3)	(10.9)	1.6		40331
136	大型石庖丁	7区	SD66	弥生後期初頭~古墳初頭	(17.6)	11.1	1.9		40344
137	大型石庖丁	5区	①~②層	弥生中期~奈良	(16.6)	(8.6)	0.9		10184

石鎌 (第174図) 12点出土したうちの3点を示す。

138は研磨により形を整えたうえ、先端部の上下両端に打ち欠きにより刃を設けたものである。基部には接着剤かと思われる物質が付着している。これは国道調査区で出土した結合式ヤスの固定に用いられていたものと類似しており⁽⁴³⁾、今回報告の骨角製ヤスにも一部付着している(368ページ)。組み合わせて使うさまざまなものに

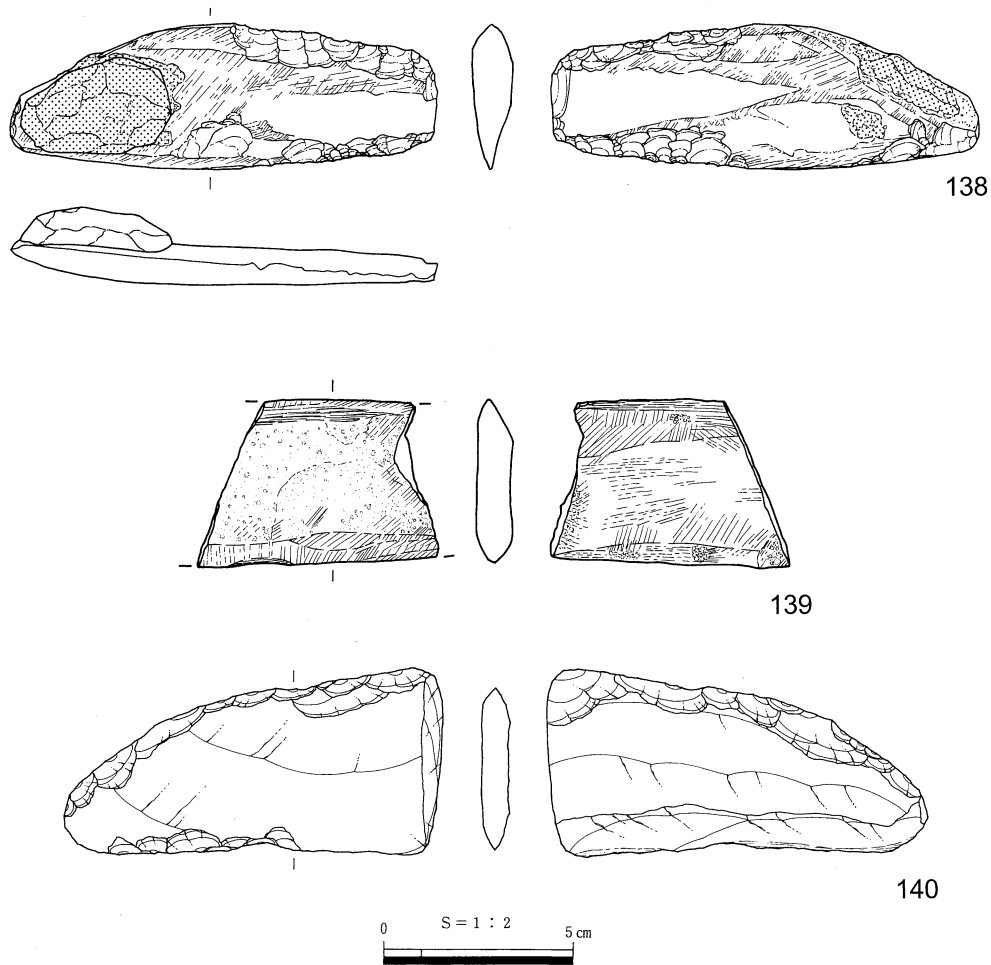
利用されていたものであろう。表面には盛り上がるほどの量が見られる反面、裏面にはわずかに認められるのみである。木鎌の形態を参考にすると刃の長軸方向と直交するように柄が取り付けられたのであろうが、実際どのような姿であったのかは想像するしかない。国道調査区出土のヤスは中柄に鈕で緊縛した後、白色粘土状物質で包んでいた。138には緊縛痕跡はないが、鎌としての使用を考えると相当強固に固定されていたのではないかとと思われる。前期末～中期前葉の遺物包含層からの出土である。

139、140は後期～古墳前期初頭のものである。刃部の作り出しが似ており、139は上下両端を研磨して両刃に仕上げている。140は器体の風化が激しいが、刃部も含めて縁辺を整形剥離により作る。この後刃縁を研磨するものであったかもしれない。

図示したもの以外は未製品も含め139と同様のものである。器体が湾曲せず、刃部を剥離痕により作る138は例外的な存在である。

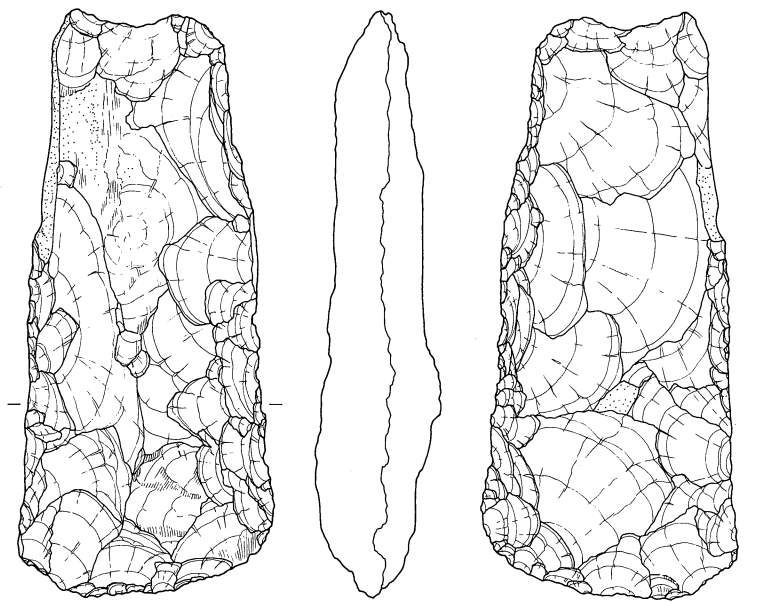
石鎌 (第175図) 図示した2点のみの出土である。

141は前期末～中期前葉のものである。刃部にかけて幅広となる撥形を呈する。器体を覆う剥離面の稜線はシャープさを残しており、使い込まれる前のものであろう。自然面の様子から角礫を素材にしていると思われるが、素材の面をうまく取り込んでいる。142は中期中葉～後葉に属する。表裏両面に素材面を大きく残し、周縁を加工することにより整形している。各縁辺とも潰れが見られ、側縁のものは意図的なものか。刃部は使用により摩滅している。線条痕は長軸に沿う方向と斜め方向のものが見られる。

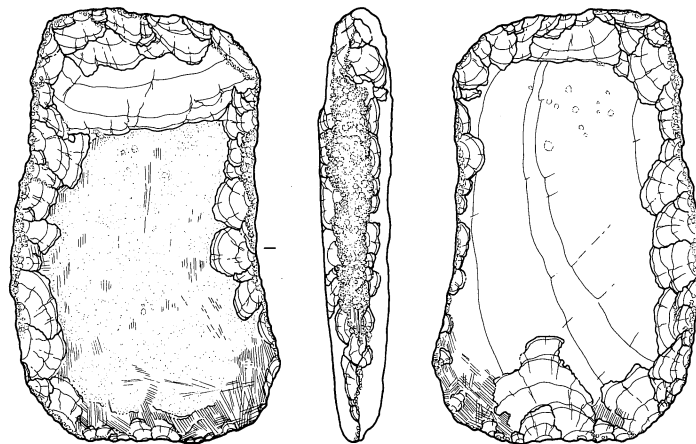
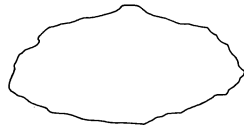


第174図 石器・石鎌

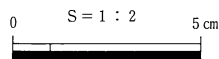
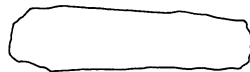
挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	全長	最大幅	最大厚	石材	取上番号
138	石鎌	5区	⑥層	弥生前期末～中期前葉	(11.2)	4.0	1.0		17463
139	石鎌	5区	SD15	弥生後期初頭～古墳初頭	(6.3)	4.5	1.0		12395
140	石鎌	7区	②層	弥生後期初頭～古墳初頭	9.8	4.9	0.7		35607



141



142

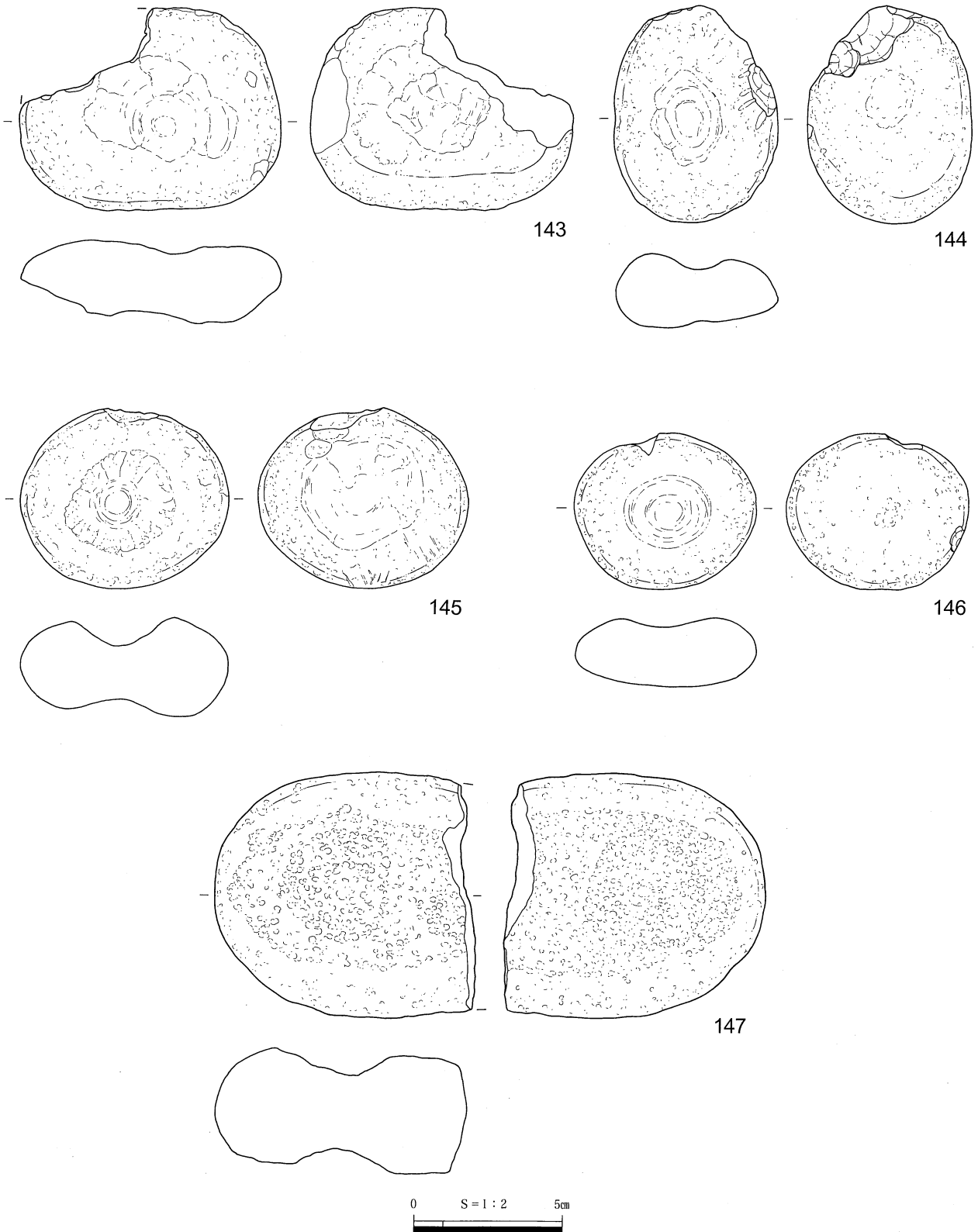


第175図 石器・石鎌

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	全長	最大幅	最大厚	石材	取上番号
141	石鎌	4区	⑥層相当	弥生前期末～中期前葉	15.3	6.7	3.2		5616
142	石鎌	5区	SD9	弥生中期中葉～後葉	11.5	6.8	1.9		9455

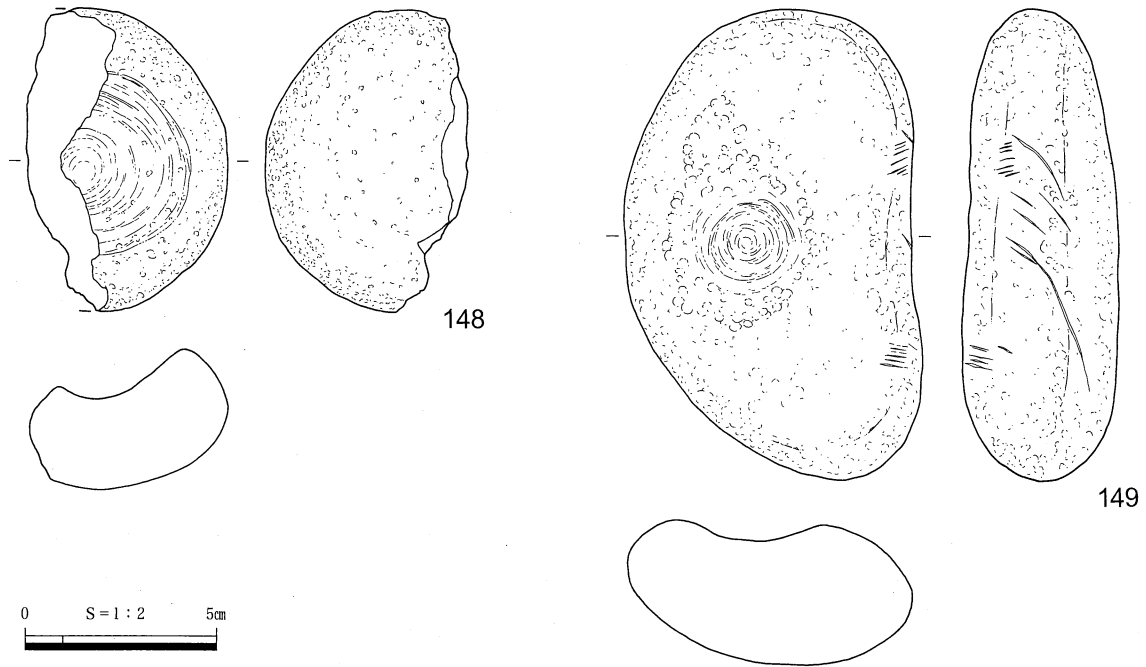
凹石（第176、177図） 敲石C類と区別しにくいものである。『青谷上寺地3』でも述べたが、小型で軟質な石材を用いる傾向があることと、凹みは平面円形で、平滑となることで区別している。第176図には凹みが両面に見られるものを、第177図には片面のみのものを掲げた。図示したのは前者が多いのであるが、実際には出土した26点のうち、不明なものを除いて片面のみのもの17点、両面に認められるもの6点と、片面のみのものが多い。

146は裏面にかすかな使用痕があることから両面使用としたものである。149は側縁に擦痕が観察できるが、凹石の機能との係わりは不明である。



第176図 石器・凹石 (1)

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	全長	最大幅	最大厚	石材	取上番号
143	凹石	5区	SK69	弥生中期中葉～後葉	6.9	8.8	3.1		15880
144	凹石	5区	①層	弥生中期～奈良	7.4	5.5	2.9		11474
145	凹石	4区	不明	不明	6.1	7.1	3.4		5492
146	凹石	5区	不明	不明	5.3	6.1	2.8		11687
147	凹石	5区	①層	弥生中期～奈良	8.4	(7.8)	5.1		10375



第177図 石器・凹石（2）

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	全長	最大幅	最大厚	石材	取上番号
148	凹石	5区	⑤層	弥生前期末～中期前葉	8.0	(5.3)	3.9		16406
149	凹石	5区	SK143	弥生後期末～古墳初頭	12.5	7.8	4.1		9127

漁具

石錘（第178～180図） 石錘の分類は下條、和田によった⁽¹⁴⁾。

第178、179図は縦方向または横方向に溝をもつものである。九州型石錘の範疇で捉えていいものだろう。

150、151は縦に1条、上下両端に1条ずつの器体を巡る溝をもち、それ以外にも横方向に器体を巡らない溝が見られる。

152～154は縦横それぞれ中央に十字状に溝を巡らす。152のみが縦の溝を四方に巡らし、153は器体を菱形にする。第178図に掲げたものは小形AⅡ型とされたもの、またはそれに近いものである。

156～161は横の溝が見られない。小形AⅠ型とされたもの、あるいはそれに近いものである。溝の巡りは156、157が四方、158、159が三方、160、161が二方と、バリエーションがある。161は研磨による整形痕を粗く留める。

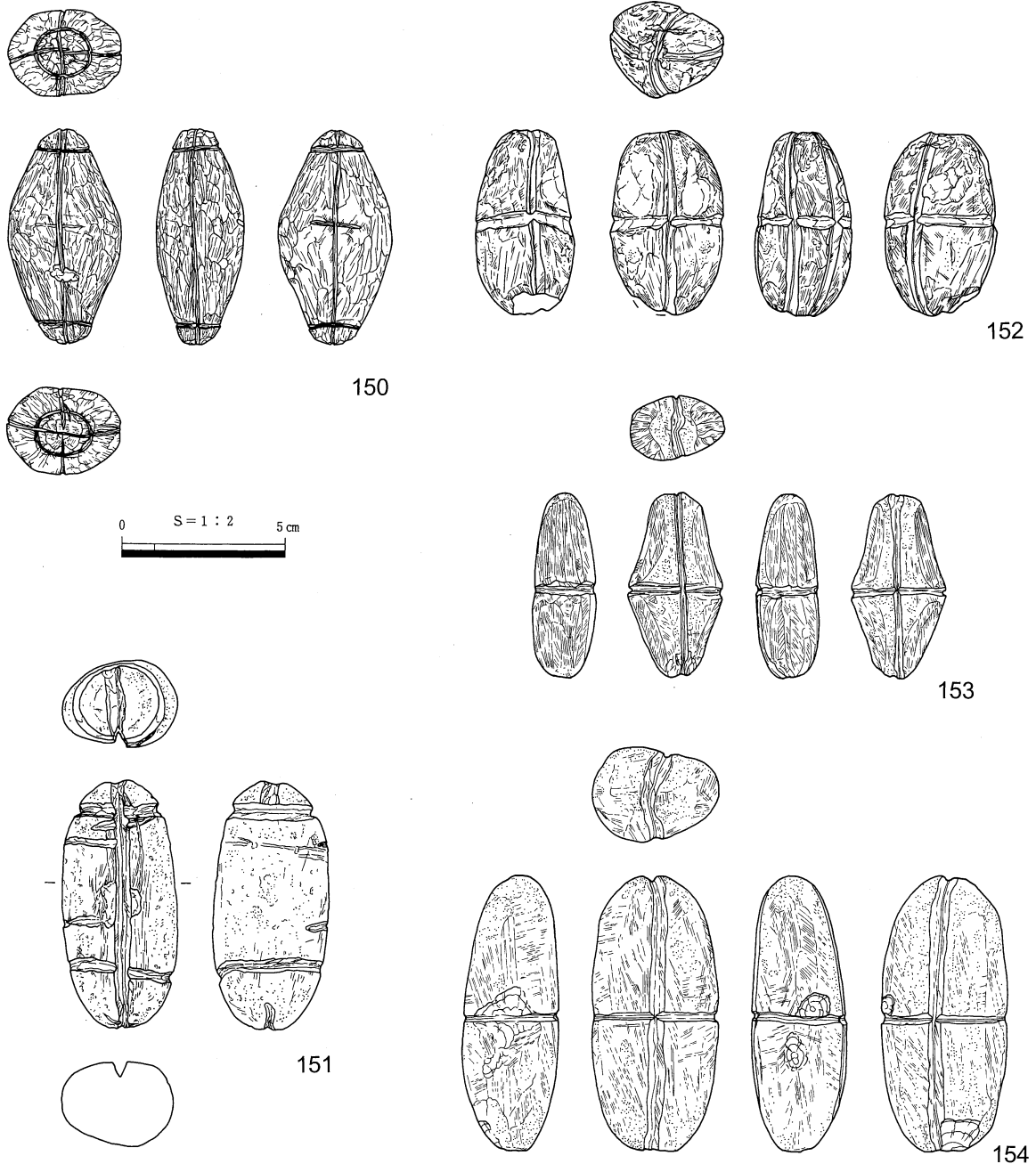
155は重量676gを測るものである。上に述べた小型のものとは異なり、大形BⅠ型に分類されるものであろう。長軸方向と短軸方向にそれぞれ溝が見られるが、長軸方向のものは短軸方向のものと交わる部分より下に延びない。

第180図には瀬戸内型石錘を掲げた。

162は半分を欠失する。器体を巡る溝には摩滅が認められる。164は敲石AⅡ類とすべきかもしれない。162、163に比べ大きめの礫を使用しており、器体本体と上下両端に敲打痕が顕著である。このうち器体本体の敲打痕が帯状に全周を巡り、転用の可能性も考えここに掲載した。

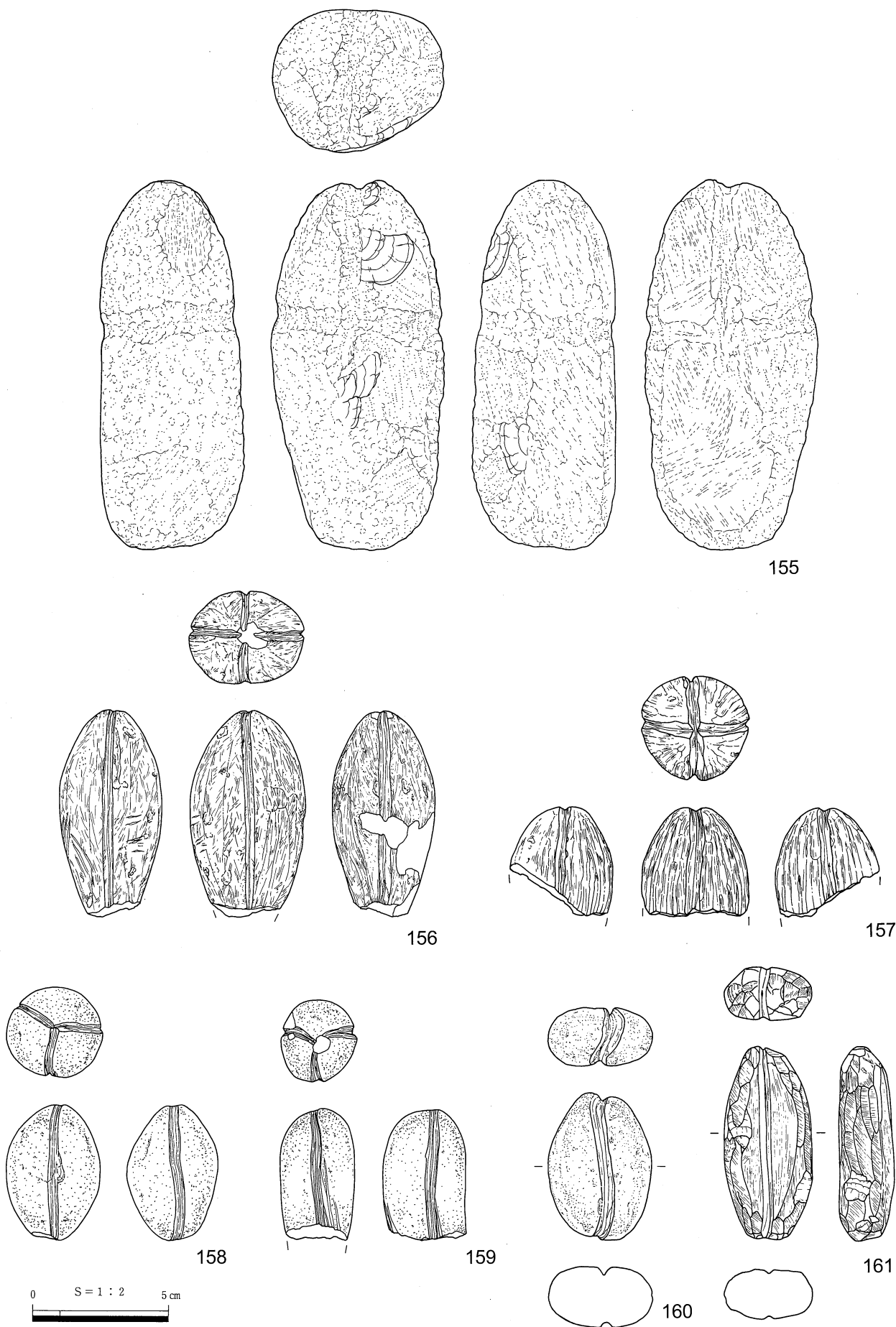
県道調査区からは33点の石錘が出土している。石錘が漁具であるという前提で見れば、この点数は骨角製漁具の豊富さからすると少ないように思う。用途不明の項で示す棒状石製品の扱いを紐かけと理解すれば石錘と見れなくもない。あるいは他の素材のものがあったのであろうか。土製品のうちでも確実に土錘と分かる管状土錘は若干の出土を見たのみであり、大量に認められた球状の土玉は第131～133図に示したように環状に結わえられた木製の輪にひとつずつ取り付けられる例が多く見られることから、漁網錘とはいえないようである。本章第6節の木器の項で斧の身と柄が数のうえで合致せず、袋状鉄斧柄が著しく多いことを述べたが、こうした例に示されるように出土遺物の内容はある程度の偏りを伴う場合があるのかもしれない。

出土した石錘33点のうち九州型あるいはそれに近いものは22点を数える。時期的には中期中葉～後葉が7点、後期～古墳前期初頭が9点、①層出土が5点、時期不明が1点である。九州地方との関連を窺わせる漁具としては、この他に骨角製の結合式釣針がある。鹿角製の軸部に猪牙製の針を組み合わせる特徴的なものであるが、軸部・針部あわせて県道調査区だけでも21点出土しており、時期的には前期末～中期前葉1点、前期～中期1点、中期中葉～後葉13点、後期～古墳前期初頭3点、時期不明3点の内訳を示し、石錘より古い時期に偏ってはいるが、日本海沿岸を通じた交流が予想できる。とくに155の大型石錘は周辺地域に他に類例もあり、今後注意しておく必要がある。

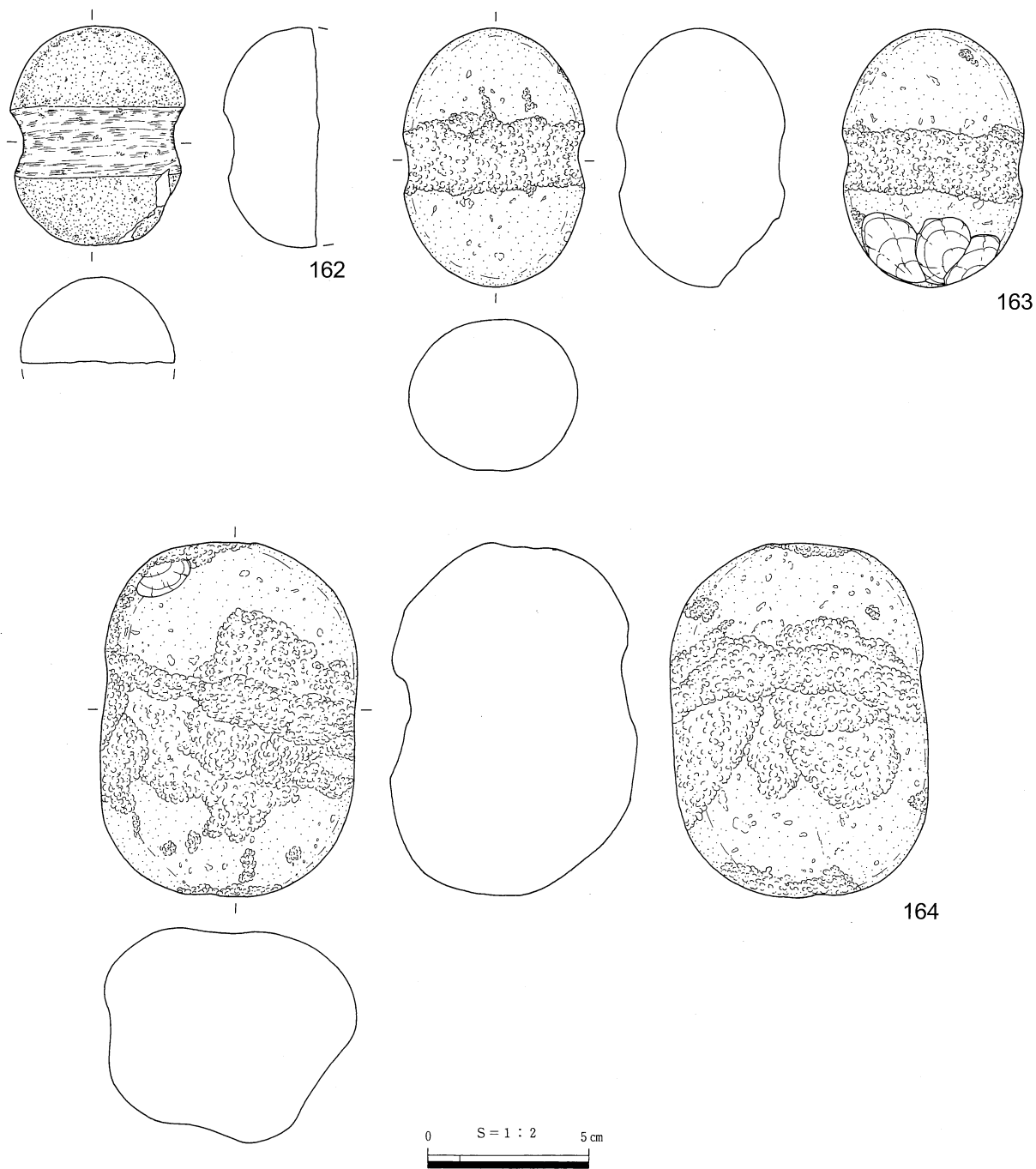


第178図 石器・石錘(1)

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	全長	最大幅	最大厚	石材	取上番号
150	石錘	7区	1層	弥生中期中葉	6.5	3.4	2.2		40733
151	石錘	7区	②層	弥生後期初頭～古墳初頭	7.5	3.5	2.6		37144
152	石錘	7区	SD66	弥生後期初頭～後葉	5.6	3.4	3.0		39385
153	石錘	4区	SD11	弥生後期初頭～後葉	5.6	2.8	1.8		3408
154	石錘	5区	②層	弥生後期初頭～古墳初頭	8.4	3.8	2.9		13024



第179圖 石器・石錐(2)



第180図 石器・石錘（3）

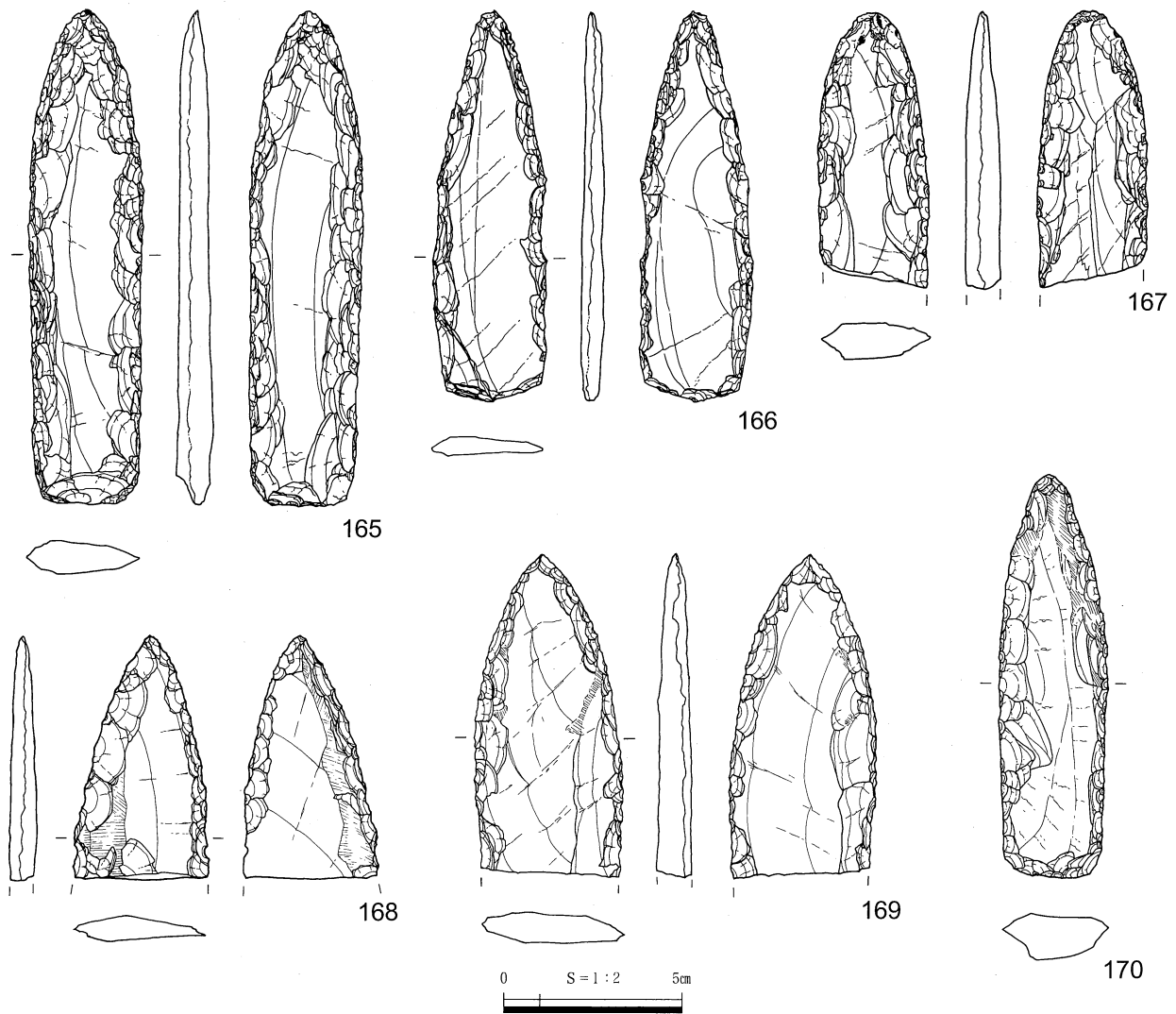
挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	全長	最大幅	最大厚	石材	取上番号
155	石錘	5区	①層	弥生中期～奈良	13.7	6.3	5.3		9809
156	石錘	8区	SD57	弥生後期初頭～後葉	(7.7)	4.2	3.8		34600
157	石錘	7区	②層	弥生後期初頭～古墳初頭	(4.0)	3.9	3.8		35954
158	石錘	7区	I層	弥生中期後葉	5.0	3.4	3.4		36452
159	石錘	7区	①層	弥生中期～奈良	(4.8)	2.8	3.0		36955
160	石錘	7区	①層	弥生中期～奈良	5.5	3.8	2.2		36985
161	石錘	4区	①層	弥生中期～奈良	7.2	3.2	1.9		1834
162	石錘	7区	N層	弥生中期中葉	6.8	5.5	(3.0)		44904
163	石錘	4区	SD11	弥生後期初頭～後葉	8.1	5.6	5.2		5887
164	石錘	5区	①層	弥生中期～奈良	11.0	8.0	7.6		9612

武具

打製石剣（第181、182図） サヌカイト製の剥片を素材とし、基本的に周縁加工により仕上げる。

165は丁寧な整形剥離により左右対称に仕上げている。先端部は鋭くない。167も下半を欠失するが、同様の形状であったのだろう。166は整形剥離がやや安定しないものだが、尖った先端部をもつ形状を作り出している。168～170は研磨痕を認めるものである。168、170に顕著なように周縁を巡る整形剥離が研磨痕を切っており、打製石剣の整形自体に研磨を用いたものでないことが分かる。170には研磨痕以外に素材面に残る光沢を認めることができる。高田浩司によれば吉備南部における中期の打製石剣は打製石庖丁を素材として製作されたと考えられており⁽¹⁵⁾、打製石庖丁は吉備南部での製作は認められず、製品状態での搬入が想定されており、それを素材にしていたらしい。本遺跡の打製石剣のうちとくに研磨痕や光沢を有するものが打製石庖丁を素材としていたものならば、打製石庖丁が認められない山陰地方へは製品搬入も考えられることになる。

171以下は欠損品である。171は先端部にしては幅が広い。整形剥離の段階で折損したのだろう。172は上下に



第181図 石器・打製石剣（1）

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	全長	最大幅	最大厚	石材	取上番号
165	打製石剣	7区	K層	弥生中期後葉	14.0	3.2	1.0		40888
166	打製石剣	7区	N層	弥生中期中葉	11.1	3.2	0.6		44070
167	打製石剣	8区	D層	弥生中期～後期	(7.9)	3.1	1.0		26051
168	打製石剣	7区	I層	弥生中期後葉	(6.9)	3.8	0.8		36341
169	打製石剣	5区	②層	弥生後期初頭～古墳初頭	(9.1)	4.2	1.0		9408
170	打製石剣	4区	③層相当	弥生中期中葉～後葉	(11.4)	3.0	1.3		5486

わたり欠失する。裏面は自然面に覆われている。173は側縁のカーブの具合から打製石剣でない可能性がある。175は整形剥離途中で折れたのであろう。表裏両面とも素材面を留めないのが本遺跡での一般的な姿と異なる。

打製石剣と認定できる資料は未製品を含め14点で、定型化したものは中期中葉より見られ、後期に続いている。

磨製石剣 (第183図) 5点出土したうちの2点を図示した。

176は基部付近の破片で、小型である点が気になるがここに含める。磨製石剣の姿としては表裏両面の中心に鑄がとおり、横断面形は菱形となるのが一般的だが、本例は鑄が今ひとつ明確でない。177も欠損が大きく、鑄の様子は観察できない。磨製石剣としてはやや幅広か。

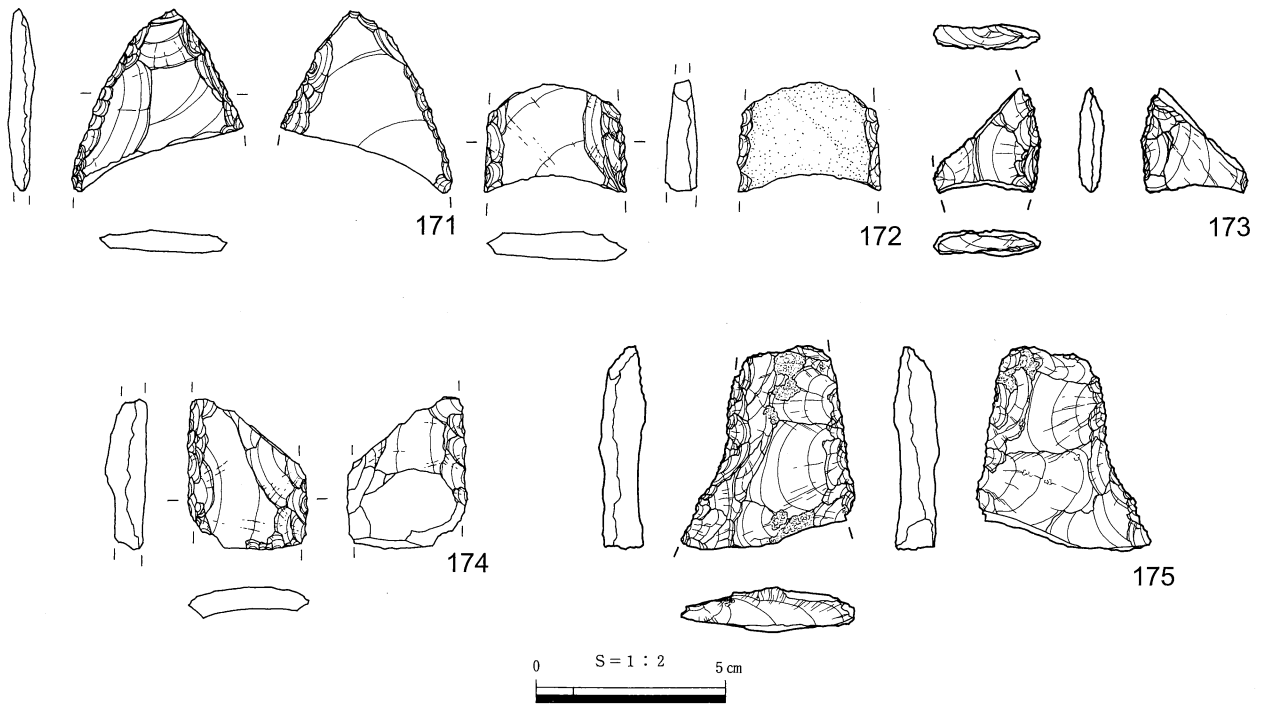
178は一部残るのみであるが、残存している範囲での最大幅6.5cm、厚さ1.3cmを測る大型のものである。表裏両面とも研磨により丁寧に仕上げられ、表面にはそれほど明瞭でないながらも鑄があり、横断面形は菱形に復元できる。この石器は下條のいう石矛に該当するもので、前期末～中期前葉の遺物包含層から出土していることも、この石器の出現時期と矛盾しない⁽¹⁶⁾。

打製石鏃 (第183図) 未製品を含め38点出土している。時期の確定できないものも多いが、前期末～中期後葉に収まるものが多く、後期に降るものは若干例のみである。

179は黒曜石製で平基式、他はサヌカイト製である。180、181が凹基式、それ以外は平基式に分類できる。187は自然面を広く残し、未製品であろう。

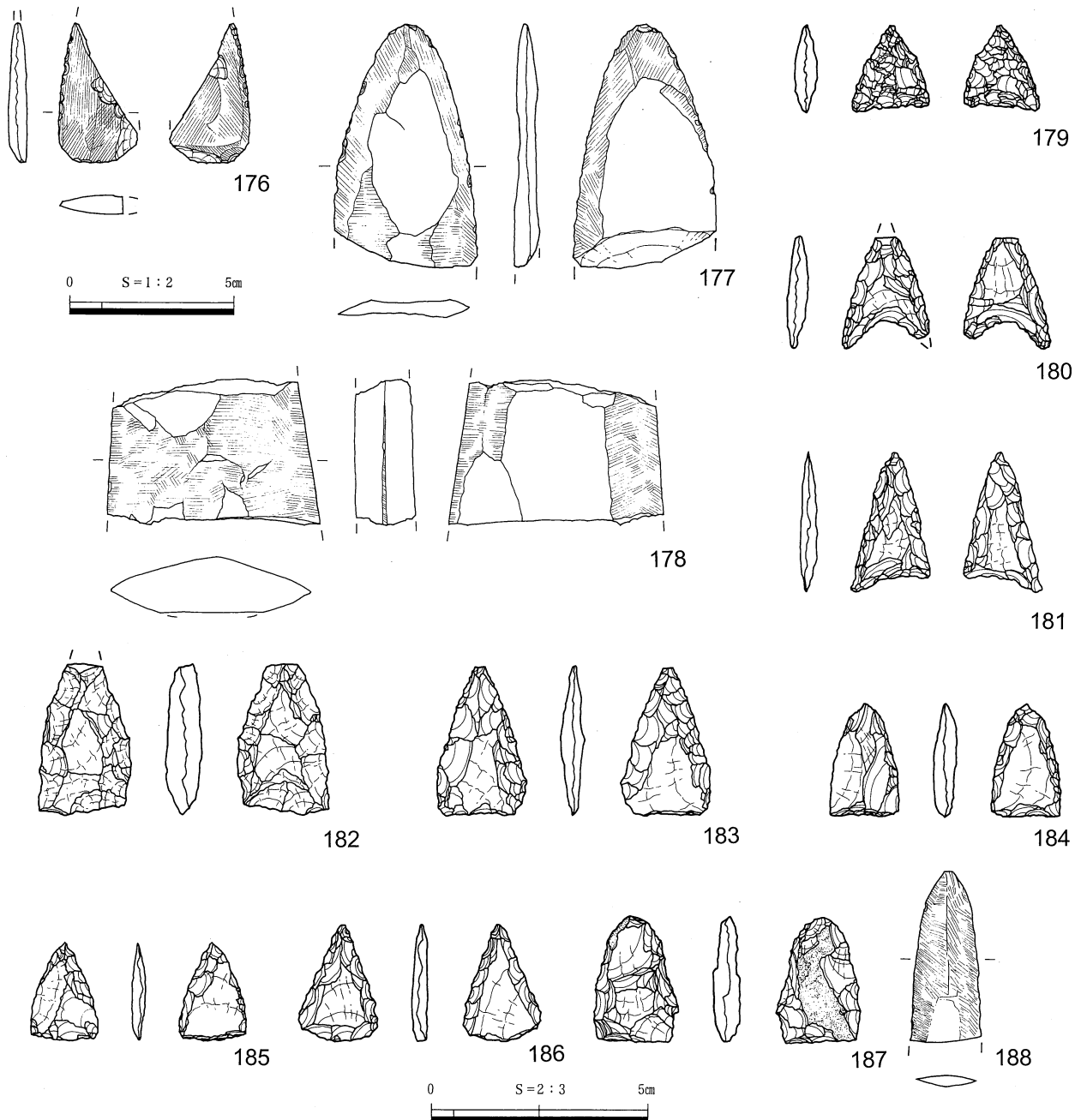
磨製石鏃 (第183図) 基部を欠失するもので、表裏両面には弱い鑄がとおり、横断面形は菱形となる。前期末～中期前葉の土坑内より出土し、本遺跡の磨製石鏃の確実な例としては唯一のものである。

環状石斧 (第184、185図) 6点の出土を見た。成品で完存するものはない。190の表面には柄孔の周囲0.9cmの幅で同心円状の凹みが生じている。研磨整形の際のものとは思えず、穿孔具が当たってできたものか、環状石斧に取り付けられた柄との接触により生じた可能性が考えられる。前者ならば穿孔具の錐部と体部の境に幅1.0cm



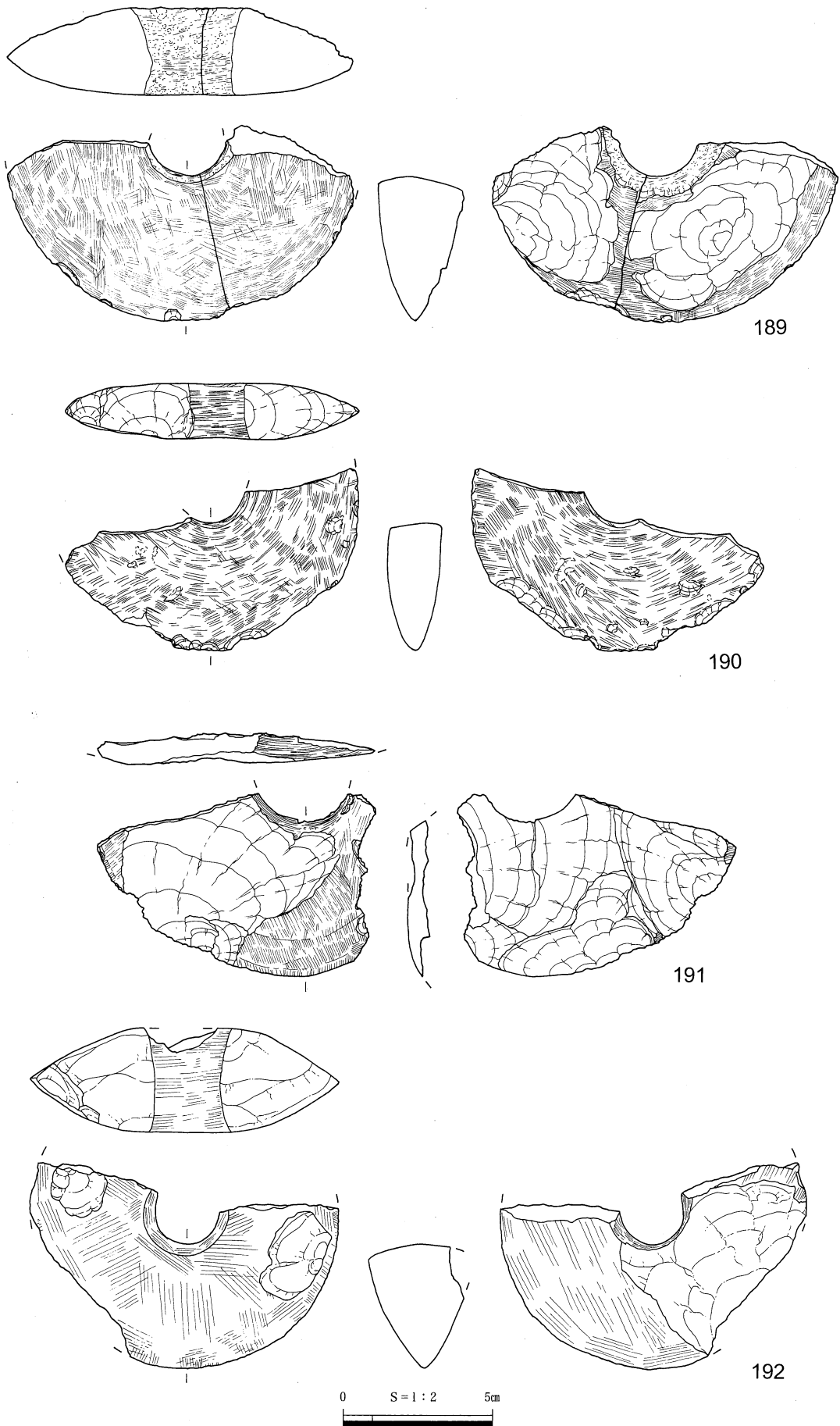
第182図 石器・打製石剣 (2)

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	全長	最大幅	最大厚	石材	取上番号
171	打製石剣	4区	③層相当	弥生中期中葉～後葉	(4.8)	(4.5)	0.6		5541
172	打製石剣	5区	②層	弥生後期初頭～古墳初頭	(2.8)	3.7	0.9		12362
173	打製石剣	5区	SK150	弥生後期末～古墳初頭	(2.7)	2.8	0.7		10782
174	打製石剣	5区	①層	弥生中期～奈良	(4.0)	3.2	1.0		10530
175	打製石剣	4区	③層相当	弥生中期中葉～後葉	(5.0)	(4.1)	1.1		5538



第183図 磨製石剣、打製石鏃、磨製石鏃

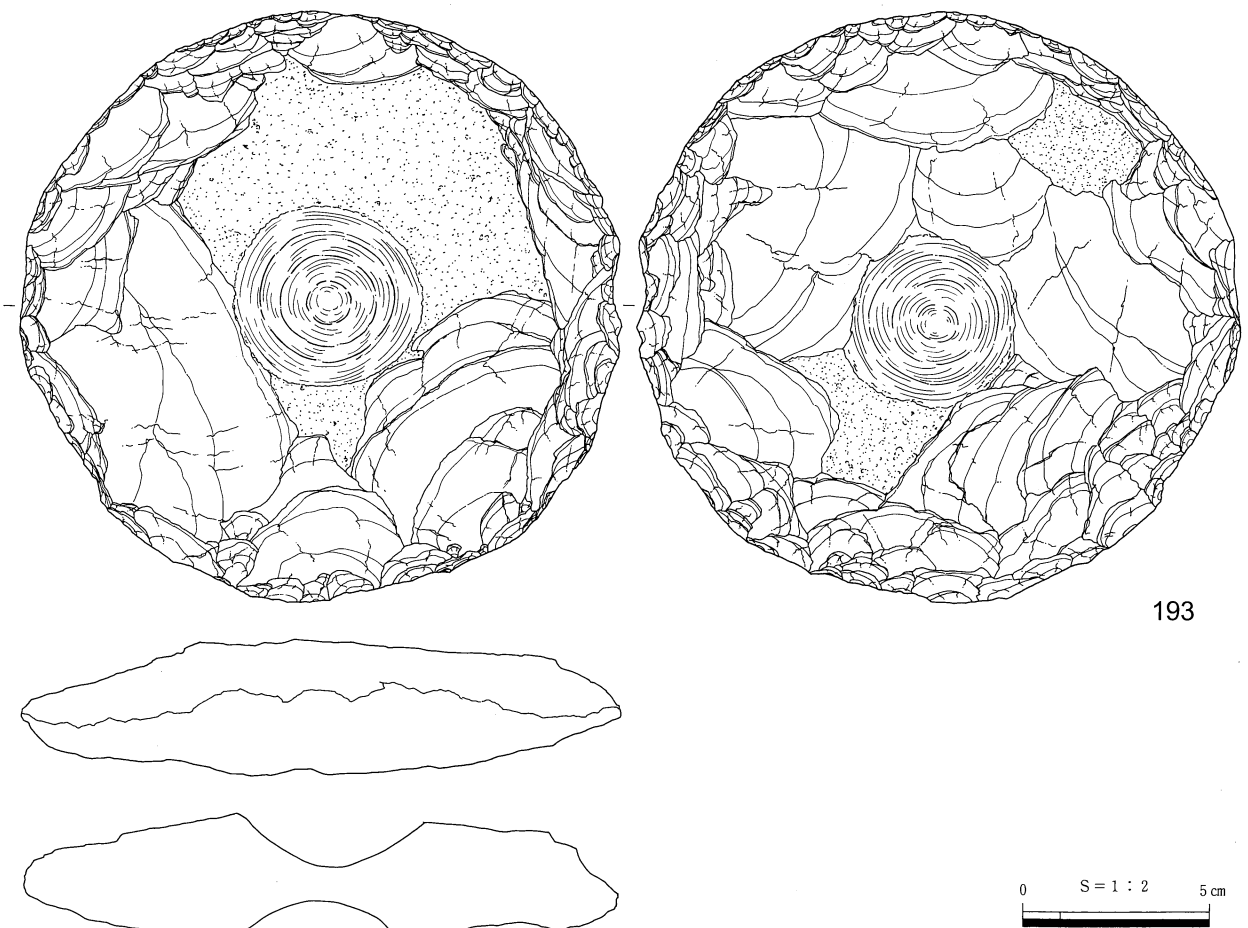
挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	全長	最大幅	最大厚	石材	取上番号
176	磨製石剣	5区	⑥層	弥生前期末～中期前葉	(4.3)	2.4	0.6		17528
177	磨製石剣	5区	②層	弥生後期初頭～古墳初頭	(7.5)	4.3	0.8	ガラス質安山岩	9236
178	石矛	5区	⑤層	弥生前期末～中期前葉	(4.4)	(6.5)	(1.3)	黒色頁岩	16139
179	打製石鏃	5区	⑤層	弥生前期末～中期前葉	2.0	1.7	0.5		16201
180	打製石鏃	5区	①層	弥生中期～奈良	(2.6)	2.0	0.4		10127
181	打製石鏃	4区	①層	弥生中期～奈良	3.2	1.8	0.4		1200
182	打製石鏃	5区	⑤層	弥生前期末～中期前葉	(3.5)	2.1	0.8		16806
183	打製石鏃	5区	③層	弥生中期中葉～後葉	3.5	2.1	0.6		13844
184	打製石鏃	5区	③層	弥生中期中葉～後葉	2.7	1.6	0.5		13608
185	打製石鏃	5区	焼土33	弥生後期末～古墳初頭	2.2	1.6	0.3		13495
186	打製石鏃	5区	①層	弥生中期～奈良	2.7	1.8	0.3		10212
187	打製石鏃	5区	①層	弥生中期～奈良	2.9	2.0	0.6		11591
188	磨製石鏃	6区	SK318	弥生前期末～中期前葉	(4.0)	1.0	0.2		48087



第184図 石器・環状石斧(1)

ほどもある面がなければならぬ。石製穿孔具でそのような形態のものは知らず、穿孔具が柄に装着されて使用された際の柄の先端部分との接触で生じたものと考えられよう。後者であった場合、この環状石斧の柄は径3.0cmほどであったことになるが、柄との接触でここまで明瞭な凹みが生じるものか疑問である。

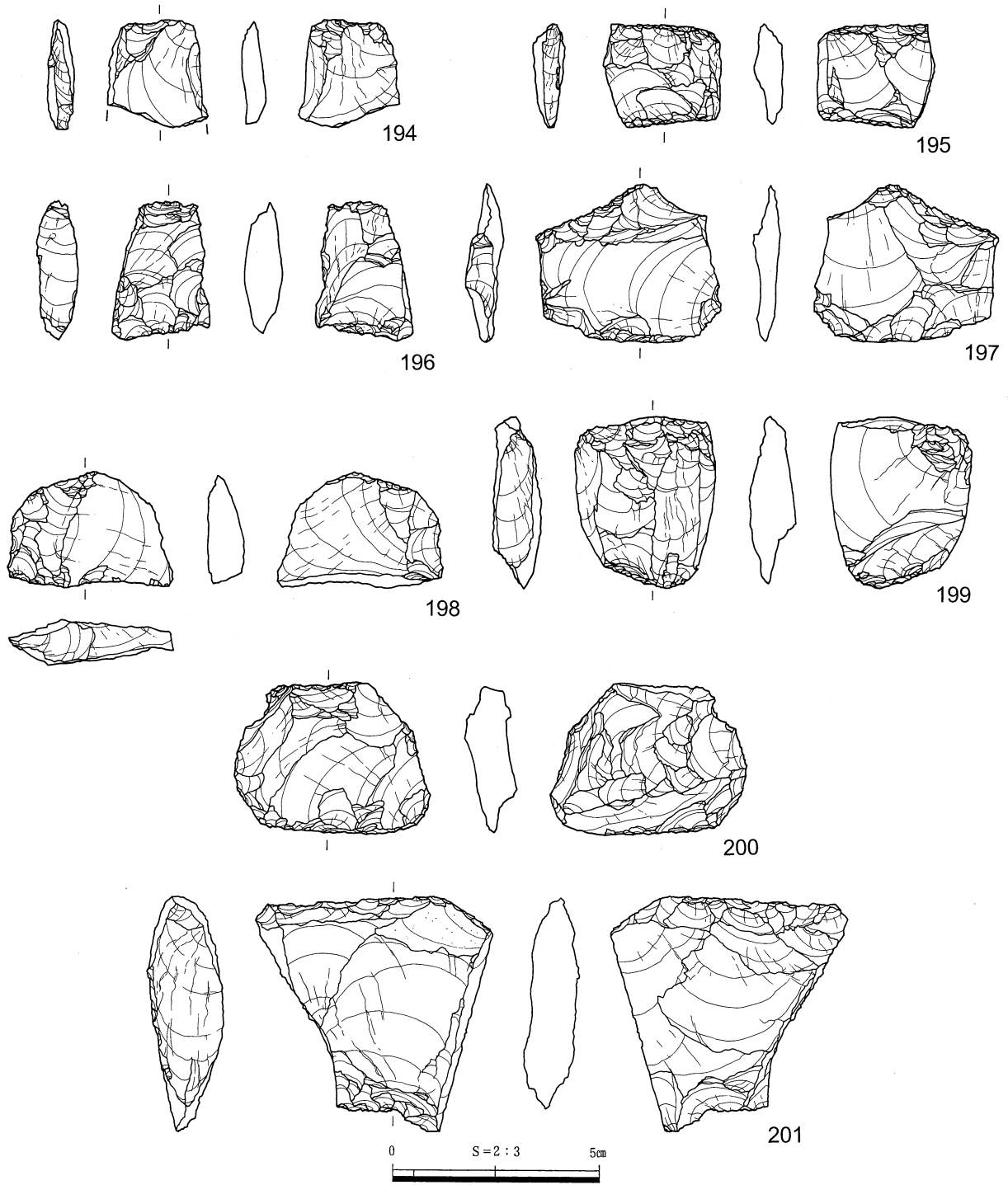
193は未製品である。先の成品の復元径が10.0cm程度であるのに比べ、本例は径16.0cmと大きい。表裏両面に自然面を有することから板状の礫を素材にしていると思われ、周縁を整形剥離により加工し円形に作り上げている。中心には両面から柄孔が穿孔される途中で終わっている。穿孔部には一部敲打痕と思われる痕跡を残すので、あらかじめ敲打によりくぼませてから穿孔を行ったようだ。環状石斧におけるこのような穿孔形態は大阪府池上遺跡の製作工程復元で知られていること⁽¹⁷⁾、山陰地方でも鳥根県西川津遺跡でも確認されている⁽¹⁸⁾。近畿地方では石庖丁の鈕孔穿孔にも敲打を駆使しており⁽¹⁹⁾、石器の穿孔技術として一般的であったようだ。山陰地方では石庖丁の鈕孔穿孔に敲打は伴っておらず、近畿地方とは異なる様相を示す。むしろ伐採石斧で述べたように器体整形方法として敲打を多用する特色がある。193の環状石斧未製品の柄孔は大型であることから、器体整形そのものに敲打が用いられていないという問題もあるが、器体整形技術の一環として穿孔工程に敲打が施されたと考えられないだろうか。



193

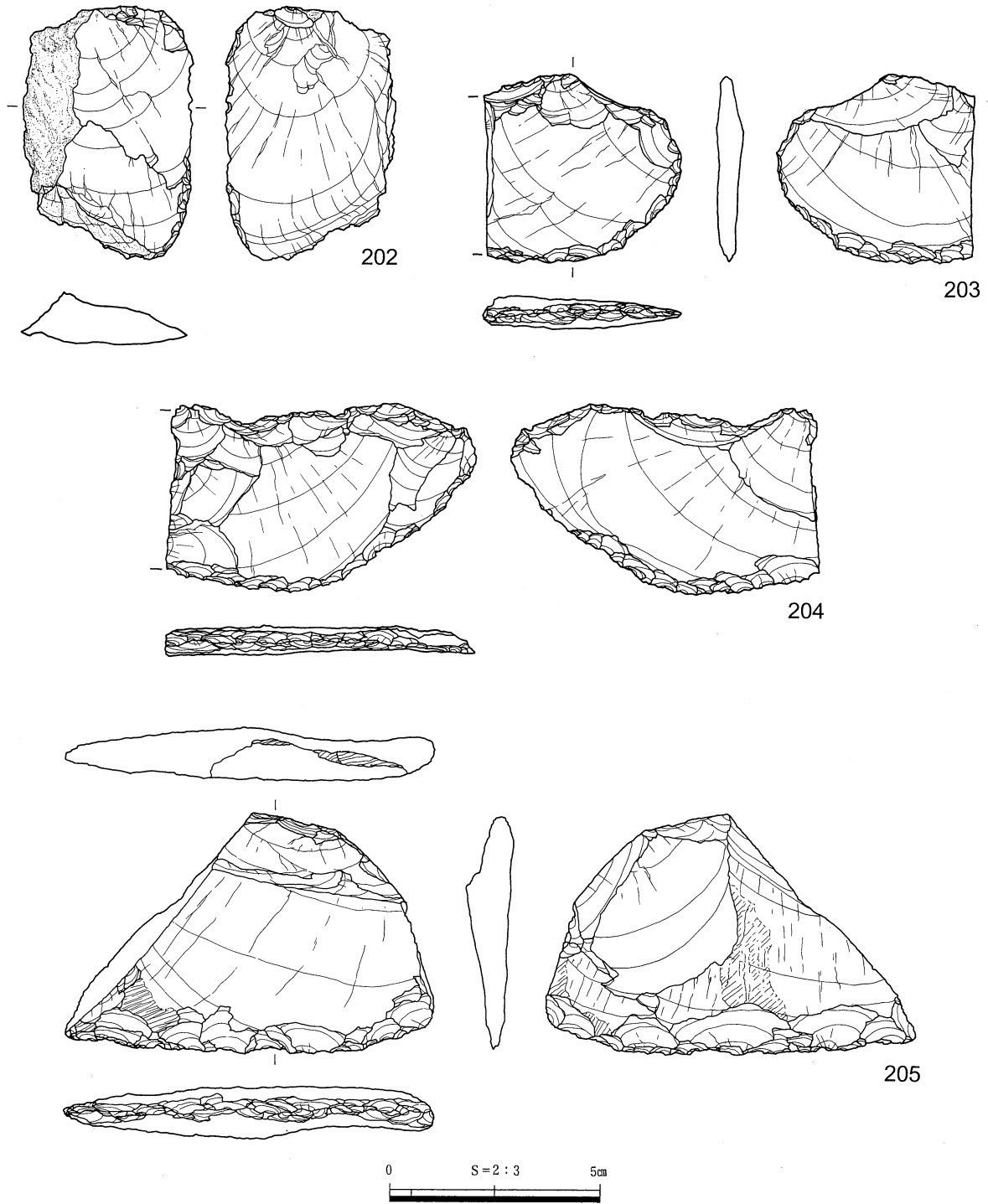
第185図 石器・環状石斧（2）

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	全長	最大幅	最大厚	石材	取上番号
189	環状石斧	5区	③層	弥生中期中葉～後葉	(6.6)	(11.7)	3.0		14083
190	環状石斧	4区	③層	弥生中期中葉～後葉	(6.2)	(9.9)	1.9		5000
191	環状石斧	5区	SD10	弥生中期中葉～後葉	(6.2)	(9.4)	(1.0)		14614
192	環状石斧	5区	①層	弥生中期～奈良	(7.0)	10.4	(3.2)		9612
193	環状石斧未製品	7区	M層	弥生前期末～中期前葉	15.8	16.0	3.6		40842



第186図 石器・サヌカイト製石器 (1)

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	全長	最大幅	最大厚	石材	取上番号
194	楔形石器	5区	貝塚	弥生前期末～中期前葉	(2.6)	2.4	0.7		15168
195	楔形石器	5区	⑤層	弥生前期末～中期前葉	2.5	2.8	0.8		16060
196	楔形石器	5区	⑤層	弥生前期末～中期前葉	3.4	2.3	1.0		16568
197	楔形石器	5区	③層	弥生中期中葉～後葉	3.9	4.5	0.9		15461
198	楔形石器	5区	③層	弥生中期中葉～後葉	2.8	4.0	1.1		14701
199	楔形石器	5区	SK22	弥生中期中葉～後葉	4.2	3.4	1.2		8726
200	楔形石器	5区	②層	弥生後期初頭～古墳初頭	3.7	4.7	1.3		9366
201	楔形石器	5区	②層	弥生後期初頭～古墳初頭	5.8	5.7	1.9		9304



第187図 石器・サヌカイト製石器（2）

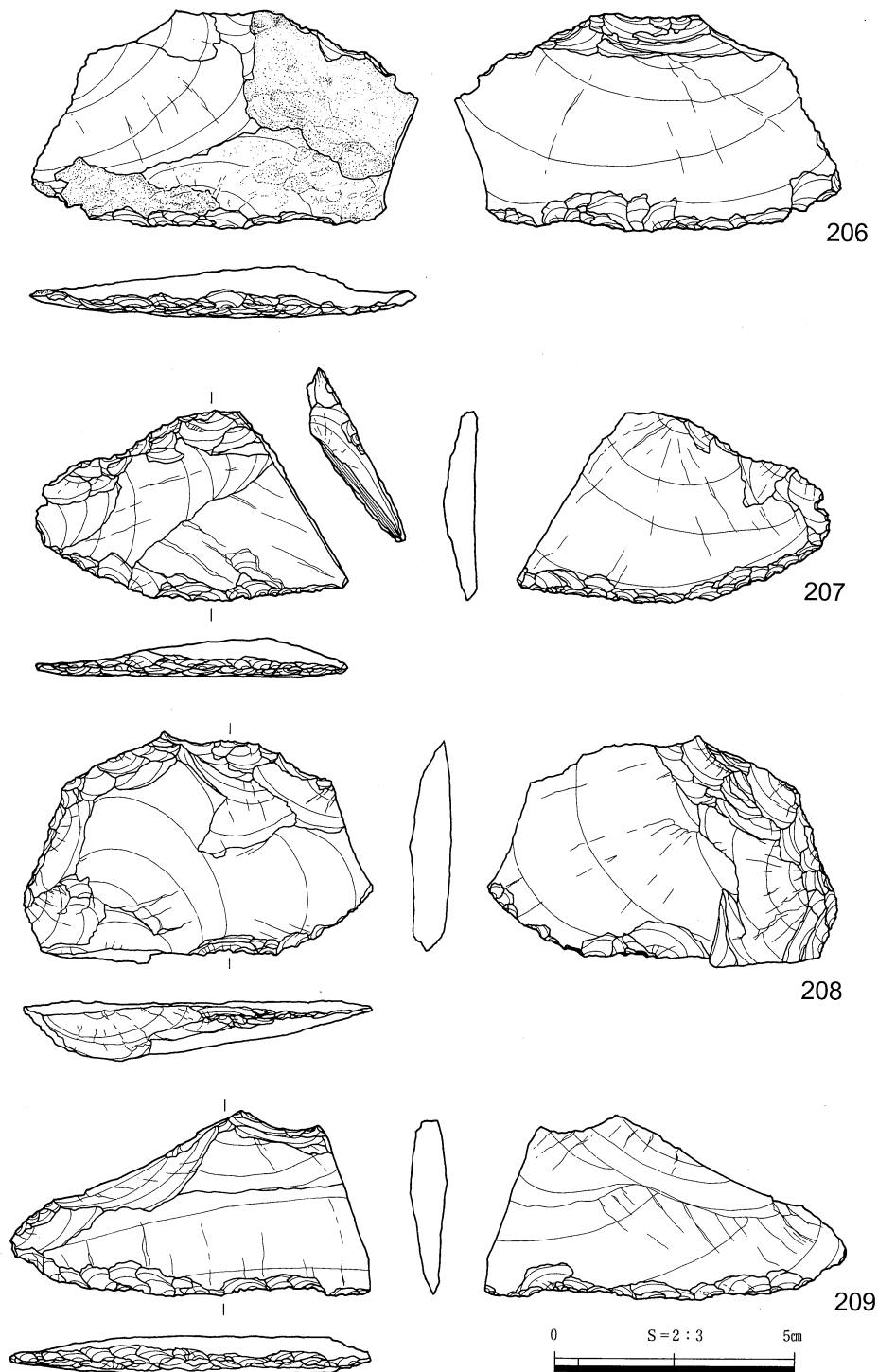
挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	全長	最大幅	最大厚	石材	取上番号
202	スクレーパー	5区	⑦層	弥生前期末～中期前葉	6.1	4.1	1.3		17846
203	スクレーパー	5区	⑤層	弥生前期末～中期前葉	4.6	(4.7)	0.8		16610
204	スクレーパー	5区	⑤層	弥生前期末～中期前葉	4.6	(7.4)	0.7		16286
205	スクレーパー	5区	③層	弥生中期中葉～後葉	5.8	8.8	1.3		15968
206	スクレーパー	5区	SK54	弥生中期中葉～後葉	4.6	8.1	1.1		15570
207	スクレーパー	5区	③層	弥生中期中葉～後葉	4.0	6.5	0.8		14512
208	スクレーパー	5区	②層相当	弥生後期初頭～古墳初頭	4.9	7.3	1.3		9001
209	スクレーパー	5区	②層	弥生後期初頭～古墳初頭	3.9	7.5	0.8		9256
210	剥片	5区	②層	弥生後期初頭～古墳初頭	10.6	12.0	2.8		9295

剥片石器関係

これまでは工具・農具といった用途に基づいた分類で記述を行ってきたが、ここではサヌカイト⁽²⁰⁾・ガラス質安山岩・黒曜石を用いた石器を取り上げる。こうした石材で作られた石器は、さまざまな用途に供されている可能性があり、便宜上「剥片石器関係」と一括しておく。本来ならこれらの石材を用いた石器がどのような製作工程を経てどのような器種が作られたのかを具体的に示す必要があるが、それは果たせていない。石器製作工程に係わる部分は適宜必要な資料を提示したうえで、概略的に触れたに過ぎないことをお断りしておく。

サヌカイト製石器（第186～193図） 総数382点出土している。

第186図は楔形石器である。この石器の定義については岡村道雄に従う⁽²¹⁾。断面紡錘形となる器体の表面は細



第188図 石器・サヌカイト製石器（3）

かな剥離面に覆われているが、素材面であるポジティブな剥離面を留める場合があり（196、200の表面、198、199、201の裏面）、剥片素材であることを教えてくれる。

第187、188図は剥片の一側縁に二次加工があるものである。これを刃部と認定すればスクレーパーと呼ぶ必要があるが、打製石剣の搬入が想定された状況を考えてすべてをスクレーパーという定型的な石器と捉えることはできなくなる。すなわち吉備南部のように打製石剣の素材として打製石庖丁が搬入されている例があることを考えれば、202のように縦長の不定形な剥片を用いているものは別として、もともと形状が横長の板状剥片に復元されるもので、縁辺に連続的な二次加工があるものは打製石庖丁の可能性を検討していかねばならない。205、207には研磨痕があり、打製石剣の例と同じく二次加工により切られている。207、209の稜線にはわずかながら摩滅が認められる。こうした点が打製石庖丁の特徴を表している可能性がある。ただし山陰地方においては打製石庖丁の例は知られておらず、素材としての搬入であっても成品そのものが持ち込まれていれば、未使用や製作途中の破損などによりその存在が知られていてもいいのではなかろうか。山陰と吉備南部の中間に位置する吉備北部では「打製石庖丁がサヌカイトの搬入形態として一般的ではなかった」と指摘されている⁽²²⁾ことを考えれば、打製石庖丁の成品が当地に搬入されていた可能性は低く、205や207の存在から打製石庖丁が分割・再加工された状態で持ち込まれていたのではなかろうか。

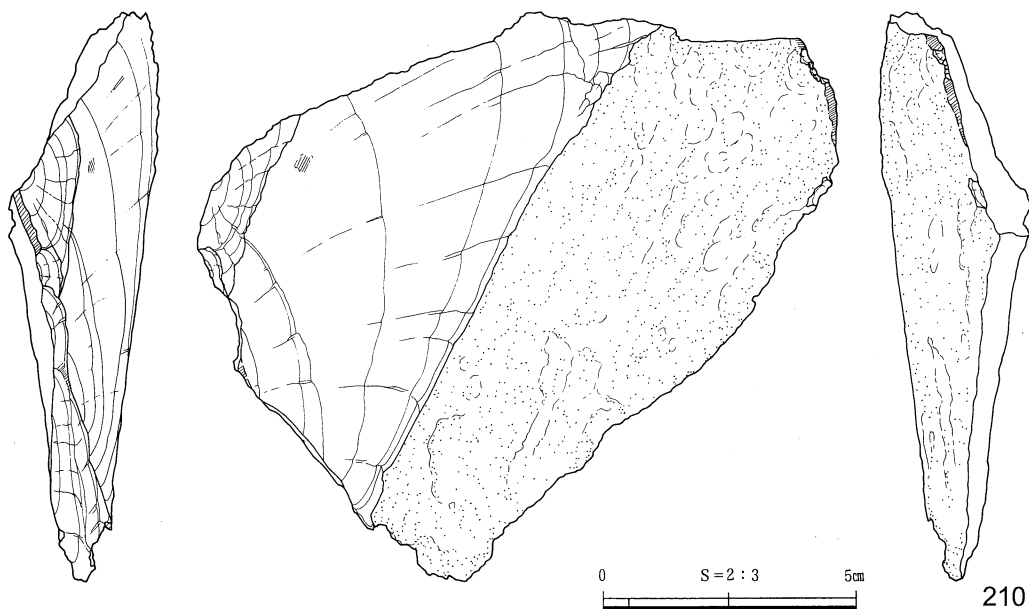
ここで本遺跡におけるサヌカイト原石・素材の搬入形態の別の例に目を転じよう。

第190～192図には1999年度に調査を行った5区出土のサヌカイト礫の一括出土品を示した。出土状況はすでに報告済みであるが⁽²³⁾（以下、『青谷上寺地1』と記載）、繰り返して述べると、4点のサヌカイト礫と1点の剥片、それ以外の石材の礫2点の計7点がまとまって出土し、20cm離れたところにも1点のサヌカイト製剥片が認められた。掘り方は検出できなかったが、一括性の高い点からこの8点は本来土坑に埋納されていたものと考え、S K 88と命名した。所属時期は検出面などの検討から中期中葉～後葉と判断している。サヌカイト以外の礫は使用痕がなくハンマーとは認められないもので、石器石材となりうるものでもない。

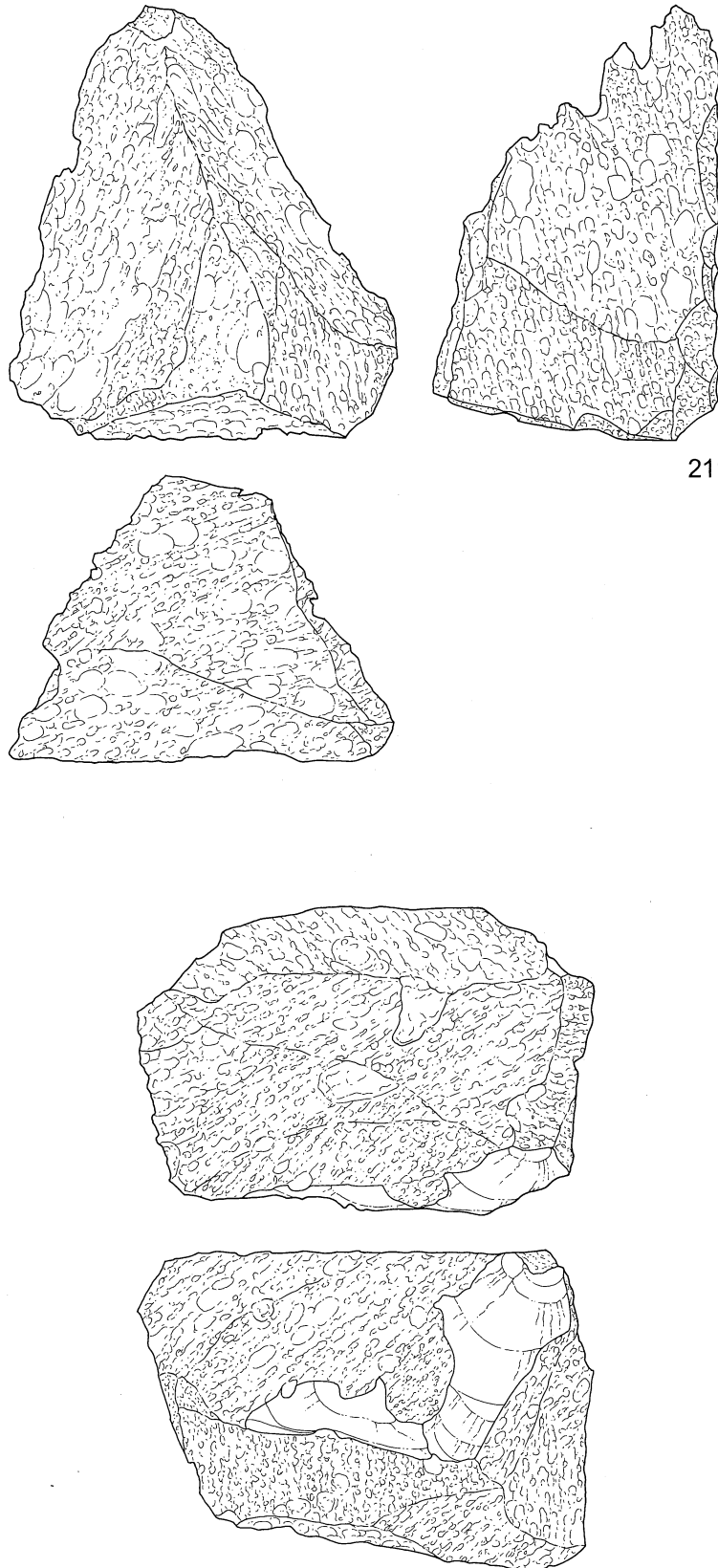
211は『青谷上寺地1』の第120図7に相当する。三角錐状の角礫で、1ヶ所節理方向に沿った打ち欠きを加えている。石質を確認したものだろうか。最大長9.0cm、最大幅8.2cm、最大厚5.8cm、重量は294.6gを測る。

212は『青谷上寺地1』の6にあたる。直方体を呈する角礫で、やはり節理方向に沿った剥離が1ヶ所に見られる。最大長6.5cm、最大幅9.4cm、最大厚6.2cmを測り、重量は512.5gである。

213は『青谷上寺地1』の5にあたり、直方体を呈する角礫である。両端部に打ち欠きを加えているが、節理に沿っていないため剥離面末端がうまく抜けていない。最大長10.6cm、最大幅5.3cm、最大厚4.5cm、重量318.0g

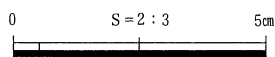


第189図 石器・サヌカイト製石器 (4)



211

212



第190図 石器・サヌカイト製石器 (5)

を測る。

214は『青谷上寺地1』の3にあたる。扁平な三角錐状の角礫で、端部に並列した2枚の剥離面が認められる。やや斜め方向となるが、節理方向を意識して加撃したようである。最大長12.5cm、最大幅5.0cm、最大厚4.5cm、重量225.2gを測る。

215は『青谷上寺地1』の8に相当し、1点だけ少しはなれて出土したものである。角礫から剥離された板状の剥片である。表面は頭部調整風のものを除けば、大きく3枚の剥離面と自然面で構成される。器体中央の剥離面は主要剥離面と同じ方向で、かつ打面も共有する。打点位置も同一軸線上であり、ひとつの角礫(母岩)から連続的に板状剥片を剥ぎ取ったものと思われる。その剥離方向は節理に沿っており、剥離面のうねりは基本的にない。表面左側のもう1枚の剥離面は節理方向と異なるため、力がスムーズに抜けていない。下端のものも同様で、階段状剥離となっている。最大長11.2cm、最大幅8.8cm、最大厚2.5cmを測り、重量は257.0gである。

216は『青谷上寺地1』の4である。表面の中心に稜線のおおる縦長の剥片で、横断面形は三角形となる。角礫の端部から剥離されたもので、剥離方向が節理に沿っているため主要剥離面は平坦である。最大長10.3cm、最大幅3.7cm、最大厚3.4cm、重量114.8gを測る。

これら6点のサヌカイト礫と剥片は、海綿状に風化した自然面の様子が同じで、剥離面に見る石質からも同じ産地のものではないかと考えられる。拳大の角礫そのままの状態か、それを粗割した厚みのある剥片の状態という搬入形態を示す。

これとは別の搬入形態を示す資料を第193図に掲げた。該当する2点の資料についてまず個別に記述する。

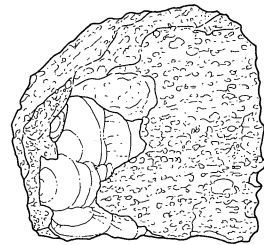
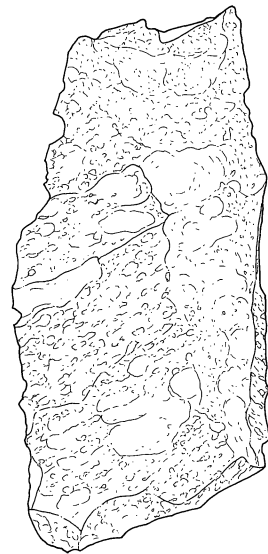
217は最大長15.2cm、最大幅16.2cm、最大厚2.0cmを測る剥片である。主要剥離面とは直交または対向する大きな剥離面と打面部を除去するような数枚の整形剥離面で表面は構成される。末端全体には細かな剥離痕が連続して認められる。左側縁は主要剥離面側からの折れ面である。

218は最大長17.5cm、最大幅15.2cm、最大厚2.2cmを測る。打面部と左側縁部に大ぶりの二次加工が加えられる。それを除いた背面を構成するもとの剥離面は主要剥離面と直交および対向、さらに斜交する大きな面である。左側縁部の二次加工は主要剥離面側にも及んでいる。末端にはやはり細かな剥離痕が連続している。右側縁は主要剥離面側から折れている。

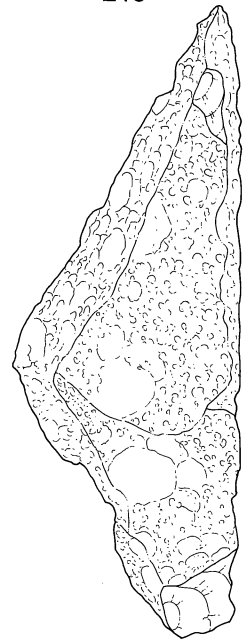
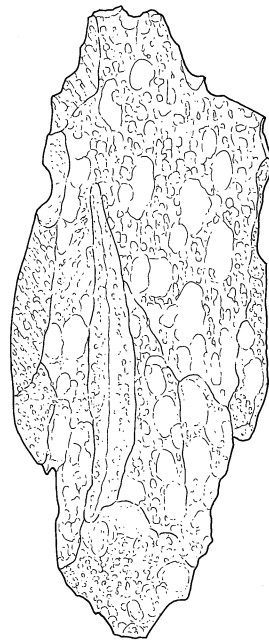
この2枚の剥片はそれだけでも大きいのであるが、互いの折れ面で接合した。接合状態で末端部を水平にして計測すると最大長18.5cm、最大幅31.3cmの大型板状剥片となる。重量も1,012.2gを測る。表面を構成する剥離面や自然面の観察から、この剥片はかなり大きい角礫から剥ぎ取られたものと考えられ、同じ母岩から打点の位置を変えながら連続的に大型剥片を剥離したことが窺える。そうしたことができる背景には豊富な石材量をもつ原石産地の存在が考えられるが、この大型板状剥片は石質や自然面の状態などの肉眼観察から金山産の可能性がある⁽²⁴⁾。S K 88で一括出土した拳大の角礫やそれを粗割した剥片は肉眼観察による限り金山産サヌカイトとは異なるようで、原石産地が違えば搬入形態も異なることを示している可能性がある。

以上やや冗長に述べたが、本遺跡におけるサヌカイトの搬入形態には①打製石庖丁を再加工した剥片、②拳大の角礫やそれを粗割した剥片、③大型板状剥片の3者を想定することができ、産地のはっきりしない②を除き、他地域からの搬入の可能性はある。③は山陰地方では縄文時代の例が数例知られており⁽²⁵⁾、そうした伝統を引き継いだものであろう。

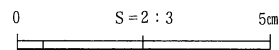
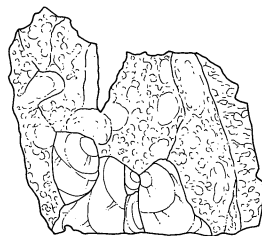
こうしてもたらされた素材から何が作られたのだろうか。青谷上寺地遺跡で出土しているサヌカイト製の石器は打製石鏃・打製石剣・石錐である。サヌカイト製の打製石鏃は未製品を含め35点出土している。時期別に見ると前期末～中期前葉7点、前期～中期1点、中期中葉～後葉12点、後期初頭～古墳前期初頭4点、時期不明あるいは詳細に特定できないもの11点となる。出土したサヌカイトの剥片などの総量からすると打製石鏃に関するものも多くはないのであるが、打製石剣は搬入の可能性が考えられるし、石錐は出土量が極めて少ないことから、サヌカイトを用いた石器製作は石鏃を主な目的としていたと考えられる。サヌカイト製品の15%を占める



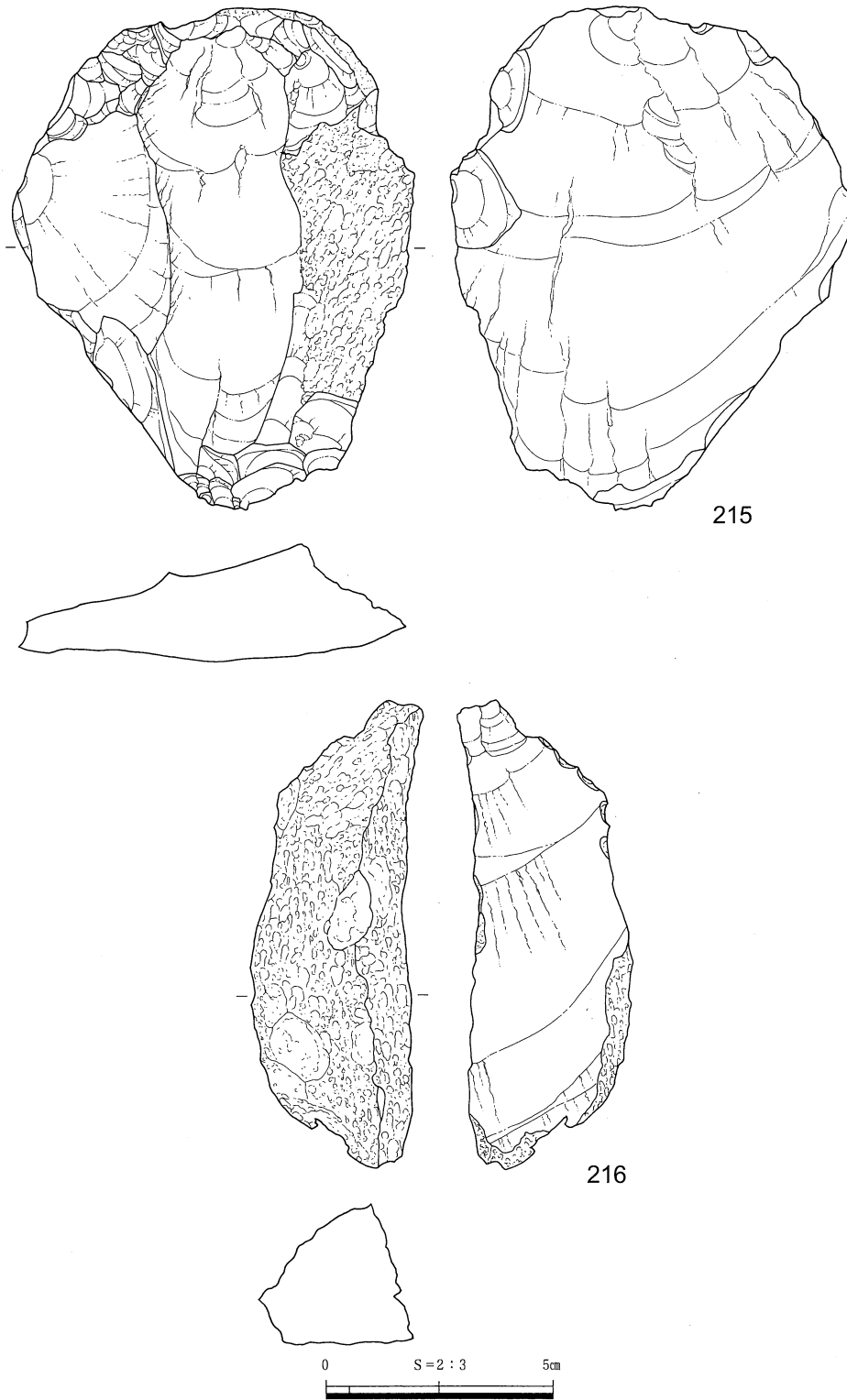
213



214



第191図 石器・サヌカイト製石器(6)

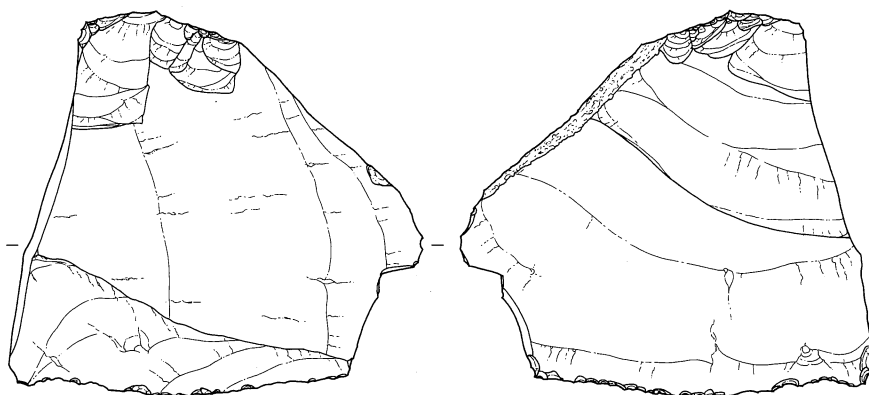


楔形石器の機能に石鏃の素材が考えられるという指摘があることもこれを補強するものである⁽²⁶⁾。

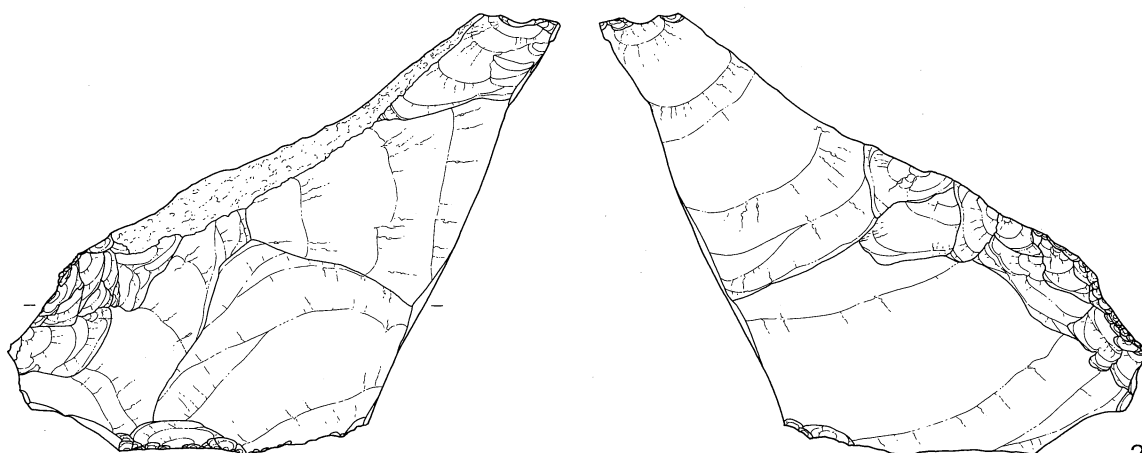
今回は産地同定などの分析を行っておらず、石質に関しては肉眼観察に頼った。またサヌカイト資料の全体を図示できたわけでもなく、搬入形態から石器製作に至る一連の流れを明らかにしたわけでもない。ここで示した搬入形態は資料のさらなる検討や他遺跡の様相、また今後の資料の増加を待ち検証していかなければならない。山陰地方には隠岐島の黒曜石という石器石材に適したものがあり、旧石器・縄文時代と使いつづけていたにもかかわらず、弥生時代に至りサヌカイトという搬入石材に依存していく姿は興味深い。黒曜石も搬入石材といえるかもしれないが、サヌカイトの搬入には社会性もより伴っているものと思われる、弥生社会を描くうえで重要な視点となろう。

第192図 石器・サヌカイト製石器（7）

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	全長	最大幅	最大厚	石材	取上番号
211	素材礫	5区	SK88	弥生中期中葉～後葉	9.0	8.2	5.8		13818
212	素材礫	5区	SK88	弥生中期中葉～後葉	6.5	9.4	6.2		13817
213	素材礫	5区	SK88	弥生中期中葉～後葉	10.6	5.3	4.5		13816
214	素材礫	5区	SK88	弥生中期中葉～後葉	12.5	5.0	4.5		13814
215	素材礫	5区	SK88	弥生中期中葉～後葉	11.2	8.8	2.5		13819
216	素材礫	5区	SK88	弥生中期中葉～後葉	10.3	3.7	3.4		13815

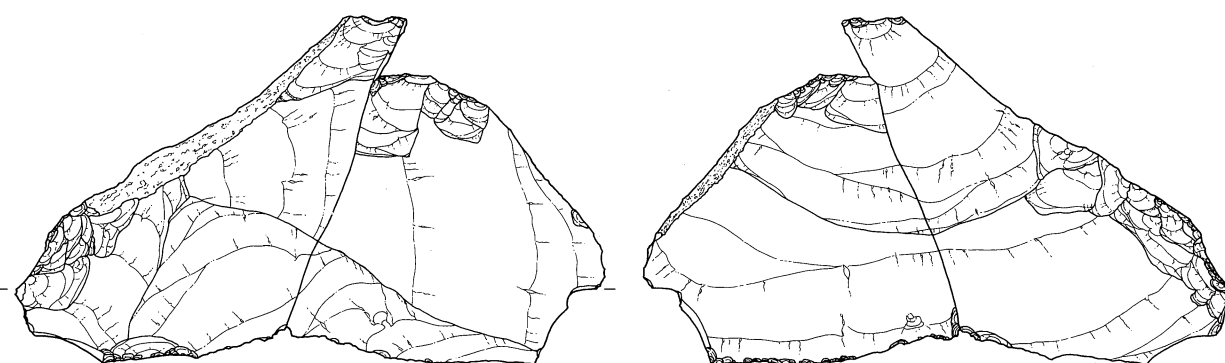


217



218

S = 1 : 3 0 10cm



217+218

S = 1 : 4 0 10cm

第193図 石器・サヌカイト製石器 (8)

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	全長	最大幅	最大厚	石材	取上番号
217	素材剥片	6区	③層	弥生中期中葉～後葉	15.2	16.2	2.0		45879
218	素材剥片	6区	③層	弥生中期中葉～後葉	17.6	21.4	2.3		45878
217+218	素材剥片	6区	③層	弥生中期中葉～後葉	18.5	31.3	2.3		45879+45878

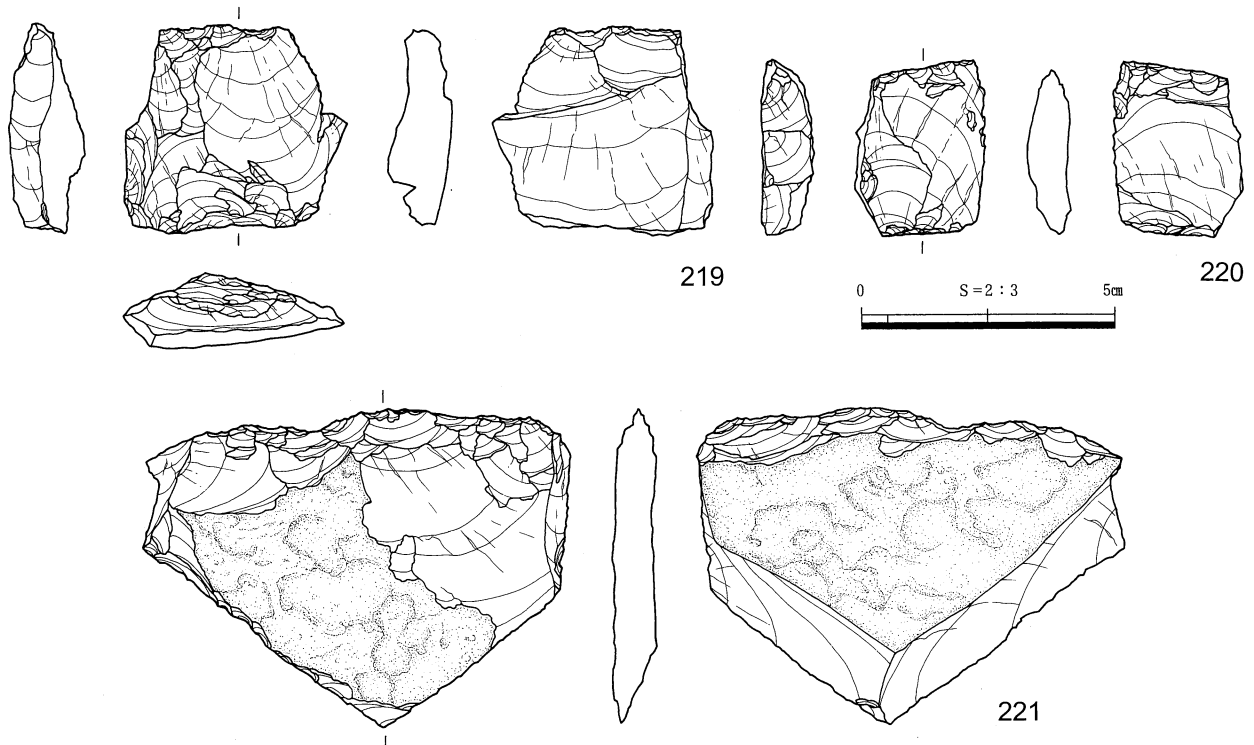
ガラス質安山岩製石器（第194図） 県道調査区からは315点出土している。サヌカイトとは石質が明らかに異なる。器種組成は製品を除けばサヌカイトと同様で、搬入形態を示す素材礫や素材剥片から、石器製作に伴う石核・剥片・碎片まで認められる。この石材を用いた製品については実はよく分かっていない。177の磨製石剣が同一石材だとの鑑定をいただいております⁽²⁷⁾、関連が考えられるが、石材量に比べ磨製石剣そのものが少ないうえ、未製品も見つかっておらず、ここで磨製石剣の製作が行われていたとは現状では考えにくい。

第194図には図示しえた資料を掲げた。219、220は楔形石器である。219は素材剥片の主剥離面を裏面に留め剥片素材であることが分かる。下端に潰れが著しく、表面左側縁にはスポール（削片）の剥がれた痕跡を残す。220も裏面に残る剥離面から剥片素材であることが知られる。上下両端に階段状剥離が認められる。表面左側縁にみられる剥離面は両極剥離により生じたものではなく、素材剥片段階の二次加工であろう。これらは大きさや形状だけでなく、上下両端に見られる階段状の剥離面と縁辺の潰れ、側縁のスポール（削片）の剥がれた痕跡などサヌカイト製の楔形石器と何ら変わるところはないが、ガラス質安山岩製の石鏃は認められず、この石器の多様性を示しているようだ。221は剥片である。節理面に沿って割れたものと思われ、剥離後の二次的な加工が観察できる。

黒曜石製石器（第195図） 石鏃を含めて61点出土している。サヌカイト・ガラス質安山岩に比べ量的にはかなり少ない。

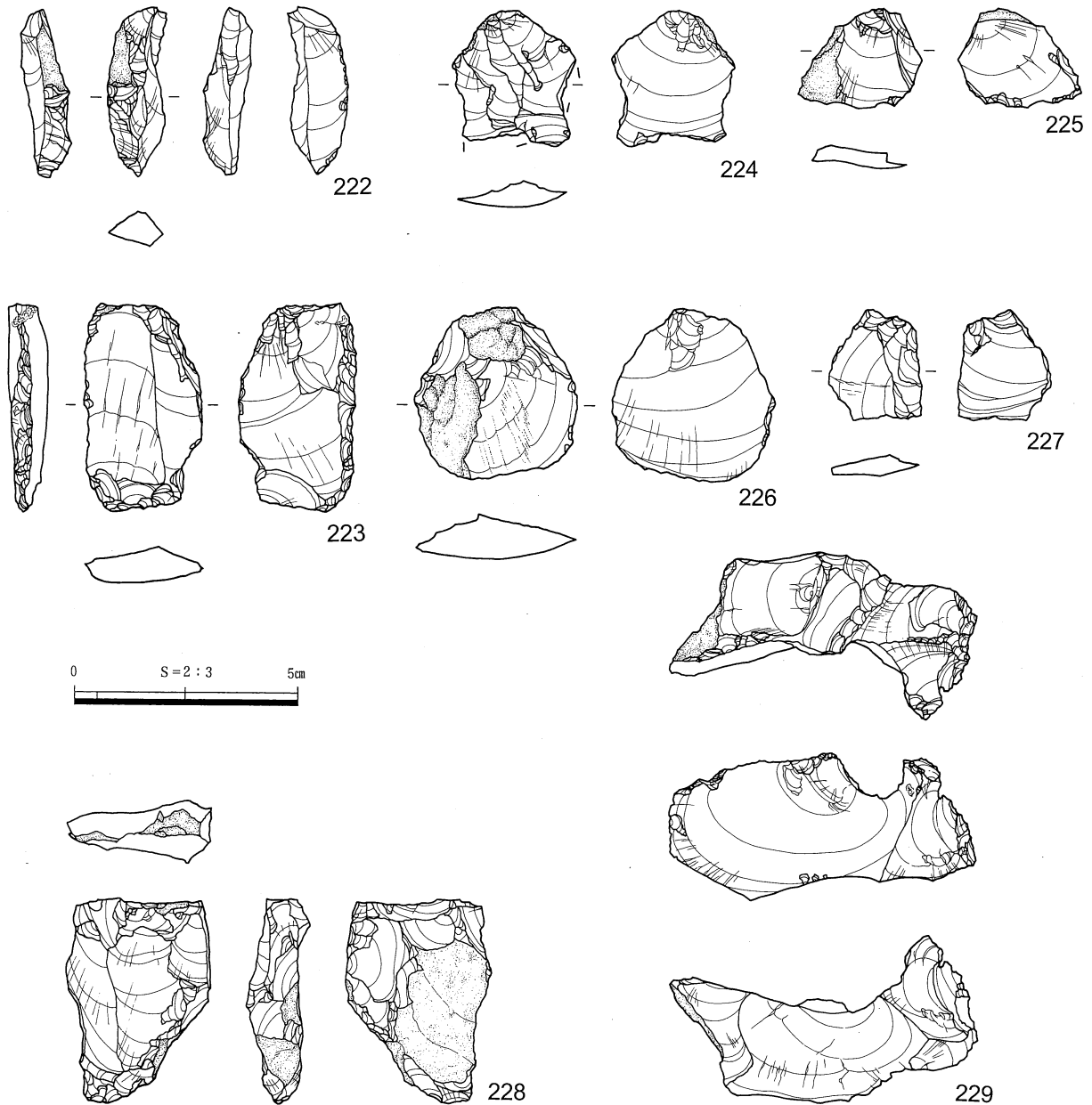
222は楔形石器のスポールである。比較的大型であることから、両極剥離の初期段階のものか。223は裏面右側縁に連続した加工を施し刃部としている。224～227は剥片、228、229は石核である。228は裏面に自然面を大きく残しており、剥片素材と考えられる。229も同様か。

黒曜石製の石器で定型的なものは石鏃のみである。楔形石器7点を石鏃製作に関するものとし、未製品の存在を重視すれば、未製品を含めわずか3点のみであるが、主要な生産目的は石鏃であったと理解しておきたい。



第194図 石器・ガラス質安山岩製石器

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	全長	最大幅	最大厚	石材	取上番号
219	楔形石器	5区	③層	弥生中期中葉～後葉	4.2	4.3	1.5		9295
220	楔形石器	5区	③層	弥生中期中葉～後葉	3.5	2.6	1.0		14067
221	剥片	5区	③層	弥生中期中葉～後葉	6.3	8.5	0.9		14945

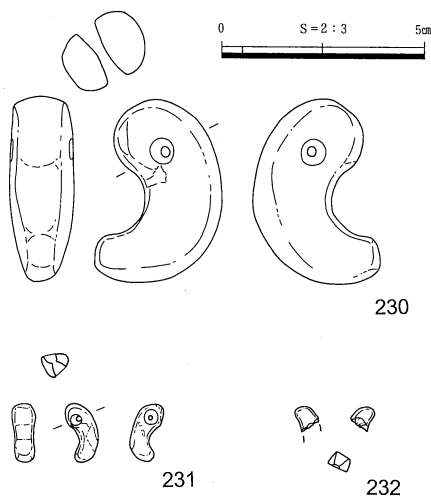


第195図 石器・黒曜石製石器

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	全長	最大幅	最大厚	石材	取上番号
222	剥片	5区	③層	弥生中期中葉～後葉	3.8	1.3	1.1		14651
223	スクレーパー	5区	集石1	弥生後期初頭～後葉	4.7	2.7	0.9		12424
224	剥片	5区	⑤層	弥生前期末～中期前葉	(3.1)	(2.8)	0.6		16705
225	剥片	5区	⑤層	弥生前期末～中期前葉	2.2	2.8	0.5		16109
226	剥片	5区	②層	弥生後期初頭～古墳初頭	3.9	3.6	1.0		12590
227	剥片	5区	②層	弥生後期初頭～古墳初頭	2.5	2.1	0.5		13480
228	石核	5区	③層	弥生中期中葉～後葉	4.6	3.3	1.5		15036
229	石核	5区	SK84	弥生中期中葉～後葉	2.4	6.9	3.1		17077

装身具

勾玉（第196図） 4点出土している。時期不詳の1点を除いて図示した。230は長さ4.5cm、厚さ1.6cmの大型品である。全体的に白みがかかったヒスイ製で、透明感のある緑色部分が斑状に混じる。後期～古墳前期初頭の遺物包含層から出土した。231も同じ時期のものである。長さは1.5cmと短い、ヒスイの良質な部分で作られている。232は前期末～中期前葉の遺物包含層から出土した。穿孔途中に折れたもので、厚さ0.4cmの部分に片側か



第196図 石器・勾玉

ら0.3cmと貫通手前まで穿っている。反対側からも穿孔しようとしており、小さく浅い孔の痕跡を留める。どちら側から折れたものか分からないが、器体の幅いっぱいの孔を開けようとしていること自体無理があったのだろう。薄い緑色の良質なヒスイ製である。

管玉製作関係（第197～211図） 青谷上寺地遺跡における管玉製作は、集落形成期の前期末～中期前葉から行われ、後期～古墳前期初頭までの集落存続期間を通じて連続と行われつづけたもので、本遺跡を特徴付けるもののひとつといい。ここでは層位的に分別できた前期末～中期前葉、中期中葉～後葉、後期～古墳前期初頭の3段階に分けて管玉製作の様相を述べていくことにする。使用石材は正式な石材鑑定を受けていないが、当地方で管玉に一般的に用いられる緑色を呈する石材に限られており、碧玉と判断している。

第197～199図には前期末～中期前葉の資料を掲げた。おおむね製作工程順に図面を配置しており、それに従い記述を進める。

233は碧玉の小礫に加撃したもので、残された部分は粗質である。管玉製作に当たって、まず良質な部分を取り出したのであろう。234は素材剥片の形状を整えようとしたものであろうか。厚めの剥片に剥離を施している。この2点までは研磨は認められない。

233、234のようにして良質な部分を取り出し、剥離により整形したものはさらに研磨も併用することにより直方体に仕上げられたのであろう。235は粗割したものに整形剥離を加え、研磨を施し形を整えている。この段階のものを直方体素材①と呼ぶ。

236からは擦り切りによる分割が始まる。235のように直方体に整えられたものは、石鋸を用いて施溝し、いくつかに分割される。これを直方体素材②と呼ぶ。この段階では236のように自然面を大きく残すものもあるし、237、238のように整形剥離痕を顕著に残すものもある。これら3点には研磨痕は認められない。直方体素材①の分割に当たっては研磨を用い丁寧に形を整えるよりも、打ち欠きによって大まかに整形をしておくことが優先されたのだろう。

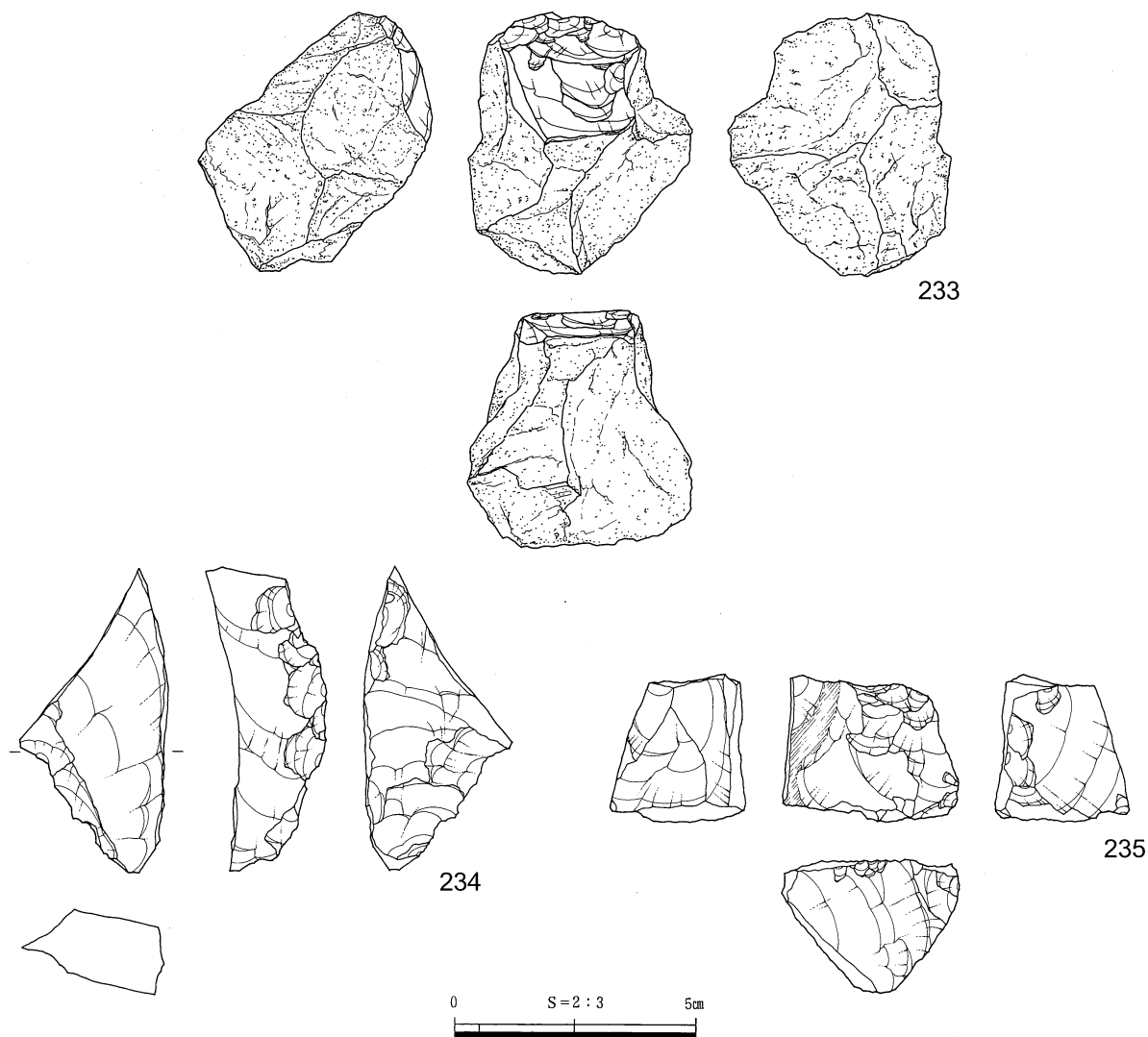
分割された直方体素材②は、研磨により各面を整えたうえで擦り切りによって溝を彫り込み、239～242のようにさらに分割される。この段階の分割でも管玉の大きさに近い素材は得られず、分割が繰り返されたことだろう。この直方体素材②をさらに分割したものを直方体素材③としておきたい。擦り切り溝は同一面を後退するように設けられたわけではなく、241、242のように直交する縁辺に認められることがあり、分割する際には打面（擦り切り溝を設けた面）と作業面（分割が行われる面）を適宜変えながら作業が進行していったようだ。

こうして分割が進むと、生産されるものの幅と厚さがそろってくる。これを角柱状素材と呼ぶ。244がこれにあたる。これを245に見るように微細な剥離を加えることにより角を落としている。残りは悪いが246もそうしたものであろう。その後247～249のように各面を研磨して丸く仕上げていく。前期末～中期前葉段階ではここまでのものしか見られないが、その後穿孔し、仕上げを行い管玉の完成に至ったのであろう。

第200～205図は中期中葉～後葉のものである。

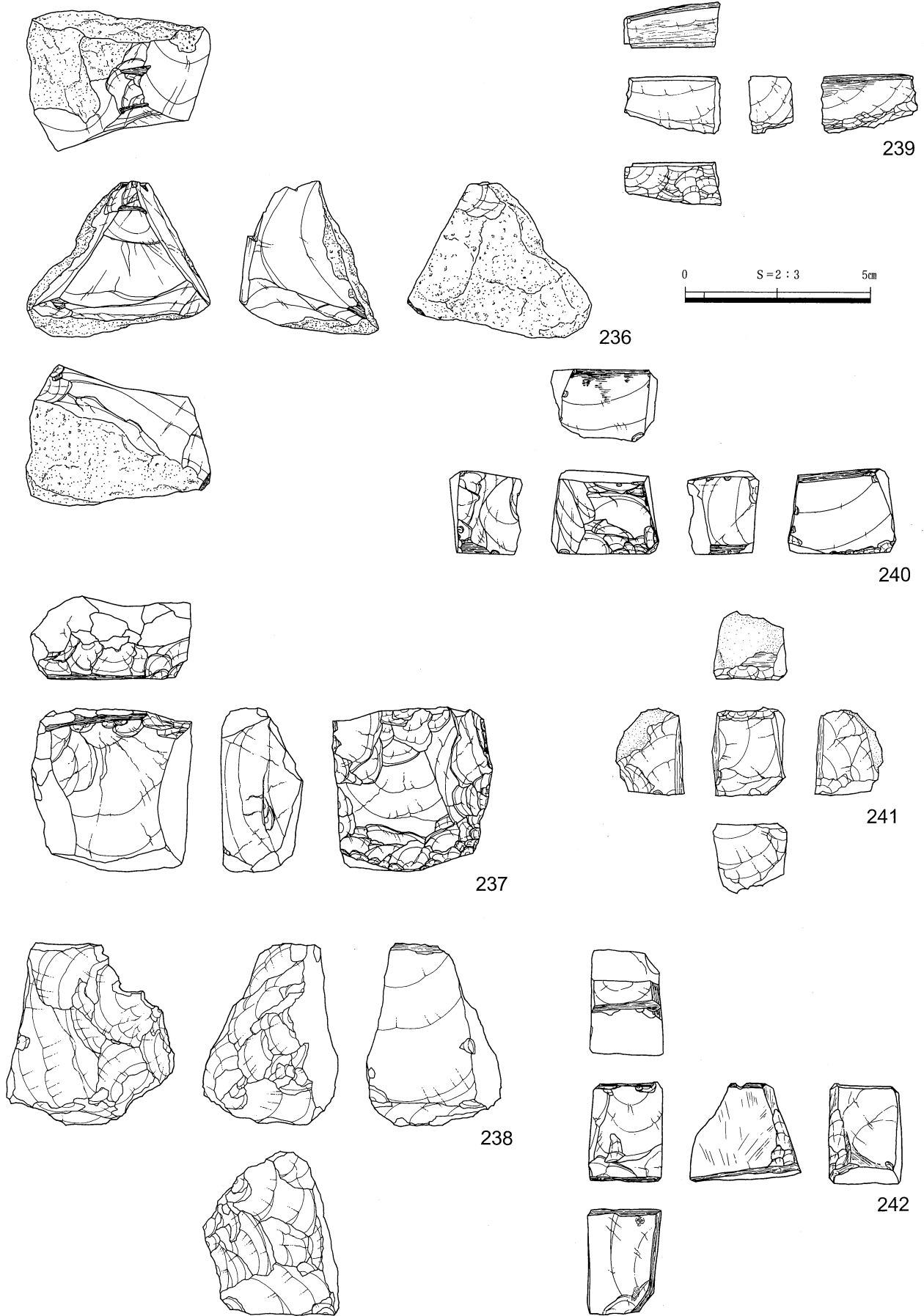
250は節理面で割れた板状の大型剥片である。周縁を整形剥離で整えている。こうした大型のものを分割して

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	全長	最大幅	最大厚	石材	取上番号
230	勾玉	5区	②層	弥生後期初頭～古墳初頭	4.6	3.2	1.6	ヒスイ	8888
231	勾玉	5区	②層	弥生後期初頭～古墳初頭	1.5	0.8	0.6	ヒスイ	12236
232	勾玉	5区	⑤層	弥生前期末～中期前葉	(0.6)	0.6	0.4	ヒスイ	16000

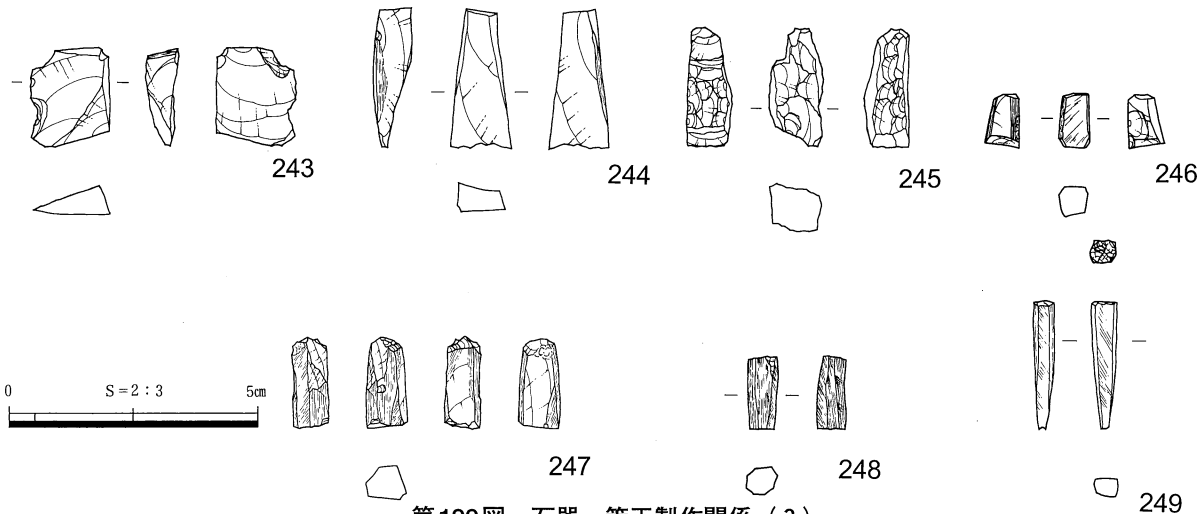


第197図 石器・管玉製作関係(1)

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	全長	最大幅	最大厚	石材	取上番号
233	管玉製作資料	7区	M層	弥生前期末～中期前葉	5.5	4.6	4.9		42770
234	管玉製作資料	5区	⑤層	弥生前期末～中期前葉	4.5	1.9	3.0		16659
235	管玉製作資料	5区	⑤層	弥生前期末～中期前葉	2.7	3.7	2.8		15933
236	管玉製作資料	7区	M層	弥生前期末～中期前葉	4.3	5.0	3.8		42089
237	管玉製作資料	7区	M層	弥生前期末～中期前葉	4.5	4.3	2.2		40945
238	管玉製作資料	5区	⑤層	弥生前期末～中期前葉	4.9	3.6	4.4		16612
239	管玉製作資料	6区	⑤層	弥生前期末～中期前葉	1.6	2.6	1.0		47005
240	管玉製作資料	7区	M層	弥生前期末～中期前葉	2.3	2.9	1.9		41610
241	管玉製作資料	5区	⑤層	弥生前期末～中期前葉	2.4	1.9	1.8		16100
242	管玉製作資料	7区	M層	弥生前期末～中期前葉	2.7	2.0	2.9		41611
243	管玉製作資料	5区	貝塚	弥生前期末～中期前葉	2.0	1.6	0.7		15025
244	管玉製作資料	5区	④層	弥生前期末～中期前葉	2.8	1.2	0.8		13340
245	管玉製作資料	5区	⑤層	弥生前期末～中期前葉	2.4	1.1	0.9		16160
246	管玉製作資料	7区	M層	弥生前期末～中期前葉	1.1	0.6	0.7		40927
247	管玉製作資料	6区	⑤層	弥生前期末～中期前葉	1.8	0.8	0.7		47812
248	管玉製作資料	5区	⑤層	弥生前期末～中期前葉	1.5	0.6	0.6		17126
249	管玉製作資料	5区	⑦層	弥生前期末～中期前葉	2.6	0.5	0.3		17843



第198図 石器・管玉製作関係(2)



第199図 石器・管玉製作関係(3)

直方体素材①を作るのであるが、本資料は遺跡内に搬入された状態を留めているものかもしれない。251も板状に整った形状ではないが、厚みのある大型の剥片で、やはり搬入時の形態に近いものと考えられる。254は直方体素材①で、打ち欠きにより整形されている。255は形状は不整形なのだが、一部研磨を施しており、整形剥離と合わせて加工を加え、254のような形に整えていこうとしたものだろう。252、253はやや小型のものである。ともに直方体素材を作りうる厚みを有しており、擦り切り以前のものとしてここに掲げた。

256～262は直方体素材②である。直方体素材③に比べ、大きさや各面の整形具合が異なる。長辺が5.0cm程度の大きさを持ち、自然面や顕著な整形剥離面を認めることができる。256、258は特に自然面や整形剥離痕が残り、このような例を見ると直方体素材②の分割段階では必ずしも各面を丁寧に作り出さずに、分割の進行とともに適宜必要部分を整えていたのかもしれない。管玉の製作工程はシステマティックであるが、分割時のアクシデントも当然生じたものと思われ、最初から素材を整えておくよりも作業の進行に伴い必要部分を調整したほうが、作業の初期段階においてはかえって効率的であったかもしれない。257、260は研磨も併用し整った直方体を呈する。259は横断面三角形を呈する剥片で、表面中央の稜線の上に擦り切り施溝が見られることから、直方体素材②の製作に係わるものである。裏面を中心に周縁を打ち欠いて整形しようとしており、分割の際うまくいかなかったものを再利用しようと試みたものではなかろうか。

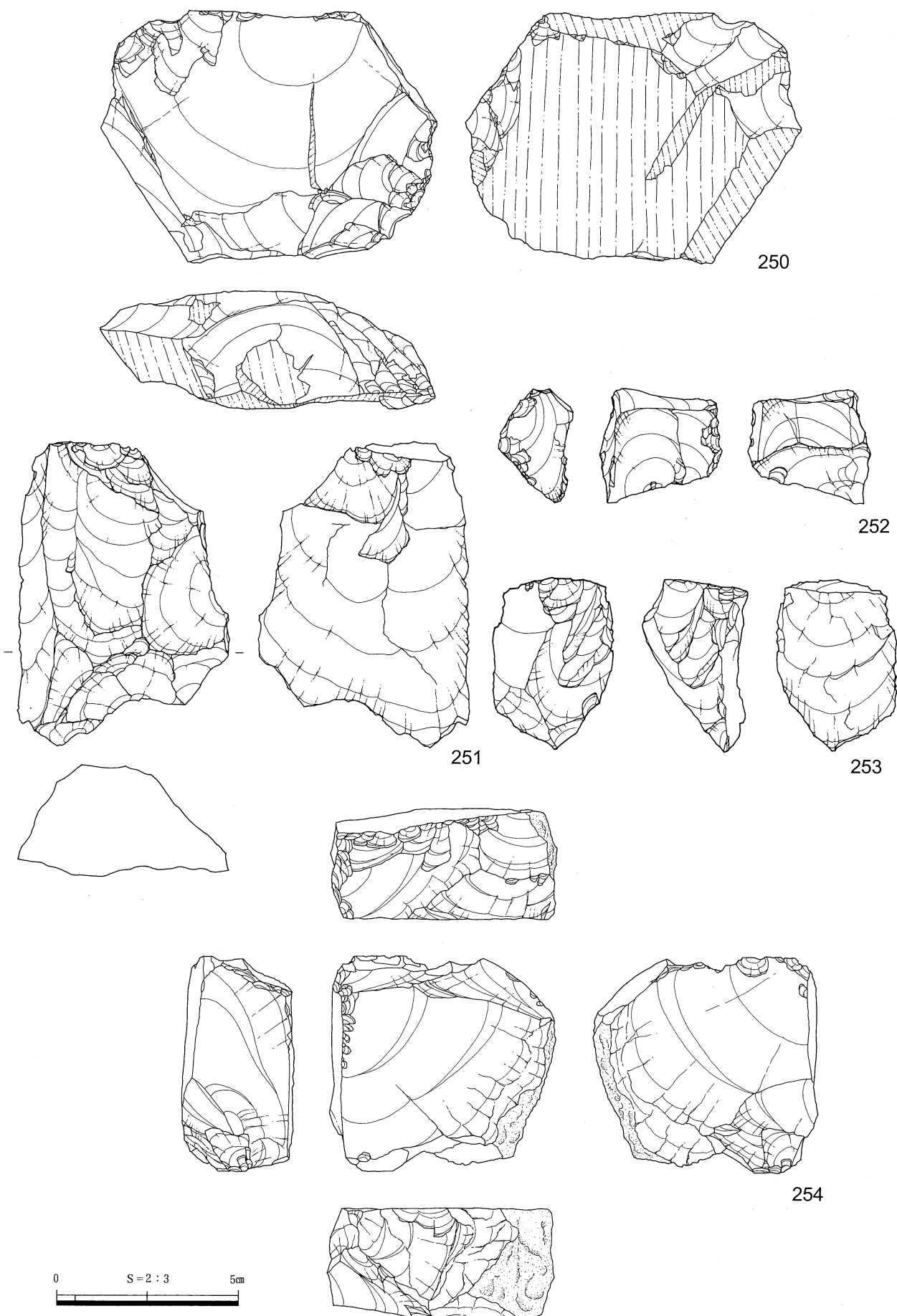
263～273は直方体素材③である。これ自体大小が認められ、直方体素材をさらに分割したのであろうが、直方体素材②から分割されたものと、それをさらに分割したものととの区別が付きにくいこともあり、一括して扱う。分割が繰り返されることによって各面は一枚の剥離面で構成されることとなり、直方体としての形状がかなり整ってくる。これに研磨による必要最小限の整形を加えたのだろう。

こうした分割を繰り返すことによって274～286のような角柱状素材が生産される。模式的に理解すれば角柱状素材の各面を構成する剥離面は、主要剥離面であるポジティブな面とネガティブな先行する剥離面となり、各面1枚の剥離面をもつことになるが、複数枚の整形剥離痕を留めたり、自然面で覆われる場合がある。

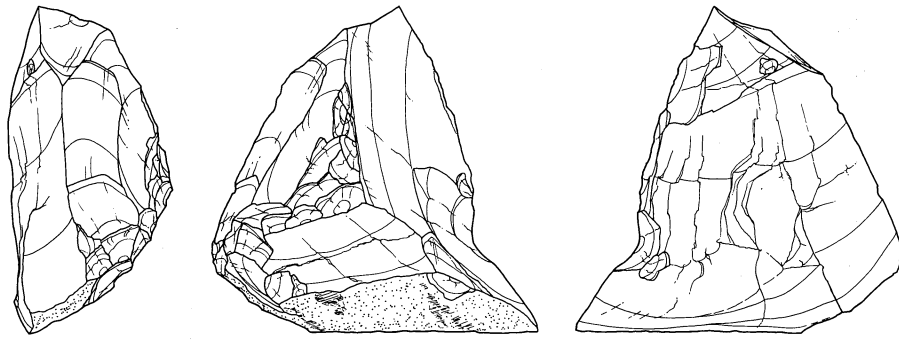
287～294は角柱状素材の各面を構成する稜線を打ち欠いたものである。この後器体全体を研磨整形し(295～298)、穿孔する。299は上面のみに、300は上下両面に穿孔が見られるが、いずれも貫通していない。貫通している301も含めて仕上げ前のもので、器体は多角形を呈する。302～304が完成品である。

第206～208図に後期～古墳前期初頭のもの掲げた。

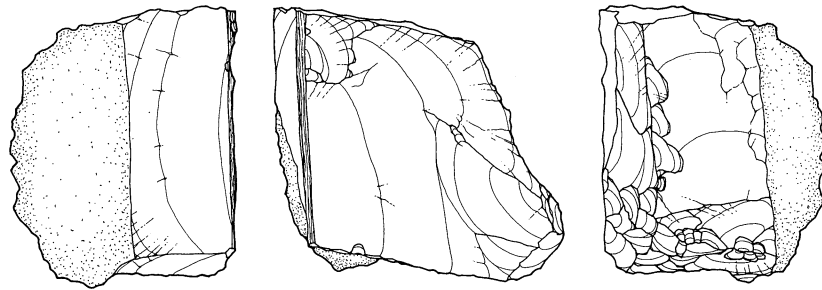
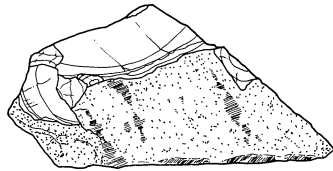
305～308は直方体素材①に関するものである。305は素材面を残しながら、各面を整形剥離により調整する。306はそれに加え研磨を施している。307、308は擦り切りによる分割以前のものと考えられる。それなりの厚みをもつ剥片なのであるが、ここから直方体素材を作るには厚みが足りないように思われ、目的的なものではなく直方体素材①の整形に伴って生じたものと考えられる。



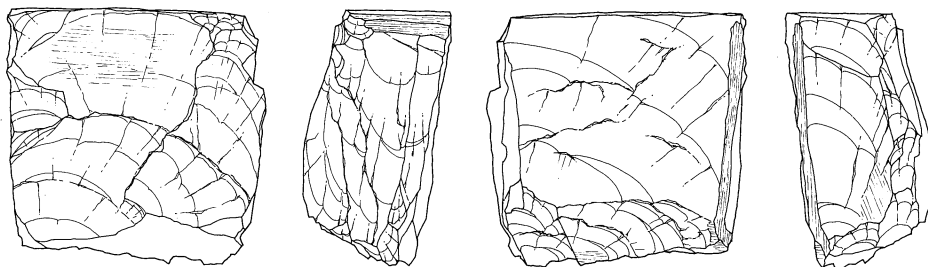
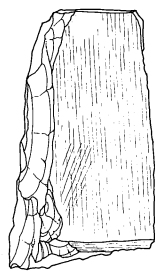
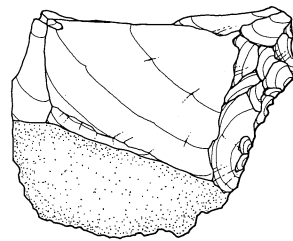
第200図 石器・管玉製作関係(4)



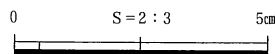
255



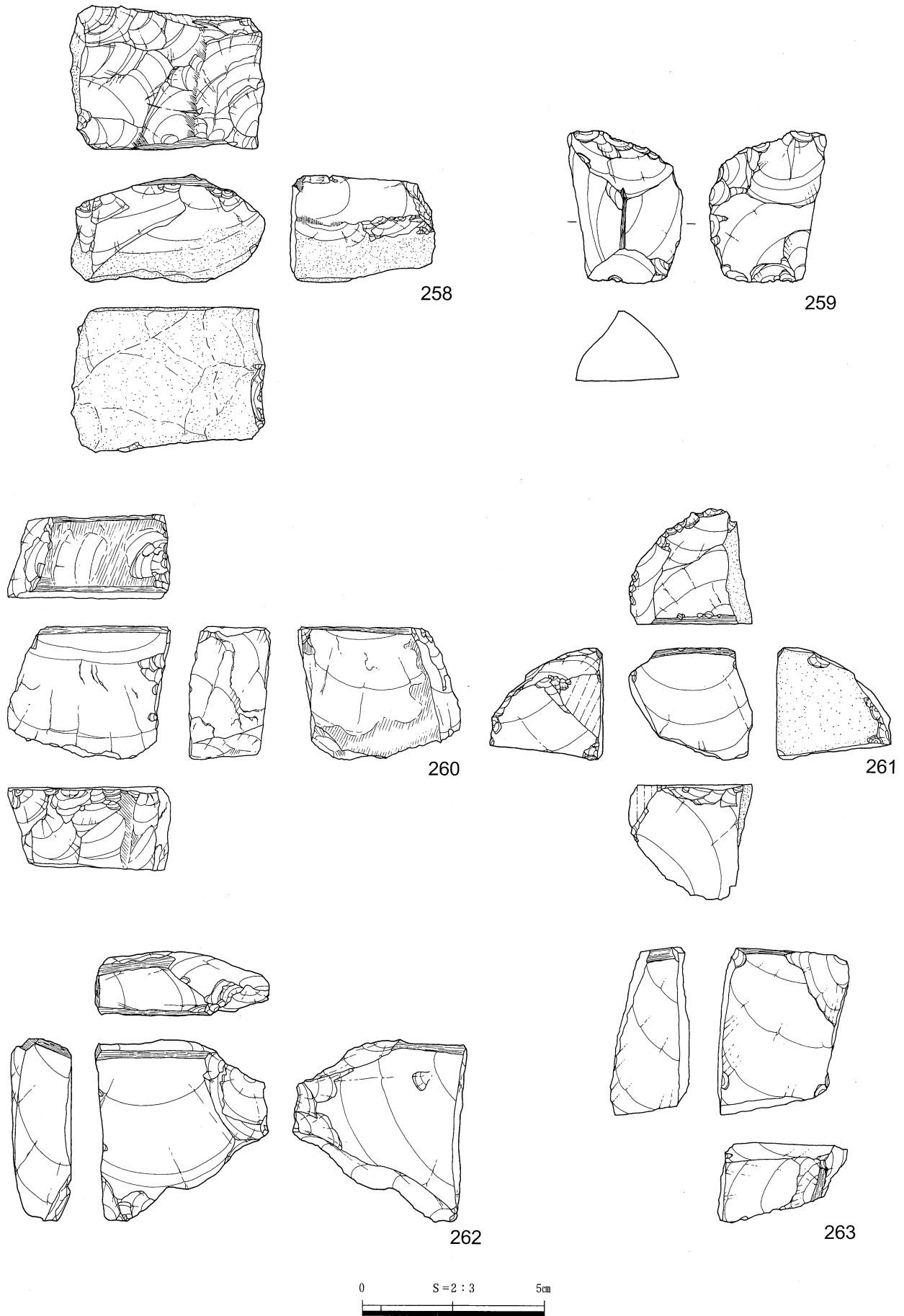
256



257



第201図 石器・管玉製作関係 (5)

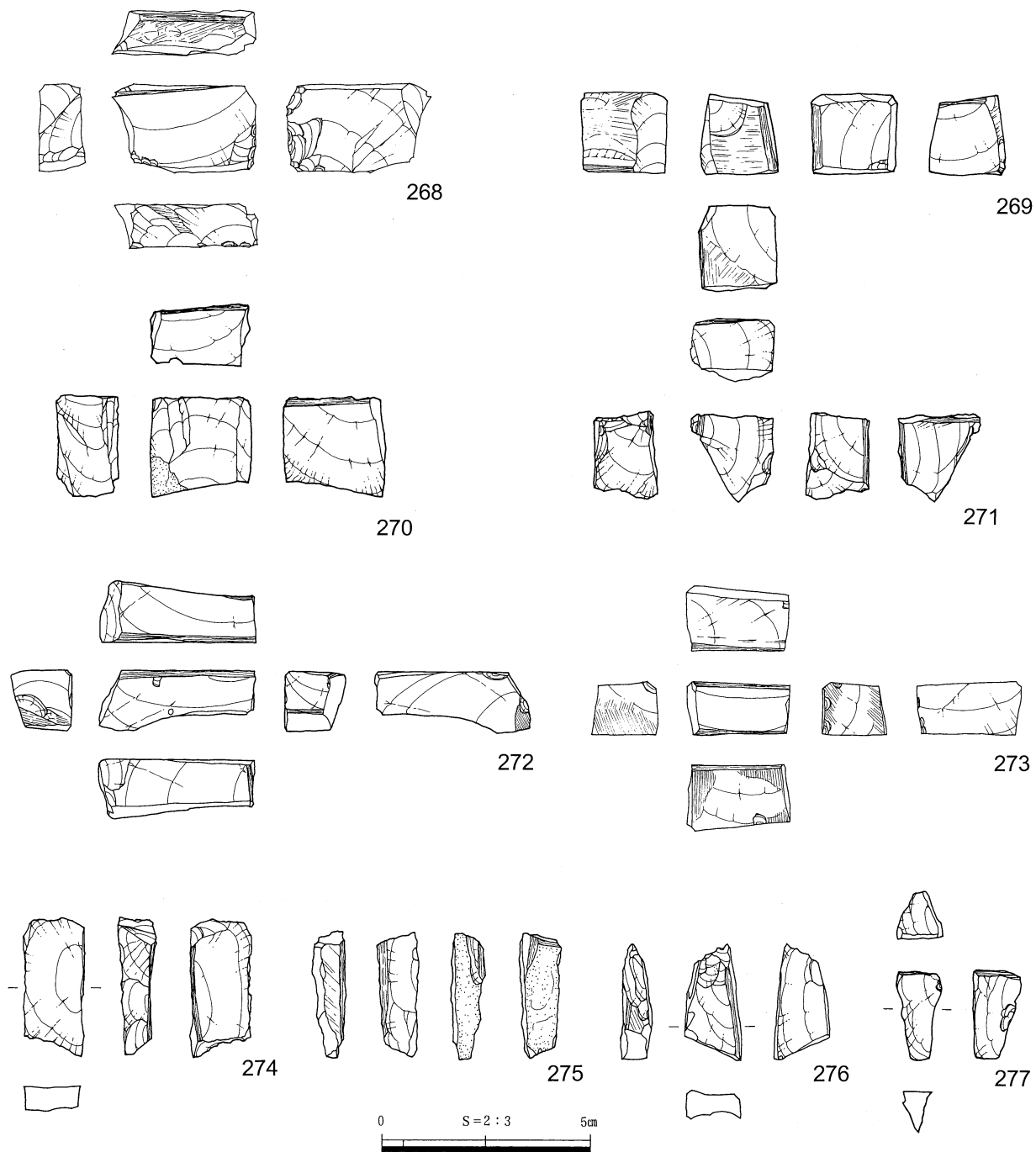


第202図 石器・管玉製作関係(6)



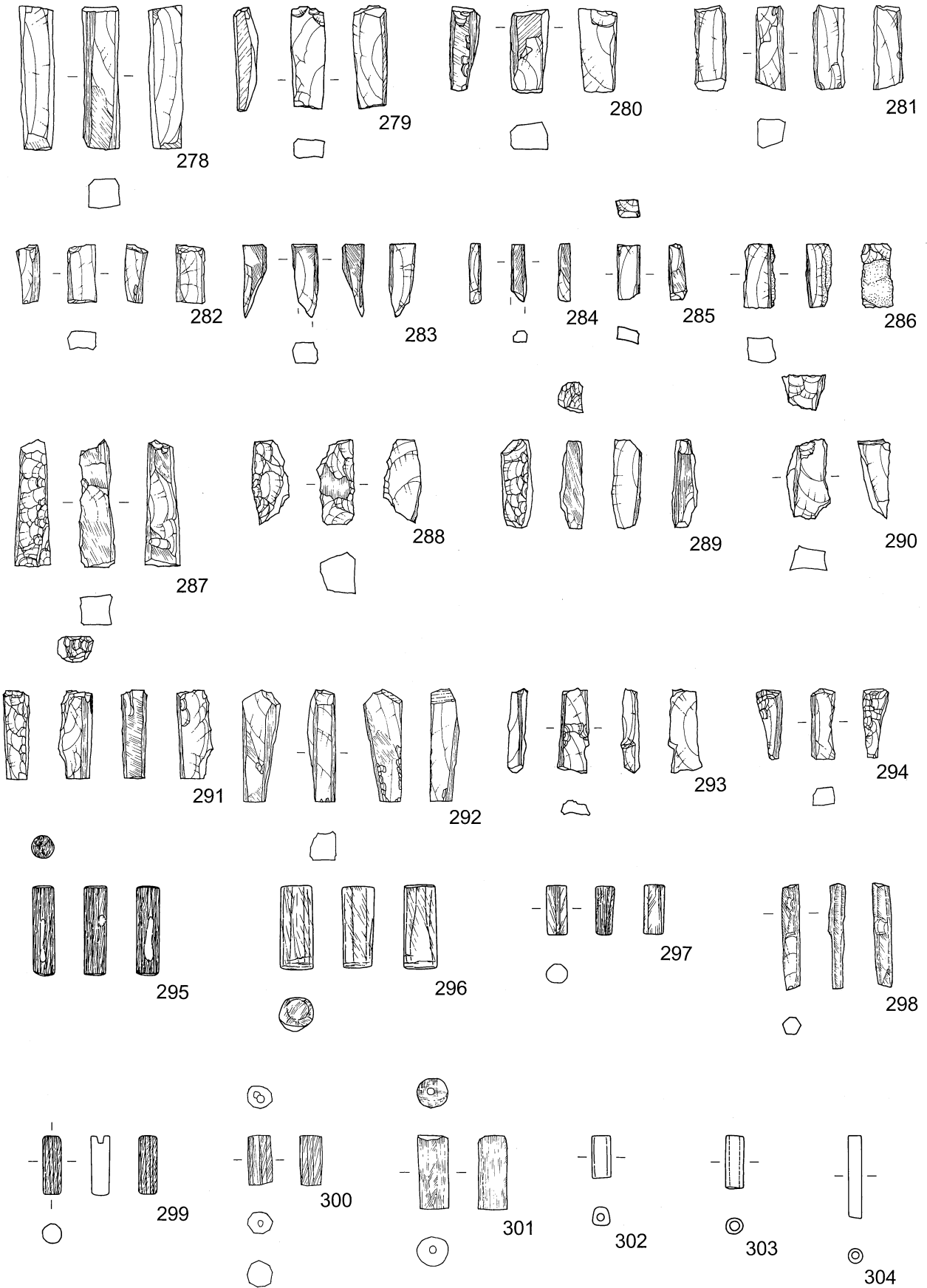
第203図 石器・管玉製作関係(7)

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	全長	最大幅	最大厚	石材	取上番号
250	管玉製作資料	7区	K層	弥生中期後葉	7.0	9.3	3.2		40892
251	管玉製作資料	5区	③層	弥生中期中葉～後葉	8.4	5.9	3.1		12898
252	管玉製作資料	5区	③層	弥生中期中葉～後葉	3.1	3.3	1.9		14418
253	管玉製作資料	5区	③層	弥生中期中葉～後葉	4.8	3.4	2.8		14443
254	管玉製作資料	7区	N層	弥生中期中葉	6.0	6.2	3.4		42010
255	管玉製作資料	7区	N層	弥生中期中葉	6.5	6.5	3.3		44054
256	管玉製作資料	5区	③層	弥生中期中葉～後葉	5.8	5.5	4.2		13639
257	管玉製作資料	6区	③層	弥生中期中葉～後葉	5.1	2.9	5.1		45932
258	管玉製作資料	7区	N層	弥生中期中葉	3.6	5.3	4.0		42467
259	管玉製作資料	5区	③層	弥生中期中葉～後葉	4.2	3.2	1.9		13832
260	管玉製作資料	7区	L層	弥生中期後葉	3.7	4.5	2.3		44021
261	管玉製作資料	5区	③層	弥生中期中葉～後葉	3.8	3.9	3.9		14885
262	管玉製作資料	7区	N層	弥生中期中葉	5.0	4.7	1.2		41332
263	管玉製作資料	5区	③層	弥生中期中葉～後葉	4.6	3.6	2.2		13830
264	管玉製作資料	7区	J～K層	弥生中期後葉	2.7	3.3	3.9		43761
265	管玉製作資料	5区	③層	弥生中期中葉～後葉	3.8	2.0	1.8		13880
266	管玉製作資料	7区	N層	弥生中期中葉	2.6	2.6	2.7		40934
267	管玉製作資料	5区	③層	弥生中期中葉～後葉	2.4	3.4	1.4		14092



第204図 石器・管玉製作関係（8）

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	全長	最大幅	最大厚	石材	取上番号
268	管玉製作資料	7区	N層	弥生中期中葉	2.1	3.4	1.1		44015
269	管玉製作資料	5区	③層	弥生中期中葉～後葉	2.0	1.9	1.5		13882
270	管玉製作資料	5区	③層	弥生中期中葉～後葉	2.4	2.4	1.5		14090
271	管玉製作資料	5区	③層	弥生中期中葉～後葉	2.2	2.0	1.5		14096
272	管玉製作資料	6区	③層	弥生中期中葉～後葉	1.5	3.7	1.4		46833
273	管玉製作資料	5区	③層	弥生中期中葉～後葉	1.6	2.5	1.8		13990
274	管玉製作資料	5区	③層	弥生中期中葉～後葉	3.4	1.5	0.9		13279
275	管玉製作資料	5区	③層	弥生中期中葉～後葉	3.0	1.0	0.8		13338
276	管玉製作資料	5区	③層	弥生中期中葉～後葉	2.3	1.1	1.1		14126
277	管玉製作資料	5区	③層	弥生中期中葉～後葉	2.2	1.1	1.1		13949



第205図 石器・管玉製作関係(9)

309～312は擦り切り溝を施溝して分割したものである。各面の構成は整形剥離痕もあるとはいえ、分割により形成された1枚の剥離面の場合が多い。それなりに分割作業が進行した段階のものと考えられるが、大きさからすると直方体素材②とした方がよさそうである。313は直方体素材③の残欠か。

314、315が角柱状素材で、316～320はそれに打ち欠きを加えたものである。320のように器体の一面に整形剥離痕を留めるものも角柱状素材として用いられている。321は研磨整形を行う段階のものと思われるが、穿孔途中に折れた可能性も否定できない。322は穿孔の際に半分に割れてしまった例である。323は穿孔を終えたものだが、器体の横断面形は四角い。穿孔前に研磨によって器体の角を取り去るのが一般的であったと思われるが、このような例外も存在する。

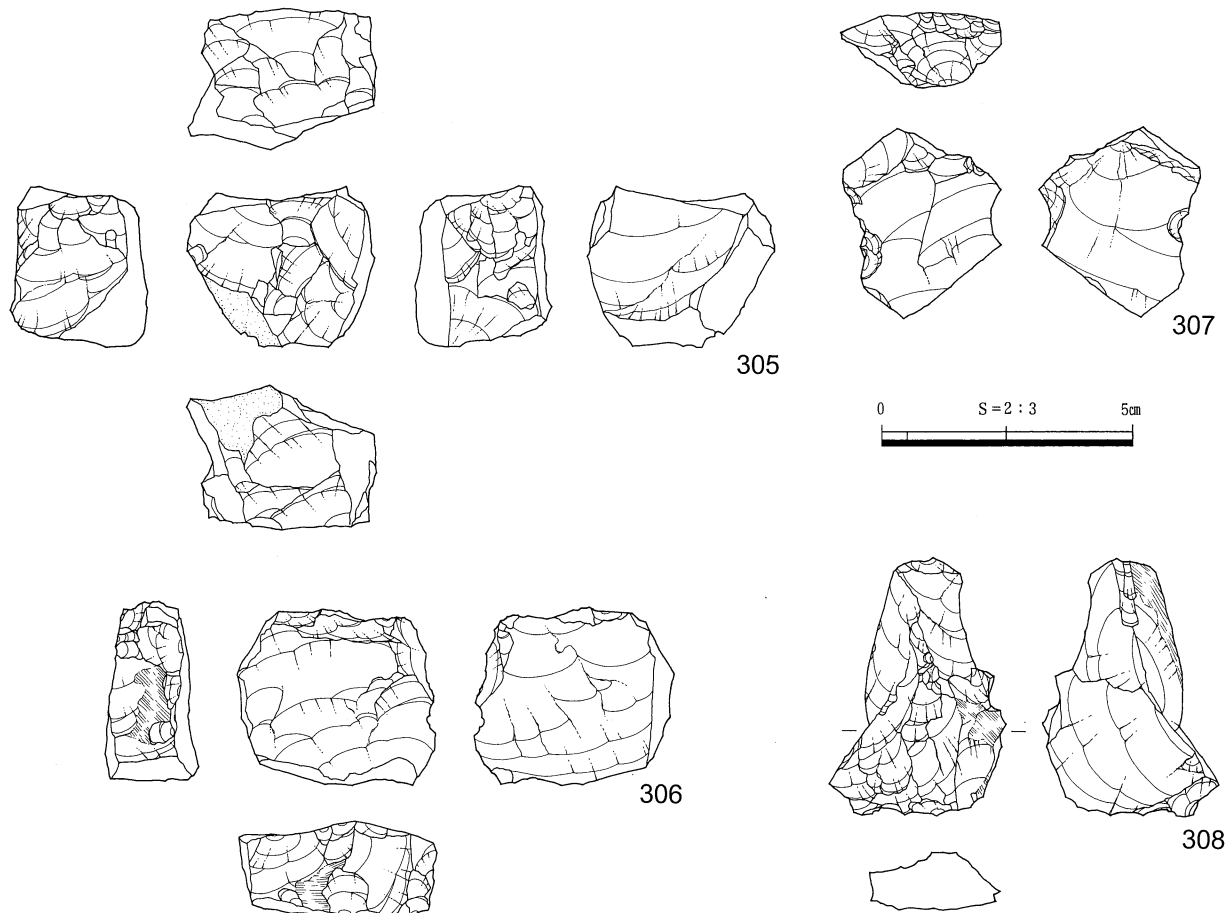
第208図は後期～古墳前期初頭の管玉である。324～330がS D 38からの出土で、ここからは18点の管玉を検出しており、うち11点は1ヶ所にまとまっていた。後述するガラス小玉もS D 38に多く見られ、やはり2ヶ所のまとまりがあり、それぞれ22点、15点を数える。S D 38には装身具がつながった状態で遺棄されていたのかもしれない。340～343は①層の出土で、中期のものを含んでいる可能性もある。

以上述べてきた資料の中で、擦り切り溝をもつものが多くあった。これは第209図に示した石鋸で施溝されたものと思われる。石鋸に用いられる石材は雲母片岩と鑑定され⁽²⁸⁾、当地では産出しない搬入石材である。施溝に用いられたものは刃部が摩滅しているが、摩滅の認められないものも数点あり、素材剥片の形態で持ち込まれたものと考えられる。

第211図にはこれまで述べてきた管玉製作に関する資料とは異なるものを示した。長い板状を呈するもので、両側縁の表裏に溝を認める。『青谷上寺地3』で報告したものとよく似ている⁽²⁹⁾（第210図）。溝のあり方が擦り切

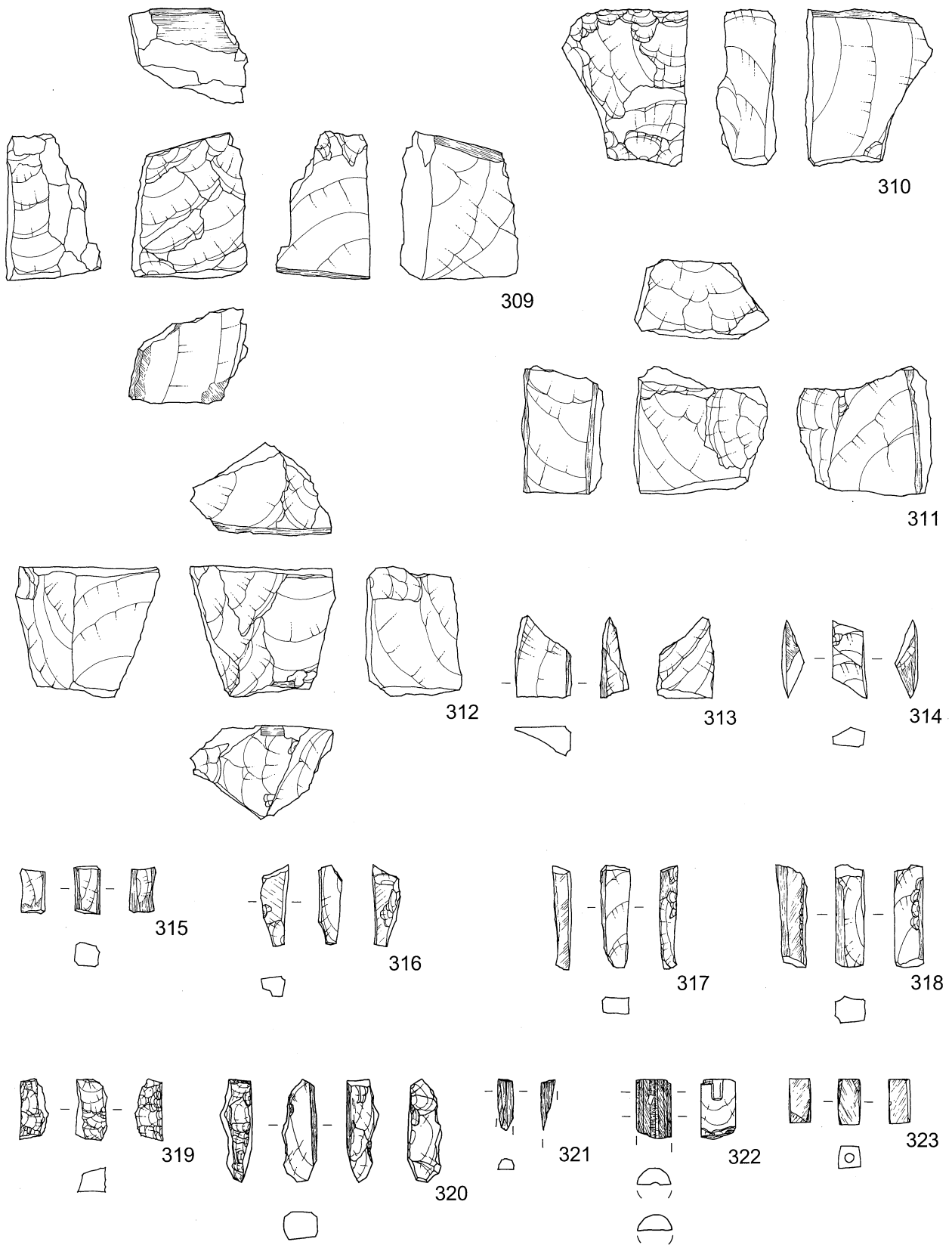
挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	全長	最大幅	最大厚	石材	取上番号
278	管玉製作資料	5区	③層	弥生中期中葉～後葉	3.9	1.0	0.7		14829
279	管玉製作資料	5区	③層	弥生中期中葉～後葉	2.8	0.9	0.6		14089
280	管玉製作資料	5区	③層	弥生中期中葉～後葉	2.3	1.1	1.1		14106
281	管玉製作資料	5区	③層	弥生中期中葉～後葉	2.2	0.8	0.8		14003
282	管玉製作資料	5区	③層	弥生中期中葉～後葉	1.6	0.8	0.6		14071
283	管玉製作資料	6区	③層	弥生中期中葉～後葉	(2.0)	0.7	0.6		46833
284	管玉製作資料	6区	③層	弥生中期中葉～後葉	(1.6)	0.3	0.3		49139
285	管玉製作資料	4区	明茶褐色粘質土	弥生中期中葉～後葉	1.5	0.6	0.5		4838
286	管玉製作資料	5区	③層	弥生中期中葉～後葉	1.7	0.9	0.7		13212
287	管玉製作資料	5区	③層	弥生中期中葉～後葉	3.4	0.9	1.0		13961
288	管玉製作資料	5区	③層	弥生中期中葉～後葉	2.3	1.0	1.0		14095
289	管玉製作資料	5区	③層	弥生中期中葉～後葉	2.3	1.0	1.0		14125
290	管玉製作資料	5区	③層	弥生中期中葉～後葉	2.1	1.1	0.9		14869
291	管玉製作資料	5区	③層	弥生中期中葉～後葉	2.1	1.1	0.9		14003
292	管玉製作資料	6区	③層	弥生中期中葉～後葉	3.0	0.7	1.0		46588
293	管玉製作資料	5区	③層	弥生中期中葉～後葉	2.2	0.9	0.4		14071
294	管玉製作資料	6区	③層	弥生中期中葉～後葉	1.7	0.6	0.7		46587
295	管玉製作資料	7区	N層	弥生中期中葉	2.4	0.6	0.6		40702
296	管玉製作資料	7区	N層	弥生中期中葉	2.2	0.9	0.9		44091
297	管玉製作資料	7区	K層	弥生中期後葉	1.3	0.5	0.6		43893
298	管玉製作資料	5区	③層	弥生中期中葉～後葉	2.9	0.5	0.5		14133
299	管玉製作資料	6区	③層	弥生中期中葉～後葉	1.6	0.5	0.5		44212
300	管玉製作資料	6区	③層	弥生中期中葉～後葉	1.3	0.6	0.6		47591
301	管玉製作資料	5区	③層	弥生中期中葉～後葉	2.0	0.8	0.8		14406
302	管玉	7区	I層	弥生中期後葉	1.2	0.5	0.5		42345
303	管玉	6区	③層	弥生中期中葉～後葉	1.2	0.4	0.4		47676
304	管玉	7区	I層	弥生中期後葉	2.2	0.4	0.4		37397

ったというにはシャープでなく、石材も碧玉ではないし国道調査区のものとも違ってやや粗粒であるが、本資料も管玉製作にかかわるものである可能性がある。同様なものは松江市西川津遺跡でも出土している⁽³⁰⁾。擦り切りを駆使して大型の板状素材から長い角柱状素材を生産し、管玉を作るものであり、西川津の場合はむしろそれが主体的な製作技法である。



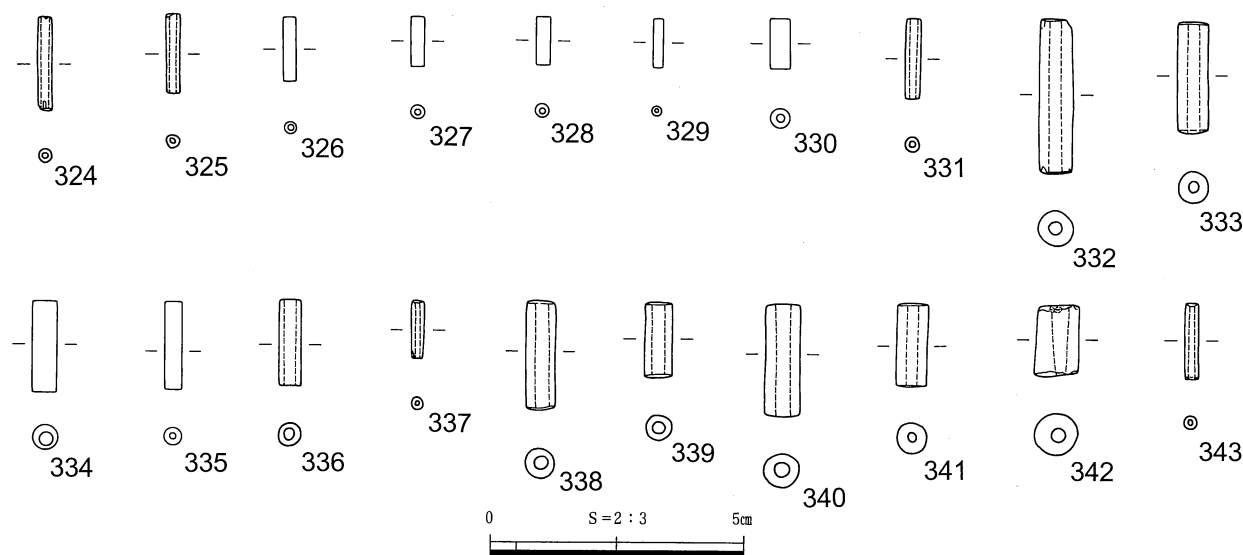
第206図 石器・管玉製作関係 (10)

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	全長	最大幅	最大厚	石材	取上番号
305	管玉製作資料	5区	②層	弥生後期初頭～古墳初頭	3.2	3.8	2.8		8444
306	管玉製作資料	5区	②層	弥生後期初頭～古墳初頭	3.5	4.0	1.9		13369
307	管玉製作資料	5区	②層	弥生後期初頭～古墳初頭	3.8	3.2	1.5		8255
308	管玉製作資料	5区	②層	弥生後期初頭～古墳初頭	5.2	3.2	1.7		8375
309	管玉製作資料	4区	②層相当	弥生後期初頭～古墳初頭	3.9	3.1	2.5		5428
310	管玉製作資料	5区	②層	弥生後期初頭～古墳初頭	4.1	3.3	1.5		13399
311	管玉製作資料	5区	②層	弥生後期初頭～古墳初頭	3.4	3.5	2.0		13459
312	管玉製作資料	5区	②層	弥生後期初頭～古墳初頭	3.5	3.7	2.4		13458
313	管玉製作資料	5区	②層	弥生後期初頭～古墳初頭	2.2	1.5	0.8		9182
314	管玉製作資料	5区	②層	弥生後期初頭～古墳初頭	1.8	0.9	0.6		9250
315	管玉製作資料	5区	②層	弥生後期初頭～古墳初頭	1.3	0.7	0.7		13367
316	管玉製作資料	5区	②層	弥生後期初頭～古墳初頭	2.1	0.7	0.6		8046
317	管玉製作資料	5区	②層	弥生後期初頭～古墳初頭	2.6	0.8	0.4		13456
318	管玉製作資料	5区	②層	弥生後期初頭～古墳初頭	2.7	0.8	0.8		9198
319	管玉製作資料	5区	②層	弥生後期初頭～古墳初頭	1.6	0.8	0.7		13352
320	管玉製作資料	7区	②層	弥生後期初頭～古墳初頭	2.7	0.9	0.9		35886
321	管玉製作資料	5区	②層	弥生後期初頭～古墳初頭	(1.3)	(0.4)	(0.3)		8301
322	管玉製作資料	7区	②層	弥生後期初頭～古墳初頭	(1.6)	0.9	(0.4)		39443
323	管玉製作資料	5区	②層	弥生後期初頭～古墳初頭	1.2	0.6	0.6		8264



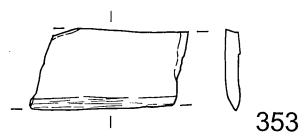
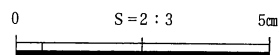
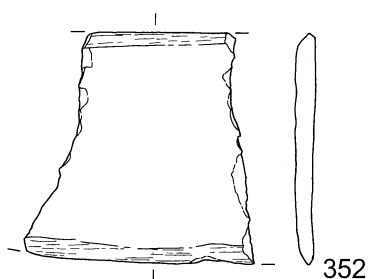
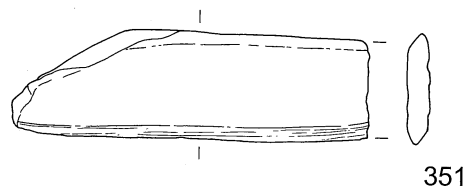
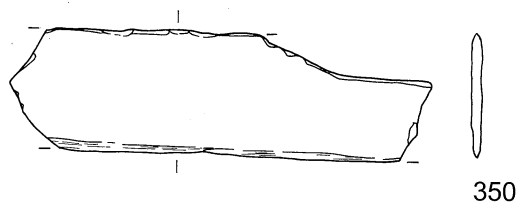
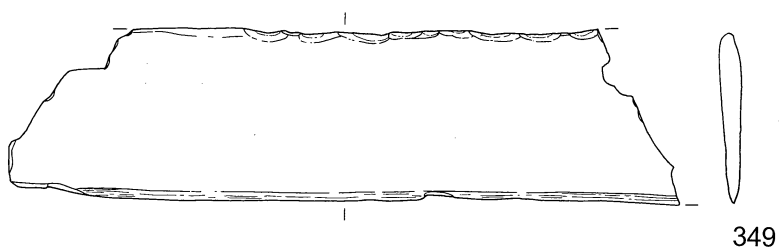
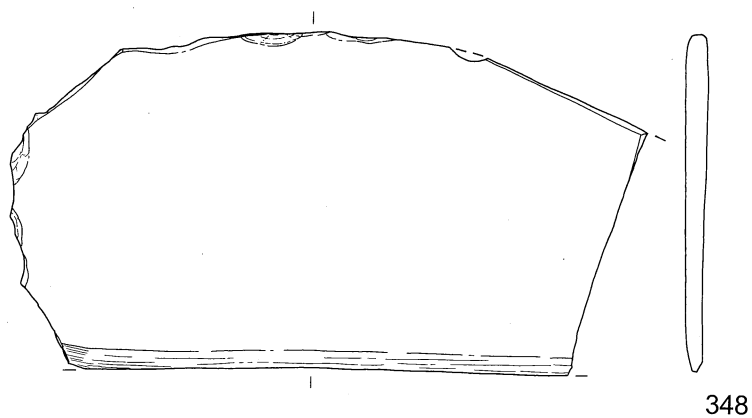
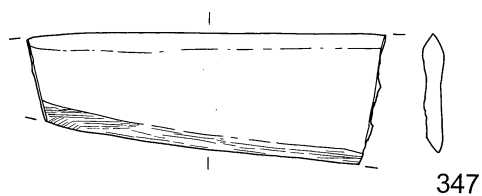
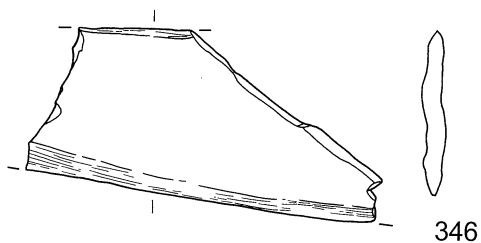
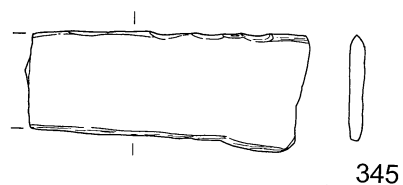
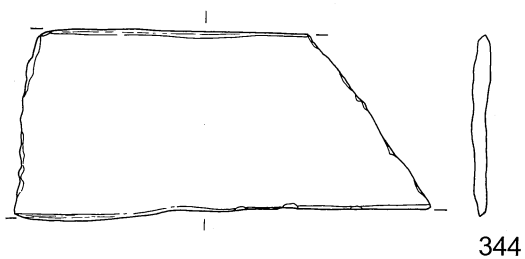
第207図 石器・管玉製作関係 (11)

山陰地方の玉作に関しては清水真一の業績がある⁽³¹⁾。清水は自ら調査した長瀬高浜遺跡の玉作工房出土資料をもとに「長瀬高浜技法」を設定した。それによると碧玉素材を打ち欠いて直方体素材を作り、それを分割して角柱状素材とする。これを研磨により整形して、長いものは輪切り状に擦り切り溝を入れ折る。さらに研磨整形したうえで穿孔し管玉に仕上げるといものである。本遺跡との関連でいえば、角柱状素材の稜を打ち欠かないことと、素材生産に擦り切りを多用しないことが特徴であろう。清水はまた「布勢技法」も提唱している。緑色凝灰岩の原石から打ち欠きにより角柱状素材を生産し、その稜を「押圧剥離」により取り去ったうえで、研磨して整形する。擦り切りは用いられない。「長瀬高浜技法」は弥生前期に、「布勢技法」は弥生後期に位置付けられ、県下の管玉製作にはいくつかのパターンがありそうである。本遺跡ではどちらにも属しない作り方で、弥生前期末から後期あるいは古墳前期初頭まで、ほぼ一貫した工程を踏襲している。石器であろうが木器であろうが他の生産用具が、地域を越えて同じ作り方をしているのとは極めて対照的である。



第208図 石器・管玉製作関係 (12)

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	全長	最大幅	最大厚	石材	取上番号
324	管玉	8区	SD38	弥生後期初頭～後葉	1.7	0.3	0.3		33054
325	管玉	8区	SD38	弥生後期初頭～後葉	1.5	0.3	0.3		33054
326	管玉	8区	SD38	弥生後期初頭～後葉	1.3	0.3	0.3		31764
327	管玉	8区	SD38	弥生後期初頭～後葉	1.0	0.3	0.3		33244
328	管玉	8区	SD38	弥生後期初頭～後葉	1.0	0.3	0.3		27375
329	管玉	8区	SD38	弥生後期初頭～後葉	1.0	0.2	0.2		30436
330	管玉	8区	SD38	弥生後期初頭～後葉	1.0	0.4	0.4		30427
331	管玉	7区	SK410	弥生後期末～古墳初頭	1.7	0.3	0.3		39937
332	管玉	5区	②層	弥生後期初頭～古墳初頭	2.7	0.5	0.5		9280
333	管玉	8区	A層	弥生後期	1.9	0.5	0.5		27403
334	管玉	7区	②層	弥生後期初頭～古墳初頭	1.8	0.5	0.5		39381
335	管玉	7区	②層	弥生後期初頭～古墳初頭	1.8	0.4	0.4		39167
336	管玉	4区	②層	弥生後期初頭～古墳初頭	1.5	0.3	0.3		5433
337	管玉	5区	②層	弥生後期初頭～古墳初頭	1.0	0.2	0.2		8370
338	管玉	8区	D層	弥生後期	1.9	0.5	0.5		27409
339	管玉	8区	D層	弥生後期	1.3	0.5	0.5		27410
340	管玉	5区	①層	弥生中期～奈良	2.0	0.6	0.6		12134
341	管玉	6区	①層	弥生中期～奈良	1.5	0.5	0.5		45189
342	管玉	5区	①層	弥生中期～奈良	1.2	0.7	0.7		10185
343	管玉	6区	①層	弥生中期～奈良	1.3	0.2	0.2		45117



第209図 石器・管玉製作関係 (13)

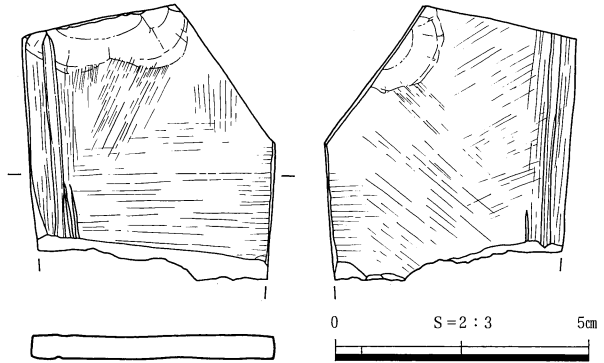
用途不明品（第212～214図）

第212図は軽石加工品である。355は人面を彫り出した稀有な例で、何かに取り付けたものであろうか。その他のものは穿孔や研磨が施されたり、鋭利なもので切ったりしたものである。具体的な用途は分からないが、同様な軽石製品を上越市裏山遺跡の報告では研磨具としている⁽³²⁾。そこで記載されている器面に残る痕跡（面状磨耗痕・溝状擦痕・筋状擦痕・刺突孔・円錐形穿孔）は本遺跡のものと同様である。用途に関しては検討を加える必要があるが、拝聴すべき意見である。

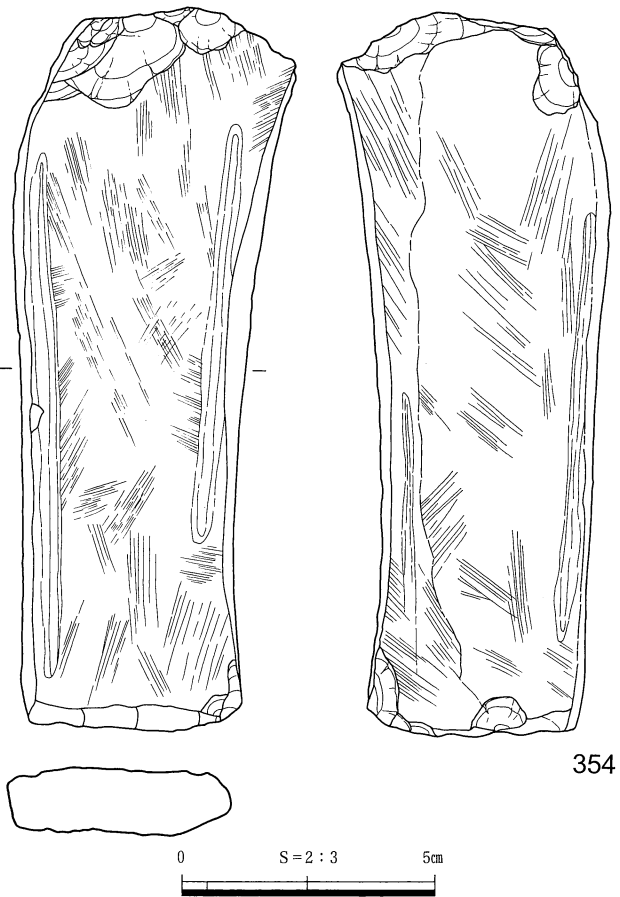
軽石加工品としたものは県道調査区から216点出土した。時期別に見ると前期末～中期前葉1点、中期中葉～後葉8点、後期～古墳前期初頭104点である。この他に時期不明34点と①層出土のもの69点がある。砥石の項でふれたように①層の遺物が後期～古墳前期初頭に属する可能性があるとするれば、軽石加工品の80%は弥生後期～古墳前期初頭のものということになる。

363、364は棒状石製品で、国道調査区にも類例がある。すでに述べたように⁽³³⁾銅鐸の舌である根拠は認められない。

365、366は円盤状製品で、365は出土層位から滑石製模造品の可能性がある。367は小円盤の表裏両面を放射状に研磨したもの。368は軟質な石材を厚い円形に整え、中心に穿孔をしようとしたものである。369は線刻のある剥片だが、絵画を表現したものではないだろう。370は剥片の下端と裏面に極細の穿孔痕を認める。371はガラス質安山岩の礫を分割したものに整形剥離と研磨を加えたものである。（湯村 功）

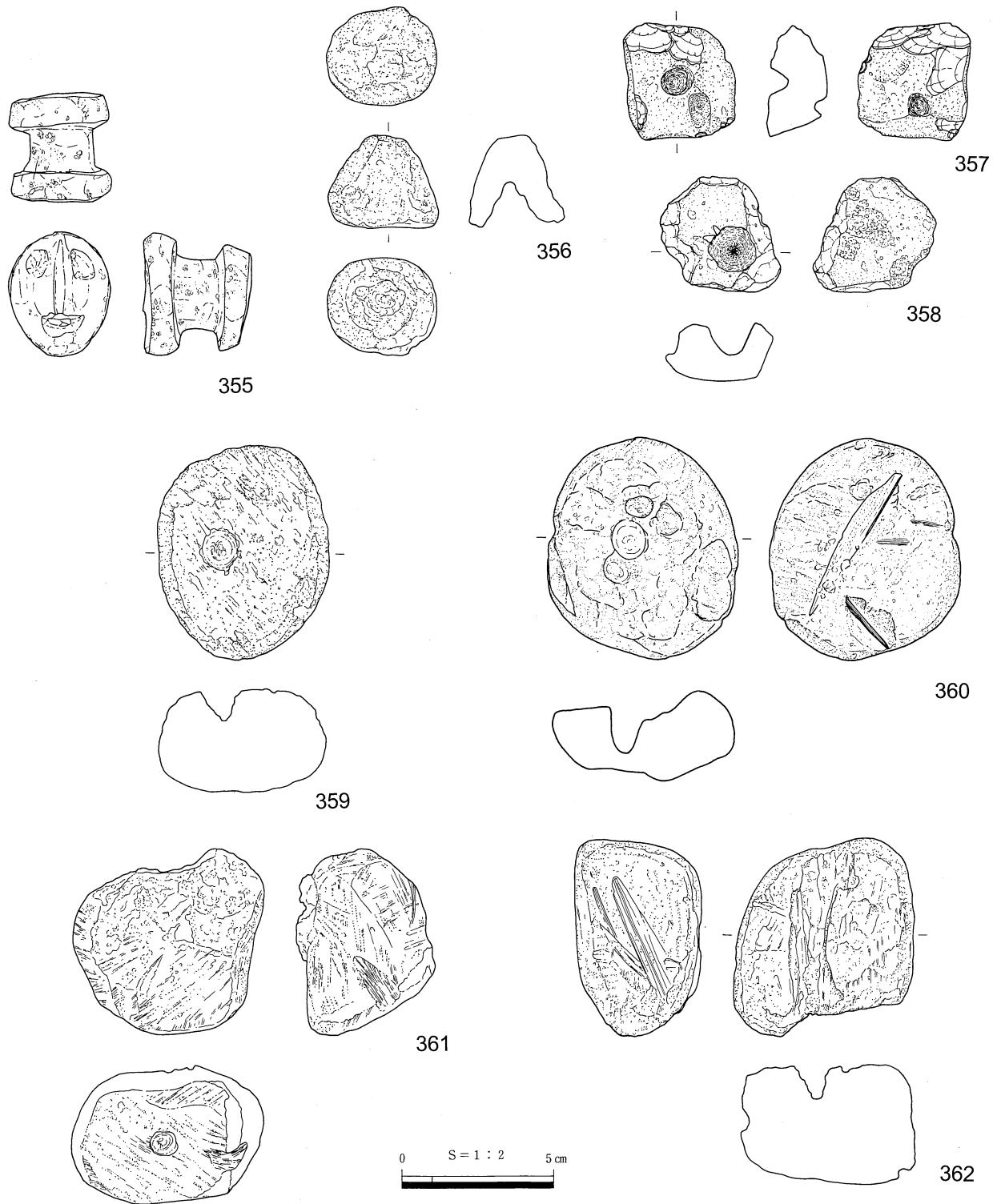


第210図 国道調査区出土の管玉製作関係資料



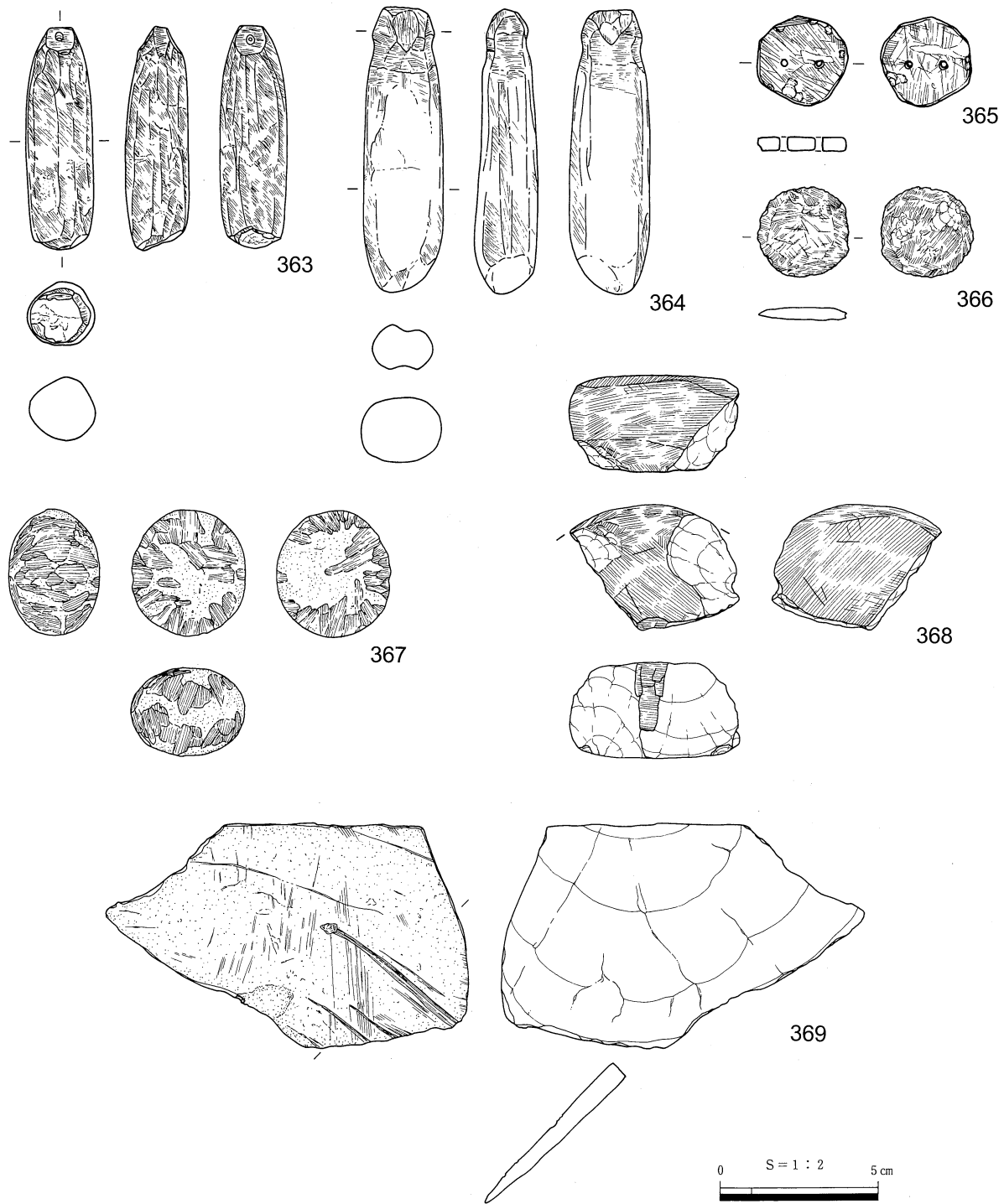
211図 石器・管玉製作関係（14）

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	全長	最大幅	最大厚	石材	取上番号
344	石鏃	5区	⑤層	弥生前期末～中期前葉	(8.1)	3.6	0.4		16512
345	石鏃	5区	⑤層	弥生前期末～中期前葉	(5.6)	2.4	0.3		16058
346	石鏃	6区	⑤～⑦層	弥生前期末～中期前葉	(7.0)	3.3	0.5		47650
347	石鏃	6区	③～⑤層	弥生前期末～中期後葉	(7.1)	2.7	0.4		46868
348	石鏃	6区	③～⑤層	弥生前期末～中期後葉	(12.6)	6.8	0.4	雲母片岩	46817
349	石鏃	6区	③層	弥生中期中葉～後葉	(13.3)	3.5	0.4		46913
350	石鏃	6区	③層	弥生中期中葉～後葉	(8.3)	2.5	0.3		46792
351	石鏃	7区	J層	弥生中期後葉	(7.0)	2.2	0.4	雲母片岩	36727
352	石鏃	5区	②層	弥生後期初頭～古墳初頭	(4.6)	4.7	0.4	雲母片岩	13399
353	石鏃	5区	②層	弥生後期初頭～古墳初頭	(3.1)	1.6	0.3		13005
354	管玉製作資料	5区	①層	弥生中期～奈良	14.2	4.9	1.2		9613



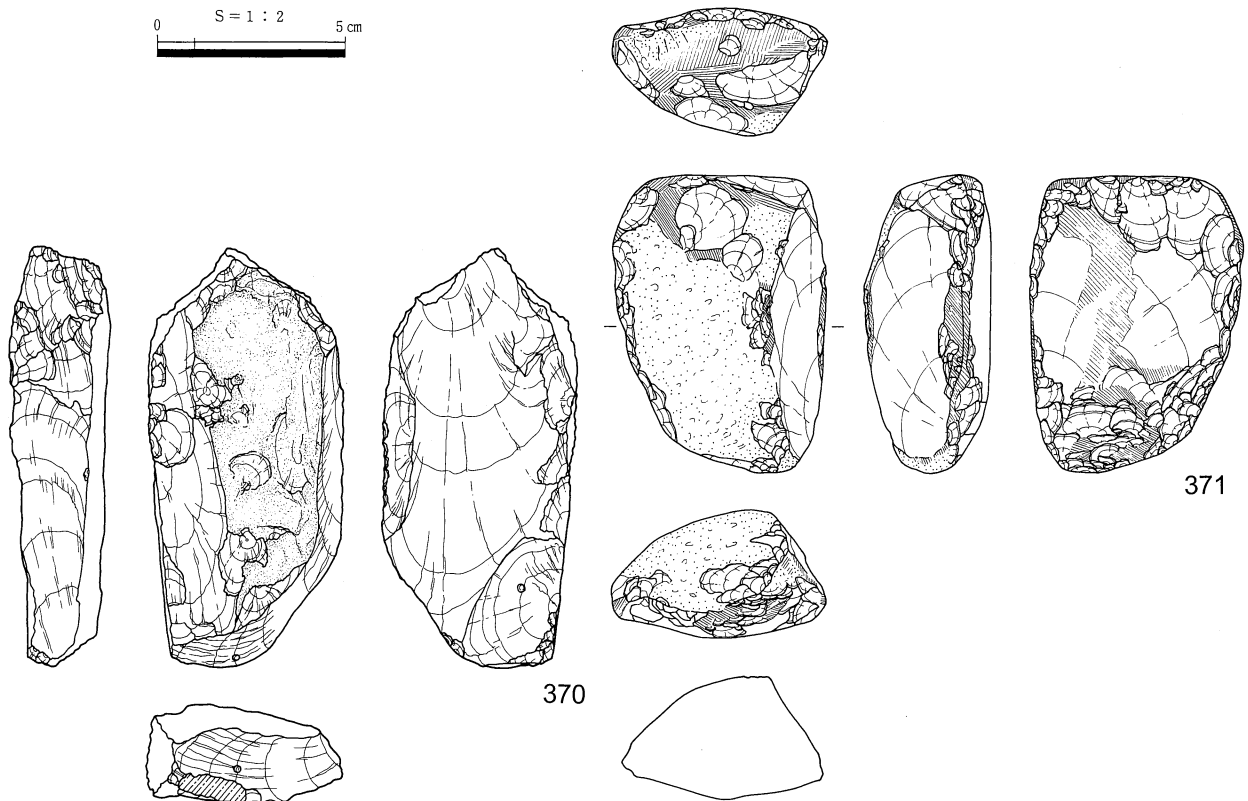
第212図 石器・用途不明品 (1)

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	全長	最大幅	最大厚	石材	取上番号
355	軽石加工品	8区	木器溜4	弥生後期	4.1	3.4	3.6		30000
356	軽石加工品	5区	②層	弥生後期初頭～古墳初頭	3.1	3.5	3.2		12680
357	軽石加工品	5区	②層	弥生後期初頭～古墳初頭	3.8	3.7	2.0		14382
358	軽石加工品	4区	SK119	弥生後期末～古墳初頭	3.8	4.0	2.4		2714
359	軽石加工品	4区	①層	弥生中期～奈良	7.1	5.6	3.5		1048
360	軽石加工品	5区	①層	弥生中期～奈良	7.3	6.3	3.0		11248
361	軽石加工品	4区	SD11	弥生後期初頭～後葉	6.0	6.1	4.4		4276
362	軽石加工品	5区	②層	弥生後期初頭～古墳初頭	5.8	5.9	4.2		9160



第213図 石器・用途不明品（2）

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	全長	最大幅	最大厚	石材	取上番号
363	棒状石製品	5区	③層	弥生中期中葉～後葉	7.1	2.1	2.0		14000
364	棒状石製品	5区	①層	弥生中期～奈良	9.0	2.5	2.1		12020
365	円盤状石製品	4区	①層	弥生中期～奈良	2.8	2.8	0.4		784
366	円盤状石製品	5区	SD9	弥生中期中葉～後葉	2.8	2.8	0.4		9474
367	円盤状石製品	5区	SK152	弥生後期初頭～後葉	4.0	3.6	2.8		10990
368	円盤状石製品	5区	SK24	弥生中期中葉～後葉	(4.0)	(5.3)	3.0		8770
369	線刻のある磔	5区	貝塚	弥生前期末～中期前葉	7.1	11.4	0.9		14323
370	器種不明	5区	貝塚	弥生前期末～中期前葉	11.2	5.2	2.6		14958
371	器種不明	5区	⑤層	弥生前期末～中期前葉	8.0	5.7	3.4		15919



第214図 石器・用途不明品(3)

註

- (1) 北浦弘人編 2001『青谷上寺地遺跡3』(財)鳥取県教育文化財団。
- (2) 下條信行氏のご教示による。
- (3) 下條信行 1996「扁平片刃石斧について」『愛媛大学人文学会創立20周年記念論集』。
- (4) 註(3)前掲文献。
- (5) 下條信行 1997「柱状片刃石斧について」『古文化論叢—伊達先生古稀記念論集』。
- (6) 註(3)前掲文献。
- (7) 註(1)前掲文献。
- (8) 註(5)前掲文献。
- (9) 武井則道編 1994『大塚遺跡—弥生時代環濠集落址の発掘調査報告Ⅱ 異物編—』(財)横浜市ふるさと歴史財団。
- (10) 平井典子 1988「中・四国における弥生時代の石器について」『考古学ジャーナル』No.290。
- (11) a 高知県教育委員会編 1986『田村遺跡群』第3分冊。
b 高知県教育委員会編 1986『田村遺跡群』第4分冊。
- (12) 斎野裕彦 1994「弥生時代の大型直縁刃石器(下)」『弥生文化博物館研究報告』第3集。
- (13) 註(1)前掲文献において白色粘土状物質と報告されたものである。
- (14) a 下條信行 1984「弥生・古墳時代の九州型石錘について—玄海灘海人の動向—」『九州文化史研究所紀要』。
b 和田晴吾 1985「土錘・石錘」『弥生文化の研究5 道具と技術Ⅰ』。
- (15) 高田浩司 2001「吉備における弥生時代中期の石器の生産と流通」『古代吉備』第23集。
- (16) 下條信行氏のご教示による。また次の文献を参考にした。
下條信行 1982「石矛の提唱—木葉形磨製石製武器について—」『賀川光夫先生還暦記念論集』。
- (17) 石神幸子・増田富喜子・村上年生・池北孝男 『池上遺跡 石器編』(財)大阪文化財センター。
- (18) 内田律雄編 1989『西川津遺跡発掘調査報告書Ⅴ(海崎地区3)』島根県土木部河川課・島根県教育委員会。
- (19) 秋山浩三・仲原知之 1999「近畿における石庖丁生産・流通の再検討(Ⅰ)—池上曾根遺跡の石庖丁製作工程—(下)」『大阪文化財研究』第17号 (財)大阪府文化財調査研究センター。

このほか亀井遺跡・城山遺跡でも同様の例がある。(財)大阪府文化財調査研究センターのご厚意により実見させて

いただいた。

- (20) サヌカイトという用語は産地を限定して厳密な意味で用いるべきであろうが、ここではガラス質安山岩のうち緻密で、一般に「サヌカイト」と呼称されているものを指している。
- (21) 岡村道雄 1983「ピエス・エスキュー、楔形石器」『縄文文化の研究』7。
- (22) 註(15)前掲文献。
- (23) 湯村 功編 2000『青谷上寺地遺跡1』(財)鳥取県教育文化財団。第120図および巻頭図版6。
- (24) 竹広文明氏のご教示による。
- (25) 竹広文明 2000「山陰における石器石材利用をめぐる二、三の問題」『鳥根考古学会誌』第17集。
- (26) a 矢本節朗 1991「大稲塚遺跡の石鏃製作技術について」『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書VI(佐原地区3)』日本道路公団東京第一建設局・(財)千葉県文化財センター。
b 松田順一郎 1999「楔形両極石核の分割に関する実験—縄文時代晩期サヌカイト製石鏃製作技術の復元に向けて—」『光陰如矢—荻田昭次先生古稀記念論集—』。
- (27) 赤木三郎氏の鑑定を受けた。
- (28) 赤木三郎氏の鑑定を受けた。
- (29) 註(1)前掲文献の第117図159。
- (30) 註(18)前掲文献。
- (31) 清水真一 1982「鳥取県下の玉作遺跡について—山陰の弥生時代の玉生産の流れ—」『考古学研究』第28巻第4号。
- (32) 野水 仁 2000「軽石製研磨具」『上信越自動車道関係発掘調査報告書VII 裏山遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団。
- (33) 註(1)前掲文献の136ページ。

第4節 鉄器

県道調査区では130点の鉄器が出土した。出土傾向を概観すると、国道調査区と同じく包含層中から検出される例が圧倒的多数を占め、遺構に伴うものは稀少である。総数の約9割が微高地域に集中しており、調査区ごとに見れば県道7区出土鉄器が最も多く84点を数える。ここで注意を要するのは県道7区の微妙な地形変化、土地利用の変遷である。県道7区は弥生時代前期末から古墳時代前期初頭まで微高地域であった5、6区と異なり、弥生時代中期後葉から末段階までは低地で、杭と横板で大規模な護岸を敷設した大型の溝（SD27）あるいは構造物が築かれる。大型溝を埋める砂層中、杭と横板で溝状に構築された遺構中からも若干鉄器の出土を見るところはいえ、大半が後期から古墳時代前期初頭のものである。さらに、弥生時代後期以降微高地となる7区では単純層ではないにしても概ね後期前半という時間幅で捉えられる包含層（第6図H層）が確認できたことで、前期末から古墳時代前期初頭まで時期を追った器種、組成の変化が読みとれるだけでなく、数量的にも増加、安定する後期段階の様相が把握できる点でも大きな意義がある。以下、県道調査区出土鉄器について器種ごとに特徴を述べるが、個々の法量については観察表に委ねているためそちらを参照いただきたい。そして最後に国道調査区出土資料も含めた青谷上寺地遺跡全体の弥生時代鉄器の評価を行うこととする。

鑄造鉄器（第215図～第217図）

鑄造鉄器⁽¹⁾は完形品、破片及びその再利用品あわせて14点出土している。

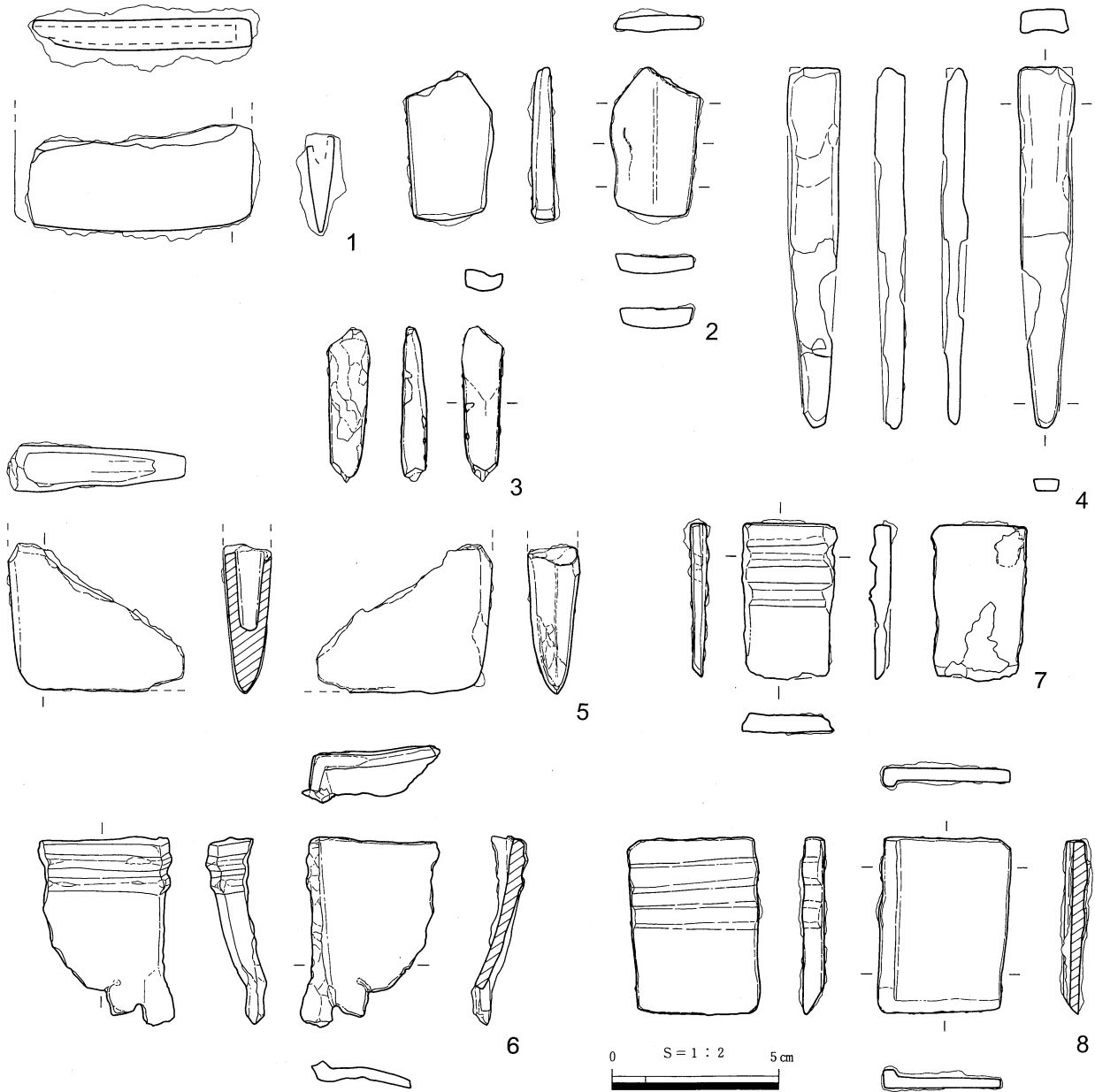
1は鑄造鉄斧の刃部片で、側縁をわずかに欠損している。弥生時代前期末から中期前葉のものである。2、3は鑄造鉄斧側面部片で、2は袋部内面側に、3は外面に鑄型の合わせ目が確認できる。4は鑄造鉄器側面部片で、両側縁から主面にいたる立ち上がりがわずかな隆起として確認できる。5は鑄造鉄斧刃部片である。残存する側面外面には鑄型の合わせ目が明瞭に残る。側面上端に鑿による裁断、もしくは打撃が原因と見られる面をもつ。6は側縁を残した鑄造鉄斧袋部の破片で、基部からわずかに下がったところに断面三角形の細い二条突帯を有す。破片下半部は外面方向へ反るように曲がっており、破損ではなく人為的な圧力が加わって割られたものと考えられる。破面が整形されている2～4についても言えるが、結果的に廃棄されてはいるものの再利用を目的として用意された素材としての性格をもつと推察される。2は弥生中期後葉、3は弥生後期、5、6は弥生後期～古墳前期初頭。4は①層出土で時期不明。

7～11は破片の再利用品である。7、8は二条突帯をもつ鑄造鉄斧の端部を含む袋主面部が用いられており、二条突帯が明瞭に残っている⁽²⁾。二条突帯は袋端部からやや下がったところに設けられており、7、8でわずかに高低の違いが認められるが、断面形が梯形をなすという点で共通する。7の側面には破片を成形した際の擦り切り痕状の溝が看取できる⁽³⁾。9は鑄造鉄器の袋部破片を利用したもので、鍵状に残る側縁部破面がほぼフラットになるよう研磨されている。10・11は鑄造鉄斧側面部片で、本来の袋端部側の小口を研ぎ出し刃としている。両者を比較した場合、11のほうがより本来の刃部に近い位置の破片である。両主面への立ち上がりがわずかに残るため横断面は凹字状を呈し、外面側に鑄型の合わせ目が認められ、特に10は鑄造時の鑄型のずれが横断面形に表れている。11は破面であるはずの立ち上がり部分がフラットになるほど研磨、整形されているものの、下端は面をもち刃が完全に研ぎ出されていないため加工途中の未製品であろう。12は肌や錆の感じ、そしてX線透過撮影によって得られた所見などを総合すれば鑄造鉄器破片の再利用品と考えられる。形態的な特徴からは破片の部位を特定できない。7～10は③層、11はI層、12は②層から出土しており、12を除きすべて弥生中期中葉～後葉に属することが特徴といえる。

13は鑄造鉄斧の中に板状鉄斧が入り子状態となっている特異な例で、板状鉄斧が鑄造鉄斧袋部に密着していないこと、袋内部において左右のバランスを保って中空状態にあることを注視すれば、当時何らかの介在物を袋内に詰めた上で板状鉄斧を差し込んだものと推察される。鑄造鉄斧は袋端部を欠損している。平面形は刃部にかけて緩やかに広がる梯形をなす。刃は両側縁から弧状に張り出す。横断面形は袋部で長方形、刃部付近で凸レンズ状となる。板状鉄斧は本遺跡出土例の中では比較的大きく、平面形は梯形、横断面形は長方形を呈す。文中写真

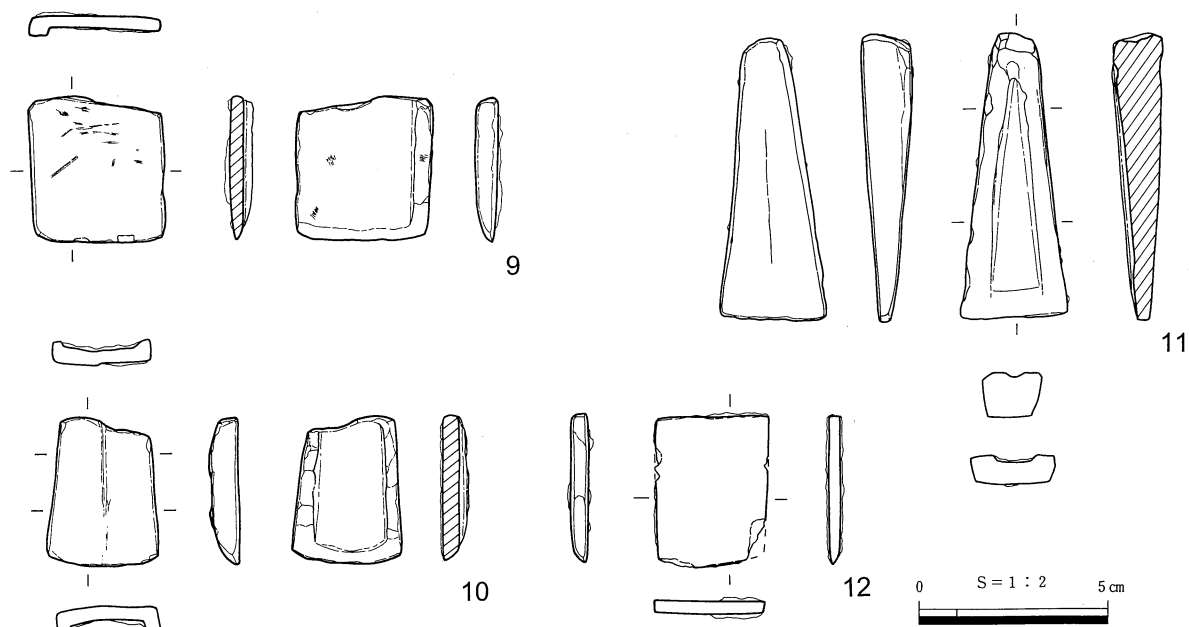
1 (P.254) を参照されたい。

14はほぼ完形の鑄造鉄斧である⁽⁴⁾。平面形は刃部がやや張り出す梯形で、袋部の横断面形は長六角形を呈す。縦断面形は逆三角形を呈し、袋は深い。二条突帯は袋端部に接するほどの高い位置をめぐり、突帯の間隔も詰まるなど痕跡的である。湯回りが悪かったためか側面に亀裂が生じている。反対の側面は上半約三分の一を欠失しているが、欠失箇所の形状と破面の滑らかさからすれば意図的なものであろう。側面下端から刃にかけて一方は撥状に張り出すが逆は面をもって収められており、左右でバランスを欠く。13・14とも中国東北地域から朝鮮半



第215図 鉄器・鑄造鉄器破片及び再加工品 (1)

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量	備考	取上番号
1	鑄造鉄斧	6区	①②~⑥層	弥生前期末~中期前葉	長(※3.0)、最大幅(※6.7)、最大厚(※0.8)		47653
2	鑄造鉄斧	7区	I層	弥生中期後葉	長(4.5)、最大幅(2.7)、最大厚0.6		40723
3	鑄造鉄斧	7区	H層	弥生後期	長(4.65)、最大幅(1.35)、最大厚(0.75)		38673
4	鑄造鉄斧	4区	①層	弥生中期~奈良	長10.8、最大幅1.6、最大厚0.85		978
5	鑄造鉄斧	5区	②層	弥生後期~古墳初頭	長(4.6)、最大幅(5.0)、刃部厚1.1		9208
6	鑄造鉄斧	7区	②層	弥生後期~古墳初頭	長(5.65)、最大幅(4.0)、凸帯厚0.6、身部厚0.4		35878
7	板状鉄斧	6区	③層	弥生中期中葉~後葉	長4.7、最大幅2.8、凸帯厚0.6、基部厚0.4		46760
8	板状鉄斧	5区	③層	弥生中期中葉~後葉	長5.3、最大幅4.0、凸帯厚0.5、基部厚0.4		14932



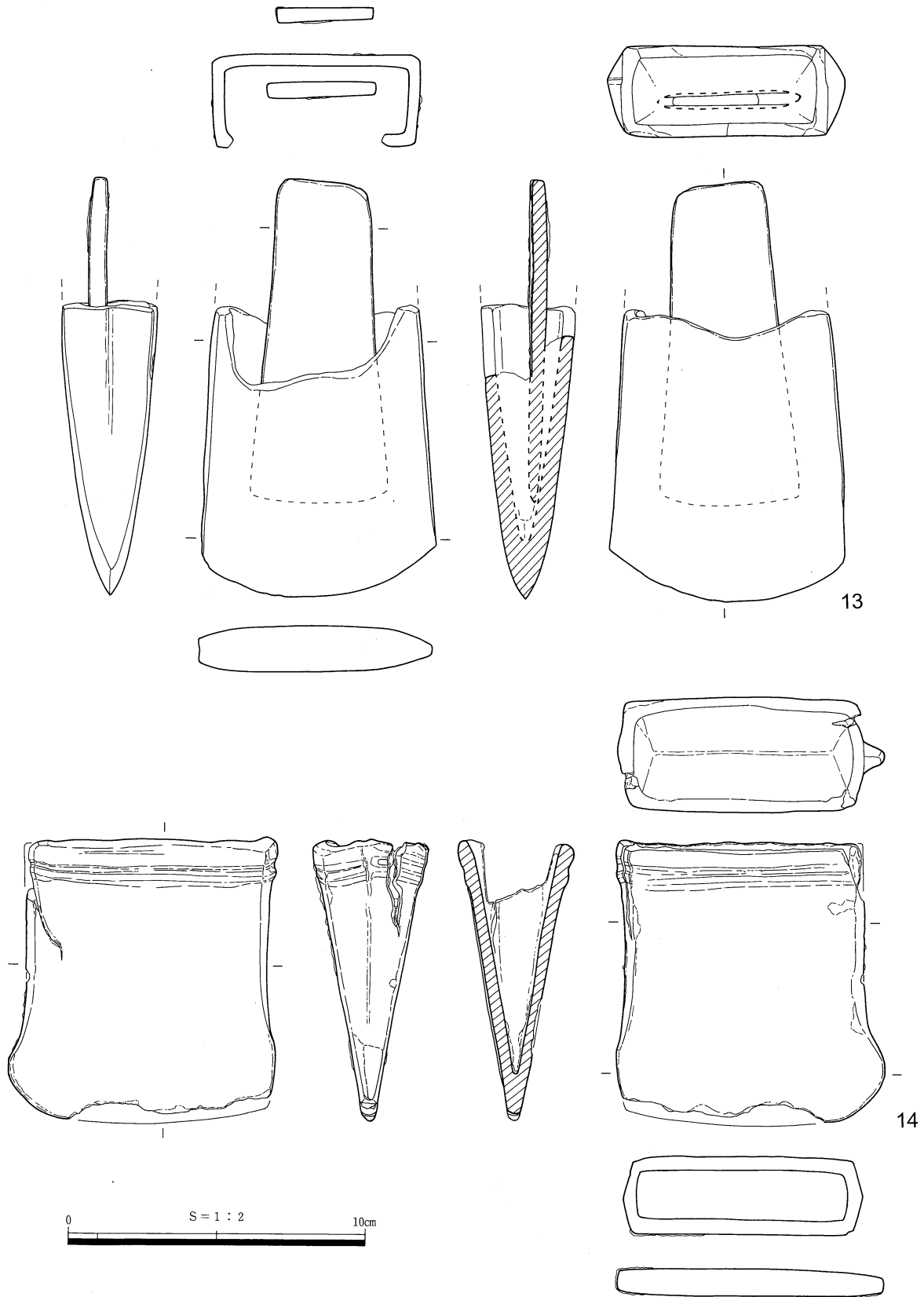
第216図 鉄器・鑄造鉄器破片及び再加工品（2）

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量	備考	取上番号
9	板状鉄斧	5区	③層	弥生中期中葉～後葉	長3.8、最大幅3.65、最大厚0.65		15032
10	板状鉄斧	5区	③層	弥生中期中葉～後葉	長3.9、最大幅2.9、最大厚0.8		13500
11	鑿	7区	1層	弥生中期後葉	長7.6、最大幅2.85、最大厚1.25		40921
12	板状鉄斧	4区	②層	弥生後期～古墳初頭	長4.0、最大幅3.1、最大厚0.4		4734

島西北地域において製作された鑄造鉄斧で、13は弥生後期、14は弥生後期～古墳前期初頭。

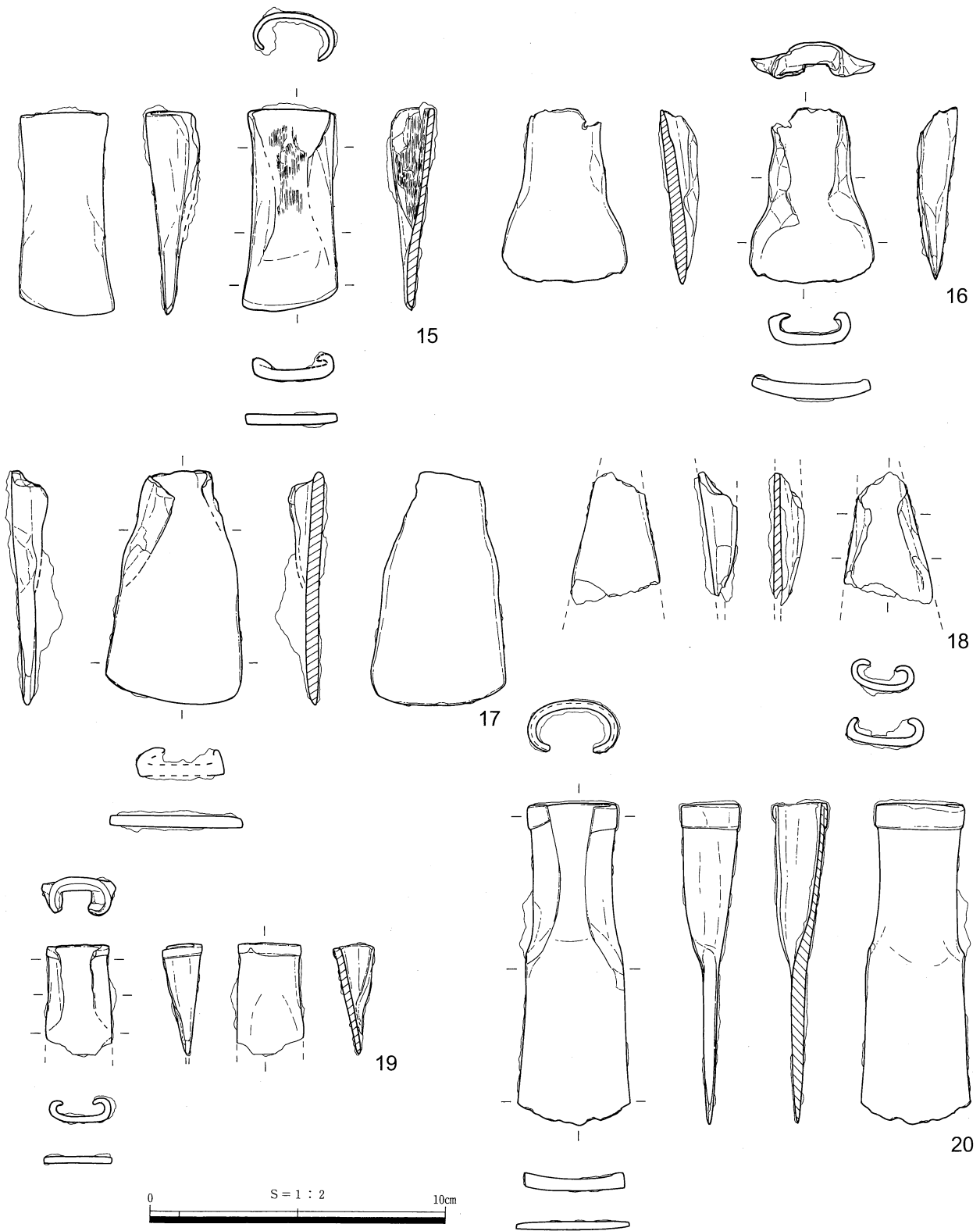
袋状鉄斧（第218図～第220図）

15は平面長方形、袋部横断面略楕円形を呈すもので、折り返し上端をわずかに欠損している。袋内部には噛み合った部分のみ木柄が遺存している。片刃で扁刃を呈するため縦斧として使用されたと推察するが、その用途は明らかでない。16は刃部が撥形に広がる平面形をもつ。袋部横断面形は扁平な略長方形を呈し、折り曲げの幅も狭く木柄先端があたる部分で突き合わせが最もしっかりするなど、袋としての機能性は高くない。軽く曲げて成形した状態の袋に木柄をはめ込み、上から面をもつほど鍛打して固定するという装着方法であったことが理解できる。鉄斧製作時に袋部を翼状に作り出していなかったため、袋部の成形に伴い身部も突き合わせ側へ湾曲している。刃は両刃状を呈す。15・16とも弥生中期後葉の製品である。17はS A 26埋土上層に形成された円礫による集石の下から出土した中期後葉の製品である。平面形及び袋部横断面形は不整な梯形で、袋の突き合わせは弱く左右のバランスが極端に悪い。X線透過撮影によって身部内面に空洞ができていることを確認しており、破損した袋状鉄斧を加工し直した再利用品であると考えられる。突き合わせ側から見れば、概ね鉄斧の右半部を再成形したものと理解されたい。幅広に折り曲げられた方が既存のものでそのまま利用しているが、逆は折り曲げ幅も狭く、ほとんど用を足していない。刃縁も鈍く、加工途中で廃棄された未製品であるかもしれない。18は袋上部及び身以下の大半を欠損しており、残存部分から平面形は梯形に近いものであったと推察される。弥生後期。19・20はサイズが大きく異なるが、どちらも袋端部に突帯状の折り返しをもつタイプである。折り返し幅は19で3 mm、20で8 mmを測る。19は身をわずかに残してそれより下を欠損している。平面形は長方形、袋部横断面形は略長方形を呈する。袋部の折り曲げ幅は左右ではほぼ同じであるが、突き合わせ幅は広く弱い。下端右側はソケット状に密着されている。袋から身にかけて厚みの変化は見られない。20は完存品である。腰に向かってわずかにくびれる袋からやや幅広となる刃部をもつ平面形を呈す。袋部横断面形は略楕円形を呈し、突き合わせも、特に中央付近においてしっかりとしている。袋から身にかけて厚みを増すが、段を有してはいない。身部は主背面、側面とも精緻に面取りされている。刃は弧状を呈し、両刃である。19はS D 54出土で弥生後期初頭から前



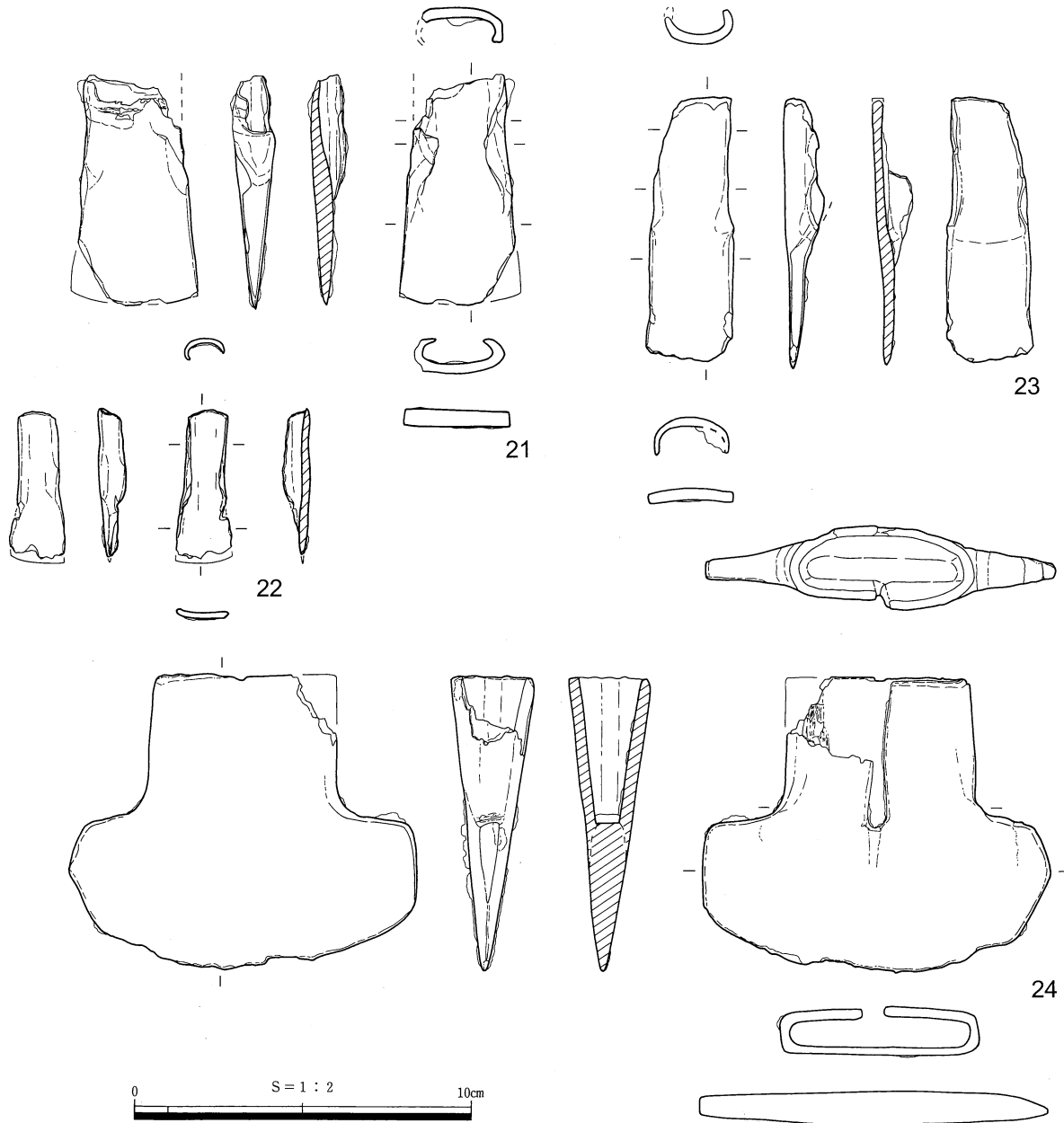
第217図 鉄器・鑄造鉄斧

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量	備考	取上番号
13	鑄造鉄斧 +板状鉄斧	7区	H層	弥生後期	全長14.1 鑄造斧長(9.9)、袋幅(8.0×3.2)、 鑄造斧袋厚0.4、刃厚1.55	中国東北部～朝鮮半島西北部産	36383
14	鑄造鉄斧	4区	②層	弥生後期～古墳初頭	長(9.5)、袋部長8.3、袋部幅8.3×3.9、 刃幅9.0、凸帯厚0.5、刃厚1.0	中国東北部～朝鮮半島西北部産 二条凸帯斧	1700



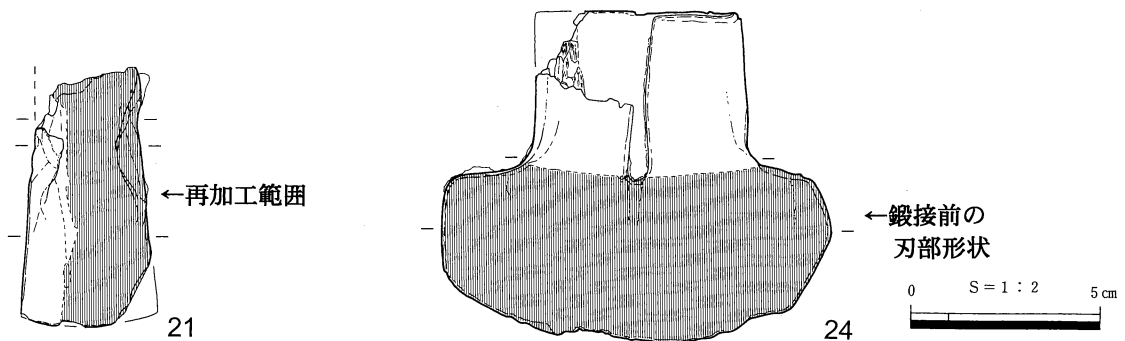
第218図 鉄器・袋状鉄斧（1）

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量	備考	取上番号
15	袋状鉄斧	7区	I層	弥生中期後葉	長6.9、刃幅3.2、身厚0.35	木質(袋部内)遺存	40864
16	袋状鉄斧	7区	I層	弥生中期後葉	長5.95、刃幅4.2、身厚0.5		36260
17	袋状鉄斧	7区	SA26	弥生中期後葉	長7.9、刃幅4.5、身厚0.45		37457
18	袋状鉄斧	7区	H層	弥生後期	長(4.4)、幅(3.1)、身厚(※0.3)		40511
19	袋状鉄斧	8区	SD54	弥生後期初頭～前葉	長(3.7)、袋幅2.3、折返厚0.3、身厚0.2	袋端部折返	34567
20	袋状鉄斧	7区	H層	弥生後期	長10.9、袋幅3.0、刃幅3.9、折返厚0.3、身厚0.5	袋端部折返	39409



第219図 鉄器・袋状鉄斧（2）

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量	備考	取上番号
21	袋状鉄斧	8区	SD38-2	弥生後期中葉～後葉	長(6.9)、幅3.4、袋厚0.3、身厚0.5	右半再加工	33190
22	袋状鉄斧	7区	②層	弥生後期～古墳初頭	長(4.4)、幅1.6、身厚0.2		35551
23	袋状鉄斧	4区	②層	弥生後期～古墳初頭	長7.8、幅2.5、身厚0.4	弥生末遺構面より下	3215
24	有肩鉄斧	5区	②層	弥生後期～古墳初頭	長8.8、袋部長4.5、袋幅5.6、刃幅10.3、袋厚0.35、刃部厚1.0		8052



第220図 鉄器・袋状鉄斧成形模式図

葉、20はH層出土で弥生後期。21は袋部上半及び身・刃部の一角を欠損している。平面形は梯形、袋部横断面形はやや扁平な楕円形を呈す。これもX線透過撮影の結果から、破損した袋状鉄斧を加工し直した再利用品であると考えられる。17と同じく概ね右半部が後に成形（整形）されている。袋の折り曲げ部分が弱く稚拙である点などに再成形の痕跡を留めるが、身部においては外見上それを窺い知ることができない程よく仕上げられている。SD38-2出土で弥生後期中葉～後葉。22・23は幅狭な長方形の平面形を呈すものである。22の袋部は円筒形に近い。薄く小型で、機能的には鑿であろうか。23は袋突き合わせ部分の大半を欠失している。袋から身にかけてわずかに厚みを増し、弱く曖昧な段を有す。22・23とも薄い身部の側面に面をもつ。どちらも弥生後期～古墳前期初頭。

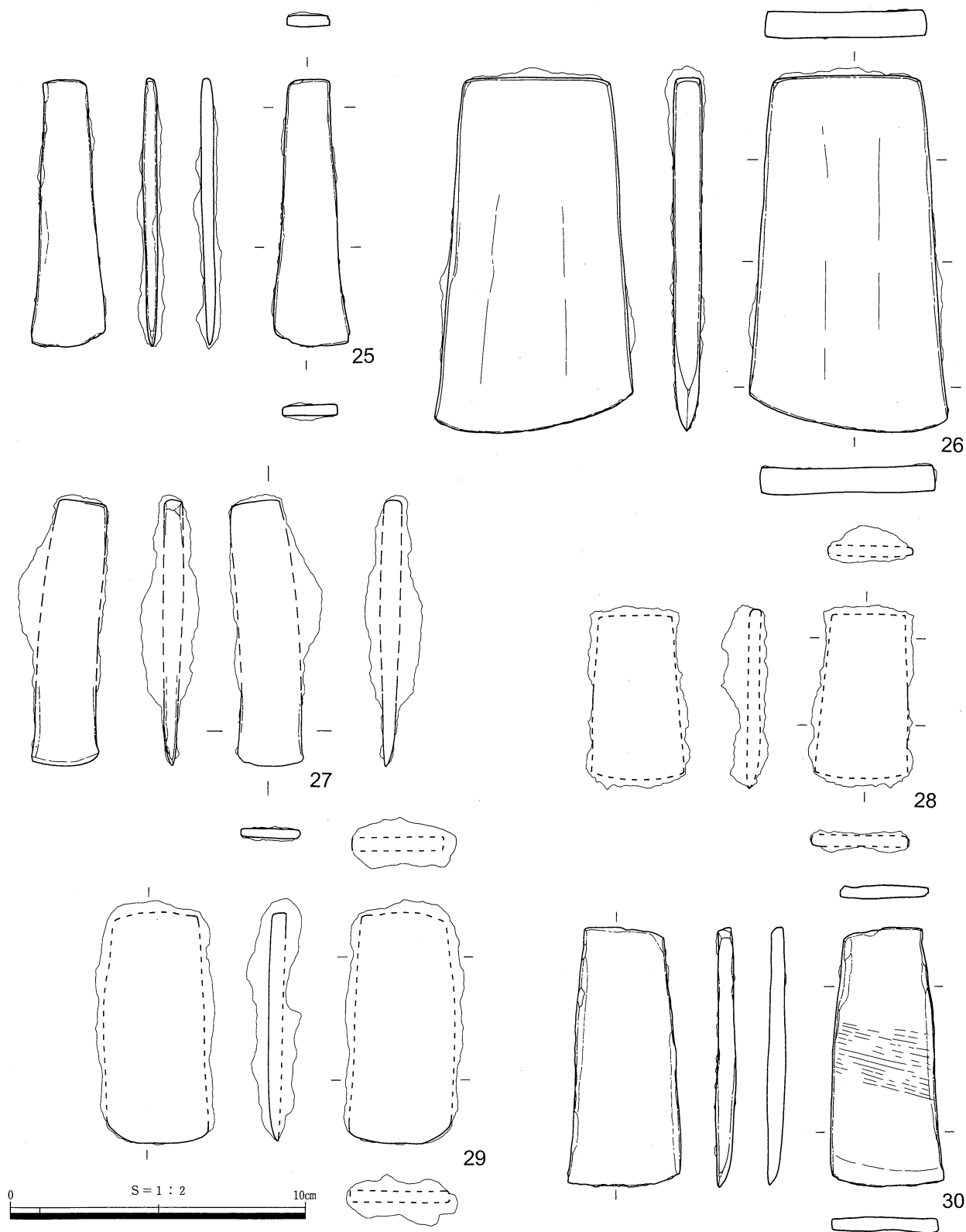
24は別個に作られた袋と身を鍛接して製作される有肩袋状鉄斧（以下、有肩鉄斧）で、その起源と分布の中心は朝鮮半島南部にあり、日本ではしばしば古墳の副葬品として出土する⁽⁵⁾。本例は②層から出土していることから下っても古墳時代前期初頭におさまり、時期的に見れば故地で出現してそれほど差をおかずにもたらされたといえる。袋から身にいたる箇所は肩を有して大きく張り出す。そのため平面形は凸形を呈す。横断面形は袋部が扁平な楕円形、身部が凸レンズ状を呈す。身部には袋部と組合わさる部分がわずかに凸状に作り出されている。文中写真2（P.254）及び第220図を参照されたい。鍛接線は外見上ほとんど観察できない。身部に欠損箇所は見あたらず、両端の形状が異なるのは本来的なものである。袋内に木質が遺存しており、刃こぼれも認められることから、実用に供されたことは明らかで、伐採斧として用いられたのであろう。

板状鉄斧（第221図～第222図）

25は基部から刃部へと緩やかに広がり梯形を呈す平面形をもつ。側面の鍛打は丁寧とはいえず、わずかに波打ったようになる。26も平面梯形となるもので、全長12.2cm、刃幅6.7cm、厚さ約1cmを測る重厚な大型品である。各面とも精緻に鍛打、整形されており、稜線も非常に鋭い。両側面をからの丁寧な鍛打を繰り返したことによって身部横断面が凹レンズ状となり、中心ラインが最も薄く両側縁部に最大厚をもつ。この特徴は朝鮮半島の板状鉄斧に見られる特徴で、本資料も朝鮮半島製の舶載品であろう。本来中心ラインに沿って身部のみに見られる凹みが触感によれば刃部まで確認できる。これは研ぎ減りによって刃部が後退したためであり、法量から推測しても、26は朝鮮半島の諸例のように全長30cm近いものであったと推察される。両刃で扁刃を呈することから見て、伐採斧としての機能を果たしたと考える。25、26とも中期後葉の製品である。27は細長方形を呈し、身部全体が緩やかに湾曲している。刃は鑿をもたないが片刃である。SA26出土で弥生中期末～後期初頭。28・29は平面長方形を呈し、刃は片刃である。どちらも全体を土鑄が覆っており詳細は不明である。30は平面梯形で、縦断面を見ると身部中央付近に最大厚がある。鑿をもち明らかな片刃であるが、後主面とされる方に緊縛痕が残っている。よって縦斧か、鑿が上で刃が下となるように装着された横斧として使用されたと考えられる。幅約2mmを一単位とする木質痕が幾重にも認められ、緊縛には細く裂いた樹皮のようなものが使われたと想定できる。28～30は弥生後期。31はわずかにくびれる短冊形を呈す。このくびれは側面の鍛打によるものと思われ、圧力が加わった結果身部側縁は隆起している。隆起した部分は再び上から鍛打して整形されている。刃はあまい鑿をもつ片刃である。32は身部下半において剥落が著しい。平面形は刃幅がわずかに広がる梯形を呈す。刃は片刃になるうか。33の平面形は身下半から刃部にかけて急に幅広となる撥形を呈す。身部横断面形は中心ラインに最大厚をもつため凸レンズ状となる。鑿は認められないが片刃である。31～33は弥生後期～古墳前期初頭。34は全長に比し幅がかなり広い。平面形は寸詰まりの梯形で、最大幅が刃部にあり6.7cmを測る。このような形態であれば斧としてほぼ全体が土鑄に覆われているため推測値となるが、最大厚は7mm前後か。観察できる範囲でいえば各面とも丁寧な鍛打、整形されており、法量的にみてもかなり大型の部類に入ることから、その出自についてはあらゆる可能性を想定しておきたい。弥生後期。

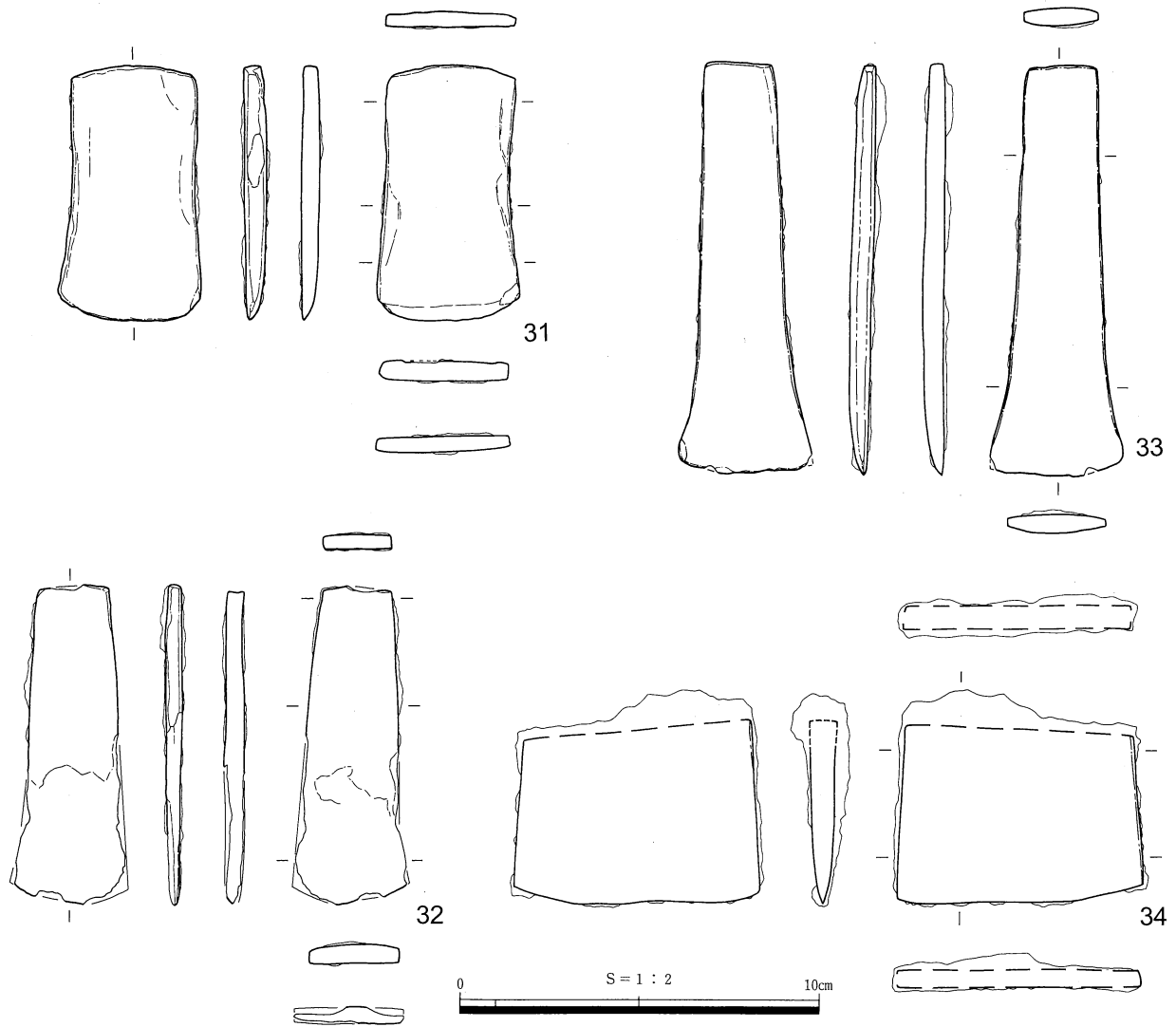
その他の鉄斧（第223図35・36）

35は身部が「く」の字に屈曲する平面形をもつ。身上半の側縁は内側に折り曲げられているが袋にならず、そのまま鍛打され、側縁に沿って突起状に残る。基部から刃部に向かって緩やかに厚みを増す。刃縁はつぶれて丸



第221図 鉄器・板状鉄斧(1)

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量	備考	取上番号
25	板状鉄斧	7区	I層以下	弥生中期後葉	長9.2、刃幅2.5、最大厚0.4		42544
26	板状鉄斧	7区	I層	弥生中期後葉	長12.15、刃幅6.7、最大厚0.95	朝鮮半島製	37000
27	板状鉄斧	7区	SA26	弥生中期後葉	長×9.2、刃幅2.1、最大厚0.6		36346
28	板状鉄斧	7区	H層	弥生後期	長×5.6、刃幅×3.2、最大厚×0.4		40648
29	板状鉄斧	7区	H層	弥生後期	長×7.9、刃幅3.5、最大厚×0.45		40590
30	板状鉄斧	7区	H層	弥生後期	長8.85、刃幅3.8、最大厚0.65		35891



第222図 鉄器・板状鉄斧（2）

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量	備考	取上番号
31	板状鉄斧	7区	②層	弥生後期～古墳初頭	長7.15、刃幅3.9、最大厚0.5		35437
32	板状鉄斧	4区	②層	弥生後期～古墳初頭	長(8.9)、刃幅(3.1)、最大厚0.5		4696
33	板状鉄斧	7区	②層	弥生後期～古墳初頭	長11.5、刃幅3.7、最大厚0.6		36069
34	板状鉄斧	7区	H層	弥生後期	長※5.0、刃幅6.8、最大厚※0.7		42080

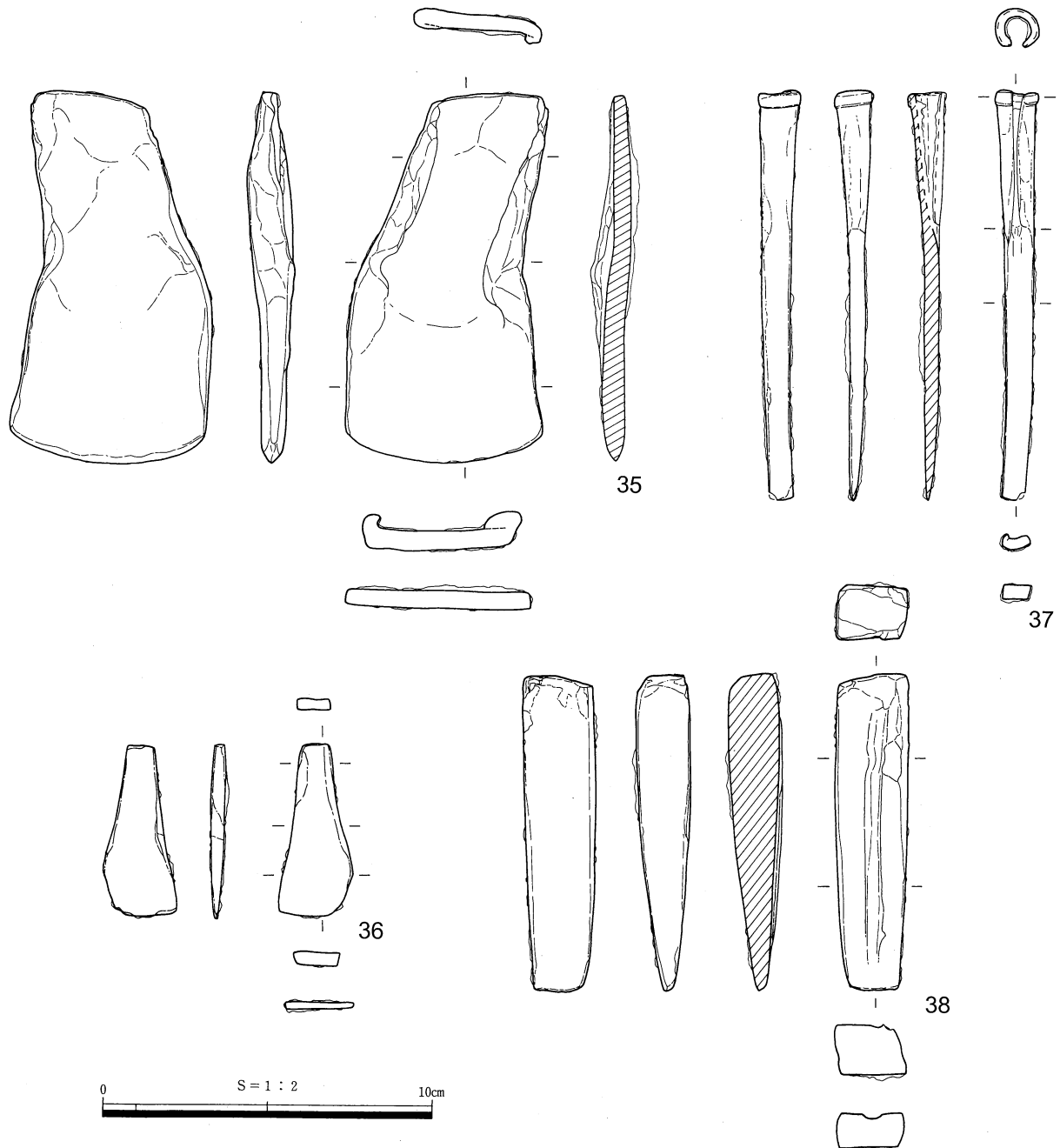
みを帯びる。木柄に装着して使用するのであれば板状鉄斧様の方法しかなく、その場合、両側縁に沿った突起の間に挟み込むように斧台をあてがい緊縛して固定するといった方法が想起される。この特異な形態が意図的に成形された可能性は否定できないが、例えば大型袋状鉄斧の破損品などを加工し直し再利用したものであるとも考えられ、そうであれば素材として用意された製品の形状に規制された結果と理解されよう。弥生後期。36も35と同じような平面形をもつが、こちらはあくまで板状を呈す。扁平な棒状鉄器の半分を鍛延した後端部に刃をつけるといった製作工程が考えられる。機能的には鑿に近い細工用の斧であろう。①層出土で時期不明。

鑿・袋状鑿（第223図37・38）

37は袋状鑿で、袋から刃にかけて緩やかにカーブしている。袋端部に19・20と同じで成形前の折り返しによる突帯をもつ。袋部横断面形は折り曲げの単位と見える面、稜を弱く残した略円形を呈す。袋部の成形技術は特筆すべきもので、端部の折り返しに厚さ2mmで翼状に作り出された袋部分を径約1cmの円錐形に仕上げしており、突き合わせも強固でおよそ閉じている。身部は丁寧に面取りされ方柱状を呈す。袋から身にかけて大きく厚みを増しており、段を有する。刃は明確でないが両刃といえよう。舶載品を除いて考えれば、高度な技術を要する製

品であることは明白である。弥生後期～古墳前期初頭。

38は方柱状身部の一端に両刃に近い刃を備えた製品で、形態的に見れば鑿であろうか。本資料は冶金分析を行っており、詳細は第4章第2節の大澤正己氏の論考を参照されたい。その結果によれば、高温還元間接製鋼法に基づく炒鋼製品の鍛造品で、素材の産地は朝鮮半島に比定されている。極軟鋼と硬鋼の沸かしたもので、耐衝撃性を考慮した造りとなっている。基端面に潰れや変形といった加撃痕は認められないため、柄に装着して使用されたものと思われる。片方の主面に中心ラインに沿って溝状の凹みが走っているが、利器としての機能を高めるためのものかどうか不明である。素材の由来は判明したが、機能及び製作地については問題も残る。SD11の埋没過程で堆積した層から出土しており、概ね弥生後期後半に比定できる⁽⁶⁾。



第223図 鉄器・鉄斧、鑿、袋状鑿

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量	備考	取上番号
35	鉄斧	7区	H層	弥生後期	長11.3、刃幅6.0、身厚1.0	縦斧?	42079
36	鉄斧	7区	①層	弥生中期～奈良	長5.3、身幅2.2、最大厚	刀子状も端部に刃	35174
37	袋状鑿	7区	②層	弥生後期～古墳初頭	長12.5、袋幅1.3、折返幅0.45、身幅0.85、折返厚0.3、身厚0.45	袋端部折返	35000
38	鑿(状鉄器)	4区	②層相当	弥生後期～古墳初頭	長9.6、最大幅2.2、最大厚1.6	炒鋼製品 半島産か	2062

鑿 (第224図39・40)

39は棒状鉄素材の上端縁辺を鍛延した後、基部に巻き付けるように折り曲げて鍛打し、肥厚した頭部を成形している。頭部上面の縁辺は潰れ、変形が顕著である。片刃で、刃縁は潰れている。身部中心ラインに二カ所見られる溝状の凹みは本製品の成形に関わるものと考えられ、同じく身部横断面形に表れた凹凸や厚みの違いもそれに含まれるべき特徴と指摘できる⁽⁷⁾。S D 11出土で弥生後期。40は土錆に覆われており詳細不明であるが、肥厚した頭部から直線的に伸びる身部の先に両刃をもつものと思われる。弥生後期～古墳初頭。

鉋 (第224図41～43)

41・42とも作業部位にのみわずかな裏すきを有し、身は平板状を呈するものである。41は先端及び基部を欠損している。弥生中期後葉。42は遺存状況良好で、基部から作業部位にかけて緩やかに幅広となる平面形を呈す。身部に対し作業部は上反りとなる。P 319埋土上層から出土しており、下層には木器製作時に生じた削片が多量に詰まっていた。弥生後期。43は横断面矩形の身部に鋸状を呈する作業部位をもつものである。作業部位の幅は身部とあまり変わらないが、縦に拡張されている。鑄、裏すきは比較的明瞭である。身部は中央やや下に最大幅をもち、基部は丸く収められる。表面に木質の緊縛痕が残り、裏面全体に土錆とともに固化した木質が認められることから、断面凹字状を呈する木柄にはめ込み緊縛して使用されたと推察される。①層出土で時期不明。

刀子 (第224図44～47)

44は両関式で、刀身のおよそ半分を欠損している。丸く収められた茎尻から緩やかに幅広となる茎をもつ。両関とも短い直角関で、関は上下対称となる。45は内反りの刀身から棟関を境にして茎はわずかに幅狭となる。刀身は最大幅でも1cmで細い。刃と茎を明確に分けているが刃関は認められない。46も刀身と茎の幅がほとんど変わらないもので、なだらかで低い刃関が認められる。茎尻に近い位置に目釘穴の一つ穿ち、その直下に目釘穴と同じ幅の抉りが入る。刃は切先に向かってシャープに立ち上がる。47は原因を特定できないが刀身全体が歪んでおり、刃部も欠損が著しい。残存する部分に限って見れば、非常に丁寧なつくりであったことが窺える。46はS D 38-2出土で弥生後期中葉～後葉。それ以外は弥生後期～古墳前期初頭。

穿孔具 (第225図48～56)

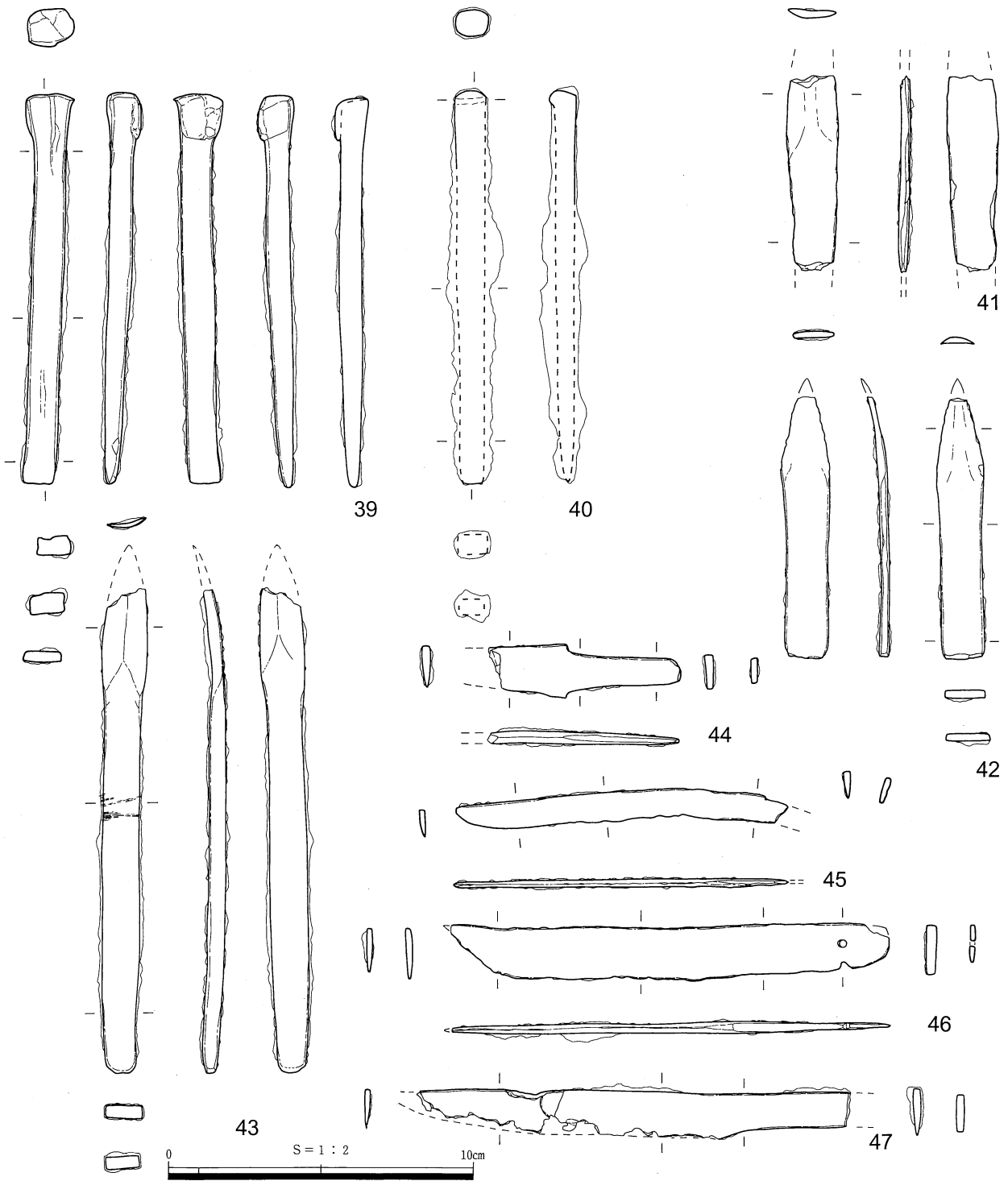
小型の鑿あるいは錐と評価できるもので、先端の形状が両刃状を呈する48、51、55と尖状を呈する52～54に大きく分けられる。両刃状を呈するものは横断面方形の身部をもつ。尖状を呈するものの身部形態はそれぞれ異なる。49、56は先端近くまで横断面方形を呈することから前者に含まれるものであろう。50は身部中位で横断面略円形を呈すものの刃部付近で薄く扁平となる。先端は後者に近い。48～50は弥生後期、52～53は弥生後期～古墳前期初頭。51はS D 38-3に伴い弥生後期末～古墳前期初頭。54～56は時期の特定ができない。

鎌 (第225図57・58)

57は内湾刃となるタイプである。基部は欠損していると思われるが断定できない。先端は意図的に折り取られたと見られ、裁断痕が認められるので鑿も使用されたことが分かる。刃部は片刃で鑄をもつ。確認できる範囲では、断面形は丸みを帯びた不整な菱形を呈して鎌身に鑄が入り、本来棟である部分にも片刃をもつ。鎌を別の製品として再加工する途中なのか、別の製品を鎌として再利用したかのどちらかであろう。I層出土で中期後葉のものである。58は鎌身の一部で、残存している部分だけ見れば反りをもつ。棟は直線的でなく波うっており、幅も一定しない。刃は局所的に減りの著しい部分が認められる。古墳前期初頭以前。

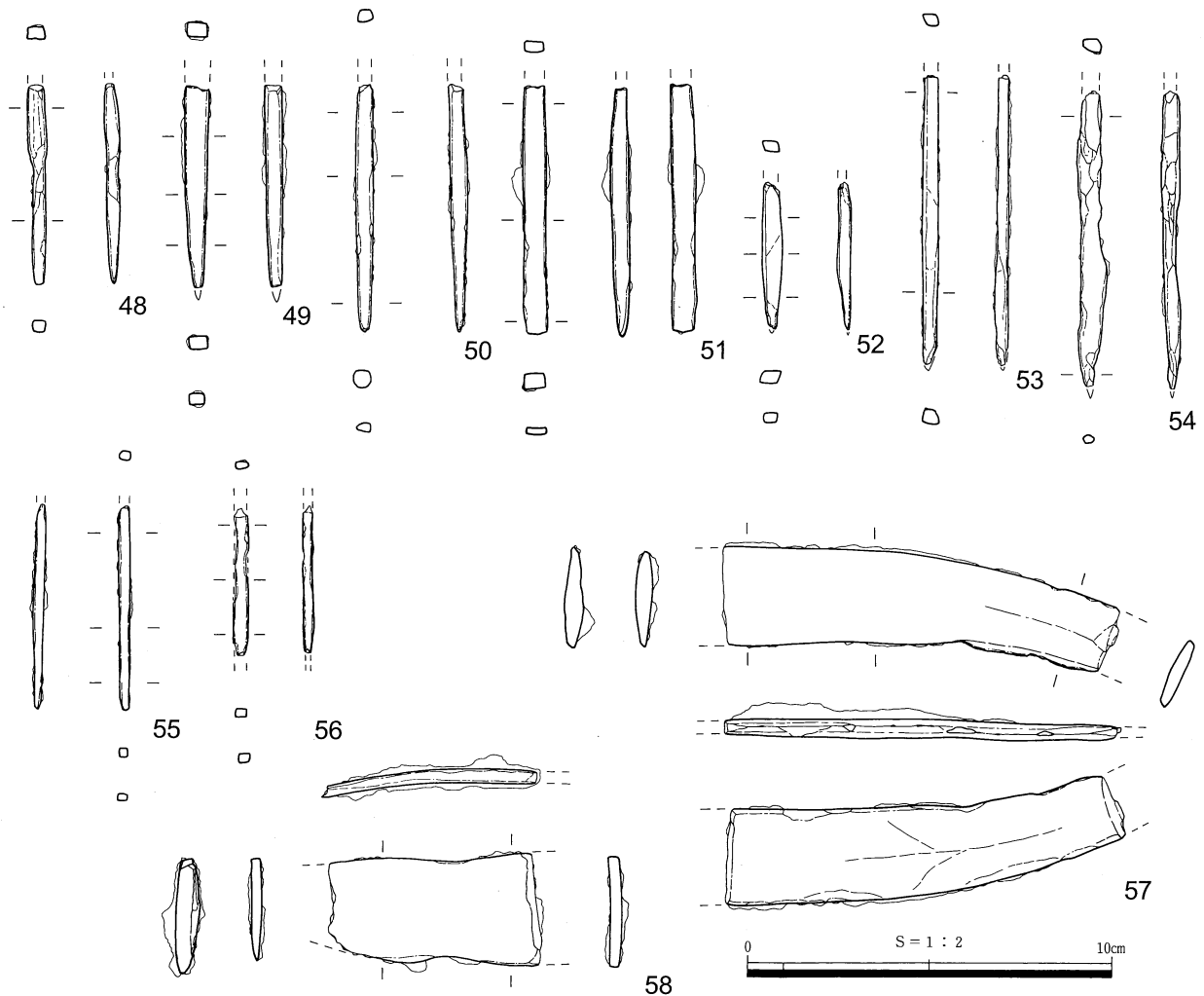
鋤(鋤)先 (第226図59～61)

59・60・62は平面形が横長長方形を呈する。59は片方の折り返しを、60は折り返された部分のみを欠損している。基部は直線的で、残存する折り返しは下方ほど幅狭となりハの字状を呈す。60は基部よりも刃部幅が広いタイプで、外湾する刃部の後退度合いには差がある。59、60は弥生後期～古墳前期初頭。62は他と比べ一回り以上も違う大型品で、幅(横)13.0cm、長さ(縦)7.3cmを測る。両折り返しとも整然としており、下端はソケット状に密閉されている。基部よりも刃部幅がわずかに狭くなる。錆膨れの可能性もあるが、身部中位で最大厚5mmを測る。九州で見られるような大型品と比較しても遜色ないものである。S D 20出土。S D 20は北側に打設



第224図 鉄器・鑿、鉞、刀子

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量	備考	取上番号
39	鑿	4区	②層相当	弥生後期～古墳初頭	長12.9、頭部1.4×1.1、刃幅1.0、身厚0.75		4471
40	鑿	5区	②層相当	弥生後期～古墳初頭	長※12.8、頭部※1.1×0.9、刃幅0.7、身厚※0.6		8480
41	鉞	7区	1層	弥生中期後葉	長(6.5)、身幅1.65、身厚0.25		40715
42	鉞	7区	P319	弥生後期	長(8.6)、身幅1.5、身厚0.25		40647
43	鉞	7区	①層	弥生中期～奈良	長(15.9)、身幅1.4、身厚0.45		35186
44	刀子	7区	②層	弥生後期～古墳初頭	長(6.3)、身(闊)幅1.8、茎厚0.45	両関式	39134
45	刀子	7区	②層	弥生後期～古墳初頭	長(11.0)、身幅1.05、身厚0.2	内反り	35395
46	刀子	8区	SD38-2	弥生後期中葉～後葉	長(14.3)、身幅1.85、茎厚0.35		33194
47	刀子	4区	—	弥生後期～古墳初頭	長(14.2)、身幅1.5、身厚0.25		2717



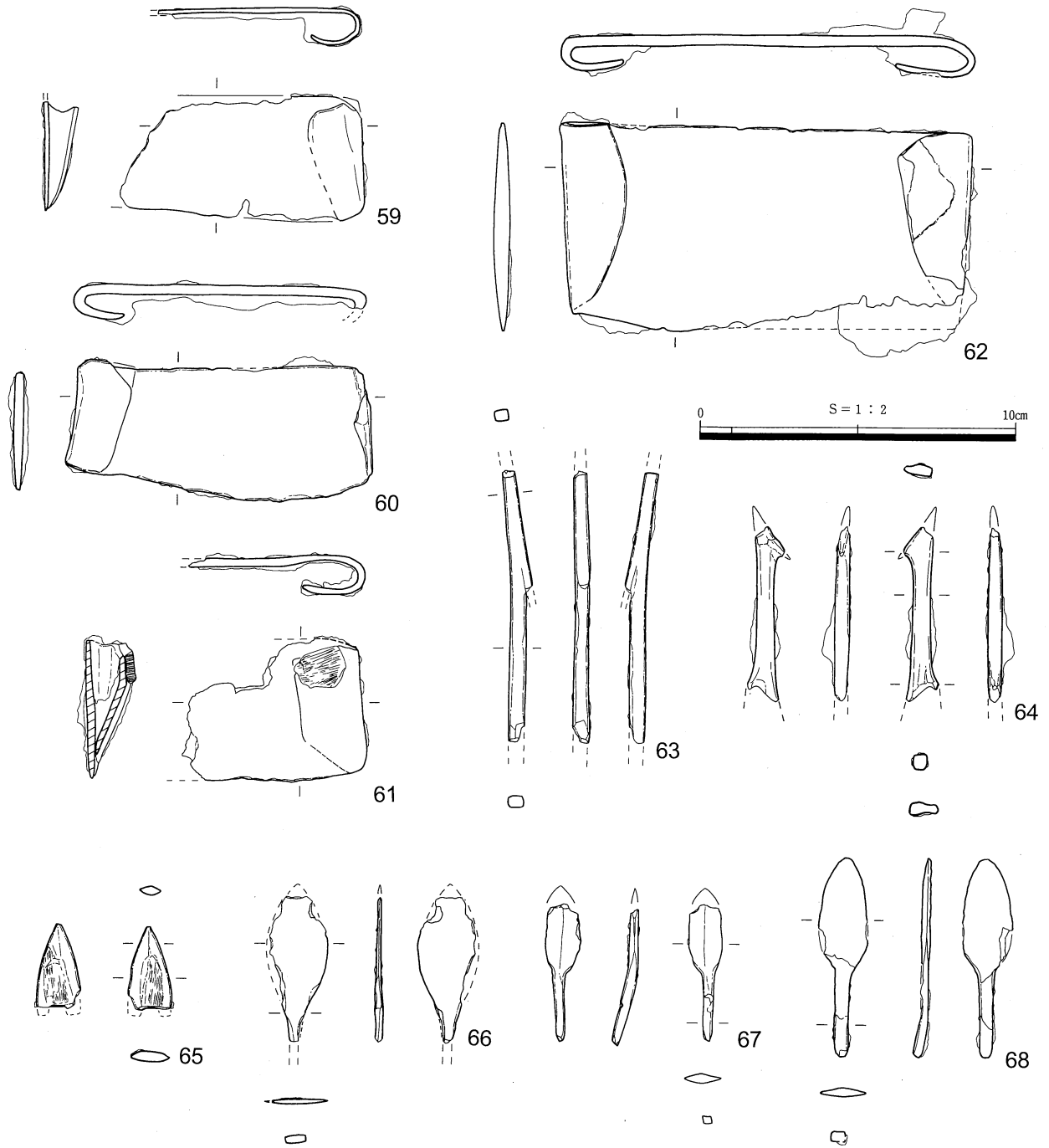
第225図 鉄器・穿孔具、鎌

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量	備考	取上番号
48	穿孔具	7区	H層	弥生後期	長(5.05)、幅0.5、最大厚0.3	先端ノミ状	36277
49	穿孔具	7区	H層	弥生後期	長(5.55)、幅0.7、最大厚0.5	身部断面方形	39197
50	穿孔具	7区	H層	弥生後期	長(6.8)、幅0.5、最大厚0.5		35767
51	穿孔具	8区	SD38-3	弥生後期末～古墳初頭	長(6.9)、幅0.6、最大厚0.45	先端ノミ状	27984
52	穿孔具	7区	②層	弥生後期～古墳初頭	長(4.1)、幅0.5、最大厚0.35	先端尖状	35902
53	穿孔具	7区	②層	弥生後期～古墳初頭	長(8.0)、幅0.47、最大厚0.43		35684
54	穿孔具?	7区	①層	弥生中期～奈良	長(8.2)、幅0.7、最大厚0.5		35218
55	穿孔具	8区	①層	弥生中期～奈良	長(5.65)、幅0.3、最大厚0.3		26691
56	穿孔具?	7区	H層以上	弥生後期以降	長(4.1)、幅0.4、最大厚0.3		38906
57	鉄鎌	7区	I層	弥生中期後葉	長(11.0)、幅2.7、最大厚※0.5	棟に片刃 身に鎌	40940
58	鉄鎌	8区	—	古墳前期初頭以前	長(5.8)、幅3.1、最大厚※0.3		26378

された矢板列の中央付近で底面が落ち込んでおり、鋤（鋤）先はそこに堆積したシルト状の埋土中から検出された。矢板の打設前にその場所に遺棄されたものと考えられる。矢板の打設時期にもよろうが、弥生後期でも古い段階のものである可能性が考えられよう。61は全体の半分も残存していないと推察される。遺存状況も悪く、基部をすべて欠損している。残存する折り返しの外面に木片が付着しているが、直接関係するものかどうか不明である。SD 67出土で弥生後期初頭～後葉。

ヤス状鉄器（第226図63）

身部先端及び下半、逆刺先端を欠損している。身部は意識的に角がとられているものと思われるが、横断面は方形を呈す。逆刺部横断面形は部分的に角が残る長方形を呈す。未製品の範疇に含まれるものか。弥生後期。



第226図 鉄器・鋤（鋤）先、ヤス状鉄器、鋸、鋏

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量	備考	取上番号
59	鋤(鋤)先	4区	②層相当	弥生後期後葉以前	長3.9、刃幅(7.6)、最大厚0.2		4889
60	鋤(鋤)先	5区	②層	弥生後期～古墳初頭	長4.25、刃幅9.6、最大厚0.3		13000
61	鋤(鋤)先	7区	SD67	弥生後期初頭～後葉	長(4.5)、幅(5.8)、最大厚0.25		40290
62	鋤(鋤)先	3区	SD20	弥生後期初頭～後葉	長7.3、袋(基部)幅13.0、最大厚0.5		21342
63	ヤス状鉄器	7区	H層	弥生後期	長(8.65)、逆刺幅0.7、身幅0.5、最大厚0.45		39455
64	鋸	7区	②層	弥生後期～古墳初頭	長(5.55)、最大幅0.9、最大厚0.45	袋をもつか	35790
65	鉄鋸	8区	SD38-2	弥生後期中葉～後葉	長(2.6)、基部幅1.35、最大厚0.3	人骨側出土 無茎凹基	33338
66	鉄鋸	7区	H層	弥生後期	長(4.6)、鋸身幅(1.8)、最大厚0.25	有茎柳葉	36278
67	鉄鋸	7区	②層	弥生後期～古墳初頭	長(4.3)、鋸身幅1.1、最大厚0.3	有茎柳葉	35435
68	鉄鋸	5区	①層	弥生中期～奈良	長6.3、鋸身幅1.6、最大厚0.3		11191
69	鉄矛?	7区	H層	弥生後期	長(10.8)、袋口径2.7、茎?1.75、袋厚0.25、茎?0.9	石突の可能性も 朝鮮半島製?	40506

鋸 (第226図64)

身部先端、逆刺先端を欠損している。鍛打による整形の面を筋状に残すが、最終的には身、逆刺とも円形に近い隅丸方形に仕上がっている。身下端の欠損面は二つに裂けたような状態で、残存した部分の形状から推察すればここに袋をもっていた可能性がある⁽⁸⁾。弥生後期～古墳前期初頭。

鎌 (第226図65～68)

65は平面三角形を呈する無茎鎌で、基部は凹基となるが両方とも欠損している。先端部分のみに鑄をもち横断面は明瞭な菱形を呈す。鎌身中央は面取りされ、ここに柄 (もしくは中柄) の装着痕と見られる木質が貼り付いて残る。鎌身横断面は扁六角形を呈す。S D 38-2 出土。66～68は有茎鎌である。66は鎌身の一部と茎の大半を欠損している。意図的に鎌身と茎の厚みを違えて作り出している。鑄をもたない鎌身の横断面は薄い凸レンズ状、茎は方形を呈す。67は鎌身先端を失っているがそれ以外の遺存状況は良い。鎌身は明瞭な鑄をもつ。全体的に細身である割に厚みがあり、特に茎は断面方形で各面とも丁寧に鍛打されている。逆に68は大きさの割に扁平な観を与える。鎌身横断面は菱形を呈すが鑄は認められない。茎はわずかに幅が広く横断面長方形に近い。66は弥生後期、67は弥生後期～古墳前期初頭。68は①層出土で時期不明。

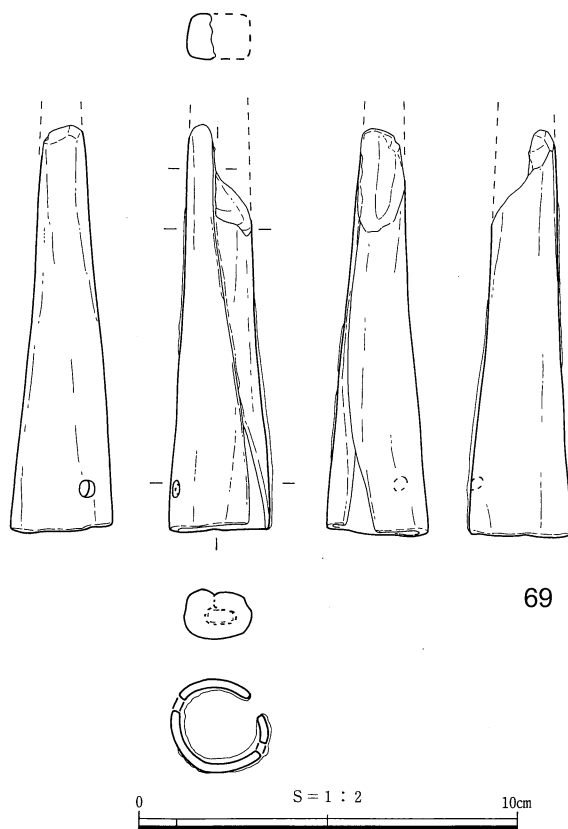
矛 (第227図)

69は残存長10.8cmを測り円錐形を呈する製品で、欠損面より上の形状が不明だが残存部分の中位以下が袋となる。袋端部に目釘穴が二カ所確認でき、断面円形を呈す袋部の中心線を結んだ対極の位置にそれぞれ穿たれている。袋部最大径2.7cm、穴の径は5mm前後を測る。袋部の突き合わせは強固で、端部付近を除き密閉されている。残存範囲での端部に近い位置で横断面は不整な隅丸長方形を呈す。最大幅は1.75cmを測る。以上のような所見に加え、類例との比較から、69は矛の袋部破片であると考えられる。ただ、形態及び法量からすれば石突 (鏃・鏃) の可能性もあるため断定はできない。弥生時代の矛は管見の限り国内で10例出土しており、国産品の可能性も考慮される福岡県下伊川遺跡例 (中期後半) を除けばすべて中国あるいは朝鮮半島産と想定されている⁽⁹⁾。逆に、石突とすれば弥生時代に属する国内出土例は知見していない。いずれにしても、弥生時代後期に属する

本製品は、その整形技術の高さから見ても舶載品と考えるのが妥当であろう⁽¹⁰⁾。

その他 (第228図)

70は両側縁上端を折り曲げた浅い袋をもつ製品であるが、刃はつけられていない。同じく71も袋部をもつ製品で、袋はほぼ密閉されておりソケット状となる。鑿に近い小型袋状鉄斧の破片か。72は横断面が長方形を呈す板状の製品で、残存する部分の平面形は梯形である。欠損面付近で厚みを増し、緊縛痕と見られる木質が残っている。袋をもつような鑿、刀子の茎といった製品の一部であろうか。73は扁平な板状製品の一部で、両端を欠損しているがわずかに刃を残す。刃部は外湾しており切先状になるものと推察される。刃は両刃である。側面は丁寧に面取りされており、整形の過程でなったものか両側縁がわずかに肥厚しているため、裏すきをもたないタイプの鉈にも似る。74はほぼ全体が土鑄に覆われており不明な点が多いが切先と茎を欠損した刀子であろうか。S D 38-2 出土で弥生後期中葉～後葉。75は横断面長方形の薄い棒状鉄器の先端を扁平に仕上げたもので、やや異形であるが鉈に含めてよいものと考えられる。先端の横断面は半裁された凸レンズ状を呈し、裏すきも

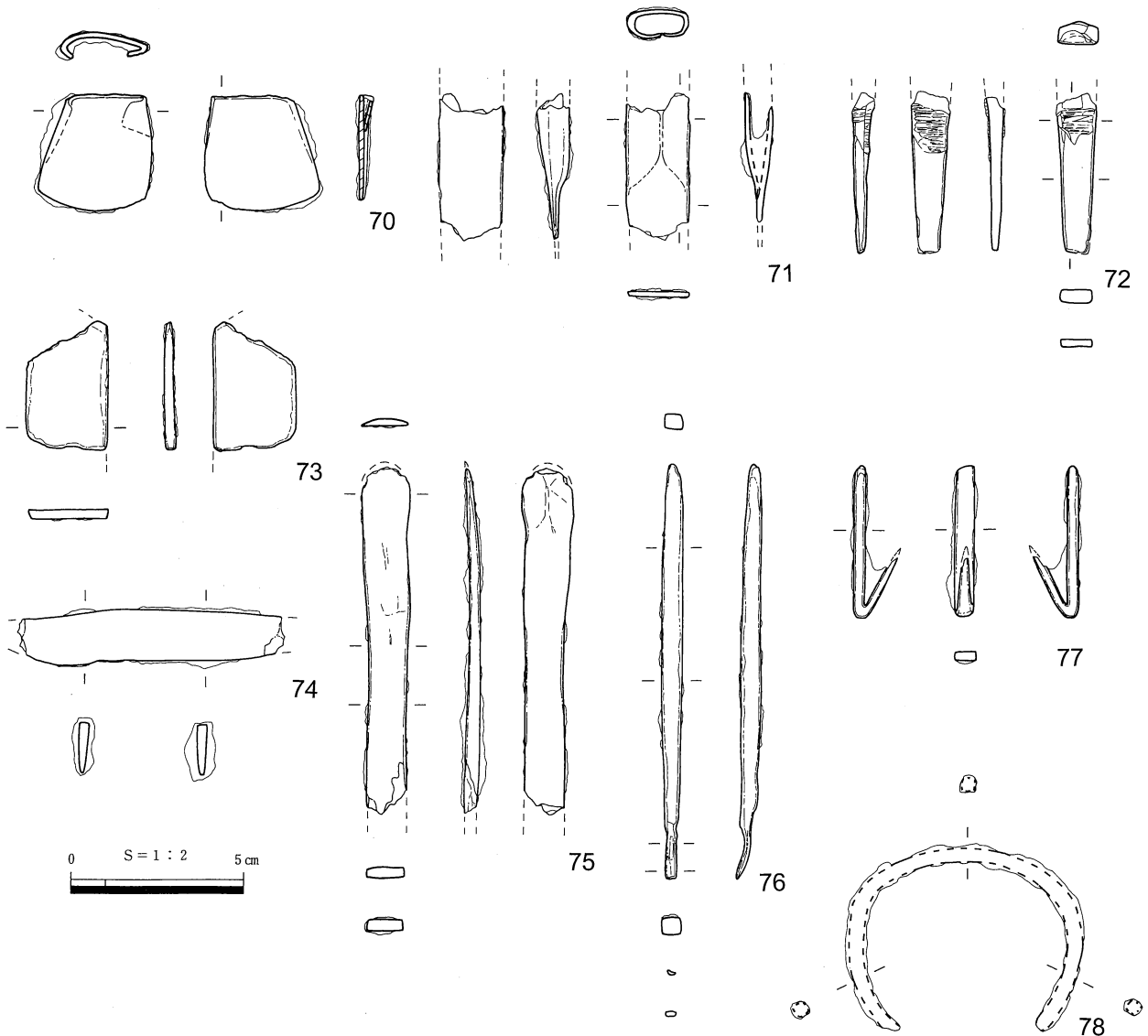


第227図 鉄器・矛

たない。76は横断面隅丸方形を呈す棒状鉄器の先端が細くすぼまった製品である。先端部の形状は彫刻刀に似ており、横断面は凹んだ逆三角形を呈す。77は細長い板状鉄器の片側約三分の一を折り曲げたもので、折り曲げられた部分は先端にかけてすぼまるため、欠損した先端部は本来尖状を呈していた可能性が高い。屈曲部は丸みをもつか。S K 117出土で弥生後期末～古墳前期初頭。78は残存する部分での全体形がC字状、横断面が隅丸方形を呈す。欠損により完全な輪とならない。用途、性格の分からない不明品である。70、73は弥生後期、75、76、78は弥生後期～古墳前期初頭、71と72は①層から出土しており時期不明である。

鍛冶関連資料 (第229図～第230図)

79は完成品なのか、さらに手を加える途中なのか判断がつかないが、結果的に刀子とも鑿ともとれる半端な形



第228図 鉄器・その他

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量	備考	取上番号
70	不明	7区	H層	弥生後期	長3.4、最大幅3.3、最大厚0.15	袋部をもつ	37070
71	袋状鉄器	5区	①層	弥生中期～奈良	長(3.8)、最大幅2.0、最大厚0.2		11204
72	不明	4区	①層	弥生中期～奈良	長(4.6)、最大幅1.2、最大厚0.25		1298
73	不明	7区	H層	弥生後期	長3.8、最大幅(2.3)、最大厚0.3	鈍か刀子?	37362
74	不明	8区	SD38-2	弥生後期中葉～後葉	長(7.6)、最大幅※1.4、最大厚※0.3	刀子か	33136
75	不明	5区	②層	弥生後期～古墳初頭	長11.95(先端1.3)、身幅0.6、先端幅0.3、身厚0.6、先端0.15	先端彫器状	8638
76	不明	7区	②層	弥生後期～古墳初頭	長10.05、最大幅1.4、最大厚0.4		35746
77	不明	4区	SK117	弥生後期末～古墳初頭	長4.3、最大幅0.6、最大厚0.25		2460
78	不明	4区	②層	弥生後期～古墳初頭	長(5.2)、径6.8、最大厚0.4	欠損 C字状	8125

状となっている。上半部は本来下半と似た形状を呈していたと考えられ、鍛打等によって幅を減じ厚みを増している。関状となる部分も礫か何かにあてがった状態で上から叩かれ、潰されたものと見られる。局所的に圧力が加えられたことによって、内側が弧状に隆起、肥厚している。幅広となる部分は横断面形が隅丸の扁六角形を呈す。両端の片側は柔らかな面をもち、逆には鑿をもつ鈍い両刃がつけられている。加工、成形（整形）の痕跡も生々しく、当時の鍛冶技術の一端をよく表した資料である。I層出土で弥生中期後葉。80は袋状鑿であるが、再加工による変形が著しい。袋部の大半を破損しており、残る部分も側面内側へと叩き潰されている。刃部は鑿によって裁断されている。厚みがあるため一度で裁断しきれず何度か繰り返したようで、その単位が段状の凹凸として明瞭に認められる。裏側には試しうちの傷が筋状に残る。袋部は薄く鍛延された鉄板が二枚重ねになっており、突き合わせ下端が身部にまで達していることも勘案すれば、袋となる折り曲げ部分を翼状に作り出した身の外側にもう一枚鉄板を巻き付けて鍛接するという工程が推察される。製作技術の高さを窺わせるものである。しかし、直接の要因はともかく、明らかに別の目的、あるいは製品に再利用しようと試みられており、最終的にはそれがかなわず廃棄されたと考えられる。D層出土で弥生中期～後期。81は鑿状の製品で刃部を欠損している。中心ラインに溝状の凹みをもち、折り曲げによって成形された肥厚する頭部をもつ。頭部に整形痕と見られる面が認められるが、打撃による変形は認められない。中心ラインの溝状の凹みは、薄く鍛延された素材鉄板を繰り返し折り曲げ、鍛打することで棒状の製品を得ようとした成形の痕跡であろう。凹みのある面の両側縁は微少な凹凸が残るものの、上面は鍛打によってフラットに整形されている。S D 66出土で弥生後期。82は残存する部分だけ見れば「く」の字状を呈する。湾曲する長い部分は横断面が丸みを帯びた梯形となり、一面に両側縁を折り曲げ、鍛打した成形痕を残す。それにつながる部分は、残存部で隅丸方形を呈し、端部にかけてわずかに厚みを減じる。製品の破片であろうが、①層出土で時期、性格とも不明。

83～90は鉄片あるいは鉄器片である。83は小型鉄器を鍛延したような鉄片で、欠損箇所も見あたらず、これで完存している。S D 48から出土した弥生中期後葉の鉄片である。84～86は鑿による裁断痕が認められるもので、特に85、86はそれが明瞭に残る。そのうち86は製品の刃部破片で、外湾する両刃をもつ。斧の刃部を裁ち落としたものであろうか。87は薄い鉄片で、両側縁が互いに逆方向へと折り曲げられているため横断面形はいびつなS字となる。88～90は平面長方形を呈す鉄器片である。88は刀子の刀身から茎にかけての破片とも考えられる。89はX線透過撮影の結果、二枚の鉄板を合わせたものであると判明した⁽¹¹⁾。鍛接なのか折り曲げによるものかは不明である。88、89はS A 26出土で弥生中期後葉。90は剥落が顕著だがしっかりと面取りされている。大きさから見て小型板状鉄斧の破片であろうか。84は弥生後期、85～87、90は弥生後期～古墳前期初頭。

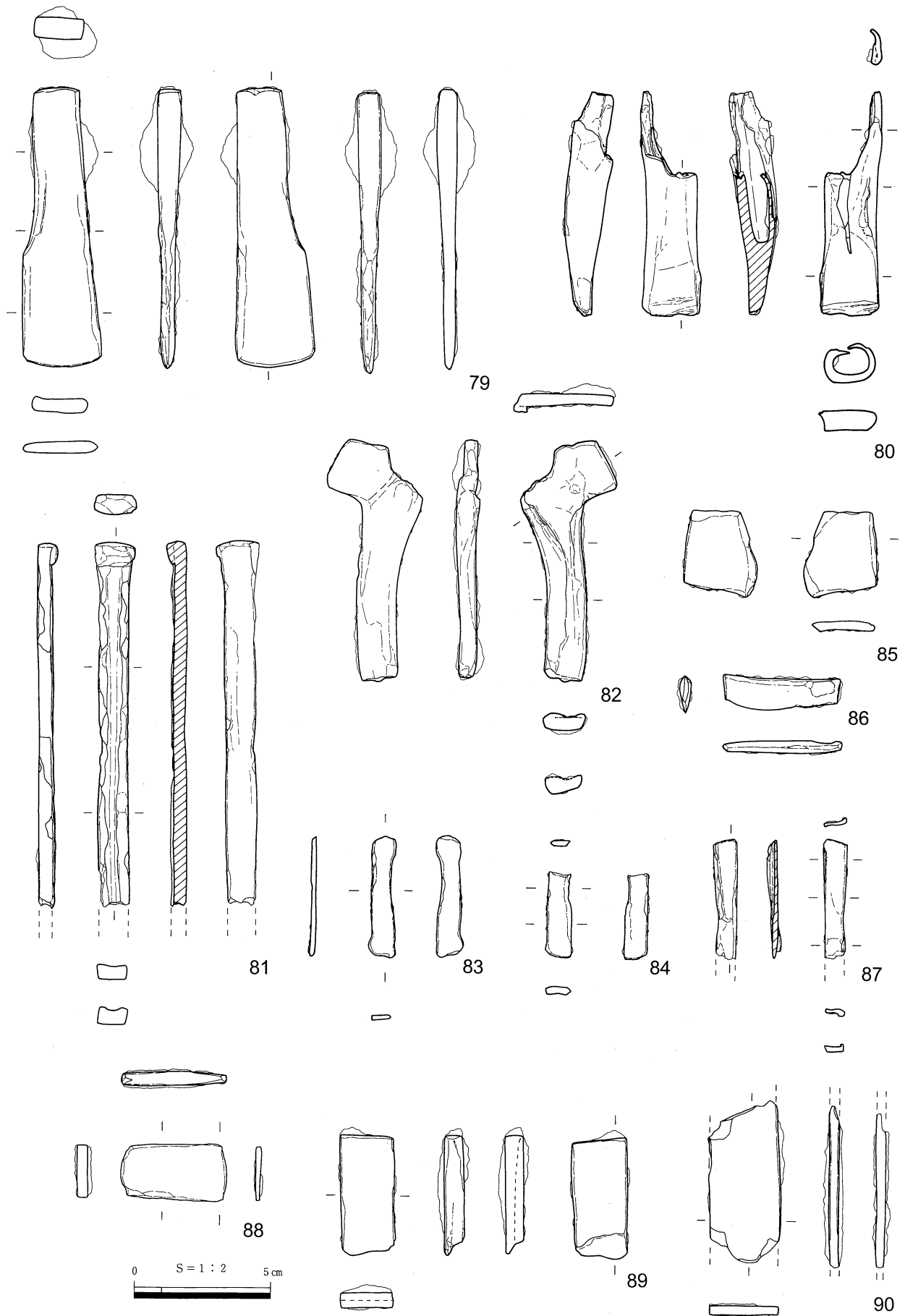
91～96は棒状鉄器である。『青谷上寺地3』でも述べているように、先端を欠損した穿孔具の可能性もある。このうち93は身部途中で「く」の字に屈曲するもので、同様の棒状鉄器が国道調査区で出土している。どちらも芯を残したようで折損までには至っていない。鍛冶関連資料としてその成因も含め注意が必要であろう。91は弥生中期中葉～後葉、92～94は弥生中期後葉（94はS A 26）、95、96は弥生後期～古墳前期初頭。

97・98は板状鉄器である。97は側面部が未整形だが主面部は丁寧に面取りされている。98は全体が湾曲しており、局所的に一角に刃をつけているようである。どちらもそれ自体で完成された製品とはなっておらず、このような板状鉄器が加工前の素材として鍛冶に供されたこともあったと考えられる。97は弥生後期、98は弥生後期～古墳前期初頭。

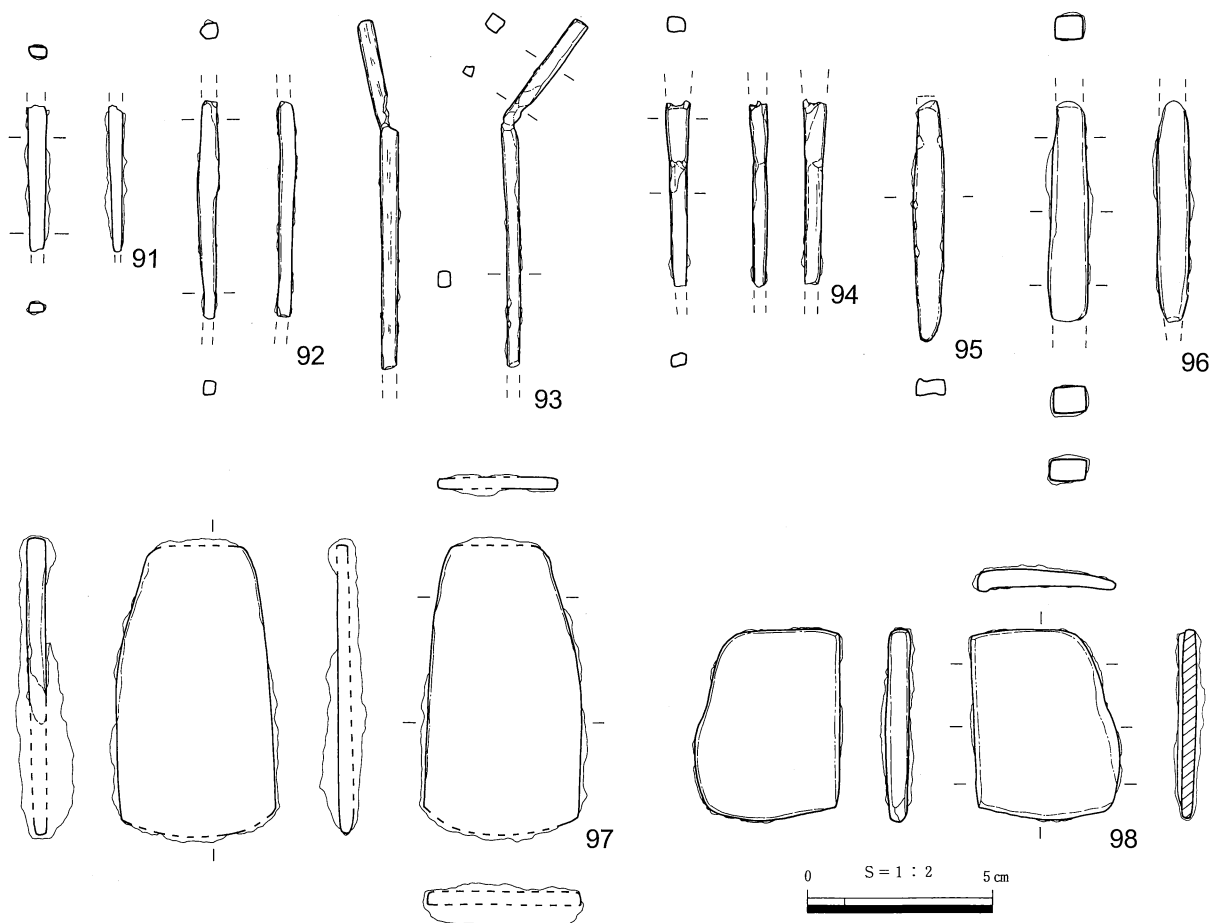
青谷上寺地遺跡出土鉄器の総合的評価

青谷上寺地遺跡から出土した鉄器は総数約300点近くにのぼり、そのうち①層出土鉄器も含めて報告を行ってきた。報告の際、①層出土鉄器に関しては型的に見て明らかに古墳時代前期初頭を下るであろうものを極力排除してきたつもりであるが、やや誤解を招いた感があるのも事実である。そこで、ここでは出土遺構・層位によって弥生時代後期から古墳時代前期初頭に明確に位置づけられるもの227点について本遺跡出土鉄器の総合的な評価を試み、まとめとしたい。

弥生時代～古墳時代前期初頭の鉄器のうち、（铸造）鉄器片、鉄片を除き「製品」として捉えられるもの（111



第229図 鉄器・鍛冶関連資料(1)



第230図 鉄器・鍛冶関連資料(2)

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量	備考	取上番号
79	鉄器未製品	7区	I層	弥生中期後葉	長10.25、最大幅2.9、最大厚0.7	刀子(鑿)形の斧	40747
80	鉄器未製品	8区	D層相当	弥生中～後期	長(8.2)、最大幅2.1、袋厚0.35、身厚1.15	袋鑿を潰して再利用	34822
81	鉄器未製品	7区	SD66	弥生後期初頭～後葉	長(13.4)、頭部1.45×0.85、身幅1.1、身厚0.55	鑿か鑿の未製品	39000
82	不明	7区	①層	弥生中期～奈良	長8.9、最大幅3.55、最大厚※0.6		35048
83	鉄片	7区	SD27	弥生中期後葉	長4.4、最大幅0.95、最大厚0.2		42954
84	鉄片	7区	H層	弥生後期	長3.15、最大幅0.9、最大厚0.3		39464
85	鉄片	7区	②層	弥生後期～古墳初頭	長3.2、最大幅2.7、最大厚0.3	鑿の裁断痕	35442
86	鉄器片	7区	②層	弥生後期～古墳初頭	長4.3、最大幅1.15、最大厚0.45	両刃 裁断鉄器片	35689
87	鉄器片	7区	②層	弥生後期～古墳初頭	長(4.25)、最大幅0.85、最大厚0.3	両端を折り曲げ	35686
88	鉄器片	7区	SA26	弥生中期後葉	長3.9、最大幅2.1、最大厚0.5		38391
89	鉄器片	7区	SA26	弥生中期後葉	長(4.7)、最大幅2.0、最大厚0.7	鍛接or折り曲げ	37540
90	鉄器片	4区	②層相当	弥生後期～古墳初頭	長(6.0)、最大幅2.6、最大厚0.25		4895
91	棒状鉄器	5区	③層	弥生中期中葉～後葉	長(3.9)、最大幅0.45、最大厚0.35		14415
92	棒状鉄器	7区	I層	弥生中期後葉	長(5.9)、最大幅0.6、最大厚0.4		39465
93	棒状鉄器	7区	I層	弥生中期後葉	長(9.4)、最大幅0.45、最大厚0.45		40722
94	棒状鉄器	7区	SA26	弥生中期後葉	長(5.0)、最大幅0.65、最大厚0.5		36384
95	棒状鉄器	7区	②層	弥生後期～古墳初頭	長(6.5)、最大幅0.8、最大厚0.45		35898
96	棒状鉄器	5区	②層	弥生後期～古墳初頭	長(6.0)、最大幅0.9、最大厚※0.6		8284
97	板状鉄器	7区	H層	弥生後期	長※7.9、最大幅※4.2、最大厚※0.4		42801
98	板状鉄器	5区	②層	弥生後期～古墳初頭	長5.2、最大幅3.9、最大厚0.45	一角に刃	11073

点)を器種別に見ると、鑄造鉄斧(完形)2点(2%)、袋状鉄斧17点(15%)、板状鉄斧(鑄造鉄器破片再利用品含む)18点(16%)、鑿・袋状鑿9点(8%)、鑿5点(4.5%)、鉋7点(不確実なもの1点を除く:6%)、刀子・素環頭刀子5点(4.5%)、穿孔具15点(先端部まで残るもの:14%)、漁具(ヤス状・銚・釣針)計4点

(4%)、鋤(鍬)先4点(4%)、鎌2点(2%)、鎌7点(6%)、その他16点(14%)となる。各種斧で全体の33%を占めるが、このうち伐採に耐えうるような大型斧は4点で、ほとんどが加工用とみられる小型斧である。鑄造鉄器片再利用品を除いても斧全体の中で板状鉄斧の占める割合が高く(11点:10%)、膨大な量の木製品及び骨角製品を出土したことを考慮すれば、鉋、刀子の数が少ない。後期段階に鋤(鍬)先を4点保有しており、この点は当該時期の拠点集落における鉄器組成の特徴を表しているが、前述したような工具全体の中での各器種の比率はやや例外的といえる。また鎌はこれまで山陰地域の弥生時代鉄器において最も報告例が多く、組成の主体となるものと考えられている⁽¹²⁾が、本遺跡のように当該地域の拠点的な集落においては逆に低い割合を示すことがまま見受けられる。

青谷上寺地遺跡では集落の本格的な形成段階といえる弥生時代前期末～中期前葉から鉄器の出土を見るが、それは鑄造鉄器破片(1)である。中期中葉～後葉段階を通して、磨製石器製作技術を用いて成形・加工された鑄造鉄器破片の再利用品(7～11)が高い割合を占め、これは鉄器使用の初期段階において汎例的に認められる現象であることがすでに明らかにされている⁽¹³⁾。中期後葉段階には鍛造工具が一定量存在し、同段階の鉄片(83)、棒状鉄器(91～93)には加工痕が認められることから、集落内での鉄器生産が開始されたと想定する。稚拙なつくりの袋状鉄斧(16)、板状鉄斧(25)や裏すきをもたない鉋(41、『青谷上寺地3』p156.33)などは本集落の所産である可能性が高い。それらに、相対的に良質な鉄斧(15、『青谷上寺地3』p19)や舶載品(26、『青谷上寺地3』p156.40)が加わる組成となる。簡易なつくりの鉄斧と複雑かつ立体的なつくりの鉄斧二者は後期初頭から古墳前期初頭まで九州系の製品(19、20、37等)が見られることもあり同期まで共存する。また、製品から別の製品を得ようと試みた未製品と見られるものは中期後葉段階から見られるが、初期のものは再加工の技術も稚拙である。後期でも概ね後半段階になると数量的にも一気に増加し、製品の形態や大きさに目的に沿ったバリエーションが出てくる。再加工を含めた鍛冶技術の進歩も看取でき、鑄造鉄器破片の再利用の仕方中期段階に比して変化が認められる(6)。各期を通して伐採用と推定される大型鉄斧はすべて舶載品に依存しており、多数出土した斧はほとんどすべて加工用の手斧サイズで、木器、骨角器及びそれらの未製品、さらに多量の木材を要し中期後葉～後期にかけて連綿と作り続けられる護岸及び構造物の敷設を実現させた遺跡の性格を強く反映しているものといえよう。また、繰り返し述べているように、鉄器全体の中で一定量を占めるほど舶載品を保有している点も大きな特徴である。各種大型鉄斧の他にも素環頭刀子や鑿(状鉄器)、矛(あるいは石突)と工具にとどまらず様々な製品を獲得している。中期後葉段階から古墳時代前期初頭段階まで大陸産鉄器と半島産鉄器の両者が認められ、その獲得方法がどうであったのかという問題は残るが、他地域には見られない半島産鉄器類(24・38)の存在を積極的に評価するならば、後期後半段階には北部九州を介さない独自の直接交渉によってそれら舶載鉄器を獲得したことも十分に考えられよう。(高尾浩司)

註

- (1) 破片となっているものについては「鑄造鉄器」と「鑄造鉄斧」という二種の用語を使い分けており、その基準は『青谷上寺地遺跡3(本文編)』に依っている。近年、日本海沿岸地域において武器類以外でも朝鮮半島製鉄器が後期を中心に確認されるようになってきたため、由来の明らかでない鑄造鉄器破片(特に後期段階のもの)に半島産製品が含まれている可能性を考慮することも必要であるとの判断からである。
- (2) 時期的にも「Ⅰ式」あるいは「Ⅱ式二条凸帯斧」に属するもので、二条突帯は袋端部から突帯までの幅、突帯間の間隔そして突帯自体の幅が一定を保ち、断面形は明確な梯形となる。
村上恭通 1988「東アジアの二種の鑄造鉄斧をめぐって」『たたら研究』第29号 たたら研究会。
- (3) 村上恭通氏にご教示いただいた。脱炭されていることが前提となるが、袋部程度の厚さであれば中まで脱炭が及んで軟化していることが予想され、その結果玉作に使う石鋸などで擦り切り溝をつけて打割し目的の大きさ・形状に成形することは可能とのことである。事実、溝部分は擦り切られたような滑らかな面をもつが、溝から下(後主面側)はわずかな凹凸を残す破面である。それは玉製作過程に生じる直方体素材②～③を想起させ(第3章第3節参照)、前述した成形方法が鑄造鉄器破片再利用の過程で行われていたことを裏付けるものと理解している。
- (4) 13・14とも「Ⅲ式二条凸帯斧」に属すが、13に対し14はより全長が短縮化し、平面形(特に刃部付近)及び横断面

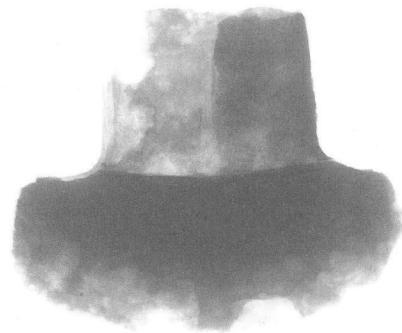
形に見られる特徴は新相を示す。形態的特徴からすれば13、14の所属時期は出土した層に主体として含まれる土器の時期（H層は弥生後期前半、②層は弥生後期後半から古墳前期初頭）に概ね合致するといえる。

村上恭通 1996「吉野ヶ里遺跡における弥生時代の鉄製品」『吉野ヶ里』本文編 佐賀県教育委員会。
及び前掲註（2）書。

- (5) 野島 永 1995「古墳時代の有肩鉄斧をめぐって」『考古学研究』第41巻第4号 考古学研究会。
- (6) 埋没後に弥生後期末～古墳前期初頭段階の遺構群が築かれているため、その時期を下ることはない。小型仿製鏡（第231図4）も同層から出土している。
- (7) 鍛接もしくは繰り返し折り曲げの二通りが考えられるが、溝状の凹みが見られるのは同一面で逆の面には認められないことから後者であろうか。いずれにしても現状では明確な結論は出ていない。
- (8) 形態的には福岡県貝島古墳群出土例に似る。貝島例は古墳時代後期のものである。
和田晴吾 1985「漁獵具－3. ヤス・モリ」『弥生文化の研究5』道具と技術Ⅰ 雄山閣出版株式会社。
- (9) 川越哲志 1995『弥生時代の鉄器文化』雄山閣出版株式会社。
- (10) 時期的な側面から比較した場合、本資料が朝鮮半島産であると仮定すれば、金海良洞里7号墳、蔚山下垵44号墳などの木槨墓から出土したものが袋口部の形態、口径などで近似し、類例としてあげられようか。石突として見れば、錦江中流域にあたる公州下鳳里遺跡8-1号木槨墓から出土した広幅鎌の柄につくと考えられる鐮が法量・形態的には近いが、こちらは3世紀代の資料である。中国の例については全く見識に乏しく、言及できない。
宋桂鉉 2001「韓国三韓・三国時代の武器と武具」村上恭通・中原斉編『日本海（東海）がつなぐ鉄の文化』日韓合同鉄器文化シンポジウム資料 鳥取県、日本鉄器文化研究会、韓国鉄器文化研究会。
李南珪 2000「錦江流域圏における原三国時代の鉄器文化」たたら研究会編『製鉄史論文集』たたら研究会創立40周年記念 たたら研究会。
上記の論文を参考にしたが、この矛と思われる製品だけでなく青谷上寺地遺跡出土鉄器全般について韓国鉄器文化研究会の諸先生方にもご指導・ご教示いただいた。
- (11) X線透過撮影は独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所で行った。撮影に関しては村上隆氏にお世話になり、ご指導いただいた。
- (12) 池淵俊一 1998「山陰における鉄器化の諸段階」『門生黒谷Ⅰ遺跡・門生黒谷Ⅱ遺跡・門生黒谷Ⅲ遺跡』鳥根県教育委員会。
- (13) 村上恭通 1998「Ⅲ鉄器普及の諸段階」研究代表者 下條信行『日本における石器から鉄器への転換形態の研究』平成7年～平成9年度科学研究費補助金（基盤研究B）研究成果報告書。



文中写真1 鑄造鉄斧・板状鉄斧（第217図13）



文中写真2 有肩鉄斧（第219図24）

第5節 青銅器

青銅器は、県道調査区4区から8区にかけて出土している。その分布は微高地と呼んでいる範囲にほぼ限定され、包含層中から出土するものがほとんどで遺構に伴うものが少ないという点では鉄器の出土傾向と同じである。微高地域に広がる二次堆積層、①層から銅鐸片、銅鏡片、貨泉、銅鏃と各種の青銅器が検出されていることは県道調査区における出土傾向の一つの特徴といえる。出土総数は23点で、内訳は銅鐸片3、銅鏡(片)3、貨泉4、銅鏃14である。国道調査区出土分も含めると、当遺跡出土銅鏃の総数は22本となり、後述するように大半が弥生時代後期から古墳時代前期初頭までの範疇に収められるものであることを考えれば、弥生時代の遺跡からまとめて発見される数としては相当な量であろう。また人骨(骨盤)に嵌入した状態の銅鏃があり、当時の使用法を具体的に物語る資料で特筆すべきものである。これについては挿図中に図示しておらず本節では観察できた範囲での形態的特徴を述べるにとどめるが、嵌入状況の所見等は第4章第1節に掲載した鳥取大学医学部井上貴央教授の論考に詳しく、図版61とともにそちらを参照していただきたい。以下、器種ごとに詳述していく。

銅鐸 (第231図1～3)

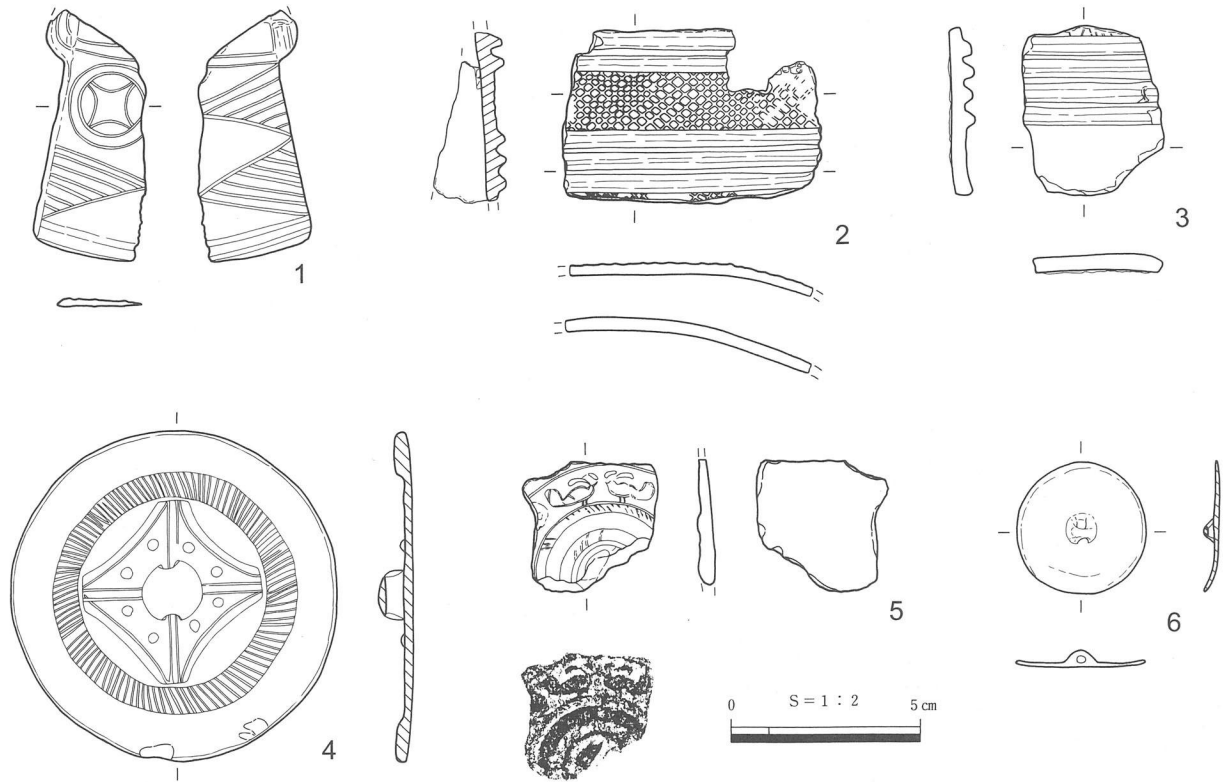
1は鱗の破片である。飾耳は一つだけ遺存していたがその位置から3対耳のものである。鱗下端から飾耳下端までは約5.0cmで、高さ42cmくらいの3対耳六区袈裟襷紋銅鐸のそれとほぼ等しい。しかし鱗幅は1の方が広く2.8cmを測る。鱗下端から飾耳下端までの長さは東海系の信達銅鐸に近く、また鋸歯文が細長い点も信達銅鐸と共通する。鋸歯文はR、L交互で六区袈裟襷紋銅鐸には一般的でなく、東海系に多い。鱗下端には平行条線が認められる。内行花文状の文様は飛驒の上呂2号銅鐸の鈕のものと同通するが、それ以外には類例がない。飾耳は端部がふくらみ、その内側に凹みがある。これは六区袈裟襷紋銅鐸には見られない特徴である。鱗の厚みは2mm程で扁平鈕式の新段階のものと同じである。銅鐸の型式は扁平鈕式新段階から近畿式・三遠式成立段階(突線鈕I、II式)である⁽¹⁾。2、3は文様帯の界線や外周にふつうの文様の線より太くて高い線(突線)を用いた突線鈕式銅鐸の破片である。2は3本単位の横軸突線の上下に斜格子文があり、上の2本残っている突線は横軸突線と変わらない太さであるから身の上縁にめぐる突線である。この部分も本来的には3条の突線がめぐるが上端1条を欠失している。近畿式銅鐸で突線鈕4式か5式に位置付けられる。3は4本単位の突線の上に鋸歯文(詳細不明)が確認できるが下は文様がない。よって下辺横帯の下の界線から裾部分の破片である。近畿式銅鐸の突線鈕4式か5I式のものである。

銅鏡 (第231図4～6)

4は小型仿製鏡⁽²⁾である。平縁で外区に櫛歯文をめぐらし、4花文の内行花文状の文様を、その内区に乳文を環状に配す。文様はすべて稚拙な作りで整然さに欠ける。3は前漢鏡の八禽鏡⁽³⁾で、鈕座から内区にかけての破鏡である。鈕座の輻射文は圏線ではなく圏帯となる。表面全体が鉄製品のようにかなり茶色味を帯びており鉄鏡の可能性も考え分析を行ったが、結果銅鏡であった。分析の結果については、第4章第3節の奈良文化財研究所村上隆氏の論考を参照していただきたい。4は小型仿製鏡の素文鏡で、土圧のためか鏡背面側へ反っている。

貨泉 (第232図)

貨泉⁽⁴⁾は計4枚出土しているが、遺構に伴うものは7だけで他は包含層中からの出土である。7は表裏面(貨泉の文字が鑄出された面を表とする)とも土鏽の付着が目立ち、表面の銭文(貨泉)の細部は観察できていない。ただ、銭文は明瞭に鑄出されており遺存状況も良い。「貨」の書体は「貝」の下端右側が短く、「化」の「イ」部が下方へやや湾曲して伸びる。「泉」は上半部最上端に突起をもつ。この点は8、9にも共通する要素である。周郭、孔郭は表裏面どちらにも存在する。孔にバリがわずかに残る。8は表面孔郭が認められない。裏面周郭は明瞭で、また孔郭の隅3カ所が尖状に突出している点の特徴である。銭文「貨」は「イ」部が7と異なり下方へ直線的に伸び、また「泉」はT字となる部分が途切れている。これらの特徴は肉眼観察できた9、10についても確認している。9の表面周郭は低く、孔郭はない。それに対し裏面は周郭、孔郭ともにある。表面孔郭に関しては、あくまで肉眼観察での所見であるが除去されたような痕跡が見える。銭文「貨」は幅広で下半部の線が二重にな



第231図 青銅器・銅鐸、銅鏡

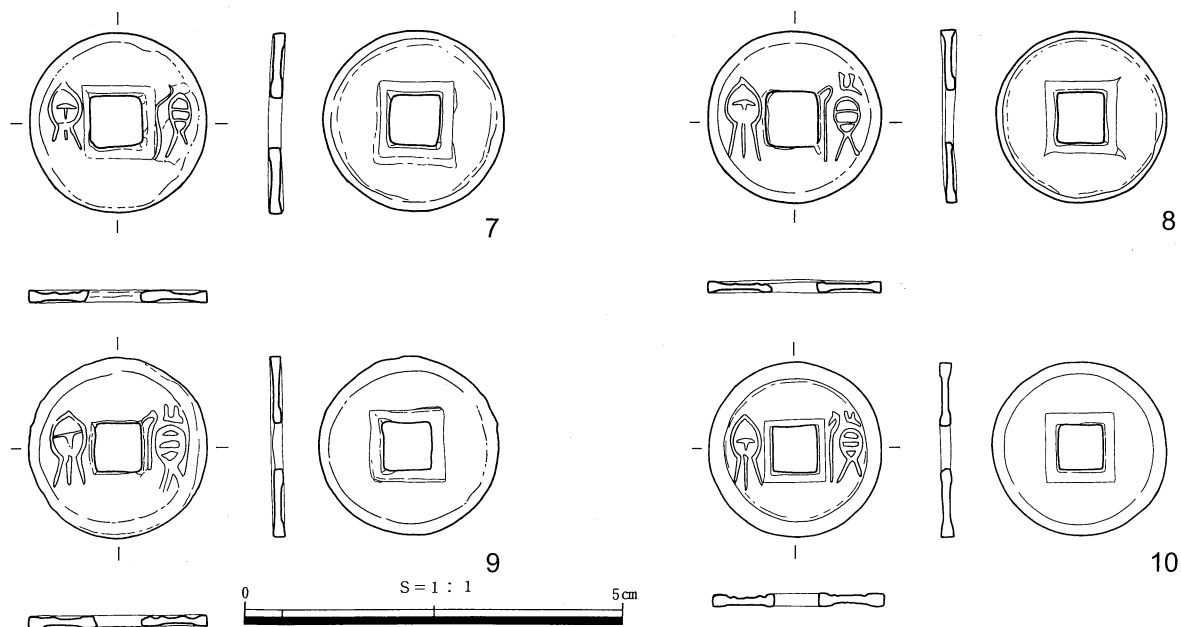
挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量	備考	取上番号
1	銅鐸(鑿)	8区	SD38-1	弥生後期初頭～前葉	長6.3、最大幅2.8、最大厚0.19	扁平鈕式新段階～突線鈕Ⅰ(Ⅱ)式	33333
2	銅鐸	4区	②層相当	弥生後期～古墳初頭	長4.6、最大幅6.8、最大厚0.35、突線部0.7	突線鈕4式か5式 身の上縁部片	2033
3	銅鐸	5区	①層	弥生中期～奈良	長4.45、最大幅3.65、最大厚0.4、突線部0.65	突線鈕4式か5Ⅰ式	10000
4	小型仿製鏡	4区	②層相当	弥生後期末～古墳初頭	径8.7、最大厚-鈕0.9	内行花文状の文様(4花文)	2431
5	八禽鏡	5区	①層	弥生中期～奈良	長(3.4)、最大幅(3.6)、最大厚(0.4)	破鏡	10079
6	素文鏡	6区	①層	弥生中期～奈良	径3.4、最大厚-鈕0.4		45231

る。湯回りが悪かったため下半右側は末端まで完全に鑄出されていない。銭文の書体は8に似るが8の方が細くシャープで、相対的に見れば9の方が若干簡略化しているように見受けられる。10は最も遺存状況が悪く、一部外面が剥落している。軽量であることの一因がそこにも求められる可能性はある。表裏面とも周郭、孔郭をもち、銭文も非常に明瞭に鑄出されている。銭文「貨」の「貝」は他と比べ小型かつ簡略化している。同じく「泉」は上半部最上端が三角形状り、全体的に細身である。

銅鏃 (第233図)

11～13は無茎鏃である。11は細長い身からわずかに外反するように発達した逆刺をもつ。鏃をもつが明瞭ではない。鏃身から逆刺にかけて内側に平面形と同じ形状の凹みをもち、この部分に漆の塗膜かと思われる付着物が確認できる。基部中央が円錐状に隆起しており、ここが湯口と考えられる。中期後葉の土坑から出土しており、他の無茎鏃に比べれば精緻に仕上げられた製品である。12は11と同様の形態をもつ未製品である。鑄造時に鑄型が斜め方向にずれており、それが特に鏃身側縁において目立つものの外形の修正を行っていない。鋒、基部が円錐状に隆起しており、これが湯道の痕跡と考えられるため、その製作方法は連鑄式である。13は平面五角形状を呈す小型品で鏃身内側に平面三角形状のわずかな凹みをもつ。鏃身横断面形は扁六角形を呈す。鏃は両面ともあまい。

14～23は有茎鏃で、平面三角形状の鏃身から小さく突出した逆刺をもつ14、15、発達した逆刺をもち矢印状ともいえる平面形を呈する16～18、特異な形態の19、いわゆる柳葉形を呈する20～23に大別できる。特異な形態の19を除き、鏃身と茎の比率は概ね14、15で1：1、16～18で1.25～1.45：1、20～23で2：1である。



第232図 青銅器・貨泉

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量	備考	取上番号
7	貨泉	7区	SD62	弥生後期初頭	最大径2.36、孔最大幅0.71、最大厚0.2	重さ2.9g	36297
8	貨泉	7区	②層	弥生後期～古墳初頭	最大径2.22、孔最大幅0.68、最大厚0.18	重さ2.9g	36000
9	貨泉	8区	①層	弥生中期～奈良	最大径2.34、孔最大幅0.67、最大厚0.17	重さ2.2g	26000
10	貨泉	5区	不明	不明	最大径2.29、孔最大幅0.63、最大厚0.16	※重さ1.4g(保存処理後)	8036

14、15の茎は鏃身に接する部分で最も幅が広く下端に向かってすぼまる。15は茎下半が黒色となる。16は茎側面に鑄張り痕が残る。17の茎は細長く幅、厚さもほぼ同じに仕上げられており、削り込みあるいは研磨の痕跡を面として残すが横断面形は不整円形を呈す。19は関部分のみが横方向に弱く張り出す細長い鏃身をもつ。篋被をもつと思われるがそれを意識した削り込み及び研磨は施されず、平面形においても篋被と茎の境は非常に曖昧で、厚みにいたっては鏃身から茎まで同じである。20～22は大型で関がやや撫角となる20と小型で関が直角となる21、22に細別できる。23は遺存状況だけでなく大粒の鬆が認められることから鑄造状況も悪かったと考えられ、オリジナルな面をほとんど失っているが、どちらかといえば前者に含められるか。20は両面とも鏃身中央付近に鬆が入っているが、内部も空洞化しているため鬆は貫通状態にある。精緻なつくりで、刃、鑄とも鋭利に仕上げられている。詳細が不明な23を除き、有茎鏃すべてが鏃身と茎（19は篋被も）の境に段を有すほど明確に造り分けられておらず、身と茎の研磨が一連したものである点で共通する⁽⁵⁾。形態的特徴に加えてこの点を積極的に評価すれば、出土層から時期の比定が困難な銅鏃13、16～18、22も弥生時代的な銅鏃といえよう。なお、骨盤に嵌入している銅鏃は柳葉形を呈する有茎鏃で、形態的には20に近いがやや細身である。（高尾浩司）

註

- (1) 難波氏の鑑定によれば属性からは①東海系、②近畿の四区袈裟襷紋、③地方的なものにしばられ、残存している部位のみでは決め手に欠くものの①の可能性が高い、とのことである。
- (2) モデルとなった鏡式が明確でないため、漠然としているがここではこう呼称する。この鏡については森岡秀人氏にご教示いただいた。
- (3) 岡村秀典氏にご教示いただいた。破鏡となった前漢期の八禽鏡は米子市青木遺跡でも出土している。
- (4) 貨泉についての観察及び記述方法は以下の文献を参考にした。

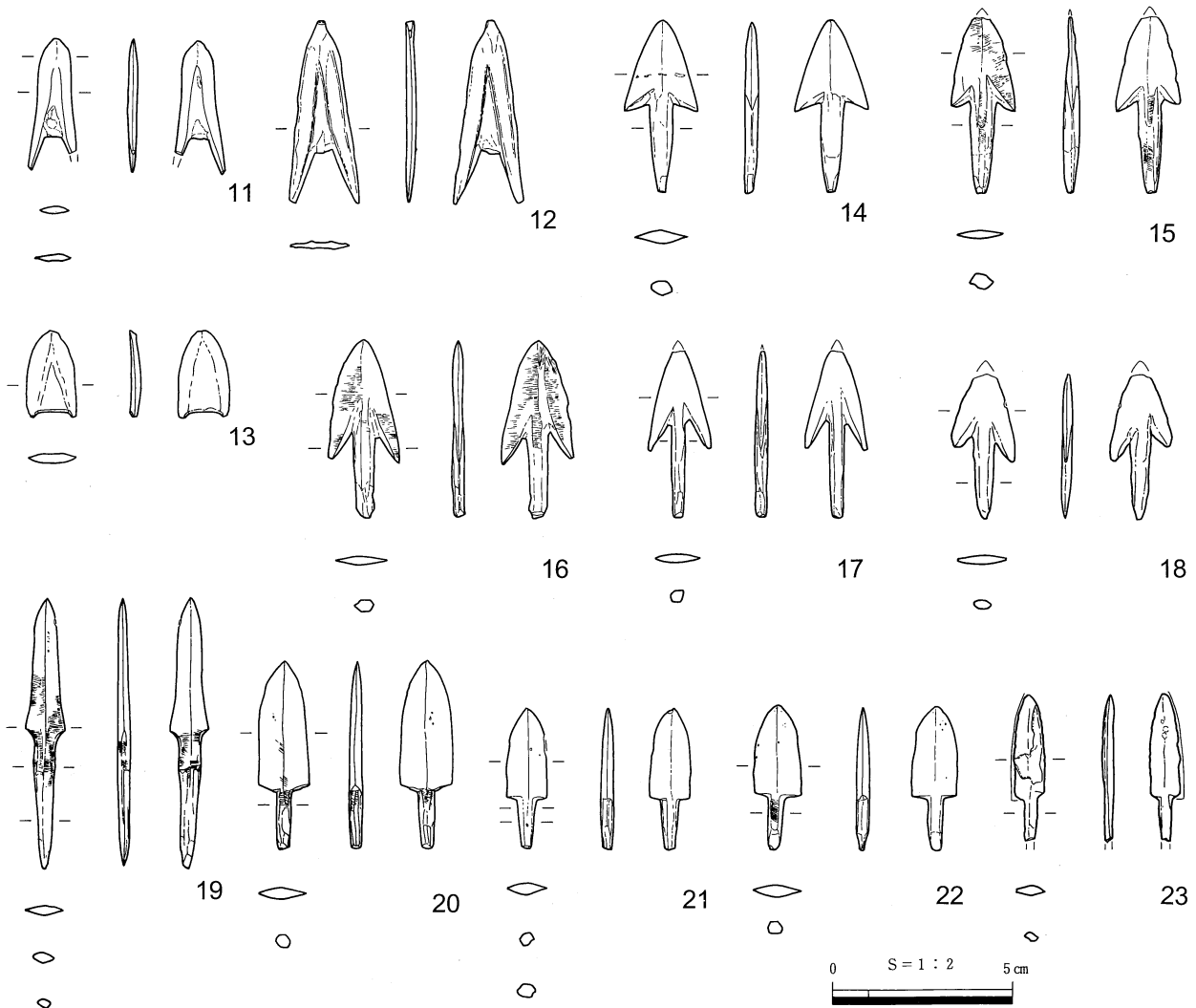
高倉洋彰 1989「王莽銭の流入と流通」『九州歴史資料館研究論集』14 九州歴史資料館

平井泰男 2000「高塚遺跡出土の貨泉について」『高塚遺跡 三手遺跡2（第3分冊）』岡山県文化財保護協会。

(5) 弥生時代銅鏃に看取できる製作技法（高田1997）で、その点は『青谷上寺地遺跡3（本文編）』でも述べた。

高田健一 1997「古墳時代銅鏃の生産と流通」『待兼山論叢』第31号史学篇

①層については第1章でも述べたとおりで、二次堆積層とはいえ時期的に大きな混在はない。土器以外でも同層から銅鐸片、破鏡の八禽鏡片、内行花文鏡片、重圈文鏡片等明らかに弥生時代に属する金属製品が出土していることもそれを示唆している。



第233図 青銅器・銅鏃

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量	備考	取上番号
11	銅鏃	5区	SK18	弥生中期後葉	長3.7、最大幅1.2、最大厚0.27	無茎	8492
12	銅鏃	6区	②層	弥生後期～古墳初頭	長5.1、最大幅1.6、最大厚0.28	無茎 連鑄式の未製品	45241
13	銅鏃	7区	①層	弥生中期～奈良	長2.4、最大幅1.4、最大厚0.24	無茎	41008
14	銅鏃	7区	H層	弥生後期	長4.8、最大幅2.05、最大厚0.39		40507
15	銅鏃	6区	②層	弥生後期～古墳初頭	長4.9、最大幅1.75、最大厚0.42		44180
16	銅鏃	7区	①層～I層	弥生中期後葉以降	長4.95、最大幅2.0、最大厚0.34		35347
17	銅鏃	6区	①層	弥生中期～奈良	長(4.6)、最大幅1.7、最大厚0.35		45176
18	銅鏃	7区	①層	弥生中期～奈良	長(4.0)、最大幅1.7、最大厚0.27		40508
19	銅鏃	7区	②層	弥生後期～古墳初頭	長7.55、最大幅1.1、最大厚0.32	箆被をもつか	39169
20	銅鏃	8区	H層	弥生後期	長5.2、最大幅1.4、最大厚0.37	柳葉形	27105
21	銅鏃	5区	②層	弥生後期～古墳初頭	長3.9、最大幅1.1、最大厚0.36	柳葉形	13774
22	銅鏃	7区	①層	弥生中期～奈良	長4.0、最大幅1.3、最大厚0.35	柳葉形	35132
23	銅鏃	8区	SD69	弥生後期末～古墳初頭	長(4.1)、最大幅(0.9)、最大厚(0.28)	柳葉形 欠損著しい	26567

鳥取県教育文化財団調査報告書 74

一般県道青谷停車場井手線地方特定道路整備事業に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ

鳥取県気高郡青谷町

青谷上寺地遺跡 4

(本文編 1)

発行 2002年 3月29日

編集 財団法人 鳥取県教育文化財団

鳥取県埋蔵文化財センター

〒680-0151 岩美郡国府町宮下1260

電話 (0857) 27-6711

発行者 財団法人 鳥取県教育文化財団

印刷 株式会社 鳥取平版社